



CRISIS OF
CONSCIENCE

「エホバの証人」

組織中枢での葛藤

レイモンド・フランズ〔著〕 樋口 久〔訳〕

by Raymond Franz
translated by Higuchi Hisashi

良心の危機



せせらぎ出版

「これは、フランス個人の危機状況をほかに越えている。もっと規模の大きい、世界中のエホバの証人の直面する危機状況を語っているのだ。」

『今日のキリスト教』誌

「『エホバの証人』として知られている宗教組織の権力構造とその内情を率直に、また類を見ない詳しくで観察している。……これは胸を打つ物語であると同時に、良心の自由の価値を再確認させてくれる本である。官僚的な権力構造はどうしても生まれてしまう。この現実を前にして良心の価値をいかにして守るか、という古典的な問題について今一度考えさせてくれる。」

コネチカット大学社会学部助教授
ヨゼフ・ジグムント博士

「見事である。……著者の経験と私の経験との間には共通点があり、多く、驚かされればなすであった。本当に神の恵みを理解していないと、小規模の宗教団体はすべて同じ失敗を犯し、同じような結果を生むようである。」

もとSDA神学者(良心上の理由により退会)
パシフィックユニオンカレッジ教授、デズモンド・フォード博士

「良心を揺さぶられる本である。……個人が自分の意志を決定する権利は神から与えられているが、これを組織に預けてしまうとどうなるかという警告の書である。」

キム・キモンズ
『フランクリン・プレス』誌

「過去何年かで(エホバの証人に関して)かなりの文献が出ており、その質もいろいろである。……例外はあるが、学術的な基準から見ると質は低かった。……この度、文献の裏付けもしっかりしたエホバの証人についての本が出て、信者、一般読者ともに読めることになった。……研究者であれ一般読者であれ、まじめに考えようという人であればレイモンド・フランスの提供する情報を無視できない。」
「この手の本によくある欠点は、自分が離れざるを得なくなった団体の持つ誤り(実際の誤りであることも想像の産物であることもある)を暴露してやるうと思ふあまり、恨み辛みの気持ちが出ることである。ところがこの『良心の危機』にはそれがほとんど見られない。それどころか、穏やかで客観的な書き方には尊敬と賛嘆を感じる。」

インゲマール・リンデン(神学博士)
スウェーデン ストックホルム「ダゲン」誌

「心を打つ手記である。……『ものみの塔』組織の働きと内部事情を明らかにしている。」

フランス「ナリ」社会・宗教科学誌

他に類を見ない記録

宗教組織の権威は、他の人のために奉仕するものであるはずなのに、人の上に立つて支配することに熱心になってしまふ。一方、支配される側は、自分の良心に照らして納得できない時、抵抗を試みる。これを極めて率直に、具体的に語っているのが本書である。「エホバの証人」として知られている宗教団体内部での記録であるが、問題の本質は、世界のいかなる宗教団体においても当てはまるだろう。

1870年代、ペンシルバニア州ピッツバーグに生まれた「聖書研究グループ」はごく小規模なものであったが、今日の「エホバの証人」は、およそ200カ国に約550万人を数える。その中心をなす「ものみの塔協会」が新しい本を出版する際には、通常100万部がまず出版され、さらに何百万部という増刷が続く。その活動が盛んな国であれば、家にやってくるエホバの証人に遭遇したことのない人は、まずいない。

ところが、この宗教組織そのものについては、詳しいことがほとんど知られていない。そればかりか、エホバの証人たち自身、自分たちの組織でいかにして教義や方針が決定されるのか知らない場合がほとんどである。すべてを統括する中枢機構、「統治体」での会議の様子は秘密のヴェールに覆われている。その会議の結果が、世界数百万のエホバの証人の生活に影響をもたらす。

著者は二代続いた信者の家に生まれたエホバの証人三世である。世界各国を巡りながら、この宗教組織のあらゆるレベルで60年間活動が続いた。最後の9年間は中枢機構「統治体」のメンバーとして活動した。権力中枢の内部で経験したこの9年の月日が、「良心の危機」をもたらしたのである。これは、他に類を見ない記録である。この宗教団体内部でいかに物事が決定され、それがいかに全エホバの証人の生活に影響するかが、生々しく、ありのままに語られる。著者の態度は冷静であり、観察の目は鋭いと同時に暖かさに満ちている。読者は、胸が痛むと同時に、自分自身の良心が語りかけられていると実感するだろう。

本書がはじめに書かれたのは1983年であるが、この第3版では新しい資料なども追加されており、今も同じパターンが繰り返されていることが明らかになる。初版発行以来、問題の本質はまったく変わっていないのである。



CRISIS OF CONSCIENCE

良心の危機

「エホバの証人」組織中枢での葛藤

レイモンド・フランズ〔著〕

by Raymond Franz

樋口 久〔訳〕

translated by Higuchi Hisashi



Raymond Franz, *Crisis of Conscience* (third edition)

Commentary Press

© 1999 by Raymond Franz

翻譯文著作權所有 © Commentary Press

人びとがあるもののために危険にさらされているとき、そして彼らがそのものに疑いをいだいていないとき、あるいは人びとが自分の友と考えている者に誤導されているとき、彼らに警告するのは不親切ですか。人びとはその警告を信じたくないと思うかもしれない。それどころかその警告に憤慨するかもしれません。しかし、そうであれば人はその警告を与える責任から道徳的に解放されるでしょうか。

—『ものみの塔』 1974年1月15日号へ1974年4月15日号へ

人の命ははかないもので、死んでしまえば知っていることも消えてしまう。しかし生きているうちに伝えることもできる。

本書は、私が心から大切に思っている人たちに対する義務感から書いた。良心にかけて言えるが、非難するためではなく、助けになればと思って書いた。もし読むのにつらい箇所があれば、それはまた書くにもつらいところだった。

これを読む人にぜひわかって欲しいことがある。それは、真実を知ろうとすることが信仰を失うことにはならず、むしろ真実を知り、それを貫くためにあらゆる努力を傾けることは、真の信仰の基礎となるということである。これを読んだ人が具体的にどう行動するかは、もちろんその人の判断にかかっている。本書によって、少なくとも本当のことを書いたという限りでの道徳的責任は果たされると思う。

もくじ

第1章	良心の代償	3
第2章	私が本書を書く理由	12
第3章	統治体	54
第4章	内部動乱、そして改革	94
第5章	しきたりと律法主義	130
第6章	二重基準と御都合主義	156
第7章	予言と独断	186
第8章	正当化と脅迫	223
第9章	一九七五年「神が行動されるのに適切な時」	256
第10章	一九一四年と「この世代」	275
第11章	決心	298

第12章 最終攻撃 376

第13章 展望 421

付録 449

訳者による付記 481

聖書引用索引・文献索引 巻末

〔装幀・濱崎実幸〕

良心の危機

第1章 良心の代償

好むと好まざるとにかかわらず、倫理的な問題は一人一人に関わってくる。生きて行く上において良くも悪くもつきまといてくることで、うまく逃げるわけにはいかない。その人自身が、そして周りの人との関係が、豊かにも貧しくもなり得る問題である。すべてはこれにどう立ち向かうかにかかっている。道を選ぶのは自分自身の他になく、その選択がなかなか容易ではない。

もちろん良心をごまかし、ただ周囲の人たちに合わせて行動し、自己満足の世界に閉じこめることもできる。特にどんな立場を貫くでもなく、「これについては見ているだけにしよう。誰かに影響があるかもしれない、誰かが傷ついたりするかもしれないけれども、とにかく私は何ともないのだし。」と言うこともできる。倫理に関する事柄については、こういう傍観主義の態度で一生過ごす人もいる。しかし、すべてがひとまず終わり、生涯が終わりに近づいてきた時、「少なくとも私は何らかの態度を貫き通した」と言うことのできる人の方が、何の立場も貫かなかった人よりも満足感が大きいに違いない。

深い確信と信念を持った人、などというのは絶滅しつつある人種なのではなからうか、かつてそういう人もいたらしいという話を本で読むことはあっても、実際に目にするのではないのではなからうか——こう思われることもある。物事がさしたることもなければ、良心に従って行動するのもごく簡単である。ところが、関わってくる事柄が

大きく、代償が大きくなると、良心の問題に取組んで判断を下し、その帰結を引き受けるのが難しくなってくる。そして代償が本当に大きい時、我々は倫理の岐路に立たされ、生きて行く上での本当の危機に直面する。

本書は、そのような危機について、また人がいかにそのような危機に立ち向かっていくかについて、そしてそれがどんな結果をもたらすかについての記録である。

話としては、例えばウィクリフの異端裁判や、国境を越えて逃げるティンダルの話、あるいはセルベトウスが火刑に処される恐怖、といった派手さはないかもしれない。しかし本書に登場する人物の苦闘と苦難は、それなりに強烈なのである。立場としては、(そこまで雄弁には言えないとしても) ルターが自分を諮問する七十人の面々に次のように言った時と変わらない。

聖書に基づいた理由、あるいははっきりした理由によってではない限り(多くの間違いや矛盾の明らかな法王や審議会だけを信じるわけにはいきませんから)、私は引用致しました聖書の言葉によって縛られており、私の良心は神の言葉にとらわれているのです。良心に逆らって行動することは安全でもなく、また正しくもないのですから、何を撤回するわけにもいきません。この通り、他にどうするわけにもいきません。神よ助けたまえ。アーメン。※1

十九世紀さかのぼった昔も、使徒ペテロとヨハネが本質的には同じ問題に直面している。自分たちが長年信奉してきた宗教内で最も尊敬をおかれているメンバーからなる審理委員会を前にして、ふたりは率直にこう言ったのである。

神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。※2

※1 一五二二年四月に、ルターがドイツのヴォルムス帝国議会において自分の弁護を行なった際の締めくくりの言葉。

※2 使徒4・19、20へ新共同訳。

さて、ここに書くのは、私自身がとてもよく知っている人たち、すなわちエホバの証人として知られている宗教団体のメンバーである（あるいはあった）人たちについての話である。この人たちの経験は決して特殊なものではない。他の宗教団体の人々の間にも良心の痛みがきつとあるだろうし、また実際あるという証拠もある。こういう人たちは、先ほどのペテロとヨハネ、そしてさらに多くの人々が直面したのと同じものにぶつかる。すなわち、宗教的権力の圧力を前に自分の良心に忠実であろうとする苦闘である。

これは葛藤となることが多い。一方では自分と神との間に人間の権力が介入してくるのを拒むべきだと感じ、宗教的教条主義、律法主義、権威主義を退けて、いかなる人間の宗教組織体でもなくただキリスト・イエスのみが「すべての男の頭（かしら）」であるという教えに忠実であるべきだと感じる。^{※3} しかしまた一方では、長年の友人を失い、家族関係に深い傷を及ぼし、幾世代もの宗教的伝統を犠牲にする危険に直面する。こういう岐路に立たされた場合、決断は決して容易ではない。

したがって、本書に述べられていることは、単に小さな宗教団体の内輪もめとして片付けられることではない。誰にでも大きなことをたくさん得てもらえると思う。たとえここでの関係者の数は少なからうと、問題そのものの本質は決して小さくない。歴史を通じて繰り返し同じような良心の危機を人々にもたらしてきた問題なのである。

その中心は、恣意的な制限によって妨げられずに真理を追究する自由、そして人間組織による宗教的権威の介入なしに神及びその子と個人的な関係を持つ権利、この二つである。本書に書かれていることの多くは、エホバの証人の組織に特有のことと見られるかもしれない。しかし実際のところ、根本にあるのは、クリスチャン、キリスト教と名の付く信仰に関係する人たちすべての生活に関わる事柄である。

※3 「プリント第一11・3。

「良心に逆らって行動することは安全でもなく、また正しくもない」と堅く信じることの代償は、私の知っている人たちにとって決して小さくなかった。中には宗教組織の公式措置の結果、家族から引き裂かれた人もいる。自分の両親から、子供から、兄弟姉妹から、そして祖父母や孫からも引き離されてしまうのである。長年の友人たちとも、自由に付き合うことができなくなってしまう。付き合ったりしようものなら、その友人たちの方がその同じ措置を取られてしまうのである。人間関係の中で築き上げてきた自分、友人や知人の胸の中にある自分、これがすべて終わりになる。自分の身の回りで、自分の国で、いや世界中で、一番よく知っている人との信頼関係も、すべて終わる。物質的なものを失ったり身体的に虐待を受けたりする方が、まだましかもしれない。

そんな損失を承知で行動することができるのだろうか。今日、どれほどの人にできるだろうか。もちろん（時代を問わず、頑固な自惚れや物欲・権勢欲・名声欲さえ満たせれば、どのような損失もいとわない人、あるいは単なる世俗的な快楽のためなら何を失っても構わないという人はいる。しかしそんな目的がまったく見当たらず、それどころか失うばかりであることがはつきりしている場合がある。そんな時に人を動かすのは何だろうか。

エホバの証人たちの間に起こったことは、人間性についていろいろと考えさせてくれる。良心のためなら排斥されても構わないという人もいる。一方、大多数は、そんな人の排斥処分に賛成せざるを得ないと感じている。つまり家族の絆を断ち、長年の友人を失わせるのもやむを得ないというのである。この大多数の人たちも本当に誠意をもって行動しているだろうし、宗教上の義務と信じることを実行するに当たり心が痛み、今も痛んでいるに違いない。それは、この人たちに一体どんな確信と理由づけがあったのか。

この場合特筆すべきは、関係者の大多数が二十年、三十年、四十年、あるいはそれ以上の間エホバの証人の仲間である（あった）人ばかりだということである。つまり、「その他大勢」ではなく、この宗教組織の中でかなり積極的な活動をしてきた人ばかりなのである。

その中には、ニューヨークのブルックリン世界本部の著名なメンバーもいる。また「旅行する監督」や長老という

地位にあった男性や、宣教活動に長い年月を捧げてきた女性もいる。エホバの証人になったために、他の信仰を持つ友人を失った人も多い。エホバの証人の間では、そのような付き合いは良しとされないからである。すると一生を通じてエホバの証人の友人だけを持つことになる。この宗教組織の定めた目標に合わせて生涯設計を立て、教育はどれぐらい受けるのか、どんな仕事をするのか、結婚はどうするのか、子供を持つべきなのか持たないべきなのかまで決めた人もいる。こういった人たちの「投資」は大きく、生きていく上で最も価値ある財産がかかっていたと言える。それが何時間かですべて消え去るのである。

良心の自由を叫んだことで知られる宗教団体が、個人の良心の声を抑えるために極めて厳しい制裁措置を取る。この現代において実におかしなことであると思う。

ここで、それぞれの教団内では有名な指導者三人の例を挙げてみよう。この三人はいずれも同じ年にそれぞれの制裁措置を受けた。

一人は、自分の属する教団の権威構造の核心を攻撃する内容の本を十年以上にわたって何冊も書き、また講義も行ない続けていた。

もう一人は、千人以上の聴衆を前に、自分の属する宗教組織の唱える年代と聖書の預言の成就に関する話をした。三人目はそのような公の発言はしなかった。組織との見解の相違について、身近な友人に語ったに過ぎなかった。しかしながら、この三人にそれぞれの宗教組織が取った措置は、その行ないの程度に反比例するものであった。しかも、最もやるはずのなさそうなどが最も厳しい措置を取ったのである。

最初に挙げたのは、ローマ・カトリック教会司祭で、西ドイツのチュービンゲン大学教授のハンス・キュンクである。その容赦ない教会批判、教皇・司教の不謬性の教義の否定などが、十年の年月の後、ついにバチカン（ローマ教皇庁）の扱うところとなり、一九八〇年をもってカトリック神学者としての身分を剥奪された。しかし、それでも依

然として司祭の身分であり、大学のエキュメニカル研究所では有力メンバーである。また、司祭を目指す学生がキヌクの講義に出ている、教会の処分対象にはならない。※4

二人目は、オーストラリア生まれのセブンスデーアドベンチスト（SDA）教授、デズモンド・フォードである。

カリフォルニアの大学で、一般聴衆千人を前に講演し、一八四四年という年にかかわるSDAの教義について論じたところ、教会側の審理を受けることになった。フォードは自分を弁護する答弁の準備に六カ月の猶予を与えられ、しかる後の一九八〇年、百人に及ぶSDA教会代表者が五十時間にわたってその弁明を聞いた。審議の後、フォードを教職から外して宣教師の身分を剥奪する決定が下された。フォードはその後自分の考えを書いたり、SDA関係者に語ったりし続けていたが、排斥（除名）されることはなかった。※5

三人目はエドワード・ダンラップである。エホバの証人組織で唯一の宣教師学校である「ものみの塔ギレアド聖書学校」の教務主事を長年にわたって務め、また協会の聖書辞典『聖書理解の助け』——現在では『聖書に対する洞察』と改題されている）の主な著者の一人であり、協会唯一の聖書注釈書『ヤコブの手紙の注解』の著者でもある人物である。教義についての見解の相違を、長年の友人との私的な会話で口にしただけで、一九八〇年の春、五人からなる委員会（組織の統治体のメンバーは一人も含まない）が、秘密裏のうちにダンラップを呼んで何時間かの会合をもち、その見解について訊問した。その結果、ダンラップは組織から排斥された。四十年以上にわたる関係は終わりを告げ、世界本部での仕事はもとより、住む家も失ったのである。

このように、カトリックという、権威主義の最たるものと思われがちな宗教組織では、反体制的な教育者に対する

※4 講義に出て単位と見なされないだけである。

※5 一九八二年にテネシーのチャタヌーガでデズモンド・フォードが話してくれたところでは、教義や組織のやり方が受け入れられないという理由で（その話の時点で）百二十人を越えるSDA教会の宣教師達が辞任したり、あるいは教会側から「聖職剥奪」されていたということだった。

許容度が最も高く、一方、良心の自由のため戦うことに特別の自負を持っていた組織では、これが最も低いという結果になった。

ここに矛盾がある。確かに、家から家への「証言活動」が目立つ割には、実際のところエホバの証人について一般にほとんど知られていない。しかし、ひたすら輸血を拒むことや、旗や紋章などに敬礼するのを拒否すること、兵役に対して強く反発すること、いかなる政治的活動・行事にも参加しないことなどはよく知られている。法律訴訟に詳しい人なら、エホバの証人が良心の自由のためにアメリカ最高裁に持ち込んだ事件が五十件にも及ぶことも知っているだろう。その良心の自由の中には、信条を異にする人から厳しい反発があっても自分たちの言いたいことを伝える権利、というものもある。憲法でこの自由が守られている国なら、エホバの証人たちは妨害を受けずに権利を行使できるが、そうでない場合、激しい迫害・暴力、逮捕、投獄を受けたり、書籍や宣教活動が禁止されたりする。

これほど良心の自由を重んずるエホバの証人も、自分たちの間では、組織の教えについて個人的な見解の相違を述べただけでまず間違いなく審理されるところとなり、前言を取り消そうとしない限り排斥になる。これは一体どういうことなのであろうか。審理を行なう側は、この矛盾にどんな理由づけをするのだろうか。

また、これに関連して出てくる疑問がある。厳しい迫害や反発者による暴力に耐えているという時、その耐えていること自体が、良心に忠実である証明なのだろうか。それとも単に、耐えて見せなければ厳しい措置を下されるとわかってるので、組織の教義や要求に従おうとしているだけなのだろうか。

いや、他にもいろいろと重要な事柄が絡んでおり、問題はそれほど単純ではない——と言う人もいるかもしれない。一致・秩序も必要なのではないか。虚偽の教えや、攪乱的で有害な教えを広める者があれば、身を守る必要もあるのではないか。権威を正しく尊重することも必要なのではないか。

確かにこういうことを無視しては、ひどく片寄った見方をすることになるだろう。自由も、その使い方を誤れば、

無責任、無秩序、混乱につながり得る。また同様に、忍耐や寛容も、優柔不断な態度や実行力の無さの言い訳になってしまえば、物事の基準がおしなべて下がってしまう。愛ですら、真になすべきことを実行しない単なる感傷となり、結局残酷な結果を導くことになりかねない。これは確かにもっともであり、宗教的権威によって個人の良心を統制しようとする側が強調することでもある。

しかし宗教上の「導き」が思考統制・宗教的圧制となった場合どうなるだろうか。一致と秩序の持つ望ましい特質が、制度化され規則化された従順を強いる、いわば戒律主義的統制になってしまったらどうなるだろうか。権威を正しく尊重するはずが隷属・盲従にすり替えられ、個人の良心に従って決定を下すという神の前における責任を放棄することになったらどうなるだろうか。

こういったことも考慮されなければ、問題は歪められてしまい、正しく伝えられない。本書では以下において、これらの事柄が人間関係に及ぼす影響はもとより、事態の一面面しか見ない人たちがその一面面を守ろうとして尋常ならぬ考え方や極端な行動をとることなどについて、具体的に例を挙げながら説明する。

こうすることで、まずイエス・キリストとその使徒が活躍していた当時本当に論議の焦点となっていた事柄は何だったのか、そしてなぜ、どのようにしてイエスと使徒たち自身の教えや模範からはずれたものが短期間にしてやすやすと、そして実に巧みに現れるという悲劇が生まれたのか、この二つについての理解が深まれば大いに意義深いことだと思う。他の宗教に関わっている人でエホバの証人についてとやかく言いたくなる人も、ここで扱う問題の裏にどんな基本的な姿勢があるのかに照らして、まずは我が身を振り返り、自分の宗教についても考えてもらえればと思う。

以上に挙げた点を明らかにするには、個人のレベルを越え、宗教組織の内部構造や教義と統制のシステムについて考察し、その統制する側の人間がいかにして決定を下したり方針を立てたりするかを調べ、またその歴史や起源についてある程度検討することも必要となる。うまくいけば、宗教的な争いの根本原因を見つける一助ともなり、ま

た神の子の真の追隨者たんとする人たちが平和と兄弟愛で結ばれるには何が必要なのかを示唆することにもなるかもしれない。

第2章 私が本書を書く理由

「私はクリスチャンとして真理を語っているのです。聖霊によって目覚めを受けた良心により、この真理が決して偽物ではないとわかっています。……兄弟たちのため、親族たちのためならば、自分がキリストから切り離されても構いませんと祈ることさえできるでしょう」 ローマ人への手紙9・1、3 《新英語訳聖書》

前章に述べたことで、十分本書を書く理由になると思う。しかし、なぜ他ならぬ私が書くのか、という疑問が残るかもしれない。

まず、私には経験があり、またそれに基づく視点があることが挙げられる。赤ん坊の頃から六十歳になるまで、私の生活はエホバの証人と共にあった。他にもそういう人は多いかもしれないが、私が長年にわたって持ったほどの経験をした人はそう多くないだろう。

さらに大きな理由は、大部分のエホバの証人はまったく知ることができないことを知ったことである。自分で進んで知ろうとしたわけではない。知ってしまった事柄は、思いがけないものであり、愕然とするものでさえあった。

そして、以上二つの帰結となるが、道徳的義務を感じたことが挙げられる。人が正当な理由もなく傷つけられている、本当に深く傷つけられている、という証拠が次々に明らかに becoming している——そんな時、何をなすべきか。また、ある物事が人々から隠されていて、しかもそのことがその人々にとって極めて重大であるとわかった——そんな時、神の前において、そしてその仲間の人間たちに向けて、こういう義務があるのか。私はこういう疑問をかかえて苦しんだのである。

以上に挙げた三つの理由をもう少し細かく述べていくことにしよう。

一 つ目の理由——私自身の経験

いろいろな意味でこれはもう省いてしまいたいような気がする。私自身の経歴に直接関係する事柄だからである。しかし目下の状況に鑑みると、はつきりさせないわけにはいかないように思う。これは、使徒パウロがコリントにいるクリスチャンたちに自分の経験を語らざるを得なくなった状況に似ていなくもない。ひとわたり語ってから、パウロはこんな風に言う。

「ひどくばかなことを言ってしまったているが、これはあなた方がこうさせたのだ。あなた方が私に資格を与えてくれるべきだったのだ。私は取るに足らぬ人間であるが、あの素晴らしき使徒たちにはいかなる点でもひけを取らなかった。」※1

もちろんパウロを気取るつもりはないが、私の動機には少なくとも類似点があると思う。

父も母も（祖父母四人のうち三人までも）エホバの証人であった。父は一九一三年、まだエホバの証人が単に聖書研究者として知られていたころ、バプテスマを受けた。私が本格的にエホバの証人としての活動を始めたのは一九三八年、十六歳になってからである。学生の身ではあったが、月に二十時間から三十時間を費やして、家から家へと「証言」に携わったり、「宗教はわなである。理由は聖書に書いてある。神、そして王たるキリストに奉仕せよ」と書いたプラカードを下げ、協会発行の雑誌を持って街角に立ってビラを配ったりするようになった。

その年、一九三八年にシンシナティ（自宅からオハイオ川向かいだった）の大会に出席した時、イギリスのロンドンから無線電話で送られる、ものみの塔協会会長ジョセフ・ラザフォードの声を聞いた。「事実を見よ」と題された長

※1 コリント第二12・11（『新英語訳聖書』）。また、3・1、2、5・12、13、6・4-10、11・21-29を参照

い講演の始めのところでラザフォードはこんなことを言った。

事実をすべて明らかにすると感情を傷つけられる人がいるからといって、それは誰かから真相を隠すことの言い訳にも正当化にもなりはしません。公共の利害が関わっている場合にはなおさらです。事実を直面したら、落ち着きを持ってその事実を見据え、最善の行動を誠実に取るべきです。それまで持っていた信条や意見が、事実を受け入れて検討するのを阻むようなことがあっては決してなりません。^{※2}

これは人生において従うに足る指針であると思えた。ラザフォードが語るであろう事実とやらを受け入れたい気持ちになった。

当時、第二次世界大戦はまだはじまっていなかったが、ナチズムとファシズムが台頭しており、民主主義の国々に対する脅威となっていた。これを背景に、講演では次のようなことも強調された。

神は、ひたむきに真理を追求する人に、次のことをはつきりわからせるようにしてくださいました。すなわち、宗教とは信仰の形式ではあるけれども神の力を否定するものであり、人間を神から離れさせるものだということです。……したがって宗教とキリスト教というのはまるで反対のもののなのです。^{※3}

イエスの預言によれば、世界の終わりの時にはどんなことがあるのでしょうか。世界戦争があり、飢饉や疫病が発生し、国々は困窮し、何よりも恐るべきものが地上に出現します。……これらはサタンの世界が終わりを告げたことを示す議論の余地なき目の前の事実であり、目をそむけることはできないのです。^{※4}

今ドイツは教皇制と同盟関係にあり、イギリスもまたその方向に向かって突き進んでいます。アメリカ合衆国も、かつては民主主

※2 『事実を見よ』 3頁。

※3 前掲書7、8頁（現在ではエホバの証人も「宗教」という言葉を真の信仰について使っても構わないという見方を取っている。）

※4 前掲書9頁（当時の見方では、サタンの力が一九一四年に終わったのだから、その意味において「世界が終わった」ことになっていた。今の協会の出版物はもうこれを説いてはいない。）

義の咎でありましたが、今やこの全体主義に加わろうとしています。……かくして、エホバの王国に背くサタンの恐るべき独裁体制が今やこの地にあることは、間違いない事実なのです。……この全体主義連合はイギリスとアメリカを意のままにしようとしています。止めることなどできません。止めようなどしない方がよろしい。主のみもとにいるのが安全です。……※5

傍線をほどこした箇所は当時特に心に残ったところである。私はこれを聞いてそれまでに経験したことのないような非常な興奮を感じた。が、いずれの点も現在ではエホバの証人の教義から姿を消している。

「地を満たせ」という別の講演では、それまでは天のキリストと共に支配することになる「小さな群れ」と呼ばれる人々に向けられていた神の知らせが、一九三五年現在では「他の羊たち」である「地上級（地的級）の人々に向けられているとされた。そしてこの人々は近づきつつあるハルマゲドンの戦いの後、義なる子孫で地を満たすであらう、というのだった。これについて次のような話が続いた。

この人たちは神の組織に守られねばなりません。組織に入ってバプテスマを受け、その中に隠れていなければならぬのです。ノアが神の命によって作った箱舟は神の組織を表していたのです。※6

ラザフォード会長はさらにまた、ノアの三人の息子たちが洪水の二年後に初めて子孫を増やしはじめたことを指摘し、これを地上の楽園の望みを持つ現代の人々に当てはめて、こんなことを言った。

今、この人たちにとって結婚して子供を作ることが聖書的に適切なことでしょうか。否、というのが聖書に裏付けられた答えです。

※5 前掲書16、17、27頁（よく知られている通り、第二次世界大戦は「独裁体制」の敗北に終わった。ラザフォードの言葉とは正反対の結果になったのである。）

※6 前掲書40、41頁（このノアの箱舟の持つ象徴的意義についての見解は現在変わっている。しかし、救いに不可欠なものとしての組織の役割については今でも基本的に変わっていない。）

主の命ぜられたとおりの御意志を行なうためには邪魔や負担がない方がいいし、またハルマゲドンの間は足手まといがない方がいいのかにいいのです。※7

ラザフォードは、力強くきっぱりとした独特の口調で講演を行なった。その内容はまさに事実であり、揺るがぬ真理であり、人生の重要な計画をその上に立てるべきものだ、という説得力があった。私は救いに不可欠なものとしての組織の重要さに感じ入った。また結婚や出産といった個人的な事柄より奉仕活動を優先させねばならない、両立は難しい、との感慨を持った。※8

私は一九三九年にバプテスマを受け、一九四〇年六月に高校を卒業すると同時に全時間奉仕に携わった。この年は、世界にとってもエホバの証人にとっても擾乱の年だったと言える。第二次大戦が進行する中、エホバの証人の活動が禁止されている国では何百人もが投獄された。アメリカでは、エホバの証人の子供は国旗に敬礼しない（偶像崇拜の一形式とされるので）というので退学になった。またエホバの証人は戦争に際して中立の立場を取るため、愛国主義を誇りとする人々から反発を受けることが多く、情容赦ない暴徒の襲撃を受けるようになっていた。

その年の夏、家族でミシガンのデトロイトに行き、エホバの証人の大会に出席した時には、何か周りを囲まれて逃げ場がないような雰囲気で、今にも何かが起こるという緊迫した空気が行き渡っていた。その終わりにあたってラザフォードは、「これが大患難の来る前の最後の大会になるかもしれません」という意味のことを述べた。その年の秋、夏物の衣服をしまいながら「この夏物を出すことももう二度とないのだ」と思ったのを覚えている。ハルマゲドンが来るか、あるいはその前にナチス・ドイツの仲間たちのように強制収容所に入れられるか、どちらかだと思っていた

※7 前掲書46、47頁。

※8 私がついに結婚したのは一九五九年、三十六歳の時だった。ずっと避妊に気をつかっていたため、我々夫婦に子供はいない。

のである。

一方、集団暴力は一九四〇年代初頭に最高潮に達した。インディアナのコナーズヴィルには、家での「研究」の一環としてもみみの塔出版物を読んだというだけの理由で扇動活動（騒擾陰謀）という罪名のかどにより告発された女性のエホバの証人が二人いた。私もその裁判に出席したのだが、裁判は五日間続き、最終日の夜に陪審員は有罪の評決を下した。弁護士（ヴィクター・シュミットという名のエホバの証人）とその妻は、裁判所を出たところを暴徒に襲われ、激しい雨が降る中を市の境界まで強引に歩かされた。その途上、シュミット夫人はあまりの恐怖に突然生理が始まってしまった。

私は自分の車にエホバの証人代表者（ジャック・レインボー）を乗せて移動していたが、これは「今度俺たちの町に戻ってきたら殺してやる」と脅迫されていた人物であった。市の境界に着いてみるとシュミット夫妻と暴徒の姿を目にしたので、危険だがこの二人を乗せてやらねばと思い、どうにか車に乗せた（実は別の仲間もこれをやろうとしていたのだが、こちらは窓ガラスを割られるに終わっていたのである）。車に入るとシュミット夫人は突然ヒステリックに叫び始めた。一方シュミットの顔はアザだらけであり、また凶器で暴行を受けたため傷も深く、血まみれだった。※9
これほどひどい迫害を直接経験したことは、若い私の心に鮮明な印象を残した。自分たちが神の真の奉仕者として行なっていることは正しいのだという気持ちだが、ますます強くなった。

後に、もみみの塔協会の法律顧問ヘイドン・カビンソンの提案による作戦として、私の両親と二人の姉妹、そして私を含む七十五人からなるエホバの証人の一団が、オハイオ地域シンシナティからコナーズヴィルへ向かったことがあった（これは「電撃奉仕」という作戦だった。この時には、ただ一人の例外を除いて男女子供を問わず全員逮捕されて拘置所へ入れられ、保釈になるまでの一週間ずっと閉じ込められた。私は十代にして、大きな金属製のドアが閉

※9 『一九七五年 エホバの証人の年鑑』 186-188頁（『一九七六年の年鑑』 186-188頁、および一九四一年発行の『神権政治』 44、45頁参照）

まり、かんぬきが掛けられ、自由が奪われるという感覚を初めて体験したのだった。

何ヵ月か後、私はこのコーナーズヴィル事件に関しての高等裁判所審問のためインディアナ州インディアナポリスに行った。私のおじに当たるフレッド・フランズもいた。フレッド・フランズは、一九二〇年からのみの塔協会本部のメンバーに加わっていた。ラザフォードの側近であったこともあり、いわば協会代表のエホバの証人として出席していたのである。

その際、地元の会衆がフレッド・フランズに講演を依頼した。その講演でフランズは、証しの業（宣教活動）がもう終わりに近づいていると思っている人が多いのではないかと言いつ出した。そして、ブルックリン本部では終わらせるつもりはないと言いつ、さらに「もののみの塔誌を購読したいと思っている人は六ヵ月分だけ予約することはありません。お望みであれば一年分、いや二年分の予約だってできるのです！」と続けた。それまで聞かされていたこととまるで反対のことを自分のおじの口から聞かされたわけであり、控えめに言っても啞然としたとしか言いようがない。

これはラザフォード会長がデトロイト大会で述べていたこととあまりにかけ離れていたので、きっとこれはおじが自分の意見を言っているのであって、協会がきちんと決めた見解ではないに違いないと思った。講演でこんな意見を言ったことがブルックリン本部に知れたら、せっかく盛り上がったいた緊迫した空気を駄目にする、忠節を欠いた人物だということになりかねないので、忠告しに行こうかとも思ったほどである。おじは当時四十代後半ではあったが、ラザフォードに比べればまだ若かった。私はおじの言葉を受け入れるべきか、それとも生意気な態度から出たものとして聞いておくべきなのか、判断をつけかねていた。

その同じ年、家を離れてウェストヴァージニアからケンタッキーの東にまたがる炭鉱地域にいるエホバの証人とパートナーを組んで活動することになった。そこでは毎日のように暴力による脅迫が待ち構えていた。炭鉱地域内の宿泊所の中には、幹線道路に沿って建てられた長い木製のテラスハウスという長屋風の建物があった。そこに軒を並

べた家を順番に訪問していき、最後の家に差しかったところでふと最初の家の方を振り返ると、男たちが走り回りながら仲間を集めてこちらを襲う準備を進めているのが見えたこともある。

ケンタッキーの「オクタヴィアJ」炭鉱キャンプでは、我々の乗った旧式A型フォード車が炭鉱夫のグループに囲まれ、「命が惜しければ出て行け、このケンタッキー州からも出て、もう二度と戻ってくるな」と言われた。こちらが何か言おうとしても、耳を貸してもらえないばかりか、ますます激しい怒りをぶつけられる。二、三カ月後にまた戻ってみると、今度は発砲された上に追いかけられ、裏通りから山に抜けるという策略によって何とか逃げ帰るといふ有り様だった。この炭鉱夫たちの反感の裏には、愛国心だけでなく宗教上の偏見もあったらしい。エホバの証人は文字通りの意味で火の燃えさかる地獄の責め苦を信じないが（このため車で通りかかると「地獄なし」と叫ぶ男の子たちもいた）、このことが戦争に対する中立の態度と同じくらしいの反感を買っていたのである。

当時の私は、そんな人たちの心の狭さ、偏見をひどいものだと感じた。偏狭さのない組織にいてよかったと思った。

予想に反し、翌年（一九四一年）の夏がやってきた。私はミズーリのセント・ルイスで開かれた大会に出席した。ラザフォードが大きな車で大会会場にやってくるとその周りに人が群がったのを覚えている。車のステップには、どちらもお大柄なヘイドン・カピントンと副会長ネイサン・ノアがボディガードとして乗っていた。この大会の最終日、ラザフォードは五歳から十八歳までの子供たちを全員演壇の前に座らせた。そして予定の講演が終わると、今度は即興の話が始めた。

もともと背が高く、日頃顔つきも声も厳格であつたラザフォードであつたが、この時には父親的とも言える威圧的な口調で子供たちに向かって語りかけ、アブラハム、イサク、ヤコブその他の昔の忠実な者たちがまもなく復活してきて、配偶者を選ぶに当たつての指導をしてくれるであろうから、それまでは結婚など考えないようにと勧めた。

その際、『子供たち』と題された新しい本が一冊ずつ無料で配られた。この本にはジョンとユースという架空の

エホバの証人が登場して話が進む。この二人は婚約しているのだが、すぐにも来るであろう新秩序が実現するまでは結婚を見送ることに決めるという筋書きである。ジョンはユースにこんなことを言う。

もう二、三年のうちに結婚して、主の恵みを受けてかわいい子供ができればいいなと思うんだ。主の誉れになるような、そんな子供だ。だから、恒久の平和が来るまでなら十分結婚を延ばせるさ。今は負担を増やさずに、身軽に主に奉仕できるようにしていなくちゃいけない。神権政府が完全に支配するようになれば家庭を持つことも重荷にはならないよ。※10

私は当時十九歳だったが、七十代になった今日になってもその時の気分をまだ覚えている。驚きと消沈がいり混じった奇妙な気分だった。要するに腹を据えて結婚を無期限に延期するようという呼びかけだったわけであり、当時の私にとっては一種の衝撃だったのである。カトリックの司祭になろうかと考えている若い人がどんなことを感じるのか、私にはよくわかるように思う。

当然のことながら、ラザフォード会長の話は、ハルマゲドンが間近に迫っているという前提に基づいていた。後に『ものみの塔』1941年9月15日号はこの時のことを次のように書いている。

贈り物『子供たち』のこころを受け取ると、子供たちはそれをしっかり抱きしめて行進しました。これはおもちゃでも暇つぶしでもなく、ハルマゲドンまでに残された月日に行なうことのできる最も効果的な奉仕のために主より与えられた道具なのです。※11

何年も後になって、その当時ラザフォードが癌で死を目前にしていたことを知った。また、ラザフォードはその時点ですでにその妻と何年も別居していた。このラザフォード夫人もやはりエホバの証人だったが、身体障害者としてカリフォルニアに暮らしていた。息子がいたが、こちらは大人になると父親の宗教にまるで関心を示そうとしなかつ

※10 一九四一年発行『子供たち』366頁

※11 『ものみの塔』1941年9月15日号288頁参照

た。ラザフォードが一九四〇年そして一九四一年に言ったことは、健康状態の悪化に加えて、生きているうちに「終わり」が来るのを見たいという思いが重なったことだった——私のおじであるフレッド・フランスはこう語ってくれた。

以来私は、もし『子供たち』に出てくる二人が架空でなく実在の人物だったとしたら、婚約期間はいささか長いことになるが、きつとまだ婚約中なのだろうな、と思ったりした。しかし実際問題として、あの一九四一年の大会に出ていた女の子たちも、今ではもう完全に出産可能年齢を過ぎていることであろう。出席していた子供の中には、忠告に従って結婚適齢期とされる期間を結婚せずに過ごし、そのまま独身生活を送っていた人もあった。

一九四二年、オハイオはウェルストンでの「特別開拓者」奉仕ではまた違った経験をした。^{※12} 若いエホバの証人とパートナーを組み、小さなトレーラーハウスに住んでいたのだが、これは手作りで、幅が二メートル、長さが四メートルほどの文字通り「車輪のついた箱」だった。壁に断熱効果はなく、小さな石炭ストーブの火は数時間ともたない。冬の夜にはトレーラーの中に置いてあるバケツの水が凍ってしまうことがよくあったし、夜中に目が覚めると、凍えた足の痛みのため再び眠りにつくことができないことも珍しくなかった。しかし、雑誌や本の売り上げの取り分以外には協会から月々の手当として一人最高で十五ドルを受け取っていただけなので、それ以上の場所は望めなかった。^{※13} 一日のうちで一番まともな食事の献立は、ましな時でも、ゆでたジャガイモ、マーガリン、一日遅れのパン

※12 「特別開拓者」というのは、協会によって特別な仕事を与えられる全時間の代表者（「開拓者」）である。割り当て時間数も多く、経費の援助として月々の手当もつく。

※13 この手当を申し込む用紙には売り上げによる収入、支出、そしてその差額を記入する欄があった。この差額が十五ドルに満たない時、請求金額も十五ドルに満たない額にしていた。ところがそうすると常に資金が不足する結果になり、さらに少ない金額を請求していくという事になった。後になって、普通「特別開拓者」は単に一律十五ドルを請求していたことを知った。

（これは当日焼きのパンの半額）といったところだった。パートナーは古い車を持っていたが、ガソリンを買うお金など、まづなかった。

この町でも我々への敵意には激しいものがあつた。いつだったか近所の男の子たちがトレーラーの窓を全部壊してしまったし、ある夜など帰ってみるとトレーラーは完全に横倒しになっていた。逮捕され（これで二度目である）、地元の拘留所に一夜を過ごしたこともある。この拘留所はまさに南京虫の巣窟で、寝台に身を横たえる気にはどうしてもなれず、誰かが置いていったらしい空のブリキ缶に座って一晚を過ごした。

一九四四年、宣教者学校である「ものみの塔ギレアデ聖書学校」で五カ月のコースに出席しないかという招きを受けた。コース修了後、宣教者としての割り当てを待つ間、一年半を「旅行の業」に費やすことになり、アリゾナ州とカリフォルニア州の会衆を「巡回」して回った。カリフォルニアのサンディエゴ地域にある会衆を回った時に、「ベト・サリム」（君たちへ王子たちの家）の意に五日間泊まったことがある。これは協会が建てた大邸宅であり、アベル以来の昔の忠実な者たちが復活してきた時に使えるよう「委託管理」されていることになっていた。^{※14} 肺の悪かったラザフォードは生前そこで冬を過ごしたのである。そこに泊まった時には何だか夢のような、非現実的な感じがした。サンディエゴは感じの良い町であり、このベト・サリムは優雅な高級大邸宅である。だが聖書に出てくるあの人たちがどうしてこういうところに住みたいと思うだろうか、と考え始めるとどうもわからず、何かしっくりこないものがあつた。^{※15}

宣教者の仕事としては最初フランスに行くよう任命されていたのだが、徴兵委員会へ**アメリカの徴兵機関**が国外

※14 一九三九年発行の『救い』311、312頁参照

※15 何年も経たないうちにベト・サリムは売られた。ハルマゲドンの前に「昔の忠実な者たち」が戻ってくるという教義もなくなった。

へ出ることを許可してくれなかったので行けなくなった（私は「聖職者」ということで兵役を免除されていたが、それでも徴兵対象年齢だという理由で許可が下りなかったのである）。そこで次にプエルトリコに任命された（プエルトリコはアメリカ国内とみなされたのである）。一九四六年のことだった。その出発前、その時には協会会長となっていたネイサン・ノア（ラザフォードは一九四二年はじめて死去したが、あちこちの国に「支部の監督」として管理の仕事に行く若い我々を前に講演をし、もし伝道活動が続けたいのであれば、男女交際をはじめ結婚につながることはとにかく避けるようにと言った。「独身の終わりは任務の終わり」というのが当時の方針だった。^{※16}

プエルトリコに着くとまもなく、サンフランの「宣教師の家」グループと呼ばれる、夫婦一組と二十代の女性七人に私を加えた十人が、二階建て六寢室の家に同居することになった。私はノアの勧めに従い、ひどく忙しくしていた（時には週に十五以上の家庭聖書研究を受け持っていた程である）のだが、結婚その他はまかりならぬという例の方針と、その狭い家での生活環境とにはさまれて、完全に参ってしまった。赤痢にかかり、治ったと思うとパラチフスに感染して腹痛と血便に苦しみ、さらに感染性肝炎にまで見舞われた（私は赤痢の時もパラチフスの時もずっと事務所で働き、休んだのは肝炎の時の一週間に過ぎなかった。しかし衰弱のために事務所への階段がほとんど昇れないような有様ではあった。八年が経つとそれやこれやで神経衰弱の一手前となっていた。

そこで会長に手紙を書いてみると、すぐに支部での責務を解かれ（こんなことは要求しなかったのだが、アメリカに帰って旅行の仕事をして良いことになった。しかし私はあえてプエルトリコに留まりたいと願い出たので、別の町に移されることになった。私が選んだのはアグアデイーヤという町である。好みの町ではなかったが、より「必要が大きい」と思われたからである。

※16 基本的には同じ規則が世界本部と支部すべてに適用されていた。しかし一九五〇年代にこの規則は変わった。ノア自身が結婚したのである。

しかし一年も経たないうちに今度は旅行の仕事を割り当てられ、プエルトリコとその東にあるヴァージン諸島の会衆を回ることになった。

ところがこれにはおまけがついていた。協会からの指示に従って定期的にドミニカ共和国に行くという任務である。当時のドミニカでは独裁者ラファエル・トルヒーヨの政府によってエホバの証人の活動が禁止されていた。つまり、ものみの塔出版物を密かに持ち込むというのがこのドミニカ出張の主要目的だったわけである。^{※17} 何度となくこのドミニカ出張を行なった後、一九五五年に、今度は独裁者トルヒーヨに直接請願書を手渡ししてくるようになると言われた。この独裁者の不興を買った者は消されると知っていたので、この時はかなり不安であった。

シウダー・トルヒーヨ（現在のサント・ドミンゴ）に着くと、まず「閣下及び貴国にとつて非常に重要な情報をお持ちした北アメリカの教育者」^{※18}とだけ名乗ってトルヒーヨ大元帥に電報を打った。やがて国家宮殿での謁見が許され、私は請願書を手渡した。^{※18} 驚いたことに、私は国外追放にもならず、また定期的に「密輸」のためのドミニカ出張を続けて発覚することもなかった。

一方、暴力による迫害は続き、一九五七年にはドミニカ共和国にいるエホバの証人でアメリカ人の宣教師は一人残らず国外追放されることになった。ドミニカ国内では多くのエホバの証人が暴行を受けたり投獄されたりした。男性のエホバの証人が法律で義務づけられている「行軍」を拒否したことが主な理由だったが、宗教上の反発もかなりの

※17 私は中背であるが、プエルトリコにいた当時の平均体重は五十三キロに過ぎなかった。体の周りに何冊か雑誌を巻き付け、その上になを着を二枚重ね着し、さらに半ズボンの中に三百八十四頁の厚さの本を開いて入れても自然には見えなかった。ただ、飛行機に座っている間その開いて入れた本の角が大腿に食い込んで困った。

※18 トルヒーヨ大元帥は正装の上に勲章をずらりと並べて迎えてくれた（勲章の大半は自分で自分に授与したものだった。私の使命の何たるかがわかると、謁見はあつてなく終わった。しかし、その後禁止が一年ほどの間解かれ、また敷かれたところを見ると、その時の印象は良かったようである。

もので、教会側の牧師をはじめとする人々が新聞に攻撃的な文章を載せていた。

私は、現地に行つて様子を見てくるようにと言われた。しかしその少し前に私はドミニカの宣教師たちに指示を与えに行つており、本部には現地の迫害の模様を詳しく伝えなければならなかったのである。また、この迫害についてはプエルトリコの新聞にも大きく出ており、この派手な報道ぶりにトルヒーヨはたいそう立腹していると側近から聞いていた。

自分が要注意人物になつたように感じつつ、シウダー・トルヒーヨに到着した。すでに決められていたホテルの部屋ではじめの一夜を過ごしたのだが、この部屋は一階にあり、ベッドのすぐそばには大きな窓があつた。これでは危ないと思い、私はベッドの掛布をふくらませて人が寝ているかのように見せかけ、自分はその蔭の床の上で眠つた。しかし、その時も無事に済んだ。プエルトリコへはその後も何度か行つた。

後に協会の結婚に関する方針が変わつたので、プエルトリコに到着してから十三年後、三十七歳になろうとしていた私は結婚し、それからは妻のシンシアが旅行の仕事に加わることになつた。プエルトリコの経済状態は今日とは比べものにならないほど悪かつた。ある小さな家に、我々が奉仕していた人たちと一緒に住んでいたのだが、水道や電気がある時もあればない時もあり、プライバシーが守れる時よりは守れない時の方が多い状態だつた。まだ若かつたこともあり、何とかこの環境に適応したが、その結果妻の健康はひどく害されることになつた。

結婚して何カ月も経たない頃、トルトーラ島という小さな島で奉仕中に妻が重症の胃腸炎で倒れた。明らかに水か食べ物の原因だつた。その時住んでいたところは、かわいらしい子供のいる、感じの良い西インド諸島人の夫婦の所有する家であつたが、残念ながらこの家はゴキブリだらけで、妻ときたらこのゴキブリが大の苦手なのだつた。夜寝る時など、まずベッドにゴキブリがいまいかどうかを確かめ、それから蚊帳を下ろすという具合だつた。どうやら家の片隅に置いてある、服の入つた大きな箱がゴキブリどもの総本部であろうと狙いをつけ、ある日私は殺虫剤を片手

にその箱に近づき、一番上にあつた服を持ち上げてみた。箱全体が何百もの小さなゴキブリとおぼしき物でひしめきあつてゐた。殺虫剤をかければ家中にゴキブリが散らばると思ひ、あわてて持ち上げた服をもとに戻した。また、大きなネズミが夜な夜な台所に出没し（この台所というのが我々の部屋のすぐ隣で、また一つしかないトイレの隣でもあつた）、このネズミが柵に置いてある缶詰食料を動かすぐらい大きいのだつた。

とにかくこのような状況下で妻は胃腸炎になり、ひどい下痢と定期的な嘔吐はひどくなる一方だつた。島に一人しかいない医者连接到いていき、注射で一時嘔吐はおさまつたものの、その夜遅くまた嘔吐が始まり、重症の下痢と重なつて脱水状態となつた。私は一キロ半余りの道のりを走つて医者をたき起こし、その医者のジープで妻を小さな診療所まで連れていつた。虚脱状態のため皮下の血管がつぶれてしまつており、看護婦たちは何度も失敗を重ねてからやつと生理的食塩水を注入した。数日の後何とか退院したが、完全に元通りの健康体というわけにはいかなかつた。後にはさらに寄生虫感染（鞭虫症）にも悩まされることになつた。

我々は一九六一年までこのプエルトリコで旅行の仕事が続け、それから隣国のドミニカ共和国へ移されることになつた。トルヒーヨは我々が着く直前に暗殺された。

ドミニカで過ごした五年近くの間には、四つの政府の衰亡を目にしたし、一九六五年四月には我々のいた首都周辺が中心となつた戦闘を体験した。この時には、アメリカ人をはじめ外国人はほとんど国外へと逃れた。しかし我々の宣教師グループは、仲間であるドミニカのエホバの証人を見捨て、自分たちの任務を放つて行こうとは思わなかつたので、戦争中の暮らしを实地に味わうことになつた。

何百ものライフルの発砲音、マシンガンの発射音、バズーカなど重火器の炸裂音が毎晩ずっと聞こえていた。昼になつて小康状態が訪れることがあると、外に出て何らかの活動が続けられたが、時には銃撃の的となることもあつた。弾丸が頭をかすめていく時には、怒つたミツパチがたてるようなブーンという独特の音が聞こえる。あの音が聞こえる時には、弾丸が一体どれぐらいまで来ているのだろうと今でも思う。ある兵士は慰め顔でこう言つてくれた。「そ

んな音なんて気にすることはないさ。自分に当たるやつは聞こえやしないんだから。」

全時間奉仕生活の最後の十五年間は、ニューヨークのブルックリンにある世界本部で過ごした。ここでの様子は、それまでとはかなり違っていた。一九六五年に至るまでの苦労を細かく書いたのは、使徒パウロが言う、神とキリストへの奉仕が真のものだという証しだてに通じるものがある（質においては大きく劣るにせよ）と思うからである。

苦難と苦しみの時に不屈の精神を持つことで、我々は神の僕であることを証しだてる。

ちなみにこれに続くところで、パウロは自分の講演をどれほどたくさんの方が聞くかという話もしなければ、信者を大幅に増やしていく組織は見事であるという話もしない。^{※19}

私は自分の経験が他の人たち——エホバの証人であろうと他の宗教の人であろうと——の経験を上回るものだと言うつもりは毛頭ない。ただ、本書で以下に述べることが確実に信頼するに足るという判断をしてもらう材料として紹介したまでである。

二つ目の理由——ブルックリン本部でのこと

「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」 使徒4・20（新共同訳）

本部での十五年に目にし、耳にし、経験したことは私にとって大きな衝撃だった。これを読む人が共感を持ってくれるかどうかはわからない。しかし、とにかく私が経験したことの数々をわかってもらわなければ、どうして私

※19 「プリント第二6・4-10（『エルサレム聖書』）。

ぎりぎりの危機状況に追い込まれたかも知ってもらえないだろう。箴言にもある通り、「聞かないうちに返事をするなら、それはその人の愚かさであり、恥辱である」。^{※20}

ドミニカ共和国での戦争の前年（これは私が Deng 熱にかかって神経がひどく過敏になってしまった頃だった、ギレアデ学校で十カ月のコースに出た。^{※21}これを修了した時、ノア会長は、カリブでの宣教者奉仕をやめて妻と共にブルツクリンの世界本部（これは「ベテル」と呼ばれる）に来て執筆部門で奉仕しないかと言ってくれた。他の人ならきつとこれを名誉なこととして受け入れただろうけれども、その時の私には正直なところよそへ移る気はなかった。そこで私は、どれほどその時の仕事や周りの人たちとの人間関係を楽しんでいるかをわかってもらおうとした。ところがこれは、せっかくのいい話を有難く思っていないと取られたらしく、ノアはいささか気分を害した様子を見せた。そこで私はすぐ、ただ目下の宣教活動がどれほど気に入っているかを知ってほしかっただけなんです、新しい仕事を引き受けます、と言った。

さて、本部に到着してから何ヵ月かが経ち、少し執筆の仕事をしたところで、ノア会長は私をタイプ原稿がうずたかく積まれたテーブルのある部屋に連れていき、これから聖書辞典の準備にかかるようにと言った。その原稿は世界各国からの二百五十人が分担して書いたものだった。この仕事の割り当てに当たっては、その人が組織内でどれくらいの地位にあるか（例えば支部事務所の者であるとか工場の監督であるなど）が主な基準になっていた。つまり、ものを書いた経験のある人など少なかったし、研究調査の経験がある人、時間の取れる人、文献調査の施設がある人となるとほとんどいなかった。少なく見積っても、この提出原稿のうち九割は使われなかったと思う。

そこで私は「Aaron (アロン)」からはじめ、「Aaronites (アロンの一族)」「Ab (アブ)」「Abaddon (アバドン)」とい

※20 箴言18・13。

※21 Deng 熱というのは蚊によって媒介されるところがマラリアに似ているが、放っておくと自然に良くなるはずの病気である。その影響がまだ尾を引いているのは、子供時代にかかった猩紅熱によるのかもしれない。

う具合に続けていったが、これを一人でやるのは無理だとわかった。そこでまず、もののみの塔協会の理事の一人であるライマン・スウィングルが任命されて加わった。まもなくギレアデ学校教務主事のエドワード・ダンラップが加わった。最後には奉仕部門のラインハート・レンタットと執筆部門のジョン・ウィッシュックが加わった。他にも状況に応じて時々手伝ってくれた人たちもあったが、基本的にはこの五人の力によって『聖書理解の助け』という一、六九六頁の辞典が五年後に完成した。^{※22}

ところでこの仕事を始めたころ、ノア会長が我々に申し渡したことがあり、これが作業の基本路線となった。実は我々はその言葉を誤解していたのだが、これはまさに幸運な誤解だったと言える。ノア会長が言ったのは「単に聖書の言うところを示したいだけであるから、協会の出版物にすべてを捜し求める必要は全然ない」という言葉だった。後にわかったのだが、会長の意図としては、そうすれば仕事も早く済み、比較的小さい、本人が言うところの「ハインドブック」ができるだろうということだった。つまりある項目についての聖句をほぼそのまま、わかりやすい言葉にして記し、説明もほとんど加えなければ、調査に必要な時間は少なくて済むというわけである。

ところが我々は会長の言葉を誤解し、もののみの塔の出版物が聖書の内容を示すやり方にとらわれず、常に聖書が実際に言っていることを示すように努めねばならないのだと受け取ったのである。その結果、そうでなければできなかったような本ができあがった。二百五十名から送られた原稿の方はほとんど例外なく協会の出版物の「通説」によっていたので、よく調べてみると違いが明らかになってしまうことが多かった。

協会副会長のフレッド・フランズは一番の聖書学者として認められていて、私も何度となく質問に行った。すると驚いたことに、聖書の注釈書を見るように言われることが多かった。「アダム・クラークかクックにどう書いてある

※22 項目は部門監督のカール・アダムスが割り当てた。一九八八年には、この『聖書理解の助け』に代わり、これにわずかな修正を加えたたけの二巻本『聖書』に対する洞察[※]が出た。

か見てみたら」とか、あるいは旧約聖書に関することであれば「ソンチノの注釈を見てみたら」という具合である。

ペテルの図書室にはそういった注釈書が山ほどあった。しかしそういったものは他の宗派の学者によるものなので私はあまり重要だと思っていなかったし、他の仲間たち同様、ためらいや疑いも感じた。執筆部門のベテラン、カール・クラインなどはづけけとした言葉を使うことがあり、こういう注釈書を使うのは「大いなるバビロンのおっぱいを吸ってることになる」と言ったりした。^{※23} 協会の解釈では、大いなるバビロンというのは啓示（黙示録）に出てくる売春婦であり、偽りの宗教の世界帝国である。

ところが、こういう注釈書の数々を見れば見るほど、聖書が神の靈感によるものだという堅い信念が読み取れることが多く、心を深く打たれるばかりだったのである。十八世紀の注釈書でも、書いてあることは極めて値打ちのあることであり、また正確でもあることを見るにつけ、その印象はなおさらだった。何年も経たないうちに「無効」になり、もう出されなくなってしまう自分たちの出版物と比べずにはおれなかった。もちろん注釈書に誤りがまったくないと思っただけではない。変ではないかと思われた箇所もある。しかし、役に立つところはそれを補ってなお余りあるものだった。

どの聖句の意味を考える時でも文脈がいかに重要かがそれまで以上にわかってきたし、またこの聖書辞典作成にあたっていた仲間もそう感じていたようだった。我々はまた、聖書に出てくる言葉の理解に当たっては、ただ単に既存の見方を取り入れたり、国語辞典にとらわれたりせず、ただ聖書そのものに意味を決めさせることの必要性にも気がついた。ペテルの図書室にあるヘブライ語及びギリシャ語辞典、そして英語の訳語ではなく原語に準拠した聖書索引をそれまで以上によく使うようになった。

※23 カール・クラインも、これをそれほど真面目に言っていたとは思えない。何しろ当人も注釈書を使っていたのだし、またフレッド・フランスが注釈書を使っていたこともよく知っていた。

そんな作業を通じて、我々の聖書に対する理解は思っていたほどではなかったこと、つまり自分たちが思ったほどの聖書学者でもなかったことがわかった。勉強になったと同時に思い上がり正されたのである。私の場合、それまで二十五年の年月にわたっていわば頭打ち状態にあつて、聖書を何度か通読してはいたけれども、それほど真面目に細かな研究をしたことはなかった。また、誰かがやってくれているという前提があつたので、特にやらねばならないと感じたこともなかったのである。ギレアデ学校で受けたコースが二つあつたが、これは実に忙しいコースで、じっくり考えたり、時間をかけて調査研究をしたりするための時間はほとんどなかった。

それが今や注釈書、ヘブライ語とギリシャ語の辞書や聖書索引などの参考書が豊富にあり、またこれを使う時間もあること、これがそれこそ聖書理解の助けとなつた。しかし、何よりも大きな違いを生んだのは、常に文脈に沿い、聖書そのものに聖句の意味を決めさせる必要を素直に認めたことである。あつという間に大きく見方が変わることはなかったが、できるだけ神の言葉そのものに語らせることの重要性を何年もかけてじっくりと悟つたと言える。ペテルの図書室にある百年も二百年も前の注釈書がなぜ時を経ても値打ちを失わないのかも理解できた。きつちり原文に添っていく取り組み方をすれば、文脈の意味から離れたり、原文とはかけ離れた視野の狭い解釈をしたりはできないのである。

執筆部門監督のカール・アダムズが私に割り当てた項目の中には、「年長者（長老）」と「監督」があつた。この項目の名前だけが与えられ、どう書くかについては、何の指示もなかった。このことを、ものみの塔協会一九九三年発行の『エホバの証人――神の王国をふれ告げる人々』²³³頁へ²³³頁がどのように書いているか、ご覧頂きたい。

爆発的な増加に備える

“Aid to Bible Understanding”（「聖書理解の助け」）という参考書の準備のため、統治体の監督のもとに調査が行なわれた際、1世紀のクリスチャン会衆が組織された方法に再び注意が向けられました。「年長者」、「監督」、「奉仕者」といった聖書の用語に関して注意深い研究が行なわれました。導きとして聖書に保存されてきた型に、エホバの証人の現代の組織を一層十分に合わせることできるでしょうか。

エホバの僕たちは神の指導に服し続けることを決意していました。1971年に開かれた一連の大会で、初期クリスチャン会衆の管理上の取り決めに注意が向けられました。聖書で用いられる場合、プレスビュテロス（年長者、長老）という表現は年取った人々に限られるのでも、会衆内の霊的に円熟したすべての人に適用されるのでもない、という点が指摘されました。その表現は、特に公式の意味において、会衆の監督たちを指して用いられました。（使徒 11:30。テモテ第一 5:17。ベテロ第一 5:1-3）それらの監督たちは、靈感による聖書の一部となった要求に調和して、任命によりその立場を得ました。（使徒 14:23。テモテ第一 3:1-7。テトス 1:5-9）十分な数の資格ある男子がいる場合には、会衆には複数の長老がいました。（使徒 20:17。フィリピ 1:1）彼らは「年長者団」を構成し、その全員が同じ職務上の地位にあり、そのうちの一人が会衆内で最も目立った、もしくは最も有力な成員となることはありませんでした。（テモテ第一 4:14）そして、長老たちを補佐するため、使徒パウロが述べた要求と一致して、任命された「奉仕の僕たち」もいたことが説明されました。—テモテ第一 3:8-10, 12, 13。

組織をこの聖書的な型に一層厳密に合わせるため、直ちに幾つかの取り決めが実施されました。

（1993年発行『エホバの証人』233ページ）

ここに書かれているのは、現実とはほど遠い話である。『聖書理解の助け』のため、「統治体の監督のもとに調査が行なわれた」とあり、聖書に忠実であろうとする人たちから円滑に指示が与えられていたかのような印象を与える。ところが実際には、そのような指示を与え、監督する統治体などではなく、すべてはものの塔協会ノア会長によつていたのである。そしてこのノアにせよ、はじめに指示を与えはしたけれども、実際の作業にあたってはほとんど関与しなかった。実際に指示を与えていたのは、執筆部門監督のカール・アダムズである。ノアが項目リストを作ったり、

それを執筆担当者に割り当てたり、その作業を監督したりすることはなかった。すべてカール・アダムズが行なっていたのである。

アダムズは統治体のメンバーでもなければ「油そそがれた者」でもなかった。実際に調査と執筆に関わった人の中では、協会理事でもあるライマン・スウィングルが「統治体のメンバー」と呼ぶことのできる唯一の人物だったと言える。そのスウィングルにせよ、カール・アダムズに作業を割り当てられていたのであり、書いたものはすべてカール・アダムズが編集して原稿になったのである。これは他の我々も同じだった。ノア会長とフレッド・フランズが最終的な原稿に目を通すこともあったが、ノアはどの原稿を読むべきかの判断をすべてカール・アダムズに任せていた。しかも、そんな原稿はほとんどなかった。

さて、先ほど述べた通り、私が「年長者（長老）」と「監督」の項目を割り当てられたときは、単にこの二つの項目を受け取っただけだった。当時の私は統治体のメンバーではなかったし、書くにあたっては、統治体による監督も、それどころかカール・アダムズによる監督もなかった。おじのフレッド・フランズに話を聞いたりもしたが、それは常に私の方から聞きに行ったのである。その時私が聞いたことと、その後のフレッド・フランズの言動とは正反対だと思えた。私が調査した内容は、ノアにとってもフレッド・フランズにとっても予想外で、しかもあまり歓迎できないものらしいことは明らかだった。

すなわち、調査の結果、聖書時代における長老や会衆の仕組みは、当時の現実とはずいぶん違うものだと判明したのである。当時エホバの証人が採用していた仕組みは、君主制的なものだった。会衆はいずれも「会衆の僕」あるいは「会衆の監督」と呼ばれる一人の人間の監督のもとにあった。「監督」という言葉はこの一人に対してのみ用いられ、他の人たちはすべてその補助の役割を果たす。これは、一九三三年に、協会のやり方に賛成しない長老がいたと

いう理由で、ラザフォードが聖書に基づく長老の制度を廃止していたからである。^{※24} ラザフォードには、会長という地位にあったことからそういう権力があったのである。この時、各会衆はすべて長老制を廃止し、協会の指名する「奉仕の主事」がその任に当たるべしという案を示された上、これに賛成するよう求められた。続く四十年間、会衆に長老団は存在しなかった。だからこそ一九五〇年代、協会発行の『新世界訳』聖書では、当時は認められていなかった「長老 (elders)」という言葉を避け、「年長者 (older men)」という訳語を使ったのである。^{※25}

調査の結果を見ていささか不安になった私は、フレッド・フランズのところに行った。すると驚いたことに「今日の組織に見られる事柄に基づいて聖書を理解しようとしてはいけない」という返事だった。そして「その『聖書理解の助け』はきれいなままにしておくのがいい」とも言った。私としては、この組織が真理を与える神の唯一の経路だと長年信じていたのだから、この返事はどう考えても変だった。また、協会の『新世界訳』の使徒14章23節、長老の指名に関する箇所で「no office (職務に)」という言葉が明らかに付け加えられているため意味が少し変わっている。^{※26} これを聞いてみた時などは、「じゃあそんなに偏りのなさそうな訳に当たってみたらどう」という答えが返ってきた。この時は、その場を離れながらも自分の耳が信じられなかったほどである。フレッド・フランズには、こ

※24

この措置の理由として、当時家から家への伝道訪問が強く奨励されていたにもかかわらず協力しない長老がいたからであると説明されていた。また、こういう長老は集会を取り仕切り、人前で演説をぶつことばかりに熱心であるということになっていた。実は会長のラザフォードこそがまさにこの類の人物であったのだが、このことは決して公にされない。ラザフォード会長のためには、仕事柄家から家への訪問に参加できなかったのだという説明が用意されていた。

※25

『新世界訳』の後の版では「長老 (elders)」が使われているが、これは啓示 (黙示録) の書で神の王座の回りにいる二十四人の長老を指す部分においてだけである。

※26

後の版では、この付け加えられた語句は削除されている。初版では次のようになっているのである。'Moreover, they appointed older men to office for them in the congregation and, offering prayer with fastings, they committed them to Jehovah in whom they had become believers.' (『われら』また、彼らのために会衆の中に年長者たちを職務に任命し、断食をして祈りをなげ、彼らをその信するエホバにゆだねた) (日本語版『新世界訳』で対応する版は確認できず)

いう点について後に統治体の会議の席で何度もただすことになる。

しかし、フレッド・フランスの言葉が私の聖書に対する見方に強い影響を与えたのも事実である。聖書の真理に対する深い信頼を感じた。だからこそ、そのような偏らない調査の結果にフレッド・フランスが示した反応は、理解できないものだったのである。

「年長者（長老）」と「監督」の項目を書き終わると、私はそれを提出した。そうでなければノア会長もフレッド・フランス副会長もこの原稿を読むことはなかったであろうが、この時は事情が違った。執筆部門のカール・アダムズが（本人の話によると、この原稿を読むとすぐにノアのところに行き、「これはぜひ読んでください。ずいぶん物事が変わります。」と言ったのである。

ここで今一度『エホバの証人――神の王国をふれ告げる人々』の書き方を思い出して頂きたい。「爆発的な増加に備える」という部分の第二段落は、要するに私が書いた項目内容のまとめである。これは『聖書理解の助け』の該当部分を見れば明らかである（唯一の違いと言えば、この第二段落では長老の「職務上の地位」が強調されている点であろう）。もちろん『聖書理解の助け』該当部分を書いたのは誰かについてまで書いてくれるだろうとは思わないが、ここを読むと、すべてが『聖書理解の助け』の調査によって明らかになった聖書的な仕組みに向かって速やかに動いていたかのような印象を与える。しかし、実際のところはどうかだったか。

カール・アダムズが話してくれたところによると、これを読んだノアはフレッド・フランスのところに行き、かなりの剣幕で「これはどういうことだ？ いまさらになつてすべてを変えねばならんということか？」と言ったという。フランスは、いやその必要はないだろう、現行の仕組みは問題なくそのままにしておける、と答えた。

カール・アダムズからこのことを聞いた時には、特にそれまでのフレッド・フランスの言動を考えると、にわかには信じられなかった。そこで、ある日の夕方、フレッド・フランス本人のところへ直接話を聞きに行った。やはり何

も変える必要はないという返事だった。しかし、完成した『聖書理解の助け』がもうその夏の地域大会で発表されるとわかっていたので、一世紀の会衆に長老団が存在し、すべての長老が監督としての仕事をしていたという証拠が明らかなのに、我々の方がこの聖書的な仕組みに従うつもりがないのが皆にわかったらどうなるでしょう、と尋ねてみた。

フレッド・フランズは穏やかな口ぶりで、別に大したことにはならないだろうし、現行の仕組みは『聖書理解の助け』の内容に「合わせられる」だろうと言った。私は、聖書に従わないというのは兄弟たちにとつてかなりショッキングなことかもしれないですよ、と言った。それでもフレッド・フランズの意見は変わらず、次のように言うばかりだった。キリストが一九一四年に王国の権を執ったのだから、地上で行なわれる物事に変化があっても不思議はない。我々の兄弟たちもずっとそう思ってきた。イエス・キリストは地上の僕（しもべ）たちの仕事をただ一人の人間を通じて、あるいはその職務を通じて、統治するだろう。それは新秩序が来るまで続くだろうと自分は信じてきたし、今も信じている――聖書を尊重すべしと言っていた本人からこのような言葉を聞くのは意外で、一体どうなっているのかわからなかった。

ところがそれからまもなく、フレッド・フランズは会衆の仕組みに変更を加えるとする大会講演用原稿を書いたのである。カール・アダムズはこれを見て変更を悟り、即座にノア会長に「フランズ兄弟にもう一度話を聞いてみないといけません。気が変わったのではないかと思うのです」と進言した。ノア会長が聞いてみると、確かにフランズの気は変わっていた。この結果、四十年間ずっと続いていた監督制の仕組みは変えられた。

以上が実際の経緯である。これを『エホバの証人――神の王国をふれ告げる人々』は、聖書の用語に関する「注意深い研究」が「統治体」の監督のもので行なわれ、その目的は「聖書に保存されてきた型」に「一層十分に合わせる」ことであり、「神の指導に服し続けることを決意して」、「組織をこの聖書的な型に一層厳密に合わせる」ことだった、と書いている。これは、理想ではあろうが、事実ではないのである。これを書いた人は、事実関係を知らなかったか、

あるいは作り話によって統治体のイメージを持ち上げようとしたのであろう。だが、結局のところ、ほんの一握りの人間が実権を持っていたのであり、たった一人の人間（フレッド・フランズ）の気まぐれとも言える決定が世界規模の組織の方針を決定し得たというのが事実なのである。

また、「年代計算」という項目が割り当てられた時もやはり大きな疑問を持つことになった。^{※27} エホバの証人の重要な教義の一つに、ルカによる福音書21章24節にある「異邦人の時」の終わりは一九一四年であると聖書が預言している、というものがある。人の目には見えないが、その年にキリストが王国の権を執って統治を始めたというのである。ダニエル4章にある「七つの時」というのがこの一九一四年に至る計算の根拠であり、聖書のまた別の部分を使い、この「七つの時」は、紀元前六〇七年に始まり西暦一九一四年に終わる二千五百二十年間の期間であるという解釈がなされる。この紀元前六〇七年という始まりの年は、バビロニアの征服者ネブカドネザルがエルサレムを破壊した時であるとされる。実はこの紀元前六〇七年という数字が協会の出版物にしか存在しないような気はしていたのだが、それがなぜなのかはつきりとはわからなかった。

この「年代計算」という項目のためだけに何カ月もの調査を行ない、結局これは『聖書理解の助け』の中でも最も長い項目になった。^{※28} この時には、何とか我々の一九一四年を算出するのに決定的であるこの紀元前六〇七年を証明するような、あるいは歴史的に支持するような証拠を見つけようとして、かなりの時間と労力を費やした。協会本部のスタッフ、チャールズ・プレーガーは当時私の秘書を務めてくれていたのだが、ニューヨーク市近辺の図書館を

※27 歴史的な項目はほとんどが私の割り当てであり、エジプト、アッシリア、バビロン、ペルシアなどの歴史やその支配者について（ただしバビロンについては支配者のみ）扱った。

※28 これは322頁から348頁まで、二十七頁に及ぶ項目である。一九八八年の改訂版（『聖書に対する洞察』）では二十頁程度にまで減らされており、これがこの改訂版のもっとも大きな変更点である。これによって、紀元前六〇七年の問題を認める部分はすべて削除された。

回って、少しでもこの年代を歴史的に裏付けられるものがないかと探し回ってくれた。

ところが紀元前六〇七年を裏付けられるものはまるで何も見つからなかったのである。歴史家たちは口をそろえてその二十年後の年代を示していた。私は『聖書理解の助け』で「考古学」の項目を書くまでは、メソポタミア付近で発見され、古代バビロンにまでさかのぼる粘土板に記されたくさび型文字の記録が何万という数に及ぶことなど知らなかったが、その何万という記録のどれを見ても、(ネブカドネザルが統治を行なった)新バビロニア帝国の期間は、エルサレム破壊の年が紀元前六〇七年になってくれる長さにならない。どれを見ても、協会が言っているよりも二十年短い期間になる。

これを見て私の心は穏やかでなかったが、反証があるうと我々の年代計算はとにかく正しいのだと信じたかった。そこでこの記事を『聖書理解の助け』に書くに当たっては、紀元前六〇七年を誤りとするような、つまり終わりの年が一九一四年にならないような、考古学・歴史学上の証拠を何とか弱めることに時間と紙幅を費やす結果になった。

チャールズ・プレーガーと私は、ロードアイランド州プロヴィデンスのブラウン大学に行き、古代くさび型文字文献の専門家アブラハム・ザックス教授を訪ねた。紀元前六〇七年という年代を誤りとする膨大な古代資料のどこかに何か間違い、あるいは弱点がないかどうかを知りたかったのである。その結果、もしどうしても我々の年代が正しいとするならば、まったく理由もなく古代文献の著者たちがそろって事実をゆがめて伝えようと申し合わせたことになる、ということが明らかになった。私は、まるで動かぬ証拠を前にしつつも弁護を続ける弁護士のように、新バビロニア帝国に関する歴史資料という証拠の信憑性を何とか弱めようと努力した。^{※29}私の書いた内容に嘘はないものの、その目的は歴史的に何も証拠のない年代を守ることだったのも確かである。

このように、聖書そのものの真理に忠実であるべしという原則はよくわかっていながらも『聖書理解の助け』には

協会の教えに合わせようとした結果がかなり見られることになった。この経験によって多くを学んだが、これはこの聖書辞典のためになったというより、むしろ自分たちのためになったのかもしれない。それでもこの『聖書理解の助け』によってエホバの証人の多くが聖書への興味を強めたのは確かである。その書き方、基本的な取り組み方をはじめ、著者たちができるだけ独断的にならないよう努めたこと、一つの事柄についていろいろな見方があり得ることを認めたこと、きちんとした証拠に基づく以上の話を作ったりしないように努めたこと――こういったところが良い点だったのだろう。しかし、それでも至らぬところがあつたのは確かであり、先入観にとらわれたり、聖書そのものにもっと忠実であつてしかるべきだった箇所もある。それが自分でもわかっているのは、例えば「諸国民の定められた時」「忠実で思慮深い奴隸」「大群衆」などの項目である。このいずれにも、ものみの塔協会の教えを支持する目的で書かれた部分が含まれてしまっている。こういう教えは私にとって事実等に等しかったためであるが、結果的には後に自分が「前書き」で書いたことを裏切る形になってしまった。この「前書き」6頁の「目的」というところには『聖書理解の助け』は教義の解説でも解釈の書でもありません」と記してある。また、比喩的あるいは象徴的な表現についてのいかなる解釈も「独断的に、また教義に合わせるために」なされることはないとも記してある。大筋においては確かにその通りであつた。しかし深く思い込んでいた信念は強く、常にその通りではなかつたのである。

こうして完成した『聖書理解の助け』が発行された年、エホバの証人の統治体に加わらないかという誘いを受けた。統治体は現在およそ二百三十カ国にいる全エホバの証人の活動を管理する。その時までの統治体のメンバーは七人だったが、これは初代会長チャールズ・テイズ・ラッセルが最初にもものみの塔聖書冊子協会をペンシルバニアに設立した時の役員七人であつた。そこで一九七一年十月二十日、私は他の三人と共に、人数が増えて拡大された統治体のメンバーに任命された。そして、思いもかけなかつた現実に直面していくことになったのである。

『タイム』誌1982年2月22日号に私のことが扱われた記事が載った。これを読んで腹を立てたエホバの証人も多かったが、それはその記事でエホバの証人の組織が「秘密」の組織と書かれたからである。世界中、町と言わず村と言わず家から家へと回るといって、大変目立つ活動を盛んに行なっている組織に対して秘密組織呼ばわりするのはおかしいというのであろう。一方、『タイム』がそう書いたのは、本書第1章に述べた出来事について、ものみの塔本部からまるでコメントが得られなかったからであろう。

しかし実際のところ、エホバの証人であってもこの組織の中枢がいかに機能しているかについて知っているのは極めて少数である。統治体は世界中のエホバの証人の活動を取り仕切っている。ところが、どんな具合に教義的な教えが決まるのか、一体どんな話し合いをしているのか、結論は常に満場一致で決まるのか、意見の食い違いがあった時にはどうするのか、などはまるで知られていない。

統治体は非公開の会議を行なうので、このようなことはすべて秘密である。私が統治体にいた九年間を通じて、正式なメンバー以外の者が会議に出席するのを許されたことは二回か三回しかなかったと記憶している。しかもそれは統治体に出頭を求められたからであり、用件が済むとすぐ退出を命じられ、統治体は引き続き内密の討議を進める。出頭を求められた人たちは、その用件がいかに重要であろうと、会議に参加することはできないのである。また、エホバの証人全体に対して協会の収入、支出、資産、投資などについてはつきり知らせることはまったくない（毎年の『年鑑』に簡単な支出報告が載るだけである）。※30

このように、一般の宗教組織内なら普通に知られることが、大多数のエホバの証人には、仮に知らされても、漠然とししか知らされないものである。それでも、統治体にいる少数の人間が決めたことがエホバの証人の生活に極めて深

※30 一九七八年の統治体への報告書には土地、預金などを含め三億三千二百万ドルの資産が記されている。統治体のメンバーでさえ、協会の財政上のことが良くわかっている人はほとんどいなかった。

い影響を与え得るし、また実際与える。しかもこれが世界中のエホバの証人に及ぶことになっている。

この点、これがそのまま本書を書く三つ目の理由につながる。この理由が最も重要なのである。これなしでは以上に挙げた二つの理由がほとんど意味を失ってしまう。

三つ目の理由——義務感

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である」

マタイ7・12へ口語訳

ここに引用したイエス・キリストの言葉にある規範の前に、クリスチャンを自称する者であれば、常に強い義務感を持つ。正直な人間であれば誰でも、この言葉を完璧に実行していますなどとは言えないし、私自身そのようなことを言うつもりはまったくない。ただ、この規範に従おうという心からの願いによって本書を書いているとは言えると思う。

使徒パウロは、自分があらゆる人々に対して「負い目のある者」だと言っている。^{※31} つまりパウロは義務を感じたのである。そして私もそれによく似た義務を感じる。私が大事なことを決めるとした場合、その参考になるかも知れない事実を誰かが知っていたとしたら教えて欲しいと思う。私の代わりに決めてほしいというのではなく、ただその事実を教えてさえくればよく、最終的にそれをどう判断するかは任せておいて欲しい——私ならそう思う。そして本当の友人であれば、きっとそうしてくれると思う。

統治体にいた九年間は私自身にとって、とりわけ私の良心にとって、大きな衝撃だった。生きていく上での重大な

※31 ローマ1・14

危機、重大な岐路に直面したのである。そして私は自分で決定を下し、その代償は大きなものとなった。しかし後悔はない。いろいろな事柄を知ったことが原因だったが、これについても後悔はない。私とは違った結論を下す人がいてもおかしくないし、事実いた。それはそれでその人の権利であり、その人と神との間の問題である。

一九八〇年五月に統治体を辞任した後、この組織の実情について聞きたがる新聞や雑誌から多くの問い合わせを受けた。私はそのたびに、問い合わせはすべてブルックリン本部の方へお願いします、と答えた。するとあちらは口をそろえて、実は問い合わせても「ノーコメント」としか返ってこないのです、と言う。そこでこちらも、私は皆様の情報源にはなり得ません、と返す。私は二年近くこの態度を保った。しかし、その二年の間に自分にだけでなく他の人にも起こったことがいろいろあって、この態度を考え直した。

その二年間、組織に良心をもって反対した人たちは、その反対の理由はもとより、その人個人の性格や行ないにまでも罵詈雑言を浴びた。神の言葉をまず最優先させようという気遣いを示す人がいても、それは野心や反抗心や思い上がりの結果であり、神とクリストに対する罪だとされる。心から真理を求め、神に対して誠実であろうとした人もいたかもしれないことなど、最初から問題にもされない。時と場合にに応じて判断しようという努力は一切なされず、何もかもすべて一緒くたである。組織を離れた人たちの品行や態度の良くない者があれば、組織を離れた連中はすべてそういう悪い人間だとされる。態度の悪い人間がいるとすれば、それは組織に対する失望や落胆、あるいは傷ついた気持ちからかもしれない、ならばそのことを理解してあげよう——そんな思いやりは一切ない。エホバの証人の間に、世界規模で、根も葉もない噂話や愚にもつかないゴシップまでもが広がっている。道徳心が高く、信仰も篤いクリスチャンたちが、夫婦交換をしているとか、同性愛者であるとか、偽善者であるとか、自分のカルトを作ろうとしているエゴイストであるなどと中傷を受けているのである。また年をとった者については、よく「精神障害がある」とか「老人惚けだ」などとも言われる。

そんな中で、そのようなひどい中傷を抑えることのできる立場にある人たちがいた。組織に反対意見を持つ人たちが

※ 32 出エジプト記 20・16 レビ記 19・16 詩編 15・3、ペテロ第一 2・21-23

この通り、たったこれだけの文章において、人が「サタンのよう」で、「独立的な態度」を持っていて、「粗捜しを

14 エホバの民の隊伍の中から、初めのころのサタンのように、独立的な態度や粗捜しをするような態度を取る人々が時折出ました。彼らは世界での兄弟とのきずなを保ちつつ「肩を並べて」奉仕したいという気持ちを持っていません。(エフェソス 2:19-22と比較してください。)むしろエホバの言葉に対して「かたくなな肩」をそびやかします。(ゼカリヤ 7:11, 12, 新)それらの傲慢な人々は、エホバが過去1世紀にわたってご自身の民に非常にやさしく、親切に教えてこられた「清い言語」の型をばとうし、イエスが地上に集めてこられた一つの国際的な「群れ」から「羊」を連れ去ろうとします。(ヨハネ 10:7-10, 16)彼らは疑いをまいて、それを疑わない人々を、エホバの証人の王国会館で出される靈的食物の豊かな「食卓」から、本当に「何も乏しいものはない」ところから引き離そうとします。(詩 23:1-6, 新)一人であるいは小さなグループに分かれて家庭で聖書だけを読んでいれば十分だ、と彼らは言います。ところが不思議なことに、彼らはそのような「聖書朗読」を通してキリスト教世界の僧職者が著わした100年前の聖書注釈書に教えられている背教した教理に逆戻りし、中には12月25日のローマのサトゥルナリアのような、キリスト教世界が行なう祝祭を再び祝うようになった人さえます。イエスとその使徒たちは、そのような不法の者たちに気を付けるよう警告していました。—マタイ 24:11-13。使徒 20:28-30。ペテロ第二 2:1, 22。

14 (イ) 柔和の逆はどんな態度ですか。それはどのように示されますか。(ロ) その傲慢な人々はどのように事に始めますか。わたしたちはどんな警告に注意しなければなりませんか。(ハ) 「何も乏しいものはない」ところはどこですか。

(『ものみの塔』〈1981年12月15日号24、25頁〉)

も誠実なのかもしれない、本当に良心に従おうとしているのかもしれないと言い、また噂をまく人たちには、偽りの証言がいかに神に背くものかという点を指摘できる、選ばれた立場にある人たちである。ところが、あろうことか、この人たちは出版物によって噂を広める側に立ったのである。※ 32

例として『ものみの塔』1981年8月15日号28、29頁へ1981年12月15日号24、25頁を取り上げてみる。これが多くの言語に訳されて世界中に何百万部も出回ったのである。

年	その年バプテスマを受けた人数	その年活動を報告した人数
1970	164,193	1,384,782
1971	149,808	1,510,245
1972	163,123	1,596,442
1973	193,990	1,656,673
1974	297,872	1,880,713
1975	295,073	2,062,449
1976	196,656	2,138,537
1977	124,459	2,117,194
1978	95,052	2,086,698
1979	113,672	2,097,070
	1,793,898 (10年間の合計)	(18,530,803) (のべ活動者数)

るのに十分とされているのである。

さて、右の表は統治体による世界中のエホバの証人活動記録に基づくもので、一九七〇年から一九七九年までにバプテスマを受けた人の数、および実際に活動を行なっているエホバの証人の数を年ごとに示したものである。

これにより、一九七九年までの十年間に合計一七九万三、八八八人がバプテスマを受けた**へつまりエホバの証人になった**ことがわかる。さて、協会では普通年間に全成員の一パーセントが死亡するものと推定している。そこで毎年それだけの人数が減ったと考えると、十年間の活動報告人数のうち一八万五、三〇八人が減少したことになる。この人数を十年間のバプテスマを受けた人数合計から引くと一六〇万八、五九〇人となる。これがこの十年間誰もこの組織を離れなかった場合の増加数となる。

する」上、「かたくな」で、「ばとう」する、「傲慢」な、「背教した」「不法の者たち」と言われている。一体何をしたからというのでここまで非難されるのか。ここで悪いとされているのは、まず協会の教義に同意しないことであるが、どの教義のことかは明記していないし、どんな風に同意していないのかもわからない。また、神の靈感を受けた言葉だけで十分であって、立派な建物で大人数の集会を開くことは大して重要なことではないという意見を持ったことも「悪い」とされている。

こんな理由で、「サタンのよう」な人間だとされ得るのだろうか。され得ないとはどこにも書いていない。信じ難いと思われるかもしれないが、長老や「旅行する代表者」を含めた多くのエホバの証人にとっては、これだけでしかるべく判断し、また行動す

さてどうなるであろうか。この一六〇万八、五九〇人という人数をこの十年間の前の年（一九六九年）に活動を報告していた人数、一二五万六、七八四人に足してみると、二八六万五、三七四人となる。これが一九七九年における人数となるはずである。しかしその年は二〇九万七、〇七〇人に過ぎない。つまり、この問題の十年間に七六万八、三〇四人もの人が組織を離れた、あるいは活動を停止したということである。これはこの期間にバプテスマを受けた人の十人につき四人である。あるいは言い方を変えると、組織にいる人三人に対してやめた人が一人いるということである。

この、入ってはまた出て行くという状況に至った原因は様々であろう。問題の十年間に何十万人もが組織を離れたわけだが、これがすべて良心的な、真理を重んずる謙虚さに基づいたきちんとした理由によるとは思えない。むしろ明らかに逆のケースが多かった。やめる前、あるいはやめた後、不道徳な行為に身をまかせていた人もあった。また意見が合わないということで組織を離れた人の中には、復讐心をあらわにしたり、人を軽蔑した態度を取ったり、いい加減なことや大げさなことを言ったりし、結局自分たちが糾弾していたのと同じ誤りを犯している人もいた。さらにはエホバの証人の集会や大会などで妨害行為に及ぶ者までいたが、これなどは責められてしかるべき性質のものである。しかしその一方、そんなことは一切しない人も私は数多く知っている。本当に慎みがあり、神に畏れの気持ちを持った、思いやりのある人たちである。こういう人たちは、自分にとっての損得という点から見れば、失うばかりで何も得られない結果になる立場や行動を取った。

こういう人たちにとっての苦痛は、自分が何かひどい目にあったことよりも、むしろ他の人がひどい目にあっていのを目の当たりにすることである場合が多い。つまり、長老をはじめとする責任ある人たちの頑なで、偏狭で、傲慢な態度によって他の人たちが苦しむのを見たり、あるいは聖書的な根拠のない組織の命令がいかに人を傷つけるかを目の当たりにするのがつらいのである。そのようなつらさを味わいながら、不平を言うことも仕返しをすることもなく、ただもつとわかってほしい、神のひとり子にしてクリスチャンの主であるイエス・キリストの模範に従ってほ

しいと請うばかりだった。

この他の人たちに対する思いやりというものが、決定的な違いを生むのだと思う。また、真理を大切にしようという気持ちや、神の言葉を曲解しないようにという気持ちも重要だろう。猫被りをして、信じていないことをさも信じているかのように振る舞ったり、良心的に支持できないことを支持したり、聖書が許していることをむやみに糾弾してみせたりすべきではないという気持ちも重要である。この様な気持ちを持つていながら、「背教者」「キリストの敵」「サタンの手先」とされている人たちは数多く知っている。いずれの場合も理由はただ一つ、組織の教義・やり方のすべてに同意できないことである。

このような人たちに対して私は義務を感じるのである。大抵は次のようにことが運ぶ。三人から五人のグループ（審理委員会 と呼ばれる）がこの人たちと内密の会議を持つ。証人として参加する人は証言をするだけで、それが終わるとその場に留まることを許されない。それから会衆に短い排斥通告が読まれるが、証言も排斥処分を決め手となった証拠も提示されない。エホバの証人は排斥された者と決して口をきいてはいけないことになっているので、その通告が読まれたが最後、友人や仲間たちに何の説明もできない。一方、排斥される前に説明しようとする、「改宗を勧めている」「会衆の一致を乱している」「争いの種を蒔いている」「分派を作っている」などと言われる。排斥になった人に話しかけると、その話しかけた人がやはり排斥処分の対象となる。

こうして見事に「強制隔離」がなされ、排斥のことについては、いわばしつかり蓋が閉じられるわけである。排斥及びそれに関する「証拠」の記録はブルックリンの奉仕部門に保管されている大量のファイル（あるいは支部にあるファイル）のどこかに「破棄不可」の印を押されて保存されている。これは排斥処分になった人たちに対してなされた告訴についての情報を含むため、審理と同様秘密であり、また再検討されることもない。

「真の友はどんな時にも愛しつづけるものであり、苦難のときのために生まれた兄弟である」と聖書に書かれている。^{※33} 私もかつてはそんな友が非常にたくさんいると思っていた。しかし事態が重大な局面を迎えると、結局ほんの少数しかいなかったことがわかった。それでも私は、自分のために何を言ってくれたとか言ってくれなかったとかいうことは別にして、この少数の友人が本当にかけがえのない人たちだと思っている。かつて組織内では目立った地位にあったため、私についていろいろ尋ねたりする人もある。ところが、それほど有名でもなかった人たちのことを尋ねる人はほとんどいない。しかしこの人たちも同じような代償と苦しみをなめ、同じような経験を味わっているのである。

ここに母親がいるとしよう。娘を生み、育て、病気の世話もし、苦しみも悲しみも自分のことのように味わって一緒に涙を流してきた。この母親が自分の良心、そして神に忠実であろうとしたばかりに、苦勞して育てたこの娘に突然縁を切られてしまったらどう思うだろうか。

あるいはまた、自分の子供が結婚することになった時、やはり同じ理由で、「式には参加しないのが望まれる」と通告されるし、孫が生まれた時でも会いに来るなど言われる——こんな時、親としてどう思うだろうか。

これは想像ではない。まさにこうしたことがエホバの証人だった親たちに実際に起きているのである。

一つだけ例を挙げよう。ペンシルバニアに住むある母親の手紙である。

結婚した子供が組織にいるのですが、私が断絶へ自ら交わりを絶つこと[※]した時でものんびりしに来るようになってくれましたし、人間としての私に対する評価も変わってはいませんでした。ところがあの知らせ（筆者注——『ものみの塔』1981年9月15日号）[※]にある、断絶した者との付き合いに関する細かな取り決めのこと。以来、子供たちは私を避けるようになり、電

※33 箴言17・17。

話で話すこともなく、何の接触もありません。どうにかしたいと思うのですが、果たしてどうすれば良いのかわかりません。こちらが何かするとそれが悪いようにとられてしまつて、さらに子供たちを遠ざけることになりはしないかと思うと、もう何もできません。電話をしたら番号を変えられるのではないかと思うと、電話もできません。先にも申しました通り、何か悪いようにとられることを書いてはいけないと思うと、手紙も書けません。そんなこんなですっかり参つてしまい、ノイローゼで入院している上、何かことあるごとにショックを受けているようなありさまで、精神的に潰されてしまつています。

ひよつとしたらあなたにもこんな経験がおりかも知れません。子供（そしてこれから生まれる孫）を失ったことをどのように受けとめれば良いのかわかりません。失われたものはあまりにも大きすぎます。

このような人たちに対する偏見や態度を見直してもらうのに、私がエホバの証人の組織内で持っていた地位が何かの役に立つなら、と思うのだ。他に役に立つことなどなからうそんな地位も、その目的を果たしたことになるう。ここでパウロの言葉を思う。

わたしたちのことは、神のみまえには明らかになっている。さらに、あなたがたの良心にも明らかになるようにと望む。わたしたちは、あなたがたに對して、または自己推薦をしようとするのではない。ただわたしたちを誇る機会を、あなたがたに持たせ、心を誇るのではなくうわべだけを誇る人々に答えるようにさせたいのである。

わたしたちに心を開いてほしい。わたしたちは、だれにも不義をしたことがなく、だれをも破滅におとし入れたことがなく、だれからもだまし取ったことがない。わたしは、責めるつもりでこう言うのではない。前にも言ったように、あなたがたはわたしの心のうちにいて、わたしたちと生死を共にしているのである。^{※34}

先に挙げた母親のことをその子供さんが考える時、恥ずかしい母親を持ったなどとは思わず、お母さんは良心に忠実だったのだという誇りを持ってもらえればと思う。本書がその一助になれば、かかった苦勞もその甲斐があること

になろう。

だから本書には私がエホバの証人の統治体にいた九年間に実際に見聞きし、また経験したことを書いている。多くの人にとっての悲痛な問題であることの根本に迫り、バランスの取れた見方をするためには、これがどうしても必要なことなのである。

これは、「暴露本」の類を意図したものではない。確かにショッキングなことがあったのではあるが、それだから書いたのではない。極めて根本的で、とても重要な問題を明らかにしてくれるから書いたのである。「組織への忠節」が行き過ぎるとどうなるか、もともと優しくて悪気のない人たちがいかにして無情で不正で残酷ですらある決定や行動に至るのかも明らかにする。地名のみならず人名も実名で出しているが、これは信憑性を保ち、事実即して書くために必要だと思われたからである。こうしなければ、内容を疑ったり、そんなことはなかったと否定したりする人がきつとたくさん出てくることだろう。名前を出す必要がない場合、あるいはそうすると関係者に迷惑がかかるかもしれないと判断される場合には伏せてある。人名が出てくるのは、全体の話の中で目立った役割を果たしている時だけである。ネイサン・ノアだとかフレッド・フランズといった人物の言ったことがよく出てくるが、これは発言も多く、またその影響力も他の人より大きかったからである。またライマン・スウィングルやカール・アダムズといった人たちもよく出てくるが、これは仕事を共にすることが多かったからである。

発言などを引用する際には公正を心掛け、文脈から取り出してしまったり、あらぬ意味を持たせたりしないよう努めた。引用する言葉はいずれもその人らしいもので、その人のいつもの態度、やり方、性格などに合ったものばかりである。統治体のメンバーも含め、発言者の名前を伏せた引用もあるが、これはその本人あるいは関係者にいらぬ迷惑がからないようにという配慮からか、そうでなければその人の置かれた状況（悲劇的な場合もある）に鑑みてのことである。無論すべて名前を伏せてしまうと引用の意味がなくなってしまうので、そういうわけにはいかなかった。次のイエスの言葉に示されている責任から完全に逃れることは、私はもとより誰にもできないとも思っている。「あ

あなたがたに言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである。」※³⁵ 誤った言葉、あるいは人を傷つけるような言葉についての許しを我々は求めるし、またその許しが得られることもあろう。しかしその言ってしまったことについては、やはり自分に責任があるのだ。

ここに書かれていることについて、これは「内輪の恥をさらす」ものだと言って非難する人もいそうである。おかしいことに、こういう人たちも自分たち以外の宗教団体の恥をさらすことについては反対せず、それどころか、大いに熱心になって広くあまねく公にすることが多い。ただ自分たちの宗教内で起こることについては外からとやかく言われるべきではないと思っておられる。

また実際問題として、今日エホバの証人の間で自分たちの組織について批判がましい話の起こる余地はまったくない。そんなことをしようものなら反抗的だと見なされ、排斥になるだけであろう。すると内部でも話ができず、外部からも言われるべきでないのだから、結局何も語られず無視されなければならない。もちろん、そうであって欲しいと思う人もあるだろうけれども、そうでなければならない、というのはどんなものだろうか。

確かに、クリスチャンが最終的に頼るのは、すべてを見通しすべての最終的な審判者である神である。腹いせ・復讐・意趣返しは決して良しとされないし、「中傷工作」などの許される余地はない。聖書はその点についてははっきりしている。※³⁶ しかし、だからと言って不正に対してまったくの沈黙を保つべきだろうか。神の名において誤りが流布されていても黙って見ているべきだろうか。何か言うことは『ものみの塔』が言う「神によりうち立てられた権

※³⁵ マタイ12・36、37へ口語訳。

※³⁶ 詩編37・5―9、32、33。ローマ12・17―24。ペテロ第一2・21―23。

威に対する不遜」なのだろうか。※37

協会側の言い分は、自分たちにはそんな不正など一切ないというものである。今までやってきたこと、そして今やっていることは聖書に完全に一致している、それどころか聖書はするようにすべきだと要求している、と主張する。もしそうならば、物事を自由に話し合うことに反対もないはずである。話し合いの結果、協会組織の正しさがさらに明らかになるはずであり、名誉挽回するはずである。結局、沈黙を守りたがるのは不正を行なっている張本人だけであり、そういう人は他にも沈黙を強制するものである。これは、昔も今も、独裁政府や権威主義的宗教に見られることである。

聖書は、権力者の過ちを明らかにすることに反対しているだろうか。そうではないようである。ヘブライ語聖書に現れる預言者たちは、よくそういう権力者を取り上げ、いかに神の基準から離れて問題を引き起こすかについて書いている。このように率直で偏見のないところこそ聖書が真に神の書である証拠だというのはエホバの証人もよく言うことである。※38

イエスの使徒・弟子たちについても同様である。イエスの裁判が不正であったことを公にしようとする使徒たちに対して厳しい弾劾を加えたのは、サンヘドリンや長老たち、あるいはまた神から与えられたという聖職者の権威、つまりまさに神の契約の民イスラエル人の権威構造そのものだったのである。※39 このように、聖書の預言者も使徒も権力者の誤りを公にした。これは神というさらに大きな権威に対する敬意と服従の気持ちからであり、そして事実を

※37

ユダの手紙8節にある「栄光ある者たちをあしざまに言つ」者たちについて、『ものみの塔』1982年8月15日号へ1982年11月15日号28頁は、この「栄光ある者たち」には「任命を受けたクリスチャンの監督」も含まれるとし、「神から与えられた権威を無視する傾向」について警告を与えている。また同号29頁へ29頁の囲み部分も参照。

※38

一九六三年発行の『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益です』341頁へ341頁参照。

※39

使徒4・5123、5・17140。

知る必要があった人に対する気持ちからである。

もちろん今日、預言者や使徒の権限を持つ者はいない。しかし預言者の模範に従うのに預言者である必要はない。そうでなければイエスの言葉が意味を失ってしまう。あらゆる非難と悪口を受けていた者たちに向かって、イエスは喜べと言うのである。「人々はあなた方より前の預言者たちをそのようにして迫害したのです」。^{※40} この模範に従おうとしたからこそ、これらクリスチャンたちは同様の非難や悪口を受けた。使徒の模範に従うのに使徒である必要はない。イエス・キリストの道に従うからと言って救世主である必要もないし、救世主であるかのようなふりをする必要もない。^{※41}

もちろんキリストが受けた苦しみと、現代この状況で関係者たちが受けた苦しみとは、重要性や意義、またその帰結において比べものにならないほど大変な違いがある。しかし先ほどの例で、誤りを包み隠さず明らかにするという原則を神が認めていることがはっきりしたし、この原則は目下の状況にも当てはまると言えるだろう。事実を知らせ、人に助けの手を差し伸べ、正しい判断を下す手伝いをするためならば、不正や誤りが明らかになることに神は決して反対していないのは明らかである。「善人が黙っていると悪がはびこる」という諺は当たっていると思う。

本書に紹介する事柄の深刻さはさておいても、私はそれだけが原因で自分の結論に至ったわけではない。ただ、聖書の基本的な部分についてそれまで以上に考えるようになった。なぜ使徒パウロは、救いが信仰によるものであることを強調し、「そうです、それは業によるものではありません。だれも誇ることもないためです。」と言ったのか。単に律法を守ることによる義と、神の恵み、あるいは「過分のご親切」による義との本当の違いは何なのか。クリスチャン会衆の頭としてのキリストはいかに重要な役割を持つのか。会衆の真の目的とは一体何なのか。神が会衆に権威を

※40 マタイ5・11、12 またヤコブ5・10、11も参照

※41 コリント第一11・1。エフェソス(エペソ)5・1。ペテロ第一2・21。

与える理由は何か。そしてその権威がいかに関係して使われ得るのか。——こういうことについて考えるようになったのである。エホバの証人の統治体のメンバーとして、幹部の一員としての経験を通じて、こういった基本的なことの重要性について、それまで以上に痛感することになった。

本書に紹介する事柄については知らず、自分たちが聖書に読みとったことだけに基づいて同じ岐路に立ち、自分自身の決定を下したエホバの証人も多い。しかし、確実な拠り所が得られず、いい知れぬ苦悩や罪の意識をかかえて良心の危機に直面している人たちもいるのである。本書がそんな人たちの助けになれば、というのが私の望みであるし、また本書にせよ、そんな人たちがいなければ書けなかったとも思う。神の霊、神の言葉に導かれ、良心が何らかの方向に進む際に、本書を利用して貰えればと思う。

第3章 統治体

「わたしたちがあなたの方の信仰に対する主人であるというわけではありません。わたしたちはあなたの方の喜びのための同労者です。あなた方が立っているのは「自分の」信仰によるのです」 コリント第二1・24

右に引いたパウロの言葉は、私がエホバの証人の統治体にいた九年間に何度となく頭をよぎった。すべてのエホバの証人に統治体を経験してもらえたらと思う。そうすれば言葉では言い尽くせない所をわかってもらえと思うのである。

統治体とはそもそも何かを説明しよう。エホバの証人は、イエス・キリストが会衆の頭として、「忠実で思慮深い奴隷級」という階級の人々を通じて会衆の統治を行なっていると考えている。この「忠実で思慮深い奴隷級」というのは、キリストの天の王国を継ぐ者として油をそがれた十四万四千人の一部である。^{※1} この中にまた少数の男性がいて「統治体」としての活動を行なっている。現在八千八百人いる「油をそがれた者たち」(統治体のメンバーはこの中から選ばれている) はもとより、天の王国を受け継がないとされているその他のエホバの証人約五百五十万人を含めた、世界規模の会衆を統括するのである。^{※2}

一九七一年に十一人のメンバーからなるこの統治体の一員となった時にはとてもない責任のある仕事を引き受け

※1 「忠実で思慮深い奴隷」という言葉は、マタイ24・45から47にあるイエスのたとえ話から取られている。また十四万四千という数字は啓

示(黙示録) 7・4と14・3から取られている。

※2 『ものみの塔』1999年1月1日号15頁へ1999年1月1日号15頁 参照

た気がした（その後成員は一九七七年に十八人にまで増え、一九九八年現在では十人に減っている）。※³ しかし、いざ会議に参加し始めてみると（統治体の会議は毎週水曜日に開かれる）、思っていたのとは随分違うものであることがわかった。

当時の統治体では、司会者を交代で受け持つことが決まったばかりで、その年の司会者はフレッド・フランス副会長だった。しかし議題は会長のネイサン・ノアが決めた。統治体で話し合うべきだと思ったことを何でも会議に持つてくるので、大概の場合、我々はその場になって初めて議題を知るのだった。

あちこちの国で旅行する代表者に推薦された人のリストを吟味するだけの会議が何週間も続いたこともあった。候補者の名前、年齢、バプテスマを受けた日、「油そそがれた者」であるかどうか、全時間奉仕に何年携わったか、というようなことが順次読み上げられていくのである。候補者たちを個人的に知っていることはまずなかったで、これは名前のリストを読み上げていくというに過ぎなかった。例えばスリナム、ザンビア、スリランカといった国の候補者リストが読み上げられるのを聞き、そのしかるべき地位にふさわしいかどうか投票で決めるのである。※⁴ メン

※³ 私が就任した当時の十一人は、ネイサン・ノア、フレッド・フランス、グラント・スター、トマス・サリバン、ミルトン・ヘンシェル、ライマン・スウィングル、ジョン・グロ（以上七人はものみの塔協会の代表理事、そしてウイリアム・ジャクソン、レオ・グリーンリー、ジョージ・キャンギヤス、レイモンド・フランスだった。サリバン、グロ、ノア、ジャクソン、スター、グリーンリー、キャンギヤス、フレッド・フランスの各氏は故人となっている。

※⁴ 会衆の長老は統治体直々の任命によると考えているエホバの証人も間違いないだろう。確かに始めの頃は、統治体のメンバー二人か三人が奉仕部門のメンバーと一緒に話し合っってアメリカ国内の長老の指名を行っていた。しかしまもなくこのやり方は廃止され、以降は奉仕部門のメンバーがこれを行なうようになった。アメリカ以外の国では、長老の指名ははじめから各支部が行っていた。以来、統治体によって指名されたポストといえ、アメリカ国内か国外かを問わず、旅行する代表者と支部委員だけである。これは、こういったポストにある人たちが、「統治体の代理」という、一般の長老よりも何か重要で、より大きな権力を持った地位にあることを示せるように、ということだと思つ。

バーの一人、トマス・サリバン（通例「バド」というあだ名で呼ばれていた）などは、その当時もう八十歳代で目もほとんど見え、健康状態も良くなかったのだが、こういった会議の最中に眠ってしまうことがよくあり、投票になるたびにこの人をゆり起こすというのにはやり切れないものがあった。何しろ本人は何の投票なのかほとんどわかっていないのである。時にはまた、会議が数分で終わってしまうこともあった。私が覚えているもので一つ、（最初の祈りの時間も含めて）七分しか続かなかったものもある。

また時としてノア会長は「問題ある手紙」、つまりこれこれの行ないをしたエホバの証人がどうすべきでしようかという質問が書いてある手紙を持ち込んできた。これに対して何がなされるべきか——例えば排斥に値するか、あるいはもう少し軽い処置を必要とするか、あるいはまた何もせずに済ますべきか——を統治体で決めるわけである。当時（そしてそれ以降一九七五年に至るまで）すべて決定は満場一致とされていた。話し合いがひとまず終わると動議がなされる。するとそれを支持する者が出て、最後に司会者が挙手を求める。時には動議に賛成しない人もいたもので、満場一致の決定が得られないこともある。その場合、通常は何らかの妥協案が出され、これで全員一致を得ようとする。

こういう場合の常として、大多数の意見に従わなければならないというある種のプレッシャーがあった。一人違った意見を持ったり、自分だけ独立している、あるいは調和を乱しているとみられることはあまりできなかった。賛成できないこともあったが、私は原則として皆の意見に合わせた。私が賛成しないので誰かが妥協案を出したような場合には、たとえそれでもまだ納得できないという時でも、譲歩して多数意見に合わせた。とにかく物事を滞らせず、さっさと決着を付け、次々に片付けていくためには、譲歩が必要であるような感じだった。しかしながら、譲歩してばかりもいられないような事柄が現れ始めたのである。

会議では次第に次のような議題を扱うようになっていった。子供が十八歳にしかならないのに結婚を認めるような父親に長老としての資格があるかどうか。子供が高等教育を受けるのを認めるような人に長老としての資格があるか

どうか。^{※5} 交代制の仕事をしていて（夜勤の時）会衆での集会に出られない人がいるが、その人に長老としての資格があるかどうか。長老は、不貞の状況証拠、あるいは夫が不貞を自分に告白したという妻の証言を受け入れるべきか。この場合、このことが聖書的な離婚、そして再婚を許すのに足るものか。不貞があった場合でも、離婚を求めているのが不貞をされた方ではなく、不貞を自ら行なった方であるような場合、離婚は聖書的に受け入れられるのか。^{※6} 不貞以外の理由で離婚してしまい、その離婚の後になって離婚前の不貞の事実が明らかになった場合、この離婚の正当性はどうなるか。また、その離婚の後には不貞があった場合、一体どうなるか。夫婦の二人のうち一方が不貞を行なった場合、不貞を行なっていない方が（その不貞について知っていないがらも）夫婦としての性的交渉を持った場合、この不貞を行なっていない方は相手に離婚を求めたり、他の相手と再婚したりする権利を失うか。伝道活動が違法行為とされた場合、罰金を払うのは正しいことか。あるいはまた一般にエホバの証人としての信条に忠実であろうとしたがために払うことになった罰金を払うのは正しいことか。^{※7} 食べ物その他の援助物資を、赤十字を通じて送るのは正しいことか（ここでの主な問題は、赤十字の十字が宗教的なシンボルであり、したがって赤十字組織も宗教的と言えなくもないことだった。この話し合いは極めて長引き、その翌週の会議にまで持ち越された。ある国々（例えばインドネシア）にもものみの塔協会がお金を送るに当たって、米ドルにとっては有利になるが、送付先の国では違法になるやり方で送金を行なっていることについて。また、ある国々に機材を送るに当たり、法律によって定められている重い輸入税を逃れることについて。労働組合に所属するエホバの証人が、デモに参加する代わりにストライキに参加し

※5 高等教育は信仰を失うものになり、不道德な行為に陥る環境を与えがちだという理由で、一般によしとされていないが、今でもその傾向がある。

※6 この時の決定は、不貞をしていなかった側が離婚を求める場合にのみ、その離婚は聖書的に認められるというものだった。

※7 このような場合に罰金を払うことは罪を認めたことになり、したがって信条に忠実でないことになる。よって罰金は払うべきではない、というのが当時の方針であった。その後この方針は変更になった。

たり、組合敷地を掃除したりすることは許されるか。エホバの証人が、実際には木綿畑で働くだけの軍の「徴兵」に
応じることができるか（これはポリビアから）。

以上は、私が統治体にいたはじめの二年そこそこの間に話し合われた事柄のほんの一部である。我々の下した決定
は、人々の実生活に極めて大きな影響を及ぼした。離婚に関することでも、会衆の長老たちは一種の宗教裁判所とし
て機能する。ある離婚の正当性についてこの長老たちが納得しなかった場合、その離婚に踏み切り、さらに後に再婚
をするような人は、排斥の対象になる。

カリフォルニアに住むあるエホバの証人の夫婦が大いに論議的となったこともあった。この夫婦の寝室に、いさ
さか普通でない性行為を扱った本や写真があるのを誰かが見たのである（この見たという人がどうやってこの夫婦の寝
室に入ったのか、よくわからない）。地元の長老の調査と尋問によって、この夫婦は、確かに単なる生殖器の結合とい
うにとどまらない性的行為も行なっていたことがわかった。^{※8} そこで長老たちはブルックリン本部に手紙を書き、
統治体ではこれについて話し合うことになった。この夫婦に、もしとるとすれば、いかなる措置をとるべきかを決定
するためである。

その朝、問題の手紙が我々の前で読み上げられるまで、会長を除いては誰もその件について考えていなかった。し
かし、二、三時間の話し合いの後、この夫婦は排斥という決定が下されたのである。これは以後、正式の方針となり、
同じような行為をする者すべてに適用されることとなった。^{※9}

これを明記した『ものみの塔』誌の記事が出ると、自分たちの夫婦生活においてそのような行為をしたことがある

※8 『ものみの塔』1969年12月15日号765、766頁へ1970年3月15日号188、189頁 掲載の記事では、このような性的行為について初めてかなりの長さ

にわたって書かれていた。この記事によって長老たちが敏感になっていたのは間違いなく、また、そもそも人の寝室のプライベートな事
柄についてこのような報告がなされるきっかけになったものと思われる。

※9 『ものみの塔』1972年12月1日号734、736頁へ1973年6月15日号382、383頁 および1972年11月15日号703、704頁参照

人は、その行為が双方の合意に基づいたものであろうと、一方だけが積極的に行なったのであろうと、長老に報告する義務を感じるようになった（一方だけが積極的だった場合、もしその人が報告しただけでなければ、積極的でなかった方が長老に報告するように求められた）。報告しないと、悔悟の念が見られない態度である、よって排斥に値する、となる。排斥になると、救いが得られる唯一の組織から切り離される、友人や親戚からも切り離されるという気持ちがあるの、どれほど言いにくくても長老に告白（あるいは報告）しなければ、という強い圧力がかかるのである。

先に述べた一九七二年の統治体の決定により、性的な行為に関する報告や告白を受けて、長老たちは数多くの「審理」を行なった。自分たちの結婚生活の極めてプライベートな側面について長老たちの質問に答えるに際し、女性たちはひどい恥辱を味わうことになった。どちらか一方がエホバの証人でない夫婦では、そのエホバの証人でない方がプライバシーの侵害であると言って強く抵抗し、事態が紛糾することが多かった。結婚が破綻し、離婚に至った例もあった。^{※10}

五年間にわたり、かつてなかったほど大量の手紙が寄せられた。そのほとんどが、統治体のメンバーが他人のプライベートな生活に首を突っ込むことの聖書の根拠に疑問を投げかけるもの、あるいは『ものみの塔』に載った記事の論法は理解に苦しむと訴えるものだった（根拠となっていた聖句は、ローマ人への手紙1章24―27節、同性愛について書かれているところであり、協会に手紙を書いた人たちは、どうしてこれが普通の異性夫婦間のことにあてはまるのかわからないとしていた）。また、特に妻の側から、自分たちの「前戯」が適正なものかどうかについて決められないで困っているという苦しみを訴える手紙が寄せられた。

ある女性は長老に相談したところ、統治体に「確実な答」をもらってはどうかと言われたので手紙を書いてきた。

※10 手紙担当の本部スタッフは、統治体に宛てて書いた一九七六年八月九日付のメモで次のように述べている。「現行の方針により、特に未婚者の「エホバの証人ではないの意」夫がいるケースにおいて本主に数多くの問題が生じています。妻の方がこのやり方で愛撫することもされることも懸命に拒むため、結婚生活が破綻に至っているのです。」

この女性は、自分と夫とは深く愛しあっており、実はこれこれの「ある種の前戯」をいつもしていて、「これは良心の問題かとは思いますが、はつきりさせたいのでお手紙を書かせて頂いております」というのであった。手紙の最後の部分はこうである。

「何だか恐くて傷ついた気持ちです。今回のことについては「夫の」真理への気持ちが心配です。……きつとどうすべきかをお教え頂けるものと思います。」

また別の、典型的と言えるケースもあった。ある長老が、はつきりさせておきたい問題があるのだがこれは『母』に相談するのが一番だろう」と考えた、と手紙を書いてきた。^{※11} その問題というのは自分の妻との性関係についてであり、「実際の性行為の前に行なう前戯を一体どの程度にとどめておくべきなのか」について自分も妻もよくわからないでいる、と言うのであった。この長老はさらに、「助言を頂いたらすべて言われる通り厳密に従います」とも書いていた。

こういう手紙を見ると、エホバの証人たちがどれほど底深い信頼を統治体に対して持つようになっていくかがよくわかる。統治体のメンバーはプライベートな事柄の細かなことについてもどの程度に「とどめておくべきなのか」を言ってくれるだろう、そして言ってくればそれに「言われる通り厳密に」従うのが当然だ、という信頼である。

協会からは数多くの回答の手紙が出された。遠まわしな言い方で、いささか歯切れの悪い規定をしながら、こういう前戯が許されないか、したがってどういうものなら許されるかを述べようとする回答が多かった。

協会の奉仕部門のメンバーが一九七六年六月に取った記録が残っている。これは（長老たちを交えて行なわれたセミナーの司会者から電話で相談を受けた時の記録である。この司会者は、自分のセミナーに出席していた長老の中に

※11 エホバの証人はよく自分たちの組織のことを「わたしたちの母」と表現する。これは『ものみの塔』1952年2月1日号80頁や1957年5月1日

号274、284頁などによっている。また『ものみの塔』1994年4月1日号32頁へ1994年4月1日号32頁も参照

結婚生活において禁じられている類の性的な行為をしていたことを告白した人がいるということで電話をしてきたものらしい。次のようにある。

「○○（司会者の名前）兄弟は、実際に口による行為があったのかどうか、当人に詳しく話を聞いた。（中略）『この司会者は』状況から判断して委員会の他のメンバーにも相談すべきだと思つたと伝え、たまたまセミナーに委員会のメンバー二人がいたため相談に行った。『この司会者は』他にどうすれば良いだろうかと言つた。（中略）そこでこの件について協会に詳しい報告書を書くのが良いのではないか、そうすれば今後このようなことがあつた場合にも指針があることになり、こちらにわざわざ電話をしなくても良かったら、という提案がなされた。」

これを見るとどのくらい微に入り細をうがつた尋問がなされたか、そしてどれほど本部組織がこの状況全体についてらみを利かせていたかがわかる。

統治体の規範から少しでもはずれたことがあれば長老に報告する責任があるという気持ち——これを当事者たちが本当に、神の前において、感じていたことは、手紙の数々を見るとわかる。中西部の州に住むある男性は、妻との結婚生活において統治体の決定事項に違反していたことを告白したので、長老たちはこれについて協会に報告することになった。当人も手紙を添えた。八週間が過ぎ、この男性は再度協会に手紙を書いて「不安と心配で、ほとんど待つことに耐えられません」と言つてきた。会衆での役目は、集会で祈ることも含め、すべて取り上げられており、「過去三十年間、奉仕と祈りをつくしてきたものが、週ごとに失われていくようです」と書いていた。そして、

「どうすればエホバの組織に顔向けできるのかについて、精神的に楽にしてくれるものが必要なのです。」

ですから早く返事をお願いします、と言うのであつた。

こういう問題には寛容に応じようという長老もいたが、これはブルックリン本部から叱責を受けるものになりかね

ない。例えば次ページに掲げる手紙がある。この手紙は協会の奉仕部門からある長老団に送られた手紙のコピーである（名前や細かな地名は消してある）。※12

面白いことに、長老たちの中には、統治体の見解は寛大に過ぎるのではないかという人もあった。アメリカのある長老からはこんな手紙が来た。

「年輩の兄弟の中には、統治体はもつと強い態度をとれるのではないか、性行為においてある種の体位をとることを禁ずることもできるのではないか、と言う人もいます……」

この長老は、後に自分の考えを次のように述べている。

「エホバはレビ記のこの章「18章」や他の章で性的行為について細かく述べておられるのですから、結婚した人たちが行なって良い体位と悪い体位について何も述べられていないというのは、どう解釈するべきなのでしょう。仮にエホバが、こういう夫婦生活上のプライベートなことについてはイスラエルの「裁き人」や「年長者」が取り締まり、違反者にはしかるべき措置がとられるべきだと思っておられたとすれば、そういう細かい点についても述べておられるはずではないでしょうか。」

協会の方針決定によって影響をこうむった人の中には、手術や事故によって正常な性機能を失った人たちもいた。そんな人たちからは落胆の声が聞かれることもあった。

ある男性は、性機能を失った後何年も性的な行為をやる方で行なっていたが、それが協会に禁止されてしまった。この人の言い分はこうである。統治体の禁止決定以前は、妻を喜ばせることができていたし、男性失格という気持ちで克服できていた。ところが、『ものみの塔』の見解に聖書の根拠があるとは思えないものの、妻はこれに従う

※12 このコピーはカーボンコピーなのでのみの塔協会のスタンプがない。SCEという記号によりこれを書いたのはブルックリン奉仕部門のマートン・キャンベルであることがわかる。

第3章 統治体

SCE:SSE

August 4, 1976

Body of Elders of the
W [redacted] Congregation
of Jehovah's Witnesses, M [redacted]
c/o [redacted]
W [redacted] M [redacted]

Dear Brothers:

We have a copy of the letter dated July 21 from the committee of the S [redacted] Congregation in California in which they write about matters involving J [redacted].

Please let us know if any of the elders in the congregation have been giving incorrect advice with regard to matters involving oral sex. If any of the elders in the congregation have advised married persons that it would not be improper for them to engage in oral sex, then on what basis was such counsel given? If wrong counsel was given, then let us know if appropriate steps have been taken to correct any misunderstanding on the part of individuals who were given wrong counsel and let us know if the elders concerned now are in agreement with what has been stated in the Society's publications with regard to oral sex.

If any of you brothers as elders have been advising individuals that oral sex would be permissible as foreplay prior to having actual sex relations, then such advice was not correct.

Thank you for your attention to the above matter. May Jehovah's rich blessing go with you as you endeavor always to care for your responsibilities as elders in an exemplary manner.

Your brothers,

cc: Judicial Committee of the
S [redacted] Congregation
of Jehovah's Witnesses, Ca

〈訳〉

SCE : SSE

1976年8月4日

エホバの証人のW……会衆長老団
……気付

親愛なる兄弟たちへ

こちらでは、カリフォルニアのS……会衆の委員会から、J……の件についての7月21日付の手紙のコピーを受け取っています。

もし会衆の長老がオーラルセックスについて誤った指導をしてきているようならばお知らせ頂きたいと思います。会衆の長老のうち誰かが、結婚している人に対してオーラルセックスを行なっても構わないという指導をしたことがあったとすれば、一体何を根拠になされたのでしょうか。もし誤った指導がなされたのであれば、そのような指導を受けた人たちの誤った理解を正すためにきちんとした処置がとられているのかどうかお知らせください。また、当該の長老が、オーラルセックスについての協会の見解に今では従っているのかどうかもお知らせください。

もしあなたが長老のうちの誰かが、実際の性行為に先立つ前戯としてオーラルセックスを行なっても良いという指導をしているのであれば、そのような指導は正しくありません。

以上連絡まで。あなたがたが長老としての責務を、他の模範となるよう、常に心して果たすに当たり、エホバの恵みがいつも共にありますように。

あなた方の兄弟より

本状コピー送付先 カリフォルニアS……会衆審理委員会

べきだと考えたし、自分も妻を愛する気持ちから従うことにした。自分は以前と変わりのない人間であるとかわかってはいながらも、結婚生活に深刻な影響が出るのではないかと心は千々に乱れている。神のご意志に何か「抜け道」のようなものがあって、何とか妻を喜ばせる満足を得られないものか、どうかお教えを乞う——と言っているのである。

こういう状況は、統治体の決めた事柄に違反する人間を取り締まる立場にある長老たちの良心に重くのしかかった。先ほどの長老は、手紙の最後をこう締めくくっている。

聖書の律法や原則については、エホバとキリストのご意志を表しているものだという心からの納得がなければ行使することができないように思います。実際に会衆で長老としての責務を果たすに当たり、聖書の律法や原則を適用する際にも、これはエホバの組織である、したがって何を言われても従うのが当然だというのではなく、これは聖書的に証明されており、正しいことであると自分で本心に信じているから従うようでありたいと思っています。パウロはテサロニケ人への手紙2章13節で、神の言葉を人の言葉として受け取らず、真に神の言葉として受け入れるようにと言っています。私はこれを信じ続けたいと思うのです。

この意見は注目に値する。今日であれば、これほど正直にはつきりと自分の意見を述べても良いと感じる長老は、それほどいないのではないか。

私個人としては、ここで問題となっている性的な行為が良いとは思えないが、それでも統治体の決めた排斥という処分には賛成でできなかった。だが私にはそれだけしか言えない。結局、いざ投票となった時には多数意見に同調してしまったし、この決定を支持する記事を書くようにと言われた時には途方に暮れたものの、それでもそれを引き受けて、統治体の決定に合わせ、要求されている通りに書いた。したがって先ほどの手紙の長老が言うような毅然とした態度に基づいて行動したとは言えない。エホバの証人の組織が地上における神の唯一の代行者であるという信念があったので、それほど良心の呵責を感じることがなかったのである。

この性行為問題に関する大量の手紙類が統治体に直接届くことはなく、すべて手紙担当者か奉仕部門のメンバーが

しかし、この問題をさらに注意深く比較考量した結果、聖書の明確な指示がないことを考え、こうした問題は夫婦が神のみ前で自ら責任を負わねばならない事柄であると確信するに至りました。また、夫婦間の親密な行為を規制したり、その事だけを根拠として排斥の措置を取ったりすることは会衆の長老たちの務めではないことをも確信するに至りました。^{*} もちろん、男性であれ、女性であれ、そうした問題に関する助言を求めて長老に近づこうと思うなら、それは一向に差し支えありません。その場合、長老は聖書の原則を当人と共に考慮し牧者として行動しますが、尋ねてきた人の結婚生活に関して事実上「警察」のように振る舞おうとはしません。

こうした見解は人々がならわしにしている様々な性行為すべてを大目に見るものである、などと解するべきではありません。決してそうではないからです。これは、聖書の示すところに従い、十分な根拠がないと思われる場合に、独断的な態度を取らないようにする、鋭い責任感の表われにほかなりません。それはまた、すべての事柄を神に対するように行ない、すべての業において神のすばらしい特質を反映したい、というエホバの民全体の願いに対して確信を抱いていることの表われでもあります。また、夫婦間のそうした親密な問題に関する判断を神とそのみ子の手によだねたいという気持ちの表われです。神とそのみ子は、知恵、および正しい判断に必要とされるあらゆる状況に関する知識をお持ちです。

（『ものみの塔』〈1978年6月1日号30、31頁〉）

ところが後に何度となく同じ事を言った時にはほとんど受け入れられることがなかった。ここでもいくつかを紹介したが、手元にある手紙の数々にこうして再び目を通してると、先ほどの訂正記事を書いた時の満足感というのはひどく空虚なものに感じられる。訂正記事の内容いかんに関わらず、統治体の最初の決定が人にもたらした困惑、狼狽、心痛、痛恨の念、そして結婚生活の破綻といったすべてを償うことなどでははしないからである。その決定というの、ただ「冷静」に問

対応していた。しかし統治体のメンバーたちも、あちこちで話を聞いて、統治体は他人のプライバシーートな事柄に不当に立ち入っているのではないかという疑問を持っている人が多いことはわかっていたはずである。

五年の後、この問題が再び議題に上った際には排斥処分の方針は取りやめになり、統治体は他人の性生活にこれ以上首を突っ込まないことになった。この変更を伝えるため、この時もやはり私が記事作成を命じられた。組織が誤っていたことを、はっきりとはないにせよ、ある程度認めることができることに自分としては満足を感じた。

この記事は『ものみの塔』誌1978年2月15日号30、32頁へ1978年6月1日号30、31頁に掲載された。

実のところ、私は統治体にもつてこられる問題すべてについてこう感じていた。統治体として裁決を下す事柄のほとんどについて、そんな独断的な立場はおよそ聖書に基づいていないのではないかと感じていたのである。この時には統治体にこの見解が受け入れられた。ところが後に何度となく同じ事を言った時にはほとんど受け入れられることがなかった。

ここでもいくつかを紹介したが、手元にある手紙の数々にこうして再び目を通してると、先ほどの訂正記事を書いた時の満足感というのはひどく空虚なものに感じられる。訂正記事の内容いかんに関わらず、統治体の最初の決定が人にもたらした困惑、狼狽、心痛、痛恨の念、そして結婚生活の破綻といったすべてを償うことなどでははしないからである。その決定というの、ただ「冷静」に問

題を受け止め、何の予備知識もなく、またよく考えてみることもなく、特別な祈りもしなければ特に聖書を調べることもなかった男たちが、何時間もかけずに下したのである。この決定が全世界レベルで五年間にわたって力を持ち続け、多くの人たちに一生消えない影響を与えた。こんなことは何一つ起こる必要はなかったのである。※13

他にもこれに似た問題があった。南アメリカに住むエホバの証人で、夫が別の女性と関係を持ってしまったという人がいたのだが、ここでの問題は、この当事者である男性いわく、この関係というのが先ほどの話にあった類のものだったこと、特にこの場合、性器によらず肛門による交接だったことだった。

統治体で話し合った末、これは姦通にならないという結論になった。姦通というのは「妊娠の可能性があるような」性器による交接がなくては成り立たないというのである。この男性は問題の女性と「一体と」ならなかった、したがって聖書的な離婚・再婚が認められないという理屈である。

決定に際しては全員一致が必要であり、私も皆にならった。しかし、この女性がこんな罪深い事をした男から自由になれないのだと思うと、本当にいたたまれない気持ちになった。さらにまたこの決定によれば、他の男と同性愛関係を持った夫や、あるいは動物と性関係を持った夫ですら、聖書的には離婚を認めることができないことになる。ど

※13 私 が統治体を辞してから何年かの後、協会は事実上かつての方針に戻った。『ものみの塔』1983年3月15日号30、31頁へ1983年6月15日号30、

31頁は、会衆の成員の夫婦生活に関わるプライベートな事柄を「警察官のように監視」するのは長老の務めではないとしながらも、結婚したメンバーで、「倒錯した性関係」とされていることを勧めたり行なったりしている者があれば、長老その他の協会の任命による地位を持つ資格がないばかりか、「会衆から追放される結果にさえなりかねません」という。一九七二年の方針が統治体の決定によって無効になった際、ロイド・バリーは不在だったが、戻ってくるとこれに不満を表明した。このロイド・バリーは執筆部門のリーダーであり、『ものみの塔』記事作成の監督であることを考えると、協会がかつての方針に舞い戻った背景にはその影響力もあっただろうと思われる。いずれにせよ、この一九八三年の記事は、かつて一九七二年の記事がもたらしたような審理の渦を巻き起こすことはなかった。これは多分、かつての苦い経験から長老たちも尋問を少し差し控えるようになったことによるものであろう。

う考えても男性が他の男性や動物と、妊娠の可能性がある形で「一体と」なることなどできないからである。そして実際その年の『ものみの塔』誌はまさにそのように定めているのである。^{※14}

この時にはあまりにもいたたまれず、マタイ19章9節に使われている原語（ギリシャ語）について調べることにした。協会の『新世界訳』ではイエスが次のように言っている。

「あなた方に言いますが、だれでも、淫行以外の理由で妻を離婚して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すのです」

ここでは「淫行」と「姦淫」という二つの違う言葉が使われているが、『ものみの塔』出版物は、長年にわたって、この二つの言葉は本質的には同じものを指すという立場をとっていた。「淫行」とはすなわち男性が妻以外の女性と姦淫を犯すこと（あるいは女性が夫以外の男性と姦淫を犯すこと）だということである。ここで私は自問した。二つの言葉がどちらも同じ姦淫を意味するのであれば、なぜマタイは、イエスの言葉を書き留めるに当たって、わざわざ二つの違う言葉（「ポルネイア」と「モイケヘイア」）を使ったのか。

ベテルの図書室にある聖書の翻訳、聖書事典、注釈書、辞典の数々を調べていくと、その理由は明らかになった。ほとんどの本を見ても、ギリシャ語のポルネイア『新世界訳』で「淫行」と訳されている言葉は非常に意味の幅の広い言葉であって性的不品行すべてを指すとなっていた。だからこそ多くの聖書の翻訳ではこれが単に「不品行」「性的不品行」「猥褻」「不貞」などと訳されているのである。^{※15} このポルネイアは同性愛者の性関係も指すことも辞典類を調べると明らかになった。何よりも決定的だと思ったのは、聖書の中でも、ユダ7節で、ソドムとゴモラでの同性愛行為を指すのにポルネイアが使われていることであつた。

※14 『ものみの塔』1971年1月1日号31、32頁へ1972年4月15日号254、255頁 参照

※15 マタイ19章9節に見られる「姦淫」のギリシャ語、モイケヘイアの方には、「姦淫」という言葉が普通に指す通りの、限られた意味しかない。

私はこの結果を十四ページの報告書にまとめ、統治体のメンバー全員に一部ずつ渡すべくコピーを作った。しかしどう思われるか不安だったので、フレッド・フランスズのところに行き、自分の調べたことを説明した上で、これが皆に受け入れてもらえるかどうか心配なのだが、と聞いてみた。「厄介なことはないだろう」という返事だった。ただその一言だったが、言葉には自信が感じられた。自分の調べた結果を見たいかと尋ねると、いや別に構わない、別に「問題ない」と思う、と言った。

私の調べたことのいくつかについてはその前からすでに気づいていたような感じだったが、どれぐらい前から気づいていたのかは見当がつかなかった。フレッド・フランスズは『新世界訳』の翻訳チームの中心人物だったのだから、ボルネイア（淫行）の本当の意味については少なくとも聞いたことがあるはずだと思った。^{※16}

これは統治体の会議にかけられた。私の報告書は受理され、フレッド・フランスズは支持を表明した。変更を伝える記事を『ものみの塔』に書くのは私の仕事になった。^{※17}

今でも覚えているが、この記事が出て少したった頃、あるエホバの証人から手紙が来た。この人は、その数年前に夫が動物と性関係を持っていたことを知った時、「こんな男とは一緒に住めない」ということで離婚した。後に再婚したが、その時点で会衆はこの女性が「聖書的に許されない」ことをしたというので排斥処分にした。この女性は、今や見解が変わったのですから、排斥によって失った名誉を取り戻すわけにはいかないでしょうか、と言うのだった。私はただ、今回の記事によってあなたの名誉は取り戻されたことになるでしょうと書き送るしかなかった。

※16

『新世界訳』へここでは英語版のこゝには訳者の名前は記されておらず、「新世界訳委員会」の仕事であることになっている。この委員会には他にネイサン・ノア、アルバート・シュローダー、ジョージ・ギャンギヤスがいた。しかし、聖書の言語について、この種の翻訳をするための知識があるのはフレッド・フランスズだけだった。フレッド・フランスズは、シンシナティ大学でギリシャ語を二年間学んでいたが、ヘブライ語は独学だった。

※17

『ものみの塔』1972年12月15日号766-768頁へ1973年3月1日号158、159頁 参照

この場合も、組織の誤りを認め、それを正すことについてはそれなりの満足を感じたが、かつての見解が長年にならたつて、多くの人々に――どれほど多くの人々かは、それこそ神のみぞ知る――与えた傷はいやせないことを思わずにはおれなかった。

事実上、当時の統治体は司法裁判所であり、決定事項がすべてのエホバの証人にとっては法律同様になるという意味では立法機関でもあった。聖書時代のサンヘドリンがそう呼ばれてもおかしくなかった通りの、まさに「統治」体であり、機能も似ていただろう。かつて、エホバの名に関わるような重要な問題がエルサレムのサンヘドリンに持ち込まれていたが、これと同様のことが、ブルックリンにあるエホバの証人の統治体にも当てはまるわけである。

しかし統治体が行政・運営機関だったとは言えない。運営に関する権威と責任の一切は協会会長のネイサン・ノアにあったからである。これは私にとって意外だった。というのは、私が統治体のメンバーに任命されたのと同じ年、フレッド・フランス副会長が統治体の役目をもみの塔聖書冊子協会の役目と比べつつ述べていたのである。この時の講演は後に『ものみの塔』1971年12月15日号へ1972年3月15日号にも掲載された。これは「下克上講演」とも呼ばれるが、極めて大胆にして率直な言葉が使われており、協会は統治体の使っている「管理機関」に過ぎず、単なる「一時的な機関」であると繰り返し言われる（754、760頁へ179頁、184頁）。

世界的な福音宣明に携わるこの組織は、ハルマゲドンにおける「全能の神の大なる日の戦闘」で今や滅びをこうむろうとしている現代の人間製の諸政府の法律のもとで必要とされるいずれかの法人団体に適合するように作られたものではありません（黙示、16・14―16）福音宣明に携わるその組織は地上の法人団体によって作られたり統治されたりするものではありません。むしろ、その組織がそうした法人団体を偉大な神権統治者のわざにとつて有用な単なる一時的な機関として統治します。したがって、それは組織に對する神の計画にしたがつて形作られ、傘下^{さんか}の成員から上に支配がおよぶのではなく、首位者なる神から下に支配が行きわたる神権組織です。その組織の献身してバプテスマを受けた成員はまさしく神権政治のもとにあります。地的な法人諸団体は、その設立を許

可した人間製の諸政府がまもなく消滅するとき、消失してしまいます。

それで、協会の表決権を持つ会員は、統治体の成員を協会の理事会に加えることによって、この統治体がその「管理機関」を「忠実で思慮深い奴隸」級のわざのための器として最も直接的に行使できるよう取り計らっています。それら会員は、当協会は管理部ではなくて、物事を管理するための単なる機関にすぎないことを認めているのです。

したがって、協会の表決権を持つ会員は、争いや分裂のもととなる事がら何もないようにと願っています。つまり、「管理機関」がその行使者、すなわち「忠実で思慮深い奴隸」級を代表する統治体を支配したり、さしずしたりするような事態の生ずるのを欲しませんが、つまり、下克上といった事態が生ずるのを欲しません。カイザルの法律にのっとった宗教法人がその設定者を支配したり、さしずしたりしようとするようなことがあってはなりません。むしろ、その宗教法人の設定者が同法人を支配し、さしずをすべきです。

ここで使われている比喩表現から、この講演は「下克上講演」と呼ばれることもある。ここには実に力強い言葉が使われている。しかし問題は、現実がこれとはまったく反対であることだった。

統治体は、協会を統制してなどいなかった。この副会長による講演の当時はもちろん、これが記事になった時も、それどころかその後四年間も、統治体が協会を統制することはなかった。

統治体による統治は後になってやっと実現したが、これも感情のぶつかりあいと激しい対立の渦巻く大変な紆余曲折の末である。今日のエホバの証人には不思議と思われるかもしれないが、先ほどの引用にあったような形での統治体は、組織の全歴史を通じて、まったく存在していなかった。これが成立するまでには九十年がかかっている。今ある姿ができたのは一九七六年一月一日である。すなわち協会の歴史全体から見るとその五分の一にも満たない期間しか存在していない。こう言える理由、これが事実である理由を以下に説明しよう。

君主三代

「知つての通り、世においては支配者が民の上に立ち、権威の重みを感じさせる。しかし、あなたの方の間でそうあつてはならない」 マタイ 20・25、26 『新英語訳聖書』

エホバの証人の歴史が記録として残り始めるのは、特に一八七九年七月一日に『ものみの塔』誌第一号が発行された時からである。ものみの塔聖書冊子協会という団体は一八八一年に設立され、一八八四年に法人となった。確かに、当時は、この協会が協会関係者の統治体を（副会長の言葉を借りれば）「形作り、統治し、支配し、管理する」ようなことはなかった。そもそも「統治体」というものが存在しなかったのだから、当然そんなことが成り立つ余地がなかったのである。

チャールズ・テイズ・ラッセルは『ものみの塔』を自分の雑誌として創刊し、編集者もラッセル一人だった。ものみの塔関係者は、生前のラッセルを自分たちの唯一の宗教的指導者として認めていた。もちろん協会ができることと理事というものが生まれたが（ラッセルの妻マリアもその一人であった）、これは統治をする役目を持つとは思われていなかったし、事実持っていなかった。ところが『ものみの塔』1971年12月15日号760、761頁へ1972年3月15日号184頁には上記のようである。

統治体はどのようにして存在するようになったか

このような統治体は近年どのようにして登場したのですか。明らかにエホバ神とそのみ子イエス・キリストの導きの下に登場しました。諸事実からすれば、統治体はペンシルベニア州のものみの塔聖書冊子協会と提携したことがわかります。十九世紀の最後の四半世紀間、C・T・ラッセルは明らかに当時の統治体の成員でした。

（『ものみの塔』〈1972年3月15日号184頁〉）

ラッセルの生前にもものみの塔に関わるようになり、その当時の実情を知っていたフレッド・フランズが、このようなことを「諸事実からすれば」として書いたというのが私には理解できない。この「諸事実」に照らしてみると果たしてどうなのであろうか。

まず、協会理事については、1894年4月25日付の『シオンのものみの塔』特別号59頁でラッセル自身が述べている。

一八九三年二月一日までに私並びにラッセル姉妹は表決権株総数六千三百八十三株のうち三千七百五株を所有しています。そこで当然ながら、この二人が役員を選任し、協会を統括するものとします。これは、事のはじめより理事各位の合意するところであり、またこれによって我々の死後、役員が重要な役割を持つであろうとの理解が得られたのであります。^{※18}

ラッセルは、理事であろうと（他の誰であろうと）、自分と共に統治機構を作る者がいるとは思っていなかった。これは、ラッセルが常に従っていた行動指針から明らかである。『ものみの塔』1923年3月1日号68頁にはこのようにある。

よく「あの忠実にして智き僕とは誰なのですか」と聞かれて、ラッセル兄弟はこう答えたものです。「私だと言うものもあるし、この協会だと言うものもある。」

この記事はさらに続ける。

どちらも正しいのです。ラッセル兄弟は、極めて絶対的な意味で協会そのものであります。すなわち、地上にいる誰に気を使うこともなく協会の方針を決定し、進めていったのです。時には協会関係者の助言を求め、提案に耳を傾けることもありましたが、しかる後は自分の判断に従い、主が自分にこうさせようとなさっていると信じて行動したのです。

一九〇六年、『ものみの塔』読者からの質問に答えてラッセルは次のように書いている。

神の代弁者として私が述べる真理は、夢や幻に啓示があったものではなく、神の声が聞こえたものでもなく、また一度に得られたもの

※18 ラッセル夫人は、夫との意見の不一致がもとで一八八六年一〇月に『ものみの塔』共同編集者を辞任しており、一八九七年一月九日には別居している。それでも一九〇〇年二月二日まで協会理事だった。その後一九〇六年に離婚した。

でもありません。特に一八七〇年より、とりわけ一八八〇年より、徐々に現れてきたものなのです。この真理の顕現は、人の才能や優れた知覚によるものでもなく、単に神の時が満ちたことによるのです。もし私が黙っており、他の代行者もいなかったとしたら、まさに石が叫び出すことでしょう。※19

自分自身が「神の代弁者」であり、真理啓示の代行者であると信じていたのであれば、統治機構など必要ないと思っていたとしても無理はない。この記事の翌年、ラッセルは「遺言と誓約」を書いている。これは一九一六年にラッセルが死去した後、『ものみの塔』1916年12月1日号に掲載された。この遺言は、ラッセルがいかに『ものみの塔』誌を牛耳っていたかをこの上なく端的に示すものなので、その全文を巻末に付してある。ここではその第二段落だけを見ることにしよう。

しかしながら、私が『シオンのものみの塔』、『古神学季刊』、及び『千年期黎明』双書、並びにその他の冊子や賛美歌集の版權をものみの塔聖書冊子協会に贈与するに当たっては、それら出版物の利益については私の存命中は私がすべてこれを管轄し、私の死後は私の希望通りに取り計らわれるというはっきりした理解があった。これに鑑みて、以下にその希望を遺言として記す。

ラッセルは『ものみの塔』誌を協会に（法人となった一八八四年に）贈与したのではあったが、その後も、それどころか自分の死後でさえも、自分の思い通りに出版されるべき自分の雑誌であると考えていたことは明らかである。死後は自らの指名による五人からなる編集委員会が『ものみの塔』誌の編集責任をすべて持つようにと指示した。※20 また、自分の表決権株を自らが受託者として指名した女性五人に残した上、もし編集委員会のメンバーの誰かが告発されるようなことがあれば、この五人の女性たちが他の受託者（これは理事のことであろう）及び編集委員会の他のメ

※19 『ものみの塔』1906年7月15日号229頁。

※20 ラッセルはこの五人にラザフォードを入れていない。ラザフォードは、この五人の予備人員のグループ五人に入っている。

ンバーと共に審理委員会を結成し、その告発された編集委員についての審議を行なうとも定めている。※21

こう見てくると、ラッセル一人をグループとは呼べないので、ラッセルの生前、つまり一九一六年まで、統治機構はまったく存在していなかったことがわかる。ラッセルの後継者ラザフォードが会長になってからも同様である。編集委員会のメンバーや理事たちがそういう統治機構になるのではないか、とも思われるかもしれないが、これが残念ながらもったくの見当違いであることは事実関係を見るとわかる。

一九一七年一月に開かれた協会の年次総会で、ラッセルの後任の会長としてラザフォードが選出された。それからまもなく、理事七人のうち四人（すなわち過半数）が、会長はあまりにも独断的ではないかと異議を唱えた。ラザフォードは理事を理事として認めておらず、何か物事を進めてしまった後になってから決めたことを一方的に理事の方に伝えるやり方をしていた。理事の方は、これは「忠実にして智き僕」たるラッセルが言い残してくれたやり方とはずいぶん違うのではないかと反対意見を述べたわけである。ところがその結果速やかにお払い箱となった。※22

まずラザフォードは、この理事たちが、終身理事としてラッセル直々の指名を受けているとは言え、かつて年次総会でこの四人の地位が確認されたことがなかったことに目をつけた。当時有力な本部スタッフだったA・H・マクミ

※21 一九五九年発行の『神の目的とエホバの証人』64頁によると、法的にはラッセルの表決権は死後無効になったとある。

※22 この典型は、ラザフォードが『終了した秘義』という本を出した時である。この本は「ラッセルの死後出版」とされていたが、実際にはクレイトン・ウッドワースとジョージ・フィッツシャーが書いたものである。ラザフォードはこれを書くことについて事前に理事たちに相談しなかったどころか、理事の方は「ベテル家族」と呼ばれる本部スタッフにその本が公開されるまで、出版されるということすら知らなかったのである。後のものみの塔関係の出版物、例えば『神の目的とエホバの証人』70、71頁などには、この出来事こそが、問題の四人の理事が反対意見を述べるそもその原因になったような書き方がしてあるが、これは事実ではない。ラザフォードがこの四人を理事からはずすという通告をしたのは、『終了した秘義』を本部スタッフに公開したのと同じ日（一九一七年七月一七日）なのである。さらに言うところ、時間的にこの解任通告は本が公開される前になされていた。

ランによると、ラザフォードは外部の弁護士とも相談した上で、これをもとに四人を解任できるだろうという結論になった。法律上は問題ない、というわけである。^{※23}

ラザフォードは打つ手を選べる立場にいた。一つは理事会の過半数が唱える異議に耳を貸して改善案を見いだす、という手（もしこの問題の四人のことを、先に紹介した一九七一年の『ものみの塔』に書かれていたような「統治体」の過半数だと思っていたならば、道義的に見てそうせざるを得なかったであろう）。もう一つは、先ほどの法律上の急所を利用して、会長の権限によって自分に反対するこの四人を解任する、という手。

ラザフォードはこの二つ目の手を選び、自分で選んだ理事を後任に据えた。

編集委員会の方はどうであったか。『ものみの塔』1938年6月15日号185頁には、一九二五年に編集委員会の過半数が「国家の誕生」（これは一九一四年に「王国が機能し始めた」ことをいう）という記事を出版するのに「猛反対」した、とある。そして、会長に反対した委員たちがどうなったかについては、次のように述べている。

……しかし、主の恵みにより、それ「問題の記事」は出版されたのです。これはまた編集委員会の終結を告げるものでもありません。すなわち主がご自分の組織を自ら指揮していることを示す出来事だったのです。

こうして編集委員会は消されてしまった。ラザフォードはこのように反対者をすべて消していき、組織を完全に自分の管理下においていった。

この間ずっと興味深いことが起こっていた。『終了した秘義』（一九一七年のもめごとの争点のみならず、『ものみの塔』誌も口をそろえて、ラッセル師こそが聖書に予言されている「忠実にして智き僕」であり、主人が「自分の全

※23 マクミラン『信仰の行進』(A.H. MacMillan, *Faith on the March* (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., 1957)) 80頁参照。この本の序文はノアが書いている。

財産を管理させる」者であると説き続けていたのである。^{※24}これが全成員の完全服従を求めるためだったことは、以下に紹介する『ものみの塔』1922年5月1日号132頁によく表れている。

忠実さは忠節心

忠実であるというのは、忠節心を持つことです。主に忠節であるというのは、主に従順であることです。主の選ばれた機関を捨てたり否定したりすることは、主を捨て、かつ否定することです。主人に使われた召使いを拒絶する者は主人その人を拒絶することになるのと同じことです。

現在の真理にある人はすべて直接的にせよ間接的にせよラッセル兄弟の奉仕活動によって神の計画についての知識を得たのです。預言者エゼキエルを通じてエホバは来るべきある僕の職務についてお示しになりました。この僕は亜麻布を着、物を書く墨壺をつけている者で、苦しむ人たちに神の偉大な計画を伝えてその目を開かせるべく町（キリスト教世界）へ出ていくようにと遣わされる者であるとされています。これは人ではなく、神のご厚意なのです。ただ主の手はずに基づいて、人をお使いになっただけなのです。神の恵みによりこの職務を担うことになったのが、ラッセル兄弟だったのです。

また、「忠節の証」と題された記事において、『ものみの塔』1923年3月1日号68、71頁はラッセルの教義と方法論に従うことは主の意志に従うことと同じであるとしている（傍線筆者）。

現在の真理の喜びにある人たちは、ラッセル兄弟が主の特別の職務を忠実に果たし、主に全財産の管理をまかされたことを認めることでしよう。

仲間の召使いたちは皆それぞれの能力を示し、主のお示しになった方法の通りに主の収穫の業に携わることを通じて主の意志に喜びをもって従い、これによりさらにその能力を高めてきました。この方法というのは主がラッセル兄弟を使って示された方法なのです。ラッセル兄弟こそあの「忠実にして智き僕」の職務に就いたからです。ラッセル兄弟は主の業を主の方法で行ったのです。ラッ

※24 『終了した秘義』4、10頁、『ものみの塔』1922年3月1日号72、73頁、1922年5月1日号131頁、1923年3月1日号67、68頁参照

セル兄弟が主の方法で奉仕につとめたのであれば、他の奉仕のやり方はすべて主の方法に逆らうものであり、したがって主の王国のためになることを求める忠実な方法ではないことになります。

論旨は極めて明確である。この「主人の全財産の管理をまかされた」者（つまりラッセル）の教えと方法に共鳴して忠実に従うか、それともキリスト・イエスを退けるといふ罪を負って背教者となるか、二つに一つ。人間の権威に従うようにという呼びかけがこれほど強いのも珍しい。

ところがラッセルの死後何年かの間、つまり以上のようなことが言われていたまさにその間に、新会長ラザフォードは、ラッセルが生前言い残していた取り決めや、管轄をまかせるために指名した人たちを無視していたのである。ラッセルの「遺言」にあった事柄は法的に無効であるとされたし、また道義的にも従う必要はないとされたらしいことが、『ものみの塔』1931年12月15日号376頁に見られる（傍線筆者）。

イエスの預言の言葉に関するよく知られた事実は次の通りです。一九一四年にエホバはその王座に王を迎えました。続く三年半は、王国への呼びかけに答えた者たちが利己的な者かどうかを見極める期間でした。一九一六年にもものみの塔聖書冊子協会の会長が亡くなりました。「遺言と誓約」と題された署名入りの書類が見つかりましたが、これは実際のところ遺言状ではありませんでした。つまり、ラッセル兄弟は、死の何年も前から遺言状など作成できないと決めていたらしく思われるのです。神の組織の業は、人間が統制したりできるものではありませんし、誰の遺言で統制するものでもありません。したがって、主の栄光と榮譽のためにある協会の業を、あの「遺言」と題された書類に書かれた通りに実行するなど、できない相談だったのです。

このわずか八年前、「主の経路」たる『ものみの塔』は、ラッセルこそが「主の業を主の方法で行った」のであり、したがって「他の奉仕のやり方はすべて主の方法に逆らうもの」と書いていた。『ものみの塔』はラッセルこそが「忠実にして智き僕」であると繰り返し主張していたのである。ところが八年経つと、そのラッセルの意向をラザフォードが無視しているのではないかと反対意見を述べる者は、悪意と敵意に満ちた悪の手先と呼ばれることになる。

しかしこの群をなして離れていった者たち、あるいは拒絶された者たちは、自分たちの兄弟に向かって、まさに泣き叫んだり歯ざしりしたりしています。「ラッセル兄弟の遺言がないがしろにされている、あの指示通りに『ものみの塔』が出されていない」と言い、主の地上における組織が一人の人間の遺言通りに使われていないというので、大げさに恐れたり、見せかけだけの涙を見せたりしています。つまり、こういった見せかけの理由をもとに嘆き悲しんで見せているのです。泣き悲しみ、不平を言うのは、協会を思い通りにできないからです。そして主の業にいそむ人たちに向かって歯ざしりをし、かつて兄弟とまで呼んだ人たちに、悪意と敵意に満ちたあらゆる嘘の言葉の数々を投げつけるのです。ユダはこういう人たちについて述べており、このような嘆き悲しみは主イエス・キリストがエホバの神殿に裁きのためにやって来られる時に始まる、と明記しています。ユダは言います。「彼らは不平をならべ、不満を鳴らす者であり、自分の欲『すなわち手前勝手な欲望』のままに生活し、その口は大言を吐き『すなわち自分たちが神の選ばれたる者だと言って』、利のために人にへつらう者である『要するに、このような者たちは、人にへつらって自分たちもへつらいを求めています。ユダがここで言っていることにびったり一致した行ないです』。この連中は、ラッセル兄弟という人間に大きな愛情を持ち、傾倒しているように見せかけていますが、実際には手前勝手な利益が目当てでそうやっているのが見え見えなのです。聖書にこう書いてあり、また主がその民にそれをわからせてくださる、これはひとえにこのような悪の手先は避けるようにということなのです。〈聖書引用は口語訳より〉

これほど一定せず、ころころ変わる方針というのはいかがなものであろうか。それでも、この団体こそ主イエス・キリストが地上の民に指示を与えるための唯一の経路として認めたものだとして認めていたのである。

一九二五年までにラザフォードは協会を実質上完全に牛耳り、その後も支配力は強まるばかりであった。^{※25}

この支配力は、世界中の会衆に霊的な食物を与えるための『ものみの塔』をはじめとする出版物の内容にも及んだ。

※25

マクミランの『信仰の行進』152頁には次のようにある。「ラッセルは、我々がそれぞれの責務をいかに果たすべきかという事については、個人の裁量にまかせていたところが大きかった。……一方ラザフォードは宣教の業を統一化しようとした。個人がそれぞれ自分で正しいと思うところを述べて行動するという事は許さず、徐々に自身が協会のスポークスマンとなっていくのだ。ラザフォードは、こうすれば意見の不一致なく、きちんと物事が伝わりと考えていた。」

ある日おじのフレッド・フランズが自分の仕事部屋でこんな話をしてくれた。ラザフォードがある新しい論点を持ち込んでベテル家族のメンバーと話し合ったことがあった。^{※26} その時、聖書に基づいてその新しい点は納得しかねるのだからと言った。ところがその後ラザフォードはわざわざこの点を支持する記事を書くようにと直々に申し渡したのである。それは聖書的ではないとはっきり言っていた本人に向かってである。

やはりフレッド・フランズがまた別の時に語ってくれたことがある。後年になって「判事」（ラザフォードのこと）は、『ものみの塔』に出す記事は預言あるいは宣教の業に限るものにと決まっていたというのである。したがって、何年もの間、愛、親切、憐れみ、忍耐などに関する記事は『ものみの塔』に掲載されなかった。

以上見た通り、ラッセルとラザフォードが会長であった六十年近くの間、二人ともそれぞれに自分の特権を行使していたのである。統治機構あるいは統治体などというものは影も形もなかった。

一九九三年、協会では組織の歴史をたどった新しい書籍を発行した。これは『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』で、それまでの『神の目的とエホバの証人』に代わるものである。「客観的」で「ありのままの」記述だということになっている。^{※27}

ほとんどのエホバの証人は過去の記録を見ることができないし、また協会がいかにして今日に至ったかを直接知っているわけでもない。権力中枢が行なうこと、つまり権威の座にある者たちが行なうことの数々もやはり知られないままである。したがってこれを読むエホバの証人は、この公平にして「ありのままの歴史」とやらを基本的には受け

※26 この問題の論点というのは、ローマ人への手紙13章1節にある「上に立つ権威へ口語」というのは地上に存在する政府の権力ではなく、エホバとイエス・キリストを意味することについてか、あるいは長老団を廃止することについてだった。そのどちらであったのかは覚えていない。

※27 『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』の「序文」参照

入れるしかないわけである。

しかしこれほど「手が加わって」いて「客観的」ではないものも珍しい。この『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』に書かれている組織の歴史や方針は、現実とはずいぶん違う。それは、ラッセル、そしてラザフォードが会長だった頃についての記述にも見られる。

まず、マタイ24章45―47節の「忠実にして智き僕」について、この『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』では、チャールズ・テイズ・ラッセルが選ばれた「忠実にして智き僕」だったという見方を『ものみの塔』誌が「何年か」取っていたことをついに認める(142、143、626頁)。また、一八九六年以降はラッセル自身がこの見方を「妥当と思われる」としていたことを認める。しかし実のところラッセルは(まさにこの『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』が脚注で挙げている『ものみの塔』誌において、特別に選ばれた「忠実にして智き僕」が個人(自分自身に当てはまるというこの見方が「妥当」であると言ったばかりではなく、これこそが真の聖書の解釈であると論じていたのであり、単に一八八一年の昔に取られていた立場と言って済むものではないのだが、これは認めようとしなない。ただこの「忠実にして智き僕」は「キリストの体」全体であるという一八八一年のラッセルの言葉が強調され、誤解を招くようになっていく。

また、『ものみの塔』1909年10月1日号でラッセルは「忠実にして智き僕」という言葉が個人にではなく「キリストの教会におけるすべての成員」に当てはまると言う者は自分の「敵」だとも言っているが、この話も出てこない。さらに『ものみの塔』1916年10月16日特別号には、ラッセルはこの言葉が自分に当てはまると宣言はしないものの、「友人との会話ではそのように認めていた」と書いてあるが、この話も出てこない。

ラッセルの死後何年にもわたって『ものみの塔』がラッセルのことを「あの僕」だとしていた話はやっと出てくるが、これがどれほどの執拗さをもって言われていたかについてはまったく触れられない。実際は、例えば、神の計画

についての知識を持つ者は誰でも「自分の知識はラッセル兄弟の書き物に照らして聖書を研究したことによるのであり、それ以前には神に救いの計画があることすら知らなかった、と心から答えられなくてはなりません」とまで言っていたし、ラッセルの教えに疑いを持つ者は主の特別な僕を拒絶した者であり、したがって主を拒絶した者だと断言していた。^{※28}

また同様に、ものみの塔自身の教義による矛盾も説明しようとしな。一方には、一九一九年にキリスト・イエスが「忠実にして智き僕級」を確実に選び、是認したという目下の教義がある。ところがまた一方、そうして選ばれたはずの人たちは、一九一九年以後何年もの間、「忠実にして智き僕」が「級」ではなく、チャールズ・テイズ・ラッセルという個人だと信じていた。さらにラッセルが選ばれたのは一八七四年以来「臨在」していたキリストによってであり、したがって一九一四年よりも何十年も前だったと信じていたのである。

また、この『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』²²⁰、²²¹頁へ²²⁰ ²²¹頁では、二代目会長であるラザフォードが組織を完全に支配しようとした事実を何とか否定しようとする。カール・クラインの言葉が引用されており、ラザフォードは実際のところ根は謙遜で、幼い男の子のように神に呼びかけたことになっている。

ところが記録を見ると、ラザフォードに反対意見を述べた者は、理事であろうと編集委員であろうとすべて即座にその地位を追われている。ラザフォードが会長であった当時本部にいた人にちよつと話を聞きさえすれば、カール・クラインの言うような謙遜な人物像は現実のものではなく、ラザフォード「判事」の言葉はまさに法律だったことがわかるだろう。

私は、ラザフォードが会長であった最後の五年間、組織に関わっていた。この人が私自身に対して持っていた影響

※28 本書239―241頁参照 また、『クリスチャンの自由を求めて』78―84頁参照

は明らかであるし、また他の人たちが表明していた意見も知っている。今日のエホバの証人でそういう経験のある人はほとんどいない。しかし神の子はこう言う。「心の中のことを口は語る」「あなたの言葉によってあなたは正当とされ、あるいは裁かれる」(マタイ12・34、37)。誰でも一九二〇年代から一九四二年までの『ものみの塔』を普通に読んでみれば、謙遜などではなく、独断的な専制主義が記事にはつきり見られるのがわかるところで、またこれらの記事は主にラザフォードが書いたものだと思われているのである。方針であれ教義であれ、ラザフォードの率いる組織に疑問を持つ者に対しては見下したような、また乱暴でさえある言葉が使われている。

さらに、この『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』の同じ箇所で、ものみの塔関係者たちはラザフォードのことを「自分たちの指導者」だと思っていなかったことにしようとしている。ラザフォードは死の直前の一九四一年に自分が指導者であることを否定したというのがその根拠となっている。これは言葉だけのことであって、事実とは違う。

確かにものみの塔関係者はキリストこそが自分たちの目に見えない指導者だと思っていたが、同時にラザフォードこそが目に見える、地上の指導者だと思っていたのである(ちなみにこれはキリストがマタイ23章10節で「また『指導者』と呼ばれてもなりません。あなた方の指導者はキリスト一人だからです」と命じているところに反する)。ラザフォードにせよ、自分がそうに見られていることがわかっていなかったはずがない。

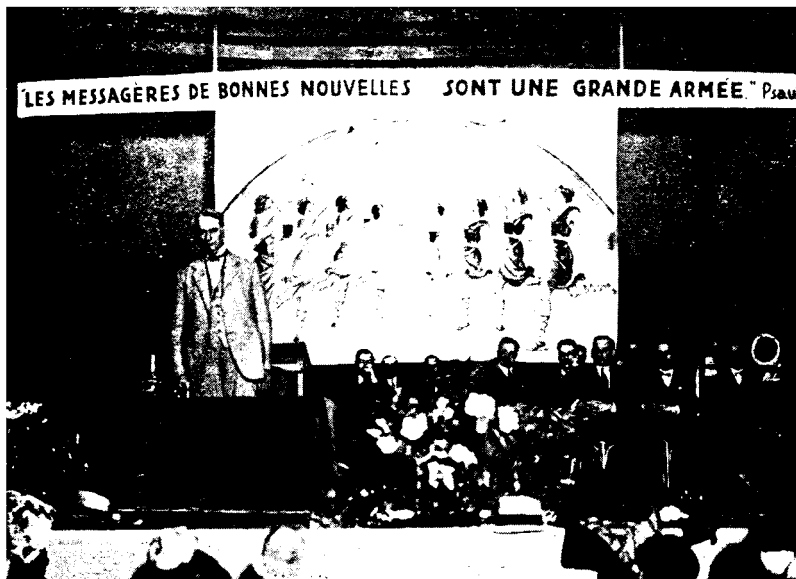
次ページの写真とその説明文を見て頂きたい。これはものみの塔の大会報告『メッセンジャー』1931年7月25日号に掲載されたもので、その年にヨーロッパの主要都市で開かれた大会の模様を伝えている。

はじめの写真はパリの大会のもので、ラザフォードのことを「目に見える指導者」と明記している。次の二つはそれぞれロンドンとドイツのマグデブルグからの写真で、ラザフォードが「チーフ」とされている。さらに次の写真では「大会の総司令官」とされている。

この大会報告が出たのは『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』が引用している言葉をラザフォードが発

The International European Conventions

*Planned by Brother Rutherford for the Convenience
of Our Brethren Across the Atlantic Who
Could Not Come to Columbus*



Their Visible Leader—About to Give Instructions to the Paris Division of
"Une Grande Armée."

〈記事の見出し〉 国際ヨーロッパ大会——アメリカに来ることができなかった大西洋の彼方の兄弟たちのためにラザフォード兄弟が企画

〈キャプション〉 目に見える指導者——パリ支部「大いなる軍」に指示を与えようとするところ



The Bethel Family at London. See 'em Grinning? The Chief Had Just Finished Telling Them Something in the "Colored Language."

ロンドンのベテル・ファミリー。みんなが笑ってるの、わかりますか？ チーフがみんなに「黒人みたいな言い方」で何か言ったところ。



President of the Watch Tower Bible and Tract Society and Generalissimo of the Convention.

ものみの塔聖書冊子協会会長、そしてこの大会の総司令官



The Chief Inspects the Cleaning of "Kopf Salat", Just Gathered from the Garden. It Takes Only Four Bushels for a Meal!

チーフが庭の菜園からとったばかりのレタスを洗うのを検分しているところ。一食にたったの百キロ！

する十年も前のことである。ラザフォードが会長に在任中、ものみの塔関係者にどう見られているかに気がついていなかったはずはないし、また明らかにそれを変えようとはしなかった。このことやラザフォードのやり方一般について考えてみれば、死の直前に指導者のイメージを否定したという話も中身のいいものになる。

ラザフォード判事が一九四二年一月八日に死去すると、新会長としてネイサン・ノアが理事の満場一致で選ばれた。組織の基本構造は変わらなかったが、新会長の骨折りによっていささかの変更点が見られた（状況がこれを余儀なくした。ラザフォードの死去した時点で組織の規模は十万人八千人だったが、ノアが会長だった間に二百万人を越えるまでにふくれあがったのである）。

ノアは、それほど筆が立つわけでもなく、特に聖書に詳しくもなかった。聖書の権威として、また組織の主筆として、フレッド・フランズ（副会長）に頼るところが大きかった。統治体の会議で論議される問題（本章のはじめで取り上げたようなもの）は、フレッド・フランズに提出され、その決定を仰ぐというパターンが長年続けられていた。しかし、その決定に従うと協会の活動にとってまずい結果を生みそうな国がある場合、ノア会長は、フレッド・フランズと話し合った上、現実に即した改善案を出して決定を覆すこともあった。このような両者の関係は一九七〇年代に至るまで続いた。例えば会衆に長老団をおくことを決定し直したことも紹介した通りである。この時の決定は、ほとんどフレッド・フランズ副会長という一人の人間の意見にかかっていた。この人の気が変わってやはり長老団を戻そうと言ったので、ノア会長もそれならそうしようと同じしたのである。

出版物についても、基本的にはすべてこの調子であった。まず会長が様々な執筆者による提出原稿の中から『ものみの塔』の主要な記事にすべきものを選び、これを手直しのために執筆部門に送る。最終原稿は副会長と会長が目を通し、よしとされれば出版される。私が執筆部門に加わった一九六五年当時部門責任者だったカール・アダムズによると、ノア会長は原稿の手直しについてはかなり任せてくれたという話だった。唯一の例外は副会長の書いたもので、「フランズ兄弟のものは何でも『そのまま出版』とされていて、手直しはまったく必要なし」ということだっ

た。

しかしここでもやはり最終決定権は会長にあった。例を挙げよう。一九六七年にノア会長は、カール・アダムズ、エド・ダンラップ、私の三人に、フレッド・フランスが書いた「読者からの質問」の原稿を送ってきた。^{※29} その年の年、フレッド・フランスの書いた本が出版されており、その本では一九七五年に人間の歴史六千年が終わりを告げるとされていた。この本では、一日を千年と見ることでこの六千年を六日間に見立て、次のように書かれている。

ゆえにこの時代のうちに、そして多くの年を経ないうちに、わたしたちは、エホバ神の目から見て人間存在の第七日にあたる目を迎えることになります。

エホバ神がこの第七の千年期を休息と解放の安息の期間とし、全地の住民に自由をふれ示すための、大いなるヨベルの安息にされるのは、全く適切なことではありませんか。それは人類にとつて全く時宜を得たことです。それはまた神にとつても全くふさわしいことでありましょう。忘れてならないことに、人類の前途には、聖書卷末の本に述べられているようにイエス・キリストが千年のあいだ地を治める、キリストの千年統治があるからです。十九世紀前、地におられた時、イエス・キリストはご自身について「人の子は安息日の主である」と言われました。(マタイ、12・8)「安息日の主」イエス・キリストの支配が人間生存の第七の千年期と時を同じくしていることは、単なる偶然ではなく、エホバ神の愛の目的によるものです。^{※30}

この記事によって、何十年もの間なかったような興奮がエホバの証人の間に生まれた。私自身一九四〇年のはじめ頃、終わりの時が近いという期待を皆と共に味わったことがあったが、その時よりもはるかに大きな期待が高まった。だから我々は、フレッド・フランスの「読者からの質問」の原稿を見て本当に驚いてしまった。そこには、この六千年の期間の終わりが、前年に出た本に書かれていたのよりも一年早く来る、すなわち一九七五年ではなく、一九七

※29 この三人の中では、唯一私だけが「油そがれた者」であるという告白を行っていた。私の告白は一九四六年のことだった。

※30 一九六六年発行『神の自由の子となつてうける永遠の生命』29、30頁へ29、30頁

四年に来ると書いてあったのである。ノア会長がカール・アダムズに語ったところによると、ノアはこの原稿を見た時、どうしてまた急に変更するのかとフレッド・フランスに尋ねに行ったという。その時フランスは自信を持って「その通りで間違いない。一九七四年だ。」と答えた。

しかしノアはやはりこれに納得がいかなかったもので、我々三人に原稿のコピーを送り、意見を求めたのである。ここのフレッド・フランスの論点の根拠は、創世記7章6節と11節の、洪水について書かれている箇所に出てくる基数と序数の使われ方（「六百年（六百歳）」と「六百年目」）だった。前年の本の数え方では洪水の起こった年が一年ずれるので、その一年分を足す必要があり、結論として六千年の終わりは一年早くなり、したがって終わりの時は一九七五年ではなく、一九七四年になるというのだった。

我々三人はそれぞれ、これは出版されるべきではないと思うし、もし出版されたら兄弟たちに大変な動揺を与えるだろうという意見を慎重に書いた。^{※31} ノア会長は我々に同意したものと見えて、この記事が出版されることはなかった。このようなことは大変珍しいことであつた。

このノア会長の時に「統治体」という言葉がだんだんと使われ始めた。^{※32} 出版物には統治体に当たるようなグループとものみの塔協会の理事会とを結びつけるようなことが徐々に書かれ始めた。一九五五年協会発行の『奉仕者になる資格』³⁸¹頁（第八十九課⑤）には、次のような表現が現れる。

※31 その際私は、問題の点は聖書の中でもはつきりしたことの言いにくいところであり、この変更の理由とされているものに根拠があるとしてもそれは薄弱な根拠であると言った。

※32 『ものみの塔』¹⁹³⁸年6月1日号188頁には「組織」についての記事があり、その中で「中央団 (central body)」及び「中央権威 (central authority)」という用語が使われてはいるのだが、これは使徒たちとその直接の関係者を指すものであり、現代のことに当てはめて用いられたものではなかった。「統治体 (governing body)」という言葉が現在の意味で使われ始めるのは、『ものみの塔』¹⁹⁴⁴年10月15日号315頁並びに¹⁹⁴⁴年11月1日号328-333頁においてである。

主が宮に來られて以來、今日に至るまで、見える統治体はこの法人の理事会と非常に密接な關係を有してきました。

こうして理事会の七人のメンバーが「統治体」の七人だということになった。ところが実際には、この七人の状況はラッセルやラザフォードの頃の理事と変わらないものだった。

マーリー・コールという名のエホバの証人が（協会の全面的な協力を得て）書いた『エホバの証人——新世社会』という本がこのことを指摘している。^{※33} コールは、「内部の反乱」と題されたところで、まず一九一七年に起こったラザフォードと理事会との争いについて述べ、次のように書いています。

四人の理事が改革を求めた。……当時は会長こそが運営・執行機関で、理事に相談することはなかった。ただ物事を運んでしまっ
てから何をしていったか知らせた。理事は、法人としての法律上の問題についての相談役に過ぎなかった。

ラザフォードは、事を進めるに当たってまるで躊躇がなかった。その前のラッセルもそうであった。決定を下し、運営に関する指示を出す時には、前もって理事会の承認を受けることなどなかったのである。

そして、脚注を見るとこうなっている。

協会の会長はこのような権力をその後も持ち続けた。これはノアが新しい聖書の翻訳を出した時のことを見てもわかる（このことについては以下に述べる）。^{※34}

続く箇所では『ものみの塔』1950年9月15日号315、316頁が引用されている。ここには、『新世界訳』（これは協会によ

※33 マーリー・コール『エホバの証人——新世社会』(Manley Cole, Jehovah's Witnesses — The New World Society, New York: Vantage Press, 1956), 86—89頁。コールはこの本をまるで外部のものが客観的に見ているかのような視点から書いている。外部出版社から出せば、普通なら

協会発行の出版物を手にしないう一般の人も読むかもしれない、というのがねらいであった。広報活動の一環だったというわけである。

※34 前掲書88頁。

る最大のプロジェクトの一つであろう）について理事会が会長からはじめて聞かされたのは、ギリシャ語聖書の部分の翻訳が完了して印刷に回すばかりになってからのことだったとはっきり書かれている。

例の「下克上講演」があつた一九七一年まで、理事会は定期的に会合を開くこともなく、ただ会長が招集した時に集まるだけだった。時には何の会合もなく何ヵ月も経ってしまうこともあつた。議題に上るのは土地や機材の購入についてなど、運営事務関係の事柄であつた。聖書関係の本や記事の出版に関しては意見を言えないことになつていたり、同意を求められることもなかった。

副会長のフレッド・フランズは、一九五四年スコットランドで開かれた裁判（ウォルシュ裁判として知られる）において法廷で証言した際、このことをはっきりと述べている。ここに紹介するのは、教義に大きな変更があつた場合、何がなされるのか、そしてその際理事会の承認がまず必要なのか、と質問された時の返答である（これはその時の公判記録の一部で、Qが弁護士の質問、Aがフレッド・フランズの返答を表している）。

Q 「教義上のことについて、理事会のメンバーには同等の発言権があつたのですか？」

A 「会長が代表して発言します。聖書の理解に進歩があつた場合、会長が発表をします。しかる後に会長が本部のメンバーの誰かを一時的に指名して、聖書の中で更なる光の得られた箇所について発言をさせることもあります。」

Q 「あなたの言うところの進歩ですが、これは理事の意見で決めるのですか？」

A 「いいえ。」

Q 「どのようにして公的な見解として成り立つのですか？」

A 「編集委員会を通して、私が聖書を調べた上でOKを出します。それからノア会長に回して、会長が最終的なOKを出します。」

Q 「理事会を通ることはまったくくないのですか？」

理事会に関することについては、この陳述の通りである。私はこのことを実際に耳にしたこともある。一九七一年より前のこと、私はカール・アダムズが招集した何人かの執筆部門のメンバーと共にミーティングに出た。その際の案件は『ものみの塔』改善案についてだったが、どうやって会長の許可をもらうかという話になった時、ノア会長に進言するのならライマン・スウィングル（その時執筆部門のメンバーとして出席していた）が適任ではないかという意見が出た。その時のスウィングルの返答は短かったが、実状をよく表していた。「どうしてばくが？ ばくには何もできないよ。ただの理事なんだから。」

このスコットランド裁判におけるフレッド・フランスの返答は、当時本当に「統治体」と言えるものが存在したかという問題に関わるばかりでなく、『霊的な食物』が「忠実で思慮深い奴隷級」から来るという話がいかに事実に反するかを示している。実際には、二人、あるいはせいぜい三人の人間が『ものみの塔』をはじめとする出版物に何を載せるかを決めていたのである。すなわちネイサン・ノア、フレッド・フランス、カール・アダムズである（このうちカール・アダムズはいわゆる「油そそがれた者」ではない）。このフレッド・フランスの言葉がはっきり示す通り、「忠実で思慮深い奴隷級」とされている理事のメンバーでさえも、『霊的な食物』の決定に関わってはいないのである。

一九一六年までのものみの塔協会の出版物は完全にラッセルの管轄下にあり、一九四二年まではラザフォード会長の管轄下にあった。同様に、ノアが会長だった頃エホバの証人に対して『霊的な食物』を用意し、かつ供給する権限

※35 ここでフレッド・フランスは「編集委員会」という言葉を使っているが、後になってそのメンバーは理事のうち自分とノア会長だけであると云っている。確かに、この二人の他に正式な「編集委員会」などもとも存在しなかった。一九六五年の段階で、出版される原稿に許可のサインをすることになっていたのはこの二人とカール・アダムズだけであり、しかもこのアダムズは理事メンバーでもなければ「油そそがれた者」の告白もしていない。

は、二人か三人の人間の管轄下にあったのであり、キリストが「自分のすべての持ち物をつかさどらせる」ことになっている「級」をなす人々の管轄ではなかったのである。^{※36}

統治体が拡大され、七人の理事以外のメンバーを持つようになってからも状況は変わらなかった。一九七五年のある会議で、副会長の書いた大会講演用の原稿が議題にあがったことがある。これは、からし種のたとえ話とパン種のたとえ話（これはマタイ13章にある）を取り上げ、ここでイエスの言う「天の王国」というのは麴の王国であると細かく論じたものだった。統治体のメンバーの一人はこれをすでに読んでおり、納得できないと発言した。

討議の結果、十四人のメンバーのうち、これを大会講演に使うことに賛成したのは（ノアとフランス本人を含めて）五人だけで、後の九人は賛成しなかった。したがってこの原稿は使われなかった。ところがそれは講演には使われなかったということで、その大会で発表になった本には使われたし、何ヵ月も経たないうちに出了『ものみの塔』にも載った。^{※37} つまり、統治体のメンバーの三分の二近くが確信を持ってないと表明したからといって、出版しようという会長の決定がどうなるわけでもなかったのである。

『ものみの塔』をはじめとする出版物の内容ばかりではない。世界中にいるエホバの証人の活動におけるあらゆる事柄が会長の権限下にあった。九十以上ある支部への指示（支部の監督はそれぞれ「任命された地域のため、その地域内でクリスチャンの監督奉仕者となる」とされている）をはじめ、旅行する代表者の仕事、ギレアデ学校の管理、全宣教者の仕事割り当て、大会及び大会プログラムなど多くの事柄が、協会会長という一人の人間によって決められる。統治体で討議することもしないことも、すべて会長の判断と決定の結果というわけである。

副会長の「下克上講演」の後に発表された記事をここに紹介するが、ここにはこの現実がまったく反映されていない

※36 マタイ24・47。

※37 一九七五年発行の『世の苦難からの人間の救いは近い！』206・215頁、並びに『ものみの塔』1975年10月1日号589・608頁へ1976年1月15日号45・

い。しかし使われている言葉は実に強く、また断定的である。

このようなわけで、十九世紀にはキリストの使徒はいなかったにしても、やはり神の聖霊が「忠実で思慮深い奴隷」級の油そそがれた残れる者の統治体を形成すべく働いていたに違いありません。事実はおのずから明らかです。イエス・キリストの足跡に従い、マタイ伝24章45―47節のイエスの預言に述べられているわざを遂行すべく努力する、献身してバプテスマを受けて油そそがれたエホバの民の事がらを管理する責任を引き受けた、油そそがれたクリスチャンの団が確かに登場しました。ことよりも事実のほうがいっそうはつきりしています。統治体は存在しています。エホバのクリスチャン証人は、これがひとりの人間の支配する宗教組織ではなくて、霊によって油そそがれたクリスチャンで成る統治体を持つものであることを知り、かつ断言できることを感謝しています。※38

残念ながら、ここに書かれていることは事実ではないのである。確かに「事実はおのずから明らか」であることに違いはないが、その事実としては、すでにものみの塔協会自身の出版物や理事の発言に見え通り、統治体など、ラッセルが会長であった十九世紀にもまったく存在しなかったし、二十世紀に入ってラザフォードが会長だった頃にもなかったし、またノアが会長だった頃にも、この『ものみの塔』の記事にあるような意味での統治体は存在しなかったのである。

ここにはもっともらしく聞こえる統治体が描かれているが、これはまったく実体のない、架空のものである。実際のところは、この組織が生まれたそもそものはじめから君主制が支配していたのである（君主（monarch）という言葉葉自体、ギリシャ語源で、「独裁者」という意味であり、辞書にはよく「卓越した地位と権力を持つ一人の人間」という定義がなされている）。初代会長は温和で、次の会長は厳格にして専制的、三代目は非常にビジネスライクだったという違いはあっても、それぞれが独裁的な権力を行使したことにまったく変わりはない。

『ものみの塔』の記事が「一般の証人たち」とした人たちはもちろん、「忠実で思慮深い奴隷級」の「油そそがれ

た者たち」のほとんども含め、大多数のエホバの証人はこのことを知らなかった。しかし権力の座に近い人ほどそのことを肌で感じていた。上に近づけば近づくほど実態がよくわかる。

特によくわかっていた統治体のメンバーは、一九七五年になると、例の「下克上」講演やその後の記事で言われていたことがそろそろ実現されるべきだと感じ始める。

おかしなもので、それは要するにあの四人の理事が一九一七年に提案した通りの改革だった。つまり、ものみの塔出版物でずっと「野心的な策略」「反抗の企て」と呼ばれ、「神の恵みにより、成功しなかった」と言われ続けたあの改革である。五十五年経ってやっとそれが実現した。しかしその前に統治体は何ヵ月にもわたる動乱をくぐり抜けることになる。

第4章 内部動乱、そして改革

「ただの人間をもって誇りとしてはならない」

コリント第一3・21 《新英語訳聖書》

「人間のすることに誇れることなど何もない」

コリント第一3・21 《エルサレム聖書》

第2章で紹介した、『聖書理解の助け』の長老に関する項目が改革のきっかけになったのは間違いない。それまで会衆は「会衆の監督」と呼ばれる一人の人間によって監督されていたが、それが長老団というグループに変わったのである。同じく支部組織でも（ちょうどカトリックの大司教や司教が多くの会衆からなる広い地域を監督するのと同様に）一人の人間が一つの国全体の「監督」だったので、これについても当然疑問が出ることになった。また、本部にはたった一人の会長がいた。私はノア会長のことを「世界全会衆の統轄監督」と呼んだことさえあった（これはブルックリン本部で支部の監督対象のセミナーを行なった時のことである）。※1

このように会衆と世界本部の現状が目立ったずれがあったため、例の「下克上」講演や、続く『ものみの塔』記事が生まれたらしい。この講演と記事の内容は、会衆と本部との実情の違いを何とか言い繕おうとするものである。同時に表決権を持つ協会のメンバーに釘を刺す意図があったこともほぼ間違いない。つまり、表決権を行使して本部組織を変えようとしたり、統治体の人事や運営について口出ししたりするなというわけである。

さて、この問題の講演のあった一九七一年、ノア会長は統治体に『王国を宣べ伝え、弟子を作るための組織』とい

※1 そのときノア会長は壇上に座っていたが、こう呼ばれたことに反対はしなかった。

う本を検定させた。この本は、本部、支部に始まって地域、巡回区から各会衆に至るまでの組織構成や運営方針を定めた、いわば管理マニュアルといったものである。統治体が原稿を作ったのではない。会長が執筆部門監督のカール・アダムズ（統治体のメンバーでもなければ「油そそがれた者」でもなかった）に原稿作成を命じたのである。アダムズはエド・ダンラップと私にも仕事を割り当て、結局この三人が三分の一ずつ書いた。^{※2}

我々の書いたものは、統治体と各組織との関係を「下克上」記事に合う形で述べたものだったが、その検定をする統治体ではかなり白熱した議論も見られた。ノア会長は、自分の責務を「乗っ取る」意図があるのではないかと言いつとにかく統治体は「霊的な事柄」だけに関わっていればよく、あとは協会の仕事であると強調した。しかし、その「霊的な事柄」というのも、見知らぬ人たちを「旅行する監督」に任命する許可を出すという儀礼と、常に数多く寄せられてくる「排斥に関する事柄」の問い合わせの処理の二つがほとんどである。このことは当時の統治体のメンバーにもよくわかっていた。

議論の最中、私は、統治体には他にも果たすべき霊的な責務があるのではないかと何度か発言した（私としては当時の専制体制が、イエスの言った「あなた方はみな兄弟」、「あなた方の指導者はキリスト一人」、「諸国民の支配者たちが人々に対して威張り、偉い者たちが人々の上に権威を振るう」けれども「あなた方の間ではそうではありません」という言葉にそぐわないように思っていた。^{※3} また、いずれにせよ一九七一年の『ものみの塔』に出た例の記事であれだけ言っておいて、それを実行しないというのは正直なやり方ではないと思った。

ところがそのたびに、会長はそれが自分に向けられた個人攻撃であると受け取り、こわばった声で強硬にそして長々とやり返すのだった。「どうも会長の仕事ぶりに不満な人も若干名いるようだ」と言い、自分の行なっている仕事

※2 私の担当は「あなたの神への奉仕」、「会衆の清さを安全に守る」、「神の是認につながる忍耐」の各章だった。

※3 マタイ23・8、10 同20・25、26。

内容について事細かに述べたて、しまいには「どうやら私には仕事をして欲しくない人もいるようだから、一つこちらで全部レイモンド・フランズ君に任せることにした方が良いのかな」という具合である。

ノア会長が私の言ったことをここまで見事に誤解できるのは信じ難いほどだった。私は何人かのグループによる管理方式を支持していたのであり、一人の管理者を別の一人に代えようなどとは言わなかったのである。そこで私は何度もう言った。自分の言ったことはまったく個人攻撃を意図したのではなく、ただ、自分が聖書と『ものみの塔』を理解するところでは、誰か一人の人間に責務を任せるのではなく、グループでやるべきではないかと思うだけである。仮に誰か一人にすべてを任せるなら、私はノア会長を選ぶであろう。会長は自分ですべきだと思ったことをやっていただけなのだから、それについてまったく不満はない。——こういうことを本当に繰り返し繰り返し述べたのである。

しかしどうもあまり通じていなかったし、会長の責務に関することは何を言っても怒らせるばかりだとわかったのだ、何回かやってみた後はもうやめてしまった。こんな時統治体の他のメンバーは、何も言わずにただ座って見ていただけだった。だからそれから何年か後に起こった出来事は驚きだったのである。

状況は一九七五年まで変わらなかった。ここで、協会一九九三年発行の『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』が「エホバの証人の現代の歴史において特に重要な、組織上の再調整」についてどう書いているか、見てみたい。108頁から109頁へ108頁から109頁にかけて、次ページのようにある。

ご覧の通り、第三代協会会長のネイサン・ノアの健康が一九七五年終わりごろに衰えたことが、組織上の再調整という出来事の原因であるかのようにも思わせる書き方がされている。しかし、当時統治体にいた人であれば、これが事実ではないことがわかる。ノアの健康の衰えがはっきりしてきたのは、組織再編の動きが出た後のことであり、したがって無関係なのである。また、ノアの病状が統治体の決定に影響を与えることもなかった。ここに描かれている

はならなかった。応募者のほとんどは、十九歳や二十歳の若い男性である。四年と言えば、それまで生きてきた人生の五分の一である。よく私は食事の席で隣に座った人に「ここに来てどれぐらいになる？」と尋ねた。私はその時でもう十年間本部にいたが、その間一度も「一年ほど」とか「ざっと二年になります」というような大ざっぱな答えを

組織上の再調整

1976年まで30年以上にわたって、ノア兄弟はものみの塔協会の会長として熱心に働いてきました。世界中を何度も旅行し、宣教師たちを訪問して励まし、支部事務所の奉仕者に教えや教訓を与えました。兄弟は、活発な証人たちの数が1942年の11万7,209人から1976年の224万8,390人にまで増加するのを見るという特権にあずかりました。

しかし、1976年の夏までに、71歳のN・H・ノアは自分が物にぶつかりやすいことに気づいていました。その後の検査の結果、兄弟には脳腫瘍があり、手術不可能であることが分かりました。何か月かの間、兄弟は一生懸命に引き続き仕事を果たそうとしましたが、予後は思わしくありませんでした。兄弟の健康上の衰えは業の前進を鈍らせるでしょうか。

統治体の増員は既に1971年に始まっており、1975年には会員は17名になっていました。神の言葉は現代に関して、世界的な宣べ伝えて教える業を略述していますが、統治体は1975年のほとんど1年を通して、その業に関係したすべての事柄をどうすれば最もよく世話することができるか、真剣に、祈りを込めて考慮していました。（マタイ 28:19, 20）1975年12月4日、統治体はエホバの証人の現代の歴史において特に重要な、組織上の再調整を全員一致で承認していました。

1976年1月1日以降、ものみの塔協会および世界中のエホバの証人の会衆のすべての活動は、統治体の六つの管理委員会の監督を受けることになりました。その取り決めと調和して、1976年2月1日、協会の世界中の支部事務所すべてにも変更が加えられました。各支部を支部の監督が一人で監督することは終わり、3人以上の円熟した男子が支部委員会として奉仕し、そのうちの一人が常任の調整者として奉仕するようになったのです*。それらの委員会が機能するようになってから数か月後、統治体はこう述べました。「王国の業の関心事を検討するために複数の兄弟が相談し合うのは有益であることが明らかになりました。一箴言 11:14; 15:22; 24:6」。

（『エホバの証人』1993年発行 〈108、109頁〉）

のは、ありのままの歴史と言えるものではない。それでは、実際にはどうだったのかをを以下に見ることにしよう。

一九七五年、二人のベテル長老（一人は奉仕部門の古参メンバー、もう一人はベテルホーム監督補佐）が、本部スタッフの状況に問題があるようだと手紙で統治体に伝えてきた。監視されているという不安感や、期待を裏切られたという失望感、その結果としての不満感が広がっているというのである。

当時、本部での奉仕活動（ベテル奉仕）を望む者は、最低四年間はそこに留まることを承諾しなくては

聞いたことがなかった。いつも「一年と七ヵ月」とか「二年五ヵ月」とか「三年と一ヵ月」という具合で、正確に何年何ヵ月かを言うのである。服役囚が年月を指折り数える、あのやり方を思わずにはおれなかった。

本部での奉仕について意見を言ってもらおうとしても難しいことが多かった。そんな若者たちと一緒に仕事をしてきた友人に話を聞くと、何か良くないことを口にして「態度が悪い」というレッテルを貼られるのが怖いので、あまり率直に多くを語ろうとしないとのことだった。

「組織の中の歯車」であり、労働力ではあるが人間としては認められていないと感じていた人が多かった。予告も説明もなくいつどんな別の仕事に回されるかわからないという職場不安もあった。「管理側―被雇用者側」という体制関係がはつきり打ち出され、きちんと守られていた。

月々の手当十四ドルは、王国会館の集会に行く際の交通費に消えてしまう（あるいはそれにも足りない）程度だった。家族や友人が経済的に豊かな人は良かったが、そうでなければ、最低必要なもの以外、ほとんど手が出ない。特に西部の州など遠くからやってきた人で家が貧しかったりすると、休暇を家族と過ごすなどはまずできない相談だった。それでいて統治体のメンバーなどが国内外を回る講演旅行に出るたびに、ホテルの家族への挨拶というのをいつも聞かされる。協会が新車で購入し、自分たちが整備してびかびかにした高級車オールズモビルを協会の役員たちが乗り回している。一日の就業時間は八時間四十分、土曜日は午前中の四時間、これに週三回の集会和毎週の「証言活動」が加わっての生活スケジュールは過密で、単調で、疲れる。しかし少しでも手を抜いたりしようものなら「態度が悪い」とされて、それを正すために呼び出されるのは必至であることもわかっている。

ざっとこういうことを（詳細には触れずに）述べていたのが、先ほどのベテル長老から送られてきた手紙だったのである。ところが悪いことに、会長はこれがまた自分の管理のやり方に対する批判であると受け取ったらしい。この件について会議を持ちたいという申し入れが会長から統治体になされ、これが一九七五年四月二日に開かれた。この会議ではベテル長老が何人も呼ばれ、右に述べたような現状の細かい点もかなり明らかになった。特定の人物につい

でどうこう言ったり改善を求めたりは一切なく、ただ、もっと一人一人のことを考えてあげたり、誠実な話し合いを持ったりする必要があるのではないか、そして問題の解決に当たっては現場がよくわかっている人に参加してもらっても良いのではないかという意見が出た。ベテルホーム監督補佐いわく「我々は人ではなくその労働力を大事にしているように思う」というわけだった。スタッフの医師を務めるデイクソンも発言し、よく夫婦が相談に来て、特に奥さんの方が過酷なスケジュールのプレッシャーに苦しんでいる、話をしながら泣き出してしまいう人も多いという話をした。

それから一週間経った四月九日の統治体会議公式「議事録」には次のようにある。

統治体、法人組織、『ものみの塔』^{※1} 1971年12月15日号へ1972年3月15日号の記事の関連で意見が出される。L・K・グリーンリース、A・D・シュローダー、R・V・フランズ、D・シドリックス、J・C・ブーアの五人からなる委員会が本件及び法人幹部役員の責務等に関する事柄を検討し、双方の役員たるN・H・ノア、F・W・フランズ、G・スター各氏の意見をも考慮に入れた上で試案を作成することで合意に達する。組織の一致を強化するのが基本的な目的である。

さらに三週間経った四月三〇日の会議でノア会長がある動議をして我々は驚いた。今後すべて決定事項は統治体のメンバー（その時までには十七人になっていた）三分の二の賛成をもって決定するようにしてはどうかというのである。^{※2} これに続く会議の模様を伝える公式「議事録」は次の通りである。

次に、どうすれば良いのかと意見を求めたノア兄弟の発言を受け、L・K・グリーンリースが五人委員会からの報告を開始。^{※3} 委員会では『ものみの塔』^{※4} 1971年12月15日号第29節及び760頁へ1972年3月15日号179頁第29節及び184頁を慎重に検討した。委員会として

※4 カトリック教会の枢機卿団が教皇の後継者を決めるときも同様に三分の二の賛成を必要とする。きっとノアもフレッド・フランズもそれほど多数が変更賛成とは思っていなかったのだと思う。

※5 この「五人委員会」の初めての会議において、私の動議によりグリーンリースが司会者を務めるということに決まったのである。

は、今日統治体は法人組織を管轄しているべきであり、その反対であってはならないと考える。法人側は、世界中の会衆を管轄する責任が十七人からなる統治体にあることを認めるべきである。会衆に比べ、ペテルではこの体制を施行するのが遅れている。混乱もおきている。二重構造を持つ組織というのでは困る。

統治体、法人、会長に関する問題についての討論が長時間にわたって続けられ、出席者全員が意見を出す。終わりになってN・H・ノアから動議、E・C・チティーからも発言あり。L・K・グリーンリスからも動議。そこでこの三人の意見のコピーを全員に配り、翌日午前八時に再度会議を持つことで合意に達する。これほどまでに重要な案件について折る時間も得られよう。

ここで言われている「意見のコピー」というのは以下の通りである。

N・H・ノア「統治体が、ペンシルバニア法人定款に指示がある通りの責務の管理をする役目を引き継ぎ、さらにペンシルバニア法人及びエホバの証人の使うところになる世界中の法人組織の定款に定められた責務を負うことを動議します。」

E・C・チティー「『引き継ぎ』というのは引き継がれる方が案になることです。私としては責務に何の変わるところもありません。むしろ『責務の監督をする』と言った方が正しいのではないのでしょうか。」

L・K・グリーンリス「次の動議をします。統治体が、聖書に従ったやり方で、世界のエホバの証人とその活動の管理・管轄の全責任及び権限を引き受けること。エホバの証人が使っている各地の法人のメンバー並びに役員は、すべてこの統治体の指示に従って行動すること。この統治体と法人との間における新たな関係が、王国の業に悪影響を与えない限り、できるだけ早く実施されること。」

翌五月一日には、またもや長い話し合いが行なわれた。特にフレッド・フランズ副会長は（この人が問題の『ものみの塔』記事を書いた当人である）これらの提案に反対であり、とにかく現行の仕組みに変更を加えることや、会長の権限が減ることには、すべて反対だった（この時、このフレッド・フランズが一九七一年に言った、「イエス・キリストは一人の人間を通じてこの組織を新秩序が来るまで導いてくれると思う」という言葉を思い出した。これを考えるとこの時の態度も不思議ではない）。一方に例の『ものみの塔』記事（統治体は関係法人団体を単なる道具として使っていると断言して

いる)があり、また一方には統治体が法人団体の管轄を行なっていないことを示す先ほどの「意見のコピー」(会長自身のものを含む)があるのだから、明らかに矛盾しているのだが、これについてフレッド・フランズは何も言わなかった。

結論はなかなか出なかった。転機がやってきたように思われたのは、グラント・スーターが意見を述べた時である。これは当時協会法人の書記兼会計で、きっぱりと物を言う人物である。このスーターの場合、それまでに出ていた改革賛成派の意見とは違い、それまでノア会長に対して押さえていた感情をとうとう名指しで出したといった感じの発言だった。権限関係について意見を述べつつ、(自分の部屋をちょっと模様替えしようとしても許されなかったなどとは言っていたが)特に何かについて非難がましいことは言わなかったのではあるが、次第に顔は紅潮し、あごの筋肉はひきつり、言葉はだんだんと激しくなり、最後の言葉はこれであった。

「我々が統治体になるっていうんなら大変結構だ、大いに統治にかかろうじゃないか。今までずっと統治なんてさせてもらった試しがないんだから。」

この言葉があまりに強烈だったので、そのまま耳に焼き付いている。もちろんスーターが本当に心からこの言葉の通りの気持ちだったのかどうかはわからない。ひょっとしたら一時的に感情が高ぶってこう言っただけかもしれない。いずれにせよこれを聞いて私は、そもそも何のためにこういう話し合いをしているのかと真剣に考え始めた。どんな結果になるにしても、とにかく聖書の原則と規範に少しでも忠実に従おうという関係者全員の心からの気持ちの結果でなければならぬと本当に思った。その点、この会議はかなり心配であった。全体として、クリスチャンの一团としてあるべき雰囲気とは思えなかったからである。このスーターの意見が出てからまもなく、ノア会長が何らかの結論に達したらしく長々と意見を述べ始め、ミルトン・ヘンシェルがこれを速記で記録した(ヘンシェルは自分でもいく

つか提案をしていた。当時統治体の書記だった。^{※6} 公式「議事録」に記録されているところでは、その時の会長の言葉に次のようなものがある。

先にヘンシエル兄弟が言ったような線に沿って、また『ものみの塔』に書いてあることも考慮に入れて、統治体が、エホバの証人を統治する団体となる方向に進むのは、大変結構なことだろうと思います。私はそれに賛成しようとも反対しようとも思いません。そんな必要はないと思います。『ものみの塔』がそう書いたのですから。

これは全面的な指導力と影響力を持つ統治体ということになります。統治体はその責務を引き受け、部門分けをして管轄を執り行なう組織を持つことになります。

締めくくりには「これを動議します」とつけ加えた。ちよつと驚いたことに、この動議を支持したのはフレッド・フランス副会長だった。統治体はこれを満場一致で議決した。

四年前の『ものみの塔』にあった強い言葉が現実のものになろうとしていたかに見えた。会長の言葉からも、変革は速やかに行なわれようとしているかに見えた。これは、『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』の描く平和な一致団結の様子でもある。ところが、これは大変な嵐の前の静けさに過ぎなかったのである。

それからの何カ月か、例の「五人委員会」は、統治体のメンバー全員、及び古参の本部スタッフ三十三人に個別に話を聞いた。圧倒的多数が改革に賛成だった。委員会では、統治体が世界規模の活動の数々をこなしていくための事細かな提案をまとめた。個別に話を聞いた時には、十七人の統治体のメンバーのうち十一人が基本的に賛意を表明してくれた。

※6 ミルトン・ヘンシエルは背が高くまじめな風貌で、話し合いの時にはめつたに発言しなかったが、いざ言つとなると断固とした明確な意見述べた。若い時にはノア会長の秘書をしていた。この当時五十代半ばであった。

残りの六人のうち、まずジョージ・キャンギラスは快活なギリシヤ人で、統治体の最古参メンバーの一人でもあったが、とにかく意見が定まらず、その時の気分によって言うことが変わった。チャールズ・フェケルは東ヨーロッパ人で、何年前には協合理事だったのだが、アメリカ市民権を手に入れる時に行なった宣誓で屈従を示したというのでその地位を剥奪されていた。当時統治体に迎えられたばかりで、穏和な性格のためほとんど発言もなく、常に多数意見に賛成していたし、この件についてもほとんど意見を述べることはなかった。ニュージールランド人のロイド・バリーも統治体に加わったばかりで、長年日本で支部の監督を務めた後ブルックリン本部にやってきていた（日本では宣教活動が目を見張る伸びを示していた。このロイド・バリーは、改革案によって中央集権制が失われ、特に会長の役割に大きな影響があることに強い懸念を示した（一九七五年九月五日付の手紙ではこの改革案を「革命的だ」としている）。ビル・ジャクソンは、ざつくばらんで飾らない性格のテキサス人（これは人が言うほど珍しくない）で、ずっと本部に勤務していた。バリーと同じく、現行の管理体制でかなりの規模拡大をしてきたことでもあるし、あまり物事は変えない方が良いという意見だった。

そして最後の二人、最も強い反対意見を述べたのは、なんと、先ほどの動議を行なった本人である会長と、それを支持した副会長である。この二人は、反対意見を公の場で口にしてもいた。

「五人委員会」が古参メンバー一人一人に意見を聞いてまわっている時、ノア会長がベテルの食卓で一週間司会を務める当番になった。その一週間、毎朝いくつもの食堂（すべてテレビで中継される）にいる千二百人以上の「ベテル家族」のメンバーに話ができる。まず会長は、「取り調べ」（五人委員会が個別に話を聞いていること）が行なわれている、今までずっと組織がとってきたやり方を変えたがっているのが「若干名」いる、と呼びかけた。そして「物事がうまくいっていないので改革が必要だという証拠がどこにあるのでしょうか」と繰り返し繰り返し訴えた。さらにまた問題の「取り調べ」によって「このベテル家族メンバーは駄目だと証明」しようとしているが、こういう「不平を鳴らす少数の者たち」が「幸福を感じている大多数の者たちを圧倒する」ことはないと確信しているとも言った。そ

して協会のこれまでの業績を挙げながら、「協会を信じるように」と訴え、少数の者たちがベテル家族とその組織に加えたがっている変更など「私の目の黒いうちは許さん」と激しい調子で語った時もあった。^{※7}

不公平にならないようつけ加えるが、ノアが当時の現行体制こそ正しいものだと思っていたのは間違いない。また、組織では最も尊敬を集めていた学者で、聖書に関することはまかせていたフレッド・フランズ副会長も同意見だとかっていた。基本的にノアは気さくで、暖かみを感じる人柄だった。「会長」としての立場にない時には、一緒にいて楽しい人物だった。しかし、非常にありがちなこととは言え、会長という役職にあるためにその人柄が隠れてしまうことが多く、「神の意志による役割を果たしているのだ」という気持ちもあるので、自分の会長としての権限が少しでも侵害されそうだと判断すると、極めて迅速かつ強硬に対処する。したがって周囲の人間もそんな刺激になりそうな言動は避けるようになった。それにしても、私の知っているあのノアという人物が、後に会長の権限を受け継いだ人たちの血も涙もないやり方を見たらどう思っただろうかと思う。

私にもノアの気持ちや行動が理解できる。私もプエルトリコとドミニカ共和国で支部の監督を長年務めていた時には、組織内の見方に従えば、その国での「最高責任者」として会長の代理を務めたわけである。責務を果たすにつけ、「地位」というものが常に気になり、その「地位」を守る必要も感じた。しかしいろいろあった末、地位にこだわっている、人づき合いも楽しくないし、自分の生活も面白くなくなることがわかった。地位に絡んで生まれてくる対立や確執などもまったく肌に合わない。しばらくするうち、地位にこだわるのはやめてしまった。すると毎日がうんと楽しくなったし、それまでよりはるかに生産的かつ有益な結果につながったと思う。

さて、先ほどの「私の目の黒いうちは許さん」という言葉はある意味で現実のものとなった。こう言っていた当時、ノアは脳に悪性腫瘍があったらしい。もっとも、これが知られるようになったのは、改革が完全に既成事実となった

※7 ここで引用した言葉は、その場で書き留められたノートによっている。もちろんこれはすべて千人を超える人たちが耳にしたのである。

後、公式に認められた一九七六年一月一日が過ぎてからである。ノアが死去したのはそれから一年半後の一九七七年六月八日である。

ノア会長の反対意見も強かったが、それと同じぐらい、あるいはもっと強かったのが副会長の方である。一九七五年九月七日に行なわれたギレアド宣教師学校の卒業式の際、ペテル家族のメンバーと来賓（ほとんどが卒業生の親類や友人たち）の前でフレッド・フランスが行なった恒例のスピーチを紹介しよう。

フレッド・フランスは、ちょっとまねのできない、やや大げさな（往々にして芝居がかった）ところもある独特の話し方をする人だった。以下はそのスピーチの正確な記録であるが、この時の話し方、雰囲気、時として感じられる皮肉な調子などは残念ながら伝えられない。

始めのところを聞いただけで、どんな話かしたいのかは明らかだった。当時、統治体の指名によって構成された委員会が、宣教師の訓練・任命及び監督を協会側ではなく統治体が管轄すべきだという提言をまとめたところだった。そのことを頭に置いてこのスピーチのはじめの部分を見てみよう。

「このクラスの卒業生諸君は、ニューヨーク法人ものみの塔聖書冊子協会の協力の下に、ペンシルバニア州のものみの塔聖書冊子協会によって奉仕の業へと送られるのです。さて今日、こういう疑問が出ます。どんな権利があつて、ものみの塔聖書冊子協会は野外に宣教師を送るのか？……世界中に宣教師を派遣する権限をペンシルバニア州のものみの塔協会に与えているのは誰なのか？」

「さてこんな疑問について、少し歴史を振り返って考えてみましょう。ものみの塔聖書冊子協会は、後に世界的に有名な福音宣明者になった人によって設立されたという事実であります。これはこの二十世紀において最も傑出した福音宣明者であり、特に一九二一年に世界を旅行してまわった際には世界的な名声を得た、ペンシルバニア、アレゲーニーのチャールズ・テイズ・ラッセルであります。」

ここで前面に出ているのは協会であり、統治体は出てこない。もちろんここという「疑問」などどこからも出てい

ない。むしろ当時の統治体が抱えていた問題の核心は、この講演をしている当人が四年前に行なった（統治体と協会の関係についての）講演は一体本気だったのかということである。しかしフレッド・フランズは独得の調子で次のように続ける。

「私はこのことについて考えました。あなたがたも考えたことがあるでしょう。ラッセルはいかにして福音宣明者になったのか？ 誰がラッセルを福音宣明者にしたのか？ ……キリスト教世界にはいろいろな体制ができあがっていました。例えば英国国教会があつて、管轄体というのがありました。プロテスタント監督教会もあつて、これにも管轄体がありました。メソジスト教会もあつて、これには協議会がありました。長老派教会というのもあつて、ラッセルもかつてここにいたのですが、これには全教会大会がありました。会衆派教会というのもあり、ラッセルはこれに加わるのですが、中央会衆というのがありました。しかしこれら支配組織のいずれによつてもラッセルは福音宣明者あるいは宣教者になつたわけではないのです。」

はつきり統治体と言うことなく、いろいろな名前の付いた「管轄体」を話に出して、結局は統治体の話を出してきている（ここでイエズス会を話に出しても良かったところである。そこでの管理機構は「統治体」と呼ばれている）。しかしここでの要点は、そのような管理機構はものみの塔協会の設立者ラッセルに無関係であり、何の権威も及ぼさなかつたということである。ラッセルは「無党派」であり、いかなる管理機構にも組しなかつたというわけである。当時、統治体の任命による「五人委員会」は、世界の宣教活動を管理するための常任委員会を作つてはどうかという提案を出していた。この背景から、以下に続くスピーチの言葉には、更なる含みが持たされることになる。フレッド・フランズは、イエスが七十人の弟子を送りだしたという話をしてから、この卒業生たちに向かつてさらに次のように続けるのである。

「七十人の福音宣明者を二人一組にして主イエス・キリストが送り出した時、その二人組を委員会とし、七十人の福音宣明者がいれば三十五の委員会ができるようになっていたわけではありません。……今日あなた方は卒業して宣教者として送られていくわけであり

ます。……二人はポリビアへ、あるいはまた四人、六人、八人という風に違った国に任命されて行きます。二人一組で、あるいはまた四人、六人、八人で、あなた方が送り出されるからと言って、割り当てられた国の仕事を引き継いで行なうための委員会として送り出されているなどと考えてはいけません。そんなわけはありません。あなた方はお互いに協力し、また、ものみの塔聖書冊子協会の支部と協力するため、独立した宣教師として送り出されるのであり、そしてこの協会支部が、あなた方が福音宣明者として奉仕する割り当ての国での仕事を管理・管轄しているのです。ですからこの委員会などという考えはまずやめて頂きたい。……」

この間ずっと統治体は協会の話の陰に隠れているが、話に出ないだけ逆に目立つ。宣教師が「委員会」として送られるべきだとか、割り当て先の国の仕事を「引き継いで行なう」べきだなどとは誰も言っていないし、思いつきもしていないのだが、ここではただ委員会などけしからんと言いたいがために話に出しているのである。

次に話は「福音宣明者」フィリポの話題に移り、ここでもまたや「誰がフィリポを福音宣明者あるいは宣教師にしたのでしょうか？」という疑問を出してくる。^{※8}それから話題は使徒6章にある話に移る。これは使徒たちがフィリポも含む七人を任命して食物の分配の世話をし、やもめたちに対する差別についての不満を解決しようとする箇所である。話は次のように続く。

「さて、ここでマクリントクとストロングの『宗教知識百科事典』を見てもえれば、ここで使徒が七人の者たちに割り当てているのが「準世俗的な仕事」と呼ばれていることがわかってもらえます。しかし使徒たちはこの準世俗的な仕事はしたくなかったのです。この七人の者たちにまかせて「これは頼んだ。自分たちは祈りと教えに専念するから。」と言ったわけです。さて、このイエスの十二人の使徒たちですが、食物の世話を他にまかせることで、神とイエス・キリストの会衆におけるただの名目上の頭となつたのでしょうか？ そんなことはありません。霊的な事柄に専念するから名目上の頭になるということはないのです。」

統治体は「霊的な事柄だけ」に関わっているべきであとは協会にまかせておくべきだという会長の言葉を覚えてい

※8 使徒8・5-13、21・8参照

る統治体のメンバーなら、これを聞いてピンと来ないはずもなかった。しかしおかしなことに、統治体のメンバーの約半分は、毎日八時間四十分まさにそういう「準世俗的な仕事」に従事していたのである。ダン・シドリックとチャールズ・フェケルは工場勤務だったし、レオ・グリーンリースは秘書兼会計のため保険関係を扱っていた。ジョン・ブリスはベテルの調理場監督、ビル・ジャクソンは法律・各種書類担当、グラント・スーターは財政・投資・株・遺言関係を扱って忙しかったし、ミルトン・ヘンシエルとノア会長（会長はこれらの仕事の配分を管理していた）も「準世俗的な」管理の仕事――すなわちフレッド・フランズによれば他にまかせるべき仕事――を行っていた。

ここから話は、一世紀以来神によって統治体に与えられた権限についての協会の教義と矛盾する方向に進み始める。まず、回心したサウロ改めパウロの話が出る。回心のあとエルサレムに行って、使徒のうち二人だけに会うこと（つまり統治体を思わせる使徒の一人全体に会ったわけではないこと）、そしてシリアのアンティオキアにやってくる。それから、キリストはタルソスのサウロを選んで任命するにあたり「この地上にいる誰かに相談するようなことはなく、直接働きかけた」ことが示される。そして、パウロとバルナバの宣教活動においてはアンティオキアの役割がエルサレムの役割よりも大きかったという、一種の「二都物語」が展開される。ちなみに、現在のものみの塔公式の教義によれば、すべてのクリスチャン会衆を統括・監督する統治体はエルサレムにあったとされており、これが現在のエホバの証人の統治体のモデルとされている。

さらに聖霊がパウロとバルナバを宣教の業に導くというくだりでは、これがすべてアンティオキア会衆を通じて（つまり使徒の一人のいたエルサレムを通じてではなく）行なわれたことがしつこく繰り返される。^{※9}

※9 ここで明記しておかねばならないが、エホバの証人の「統治体」とその権威についての教義は、聖書時代のエルサレムにそのような仕組みが存在したというのがそもそもの根拠になっているのである。

「さて、パウロがアンティオキアで奉仕をしているところ」でアンティオキアはシリアにあります、イスラエルではなくシリアです——さて、すると突然神の聖霊がアンティオキアの会衆に語りかけてこう言われたのです、『あなた方、そう、このアンティオキアの会衆にいるあなた方、私が委任した仕事のため、バルナバとサウロの二人を選び出さない。』そこでアンティオキアの会衆はそれに従って、パウロ（あるいはサウロ）とバルナバに手をおいて送り出したのです。この二人は他でもないアンティオキア会衆を通じて活動していた聖霊によって出かけていき、初めての宣教奉仕へと向かったわけです。」

「このように、主イエス・キリストは会衆の頭として直接会衆に働きかけたわけです。この地上にいる誰かに、何をしても良いですかとか何は駄目ですかとか、相談するようなことはなかったわけです。サウロとバルナバについてもしかりであつたわけで、しかもこの二人はどちらもアンティオキア会衆の使徒だったのです。」

話がこの辺にさしかかったあたりで、私は座って聞きながらこんなことを思っていたのを覚えている。「一体この人は自分のしていることがわかっているんだらうか。統治体など重要ではないと言って協会と会長の権威を保ちたいのはわかる。でもそうするとどうなるかわかっているんだらうか。教義が揺らいでしまう。すべての真のクリスチャン会衆のあらゆることについて世界規模で指揮監督する権威のある統治集団が一世紀のエルサレムにあった、という教義が。エホバの証人なら協会の出版物を通じてみんな信じている教義、エホバの証人ならほとんど皆それに従って行動している教義が。」

しかし話はまだまだ終わらず、それぞれころかささらに力強く続いていく。パウロとバルナバの初めての宣教旅行が終わった時のことになるとますます語気は強くなり、ほとんど劇的な調子でこんな風に続く。

「……さてそこでこの二人はどこに行ったのでしょうか、どこへ報告に参じたのでしょうか？ 記録が残っています、自分で使徒14章の最後のところを読んでください。そう、この二人はアンティオキアに戻ったんです、その会衆に戻ったんです、そして細かにいろいろなことを話すんです、宣教の業のため神の過分のご親切に自分たちをゆだねてくれた、この会衆に話すんです。報告しに行つたのはここなのです。」

「さてこの記録には、このふたりがアンティオキアにかなりの間留まったとあります。さあそれからどうなった。パウロとバルナバは突然エルサレムに行くのです。しかし一体どうしたのでしょうか？ どうしてまたエルサレムに行くというのでしょうか？」

「エルサレムの会衆にいる使徒や他の長老たちの集団が、こんなことを言って呼びつけたのでしょうか。『おいおい。君たちふたりは宣教の旅に出かけて、それが終わって帰ってきたのにまだエルサレムに報告に来てないじゃないか。我々を何だと思っているんだ！エルサレムの幹部長老団だぞ。主イエス・キリストの頭の権を認めないのか。さっさとここに来ないと懲戒処分だぞ。』」

「そう言ったと書いてあるでしょうか。仮にパウロとバルナバが聖霊によって送り出された会衆に報告に行ったからといってそんな風に言われたとすれば、このエルサレムの使徒とユダヤ会衆の他の長老たちは自分たちを主イエス・キリストの頭の権の上に立てたことになってしまいます。」

まったくその通りである。そしてこれは協会の出版物とはまったく反対の見解である。出版物の方では、エルサレムこそが統治集団の本拠地であり、これがキリストの代理としてすべてのクリスチャンを管轄し、神からの権限を持っていると言うのだ。一般に副会長のスピーチは『ものみの塔』記事に使われることが多かったにもかかわらず、このスピーチだけは決して記事にならなかったのは、間違いなくこれが理由である。

今日エホバの証人の中でこんな意見を述べる者があれば、背教だ、反逆的だとみなされる。この意見に従えば、地上のどの会衆であれ、キリスト・イエスと聖霊が導いていると信じていれば、ブルックリン本部にも支部事務所にもお伺いをたてることなく自分たちの宣教者を派遣できることになる。しかしそんなことをすれば、協会本部及びその事務所が迅速かつ断固とした処置をとるであろうことはわかりきっている。本部にしてみれば自分たちの権威が脅かされた、すなわちまさに「我々を何だと思っているんだ。主イエス・キリストの頭の権を認めないのか。」ということになる。ここでフレッド・フランズが述べたことはすべて、完全に正しかった。しかし、その四年ほど前の「下克上」講演の時と同様、すべて本気で言っていたわけではないようだった。ただし、アンティオキアの話を出し、協会が統治体から独立して機能する姿を描こうとしていた点は別である。

さてスピーチはさらに続き、パウロとバルナバがエルサレムに行った本当の理由は、使徒15章によると、エルサレムの方こそがアンテيوخア会衆にとって深刻な問題の種になっていたからだという話になる。これは、エルサレムから来た人たちが異邦人にも律法の遵守と割礼を強要するので面倒を引き起こしたという話である。つまり、パウロとバルナバがエルサレムに行ったのは、統治機構に従っていたからではなく、エルサレムから来た厄介者たちの教えを打破するためだったという言い方である。

次にパウロとその新しい仲間であるシラスの行った二度目の宣教旅行の話に移るが、ここでもこの二人がアンテيوخア会衆から出発したことが強調される。「やはり、この聖書の記録において有名な宣教者を送るに当たって、アンテيوخア会衆が使われたのです」という具合である。そしてさらにこの二人がやはりアンテيوخアに帰ってきたこと、そしてパウロはやはりこのアンテيوخアから三度目の宣教旅行に出たことが続く。この「使徒」における話をまとめるに当たったの言葉は次の通りである。

「ですからこうして、聖書に記録されている宣教者の中でも最もすばらしい部類に入るこの二人について調べてみますと、どちらも会衆の頭である主イエス・キリストによって送り出されていることがわかるのです。これはものみの塔聖書冊子協会がその創立以来一貫してずっと認めている事実です。このように、主イエス・キリストが会衆の頭であり、他にどんな組織があろうと、誰がいようと、まったく関係なく、直接に指揮をされる権利があることがわかるのです。イエス・キリストこそが会衆の頭なのです。我々はそのなさることに逆らうことなどできません。」

この最後のところ、「このように」以下の言葉は、今日エホバの証人の多くが取っている立場を表している。まさにこの立場を取っているがために「背教者」とされているのである。

しかし、キリストの権威に対する深い畏敬を示すかに見えるこの言葉も、実は別の権威を主張しているのである。ここでは、ものみの塔聖書冊子協会の権威とその会長の権威に疑問を持つことはイエス・キリストに疑問を持つこと

だと言っているのである。結局のところ、統治体が任命した「五人委員会」が会衆の頭たるキリストの指示を代行するはずがない、なぜならば、とにかくイエス・キリストは協会を設立させ、その協会を通じて物事を行なっているからだ、と言いたいのである。無理な理屈であるように私には思われた。

このスピーチ全体の主眼点は要するにこれだったことが程なく明らかになる。この点に來ると、やおらすべてを現在の出来事に当てはめ始めたのである。フレッド・フランスは、チャールズ・テイズ・ラッセルが新しい宗教雑誌『ものみの塔』を創刊したことについて語り、ついで「誰がラッセルにそんな権利を与えたのでしょうか？」と続ける。そしてラッセルがシオンのものみの塔聖書冊子協会を法人化した時の話になると、さらに次のようにつけ加えた。

「そして皆さん、こうしてラッセルはこの協会、ものみの塔聖書冊子協会を設立したわけですが、これは何もしない協会組織を設立したわけではないのです。」

つまりフレッド・フランスは、主イエス・キリストと神の聖霊がラッセルを立ち上げらせ、「積極的に物事を行なう協会」の設立に力を貸したと言っているのである。次にギレアデ学校の成立事情の話になる。この学校は他ならぬ協会会長の発案によるものだったこと、それを聞いた理事会の方では協力をし、会長自らがこの学校の監督をすることになったこと。この話の間ノア会長は演壇のところに座っていたのだが、この時フレッド・フランスはそのノアの方を示しながら、次のように言った。

「ですから皆さん、ニューヨークとペンシルバニアの協会の理事会は、当時、会長の仕事に尊敬の念を持っており、会長がコチコチの無表情で名目だけの表看板であるなどとは考えていませんでした。またこの組織が何もしない協会組織だとも思っていなかったのです。」

はじめからこういう話になるだろうと思っていたので、この言葉の内容には驚かなかったが、この言い方には驚い

た。ここを過ぎると少しやわらいだ調子になり、フレッド・フランズはその当日の日付、一九七五年九月七日について話し始めた。

「これがどういふことかわかりますか？ ここにあるカレンダー帳を見ますと——これはイスラエルのヘブライ語のカレンダーですよ「小さな本を手持っている」——なんと今日は太陰暦で一九七六年ティシユリの月の第二日なのです。これがどういふことかわかりますか？ 今日この日、皆さんの卒業のこの日は、地上における人類の存在の第七千期目の第二日である、こういうことなんです。すばらしいではないですか？ 壮大なことではありませんか「ここで拍手が入る」、人類の存在の第七千期の始まりを告げ知らせるがごとく、ものみの塔聖書冊子協会がその定款の条項に従ってギレアド宣教師学校の第五九回卒業生を送り出すわけです。」

「エホバも間違ひなくこの協会を祝福しておられます、これは目に見える実でわかる通りです。協会はエホバのみ手にある是認された代理者として知られているのです、だったら、宣教師を送り出す権利と権限について疑問を持つ必要などないじゃありませんか。」

「そして皆さん、これが大事なところです。神がアンティオキア会衆を用いて、一世紀最高の伝道者、パウロとバルナバの二人をお送りになったのと同じく、今日この日も神エホバは、ペンシルバニア州のものみの塔聖書冊子協会、並びにそのニューヨーク法人組織を用いておられ、更なる伝道者を送り出しておられるのです。そして皆さんもこの体制を守っていこうと心に決めているのです。これは実に、実に喜ばしいことです。」※10

フレッド・フランズは、誰かが協会会長に逆らい、決闘を申し込んでいると感じていたに違いない。そこでこのスピーチを使って戦線をはっきりと引いたわけである。要するに、協会は支配権力を持っており、統治体はその領域に立ち入ってはならないという話である。残念なことに、これによって統治体にいるフレッド・フランズ自身の仲間たちがはつきり侵略者だと見なされ、「是認された代理者」たる協会に託された主イエス・キリストの権限を尊重しな

※10 このスピーチに続いてノア会長が話をしたが、かなり感銘を受けていた様子で、あまりの感動にほとんど声を詰まらせていた。フレッド・フランズのスピーチに対して感謝の意を述べていたが、これもきつと心からの言葉だったと思う。ノア自身は「スピーチの有益性についてなかなか良い話をした。

い者たちだと臆面もなく言われてしまった。

出席していた来賓、卒業生の両親や友人たちは、このスピーチの内容や、時として使われる激しい言葉などになかなか感していた。一方、それまでも会長や副会長が食卓の司会を務めた時の話から何かあるなど思っていたベテル家族のメンバーは、統治体内部で抗争が起こっている、それも権力争いだ、という確信を持つことになった。

このスピーチは、(統治体こそが協会を動かすべきだとしていた 四年前の「下克上」講演とはあまりにも違っていた。どちらも同じ人の話なのに、内容はまるで正反對だった。本当に正直なところ、その日講堂を出た時、気持ちの動揺が体の方にも伝わったのか、気分が悪くなっていた。神の言葉が、ある時はこの意見のため、別の時はまったく反対の意見のためという具合に、その時の都合に応じて勝手に使われるのが何よりもやりきれなかった。

それでもノアの場合と同様、こんなフレッド・フランズも理解できないことはない。一九四一年の暮れ、ラザフォード判事はベト・サリムで死の床にあったが、その時ネイサン・ノア、フレッド・フランズ、ヘイドン・カピントンを呼び、三人は団結し「一緒に協力して」いかなければならないと言い含めた(これはラッセル師の「遺言状」を思わせる。書き付けることはせず、言いつけたというだけの違いである)。それから二十年後、一九六一年に、『名が神聖なものとされますように』という本を書いた時、フレッド・フランズはこの時のことを、エリヤが自分の預言者のマント(新世界訳では「職服」とされている)を後継者のエリシャに渡すくだりに関連づけている。^{※11}

ラザフォードは太平洋岸近くにて病床にありました。一九四一年二月七日の日曜日、アメリカ合衆国が第二次世界大戦に突入した折です。ブルックリンの本部から、二人の油そそがれた者たち(一人は一九一三年から、もう一人は一九二二年から)ともう一人の「ほかの羊」(一九三四年から)の三人が、カリフォルニアのサンディエゴにある「ベト・サリム」と呼ばれる家にいたラザフォードのもとに呼ばれました。一九四一年二月二十四日、ラザフォードはこの三人に最後の指示を言い残しました。ラザフォードは長年

の間エリヤとエリシャをはじめとする忠実な預言者たちが復活し、神の新世界において王国の「全地の君」となることを待ち望んでいました。(詩編45・16) しかし一九四二年一月八日木曜日、ラザフォードは七十二歳で亡くなりました。神の王国のためにすべてを捧げつくした、エホバ神の忠実な証人でした。そして神による統治という最重要の事柄についてエホバのために恐れを知らぬ働きを示した人でした。

これは、エリヤの役目がエリシャの仕事によって引き継がれるという出来事が現代において起こったと考えられます。ちょうどエリヤとエリシャが、水を分けてヨルダン川を東へ渡り、エリヤが取られるのを待ちながら共に歩いていった時のように。

エリシャはエリヤからの職服を受け継ぎました。この職服と共に、その力も受け渡されたのです。^{※12}

統治体で改革案について話し合っていた時、フレッド・フランス副会長はこの話、つまりラザフォード判事が死の直前に仕事を受け渡した話をした。きつと何らかの「マント(職服)の受け渡し」があの時起こったのだと信じていたのだろう。すでに述べた通り、ノアがラザフォードの後を継いで会長となった。ヘイドン・カビンソンは大柄なテキサスの弁護士で、アメリカ最高裁判所で何回もエホバの証人の弁護をしていた。そのカビンソンがノアから副会長になるように頼まれたのだが、実は当時「油そそがれた者」であるという告白をしていなかった(これでラザフォードも当時のノアも、「油そそがれた者」であることが世界規模の活動を管理していくための条件だとは思っていなかったことがわかる)。スコットランドのウォルシュ裁判でカビンソン自身が証言しているところによると、それから二、三年してから、どうしてそんなことができるのかという問い合わせの手紙が来て、その段階で初めてカビンソンは「油そそがれた者」でないことをノアと話し合い、結局辞任することにしたらしい。^{※13} それから時が経つにつれてこのふ

※12 1961年発行『みなが神聖なものとされますように』 335-337頁。
 ※13 公式裁判記録 387、388頁。

たりの関係は悪化し、最終的にカビントンは本部スタッフを離れ、個人で仕事を始めた。^{※14} 一九四四年にカビントンが辞任したのを受けて、フレッド・フランズが副会長に選任された。

ラザフォードが死の床で責務を引き渡した三人は（ちなみにこのことから当時「統治体」がなかったことがわかる）これで二人になったわけだが、それでもあれが預言の成就だったという印象は消えなかったらしい。一九七八年、オハイオ州シンシナティで行なわれた大規模な大会で、この時には会長になっていたフレッド・フランズが、三万人の聴衆を前に自分のエホバの証人としての経験を語ったことがある。この時の話は、特にラザフォードが言い残したことを強調しつつ、自分と故ノアとの間柄の思い出に終始した。フレッド・フランズがノアの人柄を語り、「ラザフォード判事が言い残した通り」ノアに最後までついていったし、またそれを誇りに思う、と言うのをじっと聞いていると、追悼講演の趣すらあった。

「マントの受け渡し」のこともっとわかりやすいのは、その同じ年、一九七八年の統治体執筆委員会会議のことである。出席していたのはライマン・スウィングル、エwert・チティ、ロイド・バリー、フレッド・フランズ、そして私だった。「ヤコブの手紙」の注釈書をエド・ダンラップが書いていた時で、フレッド・フランズはそのヤコブ3章1節についての部分に手を入れてほしいと言っていた。これはヤコブが次のように書いている箇所である。

「わたしの兄弟たち、あなた方が教える者となるべきではありません。わたしたちがより重い裁きを受けることをあなた方は知っているからです。」

この部分についてダンラップは、その資格もない者が単に人より目立ちたいからと言って教師になろうとすること

※14 カビントンは自分のアルコール中毒を何とかしようと懸命の努力をしていて、まだ本部で奉仕をしている時から「断酒療法」を行なうなどしていた。一九七〇年代に排斥になった後、ケンタッキーのデイトンにあるスピアーズ病院でこの断酒療法を再度試み、ついに完治した。そこでその後また復帰し、死ぬまで協会との関係が続けたのである。

への警告である」と書いていた。フレッド・フランズはこれをほとんど全文削除すべきだと言ったのである。それがなぜかは特に説明がなかった。ただその時の配布資料に次のように書いていただけである。

「イエスが何人かは教える者にならせたのだとしたら、一体それは何人だったのだろうか。また、教える者にならせるのはイエスのだから、どうしてヤコブに『あなた方の多くが教える者となるべきではありません。』などと言えたのか。ヤコブ自身はどうやって教える者になったのか。」

この注釈書ができあがるのを監督するのは私の役目だったので、会議の席で私はフレッド・フランズに、なぜここを削除すべきなのか、あなた自身はこの部分がどういう意味だと思うのか、と尋ねた。すると、これは神の意志によってクリスチャン会衆全体の中で「教える者」と呼ばれ得る者はごく少数であるべきだということだと思ふ、という答えだった。そこで私は、現代ならば誰がそういう者なのだろうか、と尋ねた。するとフレッド・フランズは、非常に穏やかな調子で次のように答えた。

「私だと思う。もうこの本部に五十年以上もいるし、その間ほとんどずっと書き物と研究をしてきているわけだから、自分ではそう思っている。それから——世界の兄弟の中に何人か。」

この返事もショックがあまりに大きかったので一字一句が耳に焼き付いている。これは私だけが聞いたのではなく、他に三人の執筆委員メンバーも聞いている。我々はこの時、地上にいる教える者のうち、一人が誰なのかを知った。フレッド・フランズという人なのである。他に誰がいるのかについては、想像するしかなかった。後になって何度かライマン・スウィングルにもこぼしたのだが、あの時、他の「教える者」の名前を教えてくださいと突っ込んで尋ねておくべきだったと思う。しかしあの返事を聞いた時には、本当に言葉を失ってしまったのである。

フレッド・フランズ会長は、ダンラップの原稿に変更を求めていたその同じ資料（2頁）で、次の加筆を行なって

はどうかという提案もしていた。

「ヤコブ自身がどうやって教える者になったのかはわからないが、その異父兄弟のイエス・キリストが復活の後ヤコブに姿を見せたことはわかっている。(コリント第一15・7、使徒1・14 献身的でバプテスマを受けたクリスチャンの中に「教える者」になりたという人がいれば、それは必ずしも身勝手な野心からであるとは言えない。教える者になるべくしてなった人に、一八七九年七月に二十七歳で『シオンのものみの塔およびキリストの臨在の告知者 誌の「編集者兼出版者」となった人「ラッセルのこと」がある。」

これは一九七五年の、あのギレアデ学校卒業生を前にしてのスピーチを思い出すような内容である。あの時のフレッド・フランスは、キリストがラッセルを特に任命したのだと断言した。それから三年の後、今度は、そういうキリスト直々の任命が他の場合にも見られ、ごく少数の選ばれた人たちが会衆の「教える者」になることになった。^{※15}

しかし、ラッセルの話を出すこの加筆提案が実際に原稿として使われることはなかった。『ヤコブの手紙の注解』の99頁から102頁の最初のところまでへ99-102頁は、もともとダンラップの書いたものを私が書き換えて、フランス会長の意見に合うようにしたものである(巻末付録参照)。しかしある意味ではフランス会長の意見に対する反論にもなっていた。マタイ23章8節にある「しかしあなた方は、ラビと呼ばれてはなりません。あなた方の教師はただ一人であり、あなた方はみな兄弟だからです。」というイエスの言葉は、ごく少数の人間が特別に選ばれた者として排他的なグループを作るのとは正反対だと思ったからである。私が書き直した部分は委員会でも承認を受け、出版された。

出版物に見られる大胆で力強い言葉と、頼りなく弱々しいとも言える現実との間にこれほどの矛盾が出るのには、もう一つ理由がある。それは、わずかな、象徴的な変更が、本当に実質のある改革の代わりになると協会役員が思っ

※15 統治体の会議でカール・クラインがフレッド・フランスのことを、組織の長年の「御神託」だと言ったことが何回もあった。笑いながら冗談めかして言っていたが、何度もそう言っていたことから見ると、単に冗談とばかり思っていたわけでもないようだった。

ていることである。

例を挙げよう。一九七一年、ノア会長はそれまで自分が独占していたベテルの食事の司会者を務める権利を他の理事メンバーにも回すことに決めた。また統治体会議の司会者も交代制にしようとした。これだけのことで、協会（そしてその役員）が統治体の管轄下にあることになり、「下克上」講演記事の内容に合った状態になったと思っていたのである。他に権威構造における変化はなかったし、そもそも現実を講演記事に描かれていたようなすばらしい状態に近づける必要があるという考えがなかった。

フレッド・フランスも同様だった。驚くべきことであるが、その二十年以上も前、一九四四年にフレッド・フランスは『ものみの塔』に記事を書いており、そこでは『聖書理解の助け』に出たような長老と監督についての基本的な事柄がすべて扱われていたのである。^{※16} にもかかわらず、会衆のあり方その他に何の変更も加えられなかった。つまり、こんなことが判明しましたから記事を書いて出しました、というだけで十分だというわけである。

また、その記事では一九四四年が聖書の預言において意味深い年であるとされている。その理由は、ものみの塔協会における表決権が、それまでのように十ドルの寄付金に基づくものではなくなるという修正案が可決され、協会理事の選出する最大五百名までの成員のみが表決権を持つことになったことである。ものみの塔協会の年次総会で理事の選出に居合わせたことのある人なら誰でも知っているが、これは型にはまったもので、投票もほとんど形だけである。表決権のあるメンバーの大部分は、協会内部のことについて何も知らないし、また協会のやることや方針には手出しも口出しもしない。会議のうち、実質的な部分は普通一時間そこそこであり、これが終わるとまた一年間何もない。

さらに『ものみの塔』1971年12月1日号へ1972年3月1日号、特に148-152頁の記事（フレッド・フランスが書いたもの）

※16 『ものみの塔』1944年10月15日号。

では、この表決権に関する修正案が可決されたことが非常に意義深く、重大なことだとされている。ダニエル8章14節で二千三百日という預言的な期間並びに「聖なる場所が正しい状態にされる」ことが述べられている箇所解釈における中心的な出来事となっているのである。今日エホバの証人にダニエル書のこの部分を見せたところで、一九四四年の協会での修正案可決と結びつける人は千人に一人もないと思う。しかしこれが今日に至るまで、この預言に関する公式な説明である。ちよつとしたことを取り上げ、それに象徴的な価値を持たせて、大いに意義深いことであるかのようにしてしまうという一例である。

さて一九七五年八月一日、五人委員会は最終報告と提案を提出した。委員会を代表して私は四十五頁の文書を作成し、現行の専制体制に変更を加えるべきであるという歴史的及び聖書の根拠を述べ、さらにまた様々な部門を管轄するための統治体委員会システム大綱を十九頁にわたってまとめた。文書の締めくくりは次の通りであった。

「我々五人委員会では祈りと熟慮をもって討議を重ねた。以上の結論を得るに当たり神の聖霊の導きがあつたことを誠実に望むと共に、統治体が決定を下す上で何らかの助けとならんことを祈るものである。また、ここでの修正案が承認された場合には、統治体のメンバーの今まで以上に良好で平和な関係に寄与し、会議において時として見られた緊張関係をなくすことができたと望むものである。(詩編133・1、ヤコブ3・17、18) さらにまた、仮にこの修正案が承認となった場合には、キリスト・イエスの統治、及びその使徒の間の真の兄弟愛をさらに明確なものとする助けとならんことを望むものである。——マルコ9・50。」

これは私の心からの気持ちを表した言葉だった。どうすればこれがキリスト・イエスによる会衆の指揮を疑問視す

るものと取られ得るのかわからなかった。※17

この提案は統治体で検討される運びになり、一九七五年九月一〇日の会議では、圧倒的多数が改革案に同意していることがはっきりした。しかし、さらにまた別の五人からなる委員会が結成され、最終調整を行なうことになった。※18 会長と副会長ははっきり反対意見を表明していたので、統治体ではこの二人を新しい五人委員会のメンバーには入れなかった。

ノア会長は、実際問題としてこの改革は無理なのではないかという意見だった。フレッド・フランス副会長の方は、これは会長という地位に対する攻撃であると断言した。会長自身による改革案の動議記録を出してこられると、あの時のノア兄弟は「脅迫されて」あのように言ったのだと応じた。

ライマン・スウィングルは、統治体のメンバーは会長に敬意を持っている、決して「何も仕事をしない協会組織の、コチコチの無表情で名目だけの表看板である」とは思っていないと述べた（もちろんこれはフレッド・フランスによるギレアデ学校卒業式のスピーチでの言葉をそのまま使ったのである）。会長はこの改革案の枠組みの中でも、十分その実力と指導力を発揮してもらえらるうとも力説した。それでもフレッド・フランス副会長は、この五人委員会の文書を見ると結局自分が言った通りのことをやっていたのがわかると言い出した。来る年次総会では協会の権限を継続させる方に一票を投じるであろうとも言った。あの卒業式スピーチについては、あれは兄弟たちにこのことを知らせ、それまで「いかさま」がなされ続けてきていたと感じさせないようにという義務感から行なったのだとも述べた。

※17 この文書にはグリーンリンスが一筆添えてくれていて、次のように書いていた。「我々の提案は、これまでの体制に対する不満から出たものではなく、聖書と『ものみの塔』の記事が示していることを考慮してのものです。本件につきまして、聖書に鑑みれば、どのような方向に進んでいくべきかは明らかであると思われます。」

※18 この委員会のメンバーは、ミルトン・ヘンシエル、エワート・チティー、ライマン・スウィングル、ロイド・バリー、テッド・ジャラズ
の五人であった。

一九七五年一月三日、新しい五人委員会がその提案をまとめて提出し、ついに最終決議が行なわれる運びになった。^{※19} 司会者が挙手を求めた。二人を除いて全員が提案を実施に移すことに賛成した。

手を挙げなかったのは会長と副会長である。

その翌日、統治体は再び会議を持った。副会長フレッド・フランズは、「もうこのことには関わりなくなかった」ので、その前日の話し合いには参加しなかったのだと述べた。加われば賛意を表明することになり、「良心的にそのようなことはできなかった」と言うのである。ノアのことを何度も協会の「最高幹部」、「地上にある主の民の最高幹部」であると言い、「イエス・キリストはこの地上にいないから、その意志を実行するのに代理を使っているのだ」と述べた。

ダン・シドリック（この人はスラブ系の子孫で、声が低く体格もがっちりしていた）は、「ノア兄弟もフランズ兄弟も、聖書か、せめてものみの塔の出版物から根拠を示してほしかったけれども、そうしてくれなかった。」と言った。レオ・グリーンリースは、全会衆が統治体の指示に従うのに、協会だけが従わないのはおかしいという意見を述べた。ノア会長は多くを語らず、ただ協会は統治体と「一致して」物事を行なうと思ったが、この改革案では協会が下になってしまおうといつ、「多分それで正しいのだろうけど」とつけ加えた。副会長は、自分も協会と統治体は一致して進むだろうと思ったし（アンティオキアとエルサレムのように、ということだろうか?、「今統治体がしたいと言っているようなことはまるで考えたことがなかった。」と言うのだった）。

明らかに会長も副会長も反対意見を変えようとしていなかった。ロイド・バリーは、張りつめた声をふるわせながら、いずれにせよこの改革案は可決されるのだから、もう全員一致にしてくださいと頼み込んだ。

※19 この新委員会が、前の委員会の提案を修正してつけ加えた、ほとんど唯一の目立った変更点は、統治体の委員会にはそれぞれ司会者（これは交代で務める）の他に、常任の「調整者（コーディネーター）」をおくべきだということだった。

再び挙手が求められ、この時はノア会長が手を挙げて賛意を表明し、続いて副会長もそれにならった。

その四年後の一九七九年、フレッド・フランズ（その時には会長となっていた）がある統治体会議の席で、あの時の自分の賛意表明は「脅迫されて」行なったと言ったことがある。確かにそうだったろうと思う。ノアが譲歩した時、それにならざるを得ないと感じたにちがいない。フレッド・フランズはさらに続けて、あの時の改革案には賛成でなかったし、それ以降はただどうなっていくかと「横から見ただけ」なのだとも言った。

以上を、ものみの塔出版物が描く現実離れた話と比べて頂きたい。『ものみの塔』1990年3月15日号へ1990年3月15日号では、イザヤ60章17節（これは「銅の代わりに金を」「鉄の代わりに銀を」そして「平和をあなたの監督たちとして」「義をあなたに労働を割り当てる者たちとして」任命するというエホバの約束が示されている部分である）を引用した上で、

「組織の漸進的な改善」や「継続的な精錬」が扱われており、まるで組織上の改変が問題もなく平和と一致のうちに
行なわれたかのような書き方がなされている。そして、ものみの塔の歴史において常に統治体があったという作り話を描くのである。

すでに明らかにした通り、現実はいぶん違っていた。すなわち、協会設立から七十年間は誰も統治体の話などしなかったし、そもそも「統治体」という言葉を使って考えることがなかった。ラッセルは、自分の死後には委員会が権限と責務を引き受けて物事を行なうように取り決めていた。ところがラザフォードはあっさりこれを捨て、反対派はすべて叩き潰し、続く二十年間というのは会長として完全な独裁を振るった。続くノアも、雰囲気は和らげつてもやはり完全支配を握っていた。しかしその後、言わば一種の「側近者革命」によって会長の座からその権力が奪われるに至った。一九七六年をもって、一人の人間が持っていた権力が何人かの人間に手渡され、半世紀近くもの年月の後、再び委員会が機能するようになったわけである。この権力の行き来は、「組織の漸進的な改善」や「継続的な精錬」とは到底言いがたいものである。

協会一九九三年発行の『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』の「序文」には、エホバの証人について本

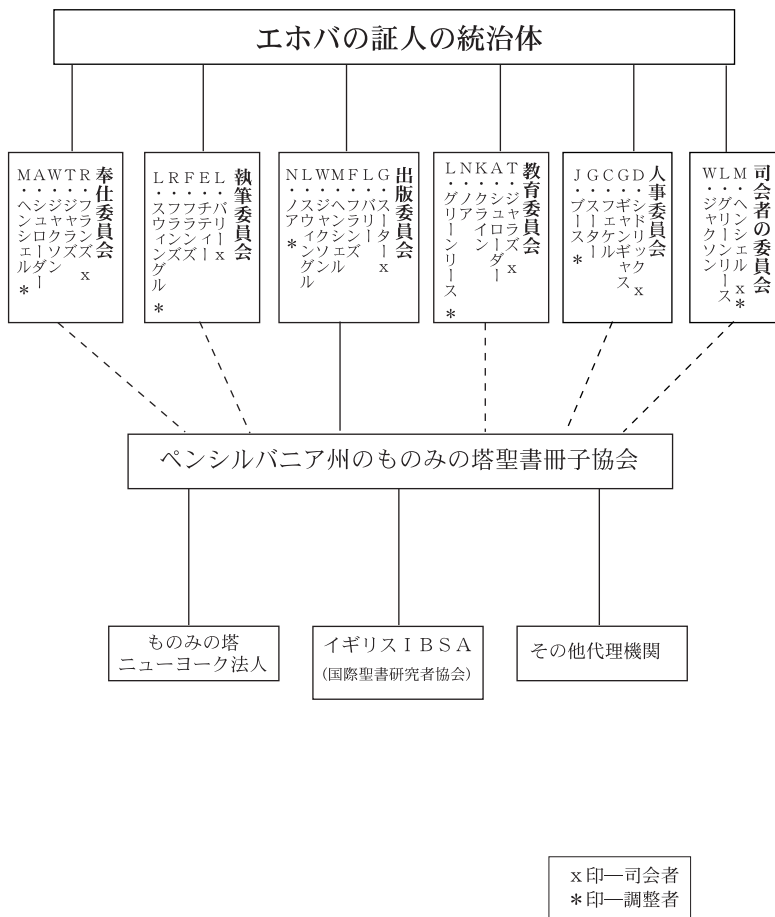
を書いた人は他にもいるが「その内容は必ずしも公平なものではありません」とあり、さらにその後にはこうある。

本書の編集陣は客観的に物事を見、ありのままの歴史を呈示しよう心がけました。

この本の108頁から109頁へ108頁から109頁にかけて、一九七五年から一九七六年の大規模な組織改編について「エホバの証人の現代の歴史において特に重要な、組織上の再調整」と書いている（この原文については本書97頁参照。これについて、どれほど「客観的」で「ありのまま」のことが書いてあるだろうか。

ここには、この組織改革が平和な一致のうちになされたかのように書いてある。仮にこの本の「編集陣」がこの変化に先立つ何ヵ月かの間のすさまじい内部動乱について何も知らなかったとしても、当時ブルックリン本部にいた何百人というスタッフ、すなわち会長が朝の会で発した怒りの言葉の数々を聞いた人であれば誰でも、あれが平和のうちにもたらされたのではないことをよく知っていた。とりわけ統治体のメンバーであれば、あの動乱の激しさを身近に感じていた。この本が発行された一九九三年当時の統治体のメンバー全員がこの実状を経験している。ワンマン支配からグループ支配へと変わった時に会長と副会長が示した抵抗は激しく、棘のあるものですらあったこと、この本が「全員一致で承認」と表現するあの改革は、結局のところノアとフレッド・フランズという二人の人間が敗北を余儀なくされてついに降伏するという（副会長自身の言葉を借りれば「脅迫されて」のことだった）事件をふまえてやっと成立したものであったこと――当時の統治体のメンバーはこれをすべて目の当たりにしていたのである。およそこの本の記述に「ありのまま」などころは見られない。全員一致で平和に改革が行なわれたかのような絵空事を活字にしてみましょうのを見ると、真実を知っているはずの人たちの倫理性が感じられないと言わざるを得ない。

一九七六年一月一日をもって施行された新体制は、新しい五人委員会が作成した図表（次ページ）に示されている通りである。



第一次五人委員会メンバーの一人であったジョン・ブリスは、ニューヨーク州北部で農業を営んでいた人である。おとなしい性格で、よく物事を考えるけれども表現するのはあまり得意でないというタイプだったが、この人が改革後の協会について最もうまく言い表していたと思う。五人委員会の会議でこう言ったのである。

「協会は単なる法律上の道具だ。机の上にあるペンみたいな。使いたい時は手に取る。終わったらまた使う時まで置いておく。」

ペンシルバニア州のものみの塔聖書冊子協会とその補助法人団体は、まさにこういう存在になった。当然のことながら会長の権限はほとんどなくなり、その地位は単に法律上の機能を果たすだけのものとなった。

ネイサン・ノアが死去した時、統治体ではその後継者が問題になった。最もその資格がありそうなのは副会長のフレッド・フランズと、ノアの側近だったミルトン・ヘンシエルであった。ここでヘンシエルはフレッド・フランズが会長になるべきだと言い、これが全員一致で採決された。出版委員会の「調整者」としてのノアの後任は、当然ヘンシエルが引き受ける場所であったが、新会長となったフレッド・フランズはロイド・バリーを推した。どうもノアとヘンシエルの関係はあまり良くなかったようで、ノアは第一次五人委員会との面談の際、もし必要ならバリーが自分の仕事（会長としての仕事）を引き継いでも良いのではないかと思うと語っていたほどである。フレッド・フランズは、これをあのラザフォードの死の床での指示のようなものと考え、何らかの「マント（職服）」の受け渡しが必要に對して行なわれるべきものと考えていたらしい。しかし結局統治体ではヘンシエルを選出した。

その後『タイム』誌に記事が出て、フレッド・フランズが新会長に選ばれたことについて次のように報じた。

フレッド・フランズの名前を知る人は少ないが、このたびこの人物が全世界二億二千万人に対してローマ教皇の権威をしのぐ力を得たのである。※20

これはまったくの見当外れになる。確かにその一年ほど前までならその通りだった。しかし、会長の地位は、もちろんまだそれなりに名誉あるものとは言え、もはや世界規模の権威の中心ではなくなった。組織内でどれほど大きな改革が行なわれたか、外部にはほとんどわからなかったのである。

ローマ教皇のようなきらびやかさや華やかさはなかったにせよ、その程度の権威が会長にあったとすれば、支部の監督はさしずめ大司教だった。いずれも「割り当てられた領域のための、その領域におけるキリスト教の統轄奉仕者」であるとしていたのである。^{※21} この改革により、支部の監督についてもその責務を支部委員会が引き継ぐ形になった。

一九七六年から一九七七年の二年間、良い変化が感じられた。まず世界本部ではそれまでとはまるで違った雰囲気を感じられ、以前より親密で、オープンで、平等な空気ができた。教皇ヨハネス二三世がカトリック教会に「窓」を開けて、「新鮮な空気を入れよう」としたのに似ているという声もあった。

新しい統治体の委員会では、ブルックリン本部及び九十以上の支部におけるベテル家族の状況を改善するため、様々な変革を行なった。いわゆる「一般の証人たち」に対する経済的配慮がなされ、また特に女性のため、あるいは高齢者のためにもそれまで以上の配慮がなされるようになった。一九七六年には一連の特別会議が開かれ、様々な部門から尊敬と信望を集めている人たちが呼ばれた。世界各地の支部の代表者から、アメリカ国内の旅行する代表者、さらにいろいろな地区代表の会衆長老までがブルックリン本部に招かれたのである。^{※22} どの会議においても、それぞれが自由に自分の意見を出し合うという、参加者のほとんどが過去に経験したことがなかった新鮮な雰囲気の中で話し合いが行なわれた。

※21 当時の支部事務所マニュアル『支部事務所の運営手順』5、6頁より。

※22 アラバマ州ガスデンのピーター・グレガソンも招かれたうちの一人だった。何年か後、このピーターと一緒に食事をしたことが私の排斥のきっかけになった。

この雰囲気は、会衆レベルではあまり感じられなかったのではないかと思う。参加者からいろいろな提案が出たものの、大して実行に移されなかったからである。それでも、少なくともその当時、ものの塔出版物が聖書の権威とイエス・キリストの頭の権について強調するようになり、人間の組織の権威についてあまり言わなくなったのは良いことだという声を多くのエホバの証人から聞いた。全体としてより穏健で、バランスのとれた、思いやりのあるやり方になってきたと感じてくれたのである。ある長年のエホバの証人は、「以前は『しなきゃいけない』という感じでしたけど、今では『何々したい』という気がします」と言った。

この雰囲気の変化は統治体の会議でも見られた。ヨベルの千年期が来るとしてかなり喧伝された一九七五年が何事もなく過ぎてしまったことで自粛ムードが漂い、独断的な側面が目に見えて減った。決議の際も、さらに規律を押しつけたり、特定の行為を「排斥に当たる行為」とみなすことなどについてかなり注意するようになった。しかし、完全というわけにはいかなかった。

そんな中で一九七六年、ノアの健康状態が悪化し始めた。ノアはそれでも会議に出られる時には出てきて、改革のもたらした変化にすっかり満足という様子ではなかったものの、概して協力的な態度を示した。ノアの一言のおかげで、バランスに欠けた見解に陥ることが避けられたことも何度かあった。聖書に基づいて意見を述べることはほとんどなかったが、常識的な考え方を持っていたのである。

一方、この当時のフランス副会長は会議の間ほとんど黙って話を聞いており、時として口を挟む程度だった。自分の意見を述べ始めるのは、話し合いが終わりに近づいて決議が取られようとする段になってからである。そのころまでには（各人がそれまでに出していた意見に基づいて）大方の一致した意見というのは明らかにあって、フランス副会長の言うことはこれに反対するものであることが多かった。この最後になって副会長から出てきた意見を受けて流れに影響が出たこともあったが、やはり副会長の意見とは反対の方に決議が定まることが多かった。これが統治体内部でもっとも目立った変化だったと言える。しかし、通常フランス副会長は挙手が求められるまで自分の考え

をまるで表さなかった。公式「議事録」を見ると、決議が「賛成〇〇名、棄権一名」となっている場合が極めて多いが、この一名というのが副会長である。こうなるのは、いわゆる「排斥関連事項」に関して方針をゆるめる場合であることが多かった。世俗的・準世俗的な事柄（土地の購入や運営業務に関することなど）、あるいは支部委員の任命などについては、問題なく全員一致で決定されるのが普通だった。

改革案が可決された時には、ちょっと信じ難い気分だった。協会の権威構造におけるそれほどの大変革がついに認められたのも大きかったが、協会内で最も有力な面々が統治体外部の仲間まで引き連れて強く反対していたことを思えば、なおさらであった。これによって権威格差がなくなって全体がいわば平らになり、独断的な見方を減らして穏健な方向に進み、もっとお互いの立場を思いやれるような空気ができ、さらにはいつの日か、やたらに規則を作って人の生活を束縛し支配する権威主義的なやり方がなくなってくれば良い——私としてはこう思っていた。

先に述べた通り、ある程度それは実現した。しかしそれもしばらくの間だった。二年も経つと、まるで秋の冷たい風が寒い冬の訪れを知らせるかのように、改革前のやり方にまた戻って行こうとする兆候が繰り返し姿を見せ始めたのである。

第5章 しきたりと律法主義

「こうして、あなたたちは、自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている。……人間の戒めを教えとして教え」
「いゝ」 マタイ15・6、9 〈新共同訳〉

普通のエホバの証人であれば、統治体の会議というと、いつも真剣に神の言葉を研究している人たちの会議だと思っている。つまり、自分たちの兄弟によりよく聖書を理解してもらうにはどうすれば良いかと謙虚に考え、真のクリスチャンの業を支える特質である信仰と愛を教えるための方法を前向きに話し合い、常に聖書が唯一にして最終的な拠り所として行なわれる会議である。統治体の会議はすべて内密に行なわれるので、実際にそこで行なわれるかはメンバーでなければわからない。

すでに述べた通り、統治体のメンバーなら、協会と統治体との関係を述べた『ものみの塔』の記事がいかにか現実離れしたものだったか、他の誰よりもよく知っていた。これと同様、統治体のメンバーなら、右に描いたような会議がいかにか現実離れしたものか、他の誰よりもよくわかっている。

すでに書いた通り、私は統治体のメンバーとして九年間を過ごした。会議の記録を見ていくと、どの会議でも常に最も目立ち、また時間を食っている議題は、結局のところ「これは排斥の対象になるか」という話だとわかる。

例えてみれば次のようなイメージであると言えるかもしれない（実際私はよくこう思った。壁を背にして立っている男たちがいる。そこに向かって大勢の人がボールを投げて、また投げ返してもらおうとしている。ボールの数は多く、次々にやってくるので、投げ返すだけで精一杯、他に何をする余裕もない。排斥に関する決定を下して送り返す

と、そのたびにまた別の視点からの質問が投げて返される。結局、本当に建設的なことを考えたり、研究や話し合いをしたりという時間はほとんどなくなってしまう。

私は何年にもわたって実に多くの統治体会議に出た。人の生活に深刻な影響を及ぼし得ることを決めるのだが、参加者が聖書を手にしないどころか、聖書のことなど誰もまったく口にも出さないような会議が実に多かった。これにはいろいろと理由がある。

統治体のメンバーの多くは、お互いいろいろと忙しいので聖書の研究をする時間がほとんどないとわかっていて、時間という点から平均的に言えば、大多数のいわゆる「一般の証人たち」程度か、あるいはそれ以下だったと言っても言い過ぎではない。出版委員会のメンバーには（これにはペンシルバニア法人の役員・理事も入っている）特にこの傾向が強い人が何人かいた。大変な量の書類をこなしつつも、結論や提案を出すのは誰にも任せられない、いや任せるべきでないと思っていた様子である。

たまたま聖書に関することが議題に上るとすれば、それは普通『ものみの塔』の記事にするために誰かが書いた原稿に何らかの反対意見が出た場合だった。こういう時、大概は前もって一週間か二週間前に知らされているにもかかわらず、出版委員会の例えばミルトン・ヘンシェルなりグラント・スーターなりあるいはまた他のメンバーなりは「これについては、忙しくて本当にちよつとしか見てないのだが」と言うのだった。

確かに忙しかったのであろうことは疑いを入れない。しかし、問題の記事原稿についてよく考えることもできず、聖書を調べてみることもできなかったのであれば、どうしてやましさを感じることもなくその是非について意見が言えるというのだろうかという疑問は浮かぶ。一度出版されれば何百万もの人たちにとって「真理」とされるのである。これに比べてどんな書類業務が重要だというのだろうか。

しかしこの人たちだけがこうなのではなかった。話し合いを始めてみると、統治体のメンバーほとんどがその問題

の原稿を読む以上のことはしていないことが明らかに。原稿の主題になっている事柄は、それを書いた人が自分で考えついたもので、たとえそれが聖書の「新しい」解釈を含むものであっても、統治体のメンバーに相談することもなくその考えをとにかく押し進めていったものであることが多かった。つまり書いている方は、自分の考えを他の誰とも話し合ったりすることなく話の筋を固め、最終的な原稿を作ってしまうのである（ノアが生きていた頃ですら、協会の主筆であるフレッド・フランスはこうやって原稿を作っていた。完全に書いてしまってから、やっと他の誰か（しかも普通はノア会長だけ）が、その内容について考えたり話し合ったりできるのだった。話の内容は複雑で込み入っており、果たしてそれが聖書に照らして妥当なものなのか、それとも単にあちこちから引つ張ってきたものをうまく操ってもととなかったような意味にしてしまう論理のお遊びなのか、少し読んだだけではわかりにくいものが多かった。一般に、ただ原稿を読んだだけの人は賛成し、いろいろと調べてみた人たちは内容に疑問を持つことが多かった。

こんな具合であつたため、ある時の会議で、「取り入れの祭り」（これは、聖書によれば、収穫の季節の終わりに行なうはずのもの）^{※1}というのは、エホバの証人がその霊的な収穫を始めた時のことを指しているのだという内容の記事原稿について話し合った時も、多数決でこの原稿はよしとされてしまった。^{※1}これに賛成しなかったライマン・スウィングルは、当時執筆委員会の調整者だったが、その際のせりふはこうだった。「わかりました、そうおっしゃるんなら工場へ印刷に回します。だからって私はこの原稿が正しいとは思いませんが。まあ、『ものみの塔』が間違ふこともあるという証拠の山がまたちょっと大きくなるだけのことです。」

聖書についての話し合いがないもう一つの理由、これはもはや明らかにしたと思う。つまり、統治体のメンバーのほとんどは、それほど聖書に通じているわけではないのである。メンバーの忙しさは今日に始まったわけではないのだから当然である。私自身も、一九六五年まではずっと仕事に追われ、真剣に勉強する暇などほとんどなかった。

※1 『ものみの塔』1980年2月15日号8-24頁へ1980年5月15日号8-24頁

しかし問題はこれだけではないと思う。むしろ、そのような勉強や研究調査はそれほど重要ではないという感覚があった。何十年もかけてできてきた協会の方針や教義があれば指針としては十分で、統治体でどのような提案がなされようとも、既存の方針や伝統に合っていればそれで良いはずだという感覚である。

事実関係を見るとこれがはつきりする。例えば「排斥問題」について長い話し合いが行なわれていても、協会の『組織』の本、あるいは『支部事務所の手紙に回答するための助け』という本に何か関連したことが載っているのを誰かが見つけたとたんに話がついてしまうことがある。この『支部事務所の手紙に回答するための助け』は、協会の方針の概要を様々な事柄についてアルファベット順に並べたもので、就職関係のことから結婚、離婚、政治、兵役、労働組合、輸血関係の問題に至るまで、実に多くのことが扱われていた。関連項目が見つかる、たとえばその方針に聖書からの根拠が挙げられていなくても、ほとんどのメンバーにとってはそれで十分だったと見え、とにかく印刷されたものに書かれている方針に合っていれば、どんな提案にでも賛成する。何度となくこれを目にしていたにもかかわらず、出版物に書かれた方針によって話し合いに突然決着がつくのは、やはりその都度感心した。

聖書が話し合いに出てこない理由として最後に挙げなければならないのは、そもそも聖書が何も語ってくれないような事柄が次々に出てくることである。

例えば、血清注射は輸血と同じと見なすべきかとか、血小板は赤血球と同じぐらい良くないものかという話し合いが行なわれる。あるいはまた、ある妻が不貞をはたらいた場合、夫に（たとえその夫が極めて乱暴な人間だとわかっていても）そのことを告白しなければならない、そうでなければその妻が悔い改めたと言ってもそれは認められず排斥の対象になる、という協会の方針について話し合う。しかし聖書のどこを見ればそのようなことが書かれているのか。

統治体で話し合った事例、及びその決定の一例を紹介しよう。コココーラの会社でトラックの運転手をしていたエ

ホバの証人がいたのだが、この人がいつも行く大口配達先の一つに大規模軍事基地があった。この仕事を続けながらもエホバの証人として認められるのか、それともこれは排斥の対象になる行為なのかというのが論点となった（ここでの問題は、軍隊関係の場所及び人と関わっているという点である）。

聖書のどこを見ても、ややこしい理由づけや解釈抜きにはつきりとそんなことが書いてあるところはない。ところが結局統治体では、まったく聖書からの根拠はないままに、この仕事は良くないからこの人にはこの配達先をはずしてもらわねばならないと多数決で決まったのである。同じような例として、軍基地内の将校用クラブでバンド演奏をしていたエホバの証人を挙げることもできる。これも統治体では「認められない」とされた。聖書は何も言わないので、人間が考えて答えを言ったわけである。

一般にこの手の話し合いでは、ある行為が認められないとして聖書からの根拠が出されたとしても、それは例えばヨハネ15章19節の「あなた方は世のものではない」などの非常に漠然としたものであることが多かった。結局、メンバーのうち誰かが、これは気に入らないと思いはしてもそれ以上の理由がない場合にこの部分を挙げ、当該状況に拡大解釈して当てはめることが多いのである。そういう漠然とした部分がどんな意味なのか、また一体どんなことについての部分なのか、聖書の他の部分も検討した上で決めるべきではないのか——こんなことは考える必要もない無関係なことだと思われるような空気があった。

統治体での決定は三分の二多数決という規則によっていたが、これが時としておかしな結果を生むこともあった。規則では、動議を可決するには（メンバー全員の）三分の二の賛成が必要だった。誰か一人が多数意見とは違う意見を表明したり棄権したりしても「拒否権」を発動する形にはならないので、これはなかなか良い規則だと思っていた。大した事柄でなければ、まったく賛成というわけではなくても、だいたい多数意見についた。しかし私が本当に良心にやましさを感じるような議題になると、少数意見になっていることがしばしばだった。しかし私一人が違う意

見を述べることはまずなく、他にもう一人か二人、時には三人のメンバーが動議に賛成しないことによって反対意見を表明していたことが多い。^{※2} 権威機構の改革から（正式には一九七六年一月一日から）二年ほどの間はそんなことも少なかったのだが、私がメンバーだった最後の二年間はかなり強硬路線が打ち出されていて、私が多数意見に賛成しなかったり、棄権したりすることが多くなった。

ここで、統治体で意見が分かれた時どうなったかを見てみよう。これはそれほど珍しいことではない。

協会が「排斥の対象になる行為」だと決定していることが行なわれてしまった事例について話し合いが行なわれているとする。例えば生命の危険を回避すべく血液成分の一部の注射を受けたというケース。あるいはまた、夫がエホバの証人ではなく、軍務に服しているのだが、自分はその夫の勤務する軍基地の売店で働いているというケース。

そんな話し合いでは、統治体での見方がそろわず、真つ二つに意見が分かれることがある。あるいはまた、特定の行為や職業などを「排斥対象」から外すべきだという意見が多数を占めることもある。すると、三分の二多数決の規則によって次のようなことも起こる。

仮に十四人の出席メンバーのうち九人がある行為を排斥対象から外すことに賛成し、五人がそのままにすべきだと言ったとする。この場合、この行為は排斥対象行為のままとなる。九人は明らかに過半数であるが、三分の二に達していないからである（仮に十人が賛成してもまだ不十分なのである。なぜならば、十人なら出席メンバーの三分の二を越えるが、この規則は現存メンバー全員の三分の二の賛成を要求するからであり、メンバーはその当時大体十七人ない十八人いたからである）。つまり排斥対象から外そうと言っている九人の中から誰かが動議をしても、可決されるには十二人の賛成が必要なのであるから駄目となる。そのままにしようと言っている五人のうちの誰かが、そのままの方針で

※2 記憶にも記録にも残っているが、八年以上もの間に、私だけが単独で多数意見に賛成しなかったり、棄権したりしたのはほんの二回か三回というところである。

行こうという動議をしても、もちろん駄目である。ところが、そのままの方針で行こうという動議が通らなくても、排斥対象の判断はそのままになる。なぜならば、既存の方針を変えるには何らかの動議が可決されなければならないというのが規則だからである。ミルトン・ヘンシェルは、三分の二の賛成が得られない場合、「現状維持で行くべし」、つまり何も変えるべきではない、という見方を示していた。普通こんな時には誰も自分の意見を変えたりしなかったので、話し合いは行き詰まるが多かった。

すると結果として、排斥対象行為はずっと排斥の対象であり続けることになる。たとえば統治体の過半数がそれはおかしいので反対だと言つてもである。

このように、ある程度的人数、時には(三分の二には足りないまでも)過半数が、ある行為についてこれは排斥対象にしておくべきでないという意見を出した時が一再ならずあった。そんな時は、我々のやり方は理屈に合わない、むしろわけがわからないと言つても良いのではないかと発言した。物事をそれまで通りにしておくとか排斥処分になる人たちがいて、一方この統治体で何人か、時には過半数が、そこまでしなくて良かろうと言っている、こんなことがあつて良いものだろうか。これで排斥処分になる兄弟や姉妹たちがこのことを知ったらどう思うだろうか。※3

例えば、会衆の長老五人からなる「審理委員会」がある件を審理するに当たり、その五人のうち三人がその行為は排斥の対象にならないと判断した場合、これは三分の二に満たない五分の三の意見であるから通らないだろうか。※4 この場合この人は排斥処分になるだろうか。そんなことはない。とすればなぜ統治体の過半数が反対していても、決議の規則に縛られて今まで通りの排斥対象基準を通すというのか。少なくとも排斥に関する事柄については、たとえば何人かでも(まして過半数が)排斥に足る理由がないと判断した場合には、排斥対象としないと決定すべきではない

※3 統治体の会議は内密に行なわれるので、このことが他の誰かに知られるということはまずあり得ない。会議の「議事録」も、他のエホバの証人が見ることは決してできない。

※4 五分の三は60%に過ぎず、三分の二である66・66%には足りない。

か。

このような疑問を統治体に出してもまったく反応はなかった。排斥処分について意見が分かれるケースは何度もあったが、そのたびに既存の方針が有効になり、それが当然にして当たり前のこととされた。当事者にとってはかなり大きな決定である。ところがメンバーの方は、だからと言ってこれまで通りの方針を取りやめようとはしない。結局、協会であつて一度排斥に関する方針が定められた（これは誰か一人の考えである場合が多く、しかもこういう場合の一人というのは現状がまるでわかっていない人間であることが極めて多い）というだけで、この方針が効力を持つことになる。つまり規則ができたわけであり、三分の二が何とかしない限りその規則が通る。

どのケースにおいても、「排斥対象」というのは聖書にはつきりと罪であると書かれているものではない。すべて純粹に組織の方針によるものである。方針がひとたび出版物に載ると、世界中の兄弟たちを拘束するものとなり、当然その結果として起こることも押しつけていく。ここでイエスの言葉が当てはまるところではある。「彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない」。^{※5} この判断は読者にゆだねたい。私には、自分の良心において思ったこと、そして取らずにはおれなかった立場、この二つしかわからない。

しかし、統治体のメンバーはおおむね自分たちが正しいことをしていると感じていたと思う。それでは、反対意見が仲間のメンバーの何人か、時には半分、いやそれ以上の人数から出て、なおかつ排斥にすべしという意見を持ち続ける背景には、どのような考え方があったのか。

一度話し合いが長引き、意見が分かれそうになった時、テッド・ジャラズが皆の思っていたことを代弁するような

※5 マタイ23・4へ新共同訳。

意見を言った。この人もダン・シドリックと同様にスラブ系（ポーランド）ではあったが、二人は体格も性格も違って、シドリックが物事の是非についてどちらかというと気分にも動かされやすいのに対し、ジャラズはより冷静なタイプである。そのジャラズが、「目下話し合いの対象となっている状況において、現行の方針によって苦しい立場に立つ兄弟も確かにいる」と言い、さらにこう続けた。「この兄弟たちが気の毒だと思う気持ちがないわけではないが、我々は二人や三人の人間だけを扱っているわけではないことも常に頭に置いておかないといけない。世界規模の組織を扱っているわけだから、この世界レベルの組織全体に与える影響を考えないといけない。」※6

つまり組織にとって良いことがその成員にとって良いことであり、個人にとっての利害が組織全体の利害の前に犠牲になることもやむを得ないという考え方である。これはまたメンバーの多くが受け入れている考え方でもあるらしかった。

あるいはまた、方針をゆるめると次々に悪行を許してしまうことになり得ると言うメンバーもいた。たまたま悪行についての報告でもあれば「そういう危険の証拠だ」という話になる。統治体のメンバーの大部分が動議を待たずに方針の変更を認める方向に傾いている時など、誰かがこういう話を出したものである。ある時などミルトン・ヘンシェルは「兄弟たちにこれを許してしまったら、どこまでやられるかわかったものではない」と力説していた。

ミルトン・ヘンシェルにせよ、あるいは別の時に同じようなことを言った他の誰にせよ、長い間の方針に従うことによって保護用の「柵」を作り、そこから迷い出たりしないように「皆をきちんと管理」することが必要だと本当に感じていたのだと思う。

そんな「柵」が、本当にはつきりと神の言葉に表されているものであったならば、私は同意するしかなかっただろう。

※6 これはまた、ミルトン・ヘンシェルがよく、こういうことに関しては「実際の」でないといけないと言っていたのと実質的には同じような意味だっただろう。ミルトン・ヘンシェルとテッド・ジャラズの意見はいつも一致していた。

うし、また喜んで同意していたであろう。しかしそうでないことがあまりにも多かった。このことは、方針について手紙を書いてくる長老たち（支部委員会のメンバーであることが多かった）が聖書の根拠が見つからないと言っていたことや、また統治体の方でもやはり見つけれなかったことから明らかである。そこで統治体の方では自分たちで理屈を作ることになる。すると話し合いは長引き、ほとんど論争の様相を呈することもあった。

先ほど触れた会議の際、ミルトン・ヘンシエルが言ったことを受け、私は、兄弟たちに何かをすることを「許す」などということは我々がすべきことではなからう、という意見を言った。神こそがその立場にあり、「許す」場合には、神の言葉がよしとしているか、あるいはまた別に何も言っていないかでわかる。禁ずる場合には、神の言葉がはっきりとそのことを明記しているか、あるいはまた何らかの原則を明記しているのでわかる。不完全で、誤りを犯し得る人間である我々に神が権限を与え、他の人たちに何が許されていて何が許されていないのかを勝手に決めても良いと思っているとは考えられない。そしてこう続けた。「聖書にはっきりしたことが書かれていない場合、我々が神の役目を演じる理由があるのでしょうか。そんな役目は難しすぎます。そんな時は、神に審判を任せるのが良いのではないのでしょうか。」この時だけでなく、同じような議論が持ち上がった他の時にも、このことを繰り返し言った。しかしメンバーの大多数はわかってくれなかったようである。それは最終的な意見をとった時にははっきりした。

私はこんなことを感じていた。我々統治体の方で何か規制をゆるめると兄弟たちが悪いことをするのはないかと考える。これではまるで、兄弟たちに義を求める心などなく、本当は罪を犯したがっているのだが組織の規則で押さえているだけだと考えているようなものではないか。

その何年前か前、協会の『目ざめよ!』誌に載った記事を思い出した。カナダのモントリオールで起きた警察の話で、ほんの一日かそこら警察権力が機能しなかっただけで、いつもは法に従っている市民があらゆる違法行為に走ったという内容だった。この『目ざめよ!』誌の記事では、真のクリスチャンなら、きちんと法を守った行動をと

るに当たって法に強制される必要はないとしていた。※7

ではなぜ統治体では規則をなくすのは危険だと考えているのか。なぜそうすることによって兄弟たちが不品行・悪行を「やつても良いことになる」と考えるのか。兄弟たちに対してどんな態度をとっていることになるだろうか。信頼していると言えるのか。モントリオールの警察ストの時に悪事を働いた連中と同等だと見なしているのではないのか。兄弟たちに正しいことを求める深い気持ちがあると思っただけで、このように統治体には、自分たち以外は信用できないという空気が感じられることがあった。これもまた、感心すべき謙虚な態度の現れとは思えなかった。

意見が分かれた挙げ句にたどり着いた決定であっても、その影響は決して小さくない。ひとたび統治体の決定が公にされると（これは出版物その他の方法による）、従わなければ排斥になる。会衆からも、家族からも、友人からも切り離される。従うためには、たとえ新しい仕事を見つけないのが大変でも、家族を養うのが大変でも、仕事を辞めねばならないこともある。妻あるいは夫の希望に反対する結果になると離婚にもなりかねないし、また実際に離婚に至るケースもあった。これは結婚生活の終わりであり、家庭・家族の終わりであり、子供はどちらかの親から引き離される。また時にはある種の法律に従うことができないと感じた結果逮捕され、家族を離れて投獄の憂き目にあうこともある。命を失うこともあり得る話だったし、あるいはさらにつらいとも言える状況として、愛する者たちを失うこともあり得た。

今度は、たとえそれまでの方針が変更されてもやはり困ったことが起こるという例を挙げる。放っておくと死に至りかねない出血を抑えるため、血友病患者者に血液成分の一部（例えば血液凝固因子である第八因子）を用いることに

※7 『目ざめよー』 1969年12月8日号21・23頁参照

いてである。

本部（あるいは支部）が血友病患者からの質問に対して長年与えていた回答は、そのような血液成分の一部の投与は、一回ならば「薬の投与」と見なされるので構わないというものだった。しかし二回以上行なうと、これはその血液成分を常に「食べて」と見なされ、血を食することに關する聖書の戒めに触れるとされた。^{※8}

何年も後になってこの方針は変更になった。だがそれまでの方針に沿った回答をもらった血友病患者は、一回きりの血液成分注射を受けてしまったら、さらにもう一回やると聖書に背くことになると信じている――質問の手紙に答える係だったスタッフは、このことがわかっていた。その立場を貫いて、出血の末死亡することもあり得る。

この時、この方針の変更を出版物に発表するのは控えた方が良くということになった。実は、変更前の方針にせよ出版物に出たことはなく、質問があった時にその都度個別に知らせていた。したがってこの変更を記事にするとなると、まず以前はどうだったかを明らかにし、次に今はもうそれがなくなりましたと書かねばならない。しかし当然これは望ましくないというわけである。そこで担当スタッフは残っている記録を調べあげて質問してきた人たちの名前と住所を突き止め、その一人一人に方針の変更を伝える通知を出した。こうすることで、担当スタッフの気持ちはある程度おさまった。

ところが、ここで担当スタッフたちは、質問の中には電話によるものも多かったことに気がついた。電話については記録がないので、質問してきた血友病患者の数々がどの誰なのかまったくわからない。結局、新しい方針が伝えられるまでに死んだ人がいたのかどうかもわからないし、連絡がつけられないまま以前の方針に従って死んでいく人があるのかどうかもわからない。わかっていたのは、とにかく自分たちは組織の上からの指示に従順に、忠実に従ったということだけである。

※8 創世記9・3、4、レビ記17・10-12、使徒15・28、29などが引き合いに出された。

この方針の変更は、一九七五年六月一日の統治体会議で正式なものとなった（巻末付録参照）。そして一九七八年になってからやっと『ものみの塔』1978年6月15日号（1978年9月15日号）31頁に公表になったが、その時もしっかりとした書き方がされず、またおかしなことに血清注射が病氣にかかった時の治療に使われるという話と一緒に扱われていた（血友病はいわゆる病氣ではなく、遺伝性の欠陥である）。つまり、この記事によって血友病患者が血液成分の注射を二回以上受けることについての方針の変更を示します、とは書かれなかったのである。

こういう統治体の考え方は、長い間続いてきた方針が重要視されるということにも見られる。例えば次のような議論が行なわれる。長年にわたって何千という人たちが協会の方針に従うことで投獄をはじめ大変な目にあった。今になって方針を変更すれば、ではこれまでの苦労は必要なかったのかということになるだろう。そういった苦難も「義のための苦しみ」として満たされた気持ちで受け入れていたであろうに、ここで変更しては幻滅が生じ、自分の受けた苦しみを他の人は受けずに済むのかという不公平感すら生まれるかもしれない。

しかしこの考え方は聖書が説く精神からはいささか遠いのではないかと思った。むしろそのように苦しんだ人たちは、もはや自分たちが味わったような苦しみを味わう必要もなくみんなが安心して組織にいられるのだと喜んでしかるべきではないかと感じた。例えば、もし重税（あるいは不当な税）のために農場を失った人があって、後にその税がなくなったとわかれば、農場を失わずにすむ友人のために喜ぶべきではないだろうか。また、肺を患っている坑夫がいて、後に炭鉱の労働条件が良くなったと聞けば、自分にはもう益がなくなるとも、やはりうれしく思うのではないか。本当のクリスチャンであればきつとそうだと思う。ここにはむしろ統治体を持つ自分たちのイメージ・信頼性・人への影響力について不安があるのではないか。間違いを認めることでこれが弱まるのを恐れているのではないか。そんなことを自身に問わねばならないような気がした。

統治体の会議で話を聞いていると、アメリカ合衆国最高裁判所で争われたエホバの証人関係の裁判の数々を思い出すことがあった。相手側の弁護団の言い分が、いろいろな点で統治体の理屈に似ていたのである。相手側弁護団はよく危険の「可能性がある」と言った。例えば、家から家への訪問が実際に迷惑になったりあるいは窃盗その他の犯罪行為の目隠しとして使われたりする可能性がある、したがってこの宣教行為の自由に制限を加えるべきだという主張があった。また、エホバの証人が自由に活動을 続け、公園でスピーチをしたりすると、場所によっては地域をあげて敵意を持っているので暴力沙汰になる可能性がある、したがって制限が必要だという議論もあった。また、国旗敬礼に関して、あるいは政府が「悪魔の組織の一部」であることに關してエホバの証人が意見を言うのは、周りのより大きな共同体にとって有害であり、治安を攪乱する可能性がある、ゆえに制限が必要であるという議論もあった。

最高裁判所の裁判官たちは見事な洞察と明晰さをもってこれらの議論を吟味し、これに実質がないことを示して見せた。個人の権利、あるいは評判の悪い少数派の権利であっても、単に危険の可能性があると、多数の利害に関わるかもしれないという意見があるから制限を加えるべきだという点に裁判官は納得しなかったのである。そして、そのような自由に制限を加えるには、危険の恐れがあるというだけでは不十分で、実際に「明らかに目下存在している危険」がなくてはならないという立場を取った。※9

最高裁判所の裁判官がこれほどまでに慎重で、物事の本質を見極め、個人に対する思いやりを示す態度をとらなかったならば、エホバの証人側が有利な判決をどれほど手にできていたか疑わしい。判決の数々は協会の出版物で称賛されたが、裁判官たちが見せる判断や、感情的な要素もからむ問題への取り組み方は、残念ながら統治体の会議によく見られるものよりレベルが高いようだった。エホバの証人に関する裁判で、ある裁判官が言ったことが思い出される。

「本件には難しいところがある。その判断の原則が曖昧だからではなく、問題となっているのが我々の国旗だからである。しかしな

※9 協会発行の『良いたよりを擁護して法的に確立する』58頁参照

がら、我々はここに合衆国憲法に基づき介入の限界を適用する。思想及び信教において異なった意見を持ち、さらには反対の信条を持つ自由によって社会組織が乱れるのではないかという懸念はいささかも持たぬものである。……異なった立場を持つ自由は、些細なことだけに限られるものではない。それだけでは自由も単なる形だけのものに過ぎない。自由の実質を試すのは、現行秩序の核心に触れるような問題についても異なった立場を取る権利である。」※10

この裁判官の持つ「現行秩序」に対する信頼、そしてその秩序あつての自由に対する信頼は、統治体の何人かが仲間のエホバの証人に対して持つ信頼に比べると随分大きいように思われた。何しろ仲間のエホバの証人に良心の自由を与えたら「神権秩序」に影響が出てしまうだろうと考えているのである。最高裁判所の裁判官たちが統治体の何人かのような考え方をしていたならば、エホバの証人は次々に敗訴していただろう。

裁判の判決は、歴史という名の審判が裁くであろう。聖書には、クリスチャンの長老がそれぞれ神の羊たちをどのように扱ったかについて神の前に「言い開きをする」日が来るとある。これを考えると、クリスチャンの中で大きな権威を持つ者たちは自分の行ないをしつかり検討するべきだと言える。※11

方針の変更が伝えられている協会の出版物には、これまでその必要もなく苦しみを味わった人たちに對する思いやりは感じられず、協会は神の経路であり、統治体は神に指名され、導かれている管理者の集まりだというイメージを守ることが大事だという気持ちが見られる。このことがはつきりとわかるのは、「代替公務」を受け入れることについての大きな変更であろう。

「代替公務」というのは、軍務に服することを良心上の理由から拒否する人たちに対し、政府からその代わりとして与えられる公務のことである。もののわかった国なら、これを設けているところがある。エホバの証人組織

※10 前掲書、62頁

※11 ヘブライ13・17。

とその統治体で起こったことをふまえた上で、一九九六年の方針変更を考えると、非常に興味深い。

ものみの塔協会の公式見解（これは第二次世界大戦中にできたもの）によると、もしエホバの証人でそうした代替公務に服するものがあれば、これは「妥協した」ことになり、すなわち神との関係が絶たれたことになる^{※12}とされていた。なぜならばこの代替公務というのは「代替」、すなわち何かの代わりをしているわけであり、結局その何かと同じである、というのがその理屈である。^{※12} この代替公務が軍務の代わりであり、軍務は血を流すことにつながる（少なくともその可能性がある）のだから、この代替公務を行なう者は「血の罪を負う」ことになるというのだった。ちなみにこの大変な方針は統治体が現実のものとなる前にできたものであり、したがって明らかにフレッド・フランズとネイサン・ノアがいろいろな方針を打ち出していた頃にできたものである。この協会の方針に従わなければ自動的に「断絶」と見なされて、排斥になったのと同じ扱いを受けた。

この方針は、『ものみの塔』1996年5月1日号へ1996年5月1日号でくつがえされた。「カエサルのはカエサルに返す」と題された記事である（該当部分は付録に掲載）。それまで五十年以上にわたって効力を持ち続けた方針の歴史については、まったく触れられていない。また、その二十年ほど前、この方針に関して統治体内部で何があったかについて、まったく触れられていない。これを紹介すれば、「三分の二多数決」のルールがどれほど人々に影響を与えるか、よくわかり頂けると思う。

二十年以上も前の一九七七年十一月、ブルックリン本部にベルギーのエホバの証人（ミシエル・ウェバー）からこの方針の根拠を問う手紙が来た。これを受けて、統治体会議では代替公務について長時間にわたる白熱した討論が何

※12 比較的近年、『ものみの塔』1990年11月1日号へ1990年11月1日号12頁でも代替公務は非聖書的な奉仕に代わる「妥協的な代替作業」とされていた。

度も行なわれた。具体的には、一九七八年一月二八日、三月一日、九月二六日、一〇月一日、一〇月一八日、十一月五日の各会議である。また世界規模の調査が行なわれ、九十もの支部から手紙が寄せられた。

関連書類を見れば明らかになる通り、主要国を含め各国支部委員会の多くでは、影響を受けるエホバの証人の多くが協会の方針を理解できず、それが聖書的であるかどうかとも理解できないとしていた。また多くの場合、委員会自らが方針に疑問を投げかけ、これは良心の問題であるとする聖書的な根拠を挙げていた^{※13}（私も同じような結論を示す十四ページほどの報告書を作成し、歴史上・聖書上・言語上の証拠を提示した。これをふまえた上で、先ほど挙げた統治体会議のうち、最後の三回でどのようなことが起こったのかを見て頂きたい。

一九七八年一〇月一日の会議では、出席メンバー十三人のうち九人が、現行の方針を変更し、代替公務を受けるか拒否するかは個人の良心にまかせるという案に賛成し、四人が賛成しなかった。当時の統治体のメンバーは十六人であり（しかし全員が出席してはいなかった、九人では十六人の三分の二に達しない。結局変更はなかった。

一〇月一八日の会議でも代替公務の話が出たが、決議は取られなかった。一月一五日の会議にはメンバー十六人全員が出席した。方針を変更しようという意見、つまりエホバの証人がそれぞれ自分の良心に照らして代替公務を引き受けるのならば、それだけのことで神に不忠実であると決めつけたり、会衆から断絶した扱いにしたりしないようにしようという意見が十一人だった。これは三分の二を超える多数である。

それでは変更になったかと言うと、実はならなかった。短い休憩時間の後、先ほどは変更を認める多数意見に賛成したが気が変わり、やはりそれまでの方針が続くことを支持することにしたというメンバー（ロイド・バリー）がいたのである。これで三分の二多数が崩れてしまった。もう一度決議を取ってみると、この時点で十五人出席していた

※13 関連書類等については『クリスチャンの自由を求めて』256-270頁 参照。この方針が男性のエホバの証人や支部委員会メンバーにとっていかに深刻な問題だったかが明らかにされている。

うち、九人が変更賛成、五人が反対、一人が棄権という結果だった。^{※14}

代替公務について、六回の統治体会議において話し合われたのである。そして、いずれの決議においても、統治体のメンバーの過半数が現行方針の取りやめを支持していた。たった一度、三分の二多数が得られた時もあったが、これも一時間と続かず、結局、方針はそのままとなった。したがって、エホバの証人の男性は代替公務を拒否して投獄を覚悟せよ、ということになったのである。代替公務は神の目になうことだろうと当人が心から思っているものである（これは本部に寄せられた手紙が示す通りである）。ひどい話だと思われるかもしれないが、これが実際に起こったことであり、統治体のメンバーはほとんど、別に気にかけることではないと思っているように見えた。結局、みんな規則に従っていただけなのである。

それからさらに一年後、一九七九年九月一五日の話し合いでは意見が見事に分かれ、半数が変更賛成、残りの半数が反対という形になった。

それから十六年間、この方針は続いた。しかし『ものみの塔』1996年5月1日号へ1996年5月1日号で突然、代替公務を受けるかどうかは良心の問題です、ということになった。しかしこの十六年間に何千というエホバの証人（主に若い男性）が兵役の代わりに公務を行なうことを拒否したばかりに刑務所暮らしをしている。一九八八年の段階でも、アムネスティ・インターナショナルはフランスの状況について「この年、兵役を良心的に拒否する五百人を越える人たちが（大部分がエホバの証人）が監獄に入れられた」と報告している。また同じ年のイタリアについては、「およそ千人の良心的拒否者（ほとんどがエホバの証人）が兵役あるいは代替公務を拒否したため十の軍の獄舎に入れられている

※14

ロイド・バリーが席をはずしたのである。私の記録によると、賛成したのが、ジョン・ブース、エワート・チティ、レイモンド・フランズ、ジョージ・ギャンギス、レオ・グリーンリス、アルバート・シュローダー、グラント・スター、ライマン・スウィングル、ダン・シドリック。反対したのが、ケアリー・バーバー、フレッド・フランス、ミルトン・ヘンシエル、ウィリアム・ジャクソン、カール・クライン。テッド・ジャラスが棄権した。

と報告されている」^{※15}とある。

しかもこれは現実の一部分にすぎない。一九七八年のあの時、一人の統治体のメンバーが意見を変えなかったならば、今挙げた人たちの誰一人として監獄行きにはならなかっただろう。支部委員会の報告がはっきり示している通り、こうした人たちは良心的な理由で監獄行きになったのではない。組織に強制された方針に従ったのである。

今回の変更はむしろ歓迎すべきものであるが、半世紀にもわたって、多くのエホバの証人が、合計すれば何千年もの時間を失ったことを思わずにはおれない。家族や友人と過ごすこと、自分や周囲の人の生活に役立つこと、またその他の活動に従事することなど、監獄の中にはできないことをする自由が失われたのである。このようなことは一切必要だったのだから、これは価値ある年月の大変な無駄である。組織の権威によって強制された、聖書の根拠のない方針の結果だった。

もし誤りを素直に認めたのならば——教義上の誤りだけでなく、個人が良心的に決める事柄にまで立ち入った誤りをも認め、そのことで大変な迷惑をかけてしまったことも認めたのなら——まだ見るべき点もあると思えるし、抜本的な改革が行なわれる望みもありそうだと思えるだろう。ところがこの『ものみの塔』^{1996年5月1日号}にはまったくそういうところが見られず、半世紀以上にわたって強制してきた誤った方針の生んだ結果について反省のかけらも見られない。なぜそれほど年月、間違った方針が厳しくとられ続けたのかという説明すらない。ただ文が二つか三つ並んで変更が知らされている。まるで上からの勅令といった趣で、要するに「この件についてはもう君の良心を使ってもよろしい」と伝えている。

謝罪のない代わりに、この変更は喝采をもって迎えられてしかるべきだと思っているかに見える。これはもう何十

※15 近年、ヨーロッパのいくつかの国々において、ものみの塔協会が政府に対して一定の位置を確保したり維持したりしにくい状況が見られた。このことが、この代替公務に関する方針変更の背景になったのかもしれない。

年も前に良識（そして謙虚さ）をもって加えるべきだった変更である。統治体内部からも支部委員会からも強力な聖書の根拠が示されつつ、それに抗して加えられなかった変更である。その際委員会の提示した聖書の根拠には『ものみの塔』196年5月1日号へ196年5月1日号に掲載されているもの以上に広範で精密なものもあった。これはすでに一九七八年に示されていたが、それまでの方針を守ろうとする統治体のメンバーはこれを価値のないものとして退けたのである。

例えばこの記事の第一七段落では、「聖書時代には強制的奉仕が実施されていたようです」とあり、ローマ支配のもとで「賦役」労働があったことを、キレネのシモンがイエスの十字架を運ばされた例と共に述べている歴史書を引用している。ところがこの十八年前（一九七八年）に私の作成した報告書では、まさにこの事実に関する根拠を十四ページにわたって示しており、さらに「税」を表わす聖書での用語（ヘブライ語でマス、ギリシャ語でフォロス）は一般に強制的奉仕の形で支払うことを意味していたことを示す根拠を多数挙げていたのである（付録参照）。強制的奉仕は受け入れても良いとする見解を支持する根拠としてこの『ものみの塔』が引用している主要な聖句（例えばマタイ5・41、27・32、ペテロ第一2・13、テトス3・1、2など）は、私の書いた報告書にも、また代替公務を受け入れることに聖書の根拠があると考えた支部委員会からの手紙にも、引用されていた（それどころか、さらに数多くの聖句を挙げていた。したがって、聖書の根拠自体は一九七八年の段階で明らかにになっていたのだが、方針の変更に反対した統治体のメンバーはその重要性を認めなかったというだけの話なのである。そのため、十八年間にわたって、それまでの方針が力を持ち続けた。

誤りですら、それがものみの塔協会の誤りである場合には、何か有益なものであるとされる。この『ものみの塔』では、ローマ13章の「上位の権威」を協会がかつて誤って解釈していたと述べる。つまり協会ではこの「上位の権威」が人間の政府機関の権威を意味するという明らかな証拠を無視し、これは神とキリストのことだと決めつけていたのである。ちなみにこの誤った解釈は、さらにそれ以前、一九二九年から一九六二年までとられていた正しい見方にとっ

て代わったものである。さて、この『ものみの塔』1996年5月1日号14頁へ1996年5月1日号14頁ではこの誤った解釈について次のように書いている。

顧みると、エホバとそのキリストの至上性に重きを置くこの見方は、神の民がその困難な時代「つまり第二次大戦並びに冷戦の時代」を通じて妥協することなく中立を保つ助けになった、と言うことができます。

これは要するに、正しい理解（つまりパウロがローマ人への手紙を書いた時に意図した意味の理解）をしただけでは助けにならなかったと言っているのである。非クリスチャン的な行動に陥らないための助けとしては、ものみの塔協会の誤った解釈の方が有益だったというのである。しかし聖書によれば神がその民を誤りによって導くことはない。危機状況にある時、神は誤りではなく真理によって力づける。――ヨハネ第一1・5、詩編43・3、86・11参照。

さらに新しいところでは『ものみの塔』1998年8月15日号へ1998年8月15日号が代替公務について取り扱っている。次頁に示す通りである。

ここでもやはり、聖書の根拠のない方針を押しつけたことで生じた実害に対する責任を取る姿勢はない。半世紀にわたって何千という若者たちが投獄されたのは、「忠節を尽くしてクリスチャンの原則を自分が理解しているとおりに守ることや、良心の働きかけにこたえることにより」「ある種の一般市民的奉仕」を拒絶したためであるという、まるで個人の気持ちの結果であるかのような書き方になっている。

ひよっとすると、これを書いた人は事実関係を知らなかったのかもしれない。それでも、この記事は統治体のメンバーのうち少なくとも五人（執筆委員会のメンバー）が読んで承認を与えているはずである。この人たちは、ここに書かれていることがいかに真実から遠いか、わかっていた。数多くの支部委員会からの手紙で、それぞれの国の若者たちが、聖書の根拠については納得できないものの、「クリスチャンの原則を守る」ためではなく、組織の指示だから

不必要な苦しみを忍んだという気持ち

6 証人たちの中には、今なら良心が許容するような何らかの活動にかつて参加を拒んで苦しみに遭った人もいます。例えば、それはある種の一般市民的奉仕に関して幾年か前に自分が選んだ道であったかもしれませんが。今なら、現在の事物の体制に関するクリスチャンの中立の域を踏み越えることなく、それを良心的に行なうことができる、と考える兄弟もいるかもしれません。

7 今なら行なっても何事もないような事柄なのに、それを拒んで苦しみに遭うことをその人に許したのは、エホバの側の不義でしょうか。そのような経験をした人の大半は、そのように思っていないはず。むしろ、宇宙主権の論争に関して確固としていようという自分の決意を公に、またはっきりと実証する機会が与えられたことを喜びます。(ヨブ 27:5 と比較してください。) だれにせよ自分の良心に従ってエホバの側に確固たる立場を取った人には、そのことを後悔すべきどんな理由があるでしょうか。それらの人は、忠節を尽くしてクリスチャンの原則を自分が理解しているとおり守ることや、良心の働きかけにこたえることにより、自分がエホバからの友情に値することを自ら証明したのです。確かに、自分の良心に呵責を感じさせる、あるいは他の人をつまずかせかねない歩み方を避けるのは賢明です。わたしたちはこの点に関して、使徒パウロの示した模範を考えることができます。一コリント第一 8:12, 13; 10:31-33。

6, 7 (イ) かつて苦しみを経験した一部の証人たちが、今、当時とは異なった理解を持っていてもおかしくないのはなぜですか。(ロ) エホバがかつてそのような苦しみを許されたにしてもエホバを不義な方とみなすべきでないのはなぜですか。

8 ユダヤ人はエホバを喜ばせるために、十戒および多岐にわたる約600の付加的な律法に従うことを求められました。後に、クリスチャンの取り決めのもとで、そうした数々の律法に対する従順は、エホバに仕えるための要求ではなくなりました。肉のユダヤ人に対してでも。もはや拘束力のない律法には、割礼、安息日を守ること、動物の犠牲をささげること、食事に関連したある種の制約を守ることなどが含まれていました。(コリント第一 7:19; 10:25。コロサイ 2:16, 17。ヘブライ 10:1, 11-14) 使徒たちをはじめ、クリスチャンになったユダヤ人は、律法契約下では種々の律法に従うことを求められていましたが、今や律法を守る義務から解放されました。彼らは、もはや必要ではなくなった事柄を以前に求めていた神の取り決めは義に反する、と不平を述べたでしょう。いいえ、それどころかエホバの目的に関する理解が広げられたことを喜びました。一使徒 16:4, 5。

9 現代でも証人たちの中には、自分たちが何を行ない何を行なわないかに関して非常に厳格な見方を持つ人たちがいました。それらの人は、そのために他の人より多くの苦しみを経験しました。しかし後には、知識が増して、物事の見方を広くするようになりました。しかし、以前に自分の良心に従って行動したことを後悔すべき理由はありません。たとえそのために余分の苦しみを忍ばなければならなかったとしてもそうです。それらの人が進んでエホバへの忠実さのうちに苦しみを忍び、「良いたよりのためにすべての事をする」者であることを実証したのは、本当に褒めるべきことです。エホバはそのような敬虔な専心を祝福されます。(コリント第一 9:23。ヘブライ 6:10) 使徒ペテロは洞察力をもってこう書きました。「善を行なって苦しみに遭っているとき、あなた方がそ

8 以前に律法を固守していたユダヤ人のクリスチャンに、エホバの義を疑う理由などなかったのはなぜですか。

9 証人たちの一部の人々に関してどんなことが言えますか。それらの人にはなぜ後悔すべきことはありませんか。

この方針に従っていると知らされていたのである。これを示すオーストリア、ベルギー、ブラジル、チリ、デンマーク、イタリア、ノルウェー、ポーランド、スペイン、タイなどの支部委員会から一九七八年に寄せられた手紙は、『クリスチャンの自由を求めて』の259-266頁、398、399頁に紹介されている。ほんの一例として、ここではベルギー支部からの手紙を紹介しよう。このような手紙は数多く寄せられたのであり、『ものみの塔』1998年8月15日号へ1998年8月15日号がいかに虚偽の内容を書いているかがわかるものばかりである。

ペンシルバニアのものみの塔聖書冊子協会

統治体 執筆委員会 気付

親愛なる兄弟たちへ

クリスチャンとしての中立についてさらに情報を求める一九七八年六月八日付のお手紙を頂いてから、わたしたちの支部委員会では問題の点について祈りを込めて熟慮しました。

確かに、法律で兵役の代わりに市民的奉仕を受け入れることができるようになっていて、ほとんどの兄弟たちは、もしこれが徴兵委員会などの政府機関によって命じられた場合、これを受け入れるのが間違ったことだと理解しています。以前、一九七八年三月八日付並びに一九七八年四月二五日付のお手紙にもお書きしました通り、若者や長老の中には、市民的代替公務が課せられているのは軍当局の要求を満たすためだという点が理解できない人もいます。市民的奉仕を受け入れるのは良心の問題だということです。しかし、ほとんどの兄弟たちは市民的奉仕を受け入れるのが間違ったことだと理解しています。

徴役二年の判決を受けた後、兄弟たちは獄舎内で食堂、清掃、事務、保守、農作業などさまざまな業務を行なっています。州政府の建物で働くため、獄舎の外に出て働く場合もありますが、軍務に代わるものとしての市民的奉仕を行なうよう命じられているわけではありません。判決を受けた後、市民的奉仕に関わる何らかの公務を行なうように刑務所側あるいは裁判所側から命じられた場合、妥協したとはみなさえないのです。

この立場を兄弟たちは聖書的に説明できるのかということになります。なぜ兵役の代わりに市民的奉仕を拒否するのか、聖書から

説明できる兄弟たちはほとんどいません。兵役や政治的な事柄に関しては、聖書がこれを認めていないことを示すことができます。しかし、市民的奉仕に関して、どうしてこれを兵役の代わりに受け入れてはいけないのか、聖書をもとにして説明できる兄弟は、本当にほとんどいないのです。若い人たちだけではなく、長老たちにも、これを説明できない人があります。自分の中立の立場を説明できないため、時として裁判官にもてあそばされる兄弟たちがいるとも聞いています。それでも兄弟たちは兵役の代わりの市民的奉仕を拒否しています。要するにそれは間違ったことだとわかっているからであり、協会の見解によればそれは間違っているからです。このため裁判官の中には、兄弟たちが協会に強制されて市民的奉仕を拒否しているのだという人もあります。

クリスチャンとしての中立について話し合うため、これまで何人もの兄弟たちが当支部にやってきました。その中には、特に人道的な活動であれば市民的奉仕を受け入れても良いとする長老や若い人たちによって気分が害されたという人もいました。わたしたちは、決定は一人一人が下さねばならないことであり、支部委員会や協会があれこれ言うことはできないということをはっきりさせています。市民的奉仕に関する規定を読むと、これは兵役の一部であると考えられ、この点でわたしたちはこれらの兄弟たちと見解を同じくします。そもそもこのような市民的奉仕があるのは、まず兵役に関する法律があるからに他ならないからです。明らかに市民的奉仕は兵役の代わりなのです。この理解に基づき、わたしたちは、市民的奉仕が人道的活動であることに目を向けるのではなく、なぜそのような市民的奉仕をするように言われるのか考えるべきだと言っています。兵役の代わりに何かの活動をカエサルが求めているのであれば、これを受け入れることはクリスチャンとしての中立を妥協することです。

さて、お知らせしたいことがあります。聖ジェス・ブリュッセルに投獄されている兄弟たちは一九七八年三月二三日の記念式を祝うことを許されませんでした。この兄弟たちに面会している長老や家族の人たちがこのことを伝えてきましたので、わたしたちは、兄弟たちの親御さん方が法務大臣宛に抗議の手紙を出してはどうかと伝えました。記念式のような宗教的な集いを禁止するのは、ベルギー憲法に反するからです。法務大臣に出された手紙の翻訳を同封します。その結果、嬉しいことに許可がありましたので、兄弟たちは三十日遅れた記念式を行なうことができました。

皆さんが決定を下すにあたりエホバの導きがあるよう祈ります。

あなたの兄弟より

このベルギー支部からの手紙（支部調整者の署名がある）を見れば、「忠節」が何に向けられているのかは明らかである。支部では組織の方針に忠実に従おうとしているのである。また、若者たちが代替公務を拒否して懲役二年の憂き目にあったのは、「忠節を尽くしてクリスチャンの原則を自分が理解しているとおりに守る」あるいは「良心の働きかけにこたえる」ためではなかったこともわかる。実際のところは、問題の方針を聖書から説明できる兄弟たちは「ほとんどいません」「本当にほとんどいいのです」ということだったのである。それでも代替公務を拒否したのは、「それは間違ったことだとわかってから、協会の見解によればそれは間違っているから」である。しかし聖書に基づいて説明できないのだから、この「間違ったことだとわかってから」というのも、聖書ではなく、とにかく何でもあれブルックリン本部の言うことによつて正しいか間違っているかが決まるという意味ではないのである。この若者たちが二年を獄中で過ごしたのは、一人一人が良心に照らして納得した上でのことではなく、人間の作った決まりに従おうとした結果なのである。

さて、この『ものみの塔』記事は、さらにその誤りの度を増していく。モーセの律法に対する従順が要求されていたユダヤ人が、後にクリスチャンとしてそのような要求から解放されたという話を出した上で、次のように書く。

彼らは、もはや必要ではなくなった事柄を以前に求めていた神の取り決めは義に反する、と不平を述べたでしょうか。

しかし、このような比較はまったく成り立たない。律法契約は神自身が与えたものであり、それなりの有益な目的があった。一方、代替公務は拒否すべし、これに従わなければ制裁措置をとる、というもののみの塔の方針は、神が与えたものではない。神の子の言葉を使えば、「自分たちの伝統」であり「人間の命令」であり、「神の言葉を無に」するものなのである。※16

読み手の注意を自分たちではなく神に向け、あたかも神が「不必要な苦しみ」の責任についての弁護を必要としているかのような書き方をする。このことから、統治体は誤った方針とその及ぼした影響について真摯な反省をしているのではなく、自分たちのイメージを守り、組織における権威を守ろうとしていることが明らかである。

組織の決定はその成員に対し大きな力を持ち、かつその影響は非常に大きいことを紹介した。次に、私が統治体にした九年間に経験した矛盾の中でも最たるものだと思われる例を見ようと思う。「妥協しない姿勢」や「組織を清く保つ」こと、「世」の汚れを避けることにあれほど熱心だった人たちが、衝撃的と言う他はない状況を隠すような真似ができたという例で、これはいまだに信じられない気がする。この言い方が適切かどうかは、以下を読んで判断してもらえれば良いだろう。

第6章 二重基準と御都合主義

「律法学者とパリサイ人がモーセの椅子に座っている。であれば、そのおっしゃることは実行することだ。その言葉にはしっかりと耳を傾けて。しかし行ないを真似てはいけない。言うこととすることが別々だから」 マタイ23・2、

3 『新英語訳聖書』

ものみの塔協会の出版物には、有益な話がいろいろと載っている。創造主を信じる助けとなる話をはじめ、健全な家族生活や誠実さを奨励したり、謙遜さをはじめとする美徳の重要性を強調したりする記事が多く、いずれも聖書に基づいて書かれている。また、宗教的な欺瞞や偽善を糾弾する記事もある。例として、『ものみの塔』に載った記事の一部を次ページに示した。

見ての通り、ものみの塔協会はその歴史を通じて、宗教団体やその指導者たちがよくやる「悪行および神の義の基準や道に違反する行為を大目に見たり、『白く塗る』ことをしたり」する罪を犯したことは決してなかったわけである。これら宗教団体の悪い行ないや偽善の証拠があれば、世界規模で大々的にそのことを出版物で公表する。現代の宗教指導者の欺瞞をイエスの時代のパリサイ人と引き比べる。自分たちは義と道德の基準に厳しく従っており、すべての人に対して清廉で潔白な関係を保っていると断言する。

そうであればこそ、統治体でちょうど代替公務の問題が話し合われていた時に明らかになった事実は、本当にやりきれないものだった。

これはメキシコからの連絡で判明した。その内容自体もさることながら、さらにひどいと思われたのは、協会がメキシコに対して取っていた方針と、別の国、東アフリカの馬拉ウイ（旧ニアサランド）に対して取っていた方針とが、

事実を隠しながら なお神に忠実で

あることができますか

偽りが問題にならずにそのまま通るとどんな結果になりますか。沈黙は、偽りが真理として通り、何の妨げも受けずに多くの人びとに影響を及ぼし、ことによつたら深刻な害を加える助けとならないでしょうか。

不行跡や不品行が暴露されることも非難されることもなければ、どんなことになりますか。それは治療する努力も、伝染を阻止する努力もせず伝染病を隠しているようなものではありませんか。

人びとがあるもののために危険にさらされているとき、そして彼らがそのものに疑いをいだいていないとき、あるいは人びとが自分の友と考えている者に誤導されているとき、彼らに警告するのは不親切ですか。人びとはその警告を信じたくないと思うかもしれません。それどころかその警告

に憤慨するかもしれません。しかし、そうであれば人はその警告を与える責任から道徳的に解放されるでしょうか。もしあなた



あなたは真実をおおい隠して
もらうほうが好きですか

ものみの塔 — 1974 年 4 月 15 日

が、神に忠実でありたいと考えている人であれば、これらの質問が提起する問題はあなたにとって現在重要なものと言えます。なぜでしょうか。なぜなら、歴史のどの時代においても、神のしもべたちはこうした問題が投げかける挑戦に立ち向かわねばならなかったからです。彼らは偽りや悪行を暴露して、危険と欺きに用心するよう人びとに警告しなければならなかったのです。しかもよく然とした警告ではなく、清い崇拜のために具体的な警告を与えることが必要でした。沈黙しているほうが、あるいは人びとが聞きたがることだけを言うほうがはるかに楽だったにちがいない。しかし彼らは、神に対する忠実さと隣人への愛に動かされて語りました。『明白にいましむるは秘に愛するにまさる』ということを彼らは認めていました。一箴 27:5。

存続する型

古代イスラエルにおける状態と、その当時神の預言者たちが示した模範とを考えてみましょう。この国では悪事がはびこっていました。不正直、暴力行為、不品行、偽善などのために、イスラエル人が崇拜すると主張していた神の名前は汚されていました。人びとは神の恵らしめを歓迎しましたか。聖書によると歓迎するどころか神の預言者たちに向かって言いました。

『見るなかれと 黙示をうる者にむかいていう置き
ことを示すなかれ 滑か
なることをかたれ 虚偽
をしめせ なんじら大道
をさり道をはなれ(よ)』
—イザヤ 30:9-11。

大多数の宗教指導者たちはまさにその通りのことを行ない、悪行および神の義の規準や道に違反する行為を大目に見たり、『白く塗る』ことをしたりして、人気を得ることに努めました。しかし、



それとも
事実を知りたいと
思いますか

あまりにも食い違っていたことである。

まず少し背景を説明しなければならない。一九六四年を皮切りに、マラウイのエホバの証人は、今では考えられないような規模の迫害と暴力を受け始めた。全国規模の残忍な集団暴力行為が一九六四年、一九六七年、一九七二年、そして一九七五年と次々に起こった。一回目では、家を焼かれたり壊されたりした家族が千八十一、作物を壊滅状態にされた農地が五百八十八という被害が発生した。二回目の一九六七年には千人を超える女性が強姦された。ある母親が六人の男に暴行を受け、その十三歳の娘が三人に陵辱されたケースもあったと報告されている。これらの女性のうち少なくとも四十人が流産したという。殴る蹴るの暴力、拷問、さらには殺人さえもが当局の介入もほとんどないままに行なわれ、ついには何千もの家族が家や土地を離れて近隣諸国へ逃げ出すに至った。一九七二年の当局筋の推定によれば、八千九百七十五名がザンビアに逃れ、一万一千六百名がモザンビークに逃れたとされている。暴力沙汰がおさまると徐々にマラウイに戻るが、するとまた暴行が始まり、そこでまた逃げていくという状態だった。さらに、難民キャンプでは十分な医療が受けられないために子供たちが死んでいくという報告もあった。^{※1}

これほどまでの暴力事件が連続して発生する背景には何があったのか。それは、当時の支配政党の党員カードを買うことをエホバの証人が拒否していたことである。マラウイは「終身大統領」であるカムズ・バンダの率いるマラウイ会議党が治める一党国家だった。この党員カードについてマラウイ支部に質問したエホバの証人たちは、買えば妥協でありクリスチャンとしての中立が保てなくなる、したがって神に対する不信仰となるという答を受け取っていた。この支部の見解は世界本部に支持されており、協会の出版物に詳しく載せられた。代償は極めて大きかったが、マラウイのエホバの証人はほとんどがこの見解に厳しく従ったのである。

※1

これら一連の暴力事件及び難民キャンプでの状況については、以下で扱われている、『1965年エホバの証人の年鑑』171頁、『目ざめよ！』1968年2月8日号16-22頁、『ものみの塔』1968年2月1日号71-79頁、『目ざめよ！』1972年12月8日号9-28頁へ1973年2月22日号9-28頁、1975年12月8日号3-13頁。

抵抗するすべもないマラウイの人たちに対する暴力行為は、決して許されるものではない。この点についてはまったく疑問の余地がない。政府並びに党幹部は、すべて国民は党員カードを持つべしという方針に皆を服従させようとした。このカードが政府機構への忠節を示す目に見えるしだというわけである。これを徹底するために取られた方策は極めて悪質であり、また犯罪であった。

それは認めても、やはり私の胸には支部事務所が取った見解、ブルックリンの本部が支持したあの見解について疑問が残る。そんな疑問をもつ理由も十分にある。

一九七五年、私は当時マラウイのエホバの証人に対して行なわれた暴力行為についての記事を書く担当になった。その記事では、これほどまでに党員カードを買うことに反対する理由として、それまで出版物に書かれていたことを繰り返した。つまり、この党員カード拒否を、初期のクリスチャンがローマ皇帝の「守護霊」のために祭壇で焼香を捧げるのを拒否した話と結びつける内容である。^{※2} しかしこれを書きながら私は、本当にこんな風に結びつけて良いのだろうか、という気持ちにとらわれた。祭壇で香を捧げるのが崇拜行為になったのは間違いない。とはいえ党員カードを買うことも同様に崇拜行為なのだろうか。これにはあまり説得力がないように思われた。これによってクリスチャンとしての中立が保てなくなり、神との関係が断ち切られてしまう、そんな行為だろうか。

当時これについて納得のいく考えが得られたとは思わないし、今でもこれについて何か一方的な見解を取ろうとは思わない。しかし、党員カードを買うことが神への不信仰であるとして弾劾するような立場を協会が取ることにについては、統治体の一員として、次のような疑問を持った。

問題は、このカードが「政治的」なものであり、「政治」団体に所属することを表すという点にかかっていた。他にもこういう人は多いだろうが、特にエホバの証人は、この「政治」という言葉が本質的に悪いものを指すと考えて

※2 この内容は『目ざめよ!』1972年12月8日号20頁へ1973年2月22日号20頁にある。私の書いた記事は同誌1975年12月8日号に掲載された。

いる。これまで何世紀にもわたって存在した墮落した政治家も、この言葉に芳しくないイメージを与えるのに貢献してきた。ところが、同じことは例えば「敬虔な」という言葉についても言えるのである。この言葉は、偽善的な宗教関係者もいるおかげで、うわべだけの信心や見せかけの神聖さを思わせることが多い。しかし「敬虔な」という言葉自体は、神に対する忠実な畏敬の念と心からの帰依を表すものである。つまりこれが基本的な意味である。同様に、「政治的 (political)」という言葉にしても、基本的な定義としては次のようになっている。

ある定まった統治のシステムあるいは機関を有する状態、政府及びその行政上の。国務に関する。民政、市政に対し、国政上の。政治あるいは政府を扱うような。「政治的」団体など。※3

英語の「政治的 (political)」や「政治 (politics)」という言葉が、単に「町」を意味するギリシャ語のポリスに由来することはわかっていた。ギリシャ語でポリテスとは「市民 (citizen)」という意味である (この citizen もラテン語の「町」を表す言葉に由来する)。ポリティコスというのが形容詞であり (これは「政治的な (political)」の語源である)、これが「市民の、国家の」という意味を表す。これらの言葉はラテン語を通じて英語に入ったが、ラテン語のポリティアにしても「市民、政府、行政」以上のものを意味するわけではなかった。「警察 (police)」や「方針 (policy)」というような言葉もすべて同じ語源である。

したがってすべての政府はこの基本的な意味において「政治的 (political)」であることになる。地上にある政府はどれも政治的であって、一政府のもとに組織された人民は「国家 (polity)」(ギリシャ語ポリティアより) を形成する。一国の市民 (citizen) であることは、このような政治国家の一員であることに他ならず、しかるべき福利と責任を伴う。国家の要求するところにどこまで応じるかについての程度の差はあるかもしれないが、それでも一員であること

※3 『新ウェブスター辞典「ラックス百科事典版」』による。

に変わりはない。

まさにこのような政治国家、及びその支配者層について、パウロはローマ人への手紙13章に書いており、これら「神の公僕」あるいは「奉仕者」に服従するようクリスチャンたちに呼びかけているのである。確かに、政治的な行ないが墮落することもあるし、ローマの場合その墮落が甚だしかったことに疑いはないが、だからと言って政治的なものすべてが根本的に邪悪だとは言えないし、ある国家の一員であること（すなわち政治的な国家の一員であること）が根本的に邪悪だとも言えない。政治団体の権力争いがあるために、「政治」という言葉にまた別の意味（もちろん基本的な意味ではない）、つまり「権力、名声、地位などを求める者による権謀術数」が加わってしまうのかもしれない。こうなると邪悪になってくるが、政治的な行ないに関わることがすべて邪悪だからではない。第一、普通の意味で言えば、政治的な行ないがないところには、政府がそもそも存在しないのである。

このように考えてくるとまた別の疑問も生まれた。政党政治にありがちな政治闘争・抗争から道義上離れていたと思う人の気持ちはわかる。ただマラウイの場合、これが一党国家だったことが私を悩ませた。マラウイ会議党が支配政党であり、他に政党は許されていないのである。つまりこの党は事実上政府そのものであり、「上位の権威」なのである。もしある人が神との関係を保ちつつ、市民、すなわち国家政治体の一員であり得るならば、この支配政党のカードをすべての人が買うようにという政府の（国家の上位から下位への）要求に従うことが神との関係を絶つことになるかどうか。両者の間にどれほどの差があるのだろうかと思っただけ、今でも思う。

何よりも、もしアブラハム、ダニエル、イエスとその使徒たち、あるいは初期クリスチャンたちが同じような状況にあったならば、このような政府からの要求に応じることにして協会と同じような見解を取ったであろうか。確かにマラウイではカードを買うべしという法律が制定されていたわけではないが、これが支配権力者側から全国規模で

要求されていることを考えると、キリスト・イエスがそんな名目上のことを重視したとも思えない。^{※4} 使徒パウロは「すべての者に、その当然受けるべきものを返しなさい。税を要求する者には税を、貢ぎを要求する者には貢ぎを、恐れを要求する者にはしかるべき恐れを、誉れを要求する者にはしかるべき誉れを。」と言った。^{※5} これを考える

と、一世紀当時のクリスチャンたちはこのことについてどう思ったことだろうか。

時代を問わず、このような要求に応じることは政治権力の要求に「妥協」あるいは「屈服」することだと見なす人もあろう。イエスのいた頃にも、ある荷物を一マイル運べという憎きローマ帝国の将校の要求に応じることは同じような屈服だとする信心深いユダヤ教徒たちがぎつと数多くいただろうし、屈服より処罰を選んだ人も多かったかもしれない。しかしイエスは、一マイルはおろか二マイル行けと言うのだ。^{※6} これを聞いていた人の多くにとつては受け入れ難い立場だったに違いない。異邦人権威への協力を断固拒否するどころか、臆病な屈服ではないかというわけである。

いずれにせよはつきりしたことが一つあった。それは、立場を主張・宣伝するのなら、単なる人間の理屈ではなく神の言葉によるしつかりした裏付けがあるという確信を常に持っていたい、ということである。特にそのもたらす帰結が深刻なのだからなおさらである。マラウイに対する方針を、聖書が疑いなくはつきりと支持しているという確信は持てなかった。誰かがそのようなカードを買うことを良心的に拒否するというのならわかる気がしたし、もしそうであればきっぱり拒否すべきであり、それでこそローマ人への手紙14章1節から3節、及び23節に一致するものだ

※4 マタイ17・24-27参照 この箇所では、イエスがある税金について払うべきものではないと述べ、それでも「権力者側をつまづかせないために」というのでペテロに払うように言いつける。

※5 ローマ13・7。

※6 マタイ5・41。

思う。^{※7} しかしこれについて誰かが自分の良心的判断を他の人に押しつける根拠はないように思えた。さらに、これを従うべき厳格な規範として公表するなど、特に聖書及び事実に大した裏付けがないことを考えると、根拠のないことと思われた。

さて、以上のようなマラウイの状況を背景に、統治体の代替公務についての話し合いにおいて明らかになったことを紹介する。統治体では（マラウイのエホバの証人に勧めていた通り）厳しく、妥協しない態度を支持する意見が多く出されていた。例えば次のような発言である。

「妥協の素振りさえあつてはならない。」

「決して妥協があつてはならない。……中立の立場、『世のものではない』立場、宗教・政治・軍隊という世の武器から離れて、直接にも間接にも支持しない立場、これがエホバの祝福する立場であることをはっきりさせる必要がある。白黒をはっきりさせるべきだ。妥協しないクリスチャンとしての立場をはっきりさせたい。」^{※8}

「……軍務の代わりに公務を行なうことは……カエサル（注）の軍隊への義務を暗に認めたことになる。……クリスチャンは、直接的にせよ間接的にせよ、軍隊の手伝いをするよう求められるわけにはいかない。」^{※9}

「エホバの証人が裁判官に向かって、病院の仕事なら受け入れますなどと言うのはいわば取引をしていることになる。神との関係を

※7 この箇所は以下の通りである。「信仰に弱いところのある人を迎え入れなさい。しかしそれは「人の」内心の疑問について決定するため

ではありません。ある人は何でも食べてよいとの信仰を持っているのに対し、弱い人は野菜を食べます。食べる者は食べない者を見下げてはならず、食べない者は、食べる者を裁いてはなりません。神がその人を迎え入れられたのです。」しかし、疑念を抱いている場合、それでもなお食べるなら、その人はすでに罪に定められています。信仰によって「食べて」いるのではないからです。実際、信仰から出ていないことはみな罪です。」

※8 これは統治体のメンバー、ロイド・バリーの覚え書きより。

※9 統治体のメンバー、カール・クラインの覚え書きより。

壊すものである。」※10

「代替市民公務を受け入れれば、徴兵制度全体を道義的に認めることになる。」※11

「世界中どこでも一致した立場を取るべきだ。これについては断固とした態度を持たないといけない。……兄弟たちにこれを許容すると問題が起こるだろう。……兄弟たちには良心の教育をする必要がある。」※12

「カエサルに屈服する者は神を証する証人ではない。」※13

「この代替公務を引き受ける連中は、結局衆をしようとしている。」※14

驚くべきなのは、こういう確固たる言葉を発するその一方で、その同じ人たちが、メキシコでの現状について知らされていたことである。私は支部委員会からの代替公務に関する報告書をまとめた書類のコピーを統治体のメンバーに配布していたのだが、その際メキシコ支部委員会からの報告書も入れておいた。その報告書には次のような「軍務修了証明書」についての情報があった。

……一年間軍務に服することで「軍務修了証明書」をもらわなければならないことになっています。この修了証明書を持つ者は、国家有事の際、武力出動、単なる出動を問わず、召集に応じる義務を持ちます。(第六頁、第一三六条から一三九条)

しかし、軍当局や徴兵局が現金支払い等の違法手段によって修了証明書を発行することは法律により禁じられているにもかかわらず、大多数の当局関係者がかかる違法行為を行なっているのが現状です。(二一頁第五〇条、五一一条、二九頁第三条、一九七七年九月一六日告示第一号第二頁三項、四項。)

誰がどんな口実を設けても、軍務を免れ、代わりに当局者に支払いをして毎週の訓練に出席をつけてもらえます(すなわち書類上

※10 統治体のメンバー、フレッド・フランスの言葉より。これはウィリアム・ジャクソンがポール・トラスクに書いた手紙にも書かれている。

※11 デンマーク支部委員会からの手紙より。ロイド・バリーの覚え書きに引用されている。

※12 統治体のメンバー、テッド・ジャラズの言葉より。

※13 統治体のメンバー、ケアリー・バーバーの言葉より。

※14 統治体のメンバー、フレッド・フランスの言葉より。

毎週出席したようになります」し、また支払いによって法的に有効な修了証明書を受け取ることができます。メキシコではこれが至極当たり前のことなのです。メキシコ政府では、合法的な理由がない場合、当局者が軍務を行なっていない者に修了証明書を発行するのをやめさせようとしています。メキシコ共和国大統領、リセンシアド・ホセ・ロペス・ポルティージョが一九七八年五月五日、国旗敬礼の式典に出席した時、ある将校は十万人近い徴募兵の前にこう語りました。「軍部としては軍務修了証明書の不法入手を許すわけにはいきません。我々としては責任を持って、かかる違法行為は早晩根絶やしにし、すべて若者が市の徴兵課で正規の修了証明書を手にするように計らう。」(1978年5月6日付『エル・ヘラルド』参照)

この「違法行為」に対してエホバの証人はどういう立場を取っていたのか。支部委員会からの報告はさらに続く。

軍務について、メキシコの若い伝道者たちに問題はありません。法律は明確に定められていますが、一般にその執行は厳しくなされないのです。伝道者が徴兵年齢になって自分から徴兵課に行かない場合でも、呼び出されるようなことはありません。自分の修了証明書を持っていてすでに予備軍リストに載っている人の方も、召集されたためしがありません。単にあちらのリストからこちらのリストへ移されるというだけのために修了証明書にスタンプを押してもらいに行くだけですし、これとても何の儀礼があるわけではなく、ただスタンプをもらいに行くだけなのです。

この修了証明書は今や身分証明書となっています。例えば仕事を探す時には身分証明書として使われます。ただし絶対必要というわけではありません。しかし、パスポートを入手するに当たっては、どうしてもこの修了証明書が必要になります。軍当局から特別の許可がない限り、この修了証明書がないと国外に出られません。伝道者が修了証明書を手に入れたと思ったら、どこかの徴兵課に行つて登録すればその場で書類そのものはもらえますが、これはもちろん法的に完全なものではありません。法的に問題ないものにするためには、誰か顔の良く知人か、あるいは直接当局者のもとに行き、一定額のお金(その時の要求額によります)を払わなければなりません。こうして伝道者は有効な修了証明書を手に入れるわけで、大多数がこうやっています。

早い話がこういうことである。メキシコでは徴兵年齢に達した男性は一年間の軍事教練を受けねばならなかった。登録と同時に「修了証明書」を受け取るが、そこには毎週の教練に出席したことを示す欄がついている。該当者が出

席してもいらないのに当局監督者がこの出席欄に記入してしまうのは違法であり罰せられる。しかし当局監督者に賄賂を渡せばやってもらえるので、メキシコではそうやっている人が多かった。この支部委員会の報告によるとエホバの証人の間でもこれが普通に行なわれていた。なぜか。さらに報告書の続きを見てみよう。

この件に関するメキシコの兄弟たちの方針についてはすでに何年も前に協会の方で考えて頂いており、兄弟から質問がある時もずっとこれに従っています。（同封コピー参照）

メキシコ支部が何年も前から従っている協会からの指示というのはどんなものだったのか。そしてどんな風に与えられたのか。マラウイの状況、そしてまた先ほど見た「妥協の素振り」さえも許さず、軍隊を「直接的にせよ間接的にせよ」「道義的に認める」ことを許さないとする統治体のメンバーたちの強硬な言葉と考え合わせると、どうであろうか。

一九七八年一月十五日、代替公務に関する統治体会議が行き詰まりに終わり、その数日後私はメキシコに行った。メキシコ支部を始め、中央アメリカ各国にある支部を訪れる仕事を割り当てられたのである。メキシコ支部委員会の人たちと会った時もやはり先ほど見た報告の話が出た。マラウイのエホバの証人に対するひどい迫害の原因が党員カードを買うのを拒否していることだと知ったメキシコのエホバの証人には、良心の呵責を感じている人が多いという話だった。しかし、メキシコ国内のエホバの証人に与えている指示は世界本部からの指示に従ったものだと言っていた。信じ難いという人もいるかもしれないが、どのような指示だったのか、メキシコ支部委員会が出してくれた証拠に基づいて紹介する。まずはこの手紙である。

一九六〇年二月四日 一二三号

親愛なるノア兄弟へ

協会の指示を頂きたいことが二つあります。一つ目は、ある会衆にいる会衆の僕のことです。この人の娘は結婚しており、その夫

も伝道者でした。夫婦はその（公衆の僕である）父親と一緒に住んでおります。さてこの夫が不貞を働いたために排斥になりました。過去何年かにわたってこの夫は二組の家庭を養っています。一つは法律上の妻であり真理にある姉妹との家庭で、会衆の僕の父親と住んでいます。もう一つは不貞の相手との家庭です。もちろんこの間ずっと排斥状態は続いています。件の父親が、このけしからぬ男に娘ともども一緒に住むことを許しているので、会衆の方ではこれが非常な論争を呼ぶところとなり、何年かの間に伝道者の数が減り、ゆゆしい状況となっています。そこでお尋ねしたいのは、この娘にこの男と住む権利があるのか、ということです。確かにこの男は法律上正式な夫なのですが、別の家族もあるのです。この父親はこの男を娘とともに自分の家に住まわせておいて良いものなのでしょうか。協会としての指示を頂いて、これに対処したいと思います。

もう一つご相談申し上げたいことは、軍事教練の一環として行軍に参加すべしという法律についてです。一年間の行軍を済ませると、そのしるしにカードを受け取りますが、このカードはパスポートや運転免許証の発行など、色々な手続きに必要なものです。兄弟たちはこのようなことに関してクリスチャンとしての中立の立場がどんなものかは心得ていますが、関係者にお金を払ってこのカードを手に入れる兄弟がたくさんいます。これは正しいことでしょうか。仮に誰かが実際に軍事教練に参加したりすれば、これは妥協したということで、少なくとも三年間は僕として任命しないという方針を適用します。しかし僕であったり巡回の僕であったりする人が、教練に参加はしていないものの、このカードを使って時々諸手続きを済ませているのです。この場合どうするのが正しい行ないなのでしょうか。これまでずっとお金を払ってこのカードを手に入れるのが習慣となっており、そのような兄弟たちの多くは巡回の僕や会衆の僕となっています。これは虚偽の生活を送っていることになるのでしょうか。あるいはこの邪悪な事物の体制によくあることの一つなのでしょうか。放っておいて良いものでしょうか、それとも何か手を打つべきでしょうか。この国には規則にあわないことがたくさんあります。警察官は交通違反で止めた人から「モルディダ」、つまりたった四十セント程度の賄賂をせびります。誰でもそんなことはいけなくて知っているのですが、それでもおとなしくその金額、つまり五ペソを払います。わざわざ警察署まで行けば五十ペソをとられ、おまけに時間の無駄になります。これはよくあることで、誰でもやることなのです。教練カードについても同じでしょうか。ご教示願えれば有り難く思います。

以上はメキシコ支部から協会会長に宛てた手紙である。二つ目の段落に書類偽造のため賄賂を払うことについての質問が出てくる。

これに対する返事はどんなものであったか。協会からの回答は一九六〇年六月二日付の二頁にわたる手紙でなされ、その二頁目にこの書類偽造の問題についての回答がある。次にそのページのみを示す（この手紙はメキシコ支部で見せてくれた）。

一九六〇年六月二日（一五七号） 二頁

……必要ないでしょう。躓きの中心であるその男の不貞も消えることになります。そこでこのことを率直に包み隠さずその会衆の僕とその娘に伝えなくてはなりません。会衆の僕が会衆全体のために率先してことを起こすべきです。この人が、不貞を犯した義理の息子を追い出さずまた今後も会衆の一致と心の平和を乱し、迷惑になり続けるようなら、会衆の躓きの石となります。きちんとこういう手を打ってもらえないようなら、会衆の僕という役目からは外されるべきでしょう。

当局筋と金銭のやりとりをして軍事教練を回避している人たちについてですが、中南米の他の国でも兄弟たちが神権活動の自由を得るために軍関係者に支払いを行なったケースがあります。軍当局側が料金の支払いをもつてかかる計らいをよしとするのなら、その責任はこれら国家組織の代表者側にあります。このような場合、支払われたものは軍当局へは行かず、かかる計らいを執り行なっている個人のものとなるわけです。もし兄弟たちに、自由を確保するため良心的にこれを受け入れても良からうというものがあれば、我々としてはこれに反対するものではありません。もちろん、それによって問題が生じたという場合には、その当事者がその問題を引き受けなければならないでしょうし、我々としては援助のしようがありません。しかし、もしそのやり方がそちらの方で広く行なわれていて、関係各位がその正当性についてあえて調査追求しているわけでもないのであれば、得るところも大きいことです。そのままにしておけば良からうと考えます。万一ことが起こった場合、教練修了カードを持った兄弟たちは決定を迫られることとなります。今度は料金の支払いで切り抜けるわけにはいきませんから、気持ちを試されることになり、自分たちの立場を明らかにし、試験においてクリスチャンとしての中立を守ることを示さねばならなくなるでしょう。

敬具

ペンシルバニア州のみの塔聖書冊子協会

メキシコ支部の手紙はノア会長に宛てられていたが、この協会スタンプ付きの返事の方は明らかに副会長フレッ

ド・フランズによって書かれたものである。すでに述べた通り、フレッド・フランズは、こういった事柄について方針を決めるに当たっては常にノア会長から依頼を受けていた。この手紙の文体はまさにフレッド・フランズのものである。

この手紙の言葉遣いは注目すべきものである。今一度先に紹介した統治体のメンバーたちの言葉を振り返って比べて頂きたい。代替公務について容赦なく厳しい意見を述べていた、あのきっぱりとした言葉とはずいぶん違うことがおわかり頂けるだろう。

このメキシコ支部への回答の手紙では、「賄賂」という言葉が避けられていて、代わりに「金銭のやりとり」「料金の支払い」とされている。問題の金銭が「軍当局」ではなく個人のものとなるという点が強調されており、どうやらこれで「やりとり」の道義性が高まるものらしい。さらにこの手紙では、これが「そちらの方で広く行なわれて」いること、関係者が「その正当性について」云々しないのであれば「得るところも大きい」ので「そのままにして」おいて良いと言う。最後に将来あり得る「試験において」立場を守ることについても触れられている。

これがもし代替公務について話し合っている統治体会議でメンバーが使うような言葉で伝えられたら、こんな具合になったと思う。

腐敗役人に賄賂をやることは、中南米の他の国にいるエホバの証人もやっています。軍隊の人間が賄賂をほしがるならそれはあつちのことです。少なくとも金は軍隊そのものに行くのではなく、誰か偉いさんの懐に入るだけです。賄賂をほしがる連中と取引しても兄弟たちの良心が咎めないというのなら、反対はしません。無論、問題があつた時こつちを当てにしても困ります。まあ、そつちの連中はみんなやっていますし、偽造書類についてもとやかく言われないのですから、メキシコ支部としても放っておけば良いでしょう。中立の問題については、戦争が起こってから心配すれば良いのです。敬具

私には皮肉を言っているつもりはまったくなく、第一これが皮肉になるとも思わない。協会がメキシコ支部に与

えた指示を、婉曲な言い回しをなくし、ざつくばらんに、統治体の会議で使われるような言葉を使えば、公平に見て
こうなると思う。

私にとってショックだったのは、メキシコのエホバの証人については軍務に服すようにとの要求に対して「料金の
支払いで切り抜ける」ことを協会は「反対するものではありません」としているのに対し、そのまったく同じ時、ド
ミニカ共和国では同様の軍事教練を拒否したというので多くの男性が監獄で若い命を費やしていたことである。軍務
拒否のかどで二度、三度と投獄され、合計九年ほども監獄で暮らすことになったリオン・グラスとエンリケ兄弟のよ
うな若者たちもいた。その当時協会会長と副会長はわざわざドミニカ共和国まで赴いて、こんな人たちが多数収容さ
れている監獄を訪れさえした。ドミニカで投獄されている人たちの現状を目にしつつメキシコの現状を許す、つまり
二カ所で別々の基準を当てはめていられるというのが私には理解できなかった。

先ほどの指示がメキシコ支部に送られた四年後（一九六四年）、マラウイのエホバの証人に対する暴力行為の最初の
波が押し寄せ、党员カードを買うことについての問題が持ち上がった。マラウイ支部事務所の見方は、党员カードを
買うことはクリスチャンとしての中立の立場を放棄することであり、真のクリスチャンにはふさわしくない妥協の態
度だというものだった。世界本部の方でもこれを承知していた。しばらくすると暴力はおさまったものの、一九六七
年に再び始まり、何千人ものエホバの証人が国外に脱出せざるを得ないほどのひどさになった。残忍な行為の数々が
次々に世界本部に報告されてきた。

さて、メキシコで取っている方針と考え合わせて、これを聞いた本部側関係者の良心はどのような影響を受けたで
あろうか。マラウイではエホバの証人たちが暴行や拷問を受け、女性が強姦され、家も農地も焼かれ、家族ぐるみで
次々に国外脱出をしている。党员カードを買うのは背信行為だという協会の方針に従おうとしてのことである。一方
メキシコでは、まったく同じ時に、エホバの証人たちが軍関係者に賄賂を払って、軍務を果たしたという偽造証明書

を手にし、支部の方では協会の指示に従って、これは組織の基準にも神の言葉の原則にも反するものではないと答えている。これを知っていながら、協会の最高地位にいる人たちはどう反応したか。これを見てみたい。

メキシコ支部では、先ほど紹介した質問の手紙を出した九年後、一九六九年八月二七日、再びノア会長宛に手紙を書いている。この時には、メキシコ支部側で見逃されていたと考える点を書きよこしていた。以下に紹介するのはメキシコ支部が私に見せてくれたその手紙のうち3頁と4頁の部分である。メキシコ支部で重要だとしていたところに傍線を入れてある。

〈前略〉質問です。六月の支部会議において、「回答の助け」34頁、35頁に載っている問題が話し合われました。メキシコで何年にもわたって軍務関係の質問が処理されているやり方についても話を出してみますと、その細かいところについて私も知らなかった部分がありました。そこでこうして再度質問し、協会から回答を頂こうということになりました。記録を調べてみますと、一九六〇年二月四日一二三号の手紙で、徴兵年齢に達している人が証明書を手に入れるのにお金を払っていることについて、どうすれば良いかという質問をしています。しかしその質問には書いていなかったことがあります。それは、こうやって証明書を手に入れた人は、正規軍で間に合わないような事態が発生した際まっさきに出勤する予備軍に入れられてしまうことです。そこで質問なのですが、先ほどのメキシコ支部からの手紙の返事として一九六〇年六月二日付（一五七号）の手紙で頂いていた方針は変わるのでしょうか。その返事のお手紙にはこうあります。「当局筋と金銭のやりとりをして軍事教練を回避している人たちについてですが、中南米の他の国でも兄弟たちが神権活動の自由を得るために軍関係者に支払いを行なったケースがあります。軍当局側が料金の支払いをもつてかかる計らいをよしとするのならば、その責任はこれら国家組織の代表者側にあります。このような場合、支払われたものは軍当局へは行かず、かかる計らいを執り行なっている個人のものとなるわけです。もし兄弟たちに、自由を確保するため良心的にこれを受け入れても良からうというものがあれば、我々としてはこれに反対するものではありません。もちろん、それによって問題が生じたという場合には、その当事者がその問題を引き受けなければならぬでしょうし、我々としては援助のしようがありません。しかし、もしそのやり方がそちらの方で広く行なわれていて、関係各位がその正当性についてあえて調査追求しているわけでもないのであれば、得るところも大きいことですからそのままにしておけば良からうと考えます。万一ことが起こった場合、教練修了カードを持つ

た兄弟たちは決定を迫られることになります。今度は料金の支払いで切り抜けるわけにはいきませんから、気持ちが試されることになり、自分たちの立場を明らかにし、試験においてクリスチャンとしての中立を守ることを示さねばならなくなるでしょう。」ここに引用した通りの方針に従ってきていますが、こうして証明書を手に入れている兄弟たちが第一予備軍に入っていることを考えると何らかの修正も必要ではないかと思われるのです。もちろん、エホバの祝福がこの国の僕たちにもあるとは思っています。巡回区や地域の僕や、ベテル家族の大部分がこうやって証明書を手に入れています。これまでの業の進行は大変順調だからです。この件について修正が必要であるのかどうか、お知らせ願えば大変幸いです。もし変更によってこのやり方が出来なくなると、兄弟たちはパスポートが手に入れられなくなりますが、それでも国内の大会にはいつでも出られます。また仮に変更になった場合、現在第一予備軍になってしまっている兄弟たちについてはどうなるのでしょうか。どう手を打つべきなのでしょう。この件についての回答をお待ちしております。

新しいビルの建設の方は順調に進んでおり、完成の暁にはエホバを讃えるため、そして集会で兄弟たちを築き上げるために使われるであろうことを楽しみにしています。

あなた方の兄弟たち

協会からの返事は一九六九年九月五日付で、ニューヨーク法人の印章がついている。日付の前にある記号で会長が秘書の一人を通じて書いたものであることがわかる（Aというのが会長の記号で、AGというのがその秘書の記号である）。この時点では、マラウイのエホバの証人たちが政府の要求する党員カードの購入を拒否して一九六四年、一九六七年の二度にわたり惨状を味わっていたことを協会世界本部の方ではよく承知していた。これを頭に置いた上で、メキシコ支部宛の返事の手紙を見てみることにしよう。

A / AG 一九六九年九月五日

親愛なる兄弟たち

そちらからの八月二七日付（一八二号）の手紙を受け取っております。メキシコで登録して第一予備軍になっている兄弟たちについてのお尋ねでした。

引用して頂いた一九六〇年二月四日付の手紙(二三号)で十分かと思います。それ以上こちらからつけ加えることはありません。万一召集になってどうするかはそれぞれ個人の責任で決めるべきであり、それはその時になってからでも遅くはないでしょう。今のところ、登録して料金を払った兄弟たちは奉仕に携わることができているわけです。これを勧めるというわけではありませんが、そういうことをした人がいても、それはその人の良心が許したことであって、我々の良心ではないのです。その人たちの良心が許し、妥協しているわけであれば、それはそのままにして差し支えないでしょう。そちらで個人からの質問に答えたり、意見を差し挟んだり、話し合いをしたりする理由はまったくありません。前の手紙にもあった通り、いつかこの問題に直面する時が来て、決断を迫られることになるかも知れません。その時には決断をしてもらうしかないでしょう。世界中の人たちのために我々が決断してあげるわけにはいきません。良心に従ってことを行ない、第一予備軍に登録されてしまったことが仮に気にかかるのであれば、それはその人たちが気にかけることです。協会事務所が気にかけることではありません。

常に協会としては法律には従うべきだと言ってきましたし、そちらからの手紙に書かれているようなことをした人がいて、その人の良心が咎めないというのであれば、我々としてはこれをそのままにしておくばかりです。我々が他の人の良心に関わることを決めたり、この問題について議論を戦わせたりする理由はまるでありません。妥協して武器を取るといふわけではなく、剣を打ち変えて鋤の刃にすることを続けているのであれば、その決定はその人たちに任せるよりありません。もしその立場が変わるようなことがあれば、その時会衆の監督の方で手を打てば良いでしょう。ですから今は、何も変えず、一九六〇年二月の手紙に従っておけば良いのです。

エホバの祝福がありますように

あなた方の兄弟たち

ニューヨーク法人のみの塔聖書冊子協会

これら一連のことがなぜそれほど大変なことかと言うと、軍隊に関わることについての協会の見解は常に「政治的」団体に関わることについての見解と同じであったからである。軍隊関係であれ政治関係であれ、エホバの証人がそういう団体に加わったりすれば自動的に「断絶」したと見なされる。それでもメキシコ支部事務所では、軍務を修了したという証明書を(賄賂によって)手に入れたエホバの証人たちが軍隊の第一予備軍にいと明言しているのである。

マラウイのエホバの証人は、体と命を張り、家も土地も犠牲にして協会の方針に従おうとしている。メキシコの方にそんな危険はまるでなく、それでいて最も寛大な方針に従っている。何しろ軍の第一予備軍にしながら、巡回監督や地域監督、ベテル家族などでいられるのである。これはメキシコ支部委員会の報告書からも明らかである（証明書をもらうために賄賂を払うことがどれほど普通に行なわれているかもわかる）。報告書は以下のように続いている。

先ほど挙げたブルックリン本部からの手紙にあった通り、これについては兄弟たちの良心に任されています。それでもはつきりさせておくべきだと思われるのは、この方法（支払い）によって修了証明書を手に入れることが本当にごく普通に行なわれていることです。修了証明書がないことによる不便は、まず国外に出られないこと（メキシコの兄弟たちは大会に出るためよくアメリカに行きます）、そして就職の時証明書の提示を求められると困ることです。これを除けば、兄弟たちが無理にこの証明書を手に入れようとする理由はないのです。しかしあまりにも易々と手に入りますし、やったことのある人に聞けばどうすれば良いか教えてくれますから、こうやって証明書を手に入れるのが正しいことなのかどうか考えることすらないのです。

メキシコでは文字通り何千人というエホバの証人がこの実態を知っていた。メキシコ支部委員会のメンバーたちにもわかっていた。統治体のメンバーも、世界本部としての見解がどんなものかわかっていた。しかしこれ以外となると知っている人はほとんどおらず、マラウイのエホバの証人は誰も知らなかっただろう。

これ以上見事に二重基準が存在している例を他に知らないし、これ以上ゆがんだ理屈も考えにくい。一方ではメキシコでのやり方を許す。同時にまた一方では、代替公務は政府によって軍務の遂行と見なされている、したがって「カエサル」の軍隊への義務を暗に認めたことになる」から許されないと断定される。こう言った統治体のメンバーたちは、「白黒をはつきりさせるべきだ」「兄弟たちには良心の教育をする必要がある」とも言っていた。メキシコではエホバの証人が二十年以上にもわたって賄賂を払って軍務を履行したという証明書を出してもらうのが習慣であることも、これを世界本部としては「その人の良心による」と声明していることも、すべて知った上でそんな言葉が出たのであ

る。

メンバーの中には、(代替公務として) 病院で働くことなら良心的に納得できますと裁判官に向かつてはつきり正直に答えた者は「断絶」したことにするという昔からの方針を擁護する人もいた(嬉しいことにこういう人たちが少数派になる会議も何度かあったが)。メキシコでは長老、巡回監督、地域監督、支部事務所スタッフなどが関係者に賄賂を渡し、軍隊の第一予備軍に入っていることを示す軍務修了証明書を手に入れているのを知っていて、なおそのような方針を擁護するのである。

その方針を守ろうと言ったあるメンバーは、デンマーク支部委員会のリチャード・エイブラハムソンのものだという言葉を引いた。「この若い連中に好きにさせたらどうなるかと思うとぞつとする」というものである。一方、世界本部からメキシコ支部に送られた正式の指示はと言えば、若い兄弟たちが賄賂を払って偽造文書を手にいれ、第一予備軍に名前を載せられるのは「仮に気にかかるのであれば、それはその人たちが気にかけることです。協会事務所が気にかけることではありません」というものであった。その同じ手紙にはさらに「我々が他の人の良心に関わることを決めたり……する理由はまるでありません」とある。

これと同じような立場がマラウイの人たちについても取られなかったのはなぜか。マラウイにいるエホバの証人の大多数がマラウイ支部事務所のスタッフと同じ見解に達したであろうとは到底思えない。また、方針を決めている人たちの中に地元のマラウイ(当時ニアサランド)人が一人でもいたとは思えない。

結局これほど矛盾した指示を出していることについて、組織の上層部にまったく責任がないと言えるのだろうか。特筆すべきは、マラウイ国首都部がその憲法のうたう原則に従っていないことについて、ものみの塔協会ではその「最終責任」がバンダ首相に帰せられるべきだとしていることである。

もしバンダ首相がこれ(エホバの証人に対する迫害行為)を知った上で黙認しているのであれば、マラウイ国及びマラウイ会議党

首として、会議党の名において自分の国で起こっていることについて責任をとるべきです。

同様に、若者たちを暴力に向かわせ、あるいはまた現状に目をつぶっている議会のメンバー及び党のメンバーも責任から逃れるわけには行きません。公務員、警察官、法律家をはじめ責任ある立場にいる人たちで、わが身がかわいいいからといってマラウイの現状を黙認している人たちも、責任がないと言えるでしょうか。※15

こうして協会はマラウイ国上層部を裁いたが、その同じ基準で協会自身も吟味されるべきだろう。統治体がマラウイの関係者並びにその責任について言っていることとメキシコで取っている立場との両方を把握した上で、マラウイの兄弟たちに喧伝されている見解が正しいものであると本気で信じていたのなら、メキシコの方針は取りやめにするしかないと感じたはずである。マラウイの厳しい方針を貫こうと思えば、それが正しく、真のクリスチャンが取るべき唯一の立場であり、また神の言葉にしっかりとした裏付けのある立場であると一点の疑いもなく納得していてしからべきだった。メキシコにおける方針を許すということは、とりもなおさずそのような納得をしていないということである。

逆に、メキシコで軍関係の証明書を（違法なやり方を使ってまで）手に入れることについては個人の良心に任せるという立場が正しい、あるいは少なくとも容認できるというのであれば、当然マラウイの兄弟たちについても同じように良心に任せられるようにすべきだった。こちらの方には、賄賂も、違法行為も、文書偽造も一切ないのである。立場をはっきりさせない、「現状に目をつぶる」、基準の二重性を「黙認」する——こんなことを「わが身がかわいいいから」するのかもしれないが、これは協会がマラウイ国上層部を非難する内容そのままである。

それではメキシコのことが会議で出された時、統治体では実際どんな意見が出たであろうか。メキシコの方針は、もとはと言えばたった二人の人間が決めたのであったにせよ、いまや統治体のメンバー全員の知るところとなってい

※15

『目ざめよー』 1968年2月8日号21、22頁より。なお、マタイ7・1-5参照

た。^{※16} この方針とマラウイでの状況との間に見られる明らかな矛盾に対してメンバーたちはいかなる責任を感じ、どのように対応したであろうか。

実は、私がメキシコのことを持ち出してみても、代替公務については妥協を許すなどあれほど力強い言葉を吐いていた人たちから、それは駄目だとか許せないというような意見はまったく出ないのである。メキシコの方針を変更し、「妥協の素振りすら許さない」ことを謳う方針にしようという提案もなかった。すでに第三、第四の暴力の波がマラウイのエホバの証人を襲っていたが（一九七二年と一九七五年）、このマラウイとメキシコの矛盾について懸念する声はまったくなかった。メンバーのほとんどは、メキシコでの方針を認めつつ、同時に他の国で正反対の基準を押しつけることに不自然を感じていないようだった。

これもやはり、メンバーそれぞれの人間性というような問題ではないと思う。むしろキリスト教を規律の形で扱う権威構造によく現れる産物だと今の私は考えている。権威構造に関わる人たちは、それほど良心にやましさを感じることなく二重の基準があるのを見ていられるようになってしまっている。メキシコの兄弟たちのためにつけ加えると、自分たちが賄賂によって軍務修了証明書を違法に入手している一方、マラウイでは政府の党员カードに料金を支払うという合法的なことを拒否しているがために大変な目にあっていると知って、関係者は大変良心を痛めていたのである。しかし「トップ」に立ち、いわゆる「象牙の塔」にいる人たちは不思議なほどそういう感情とは無縁で、この二重基準が人々にもたらす影響には感じるところがないようだった。これもやはり体制の恐さであると思う。私がこの手の体制を嫌悪するのは、一つにはこのためである。

※16 この時には（一九七八年）ネイサン・ノアは死去していた。しかし新会長となったフレッド・フランスは代替公務に関して話し合われた会議にはすべて出席していた。

さて、一九七八年の秋までにメキシコのこととは統治体のメンバー全員が知っていたわけであるが、それから一年も経った一九七九年九月、統治体ではこの決着が付かないままになっていった代替公務について再び話し合うことになった。この時のきっかけはポーランドからの手紙だった。

ミルトン・ヘンシエルは、代替公務は「兄弟たちを洗脳する罠」かもしれないから警戒すべきである、徴兵を避けるために炭坑で働くという、ポーランドでは多くのエホバの証人が行なっている便利なやり方があるので自分はこれをサポートするという意見だった。ロイド・バリーは、エホバの証人が「軍組織全体から離れているべき」だという方針を貫くべきであるという意見だった。テッド・ジャラズの意見はこうだった。「兄弟たちは問題があつたらエホバの組織に指示を仰ごうとする」ので、意見が分かれるようなことは避ける必要がある。統治体が代替公務の命令に「従っても構わない」と考えているように兄弟たちに思わせるべきではない。ケアリー・バーバーの言い分は「良心に任せる余地はまったくない」、屈することなく「最後まで貫き通すべき事柄」であるというものだった。フレッド・フランズは、我々の「良心は聖書によって訓練されなければならない」と言い、これまで通り、いかなる代替公務の受け入れにも反対する立場を明らかにした。

この当時、エワート・チティーは統治体のメンバーではなくなっていた。統治体の要望により辞表を提出していたのである。グラント・スターはこの会議に出ていなかったが、一九七八年十一月五日の会議ではチティーと共に方針変更の意見を表明していた。一方新メンバーとしてジャック（ジョン・バー（イギリス出身）とマーティン・ポエツィンガー（ドイツ出身）の二人が加わっており、この会議（一九七九年九月一日）に出ていた。動議が出されると、意見は真つ二つに分かれ、八名が方針の変更を支持し、八名（うち二名が新メンバー）がそれに反対する形となった。

一九八〇年二月三日、代替公務が再び議題に上がった。私のメキシコ訪問から一年以上経っており、さらにアルバー・シュローダーもメキシコへの年次訪問を済ませていた。その時もメキシコ支部委員会はやはり偽造軍務書類を手

に入れるのに賄賂を使っている現状について不安の声を漏らしていたので、帰国したシュローダーはこれを統治体に伝えていた。会議ではメンバーからいろいろな意見が出た。いずれにしてもこの件について三分の二多数が得られることはなさそうだったため、動議すらなされなかった。

結局、この件は「棚上げ」となったのである。一九七七年一月にベルギーの長老ミシエル・ウェバーからの手紙を受け取って以来一九八〇年の二月に至るまでに、エホバの証人の統治体は六回にわたって会議を持った。その挙げ句、結論が出なかったのである。^{※17}

だが、そのままになった方針によって影響を被る人たちが、『もののみの塔』が「一般の証人たち」と呼んだ人たちはどうなるのか。この人たちも「棚上げ」にしてくれたであろうか。事実はその反対である。統治体で三分の二多数が得られなかったため、世界中のエホバの証人の男性は、自分の良心に従って代替公務を政府のしかるべき要求として受け入れようものなら組織から離れたことになり、したがって排斥されたと同様に扱われることになっていた。これはすなわち、メキシコでは二十年前から取られている方針を支持しつつ、マラウイではまるで違った方針が取られている現状を統治体は認め、その存続を決定したということである。

二種の分銅

「二種類の分銅はエホバにとって忌むべきもの、欺きのはかりはよくない」 箴言20・23

メキシコのエホバの証人をとりまく状況をもう少し詳しく見れば、統治体のメンバー何人かの考え方を理解する助けになるかもしれない。最近までメキシコ憲法はいかなる宗教組織も土地資産を所有してはならないとしていた（こ

※17 さらに詳しくは、本書の続編である『クリスチャンの自由を求めて』256―270頁参照

これはメキシコ革命の結果であり、カトリック教会が国内に土地を始め膨大な資産を所有していた長い歴史が関係している。

したがって教会及び教会所有物はすべて政府の管理下にあったわけであり、政府がその使用を許可するという形になつていたのである。聖職者による搾取が行なわれた過去があるため、外国の宣教師や奉仕者がメキシコ国内で活動することも許されなかった。これらのことがのみの塔組織にどういう結果をもたらしたか。

まず法律上の問題があるので、メキシコのエホバの証人は宗教組織ではなく「文化」組織の名目にしようと本部組織では何十年も前に決定した。そこでメキシコに結成された「ものみの塔」協会はメキシコ政府に文化組織として登録された。^{※18} したがって、メキシコのエホバの証人は、何十年間も、宗教的あるいは聖書研究の集会をしているとは言わず、「文化的」集いを持っているのだと言っていた。この集いでは祈りも賛美の歌もなかった。もっと大規模な大会にあつても同様である。また、家から家への宣教奉仕に当たってはものみの塔出版物だけを持ち運んでいた（これは協会によって与えられた「文化活動の補助となるもの」とされていた。聖書を持ち歩くことはなかった。宗教活動を行なっていることになるからである。一定区域のエホバの証人たちが「会衆」と呼ばれることはなく、「集まり」と呼ばれた。バプテスマを受けるとは言わず、「シンボル」を行なうと言つて結局は同じことをしていた。

こういったいわば隠語が使われたのであるが、これは信教の自由に対して圧力をかけるような国家の中にあつたからではない。^{※19} 主に宗教団体の資産所有に関する政府の規則を逃れるためだったのである。^{※20} またこれはメキシコ

※18 私の手元には一九四三年六月一〇日付の登録書類のコピーがあるが、そこではメキシコのものみの塔協会が「外務省書記官」によつて「科学・教育・文化振興を目的として設立される非営利市民団体」として登録されている。これが約四十六年間続いたのである。

※19 メキシコ政府は実際のところエホバの証人に対してかなり寛大であつた。非宗教的「文化」団体であるというのが単なるごまかしに過ぎないことはわかつていたはずだからである。

※20 一九七〇年代のこと、私が妻とメキシコの国際大会に出席し、現地の支部事務所に泊まったことがあつた。ノア会長もそこにいて、メキシコ支部の案内をしてくれた。その時会長は、メキシコでは協会が法律上「文化団体」として登録されていると明言した上、それは主として協会の資産を守るためだとも言つていた。

コのエホバの証人が決めたことでもない。ブルックリンの世界本部で決められ、実行に移されたことなのである。

メキシコでの祈りも歌もないエホバの証人の集まりを、アメリカでの状況と考え合わせるのも興味深い。アメリカでは、許可あるいは警察での登録なしに家から家へと出版物を持って回ることや、宣伝カーを使う権利や、道ばたで出版物を配る権利など、憲法で認められた基本的な権利に基づく実にいろいろな事柄について、その実行をあきらめるどころか裁判で戦い抜いて最高裁判所まで持ち込むことも辞さない。協会組織側はこれらを一つとしてあきらめようとはせず、その存続のために戦った。別にそんなことを一世紀の初期クリスチャンたちがしていたわけではなく、クリスチャンとして重要なことであるとも考えられないにもかかわらずである。

しかし、会衆あるいはグループでの祈りの方は、初期クリスチャンの集まりにおける主要な宗教行為であり、かつまた神の僕が遠い昔から行ってきたことである。メキシコ政府では宗教的な集会で祈ることに何の異議も差し挟んでいなかった。しかしメキシコのエホバの証人は、自分たちの集会が宗教的なものではないと言うように指示されていたのである。祈りほど神を崇拜することに直接関係するものも少ないだろうし、またこれほど神聖なものもない。ペルシアの帝国命令によって、三十日間は王以外に対して祈ってはならないことになった時、預言者ダニエルはこれを重く見て、自分の地位、財産、そして生命までも危険にさらしてこの命令に背いたほどである。^{※21}

しかし本部組織の方では、メキシコのエホバの証人にあつては会衆での祈りを犠牲にするのが都合の良いことであると判断したわけである。どんな利益があるのか。どんな「得るところ」があるのか。結局、会衆での祈りや賛美の歌を行なわず、宣教活動において聖書を使わないことで、組織側はメキシコに協会の資産を所有することができ、他の宗教団体が遵守していた政府の規則に縛られずに活動できたのである。自分たちは宗教団体ではない、自分たちの集会は宗教に関係ない、宣教活動も宗教活動ではない、バプテスマも宗教行為ではない——こう言い続けることに何

の抵抗もなかった。この同じ時、他の国にいるエホバの証人はすべてまったく反対のことを言っていたのである。

以上のようなことを知っていたからこそ、統治体のメンバーの中には、メキシコで行なっていること全体からすれば偽造文書に賄賂を払うことなど大したことではないと思う人もいたのだろう。こう思えばこのメンバーたちが同時に他の国に対しては「妥協しない」態度を断固取るべきだとしたのもある程度はうなずける。この人たちにとっては二重の基準が存在していたわけではなく、たった一つの基準しかなかった。すなわち、何であれ、とにかく組織が決定して認めたことを行なうということである。メキシコの方針も、賄賂を使うことについても、組織が決定した。これは個人の良心に任せたので、賄賂を払って軍務修了証明書を受け取った人でも責任ある役目（例えば長老など）について構わないし、その活動を監督する人たちも特に神の前に不安を持つ必要はないと決めた。この同じ組織が、代替公務についてはまったく違う方針を決定した（マラウイの状況についても同様である）。そしてこれに従わなかった者は会衆にいる値打ちもない者、それどころか神とのつながりを絶った者とされるのである。

一体どうすればクリスチャンにそのような見方ができるものか、当時の私にはわからなかったし、今でもわからない。「世から離れて清くある」ようにという力強い、やかましいとも言えるほどの呼びかけが、ただ空虚な美辞麗句に過ぎず、現実にはぐわなないだのきれいな言葉だと感じられた。しかもこういうきれいなことを言っている、また聞いているメンバーたちには、現実がどんなものか把握できていたのである。ますますどうしてあんな言葉が使えるのかわからなかった。

私は中南米の国々に二十年近く住んでいたが、賄賂を払ったことはない。しかし、完全に合法的なことをしようとする時ですら、そんな権利はないはずのその筋の人に何らかの支払いをせねばならない国が、中南米だけでなく世界のあちこちにあるのはよく承知している。これに直面する人が、これはゆすりの一種ではないかと思っても不思議ではない。聖書時代に取税人や兵士が規定額以上を取り立てたのと同様だとも言える。この手のゆすりに屈する人があっ

でも、だからその人は駄目だという裁きを下すのは正しくないように思う。メキシコではゆすりに屈するどころか、偽造文書を手にするために自らお金を関係者に差し出し、違法行為をねだっていたわけであるが、この人たちについて批判を行なうつもりもまったくない。私がショックを感じ、また恐ろしいとすら思ったのは、そんなことではない。恐ろしいのは、権威構造の上部にいる者が、「組織のため」の事柄の方が普通の人たちよりもはるかに重要だと思っていることである。普通の人たちには子供もあれば家や仕事もある。多くは、審理の座に座って何が良心の範囲なのかを決めている人間たちと比べても、神への献身において何ら違ったところはない人たちである。

権威の座にある者が、自分たちは意見が分かれたままでも良いとしておきながら、他の人には一致を強要する。他の人がクリスチャンとしての良心の自由を行使するのは信用しないが、自分たちの決めたことには従わせる。自分たちには良心の自由を認め、違法行為や事実の歪曲なども許す。

権威の座にある者が、66・66%の賛成が62・5%になったからというので、現行の方針を存続させることを決定する。他の人たちが逮捕され、何ヵ月にもわたって家からも家族からも引き離され、何年にもわたって牢獄で暮らすことになり得る決定である。しかもこのような目にあっている人たちは、従うべき方針についての聖書的な根拠があるとは感じていなかったり、時にはその方針が間違いだと考えたりしている。

権威の座にある者が、方針の適用によって男性も女性も子供も含めた普通の人たちに家や土地を失わせ、暴力と拷問、強姦と死に直面させる。それというのもしその国を統治する権力の組織カードを合法的に買うことを拒否したからである。一方、別の国では軍閥係者に進んで賄賂を払い、あなたは軍務を修了した、今や第一予備軍のメンバーである、という偽造証明書を発行してもらう。

これが私にとって衝撃的なのである。関係者の中には誠実にやっている人もいるだろうが、私にはやはり恐ろしいことのように思われる。

私としては、いい大人がこのような矛盾に気づかず、これはいけないとも思わず、人に及ぼす影響について深く感

じることもないのが理解できなかった。結局「組織への忠節」がとんでもない結論を生み、ひどい不公平にも何のかの理屈をつけてしまい、自分たちの方針が引き起こす人の苦しみからも何となく逃れてしまうのであろうと考えた。もちろん組織への忠節が人をどれほど鈍感にするかについてはよく記録に残っており、宗教の歴史においても政治の歴史においても、何世紀もの間、何度も繰り返されてきた。極端な例は異端審問でありナチ政権である。しかしこれを間近で、しかもそんなことが決してないはずのところで見てみると、本当にやりきれない気分になる。神は、人間が他の人間に対して過剰な権力を持つようにという意図を決して持っていなかった。その理由はここにあるのではないかと思うのである。

さて、もののみの塔協会はメキシコで「文化的」組織として半世紀近く通したが、ついにこれが宗教組織に変えられた。『もののみの塔』1990年1月1日号7頁へ1990年1月1日号7頁は一九八九年にエホバの証人の「立場が変化した」としている。家から家の宣教で初めて聖書が使えるようになったことや、初めて集会を祈りで開始することができるようになったことなどを伝えている。

さらにまた、この変化がメキシコのエホバの証人にとっていかに「胸がわくわく」するものであり、「喜びの涙」をもたらしものだったかを描き、この変化によって「伝道者」の数が一万七千人あまり急増したとしている。

ところがこの記事は、メキシコのエホバの証人の立場がそれまではどういふものだったのか、なぜそうだったのか、またいかにしてこれが変わるようになったのか、まったく何も伝えていない。誰でもこの記事だけを読めば、この立場の変更はいろいろと良いことをもたらしてもいるし、きつと組織がずっと求めてきたものに違いないと思うだろう。また、それまで集会で祈りができなかったり、家から家への奉仕で聖書が使えなかったりしたのは、メキシコの法律が禁じていたからだと考えるだろう。半世紀の間、メキシコのエホバの証人にこれらのことができなかったのは、他でもない自分たちの本部組織がわざわざその立場を選んでいたのであるが、そのことは決して書かれない。「胸が

わくわく」するような、そして「喜びの涙」をもたらすような変更だったにせよ、これは過去何十年間、やろうと思えばできることだった。メキシコのものみの塔協会は宗教団体ではなく「文化」団体ですという仮面はやめようと組織で決めれば済むことだった。しかしそのことは書かれていない。メキシコのエホバの証人がそれまで祈りや聖書を控えていたのは、まさに自分たちの本部組織がそのように指示していたからである。「文化」団体という立場を守るためである。メキシコのものみの塔協会が責任ある地位にいる人たちはこういう事実をすべて知っている。しかしそれ以外の国のエホバの証人はほとんど誰も知らない。そしてこの『ものみの塔』1990年1月1日号へ1990年1月1日号はそのことをまったく知らせず、ただ無難な、いわばきれいにした話を載せているばかりである。これは一九八九年以前に、自分たちが宗教団体だとわかっていながら宗教団体ではないように見せかけていたのと同じぐらい誠実さを欠く態度である。

『目ざめよ!』1994年7月22日号へ1994年7月22日号の記事にも示されている通り、ものみの塔協会がメキシコで何十年もかぶっていた仮面を脱ぎ捨てた背景には、メキシコ憲法の修正条項が議会などで徐々に受け入れられてきたことがある。新しい修正条項では、教会は再び以前のように土地や建物を所有しても良いことになったのである。これはカトリック教会だけでなくすべての宗派に当てはまる。結局、変更がなされたのは、何らかの信条に基づいてのことではなく、このように実理的な理由によるものだったのである。

第7章 予言と独断

「もし預言者がエホバの名において話しても、その言葉が実現せず、そのとおりにならなければ、それはエホバが話されなかった言葉である。その預言者はせん越にそれを話したのである。あなたはその者に恐れ驚いてはならない」

申命記18・22

キリスト・イエスの再来については、無関心であるより熱心に待つという態度の方が好ましい。初期クリスチャンたちも決して無関心ではなかった。

何年か前に、エホバの証人カナダ支部広報担当のウォルター・グラハムが、キリスト再来についての予言がはずれたことについての質問に答えているのをテレビで見たことがある。エホバの証人にもし非があるとすれば、ただ「神の御名の正しさが示され、王国が地を支配するのを目にしたいという私たちの切望」だけだと言っていた。

はすみで間違いを言ってしまったり、願望や期待が大きいあまりに判断が狂い、性急な結論に飛びついたりする――人間ならそんなこともあり得るということにおおむね異論はないだろう。我々はみんないつかどこかでそんなことをやっているものである。それだけのことなら、誰も心配する必要はない。

しかしこの場合、それだけではすまないように思う。これはもつと深い原因のあることで、我々が時としてちょっとした間違いを犯すのとは違う。予言の数々が大変な影響力を持っているのだからなおさらである。

また、統治体が次のように考えているのも軽視できない。すなわち、エホバの証人の成員、少なくともそのうちの「油そそがれた級」（これには統治体のメンバー全員が属する）は、神に対して大きな責任を持つ「預言者」の役割が与えられているとされているのである。

だからこそ『ものみの塔』1972年4月1日号197頁へ1972年7月1日号406頁には、「彼らは自分たちの中に預言者がいたことを知るであろう」という記事が載ったのである。この記事ではまず、現代において神エホバが人々を助けるべく、「危険を知らせ、来るべき事柄について宣言をなすため」に預言者を持ったであろうかという疑問が出される。そしてその答えは、しかり、記録によれば確かにそのような預言者がいた、というのである。

「預言者」の実体を明らかにする

このような質問に対しては肯定の答えが出せます。その預言者とはだれですか。

〈中略〉しかしながらエホバは、連盟は神の真の王国のにせの代用物であるとの警告を、僧職者に導かれるキリスト教世界の人びとに与えないままにはされませんでした。エホバは彼らに警告する預言者を持つておられました。その「預言者」はひとりの人間ではなくて、一団の男女で構成されていました。それは当時、万国聖書研究生として知られたイエス・キリストの追隨者の小さな群れでした。今日、彼らはエホバのクリスチャン証人として知られています。そして今なお警告をふれ告げており、信仰をいだいてその音信に耳を傾ける幾十万もの人びとが彼らに加わり、委ねられた彼らのわざを助けています。

もちろん、このグループが神の「預言者」として行動していると言うのは容易です。が、それを実証するのは別問題です。そうする唯一の方法は記録を再検討することです。記録は何を示していますか。『ものみの塔』1972年7月1日号406、407頁

この「記録」とやらは調べる値打ちがある。これが誤りを明らかにすることは、本部でも認めるだろう。一九八〇年のある朝、毎日の聖書討議の司会者をしていたフレッド・フランズ会長は、ブルックリン本部ベテルの皆を前に一九二五年の期待がどんなものだったかについて語ってくれた（一九二五年にはキリストの千年統治が完全な形で地上に現れることになっていた）。ラザフォード判事が自分の予言について後から言ったという言葉も引用してくれた。「全くばかなことをしてしまった」という言葉である。※1

※1 ラザフォードのこの言葉は『ものみの塔』1984年10月1日号24頁へ1984年10月15日号28頁に引用されている。

ところが組織の方では、こういう間違いは単に人間が不完全であるという証拠に過ぎず、神の約束が果たされるのを見たいという強い願いの現れであると主張する。

しかし「記録」を見るとそれ以上のことがわかると思う。何かが起こるのを目にしたいから「ばかなこと」をする。

これはこれで良いとしても、その自分の考えを他の人にも押しつけ、仮にそれを受け入れず、自分が考える通りに考えない人があれば批判を加え、その信仰を疑い、攻撃するというのはまったく別問題である。

さらに深刻なのは、人類のため神に任命された代弁者であると名乗る組織がこれを行なっていることである。それも何日、何ヵ月というような期間ではなく、何年、何十年にもわたって繰り返し繰り返し、世界規模で行なっている。その帰結に対する責任は、単に「まあ、人間は誰でも不完全だから」で済まされるものではない。

誰でも不完全なのは確かだが、我々は皆自分の行ないに対して責任を持っている。特に自分のすることが、人と神との関係のように重要かつ個人的なことに大きく関わるような時にはなおさらである。

さらに、ある年代についての予言に関して意見が分かれていても、その追隨者には満場一致して自信を持っているように見せかけ、その予言の数々に揺るがぬ信頼を持つように呼びかける――これもまた深刻な事態である。

これについては、統治体にいたおかげでその実態がわかったことも記しておかねばならない。エホバの証人としての活動を始めて最初の二十年ほどの間、過去のはずれた予言については何となくぼんやりしたことしか知らなかったし、大事なことだとも思わなかった。これについて非難を加えるような本などにもまったく興味がなかった。一九五〇年代の終わり頃から、協会の出版物にも『神の目的とエホバの証人』（これは協会組織の歴史を扱ったもの）や、協会がスポンサーとなつて出版した『信仰の行進』などのように、過去の失敗の話が出てくるものがあつたが、いずれもそんなことは大したことではないという書き方がしてあり、私もそうなのだと思つていた。

ところが一九七〇年代の終わり頃になつて、これがどれほど大したことだったのかを初めて知ることになった。こ

それは、いわゆる「迫害文献」ではなく、まさにものみの塔協会の出版物を見てのことであり、また統治体のメンバーを含め、周囲から尊敬を集めていたエホバの証人の仲間から話を聞いてのことである。

一九一四年は、エホバの証人の教義と権威構造にとって非常に重要な年代である。この年代についてエホバの証人は次のようなことを信じている。

- 一九一四年に、人間の目には見えないが、キリスト・イエスの「臨在」が始まり、イエスに従う者と世にとっての裁きの期間が始まった。
- 一九一四年に、キリスト・イエスが全世界の統治を開始し、その王国が正式に権力を持った。
- 一九一四年は、聖書の預言にある「終わりの日」ないし「終わりの時」の始まりである。
- 一九一四年から三年半後（つまり一九一八年）には、死の眠りについていた使徒以来のクリスチャンたちの復活が始まった。
- それとほぼ同時期（一九一八年、その時存命中だったキリストの真の追隨者たちは、大いなるバビロンによって靈的に捕らえられたが、その翌年の一九一九年には解放され、この時キリスト・イエスによってその「忠実で思慮深い奴隸」だとされた。これはキリスト自らが認める代行者であって、地上においてキリストの業をなす。世界中のキリストのしもべを導き教える唯一の経路である。
- 一九一四年以降、最後の「収穫」の業が進められてきており、最終的に救いあるいは破滅がもたらされる。

基本となっている一九一四年という年代の持つ意義が揺らぐようなことがあれば、ここに挙げた教義の体系がすべて揺らぐことになる。また、この「忠実で思慮深い奴隸」級の正式な代行者グループの特権も揺らぐことになる。

この年代にそんな意義がないと言ってしまうと、これを基盤とする教義体系も権威構造もすべて終わりになる。一九一四年というのは、それほどまでに重要なものである。

しかし、今日のエホバの証人で、次のことを知る人はほとんどいない。すなわち、ほとんど半世紀にわたって（一八七九年から一九二〇年後半に至るまで）『ものみの塔』その他の出版物に公にされていた年代預言の数々は、先に挙げたすべての教義と、基本的に正反對のものだったことである。私自身、ずっとこれには気づかなかった。後になって、五十年近くにわたって『ものみの塔』誌という「経路」が先に挙げた教義内容の一つ一つについて異なった年代を当てはめていたことがわかった。また、その理由もわかった。かつて一九一四年について期待されていたことがはずれたため、預言の成就とされる事柄に新たな年代が当てはめられていったに過ぎなかったのである。

すでに第2章で述べた通り、『聖書理解の助け』を書くために調査を行なった結果、バビロンによるエルサレムの破壊が紀元前六〇七年であるという協会の見解は歴史資料にまったく合わないものとわかっていた。それでも、歴史上の証拠に逆らってこの年代を信じ、これに聖書上の根拠もあるものと考えていた。この紀元前六〇七年がなくては、大事な一九一四年が疑問視されることになるからである。そこで歴史上の証拠の方に問題があるのだという見方を取り、『聖書理解の助け』にもそう記した。

ところが一九七七年に、カール・ウィローフ・ジョンソンというスウェーデン在住のエホバの証人が、聖書の年代計算に関する大規模な調査の結果をブルックリン本部まで送ってきた。ジョンソンは長老であり、もう二十年ばかりエホバの証人としての活動を続けていた。

私自身も年代計算については調べた経験があったので、ジョンソンの調査がいかにか、深く、かつ正確であるかに感心した。全体としては、ルカ21章24節でイエスが言う「異邦人の時」『新世界訳』では「諸国民の定められた時」が一九一四年に終わったとする協会の見解の根拠は弱いことを統治体に示そうとしていた。

要約すると、一九一四年という年代は次のように算出される。ダニエル4章において、「七つの時」という表現が

使われており、ここではこれがバビロン王ネブカドネザルの七年にわたる狂気の期間を示すものとされる。^{※2} 協会
は、この「七つの時」がさらに大きなこと、すなわちエルサレムの破壊（これを協会は紀元前六〇七年とする）から「異
邦人の時」の終わりまでの期間についての預言であるとする。これは異邦人たちが地上を「邪魔されることなく」支
配する期間であるという。

この「七つの時」は七年間のことであり、一年は三百六十日間であるとされる（太陰暦の三十日の月が十二ヵ月。
三百六十かける七で二千五百二十日である。ここで、「一年に対して一日」という表現を使っている他の預言が示さ
れる。^{※3} これによって二千五百二十日は二千五百二十年になり、すなわち紀元前六〇七年から西暦一九一四年まで
の期間となる。

先にも述べた通り、キリストの王国による支配、「終わりの日」、復活の始まり、そしてその他諸々の事柄に関する
協会の教義は、すべてこの計算によっている。いささか込み入った、聖書のあちこちの部分を組み合わせた説明であ
るので、これが即座に説明できるエホバの証人はそう多くないが、とにかくこの結論の部分は全員が受け入れている。
エホバの証人のほとんどが、何十年にもわたって、この一九一四年に関する説明がおおむね自分たちの組織だけの
ものであり、協会の初代会長のラッセル師によって初めて公にされたと信じていた。協会一九五九年発行の『神の目
的とエホバの証人』の見返しにも次のように書かれている。

一八七〇年 チャールズ・テイズ・ラッセルが少数の仲間たちと共に聖書研究を始める
一八七七年 『三つの世界』が刊行され、一九一四年が「異邦人の時」の終わりであるとされる

※2 ダニエル4・17、23―33

※3 民数記14・34、エゼキエル4・6。

これを見ると（そしてこの本の内容を見てもそうなのだが）、この『三つの世界』という本（ラッセルはこれに出資しただけであった）が一九一四年に関する教義を初めて公にしたものであるかのように感じられる。

実は私もそう思っていた。ところが、そこに先ほどのスウェーデンのジョンソン長老による調査結果が世界本部に送られてきたわけである。これを見ると、協会の出版物がどれほど多くの事実を無視したり、あるいはごまかしたりしていたかがわかった。

ジョンソンは、まず年代計算そのものの長い歴史を概観する。「一年に対して一日」という公式を聖書に出てくるいろいろな期間に勝手に当てはめるのは、早くも西暦一世紀のユダヤ人ラビが行なっていた。九世紀になると、「一連のユダヤ人ラビたち」が、ダニエル書の預言に出てくる千二百九十日、千三百三十五日、二千三百日という期間にこの「一日一年」の公式を適用して年代計算と予言をし始め、その結果をすべて救世主の出現する時期に結びつけた。^{※4}

同じことはキリスト教徒の間でも行なわれていた。最初にわかるのは十二世紀、ローマ・カトリック大修道院長（フロリスの）ヨアキムによるものである。ダニエル書ばかりでなく、啓示（黙示録）11章3節及び12章6節に出てくる千二百六十日という期間も、この「一年に対して一日」という公式で解釈された。さらに時代が下るにつれ、いろいろな解釈者によって実に様々な年代計算がなされ、予言の年として一二六〇年、一三六〇年、さらに十六世紀中のいろいろな年代が挙げられた。予言された出来事が起こることもなく次々に年が過ぎ去っていくので、常に計算の修正がなされ、また新しい年代計算が現れた。

一七九六年には、ジョージ・ベルがロンドンの雑誌に論文を発表し、「反キリスト勢力」（これはベルによればローマ

※4 ダニエル8・14、12・11、12。ジョンソンの書いたものは、その後『異邦人の時を再検討する』として一九八三年に出版された。現在改訂版がある（C.O. Jonsson, *The Gentile Times Reconsidered*, third edition, Commentary Press, 1998）。

法王のことである。の崩壊を予言した。これは「一七九七年あるいは一八一三年」に起こることになっていた。これも例の千二百六十日に基づくのだが、他の説とは異なる年から数え始めていたのである（説によって、この数え始めの年は、キリストの生誕からだったり、エルサレムの崩壊からだったり、カトリック教会の始まりからだったりする）。ペルの予言はフランス革命の最中に書かれたが、これが発表されるとまもなく大変な出来事が起こった。ローマ法王がフランス軍によって捕らえられ、国外へ追放されてしまうのである。

これこそが聖書の預言の見事な成就であると思った人も多く、一七九八年はあの預言にある千二百六十日間の終わりだとされた。したがってその翌年の一七九九年は「終わりの日」の始まりであるという見方も出てきた。

ヨーロッパにさらなる動乱が続くにつれ、さらに新しい予言をする人が次々と現れた。その中にイギリスのジョン・アクイラ・ブラウンがいた。ブラウンは一八〇〇年代の始め頃、ダニエル書8章に出てくる二千三百日というのが西暦一八四四年に終わるとする論文を発表した。これはアメリカにおけるキリスト再臨運動の旗手、ウィリアム・ミラーの支持するところともなった。

さて、以上に見た年代計算の流れが、エホバの証人の歴史にいかなる影響を及ぼしたかを見てみることにしよう。

カール・ウーローフ・ジョンソンの調査では、ジョン・アクイラ・ブラウンにはもう一つ別の聖書解釈があり、これがエホバの証人の信じている一九一四年に密接に関わっていることが明らかにされていた。どれほど密接かというと、実はこのブラウンこそ、ダニエル書4章にある「七つの時」が一日一年の公式によって二千五百二十年になると言い出した張本人なのである。

ブラウンがこれを初めて公にしたのは一八二三年であり、「七つの時」が二千五百二十年間になる計算方法は、今日のものみの塔出版物とまったく同じである。

ちなみにこれは、チャールズ・テイズ・ラッセルが生まれる二十九年前であり、そのラッセルが聖書研究グループを始める四十七年前であり、『三つの世界』が出る半世紀以上も前のことである。

私は、スウェーデンのジョンソンから送られた研究結果を読むまで、こんなことにはまったく気がつかなかったのである。この事実を認める協会の出版物は皆無で、ジョン・アクィラ・ブラウンの名前も一切出てこなかった。ジョンソンは一九八三年にこの調査を本として出版した。それから十年の後、ものみの塔協会は初めて二千五百二十年の計算がジョン・アクィラ・ブラウンのもの（一八二三年、ラッセルが登場する五十年前も前である）であることを認めた。^{※5}

ところで、ブラウンはこの二千五百二十年という期間が紀元前六〇四年に始まるとしており、したがって西暦一九一七年に終わるとしていた。そして、この時にこそ「イスラエル王国の栄光が完全なものとなるであろう」と予言した。

それでは、一九一四年という年代は一体どこから出てきたのか。次にこれを見てみよう。

先ほど触れた一八四四年についての期待がはずれたことがわかると、いろいろな再臨派グループ内で分裂が起こり、そのほとんどがキリスト再来の時をまた新たに設定する動きに出た。その一つに、ニューヨークのロチェスターに住むN・H・バーバーを中心とするグループがあった。

※5

『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』^{134頁へ134頁参照} この本には、問題の二千五百二十年の期間がいつ始まり、いつ終わるのかをブラウンは「はっきりと理解してはいませんでした（これはブラウンの年代とものみの塔の年代が合わないという意味であろう）が、『その『七つの時』とルカ21章24節の異邦人の時を結びつけていました」とある。これは誤りである。ジョンソンの『異邦人の時を再検討する』も示す通り、「ブラウン自身はこの期間をルカ21・24の異邦人の時とは結びつかなかった」のである。ただ、ブラウンの二千五百二十年の計算は、後に（一八二六年『七つの時』が異邦人の時と結びつくにあたって影響があったのは確かである。詳しくは『異邦人の時を再検討する』^{36頁参照}）

バーバーはジョン・アクィラ・ブラウンの解釈をかなりの部分そのまま受け入れたが、二千五百二十年の期間が始まった時を紀元前六〇六年に変え、この期間が終わるのは西暦一九一四年であるとした（これは計算ミスである。これでは問題の期間が二千五百十九年間になってしまう）。

一八七三年、バーバーは再臨派グループのために雑誌を刊行した。これは始め『真夜中の呼び声』と呼ばれたが、後に『朝の先触れ』と改題された。次のページに『朝の先触れ』1878年7月号の表紙を載せてある。この一八七八年というのは『ものみの塔』誌が創刊される前年である。この表紙の右下の方に“Times of the Gentiles” end in 1914（異邦人の時は一九一四年に終わる）とあるのを確認して頂きたい。

このコピーはブルックリン本部に保管されていたものから取ったのだが、普通は閲覧できないものである。しかし本部にこれがあるのだから、一九一四年が「異邦人の時」の終わりだと言ったのは『ものみの塔』がはじめではないことを本部スタッフの誰かが知っていたわけである。これはもともと再臨派のN・H・バーバーの意見をそのまま取り入れたのである。

見ての通り、この一八七八年七月の時点で、ラッセルはこの再臨派『朝の先触れ』誌の「編集助手」となっている。ではN・H・バーバーとはどのように知り合ったのか、そしてどのようにその年代計算（これはダニエル書第4章に出てくる「七つの時」の解釈も含め、ほとんどがジョン・アクィラ・ブラウンのものだったが）を受け入れるようになったのか。これについてはラッセル自らが語っており、『ものみの塔』1906年7月15日号に載せられている『傍線筆者』。

一八七六年一月頃のことであるが、預言の年代に関する事柄に特に興味を持ったことがあった。その顚末はこんな具合である。ある時『朝の先触れ』という雑誌をその編集者のバーバー氏より受け取った。封筒を開け、表紙の絵を一目見ただけでこれは再臨派だなどと思い、今度はいつこの世が破滅すると言っているのかなと思って読んでみた。ところがその内容は何とも嬉しい驚きであった。バーバー氏は、ここアレゲーニーにいる我々がすでにその数年前から気づき、大いに喜びを見いだしている事柄に目を向け始めていたのである。すなわち、我らの主の再来は、世界を破壊するためではなく、地上にあるすべての民を祝福するためであること。主は

HERALD OF THE MORNING

GOD'S LOVE

"All nations whom thou hast made, shall come and worship before thee."

Vol. 7.

ROCHESTER, N. Y., JULY, 1878.

No. 1.

THREE WORLDS

N. H. BARBOUR, Editor.

ASSISTANT EDITORS,

C. T. RUSSELL, PITTSBURGH, PA.

ELD. J. H. PATON, ALMONT, MICH.



PLAN OF THE AGES:

"Both the Cherubim of one measure and one size."

PLANE OF THE FLESH

Earthly Jerusalem.

Earthly Sacrifice.

Earthly Kingdom.

This one looking forward to the sacrifice.

TWELVE TRIBES.

From the end of the Patriarchal age, at the death of Jacob, to the end of the Jewish age, at the death of Christ, was 1845 years.

Birth of Jesus—

Baptism of Jesus—

Crucifixion, A. D. 33—

Jerusalem destroyed—
A. D. 70.



PLANE OF THE SPIRIT

Heavenly Jerusalem.

Spiritual Sacrifice.

Heavenly Kingdom.

This one looking back to the sacrifice.

TWELVE APOSTLES.

From the end of the Jewish age, at the death of Christ, to the end of the Gospel age, should, if of equal measure, be 1845 years.

2500 days ended in 1843-4.

1335 days ended in 1874, also Jubilee cycles

1878, the double complete.

"Times of the Gentiles" end in 1914.

TERMS—Six Months, 25 Cents One Year, 50 Cents.

〈『朝の先触れ』誌。「N. H. バーバー編集」とあり、「編集助手」としてC. T. ラッセルとJ. H. ペイトンの名前がある。また、右下の矢印部分に「異邦人の時」は1914年に終わる」とある。〉

盗人のようにやって来られるのであり、肉の体ではなく霊的な存在として、人の目には見えないような形で到来されること。この時代の終わりに当たり、主が会衆を集め、「麦と「毒麦」へ新世界訳では「小麦」と「雑草」を分けていかれても、世界はそれに気づくこととはないであろうということ。

こういう進んだ見方をする人が他にもあるのだと思い、私は大いに嬉しく思った。ところがまた大変に驚くべきことが非常に慎重な調子で書かれているではないか。すなわち、パーバー氏の考えによると、預言の数々の示すところでは、主はすでに（目には見えない形で）世界に「臨在」されており、麦を収穫する業はすでに始まっているというのである。このことを示す年代預言はすでになされていたのであるが、氏はその何ヵ月前にこれがはずれたと思っていたと言っているのである。

これは新しい見方であった。再臨派が乱発していたため何とも愚かなことであると久しく思っていたあの年代預言の数々は、実は、主が目には見えない形で臨在されてその王国を打ち立てることを示していたのであるうか。実に主の王国が知られ得るのはこれによる他はないではないか。これについて主がその民にお伝えになるであろうということ、これは控えめに言っても、そうであってもおかしくない、むしろ実にあることであると思われる。何しろ主は、忠実な者たちが世の暗闇に放っておかれるようなことはいと言われていたのである。そしてまた、主の日は、他の者には夜に盗人がやってくる如く（ひっそりと、思いがけなく）やってくるものではあるが、常に注意している、熱心な聖なる者にとつてはそうではないともある。——テサロニケ第一5・4。

私はここで友人のジョナス・ウェンデルや他の再臨派の面々が一八七三年に世界は破滅するであろう云々と言っていた時の根拠を思い出していた。それは、世界の年代計算をしてみるとアダムに始まる六千年の期間は一八七三年初頭に終わるというものであった。これはまた聖書にも根拠があるとされている。ひよっとすると、まったく値打ちがないと思っていたあの年代計算に、実は重要な真理があったのであろうか。再臨派は単にその適用を誤ったのであろうか。

ここで注意して頂きたいのは、この辺りまではラッセルも年代預言の類を重要視しておらず、むしろ「愚かなことである」と思っていたことである。さて、ここからどうなるかをさらに見てみよう。

神が知らしめようとなさっていることなら何であれ、とにかく何としても知りたいと思ひ、即刻パーバー氏に手紙を送った。その他の点については私も意見を同じくすることを伝え、またなぜ、いかなる聖書の根拠に基づいてキリストの臨在及びゴスペル時代における収穫の業の開始を一八七四年の秋とされておられるのか知りたい旨を伝えたのである。送られてきた返事を読むと、最前の私

の推測が正しかったことがわかった。すなわち、この年代計算その他は一八七三年に再臨派が言っていたものとまったく同じであり、バーバー氏とその仲間であるミシガンのJ・H・ペイトン氏はその頃まで再臨派の正規メンバーだったというのである。問題の一八七四年が世界の破滅を見ることも肉の体のキリストを見ることもないままに過ぎてしまい、両氏は一時呆然としてしまったらしい。そこで両氏はこのはずれたように思われた年代預言を再度検討したが、そこに何の間違いも見いだすことが出来なかった。そこで、ひよっとすると年代そのものは正しかったのだがそこに期待していたものが間違っていたのではないか、ということになったのである。すなわち、私などが説いていた通り、万物の改まる時、世界の祝福の時をこそ求めるべきではないか、というのである。一八七四年の落胆があつてまもなく、『朝の先触れ』の読者で、『ダイアグロット』に不思議なことを発見した人がいた。そのマタイ24章27節、37節、39節では、普通「来臨 (coming)」と訳されている言葉が「臨在 (presence)」となつていたのである。これこそが手がかりとなり、もともとは預言の年代について考えていたのが、主の到来が何のために、そしてどのようになされるかについての正しい見解へと導かれていった。私の方はその反対で、まず主の到来が何のため、どのようになされるかについて正しい見解に導かれ、しかる後に、神の言葉によればそれがいつなのかについての考察に導かれたのである。かように神はその子らが様々なところから真理に向かうのを導きになる。しかし敬虔に神を信ずる心のある者は結果的に一つところへと結ばれていくのである。

ところがその当時明らかになつていた年代預言について扱った本の類はなかった。そこで私はバーバー氏にフィラデルフィアまで来てもらえるよう、その費用を負担することにし（フィラデルフィアには仕事の用事があり一八七六年の夏の間滞在することになつていたのである）、一八七四年が主の臨在と「收穫」の開始の年であるという預言をきちんと聖書的に証拠立てて頂きたいと申し入れた。バーバー氏はやってきた。私はその根拠に満足した。私は常に確信に基づいて行動し、かつすべてを主に捧げる者であるが、直ちに次のことを理解した。すなわち、我々が生きているこの時代は、我々がキリストの信徒として果たすべき責務と業にとつて誠に重要であること。收穫の時であるからには、收穫がなされねばならぬこと。そしてこの現在の真理こそは嫌であり、これをもつて主はその子らの刈り取りと收穫の業をさせしめんとするものであること。

このように、再臨派のN・H・バーバーと会つたことでラッセルの年代預言に対する気持ちは変わったのである。ラッセルはバーバーの雑誌である『朝の先触れ』の編集委員となつた。この時以降、ラッセルの著作は年代預言が目

立った特徴となり、これはその後まもなくラッセルが始めた『ものみの塔』誌においても同様であった。^{※6}

ラッセルがもらい受けた「七つの時」の解釈と一九一四年という年代は、いずれも一八七四年という年代と分ちがたく結びついていた。一八七四年はバーバーとその一派が最も重要視していた（当時一九一四年はまだまだ先のことであったが、一八七四年というのは過ぎ去ったばかりであった。バーバーたちは、一八七四年が人類の歴史六千年における最後の年であり、この年にこそキリストの再来があると信じていたのである。この年が何事もなく過ぎ去ると皆落胆した。ところが、先ほどの引用にもあった通り、バーバーの雑誌に記事を寄せた再臨派のB・W・キースという人が、『ダイアグロット訳』という新約聖書の訳では、キリストの再来を示すところで「来臨（coming）」の代わりに「臨在（presence）」という言葉が使われているのを見つけた。そこでキースはバーバーに、キリストは実は一八七四年に到来したのだが目には見えないのである、キリストは今や目に見えない形で「臨在」し、裁きの業を進めているのである、という見方を進言したわけである。

「目に見えない臨在」というのは論破したり反証を挙げたりしにくいものである。死んだはずの親が、目には見えないけれども、やってきて慰めてくれると言う友達がいるようなもので、いや本当はそうではないだろうと言って証拠を出したりしにくいのである。

こうして「目に見えない臨在」を持ち出すことで、バーバーその他の再臨派の人たちは、自分たちの「年代「一八七四年」は正しかったが、その時何が起こるかについて間違っていた」と言えるようになった。ラッセルはこれもそ

※6 ラッセルは、同じく再臨派のジョージ・ストーズが出していた『聖書研究』誌に記事を書いているが、これはラッセルがバーバーと会った後のことである。この記事でラッセルはバーバーの計算した一九一四年という年代を説明している。また、他にも数多くあった再臨派の雑誌と同じく、ラッセルの始めた雑誌も「先触れ」という言葉が題名に入っており、『シオンのものみの塔とキリスト臨在の先触れ』と題された。（この「キリスト臨在」が一八七四年に始まったと信じられていた）

のまま受け入れた。※7

今日、何百万人ものエホバの証人は、キリストの目に見えない臨在が一九一四年に始まったと信じており、また人にもそう教えている。ところが「預言者」としてのもののみの塔協会が、五十年近くにわたり、その目に見えない臨在は一八七四年に始まったのだと断言し続けていたことを知る人は少ない。しかし、実のところ、一九一四年から十五年経った一九二九年になってもこの一八七四年を教えていたのである。※8

現在、エホバの証人は、キリストがその王国支配を一九一四年に正式に開始したと信じている。ところが『ものの塔』誌は、何十年の間、これが一八七八年に始まったのだと教えていた。※9

現在、エホバの証人は、「終わりの日」並びに「終わりの時」が一九一四年に始まったと信じている。ところが『ものの塔』誌は、半世紀にわたって、「終わりの日」は一七九九年に始まったと教えていた（これは一七九六年に出版されたジョージ・ベルの計算をそのまま受け入れたものである）。

また、エホバの証人は、キリストの時代以降に死亡した油そそがれたクリスチャンたちの復活が一九一八年に始まったと信じている。ところが『ものの塔』誌は、四十年以上にわたって、これが一八八一年に始まったとしていた。さらに、エホバの証人は、一九一四年以降、特に一九一九年以降、大いなる「収穫」の業が行なわれており、現行の体制並びに自分たちの宣教活動に答えようとしなかった人たちの壊滅をもってこれが完結するものと信じている。ところが『ものの塔』誌は、創刊以来、この「収穫」の業は一八七四年から一九一四年まで続くのであり、一九一

※7 バイバーたちが実際にこう言っていたことは、先にも引用した『ものの塔』1906年7月15日号に見られる通りである。

※8 一九二九年発行の『預言』64、65頁を参照のこと。『ものの塔』1974年8月15日号へ1974年11月15日号688-702頁は、一八七四年のことに触れてはいるが、一九一四年が過ぎてからもこれが言われていたことはまったく示さない書き方になっている。

※9 この見方が変わりはじめたのは一九二二年のシーダー・ポイント大会であるが、これは一九一四年から八年の後である。

四年までにこの世界にあるすべての人間による機関は壊滅するとしていた。

また、今日のもののみの塔協会は「大いなるバビロン」（これは「偽りの宗教の世界帝国」と言われる）の倒壊が一九一九年に始まったとしている。ところが『もののみの塔』誌は少なくとも四十年間にわたってこれが一八七八年だったとしていた。そしてバビロンが完全に壊滅するのは一九一四年か一九一八年ということになっていた。

これほど長い間、これほど多くの人によって信じられていた重要な預言に関する教義が、どうして変わるのであらうか。

これは結局のところ、十三世紀からずっと続いている予言の数々と同じなのである。つまり、公にしたのは良いけれども、これがはずれたのである。

私がこう言っているだけに過ぎないと思う人もあるかもしれない。エホバの証人で『もののみの塔』の古いものを見ることができる人はほとんどいない。今日のもののみの塔出版物が協会の歴史を扱うような場合でも、かつてあれほど長い間信じられていた教義についてはまったく無視してしまうか、あるいはほんの一部だけ、それも時として歪められた形で紹介するだけである。したがって、かつての教義がどれほど強く、自信たっぷりに教えられていたかはほとんどわからない。

そこで今度は、現代における預言者の役割を担っているというこの協会の「記録」を見てみることにしよう。

『もののみの塔』の一番古いものを一八七九年から順に見ていくと、まず目立つのは何か重要なことが今にも起こるという期待感である。一九一四年は、「異邦人の時」の終わりを告げる年であろうとされてはいたが、最大の関心事ではなかった。関心があったのは何よりも一八七四年であり、その年に始まったとされるキリストの目に見えない臨在と王国支配である。天へと移されるのももうすぐであろうという期待があった。これを最後に「キリストの花嫁」

の一員となる機会はもうなくなる。そして一九一四年を迎えるはるか前までに世界は大きな災禍に見舞われ、これはさらに悪化し、混乱状態に陥る。一九一四年というのはそれがすべて完了し、すべてが終わる年であるとされていた。つまりこの一九一四年にキリスト・イエスが地上世界の全権を持ち、その王国支配によって人間の持つ統治機構は完全に姿を消すというのである。

このことがきちんと書かれているのが『ものみの塔』1881年1月号である。以下にその一部を挙げる。要点にはわかりやすいよう傍線を施してある。

また、ユダヤ民族の時代とゴスペル時代における収穫が、その開始の時だけでなく、その期間についても対応していることもわかるのです。ユダヤ民族の時代における期間は、イエスが油を注がれた時「これは収穫の時の始まりである西暦三〇年」から西暦七〇年のエルサレム崩壊に至る四十年間です。我々のゴスペル時代における期間は、一八七四年に始まり、「怒りの日」であり「異邦人の時」の終わりである一九一四年に終わりますが、これも同じく四十年という期間なのです。ユダヤ民族時代における収穫のはじめの七年間には、特にその教会から実った麦を集められました。うち三年半の間は、イエスが花婿としておられ、三年半が過ぎると王として栄光に入りましたが、その間ずっとすべてはイエスの監督と指揮のもとにあったのです。

ヨハネが言っていた通り、イエスは床をきれいにし、麦を集め、殻を焼きました。今もまた同様のことが成就されようとしています。「ヨベルの周期」が一八七四年に満了に達し、その時キリストが臨在することは律法と預言者とが明らかにしているのです。(『黎明』参照のこと。) この対応関係から次のこともわかります。すなわち、この一八七四年に収穫が始まったこと、そして対応関係にある七年という期間に花嫁を集めて安全なところへ連れていくという業が行なわれ、これが一八八一年に終了するだろうということ。しかし、なぜ、いつ、いかにして「召使いの家」はキリストに預いたのでしょうか。これがわかれば、なぜ、いつ、いかにしてゴスペルの家が蹟くかという手がかりが得られるはずです。あのユダヤ民族時代の収穫期最後の業もまったくこのパターンを踏んでいる点が非常に多いからです。

我々の信ずるところ、キリストはまさに今、臨在しています。これはキリストが大いなる力を持って支配を行なう業を開始しているということです。この業は、現行の教会において毒麦(雜草)を麦へ小麦から選別すること、そしてすべての時代を通じての麦へ小

妻をキリストご自身に王国の権威において結びつけることから始まります。すべてがキリストの支配下におかれるまで、「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう」〈啓示(黙示録) 3・21(口語訳)〉すなわち「その者に諸国民を統治する力を与えよう」ということなのです。このように、キリストが花嫁を選び、両者が一体となることによって業が始まるというのも、誠に適切なことであるように思われます。

この当時、鍵となっていた年代は一九一四年ではなく、明らかに一八七四年である。この年をもってキリストが臨在した、そして続く四十年の間にキリストはその收穫の業を完了するであろう——この信念に基づいて、何か大変なことが今にも起こるはずだ、ひょっとしたらまさにこの年、つまり一八八一年に起こるのではないか、という考え方も出てきたのである。これは次の「主よ、どれほど待つのでしょうか」という同号の記事に述べられている。

「主よ、どれほど待つのでしょうか」

多くの人が必ずや自問することがあります。「変化はいつ来るのか」ということです。この変化を我々はもう何年にもわたって待ち望んできたわけです。イエスのもとに集められ、イエスを目の前にする時のことを思う喜びはやはり大きいものです。我々に変化が起こることについて、一二月の記事で、これはよく言われているよりも早く来るのではないか、という意見を表明しました。我々の変化がいつ来るかを完全に証拠立てるつもりはありませんが、自然のままの状態から霊的な状態への変化あるいは移行が、今年、一八八一年の秋までに起こるだろうと思われる根拠をいくつか見てみたいと思います。まず、霊的な体への変化は婚礼ではないとわかったのですから、一八八一年秋までに我々の変化があるだろうという証拠は強くなります。婚礼すなわち変化のことだと思っていた時がありました。一八七八年から三年半の間は既存の教会にとって都合の良い時期だろう(今や教会はまったく荒らされたままですが)ともわかっていました。したがってこの時には、この一八八一年前半という、その三年半に含まれる間に変化が起こるだろうとは思えなかったのです。ところが今となって、婚礼に入ることが(キリストの臨在を認めることによって)変化に対する準備ができることであるばかりか、その入ることが変化そのものを含むこと、これがわかりました。したがって、この入ること(あるいは変化)が先に述べた期間のうちに起こるであろうと信ずる根拠は強いわけであり、心有る人はこれを入念に調べる価値があります。我々の変化がもうすぐであるという直接の証明はさておいても、この変化がどのように起こるかが今や明らかとなったという事実、これ

こそ我々の変化に近いという証拠であります。なぜなら真理は「時に応じた食物」であり、時に応じてしか理解されないからです。また、次のようなこともあります。一八七八年の春（我々の理解によればイエスが王となった時）以降、聖なるものあるいは婚礼衣装についての話題が沸騰したのです。ユダヤ民族の時代の終わりとその対応も見られ、その時示されたユダヤ民族に対する好意（これは王の臨在を示したとも言えます）も見られることに加えて、この婚礼衣装についての議論というのまさに我々の解釈の正しさを示すものです。なぜならばこれは、「王が客を見回るために入ってきた（マタイ22・11）」であり、したがって王の目に自分がどう判断されるかが皆の関心事だったということだからです。さて、この客の見回りの次には我々の変化があり、これに婚礼が続きます。今我々が変化について云々していることを考えれば、すなわちその時が近いのだと思われます。

ここで聖書に見られる預言に関する箇所を考察し、聖徒が天に上げられること、並びに神からの呼びかけが一八八一年までに終わることを示していると思われることを見ましょう。

細かい話がこれに続き、一八八一年の秋に自分たちが天的な命に変えられること、これが「屢すなわち花嫁の一人となる機会が閉ざされる」時であることが強調される。これは一九一四年から三十五年も前である。一九一四年というのは単にすべてが完了する、終着点の年でしかなかった。

油そそがれた「花嫁級」のクリスチャンたちが一八八一年の秋までに天的な命に変えられる——この期待はもちろんはずれた。さらに年月が過ぎて行くにつれ、期待が徐々に先へ伸びていき、一九一四年が何となく注目を浴びるようになっていった。それでもやはり一九一四年は終点であって、地上の権力が消え去り、「いわゆるキリスト教世界」が完全に破壊される時であった。キリストは一八七八年にその王国の権力を行使し始めたと言われていたからである。このことはラッセルが一八八九年に出版した『時は近づけり』（239、247頁）に示されている。

……キリストは収穫開始の時（つまり宣教活動を始めた時）、新郎として、そして刈り取る者として、やって来た。磔にされる直前には自らが王であることを示し、その権限を発揮して審判を下し、家を見捨て、そして神殿を清めるといふ象徴的なことも行なった。（ルカ19・41-46、マルコ11・15-17）まさにこのことが、目下行なわれている収穫についても当てはまる。すなわち、新郎として

そして刈り取る者として主が臨在していることは、その始めの三年半、つまり一八七四年から一八七八年の間に認められた。その時以来、特に明らかにしたこと、それは一八七八年に時が満ち、神の家において王による審判が始まったことである。ここにこそ啓示（黙示録 14章14-20節が当てはまるわけであり、主は冠をいただいた刈り取る者として現れるのである。一八七八年は、明らかにキリストが権力を持つことになるという聖書の予型に合った年であり、霊的な、目に見えない形で臨在する主が王の中の王として実際にその力を持った時、すなわちその偉大なる統治の権力を持った時なのである。これは、預言によると、忠実なる者たちの復活と、諸国民の苦しみと怒りの始まりにつながるものである。（啓示（黙示録）11・17、18。）

二十世紀を迎え、一九〇〇年代初頭に入ってから、重要なのはやはり一八七四年と一八七八年であって、すべてはこの二つの年代に関係づけられていた。一七九九年から「終わりの日」が続いており、一八七四年から「収穫」が続いており、キリストは一八七八年以来王権についており、同時に復活も開始されたのだ――年月が過ぎ去ってもこの主張が変わることはなかった。何しろいずれも目に見えない出来事についての話なのだから、一八八一年に「存命の聖徒が天に上げられる」だろうという予言とはわけが違った。つまりはずれたという目に見える証拠がないのでこれらの教義を主張し続けることは可能だったし、また事実主張し続けたのである。

一九一四年にあと三年を残すばかりとなった一九一一年になっても、『ものみの塔』誌はやはり一八七四年、一八七八年、一八八一年の持つ重要性について説き続けていた。「大いなるバビロン」は一八七八年に倒れ、その「完全なる終結」が一九一四年の一〇月に来るとされていた。しかし「調整」された点もあった。これは天の「王国級」に入る機会の「扉が閉まる」時についてであり、それまでは一八八一年とされていたものである。次に引用する『ものみの塔』1911年6月15日号の記事では、この「扉」がまだ「半分開いたまま」だとされている。

以上のような対応関係を見ると、一八七四年がこの「収穫」の始まりの時であり、天の四方の風から「選ばれた者」を集める業の始まりの時であることがわかります。また一八七八年はバビロンが正式に見捨てられ、ラオデキアが吐き出された時、つまり「倒れた、バビロンが倒れた」と書かれているその時なのです。バビロンは神の恩寵を失ったのです。対応関係から見ると、崩壊したとは

言え、一八八一年まではバビロンにいる者たちにもいくらかの好意が残されていたように思われます。しかし一八八一年以降は、この関係もまったく役に立たなくなり、むしろ様々な意味で大きな不利となってしまう、大変な困難の末主の恵みと真理の助けがあったとこれから逃れることができることになっているらしいのです。そしてこの対応関係からすれば、一九一四年一〇月にはバビロンの終結、すなわち「大きなひき白の石が海に投げ込まれ」、完全な壊滅となるでしょう。

話を元に戻しましょう。肉のイスラエルに対する好意が終わったことは、このゴスペル時代における特別の好意——つまり神の呼びかけ——も終わったことを示していると考えるのは理にかなったことだと思えます。したがって、我々の時代の、一般向けに開かれた王国への「呼びかけ」は一八八一年一〇月に終わったと考えられるのです。ところが、『聖書研究』でも明らかにした通り、「呼びかけ」が終わるのは「扉」が閉じるのとは別のことです。王国への扉はまだ閉ざされておらず、しばらくは半分開いたままになっていると思われるのです。これは、「呼びかけ」をすでに受け入れてはいるけれども、その特典を自己犠牲という形で生かし切れておらず入っていない人のため、また自分の冠を取る者を入れるためです。これは啓示（黙示録）3章11節にある通りです。したがって、今現在というのは、一八八一年から主の奉仕に捧げる機会の扉が完全に閉ざされるまでの間に当たっているわけであり、神の好意にある者、神との契約関係にある者についての「ふるい分け」の期間であるわけです。

終結の時である一九一四年が迫っていた。この年には収穫が終わり、終わりの日が完了し、望まれていたことがすべて実現することになっていた。ここで、一体何が一九一四年までに起こるとのみの塔出版物が説いていたのかを見ることにしよう。

一九一四年を遡ること二十五年前に出た『時は近づけり』76-78頁は、以下の引用の通り、七つのことを明言している。

本章では、聖書の根拠に基づいて、異邦人の時、すなわち異邦人の統治の期間が一九一四年に終結すること、そしてこの一九一四年が不完全な人間たちによる統治の終わりであることを示す。これが聖書によって打ち立てられる事実であると言えるならば、以下のことが証明されるのである。

第一に、この年には、我らの主が「王国（御国）が来ますように」と祈るようと言われた、あの神の王国が完全にして統括的な

権力を持ち、地上に「立てられる」、現存する諸機関の瓦礫の上に樹立されるであろうということ。

第二に、こうして支配権を取るべき方がその時代の新しい支配者として現れるであろうということ。そしてそればかりではなく、この方はそのかなり前から姿を現すであろうということ。この方があたかも陶工の作る器物のように彼らを打ち砕くことで異邦人の支配体制は打ち倒され（詩編2・9、啓示（黙示録）2・27、そこに義なる政府が打ち立てられるからである）。

第三に、神によって認められたキリストの会衆あるいは「王なる祭司」「キリストの体」、これに属する最後のメンバーが、一九一四年が終わる前頃に、王と共に天の栄光を受けるであろうということ。このメンバーはキリストと共に王国を受け継ぐ者たちであり、すべてキリストと共に統治を行なうからである。これが全員そろわなければ王国が完全に「立てられる」わけにいかない。

第四に、この一九一四年以降、エルサレムはもう異邦人たちによって踏みつけられることはなくなり、神の不興を蒙っていた状態から神を讃えるべく立ち上がるであろうということ。「異邦人の時」が満ちるからである。

第五に、一九一四年までに、あるいはもっと早い時期までに、イスラエルはかたくなさから解放され始めるであろうということ。「一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時まで」（ローマ11・25（口語訳）、つまりキリストの体あるいは花嫁になる者に含まれるべき異邦人たちが全員選ばれてしまう時までだからである）。

第六に、「民族が始まって以来かかる患難はあらぬ」ような大きな患難がその頂点に達し、世界規模での無政府状態が生じ、そして人は静まってエホバが神であること、全地にあがめられることを知るのであるということ（詩編46・10）。その時には、海には波が荒れ狂い、地は熔け、山は崩れ、天は燃えるというように象徴的な言葉で語られていた状態が過ぎ去り、平和な祝福に満ちた「新しき天と新しき地」を認める人も患難にあえぐ人類の中から出てくることになるであろう。しかし何よりも主に油そそがれた者と義なる権力が、まず神の子たちによって大患難のさなかにありながらも認められるであろう。これは年代図ではm及びtと示してある級である（第1巻235頁から239頁参照）。続いて患難が終わろうとする時に肉のイスラエルがこれに気づき、最後には全人類がこれを認めることになるであろう。

第七に、この一九一四年に至るまでに、神の王国が権力のうちに組織立てられ、地にあって異邦人の像を打ち壊し（ダニエル2・34）、これら王たちの権力を完全に失わせるであろうということ。この王国の権力と支配が確立されるにつれ、その様々な影響力や代行人によって「存在する権力」——教会のものであれ世俗のものであれ——は打ち砕かれて鉄と粘土と化す。

以上は、一九一四年以前の版からの引用である。ここでは、一九一四年が「不完全な人間たちによる統治の終わりである」と断言されている。一九一四年には神の王国が「完全にして統括的な権力を持ち、地上に『立てられる』、つまり樹立されるであろう」とも言っている。ところが一九一四年以降の版（一九二四年版）ではこれを次のように変えている。

本章では、聖書の根拠に基づいて、異邦人の時、すなわち異邦人の統治の期間が一九一四年に終結すること、そしてこの一九一四年に不完全な人間たちによる統治の崩壊を見ることを示す。これが聖書によって打ち立てられる事実であると言えるならば、以下のことが証明されるのである。

第一に、この年には、我らの主が「王国（御国）が来ますように」と祈るようにと言われた、あの神の王国が支配権を持ち始め、その後まもなく地上に「立てられる」、現存する諸機関の瓦礫の上に樹立されるであろうということ。

第三の点に関して、一九一四年以前の版には、一九一四年が終わるまでに「キリストの体」に属する最後のメンバーが王と共に天の栄光を受けるだろうとあった。一九一四年以降の版では言い方が変わり、一九一四年という年が消えてしまっている。

第三に、神によって認められたキリストの会衆あるいは「王なる祭司」「キリストの体」、これに属する最後のメンバーが、転覆が終結する前ごろに、王と共に天の栄光を受けるであろうということ。このメンバーはキリストと共に王国を受け継ぐ者たちであり、すべてキリストと共に統治を行なうからである。これが全員そろわなければ王国が完全に「立てられる」わけにいかない。

このように、一九一四年について自信満々に予言していたことが起こらなかったため、一九一四年以降の版ではこれを隠すために明らかな手直しが行なわれているのがわかる。一九一四年についての主張が非常に重要だったこと、七つの事柄が一つとして当たらなかったこと——これを今日のエホバの証人はまず知らない。このような事柄が今日

の協会の出版物で扱われるのはほんの僅かであり、まったく扱われずに無視される場合もある。^{※10}
 それどころか、最近の協会の出版物を見ると、当時ものみの塔会長であったラッセルは一九一四年に何が起るかについて特に何も言っていなかったかのように読める。強い期待感や独断的な主張があったとすればそれはラッセルではない側、つまり読者の側に責任があったという書き方なのである。これが見られるのは、例えば長年協会公認の協会史だった『神の目的とエホバの証人』52頁である。

この頃、何が起るかについて余りにも熱心に書きすぎた人が多かったことは間違いありません。『ものみの塔』に書かれていたことについて見当違いの深読みをした人もいました。異邦人の時の終わりにには確実に大きな変化があることについてラッセルが注意を喚起する必要はあったのですが、それがいつなのかについては決めて掛かったりしないよう、ラッセル自身読者に呼びかけていたのです。

この『神の目的とエホバの証人』には『ものみの塔』誌からの引用もあるが、よく見るとその引用は言っていることの裏付けになっていない。例えば「それがいつなのかについて」触れている引用はただ一つ、一八九三年の『ものみの塔』であるが、これは次のようなものである。

大いなる嵐がもうすぐやってくる。それが正確にいつなのかはわからないが、いまから十二年ないし十四年のうちであるはずだと考へることは理にかなったことのように思われる。

それがいつなのかについては決めて掛からないように呼びかけていたという話だったのだが、この引用ではそれがまったく裏付けられない。むしろ、ラッセルが他の所で書いていた事柄を裏付けけるものである。つまり、ラッセルは

※10 一八七八年と一八八一年についての主張についても同様である。一七九九年や一八七四年のことと同じく、結局は間違いということですが捨て去られてしまった。

世界規模の患難が一九一四年を待たずして（上の引用に従えば一九〇五年あるいは一九〇七年までに）始まると確信していたこと、そして地上にある支配体制は一九一四年までにすべて破壊されてしまうと確信していたことである。

それでも、一九一四年まであと二年ともなってくると、『ものみの塔』は読者に少し注意を呼びかけている。

『神の目的とエホバの証人』53頁には、一九一二年の『ものみの塔』に載ったラッセルの文章の引用がある。次の通りである。

この件に関しては確かに微妙な意見の相違があり得ますし、我々としてはできるだけお互いに心を広く持つべきでしょう。異邦人の権力支配が終わるのは一九一四年の一月かも知れませんが、一九一五年の一月かも知れません。また、「民族が始まって以来決してなかった」ような争いと乱世は、異邦人の時の終わりであるかも知れませんが、救世主による支配の始まりのことも知れません。

しかし読者諸君には今一度思い出してほしいのですが、我々としては異邦人の時が患難の時に終わることについて、あるいはそれに続いてやってくる栄光の時代について、何も預言をしたことにはないのです。我々はただ聖書の言うところを示し、その意味について我々の見解を示したのみであり、これがいかなる意味を持つかについては読者諸君それぞれが判断してもらえようお願いしたようなわけなのです。この預言についての見解が変わるところはありません。……けれども、わかっていることについて、そしてわからないことについて、自信ありげなことを言う人もあるかも知れません。我々としてはこのようなことに溺れるつもりはないのです。ただ、これこれの理由によってこういうことを信じている、と言っているだけなのです。

協会としてはこのように理解して欲しいということなのであろう。しかしこれを『ものみの塔』を始めとする出版物に見られる他の記事の書き方と比べてみることにしよう（今日の協会はそういった記事にまったく触れようとはしない）。その上で、特に一九一四年に何が起こるかについての独断的な意見の責任が協会側ではなく、見当違いの「深読み」をした読者の側にあるのかどうか、よく考えてみて頂きたい。

一八八九年発行の『時は近づけり』98、99頁には次のようにある。

これから二十六年のうちに現存の支配体制はすべてくつがえされ、なくなってしまうと我々は言っているわけであり、確かにこれは大きなことである。しかし我々は目下「エホバの日」という特別にして特殊な時代に生きているのであり、物事は速やかにその終結に達するのである。「主は地上の業を速やかにするであろう」と書かれている通りである。(第1巻第15章参照)

この異邦人の時に関する聖書からの強力な証拠に基づき、次のことは揺るがぬ真理であると考ええる。すなわち、一九一四年の終わりに、この世界にある王国の数々は終末を迎え、代わって神の王国が打ち立てられるということである。その時には主が天に上げられて以来の、「あなたの王国(御国)が来ますように」という会衆の祈りが聞き届けられることになる。そしてこの聡く公正なる体制のもとに地は主の栄光、智慧、義、そして平和で満たされるであろう(詩編72・19、イザヤ6・3、ハバクク2・14)。神の御心が「天に行なわれる通り、地にも行なわれる」ことになる。

正しいと言うばかりでなく、「揺るがぬ真理である」と言うことは、そのことの正しさが自分でよくわかっていると断言するのと同じではないだろうか。「自信ありげなことを言うことに溺れる」のどこか違うのだろうか。もし違うなら、一体どれほどの違いがあるのだろうか。

この本の101頁には、次のような箇所もある。

……そしていま生きている聖徒たちが、世の他の者たちと共に主の兵士として使われており、誤りを正し悪を制する業に携わっている。しかし諸民族の改宗が平和裡に行なわれるだろうというのではない。聖書にはその正反對のことが示されているところが多い。啓示(黙示録)11・17、18、ダニエル12・1、テサロニケ第二2・8、詩編149、47などである。

であるから読者諸君は以下に続く章を見ても驚くには当たらない。そこでは、次の点を示す証拠を提示する。第一に、神の王国がすでに打ち立てられ始めていること、第二に、預言では西暦一八七八年に権力の執行が始まるとされていること、そして第三に「全能の神の大きい日の戦い」(啓示(黙示録)16・14)はすでに始まっており、西暦一九一四年に地に現存する支配体制がくつがえされることをもって終結するであろうこと。神の言葉をもつてすれば、軍勢が集められているのがはっきりと目に見えてわかる。

我々の見解が偏見で歪められていなければ、神の言葉という望遠鏡をきちんと調整することで「主の日」に起こることになっている様々な事柄の特徴をはっきりと見ることになる。すなわち我々はまさにこれらの事柄の真っ直中にあること。そして「大きいなる

主の怒りの日は来たれり」ということ。

この本が出版されてから二年後の一八九一年、ラッセルは『御国の来たらんことを』を出版する。この153頁には次のようにある。

倒壊、疫病、破壊その他が神秘のバビロンに降りかかると言われていたが、この前兆はすでに肉のイスラエルに降り懸かった患難と、西暦七〇年にイスラエル壊滅に至った民族の破壊に見られていた。また、この倒壊の期間にも対応関係が見られる。主が「おまえたちの家は見捨てられてしまふ」と言った西暦三三年から西暦七〇年までは三十六年半である。そしてまた一八七八年から一九一四年の終わりまでもやはり三十六年半である。そして一九一四年の終わりには、神がバビロンと呼び、人がキリスト教世界と呼ぶものが終結するであろうということ、これはすでに預言から示された通りである。

その翌年の一八九二年、『ものみの塔』1月15日号は、最後の「戦い」はすでに始まっており、そしてこれが一九一四年に終わるとしている。

ここに記すようなヨーロッパの現状——これは我々が聖書に読みとっていた通りですが——を前にするのは心地よい驚きだったのです（何しろ反対のことが大々的に言われることが多いですから）。しかし神の言葉とその上に輝く現在の真理の光に対する我々の信頼は大きいので、現状がどのようなものであれ、その証するところを疑うことなどできるはずもなかったのです。あの「戦い」が終結する日は一九一四年の一〇月であると聖書に明記されています。この戦いは目下進行中であり、始まったのは一八七四年の一〇月でした。これまでのところ、この戦いは言葉の上での戦いであり、また資本、労働、軍隊、秘密結社といった組織力による戦いです。

現在ほど団結・結集が行なわれた時はかつてありませんでした。国家は同盟を結んで他の国家から身を守ろうとし、そればかりかそれぞれの国家内でも様々な党派が各々の利益を守ろうとして徒党を組んでいます。しかし今のところ、どの同盟も党派もお互いの力を探り合っている状態です。来るべき戦いに備えて自分たちの計画を練り、戦闘力を蓄えておこうとしているのです。聖書によらずとも、この戦いは避けられないとわかっている人は多いようなのです。しかしまた一方では平和平和と叫ぶばかりのわかっていな

い人もいます。神の王国が到来して、御心が天においてと同様に地においてもなされるに至るまでは、平和などあり得ないのです。しばらくの間、決着を見ないままこの状態が続きます。組織化は徹底してなされなければならないのです。そして最後の戦いは、比較的早く済むとは言え、熾烈を極める決戦となるはずで、これに続いて大混乱状態が発生します。多くの点で世界の偉大な将校たちの意見は神の言葉の予言に一致しています。そして、「ヨーロッパに次なる戦争を起こす者あるいは国家に災いあれ。それは壊滅戦争となるであろうから。」この戦いは国家間の敵意ばかりではなく、社会における悲惨や野心や憎しみによっても引き起こされることでしょう。この戦争が、神が選び栄光を与えた会衆による神の王国の設立によって終わるのでなければ、人類は絶滅することになるでしょう。(マタイ24・22)

次に引用するのは『ものみの塔』1894年7月15日号に載った短い記事で、当時の状況は世界が最後の苦しみに入り、その終わりが一九一四年に来る証拠であるとしている。

一九一四年まで待つてくれるのか？

十七年前、『千年期黎明』の年代計算についてよくこんなことを言われました。なるほど確かに理にかなっているようであるが、一九一四年が終わるまでにそれほどの大変化があるとは思えない。百年や二百年の間に起こるだろうというのならまだもう少しありそうな話だと思えるのだが。

ところがあれ以来、どんな変化があり、どれほどそれが日に日に勢いを増しているのでしょうか。

「古いものは速く過ぎ去り、新しいものがやってくる」

今では、近來の労働爭議や混乱の世相を背景に、一九一四年という年代は何かの間違いではないかという質問が読者から寄せられています。目下の状況がそんなに長続きするとは思えないと言うのです。

我々としては、年代に変更を加える必要はないと思いますし、仮にあると思っても変更はできないのです。これは神の示す年代であつて、我々のものではないからです。銘記して頂きたいのは、一九一四年の終わりというのは患難が始まる時ではなく、終わる時だということです。『ものみの塔』1892年1月15日号に示した意見を変える必要はまったくないと考えます。もう一度その記事を参照して頂ければと思います。

ここでは確かに「意見」という言葉が使われてはいるが、問題の年代の正しさを支持するのに神を持ち出してきているのだからあまり意味がない。誰が「神の示す年代」を疑いたいと言うだろうか。

今日の協会の言い分はこうである。以上のような事柄はすべて小さなことだ。「異邦人の時」の終わりが一九一四年に来るという大筋（これが今日も残っている唯一のものである）においては正しかった。しかしこれはこの上ない事実の歪曲を示すものである。なぜならば、今日も残っているのは「異邦人の時の終わり」という言葉だけだからである。今日協会がこの言葉に持たせている意味は、一九一四年までの四十年間に協会が持たせていた意味とはまるで違う。

かつて四十年間にわたってものみの塔協会が言っていたのは、「異邦人の時の終わり」は地上政府すべてがくつがえされる時であり、地上すべてを支配するキリストの王国に完全にとって代わられる時だということだった。つまり人間による支配はまったくなくなるのである。先に引用した『時は近づけり』98、99頁で「これから「つまり一八八九年から」二十六年のうちに現存の支配体制はすべてくつがえされ、なくなってしまう」「この異邦人の時に関する聖書からの強力な証拠に基づき、次のことは揺るがぬ真理であると考え。すなわち、一九一四年の終わりに、この世界にある王国の数々は終末を迎え、代わって神の王国が打ち立てられるということである」と明言していた通りである。

今日「異邦人の時の終わり」（あるいは「諸国民の定められた時」という言葉が持たされている意味は、これとは随分違う。人間の政府がキリストによって破壊され、その支配が実際に終わってしまうというのではない。人間の政府による「邪魔されない一方的な支配」の終わりだというのである。ではどういう「邪魔」が生じたのかというと、キリストが一九一四年に目に見えない形で王国の権力を執って支配を開始し、「特別なやり方」で地上に注意を向け始めたことだ（これはかつて一八七四年について言われていた）というのである。

目に見えない世界で起こったとのことであるから、これについては議論もままならない。地上の政府が地を支配し

ているという点については一九一四年以来何も変わっていないのであるが、このことは何とも思われていないらしい。地上政府の権力の「賃貸」は期限切れになっているというのである。目に見えない王によって目に見えない形で期限が切られ、それで定められた時の「終わり」は来たというわけである。

これは、例えて言えばこのようなものである。いてほしくない借家人がいる。そこで、これこれの日をもって出ていってもらい、金輪際縁を切りますよと四十年間にわたって宣言し続けた。しかしその日が過ぎててもやはりその借家人は何事もなかったかのようにそこにいる。そこでこう言う。「いや、私としては賃貸契約も切りましたし、結局いないのも同じことです。それに、今では前よりも物事を注意して見張っていますし。」

それでも一九一四年が近づくにつれて言い方が慎重になっていったのは確かである。始めラッセルは一九一四年の一〇月までに患難と世界規模の動乱がやってくるだろうと言っていたが、その後、『ものみの塔』1904年7月1日号では次のような言い方になっている。

世界規模の動乱——西暦一九一四年一〇月前後

一見まったく大したことではなく、まるで無関係と思っていたことがあったのですが、これによって、預言的数字によって予期され得る世界規模の動乱が起こる年に関して変更が加えられました。目下我々は、祝福の千年期の前にやってくる大患難と動乱の時は一九一四年一〇月の後であろうと考えています。後と言っても、我々の見方では、本当にすぐ後であり、「一時のうちに」突然やってくるでしょう。

さらに、ラッセルは問題の年代が「神の示す年代であって、我々のものではない」と一八九四年には自信を持って述べていたのだが、一九一四年まであと七年と迫った『ものみの塔』1907年10月1日号の「年代計算に関する知識と信仰」と題された記事では次のような言い方になっている。

ある兄弟が質問してきています。『黎明』にある年代計算は本当に正しいのでしょうか、一八七四年に収穫が始まったのであり、これが一九一四年に終わり、現存の政治機構がすべてくつがえされ、栄光の王とその花嫁たる会衆の義なる統治が始まるというのは間違いないのでしょうか。こうおっしゃるのです。

我々の答は、これまでに『黎明』や『ものみの塔』で、あるいは口頭や手紙でもお伝えしてきた通りです。我々は自分たちの年代計算が絶対に正しい事実であるなどと言ったことはありません。これは動かぬ証拠や事実に基づいた知識ではなく、信仰に基づいたものであるというのが我々の変わらぬ主張です。

ところがこの記事はさらに続き、この年代計算を疑う者は信仰が足りないという意味の話になる。次の通りである。

今一度思い出してほしいのですが、年代計算そのものに弱点があるにしても、これに関わる様々な予言が見事な一致を見せてこれを補っており、年代計算についての信仰は、事実これは正しいという知識とほとんど変わらないものになるのです。計算上たった一年分の変更を加えてもあの見事な対応関係は失われてしまうのです。予言には紀元前から数えるものもあれば紀元後から数えるものもあるいは両方にまたがるものもあるからです。我々の信じるところでは、神はこれらの予言が「時に応じて」理解されるようにと思っておられたのであり、そして現に今我々は理解しているのです。それがこの年代計算に表れているのです。それならばこの年代計算は太鼓判を押されていることにならないでしょうか。信仰を持つ者にとってはそうなります。主は「智慧ある者は理解するであろう」と断言し、我々には「見張っているように」と言われました。そうすればわかるだろうということです。そしてまさにこの年代計算によって我々（信仰によってこれを受けることができ、そして事実受ける者）には目下あの「十人の乙女のたとえ」が成就されているに違いないことがわかるのです。はじめに花婿を迎えに出るようと呼ぶ声がしたのは一八四四年であり、次の「花婿が来た（つまり臨在した）という声があったのは一八七四年だったのです。

完全ではないので間違いもあり得ると認めておきながら、また一方ではこの見解を受け入れる者だけが信仰を示しており、「理解する智慧ある者」であるとする。これがどれほど有益なことなのであるうか。あるいは、どれほどの謙遜さを示すことなのであるうか。この話に従えば、一八四四年と一八七四年の「呼び声」に耳を傾けなかった者は

「愚かな乙女」ということになるのではないか。

この記事の前の方には次のような箇所もある。

神の定められた時は、神に親しみ、神の特徴的なやり方がわかる者にのみ説得力を持つような形で明らかにされているのです。

つまり協会の年代計算に疑いをはさむ者は、神に対して親しみを持っていないのではないか、信仰と智恵についても怪しいのではないかというのである。これは思想上のいじめというべきものである。問題の一九一四年が過ぎ去り、世界中に宣伝していたことが起こらなかったことがはつきりすると、これはさらに度を増していく。

すでに記した通り、ものみの塔協会は一九九三年に『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』という協会の歴史記録を出版した。どうやら他の出版物などを讀んだ上で書かれた部分もあるらしく、そこで明らかにされた事柄に対抗する様子が見える。一例を挙げよう。カール・ウーローフ・ジョンソンの著書、『異邦人の時を再検討する』（一九八三年に出版）においては、一九一四年の教義をはじめとするチャールズ・テイズ・ラッセル独特の教義の多くは、もとをたどれば再臨派のものであることが明らかにされている。ものみの塔出版物では、何十年にもわたってこのことを何となくごまかしたり完全に無視したりしており、まるでこういった教義や一九一四年という年代がほとんどラッセル独自のものであるかのような、そしてラッセルの『ものみの塔』誌がそれまで失われていた、あるいは知られていなかった真理を明らかにする唯一の経路であるかのような印象を与える書き方をしていた。

ところがこのたび初めて、こういう教義がラッセル以前の文献にどれほど頼っているかについてある程度認めるようになった。例えばダニエル4章の「七つの時」が二千五百二十年間を意味し、これがルカ21章24節の「異邦人の時」と関係していると考えたのはジョン・A・ブラウンであること（『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』以前のものみの塔出版物には、ジョン・A・ブラウンの名前すら出てこない）。あるいはまた、『朝の先触れ』で一九一四年が「異

邦人の時の終わり」であるとしたのは再臨派のN・H・バーバーであり、これは『ものみの塔』創刊号が出る四年も前の一八七五年のことであること。ラッセルはこの一九一四年という年代をバーバーから引き継いでいること。

以上はすべて、もう何十年間も、ものみの塔の指導者層にはわかつていたことである。統治体のメンバーは全員、一九七九年に、ジョンソンの書いたものの最初の二十ページ分を受け取っており、そこにはこういう事実関係が詳細に述べられていた。ものみの塔協会は最近になってようやくこういう教義の出所を認めたのである。^{※11}

また『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』では、かつて長期間支持した教義があったことを認めている。一八七四年はキリスト「再臨」の始まりの年であり、一八七八年はキリストが王権を執った年であり、一八八一年は天への呼びかけの終わる年であり、一九二五年は「古代の名士」が復活しこの地のために大いなるヨベルが始まる年だという教義である。

ところが、こういう年代の重要性がどれほど激しく執拗に（多くの場合五十年以上も）強調されたかは素直に認めない。この『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』、並びに近年の記事では、これら年代の数々について、またどんなに遅くとも一九一四年までに起こると予言していたことについて、それが大して重要ではなかったかのような印象を与えようとしている。^{※12} パターンとしては、主張の一面だけを取り上げて（例えば「異邦人の時の終わり」と言うだけにとどめたり、一九一四年が「重要な年」とだけ言ったりする）、それに結びついた教義内容にはまったく触れない場合が多い。そして一九一四年（そして後には一九二五年）が近づいてから書かれた、慎重さを求める言葉だけが引用される。大胆な予言だったはずなのに、単に可能性として提示されましたという書き方がしてある。読んでい

※11 『異邦人の時を再検討する』 19—29頁、『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』 45—47、132—135頁へ45—47、132—135頁 参照

※12 例えば『ものみの塔』 1993年11月1日号8—12頁へ1993年11月1日号8 12頁、『目ざめよ！』 1993年3月22日号3、4頁へ1993年3月22日号3、

側の大多数が過去の文献を見ることができないのを良いことに、その一部だけを引用したり、あるいは断定調で語られた言葉をごまかしたり無視したりして、かつての主張の数々がそれほど断定的ではなかったかのような印象を与えることができるのである。

また、よく使われる手に、ある決まった言い方をしたり特定の用語を使ったりしていないことを強調するというものがある。つまり、ある言い方をしないというだけで、神の名において誤った予言をしたことにはならないというのである。その一例は、『目ざめよ！』^{1993年3月22日号3頁へ1993年3月22日号3、4頁の「間違った警告がこれほど多}

人々の注意を引いて支持者を得るために、世界の終わりについてあと言わせるような予言をする人もいますが、自分の語っている事柄は正しいと誠実に信じている人もいます。そうした人々は、聖書の言葉の一部や物理的現象について独自の解釈に基づいた期待を唱えます。エホバから直接啓示を受けて予言している、つまりエホバの名前によって予言しているとは唱えません。ですから、そのような場合、予言がそのとおりにならなくても、彼らを申命記18章20節から22節で警告されている偽預言者とみなすべきではありません。人間は誤りを犯しやすいため、物事を誤解していたのです。*

* エホバの証人がイエスの二度目の到来を切望するあまり日付を示唆し、あとで間違いであることが分かったことが何度かあります。このため、ある人々はエホバの証人を偽預言者と呼んできました。しかし、これらの出来事のうち、証人たちがあえて『エホバの名において』予言したことは一度もありません。また、『これはエホバの言葉である』と言ったことも一度もありません。エホバの証人の公式機関誌である「ものみの塔」誌は、「我々には予言の賜物はない」（1883年1月号[英文], 425ページ）、「我々は自分たちの著作を崇めたり、絶対に正しいものとみなしたりはしない」（1896年12月15日号[英文], 306ページ）と述べています。さらに「ものみの塔」誌は、ある人々がエホバの霊を持っているからといって、「現在エホバの証人として仕えている人々が靈感を受けているわけではない。また、この『ものみの塔』誌の記事は、靈感を受けた、絶対に正しい、誤りのないものであるというわけでもない」とも述べています。（1947年5月15日号[英文], 157ページ）「『ものみの塔』誌は靈感を受けて記事を書いているとは主張しない、また教条主義的でもない」。（1950年8月15日号[英文], 263ページ）「そうした出版物の準備に携わる兄弟たちに決して誤りがないというわけではありません。その書物は、パウロや他の聖書筆者たちの書き記した書物とは違って靈感によるものではありません。（テモテ第二 3:16）ですから、理解がより明確になるにつれて、見解を正す必要が幾度か生じてきました。（箴 4:18）」—1981年5月15日号, 19ページ。

（『目ざめよ！』〈1993年3月22日号3、4頁〉）

いのはなぜか」という記事である。

つまり、「エホバからの直接の啓示である」などの表現を使わず、また自分について「不謬」「靈感を受けた」などの言葉を使わなければ、何を言おうとその人の意見に過ぎないという話なのである。聖書は、神の名において予言したことがはずれるといふ過ちを判断するのに、このような単純な基準を使いはいしない。イスラエルの偽の預言者たちは、特に「直接の啓示」「不謬」「靈感を受けた」などの言葉を使っていなくても、要するに自分たちの言葉がエホバのものだという主張をしていた。「神の名において語る」ことは神に代わって語ることであり、これはもののみの塔協会発行の『聖書に対する洞察』第二巻468頁へ1090頁も認めている通りである。ラッセルは自分自身を「神の代弁者」と呼び、年代予言を神の示す民に対する導きだとした。神の名や神の言葉が関わっていたことに間違いはない。先ほど引用した脚注部分で「エホバの名において預言する」ことにならないという証拠として、また独断的になっていない証拠として、挙げられている言葉（一八八三年並びに一八九六年の『ものみの塔』からのもの）を今一度振り返って頂きたい。次にこれを一九一四年以前のものみの塔文献の数々に見られる、年代計算についての言葉と比較して頂きたい。そこでは、「神の示す年代であって、我々のものではない」「特に明らかになったことがあります。一八七八年に時が満ち、神の家において王による審判が始まったことです」、また一八七八年が「明らかに……王の中の王として実際にその力を持った時」などと断定口調で言われていた。さらに、一九一四年が「不完全な人間たちによる統治の終わりであること」が「聖書によって打ち立てられる事実」によって「証明される」、キリストの体に属する「最後のメンバーが、一九一四年が終わる前頃に、王と共に天の栄光を受けるであろう」ことが「証明される」、「この一九一四年に至るまでに、神の王国が権力のうちに組織立てられ、……これら王たちの権力を完全に失わせるであろう」、「『存在する権力』——教会のものであれ世俗のものであれ——は打ち砕かれ」るであろうことが「証明される」という調子である。その上、「これから「つまり一八八九年から」二十六年のうちに現存の支配体制はすべてくつがえされ、なくなってしまう」「次のことは揺るがぬ真理であると考える。すなわち、一九一四年の終わりに、こ

The Bible Students Monthly

International Bible Students Association, Publishers.

Vol. VI.

BROOKLYN, N. Y.

No. 5.

RELIGIOUS AND SCIENTIFIC GLEANINGS

RED CROSS SAYS CHURCH GIFTS

"PITIFULLY SMALL."

Church collections are referred to as "pitifully small" in a statement issued by the American Red Cross, which gives the total of collections from churches thus far at only \$5000.

"A week has passed since 'Peace Sunday,' the Red Cross statement says. Donations from the churches of all denominations and creeds in support of the urgent mission of mercy of the Red Cross among suffering humbreds of thousands amount to only \$5000. Special attention is called to this fact because it is feared it's possible to have believed there would be a generous response through the churches in the time."

POCKET WIRELESS TELEGRAPHY

Fielder Allen, director of the Wireless Observatory, thinks the invention of the pocket wireless apparatus of a certain type, twenty wireless messages with a few of pairs of batteries is completely sound.

After war was declared the British Government forced all private wireless stations, including that of the Wireless Observatory, to discontinue. The next day, Fielder Allen got from Washington copies of official wireless messages that had been intercepted without a wireless installation.

"There are many ways to do this," Fielder Allen explained. "One of the simplest methods the very concerned ex-

DISTRESS OF NATIONS PRECEDING ARMAGEDDON

PASTOR RUSSELL DECLARES PRESENT WAR WILL EVENTUATE IN NO MARKED VICTORY FOR EITHER SIDE—THEN "ARMAGEDDON"

PRAYERS CANNOT CHANGE THE DIVINE PLAN OF AGES

Conflicting Prayers Ascending to God—Prevailing Confusion of Thought Respecting Prayer—Present Conditions Prophesied Twenty-five Centuries Ago—All Nations to Be Involved—The War the Prelude to Armageddon—Lasting Peace Obtainable Only Through Messiah's Kingdom. Soon to Be Established.



PASTOR RUSSELL

We consider the present situation of the world as being the prelude to the distress of nations preceding Armageddon. The above topic must remain a subject of study and prayer, and any public display of sympathy for any of the warring parties will be the very worst of all. It is only beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war. The present situation is only the beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war. The present situation is only the beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war.

lost their strength and where all of them are commanded to go down to the Valley of Jehoshaphat, the Valley of Slaughter. The victory outside of the city of Jerusalem being used by the President of the United States of the terrible slaughter now going on.

Surely this war has brought many to the knowledge of the Lord, and many have been converted. The present situation is only the beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war. The present situation is only the beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war.

physical degeneracy which would result from the destruction of our first parents. He foretold our weakness and imperfection, our attempts at merit, and our need of reform, and of mental and physical health. Yet He permitted all this to come to pass. Now, after the world, and the continued to rest upon the human family for six thousand years.

God's people know man is death, and is not to be restored to that state, but rather, that death is not the end of the matter, but of the beginning of a new life. The present situation is only the beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war. The present situation is only the beginning of a series of events, and we are not to be misled by the very many who are now predicting a speedy end to the war.

上は、第一次大戦中に発行された『聖書研究者月報』の一つである。もののみの塔協会代表のラッセルは、予言を単なる意見としてほめかしていたどころか、これが「年代についての神の計画」〈これは日本語版もののみの塔文献で一般に「世々に渉る神の経綸」と訳されている言葉〉に関わるものとして宣言していたことがわかる。

〈「ハルマゲドン前の国々の苦悶」「ラッセル師、目下の戦争はいずれの勝利にも終わらず、そして『ハルマゲドン』が来ると宣言」(矢印部分)「祈りによって年代についての神の計画を変えることはできない」などの見出しが見える。〉

の世界にある王国の数々は終末を迎え、代わって神の王国が打ち立てられるということである」という言い方や、最後の戦いが終結する日について「一九一四年の一〇月であると聖書に明記されています。この戦いは目下進行中でであり、始まったのは一八七四年の一〇月でした」という言い方もある。以上の言葉はすべて本章で引用した文献に見られるものである。

事実を言葉のお遊びでごまかすというパターンは、一九一四年に教会が天の栄光を受けるという预言についてもみられる。『エホバの証人――神の王国をふれ告げる人々』（635頁へ636頁）では「我々がそう推測しただけであり、明らかにそれは間違いであつた」という一九一六年の『ものみの塔』に載つた言葉を引用しているばかりである。しかし先ほど挙げた、「証明される」「打ち立てられる」「揺るがぬ真理」「明記されて」などの表現に満ちた、自信たっぷりの言い方を見た上で考えれば、これは事実の歪曲という他ない。

また、予言がはずれたという事実から注意をそらせるため、関係のない話題が持ち込まれることも多い。例えば、誤つた希望を持たされたにもかかわらず多くのエホバの証人がこの組織に従つた話を出し、従おうとしなかった人たちを「靈的に弱い」「神への奉仕に飽きた」あるいは自分勝手な理由に左右される者たちだと決めつける。

ここで最も不快な側面が明らかになる。つまり、一連の予言が神に導かれたものであり、神の与える「時に応じた食物」だと信じた『ものみの塔』読者に与えた影響について、まったく心遣いが見られないことである。読者の方は、自分たちの希望や実生活を協会の予言する年代に合わせるようにと言われる。すると当然、将来の生活について誤つた見方を生み出し、そして落胆せざるを得なくなる。結局のところ、そのような幻想は現実には直面するからである。

第8章 正当化と脅迫

「言葉が多ければ、とがを免れない、自分のくちびるを制する者は知恵がある」箴言10・19（口語訳）

「神の代弁者」と自らを呼んでいたチャールズ・テイズ・ラッセルも、一九一六年に逝去した。様々な年代預言を残していったが、一つとして当たったものはなかった。何千人という追隨者たちはどうして良いかわからぬまま残された。

一九三〇年発行の『光 第一巻』194頁を見るとその状況が次のように書かれている。

主の民は一九一四年を喜びと期待を持って待ち受けました。一九一四年が過ぎ去ってしまうと皆大きな落胆と幻滅に打たれ、またひどい批判にもさらされました。特に聖職者らには嘲笑を受け、指を指して笑われるような始末でした。一九一四年に何が起こるかについて色々なことを言っていたのにもかかわらず、その「預言」の数々が成就されなかったからです。へ私訳。日本語版『光 第一巻』では216、217頁

一九一四年が過ぎ、一九一五年が過ぎた。すべての国家と人間の機関がくつがえされることもなく、地上の支配権が完全にキリストの王国に受け渡されることもなく、油そそがれた者たちが天に上げられることもなく、「大いなるバビロン」が破壊されることもなく、イスラエルがキリスト教に改宗することもなかった。これらはいずれも一九一四年までに起こるとされていたのである。ものみの塔の信奉者の間には大きな疑念がわくことになった。第一次世界

大戦が始まったというのも事実であるが、予言されていたような世界規模の混乱に終わることはなかった。

一九一六年の一〇月、死を間近にした頃のラッセルは『時は近づけり』の新版に序文を添えており、一九一四年についての予言がはずれたのは別に大したことではないとしている。それがよく表れているのは以下のような部分である。

本書には、異邦人の時の終わりにおいて主の聖なる民たちが栄光のうちに主の御許に行くことになるかもしれないという考えが述べられている。これは犯してしまいがちな誤りではあったのだが、主はその民への祝福のためにこれを正してください。一九一四年一〇月までに会衆はすべて栄光のうちに集められるであろうという考え、これは何千もの人々にとって励ましとなり、また心清められるものでもあったので、この人たちは皆、その誤りのためにさえ主を讃えることができる。我々が思っていた時に会衆の望みが達成されなかったことで主に感謝の気持ちを表せる者も多いであろう。主の民なる我々がより精進を重ね、主と共に主の声をさらに広めるという好機が与えられたという感謝の気持ちである。

犯してしまった過ちについて神やキリストを持ち出し、神が予言を「正してください」という。これは実に便利
な言い方で、人が勝手に考えついたに過ぎず、神の示す年代ではないものを「神の示す年代」と言い切った責任を回避できるわけである。さらに、はずれた予言にも利点があったという。すなわちそれは「励ましとなり、また心清められるものでもあった」ので、「その誤りのためにさえ主を讃えることができる」というのである。この考えによって「励ましとなる」ような嘘の予言をさらに重ねる余地ができた。ここで真の預言者が語る次のような神の言葉を思う。

「善は悪である、悪は善である、と言っている者たち、闇を光、光を闇としている者たち、苦いを甘いとし、甘いを苦いとしている者たちは災いだ！」※1

ラッセルの生前、そしてその死後何年かの間は、追隨者たちも希望を持っていた。しかし第一次大戦が終わり、物が正常に戻り始め、一年また一年と時が経っていくにつれ、問題の年代計算を疑問視する声が高まっていた。

このような状況を引き継いだのがラザフォードである（ラザフォードは一九一七年一月の年次総会で協会会長として選出された。選ぶべき道は二つあった。一つは、誤りを率直に認め、正していくという道。もう一つは、ラッセルの予言を何とか正当化していく道。ラザフォードは、この二つ目の道を選んだ。

失われたつある自信を『ものみの塔』読者から呼び起こすべく、ラザフォードは『終了した秘義』と題された本を一九一七年、つまりラッセルの死んだ翌年に出版する手はずを整えた。

『終了した秘義』には、一九一四年に起こるとされていた事柄のうちのいくつかを何とか一九一八年にずらすという試みが見られる。これには、ローマ人によってユダヤ人の反乱が鎮圧されたという史実との対応関係が持ち出された。ローマ人がエルサレムを破壊したのは西暦七〇年だが、この事態に収拾がついたのは三年半後の西暦七三年である。そこでこの同じ三年半が一九一四年の秋に足され、一九一八年の春こそが劇的に重要な時だということになったのである。

次に掲げるのは『終了した秘義』の一部（62頁）で、傍線部分がこの新しい予言の内容である。これを読んで、これは堂々たる予言だと判断し、大いに期待をかき立てたけれども結局はズレたではないかと判断すること——これが「深読みして、書いていないようなことまで解釈して読みとる」ことになるのかどうか。実際に見て判断して頂きたい。

啓示（黙示録）2・1の注解で示した論拠によって以下のことが証拠立てられる。すなわち、ユダヤの征服は西暦七三年の過ぎ越しの日に初めて完了されたものとなった。前述の聖句に鑑みると、一九一八年の春、キリスト教世界は一九一四年の秋を越える規模

の苦しみの発作を味わうことになるであろうことがはっきりする。『聖書研究』第2巻、246、247頁にある神の摂理対照表を今一度繙き、三七を四〇に、七〇を七三に、一九一四を一九一八に変えてもらえれば、この表は正しく「大いなる力と栄光を持って」成就されることになるであろうと信ずる。(マルコ13・26) ユダヤ国家終結の時について、主が西暦七〇年を示しておられたのか、あるいは西暦七三年を示しておられたのかは、一九一五年の一〇月が過ぎ去るまではわかる術もなかったのである。さらにまた我々は約束されていたしるし、「諸国民が悩み、……人々は世界に起ころうとすることを思い、恐怖と不安で気絶するであろう」というしるしを目にした。そしてこのしるしを目にしたからには、主の言葉にもある通り、「神の国が近い」、「戸口まで近づいている」、「我々の救いが近づいている」ということなのである。(ルカ21・25-36、マルコ13・27-30) 西暦一九八〇年には死の世界に監禁されていた肉のイスラエルが再び集められることも考えられる。これは一九一〇年からちょうど七十年を数える年であり、一九一〇年と言えばラッセル師がニューヨーク競技場でユダヤの民に偉大なる証言を行なった年である。551頁の(1)参照。

しかしシオンの産みの苦しみ(イザヤ66・8)の時が一九一八年の春に起こるというのであれば、そしてその預言者の語る出来事までに「一日」(つまり一年)しか残されていないのであれば、それまでに「小さな群れ」には一体何が起こると考えるべきであろうか。「先の預言にある象徴的な産みの苦しみが指しているのは、大いなる患難の時であり、大いなる『バビロン』たるいわゆるキリスト教会にもたらされるべき苦しみであるが、これから逃れる値打ちがあるとされる者もいる。……

かくして一九一八年は、キリスト教世界の国々が、第一次世界大戦が始まった一九一四年に経験したよりも大きな「苦しみの発作」に見舞われるはずの年だったのである。ところが実際のところ、一九一八年になってみると第一次大戦は休戦によって終了してしまった。

また、この『終了した秘義』では、「油をそがれた者」の残りの者、あるいは「エリヤ級の最後の者たち」が一九一八年に天に上げられるだろうとも言う。こう書かれているのは次に示す64頁の部分である。

キリストが復活してから天に上げられるまでは四十日だった。これにより、会衆が栄化するのは一八七八年の春に眠りについていた聖徒たちが目ざめた時から四十年(一日は一年であるから)の後だろうということがはっきりする。ノアの洪水に先立つ七日間は、一九一四年から一九二一年の七年間を表すと言えるだろう。この七年間という「年の週」の半ばにメシアの最後のメンバーがあの世

へと旅立つ。大いなる群集はその最後のところで打ち切られる。この週の前半が非常にあっつきりと区切られていることから、この大いなる群集による証があと三年半あると考えられる。創造の始め以来今日に至るまで、天なる父は物事を週ごと、あるいは半週ごとに行なうらしいからである。アブラハムとの契約は紀元前二〇四五年だったが、これはアダムが禁断を破った紀元前四一二七年からコルネリオが改宗した西暦三六六年までの期間の半分（前後に二千八十一年ずつ）のところである。イスラエルがヨベルの年の記念祭を最後に行なったのは紀元前六二六六年であるが、これはアダムの日の終わりである紀元前三一二七年から改まる時の始めである西暦一八七四年までの期間の半分（前後に二千五百年ずつ）のところである。紀元前六〇六年のパビロン補囚は、異邦人の時の始まりであるが、これはアダムの千年にわたる日の終わりである紀元前三一二七年と異邦人の時の終わりである西暦一九一四年のちょうど真ん中（前後に二千五百二十年ずつ）である。紀元前六〇六年のパビロン補囚はまた、人が禁断を破った紀元前四一二七年とその完全なる復活のある西暦二九一四年の真ん中（前後に三千五百二十年ずつ）である。西暦三年のキリストの死は、ヤコブが死んだ紀元前一八一三年とイスラエルが復活した西暦一八七八年の真ん中（前後に千八百四十五年ずつ）である。西暦三年のキリストの死はまた、キリストが洗礼を受けた西暦二九年とコルネリオが改宗した西暦三六年のちょうど中間（前後に三年半ずつ）である。

眠りについていた聖徒たちが目ざめた西暦一八七八年は、改まる時の始めである一八七四年と呼びかけの終わった一八八一年のちょうど中間（前後に三年半ずつ）である。そこで我々は、小さな群が榮化する一九一八年春は、異邦人の時の終わりと天への道が開ざされる西暦一九二一年のちょうど中間（前後に三年半ずつ）だろうと考えるのである。

一八八一年についてのよく似た予言と同様、これもやはりはずれた。この本で最も力強い言葉が使われているのは、一九一八年にキリスト教世界の教会が壊滅し教会員の死体が累々と横たわることになる恐ろしい破壊についての予言の数々である。いくつもあるが、484頁と485頁にそのうち二つを見ることができる。

消え去るべき教会

《エゼキエル》24・20、21 わたしは彼らに言った、「主の言葉がわたしに臨んだ、『イスラエルの家に言え、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたがたの力の誇り、目の喜び、心の望みであるわが聖所を汚す。あなたがたが残す息子や娘たちは、剣に倒れる。』——神がその理由を言っている。これはキリスト教世界に起ころうとしていることの説明、あるいはたとえである。一八

七八年まで、いわゆる教会はある意味で神の聖所あるいは神殿だった。しかしそれ以降、神は誤った教義や神に許された行為によってこの教会を根絶やしにされようとする。一撃の下にか疫病によるかの如くにか、教会は一九一八年をもって完全に取り除かれる。教会はキリスト教世界の力であり、その生命の中心であり、関係諸機関の中心であった。人の目の喜びであり、すべてのクリスチャンが愛を持つ対象であった。しかしながら神は教会主義がクリスチャン会衆に対して行った神聖さを汚す行為を明らかにし、教会諸機関を死んだもの、汚れたもの、触れるべきでないもの、その死を悼むべきですらないものとしようとする。「教会の子供たち」は、戦争の剣と革命と動乱によって滅び去り、聖霊の剣によって霊的な世界に生きる望みがなくなったこと、「扉は閉ざされた」ことを見せつけられるであろう。

24・22 わたしがした通りあなた方もするのだ。唇を覆ってはならない、人のパンを食べてはならない——患難があまりにも大規模で程度も甚だしいために、数々の死体はあたりに累々と転がり、埋める者も嘆く者もない有り様となるであろう。生きている者は死よりもひどい患難を味わっているのであるから、死んだ者たちを悼むなどということがあはざるはずがない。

ラッセル師は死んだが、再び語り出す

24・25-26 人の子よ、わたしが、彼らのとりで、彼らの喜びと栄え、彼らの目の喜びであり、その心の望みであるもの、また彼らの息子や娘を取り去る日、その日に難をのがれて来る者が、あなたのもとに来て、あなたに事を告げる——また一九一八年には、神が教会という教会を破壊し何百万人という教会員を壊滅させるだけでなく、難を逃れる者は誰もがラッセル師の著作によって「キリスト教」の倒壊の意味を知るのであらう。

24・27 その日あなたは、そののがれてきた者に向かって口を開き、語り、もはや沈黙しない。こうしてあなたは彼らのためにしるしとなり、彼らはわたしが主であることを知る——ラッセル師の声は死の中に静められている。いわばこれから起こることに対して沈黙しているのだ。だが革命と動乱の時にラッセル師は口を開き、その日に壊滅を逃れた者に対してはもはや沈黙しない。そして「彼らのためにしるしとなるであろう」。そしてキリスト教世界一千万に広がった著書を通じて患難についての神の計画の真理を伝えるであろう。その言葉は希望のしるしとなり、これによって患難の向こうに明るい希望を持ち、栄光ある神の王国が打ち立てられるのを期待と共に待つことになるであろう。その時「彼らは主を知る」のだ。

また、キリスト教世界の教会ばかりではなく、政府も破局を迎えて消え去るのである（513頁）。

キリスト教世界は存続できず

31・14 これは水のほとりのすべての木が、その高さのために誇ることなく、その頂を雲の中におくことなく、水に潤う木が、みずから高ぶり立つことのないためである。これらは皆、死に渡され、下の国に入り、穴に下る者と共に他の人々のうちにいる。——地上にある他の体制がその模範に従うことはできない。体制としてすべて死の世界へ、社会の中でも最低の位置へとやられるからである。

31・15 主なる神はこう言われる、これが陰府に下る日にわたしが淵をこれのために悲しませ、その川々をせきとめるので、大水はとどまる。わたしはレバノンを、これがために嘆かせ、野のすべての木を、これがために衰えさせる。——一九一八年にキリスト教世界が体制として倒壊して消え去り（陰府）、代わりに革命的共和国体制になろうとすると、神は嘆きをもたらず。神は少しの間動乱の荒波を静められる。神は国々がキリスト教世界を悼むようにさせ、この倒壊のため世界（野）の人による体制（木）が、弱くなるようにさせる。——E 392、372

31・16 わたしがこれを穴に下る者と共に陰府に落とす時、もろもろの国民をその落ちる響きのために、打ち震えさせる。そしてエデンのすべての木、レバノンのすぐれて美しいもの、すべて水に潤うものは、下の国で慰められる。——神は国々が大規模な革命で打ち震えるようにさせる。その時神は体制としてのキリスト教世界を消し去る（ちょうど金持ちのたとえ話にあったように）。

31・17 彼らもこれと共に陰府に下り、剣で殺された者のところに至る。誠にもろもろの国民のうちで、その陰に住んだ者も滅びる。——しかし諸々の国民も消し去られる（陰府）（E 392、372）。キリスト教世界、そしてそのもとに人々の間で権力を持っていた者も同様である。（聖書引用部分は口語訳に基づく）

以上がすべて一九一八年について予言されていた。どれ一つとして実際に起こりはしなかった。しかしこの『終了した秘義』にはさらに一九二〇年に起こるという大変な出来事についての予言もあった。一九一八年に始まるはずの大規模な革命が一九二〇年にはピークを迎え、秩序を持った政府はすべて姿を消すというのである（258頁）。

神は激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた——地の葡萄のぶどう酒である。啓示（黙示録）14・17-20、エレミヤ8・14、イザヤ51・17-20、エレミヤ25・26-28、啓示（黙示録）18・6

16・20 島々は皆逃げ去った——共和国ですら一九二〇年の秋には消え去ってしまう。
山々は見えなくなった——地の王国はすべて終結し、動乱の中に呑み込まれてしまう。

16・21 人々の上に降ってきた——ギリシア語では「かの人々」であり、獣とその偶像の崇拜者、つまり聖職者のこと。

天からの大きな雹——凝縮された真理が破壊的な力を持ってやってくる。『聖書研究』第7巻が獣とその偶像の崇拜者の目にどのよう映るかについての記述。啓示（黙示録）11・19、イザヤ28・17、30・30、エゼキエル13・11、ヨシヤア10・11

それぞれ一タラント程の重さ——百十三ポンドに当たる。（マラキ3・10『聖書研究』第7巻が獣とその偶像の崇拜者の目にどのよう映るかについては、出エジプト記11章と12章にあるエジプト人にもたらされる最後の災い、すなわち初子の死に見られる。この災いが降り懸かるや、ファラオを始めとするエジプト人たちはモーセたちの出立を急がせ、銀の宝石（大いなる群集）も金の宝石（小さな群れ）も進んですべて渡してしまう。なお、「死人がないような家はなかった」とあることについて。啓示（黙示録）8章及び9章についての注解のところで掲げたリストに入っていなかったセクトがあれば、それは意図的に外したのではなく漏れているだけなので、今後版を改める際に増補訂正する。ファラオの軍勢がイスラエル人たちを荒野に追っていった三日間は、一九一七年から一九二〇年までの三年間を表しており、この時にはファラオの軍勢がすべて動乱の海の中に呑み込まれてしまう。ファラオ軍の戦車、すなわち組織からは車輪が外れることになるのだ。

一九一八年、キリスト教世界に革命を起こし、労働社会主義政府を打ち立てようという過激分子も、自分たちの成果が消え去るのを目の当たりにすることになる。なぜならば、キリスト教世界の政府を打ち倒しても、一九二〇年に今度は自分たちが反乱者たちによって潰されてしまうからである（542頁）。

……神は社会主義的、労働党的な秩序に対しても同じことを行なうであろう。反乱者たちはキリスト教政府を破壊したのと同じくこの社会主義的秩序も破壊するであろう。

35・12 あなたがイスラエルの山々に向かって、「これは荒れはてて、われわれの食となる」と言ったもろものそしりを、主なるわたしが聞いたことをあなたは悟る——労働黨員その他の者は次のことがわかるであろう。神が人々を統治すること、そして人々がキリスト教世界（イスラエル）の国々（山々）について言う言葉をしっかりと聞いておられること。すなわち、教会主義が崩壊し

た後に労働党員たちが「国々は荒れはてて、我々労働者が山分けするものとなる」と言うのを、すっかり聞いておられること。

35・13 あなたがたは、わたしに対して口をもつて誇り、またわたしに対して、あなたがたの言葉を多くした。わたしはそれを聞いた――社会主義その他の運動は、資本主義を糾弾し、また暗にキリスト教を批判しながらも、実のところは神によって許された秩序、すなわちそこに神が居られ、聖霊が宿り、真のクリスチャンがいる体制、これに対して反対をしているのである。邪悪な経済・社会・政治状況の暗闇から世界を導き出そうと謳いながら、知らず知らず神に対して暴言を吐いている。なぜならば神が忠実な会衆に任せようと前もって計画しておられたこと、他の代理には決してできないこと、これを自分たちが行なうと言っているからである。神はこれら社会主義者や労働党員その他の者たちの言葉を聞き流しはしない。神はそれを聞くであろうし、また後にしかるべき罰を加えるために心に留めてもおかれるであろう。

三五・一四 主なる神はこう言われる、全地の喜びのために、わたしはあなたを荒地地とする――万物の改まる時復活しないものに社会・労働主義運動がある。神による新秩序のもとで人々がすべて喜びにわきかえる頃、社会主義国家はまったく荒地果てて消え去っているであろう。

三五・一五 あなたが、イスラエルの家の嗣業の荒れるのを喜んだように、わたしはあなたに、そのようにする。セイル山よ、あなたは荒地地となる。エドムもすべてそのようになる。そのとき彼らは、わたしが主であることを悟るようになる――キリスト教世界の現世的な背教者たちは、急進派や革命派と一緒にあって、一九一八年以降キリスト教世界のものとなる荒地地をもらって喜ぶ。だが神は、一度は成功したその革命運動に対してその同じことをなし、「すべて」荒地地となる。一九二〇年秋の世界規模の大動乱による破壊により跡形もなくなるであろう。（啓示（黙示録）11・7―13）（聖書引用部分は口語訳に基づく）

「一九二〇年秋の世界規模の大動乱」などが衝撃的な言葉で自信満々に語られたが、どれ一つ実現しなかった。一九一四年の時と同じく、一九一八年も一九二〇年も過ぎ去ってしまい、予言されていたキリスト教世界の「苦しみ³⁵の発作」もなければキリスト教世界政府がくつがえされることもなく、教会の破壊もなければ何百万人もの教会員が殺戮されることもなく、また油そそがれた者たちが天に上げられることもなかった。

では一九一八年に何が起こったかと言うと、ラザフォード会長その他六人の協会役員が裁判にかけられ、懲役判決

を受けてしまったのである。『終了した秘義』その他の出版物の内容に治安攪乱のおそれがあるという戦時中ならでの起訴理由だった。しかし続く一九一九年には無罪放免となった。

こうして自由の身となった七人は一九二〇年に起こる出来事をしっかりと見届けることができる立場にあった。『終了した秘義』によれば、その秋までにはすべての共和国と「地のすべての王国」が「動乱の中に呑み込まれてしまう」はずだった。

ところがこの一九二〇年を待たずにまた新しい予言が作り出され、発表された。問題の一九二〇年が終わる前に、新しい年代が現れたのである。

「現存する万民は決して死することなし」

「わたしは預言者たちを遣わさなかった。だが、彼らは走った。わたしは彼らに語らなかつた。だが、彼らは預言した。エレミヤ 23・21

一九二〇年、ものみの塔協会会長のラザフォードは『現存する万民は決して死することなし』と題された小冊子を出した。この宣伝コピーは近年にも見られる。だが、これは当時ラザフォードの作った新たな予言に基づいたものである。現存する万民が決して死なないという主張は一九二五年という新たな年に基づいている。以下にこの小冊子の一部を88―90、97頁から掲げる。特に傍線部が一九二五年についての内容である。

……七十の聖年である。(エレミヤ 25・11、歴代第二 36・17―21) これらの聖年を簡単に計算してみるだけで重要な事実が得られる。五十年の聖年が七十あれば全部で三千五百年である。西暦一年を遡ること千五百七十五年の時点で始まったあの期間は必然的に一九二五年の秋に終わることになる。その終わった時点でこの予型は終わり、それを成就する対型が始まるはずである。それでは何が起こるというのであろうか。予型には完全な救済があるはずである。したがってこの対型ではすべての救済が始まるのでなければなら

ない。まず救済され、生命を取り戻すべきは人類である。聖書の他の部分によればアブラハム、イサク、ヤコブを始めとする古の忠実な者たちが復活すること、そしてこれらの者がまず最初に復活することは動かぬ事実である。したがって、一九二五年にはこれらイスラエルの忠実なる者たちが死の状態から戻ってくるであろうと考えて良い。復活し、完全に元通り生身の人間の姿に戻り、地の新しい秩序の、目に見える、合法的な代表者となるのだ。

メシアの王国がひとたび打ち立てられれば、イエスはその栄化された会衆と共に偉大なるメシアとなり、人々が長きにわたって来るようにと願ひ祈り続けてきた祝福を与えるであろう。その時が来れば、戦争はなく平和がやってくる。これはかの預言者が美しい言葉で語っていた通りである。「終わりの日に主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。もろもろの民は大河のようにそこに向かい、多くの国々が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう』と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。人はそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、脅かすものは何もないと万軍の主の口が語られた——ミカ4・1-4（新共同訳）

地の支配者

先にも述べた通り、大いなる聖年は一九二五年に始まる。この時点で王国の地の期間がはつきりと認められるであろう。使徒パウロはヘブライ11章で、主が磔刑に処せられる前、会衆が選ばれる前に死亡した忠実なる者たちの名前を長々と挙げています。これら忠実なる者たちは天の級とはなり得ない。天の望みはなかったのである。だが神はちゃんと良いことを用意しておられる。すなわち、神の約束によればこの忠実なる者たちは復活して完全な人間となり、地の君、つまり支配者となるのである。（詩編45・16、イザヤ32・1、マタイ8・11）したがって一九二五年にはアブラハム、イサク、ヤコブその他古の忠実な預言者たち、特にパウロがヘブライ11章で語っている者たちが戻ってきて完全な人間の状態になるであろうことが確信を持って期待できるのである。

……そして主の言葉を守るものは誰も死を迎えることがないであろう。イエスが、時が満ちた時これを完全に成し遂げようと考えておられなかったのであれば、このような約束をしたはずもない。

イエスはこうも言っている。「生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」(ヨハネ11・26〔口語訳])我々は主の言葉を信じるであろうか。信じる者には、ついに時が来る時、この言葉が当てはまることになる。主の取り決めを信じそして無論のことそれに従っている者は決して死ぬことはないだろうという、イエスの絶対にして嘘偽りのない言葉である。

以上見てきた通り、古い事物の体制、すなわちこれまでの世界はまさに終わりを迎えて消え去ってしまおうとしており、代わりに新しい体制がやって来ようとしている。そして一九二五年には、古の忠実なる者たちが復活して再建が開始される。現在地上に生きている何百万もの人達が一九二五年にもまだ生きていであろう、と考えるのは理にかなっている。ということは、神の言葉に約束されていることに基つき、現存する万民は決して死することなし、という確実にして動かぬ結論に至らざるを得ないのである。

これはもちろん誰でもが生きるであろうというのではない。神に従おうとしない者も出てくるだろう。しかし一度は悪の道に進んだ者であっても、義に向かい義に従おうという者は生き、死ぬことはない。これについては主の預言者による次のような言葉がある。……

『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』や、前章で紹介した一九九三年の『目ざめよ!』の記事をはじめとするものみの塔協会の出版物においては、特定の年代に何が起こるかについての主張は、確実なこととして独断的に主張されたわけではなく、単なる「期待」であつたとされている。出版物からの引用は、自分たちが不謬ではないとか神の啓示を受けたわけではないという内容の文章だけである。

しかし、「エホバの名において」という言葉を使うことと、例えば一九二五年について「神の言葉に約束されていることに基つき」アブラハムやイサクやヤコブが復活することを「確信を持って期待できる」という言葉を使うこととの間に、一体どれほどの違いがあるのか。結局ここでは誰の名において語っていることになるのか。主張の根拠はどこにあると言っているのか。そしてまた、自分たちの主張は確実にして不謬だと主張することと、神の約束に従って「この小冊子が発行された一九二〇年当時」現存する万民は決して死することなし、という確実にして動かぬ結論に至らざるを得ない」と主張することとの間に、一体どれほどの違いがあるだろうか。これは単に言葉の上での違いであり、主張の強さや内容、またそれが人に及ぼす影響においては同じである。

さて、これが「万民キャンペーン」と呼ばれる活動のもととなった。これは、この小冊子の内容を広めるための、二年にわたる世界規模の活動だった。主要都市にはすべて大きな広告掲示板が立てられ、「現存する万民は決して死することなし」の文字がひらめいた。これに新聞広告も加わった。ものみの塔代表者による講演もすべてこの話だった。

『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』の中で、この世界規模で行なわれたキャンペーンについて触れている箇所では、これが過去の出来事の一つでしかないような扱いがなされている。しかし、この一九二五年については、誰かの意見として主張されていたのではなく、神の言葉に基づいたものであり、したがって確信を持つべきものだとしていた。この主張が人々にいかなる影響を及ぼしたか、はざれたことがどれほど深い落胆をもたらしたか——これについて、『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』も他の出版物もまったく認めようとはしない。神の言葉が人間の想像の産物と結びつけられたことについて、反省すべきだとは決して言わない。つまり、そういった倫理的な側面は、まったく重要ではなく、考える必要もないとされているらしい。

一九二一年、ラザフォードにとっては初の一冊本である『神の立琴』が出版された。これは一七九九年に「最後の日」が始まり、一八七四年にキリストの「目に見えない臨在」が開始したという協会の教義をなぞったものである。以下にその一部（236頁）を紹介する（要点には傍線をほどこしてある）。当時見られた世の中の発展状況などが、そのままこれらの年代の「動かぬ」証拠とされているところにご注意頂きたい。

……ここでの目的は、重要な年代をいくつか取り上げ、そこにおいてどれほどの預言が成就されているかを見ることである。年代計算は、少なくともある程度まで、正確な計算にかかっており、その点で常に間違いを犯す可能性がある。ところがすでに成就された預言は、実際に存在し、確固たるものとなった事実の記録である。事実というのは、無効になるようなものではなく、ただ静かにそこにあるものであり、事実に基づく証拠は動かぬ証拠とされなければならない。

さて、ここに二つの年代があるが、これを混同したりせず、明確に区別しなくてはならない。一つは「終わりの時」の始まりの時、

もう一つは「主の臨在」の時である。「終わりの時」は、上にも示した通り西暦一七九九年から始まって、サタンの帝国が完全にくつがえされ、メシアの王国が打ち立てられるまでの期間全体のことである。主の再臨が一八七四年からであるのも上に述べた通りである。この再臨の期間は、言うまでもなく「終わりの時」と言われる期間の一部であり、後半部分に含まれているのである。

この時以降、これに対応するような形で長足の進歩があらゆる学術部門において、いやあらゆる分野において、見られてきている。公立学校は、常にカトリックの非難の的であるが、教育を一般に広め、あらゆる階級の人々の知識を増やすに至っている。大学は世界中でその数を増やしている。様々な知識が増えるに伴い、時間と労力を節約する機械などの発明が数え切れぬほどなされてきている。

一七九九年以前の交通機関では、一日のうちにごく限られた距離しか旅することはできなかった。馬車に乗るか牛車に乗るか、あるいは自分で歩くしかなかったのである。海を渡るとなれば帆船に乗るしもなく、その進み方は甚だのろいものであった。ところが一八三一年に初めて蒸気機関が発明された。これはその後素晴らしい進歩を遂げ、今や世界中ほとんどどこであつても汽車によって実に速く旅することができる。もっと後になると電気機関車、自動車、さらにはガス機関が発明された。今や地上どこでも人や物が移動している。時速百二十キロから百六十キロで旅するなどというのは少しも珍しいことではない。これは特に近頃の発明である飛行機の場合についても同様である。

以上述べたような発明の数々はキリスト臨在期間にある「神の備えの日」に関わっている。——ナホム2・1-6

一八四四年には電信が、さらに後には電話が発明された。いずれも始めは電線を利用し、電気によって世界中に情報を伝達できるようになったのであるが、その後の発明によって電線も不要となり、今や世界中にある機器を用いて情報は空を駆けめぐるに至っている。

この知識の増大、この世界中で人々が駆けめぐるっている様は、疑いなく「終わりの時」の預言の成就を示すものである。これらの事実は動かす余地のないものであり、思慮分別のある人ならばきっと我々が一七九九年以来「終わりの時」にあることを納得するに十分なものである。

この「終わりの時」の後半部分をイエスは収穫の時としておられる。「収穫とは世の終わりのこと」(口語訳)と言われるのである。その時には私が来ているだろう、とイエスは言われた。一八七四年以降は「終わりの時」の後半期間である。一八七四年以降は、先にも述べた通り、主の再臨の時なのである。使徒パウロは、イスラエルに関してなされた数多くのことを次々に述べていき、「それ

が書かれたのは、世の終わりに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」と言う。（コリント第一 10・11（口語訳））そうすると、これらのことは「終わりの時」に理解されるのに違いないと考えられる。

労働者階級は常に圧政に打ちひしがれ、経済、教会、政治すべての面で支配者の下にあり続けてきた。ところが一八七四年、我らの主の再臨の年にこそ、世界で初めての労働者団体が結成されたのである。この時以来素晴らしい光が増し、ここにそのすべてを記しきれないほどの発明や発見があった。以下にそのいくつかを紹介し、一八七四年以来の主の臨在を示す更なる証拠とする。計算器飛行機、アルミニウム、消毒手術法、人工染料、自動連結器、自動車、有刺鉄線、自転車、カーボランダム、レジスター、セルロイド、通信教育、クリウム分離器、アフリカ奥地探検、円盤鋤、『世々に渉る神の経緯』、ダイナマイト、電車、電気溶接技術、エスカレーター、火なしこんろ、ガス機関、刈り入れ機、灯用ガス、誘導モーター、ライノタイプ（行単位自動鑄造植字機、マツチ製造機械、モノタイプ（字単位自動鑄造植字機、活動写真（映画、北極探検、パナマ運河、低温殺菌法、ラジウム、鉄道信号、レントゲン線、靴縫製機、高層建築、無煙火薬、南極探検、潜水艦、地下鉄、蓄音機、電話、テレビ、タイプライター、掃除機、無線電信）へ私訳。日本語版『神の立琴』（明石順三訳）では264―269頁

ここには、大学が増えたこと、そして蒸気・電気・ガソリン機関による交通手段や電信・電話などが発達したことなどによって人々の知識が増え、また足の便が良くなったとある。特にその後には次のようにあるのにもう一度注意されたい（これはこの『神の立琴』239頁である）。

「これは」疑いなく「終わりの時」に関する預言の成就を示すものである。これらの事実は動かす余地のないものであり、思慮分別のある人ならば、我々が一七九九年以来「終わりの時」にあることを納得するに十分なものである。

「疑いなく」というものは論理的に絶対正しいものである。「絶対正しい」とは書いていないが、ここで言わんとしているのはまさにそれである。もしこれを疑ったり、確信を持てなかったりする者があれば、「思慮分別のある人」の仲間にはなれないという話である。これもまた思想上のいじめという武器である。確固たる真理なら決してこのようなものを必要としない。

こういった新しい予言や古い年代の確認には「励ましとなり、また心清められる」ところがあったのかもしれないにせよ、一九一四年から八年も経った一九二二年には、多くの人が協会の年代預言に対して持っていた信頼が薄れつつあった。これを何とかしようとして協会本部がとった方法というのはこの協会の性質をよく示すものである。これはまた比較的最近、一九七五年以降に見られたパターンでもある。

協会は、聖書解釈についての主張をやわらげたり、自らの権威について控え目になることはなく、以前にも増して従順さを要求するようになった。年代計算の正確さについての主張はさらに断定的になった。「忠実にして智き僕」（これは当時ラッセル師に当てはまるものとされていた）の教えに対する「忠節」がスローガンであった。ラッセルの教えに基づいた年代計算（もとはN・H・バーバーやジョン・アクイラ・ブラウンらによるものだったが）に疑いを持つ者は、信仰が足りないばかりか、自分の知恵に溺れており、傲慢で自惚れていて頑固であり、悪魔に道を誤らされて主を拒否する罪を犯していると断定する。協会の言う年代に矛盾するような古代歴史学者の言い分に少しでも耳を傾けることは、「サタンの帝国の手先」を信用することだと決めつける。

これが信じ難いという人のため、一九二二年から一九二三年にかけての『ものみの塔』に次々と現れた記事の内容を見てみよう。「疑いようのない」「まったく疑いの余地なく正しい」「神によるうしろだてのある」「絶対、無条件に正しい」「議論の余地なく打ち立てられている」「証明済みの確実性」「神に由来する」といった言葉が繰り返し使われているのに注目して頂きたい。これらの言葉が年代計算について使われているのだが、これは一七九九年（終わりの日の開始）、一八七四年（キリストの目に見えない臨在の開始）、一八七八年（油そそがれた者たちの復活の開始）、一八八一年（ラッセルが主の家令の役目を完全に任された時）、さらには一九一四年、一九一八年、そして最新の預言の年である一九二五年（これは「一九一四年と同様の聖書の根拠がある」と言われた）をすべて含むのである。以下の引用では、わかりやすいように部分的に傍線を施してある。

以下は、『ものみの塔』1922年3月1日号からである。

収穫の時

イエスはこの時代が収穫をもって終わり、その時にはご自分が来ておられるだろう、そしてご自分の選ばれた者たちを集めるために使いを遣わされるだろうと言われました。(マタイ13・24-30、24・31) 主がその収穫の時、地に証人をおいてご自分の臨在と収穫について伝えようとされることは当然予期されることです。これについては、ここにさらなる状況証拠があり、これは決定的なものです。言葉よりも説得力のある現実の事柄なのです。すなわち、ラッセル兄弟が収穫の時とその主の臨在を告げ知らせたということなのです。彼こそが最初に「収穫の時は来たり、野に出て働け」と広く伝えたのです。これに応じた何千人もの人々がこの知らせを広めるのに加わりました。

イエスは、ご自分の臨在期間に忠実にして智き僕を使い、時に応じて(信仰の)家に食物を与えるだろうとはつきり言っておられます。今日、世々にわたる神のご計画についての知識を持つ者は誰でも、自分の知識はラッセル兄弟の書き物に照らして聖書を研究したことによるのであり、それ以前には神に救いの計画があることすら知らなかった、と心から答えられなくてはなりません。今日、神の言葉における真理の光に恵まれている者は誰でも、主がその真理をもたらしてくださったのであり、臨在の後間もなくラッセル兄弟が始めた奉仕の業を通じてその内容を明らかにしてくださったのだとわかります。

さらにこの記事では「神に向かう賢者」(ラッセルのこと)という見出しのところで、「自分には他の人よりも知恵があると思っている」人をおとしめることを書いており、そういう連中はよく「独断的な言い方をする」と言っている。ところが、それからまもなく一七九九年と一八七四年についての「疑いようのない事実」についての話が始まる。他の人がやれば「独断的」であることも、『ものみの塔』の執筆者がやれば「心からの納得」となるらしい。

神に向かう賢者

ラッセルは賢い人だったでしょうか。世が、特に教会関係者が、思っているような意味では決して賢い人ではありませんでした。そしてそのことを神に感謝しましょう。もしラッセルに彼を中傷する人たちにあるような世の知恵が多くあったならば、主は決して

彼を使おうとは思わなかったことでしょう。いわゆる学のある聖職者たちはラッセルを非難して、彼はギリシャ語もヘブライ語も知らなかったではないかと言います。この非難は当たっています。こういう事実が疑いの余地なく示していることは、ギリシャ語やヘブライ語の知識のある人の大多数が自信過剰に陥っていることです。自分たちにはあまりにも知識があるから、何かびつくりするようなことを持ち出して、他の人がせつかくやったことを台無しにしてやらないと思ひ始めるのです。主のやり方から離れ、主の言葉に反して自分自身の理解に頼ろうとするのです。(箴言3・5、6) こういう人はよく普通の人にはわからないような言葉を使って話したり書いたりします。他の人たちに自分の知識を大いに見せつけようとしてこんなことをするのです。自分たちは他の人よりも賢いと思っているので独断的な言い方をするのです。正しいとか間違っているとかは関係なく、他の人にはその知恵とやらが理解できないだろうからというので、とにかく言い分を鵜呑みにさせられるかどうかにかかっている、そんな言い方です。

したがって、疑いのような事実が示すところによれば、「終わりの時」は一七九九年に始まったのであり、主の再臨は一八七四年に始まったのです。そしてその後収穫が始まり、神の言葉に光が増し加えられたのです。これについて、イエスの言葉に耳を傾けてみましょう。「主人がその家の僕たちの上に立てて、時に応じて食物を備えさせる忠実で賢き僕は、いったい、だれであろう。主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである」(マタイ24・45、46(口語訳に基づく))

それから二ヵ月後の『ものみの塔』1922年5月1日号でも、協会の教義に対する疑問は徹底して追い出すという内容が続いている。やり方は同じである。

野心の結果

時として、こういう人が現れることがあります。我らの主に少なくとも一時的には従っていて、その知性、性格、場合によっては人格にも見るべきところがあるのだけれども、自信過剰に陥ってしまう人です。こういう人は、他ならぬ自分が主に指名されて、神の事柄を仰せつかりその民を荒野から導き出すように求められているのだと思ひ込みます。そうこうするうち、主がラッセル兄弟をあの僕として選ばれたのは間違いだっただのではないか、と思うようになります。さらに後になってくると、きつとラッセル兄弟は「あの僕」ではなかったのだと結論するようになります。ラッセル兄弟が書いたものに疑いを持ち始め、堂々とそれを口にするようになります。こうなってしまうと、主の言葉を無視しています。「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」(箴言3・5、6、口語訳)

この戒めを無視し、また悪魔の巧みな影響に惑わされているので、ラッセル兄弟が言っていたことをすべてひっくり返して会衆の考えを正しい方に向けてやることこそが自分の重大な責務だと思ひ込むようになります。文章を綴り、また図表を描いて自分の見方を主張するのです。これを他の人に見せ、自分が間違っていると言われると、きっとこれは自分の持つ光が輝くのを邪魔しようとしているのだという風に受け取って、その言葉を無視します。こうやってみんなに教えてやらないといけない、今までの教えを取り除いてしまわないといけないと思ひ込んでいるものだから、自分の書いたものを出版し、聖別された人たちに送りつけ始めます。うわべしか見ない人、また特にせっかく教えてもらったことを忘れた人には、これがもっともな内容であるように見えるのです。こういうものを読んで疑いの気持ちが起こる人もあります。試みがなされているのです。

協会がラッセルから受け継いだ教えに対する忠節は、神とキリストに対する忠節と同じものであるとされる。つまりラッセルの教えを却けることはキリストを却けることなのである。驚くべき主張であるが、これがこの同じ『みの塔』誌にはつきりと述べられている。

イエスは、再臨の際会衆の中から選んだ忠実にして智き僕を通じ、時に応じて信仰の食物を備えさせるだろうということをはっきりと示しておられました。主の再臨について、収穫の時について、「あの僕」の職務はラッセル兄弟によつて果たされていることについて、圧倒的に強力な証拠があります。これは決して人間を崇拜することにはなりません。チャールズ・T・ラッセルが何者であつたかは関係ないのです。医者であつたか、下働きのレンガ運びであつたか、シャツ売りであつたか、そんなことはどうでも良いのです。聖ペテロは漁師でした。聖パウロは法律家でした。こういうことは取るに足らないことです。何よりも、この人たちは主が選ばれたのです。世での職業が何であつたにせよ、ラッセル兄弟は主の僕だったのです。したがって、ラッセル兄弟やその著作を却けることは、ここに述べた原則に則つて、主を却けるのと同じことになるのです。

この話の筋立ては、半世紀後の一九八〇年代になつて「背教者」と言われる人々たちを非難するのに使われたものとまったく同じである。やはりこの時も年代計算が問題の中心で、真のクリスチャンであるかどうかを試す「信仰の試み」とされた。この同じ『みの塔』誌は、一七九九年、一八七四年、一九一四年、一九二五年などについての協

会の年代計算を疑えば、結局「神と主イエス・キリスト、並びに我々がそれによって贖われたキリストの血を却けることになる」と警告している。次の通りである。

ここでもやはり試みがなされているのです。今度は年代計算についての試みです。これに疑いを持ったたり反対したりするのは、主の再臨を、収穫の時を、「あの僕」の職務とそれを果たした者を疑うことになり、さらには世の終わりの証拠を、王国の開始を、人の改まりの近いことを疑うことになり、最終的には神と主イエス・キリスト、並びに我々がそれによって贖われたキリストの血を却けることになるのです。

その後の『ものみの塔』でも協会の年代計算が話題の中心であり、反論の根拠になるような証拠はすべて非難の的となり、同時に協会の計算がいかに正確かを謳い上げる内容が続いた。一九一四年というのはこの年代計算体系から見ればほんの一部でしかなかった。年代（そしてそれに関する主張）のすべては正しく、神の導きによるものである、したがって疑う必要は一切ないのであるという断言が続く。次は『ものみの塔』1922年5月15日号からである。

年代計算

我々は一八七四年、一九一四年、一九一八年、そして一九二五年に関する年代計算について何の疑いも持っていません。ところが「七十年間の荒廃」の期間、並びにイスラエルのバビロン捕囚に関する新しい光を見つけたと言い、他の人たちにラッセル兄弟は間違っていたのだと信じさせようと躍起になっている人もいます。

使徒ヤコブは我々にこう言ってくれています。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」（口語訳）我々はこの約束を信じ、天なる知恵と恵みが正しく導かれるようにと日々請い願っています。また、聖なる者たちの祈りは日々天の恵みの王座に届き、『ものみの塔』の内容について導いてほしいという願いが聞き届けられているものと信じており、これを大変有り難く思うものです。

さらに読者は、協会の年代計算に合わないような外部の歴史記録の証拠にすぐ惑わされたりしないようにという注

意を受ける。次の引用では特に最後のところに注目して頂きたい。

彼らの最も強力な「権威」も時として当てにならないものがあります。例えばヨセフスやプトレマイオスです。この二人はキリストの後二世紀ほどの間にいました。完全な資料が手に入っていたわけではなかったので記録をまとめるのに苦労したのです。限られた条件下で最善を尽くしたことに間違いはありません。世俗の歴史記録の中では最高の部類とされています。さて、この人たちによる資料、あるいはまた他の資料によって、ある年代が歴史家の間で一般に受け入れられています。しかし一般に受け入れられているからといって必ずしも絶対に正確であるとは限りません。ところが、自分たちの知識を読者に印象づけようとして、こういうことをよく自信過剰な書きぶりで述べるものだから、読んでいる方はそれ以上調べることもなくついそのまま受け入れてしまいがちなのです。

この最後のところを、これに続いて『ものみの塔』自身が協会の年代計算を受け入れるように強く求める部分の書きぶりとよく見比べてほしい。

神の是認の印章付き

このやり方に従って一八七四年、一九一四年、一九一八年という年代が得られたのです。そして主は一九一四年と一九一八年に自分の印章を決して消すことができぬようにしっかりと押されたのです。これ以上何の証拠が必要だというのでしょうか。

同じ計算方法によって、イスラエルの子らがカナンに入った時点から、エホバがユダヤ人をバビロンに七十年にわたって送ったこととで明らかに示されている通りにそれぞれ五十年の周期を七十回分數えてみます。すると一九二五年、多分その秋、対型のヨベルが始まるのが簡単に得られます。一九二五年については、一九一四年についてと同様、まったく疑問の余地がありません。一九一四年にはある人たちが期待していたようなことがすべては起こらなかったのですが、これはこの年代計算を徹塵も揺るがすものではありません。この一九一四年という年が非常に目立ったものであったため、なされるべき業はここを中心としてすべてなされるに違いなくと神ならぬ人間はごく簡単に思ってしまう、そこで実際に予言されていたことよりも多くを期待した人が多かったのです。一八四四年、一八七四年、一八七八年、そして一九一四年、一九一八年、すべて同様でした。いま振り返ってみると、次のことがたやすく理解できます。これらの年代は聖書にはっきりと示されており、主がその民を勇気づけるため（そして実際民は勇気づけられしむた）の手段だったこと、また同時に、ある人たちが期待していたようなことすべては起こらなかった時には、これを試みとふり分け

けの手段とするためのものだったこと、これは疑い得ないのです。ある人たちが一九二五年について期待していることが目に見えてすべて起こるということはないかもしれませんが、今までと同様、だからといってこの年代は決して揺るがないのです。

ここでもやはり、それまでの年代がはずれたのはすべて主のしたことであり、「主がその民を勇気づけるための手段だったことは疑い得ない」ことになっている。神やキリストともあろうものが嘘偽りを使ってその僕を勇気づけようとするのは変だとは決して言わない。ところが聖書には「神は光であり、「神」との結びつきにおいてはいかなる闇もありません」とある。^{※2} 神あるいは神の子がクリスチャンを導くのに誤りを用いるというような考えは聖書に縁のないものである。ここでは明らかに、疑いを差し挟む者は神に文句を言う者であるとしてこれを攻撃対象にしようとしているわけである。

さらにまた大いに強調されるのは、年代計算を一年たりとも変更するのは無茶であり、協会の「年代計算の体系すべてを狂わせてしまう」という点である。^{※3} しかし実のところ、協会では使われていた紀元前の年代ほとんどを近年になつてかなり変更している。

当時「現在の真理の年代計算」と呼ばれていたものが正しいと主張するためであればどんな言葉を使おうと何を言おうと辞さなかったという感もある。そのほとんどが今では受け入れられていないことを念頭に置きつつ次を見て頂きたい。『ものみの塔』1922年6月15日号である。

現在の真理の年代計算のさらなる証明

よく知られた数学の法則に「蓋然性の法則」があります。日常生活でも、疑わしい事柄を解決するためによく使われます。ある家に子供が何人かいて、何か悪戯があったという時、蓋然性は——と言うより確実性は——それをやった誰かがいるということであり、

※2 ヨハネ第一 1・5。

※3 『ものみの塔』1922年6月15日号187頁。

他の者はきつとやらなかったということです。あるいはまた、夜間ある家に何らかの被害があった時、蓋然性の法則で言えばこれはまったくの偶然であったかも知れません。もし二軒の家が同じやり方で被害にあつていれば、これは偶然ではなくて誰かの意図的な行ないではないかということになります。同じ被害が三軒ないしそれ以上になってくると、これは偶然を越え、確実に意図的だということになります。

現在の真理の年代計算も、もし千八百四十五年と二千五百二十年という二つの大いなる周期の繰り返しがなければ単なる偶然ということになりますが、これがあるために偶然を越えて確実性の領域に入っています。もしこれら周期における対応年代が一つか二つしかなかったら単なる偶然の一致かも知れませんが、年代と出来事の一一致がいくつもある場合、これは偶然ではあり得ず、そういう計画ができる何らかの人格的存在、すなわちエホバ御自身の計画による他はないのです。したがって年代計算そのものも正しい他ないのです。

ギゼーの大ピラミッドの通路における測量寸法にしても、現在の真理の年代計算との一致が一つか二つであれば偶然かも知れませんが、非常に多数の一致が見られることは同じ神がピラミッドも年代計画も作られたということの証明であり、同時にこの年代計算の正しさの証明です。

この年代計算に幕屋及びエゼキエルの神殿の測量寸法と一致しているところがあることも、正しさをさらに保証しています。

こうした数多くの一致に基づき、科学的に知られている最も確かな法則に従って、我々はこれを断言するのです。聖書的に見ても、科学的に見ても、歴史的に見ても、現在の真理の年代計算はまったく疑い余地なく正しいのです。その信頼性は一八七四年、一九一四年、一九一八年という年代とその時の出来事によって十分に確証されています。現在の真理の年代計算は確固たる基盤であり、その上に立つて聖別された神の子供が来たるべき事柄を見つけたそうと努めるべきものなのです。――ペテロ第一・11、12、ヨハネ16・13

この記事は、この年代計算が「岩の如く動かず、神の言葉に基づいている」ものであるとし、これを信じるのがエホバに、そしてその靈感を受けた言葉に対する信仰の問題」であることを強調している。※4 現在ではほとんど

※4 『ものみの塔』 1922年6月15日号187頁

認められていないこの年代計算であるが、当時はこれが「神の」ものであること、しかもその一部ではなくすべてが「絶対」に「そうだとしつこく主張されていた。何しろ「全能の神の是認の印章」を押されていたのである。かくして『ものみの塔』1922年7月15日号では、「年代計算をつなぐ太い綱」という見出しで、次のように言うに至る。

現在の真理の年代計算は、とりあえずは、一連の年代に過ぎず、他の年代計算と変わりません。つまり、それぞれの年代がその前後の年代からこれこれの年数離れている、ということが知られているわけであり、それぞれの手順は存在する最も信頼できる証拠によって正しさが証明されるわけです。しかし、これだけのことしかこの年代計算の信頼性の証明がないのであれば、俗世のものよりも信頼できるなどと真に言うことはできません。ここまでなら、いわば鎖のようなもので、つながりの最も弱いところが全体の強さを決めてしまいます。

しかしながら、現在の真理の年代計算におけるそれぞれの年代の間には非常にはっきりした関連があるのです。この年代の相互関係こそが、他の年代計算に見られるよりもはるかに大きな力を添えているのです。中にはその特徴があまりにも見事なため、人のものではなく神のものであることは明らかな年代計算もあります。神に由来するものにして神によるうしろだてがあるからには、現在の真理の年代計算は他とは一線を画するものであり、絶対、無条件に正しいものなのです。

議論の余地なく打ち立てられている

ある年代がいくつもの証拠によって示されていれば、これは強く確立されていると言えます。科学的な蓋然性の法則により、様々な要素がねじり合わさった年代計算の太い綱は、バラバラの証拠が合わさっただけよりもはるかに大きな力を持つのです。これは、重要な事柄においては暗黙のうちに使われている法則です。例えばこういう具合です。何かがただ一つのやり方で示されている場合、これは偶然かもしれない。二つのやり方で示されていれば、ほとんど確実に真である。これを越えると、普通偶然ではあり得ず、真でないこともあり得ない。さらに証拠が積み重なると、まったく偶然というのを離れて、証明済みの確実性という領域に入る。

この法則は、裁判における非常に重大な事柄についても毎日のように使われています。一人の証人の証言ならば疑いを持たれ得るのですが、二人か三人の証人がいれば、議論の余地なく真理を打ち立てられるのです。「すべての事柄は、二人か三人の証人の証言によって確定する」——コリント第二13・1（口語訳）

現在の真理の年代計算においては、年代間に数多くの相互関係があり、これは単に年代を並べたものではなく、つまり鎖ではなく、

しつかりとより合わさった一本の太い綱なのです。これは神によって統合された体系であり、そのほとんどの年代があまりにも見事な関係を示しているのです、これは人のものではないと保証するに足るものです。

神に由来する証明

次のことがはっきりと示されます。すなわち現在の真理の年代計算によって神が主要な年代について前もって知っておられたことの動かし難い証明が得られること、これが神に立脚する証明であること、そしてこの体系は人の発明ではなく、神の真理の発見であること。

この証明は、年代間に見られる数多くの相互関係にあります。この相互関係がなければこの年代計算も俗世にある体系と変わらないうこととなりますが、これがあるために我々はこの年代計算が全能なる神の是認の印章を押されているものと信ずるのです。

「対応関係」というのが、この年代計算体系が神に由来する証拠として大きく扱われている。これは千八百四十五年と二千五百二十年という対応する期間が歴史における数多くの年代と出来事に当てはめられるというものである。この対応関係を使う体系について、この記事では次のように述べている。

このような対応関係は、現在の真理の年代計算が神に由来するものであるという証明です。前もってわかっていたことを示すものだからです。先に挙げた例では、イスラエルの分裂とキリスト教世界の分裂は二千五百二十年を隔てており、これこそイスラエルの分裂がわかればキリスト教世界の分裂も前もってわかったという証拠です。これが言えるのは、この二つの出来事の関係が時においても性質においても関係が成り立っていたからです。

二千五百二十年を隔てた年代が「一組の対」をなすような対応関係の体系があるとわかれば、前もってわかる事柄は明らかになります。この関係が神の手はずによるものではないと主張するなどというのは馬鹿げたことでしょ。前もって知ることというのは神のみにできるのであって、このことは神が年代と出来事を管理し、偶然や人の発明の結果であるには余りにも規模雄大にして見事に調和した体系に織りなしているという証明です。

これが神のものであることは余りにも明らかで、その信頼性を否定したりするのは「馬鹿げたこと」と言っていた

のであるが、その後の協会ではこの対応関係を使う体系をすべて捨ててしまった。

以上紹介した文献は、年代預言という、協会の教義構造において極めて重要な部分で疑問の念が起こりそうなどころを扱い続けていたのだが、これはどうやら『ものみの塔』の読者に対して来たるべき催しの準備を行っていたもののようである。つまり、その年にオハイオ州シーダーポイントで行なわれた大会に向けて、ある種の士気と心構えを高めていくためのものだったらしいのである。一九二二年に行なわれたこの大会は、協会の歴史における記念すべき出来事と言われるものだが、この時の主要講演ではそれまでの『ものみの塔』記事によってすでに紹介されていた内容に基づき、これをさらにまとめ上げるような話が行なわれた。今日の協会では、この講演の一部分だけを取り上げて引用し、一九一四年という年代を支持しようとする。この話の内容、及び参加者たちが到達すべきだとされた結論においては一七九九年のことや一八七四年のことも同様に重要だったのだが、この事実はまったく無視されている。『ものみの塔』1922年11月1日号で公にされた講演内容は次の通りである。

聖書の預言は、主が一八七四年に再び現れることを示しています。成就された預言は、実際に主が一八七四年に現れたことを疑う余地なく示しています。成就された預言というのは、現実にある、事実のことです。こういった事実に疑いの余地はないのです。真に見張っている人はすべてこれらの事実をよく知っています。聖書に書かれており、主の特別な僕による解釈に説明されています。イエス御自身がこう宣言されました。臨在する時、その民を収獲し、真実で忠実な者たちを集めるであろうと。もう何年かにわたってこの業が続いてきており、終わりに近づきつつあります。イエスは、臨在の間に忠実にして智き僕の役割を果たす者を一人選ぶと言われました。その者を通じ、時に応じて民に食物をもたらすためです。事実はすべてこれらの預言が成就したことを示しています。

準備の日

王は何のためにやって来たのでしょうか。王国を設立し、王として統治するためです。しかし統治を始める前にすることがあります。これは準備の仕事です。主の統治においては主と連携すべきメンバーがあることになっていますから、このメンバーが集められ、統治開始の準備をしなければならないのです。この世の神の支配下にある異邦人の時は一九一四年八月一日に終わりました。そ

れまでは主が、すなわち栄光の王が、自ら偉大なる権力を持って統治するという筋の通らないことはできなかったのです。(エゼキエル21・27) 主は一八七四年以来臨在しておられるのですから、我々が今日の前にしている事実から考えれば、一八七四年から一九一四年までが準備の日であることになります。これは、「終わりの時」が一七九九年から一九一四年までだという考えに矛盾するものではないではありません。一七九九年から一八七四年までの期間は準備の日とは言い得ず、これは増しつある光の日というものです。王が臨在する前に準備を始めると考えるのは理にかなったことではないのです。

六千年にわたって神はこの王国を準備してこられました。千九百年にわたって神は人間の中から王国級を集めてこられました。一八七四年以来、栄光の王が臨在しています。そして収穫を行ない、神殿級を集めてこられました。一九一四年からは栄光の王が権力を執られ、統治しておられます。王は神殿級の人たちの唇を清め、知らせと共に送り出したのです。この王国の知らせの重要性はいくら強調しても足りないほどのです。知らせの中の知らせです。これは時の知らせなのです。主の民にとってこれを宣言するのは義務です。天の王国は近づきました。王は統治しています。サタンの帝国は倒れつつあります。現存する万民の死することはありません。これを信じますか。栄光の王が臨在しているということ、一八七四年からずっとそうだということ、その間ずっと収穫の業をなさっておられるのだということ、一八七四年からずっとそうだということ、その間ずっと御自分の業を行ない、信仰ある家のものに食物を与えたということ、信じますか。主は今その神殿にあって、地の民の審判を行なっているということ、栄光の王が統治を始めたのだということを、信じますか。

ならば、野外に戻りなさい、いと高き神の息子たち！ 武器を身に着けるのです！ 身を慎み、目を覚まし、積極的に、勇敢に。主のための、忠実で真の証人でありなさい。前に出て、戦うのです、バビロンが完全に荒れ果てて遺物となるまで。知らせを広くあまねく宣べ伝えなさい。世界は知らねばなりません、エホバが神であること、イエス・キリストが王の中の王、主の中の主であることを。今がまさに日の中の日なのです。見なさい、王が統治しています！ あなた方は王の宣伝代理なのです。それゆえ、王とその王国を宣伝し、宣伝し、宣伝しなさい。

ラッセル師の教えと年代計算に「忠節」というかなり熱の入った呼びかけであるが、その反面この講演には大変なところがある。まさにそのラッセル師の教えから少しずつ離れていく最初の兆候が現れているのである。『時は近づけり』でラッセルは「一八七八年は、明らかにキリストが権力を持つことになるという聖書の予型に合った年であ

り、霊的な、目に見えない形で臨在する主が王の中の王として実際にその力を持った時、すなわちその偉大なる統治の権力を持った時なのである」としていた。ところがこの一八七八年に起こったこと（目には見えないことになっている）が、ラザフォードのシーダーポイント講演では一九一四年という、いろいろ期待されたことがまったく起こらなかった年に移されてしまったのである。後になると、一九一四年より前の年代に関係づけられていた出来事を一九一四年、あるいはそれ以降の年代に次々に移し替えていくことになるのだが、これはその第一歩であった。

小冊子『現存する万民は決して死することなし』の内容に合わせ、協会では、ヨベルの周期（モーセを通じての神の律法によると、これは五十年の周期で、ヨベルの年が五十年ごとにやってくる）が示すところでは、一九二五年こそがキリストの統治が完全にその姿を現し、また古の預言者たちが地上に復活してくる時であるとしていた。一九二四年になると、協会は『楽園への道』という若年層向けの小冊子を発行した。先に見たような予言がいかに自信たっぷりに若者に向けられているかに注意して見て頂きたい。救われた人類の世界首都たる地上のエルサレムの描写までである（224―227頁）。

……神は御自分の王国の最も名誉ある地位を任せるには異邦人でも十分であることを示されました。ところがユダヤ人にとっては自分たちに任せられなかったというので屈辱的なことになるでしょう。

ユダヤ律法による年は秋に始まり、これはおよそ我々のいう一〇月一日頃に当たります。したがって一九二六年というのは一九二五年一〇月一日頃に始まるわけです。その時点からまもなく神のご好意が世界の一部としてのユダヤ人たちに戻され始めるだろうと考えることは大変理にかなっています。ユダヤ人の多くは、すでにかつての故郷、パレスチナを思慕の情をもって見ています。神が民族としての異邦人たちにお与えになった時間は一九一四年に終わったこと、これはすでに見た通りです。となると、ユダヤ人は、民族として、イエスを磔刑にした時に神のご好意を失っており、また異邦人たちはもう民族として認められていないのですから、まもなくキリストが世界全体を一人一人の人間の集まりとして扱い始められます。これはまずユダヤ人、古代の名士たちから始められます。したがって、一九二五年を迎えてまもなくのうちに、アベル、エノク、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、メルキゼデク、ヨブ、モーセ、サムエル、ダビデ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、バプテストのヨハネ、その他ヘブライ第11章に出て

くる人たちが目ざめるのを眼にするだろうと考えて良いのです。

これらの人たちが地の王国の中心となります。まず必要となることに、エルサレムを世界の首都にできる状態にすることがあります。これは大変な仕事になりますが、やる気のある人は数多くいます。最近の報道によればすでに関心はパレスチナに向けられています。何千というユダヤ人たちはパレスチナに戻ろうとしています。道を良くしたり野を耕したりと、すでにかなりの仕事が行なわれています。しかし、先に述べた「君たち」が目覚め、持ち場に就くまでは、きちんと一貫した仕事が行なわれることはないはずで、各国の首都では、それぞれの領地全体と密接な連絡を取っていない必要があります。同様に、エルサレムが世界の首都になるとすれば、あらゆる場所と密接に連絡が取れていなくてはなりません。キリストの王国は、過去六千年にわたってもたらされた邪悪なものを経年のうちすべて正すことになっています。古いやり方では通用しません。すでに大いなる変化が来ているのが目に見えています。無線やラジオによって世界の半分が結ばれています。君たちが復活してくる頃には世界中が完全に結ばれているでしょう。

世界中の人たちが、いわば「一つの部屋」にいるような具合になるでしょう。この部屋は、私たちの知っているような集会をする場所よりもちょっと大きいかもしれませんが、それは何でもありません。イザヤ2・3やゼカリヤ14・16、17を読んでみれば、すべての人が「エルサレムに上る」のが簡単に簡単なることわかります。君たちは世界中どこにでもラジオで指示を送ることができま

す。想像してご覧なさい。アブラハムの君が皆に何か伝えたいという時、「連絡します」と言えば、それを聞いている世界中の人たちはその声をそのまま耳にすることができ、公会堂の演壇から話されているのを直接聞くのと変わらないのです！

もちろんエルサレムに行つて実際に君たちと話したいという人がいたり、あるいは君たちの方から何か公共の仕事を直々に横断したいという場合のため、飛行機がもうすぐ十分に発達して、エルサレムと世界のあらゆる場所を行き来するのにも何時間か乗るだけになるでしょう。これぞ実に新世界と言うべきもので、あらゆる点で栄光を受けることになるのです。――ゼカリヤ14・20、21、

啓示（黙示録）21、詩編72、145

これら古代の名士たちは「鉄の杖」を使う権力も持つことになるでしょう。必要とあらば、わがままで言うことを聞かない人を扱うためです。義に逆らうようなことは許されないことを皆が知らねばなりません。正義こそは、新しい王国の基礎となる原則なのです。――詩編37・9、10、2、38

この本を読んでいる皆さんの中にはきつと、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、ダニエルその他の古の忠実な者たちが「より良き復活」の栄光に包まれ、完全な精神と肉体を持ってやってくるのを眼にする人が多いことでしょう。もうまもなく、キリスト

がこれら忠実な者たちに地上の代表者としての栄光ある地位と権力とを与えられます。皆はじめのうちは文明の利器に囲まれたこの世界に戸惑うことでしょうが、すぐに慣れるでしょう。はじめのうちは面白いこともあるかも知れませんが、復活してきた人たちは、私たちに与っては馴染み深い電話、ラジオ、自動車、電灯、飛行機、蒸気機関車その他色々なものを見たこともないのですから。

今この時生きていて、古い世界が終わわり、新しい世界がやってくるのを眼にできるというのは、何とありがたいことでしょう。地球の歴史上、今こそが一番素晴らしい時なのです。

無論言うまでもなく、この本が対象としていた「皆さん」は今やかなり年齢を重ね、少なくとも八十歳代にはなっているはずである。

予言とスローガンの年であった一九二五年、言われていたことは何一つ起こらなかった。すべては、空疎でたわいもない預言的夢物語だった。

しかしこの『ものみの塔』その他の出版物に載せられた内容は、すべて神の伝達経路を通じて与えられた「時に応じた食物」だとされていた。この経路には今や王として君臨しているキリストの特別な是認と指示があるというのである。協会自身、自分たちは「神の真の預言者」として語ったのだと断言する。

しかし一九二五年が過ぎ、予言がすべてはずれたことがわかったので、予言した側は「忠実で思慮深い奴隷」ではなかったことがはっきりした。靈感を受けた神の言葉に忠実かつ謙虚に従うことはなく、だからこそ「疑いのようない」とか「絶対、無条件に正しい」とか「議論の余地なく打ち立てられている」というような言葉が使えたのである。またこれほど独断的な教義を何年にもわたって世界規模で広めていたというのは思慮深いことでもない。これはラザフォードが自分でも「ばかなこと」をしたと認めている通りなのである。

神の「経路」と言われる『ものみの塔』で使われていた威嚇的な言葉の数々――これに従いたくない者は野心的で高慢な気持ちがあり、キリストに背く者だという書き方――これによって大多数の人が「指導者に従っておこう」と

いう気持ちになったのは疑いない。この指導者が自分でも「ばかなこと」と認めることを言っていたにしてもである。しかしまた、これほどまでに無責任なやり方を支持し続けることはできないと思った人も多く、一九二五年が過ぎるとかなりの人が協会を離れた。^{※5}

協会の出版物ではこの一九二五年のことがどのように書かれているだろうか。典型的なのは『一九七五年エホバの証人の年鑑』146頁へ『一九七六 エホバの証人の年鑑』145、146頁である。ここでは、問題があつたのは教えを出版した協会ではなく、それを読んだ兄弟たちの方だとしている。次の通りである。

一九二五年となり、その年は過ぎました。しかし、イエスの油そそがれた追隨者たちはひとつの級としてなお地上にいました。また、アブラハム、ダビデほか昔の忠実な人々は、復活して地の君たちになつてはいませんでした。(詩 45・16) その時の様子をアンナ・マクドナルドは次のように回顧しています。「一九二五年は多くの兄弟にとつて悲しい年でした。希望がくじかれたために、ある人々はつまずきました。『古代の名士たち』(アブラハムのような昔の人たち)の幾人かが復活するのを見ることができるといふ希望を持っていたのです。ひとつの『可能性』と見る代わりに、その人たちはそれが『確実なこと』として読み取り、中には、自分の愛する人が復活するかもしれないと期待して、その人たちのために仕度をする人もありました。

先に紹介した『ものみの塔』誌の書きぶりを見て頂ければ、大きな希望が打ち砕かれた責任が「兄弟たち」にあるとするこの行為がどういふものなのかおわかり頂けるだろう。

一九八〇年の『年鑑』へ『一九八一 エホバの証人の年鑑』62頁(これは当時のフランス会長が、ラザフォードの「ばかなこと」云々という言葉を本部のスタッフに話して聞かせた年に出版された)でも、やはりこれについて同じような態度がとられている。

※5 その中には、私の父の弟で、四人いたフランス兄弟のうち一番年下だったアルヴィン・フランスもいた。

一九二六年五月にラザフォードがスイスの大会を訪問した時のことが扱われている箇所、その際の質疑応答で次のようなものがあつたと伝えている。

「質問 古代の立派な人々は帰還していますか。」

「答え（ラザフォード） 帰還していいことは明らかです。それらの人を見た人は一人もいません。ですから、そのように発表するのは分別のないことです。一九二五年からほどなくして彼らが帰還することは十分に考えられると『万民』の本に述べられています、それは単なる見解が表明されているに過ぎません。」

誰にでも見解を表明する権利はある。しかし地上における神の代弁者であるという者たちには、ただ意見を述べておいて、しかるにこの意見は神自身の言葉によるものであり、だからそのように受け取ってほしいなどと言う権利はない。神から人類へのメッセージであるとして世界中に広め、霊的な「時に応じた食物」であると言いながら、それを出版している側が無責任に虚偽に満ちた意見を述べ、これを執拗に押しつけ、受け入れない者を軽蔑し、さらには神への忠節と謙遜がないのではないかと言う。到底これは「忠実」にして「思慮深い」とは言えない。

一九三〇年、協会ではカリフォルニア州サンディエゴにベト・サリムと呼ばれる家を建てた。この家について、フレッド・フランスの筆になる『新しい世界』（104頁）では次のように書かれている。

……はその後すぐに戦いに敗れ、天から投げ出されて地に落とされました。その邪悪な者は今や手下の悪魔たちと共に地に海に大いなる災禍をもたらし、すべての国家を全体主義体制に変え、すべての人々を神に背かせようとしています。主イエスは審判を行なうために神殿に来ておられ、まだ地にいる主の「体」の成員の残りを御自身と完全に一体をなす神殿の状態に集められました。（マラキ3・1-3）ですから、古の忠実な者たちがいつ復活してきてもおかしくないだろうと思われるのです。これがハルマゲドンの始まる少し前に起こるであろうと信じる十分な理由にはあります。

この見込みに基づいて、カリフォルニア州サンディエゴに家が建てられました。これは宗教の敵によって悪意に満ちた騒がれ方をした建物ですが、一九三〇年に完成し、「君たちの家」を意味する「ベト・サリム」という名前が付けられたのです。この家は現在

君たちが戻ってきたら住めるように委託管理されています。最近の動向を見ると、この世の信心家ぶった人たちはこの「君たちの家」が新しい世についての証となっているために齒がみをしているのだとわかります。こういう偽者の信心家やその一派にとっては、古の忠実な者たちが戻ってきて人々を審判し統治するというのはまったく嬉しくないことなのです。※6

すでに第2章で見た通り、一九二五年から十六年経った一九四一年、ミズーリ州セント・ルイスでの大会においても、協会会長ラザフォードは子供たちに向かつて「もうすぐ聖書時代の忠実なる人たちが帰ってくる」と言っていた。そして結婚相手を選ぶについてもこの人たちが指示をしてくれるからそれまでは結婚を差し控えた方が良いと言っていた。当時そのことを伝えた『ものみの塔』ではその時発表された『子供たち』について「ハルマゲドンまでに残された月日に行なえる最も効果的な奉仕のために主より与えられた道具」と書いていた。

それからおよそ三百ヵ月の「月日」が経った一九六六年、新たな年代が現れた。一九七五年である。

※6

この本が出版されて（一九四二年）から何年も経たないうちにベト・サリムは売られてしまった。一九五〇年にニューヨーク市ヤンキースタジアムで行なわれたエホバの証人の大会でフレッド・フランスは講演を行ない、「君たち」がハルマゲドンの前に戻ってくるという予言は正式に放棄されたと言い、代わりにその君の役目は会衆で協会に指名を受けた者たちがすでに果たしているということになった。

第9章 一九七五年「神が行動されるのに適切な時」

「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない」

使徒1・7へ新共同訳

ラザフォードが会長だった時代の後半になると、前半期にはあれほど執拗なまでに繰り返された年代預言の数々はほとんど姿を消し、あるいは同じ内容に違う年代が当てられた。

「終わりの日」の始まりは、一七九九年だったのが一九一四年になった。

キリストの臨在についても、一八七四年から一九一四年に変わった（これは一九二二年に、キリストの王国支配の正式な開始が一八七八年から一九一四年になったのと同様である）。

復活が始まったのは、一八七八年だったのが一九一八年になった。

一九一四年は本来に「世界の終わり」だと断言されていた。これは世の国家が地上における権力を借用していたのを神が「法的に」終了させたという意味である。しかしこれもやはり姿を消した。今では「終わり」あるいは「事物の体制の終結」（これは『新世界訳』の訳語）はこれから起こるとされている。

いずれも目に見えないことと言われているので、これを受け入れることは、とにかく信じることにすべてかかっている。ある時、これらの年代預言や変更が議題となった統治体会議の後で、ビル（ウィリアム・ジャクソンが私に笑いながらこう言った。「ずっと前からよく言っていたよ、年代をあっちからこっちに動かせばそれで済むってね。」

ラザフォードが一九四二年に死去すると、二千五百二十年の期間の始まりが紀元前六〇六年だという話にやっと変更が加えられることになった。紀元前六〇六年から二千五百二十年を数えれば西暦一九一五年になり、一九一四年にはならないのであるが、奇妙なことに、このことは六十年間以上にわたって認められることも取り上げられることもなかった。

そこでひっそりとその開始点が一年分ずらされて紀元前六〇七年にされ、二千五百二十年の期間が一九一四年に終わるようにされた。しかしエルサレムの崩壊がそれまでに信じられていたのより一年早かったことを示す歴史的証拠はまるでなかった。ただ単に協会では（一九一五年ではなく、一九一四年を自分たちが多年にわたって示し続けている年代として残しておきたかったから、エルサレムの崩壊を一年だけ動かしたのである。そう書けば済むことであるから、簡単なことだった。

一九四〇年代の半ば頃、ラッセルとラザフォードの時代に使われた年代計算ではアダム創造の時が約百年ずれていたとされた。そして一九六六年、協会は、人類六千年の歴史の終わりは以前の教義にあった一八七四年ではなく一九七五年にやってくるだろうと発表した。

これが公にされたのは一九六六年の夏、フレッド・フランズが書いた『神の自由の子となつてうける永遠の生命』においてである。その最初の章で、ヨベルの年の仕組み（これは一九二五年に関する預言においても重要だったもの）に基づいて、（それまでと同様に）一日が千年の長さである「六日間」があると論じている。この間人類は不完全な状態にあるのだが、続く「七日目」の千年間には大いなるヨベルのうちに完全な状態に戻り、罪や病気や死に隷属している状態から自由になるというのである。この本の28頁から29頁にかけては次のように書かれている。

アッシャーの時代以来、聖書の年代記の徹底的な研究が行なわれてきました。この二十世紀においては、キリスト教国の伝統的な年代計算に盲目に従わない、独自の研究が行なわれ、この研究の成果である年表が出版されています。その年表によれば、人間創造

の年は紀元前四〇二六年です。信頼できるこの聖書年代表に従って言えば、人間創造以来六千年になるのは一九七五年のことです。そして人類歴史の第七の千年区分は、西暦一九七五年の秋に始まります。

それで人間が地球上に存在するようになって以来六千年になるのは、近い将来、すなわちこの時代のうちのことでです。詩篇九十篇一、二節のことはあるとおり、エホバ神は無窮です。「エホバよ、あなたは世々わたしたちのまことの住みかとなつてこられました。山が生まれず、あなたがあたかも産みの苦しみのような苦しみをもつて地と肥えた土地を生み出さないうち、定めのない時から定めのない時まであなたは神です」。(新世訳)すると、過ぎ去ろうとしている人間存在の六千年間も、エホバ神の見地からは一日二十四時間の六日に相当するにすぎません。同じ詩篇のことは(三、四節)は次のようにつづいています。「あなたは人をちりに帰らせて言われます、『人の子よ、帰れ』と。あなたの目の前には千年も過ぎ去ればきのうのごとく、夜の間のひと時のようです」。ゆえにこの時代のうちに、そして多くの年を経ないうちに、わたしたちは、エホバ神の目から見て人間存在の第七日にあたる日を迎えることとなります。『**神の自由の子となつてつける永遠の生命**』 28、29頁より

これが一体どういう意味を持つというのであろうか。同書はさらにこれを次のように発展させていく。

エホバ神がこの第七の千年期を休息と解放の安息の期間とし、全地の住民に自由をふれ示すための、大いなるヨベルの安息にされるのは、全く適切なことではありませんか。それは人類にとつて全く時宜を得たことです。それはまた神にとつても全くふさわしいことでありましょう。忘れてならないことに、人類の前途には、聖書卷末の本に述べられているようにイエス・キリストが千年のあいだ地を治める、キリストの千年統治があるからです。十九世紀前、地におられた時、イエス・キリストはご自身について預言的に「人の子は安息日の主である」といわれました。(マタイ、一二ノ八)「安息日の主」イエス・キリストの支配が、人間生存の第七の千年期と時を同じくしていることは、単なる偶然ではなく、エホバ神の愛の目的によるのです。(同書30頁より)

一九七五年が千年期の始まりだとはつきり言い切った箇所があるわけではない。しかしこの章の構成は、複雑な話
が注意深く組み立てられていき、右に引用した部分でその結論に達するという書き方になっている。

そのものずばりの言い方で一九七五年についての予言が確言されているのではないにせよ、この著者は、神がこの

メリーランド州ボルティモアの大会で閉会の話を行なったF・W・フランズはこのように話を切り出しました。「私が演壇に上る直前に、一人の若者が近づいて来て、こう言いました。『この1975年という年が何を意味しているのか、教えてください』。それからフランズ兄弟は、その新しい本の資料は1975年までにハルマゲドンが終わり、サタンが縛られるということを意味しているか、という点に関して生じた数多くの質問に言及しました。要約すると、兄弟はこう述べました。『そうなることもあり得ます。しかし、私たちは断言しているのではありません。神にとってはすべてのことが可能です。しかし、私たちは断言しているのではありません。ですから、皆さんのうちのだれも、今から1975年までの間にこれこれのことが起こるなどと明言してはなりません。しかし、親愛なる友である皆さん、最も重要なのは、時は短いという点です。時は尽きようとしています。そのことに疑問の余地はありません』。

1966年以降、エホバの証人の多くは、この論^{まこと}の精神と調和した行動をとりました。しかし、この点に関してはほかにも幾つかの陳述が公表され、中には、適切であるというよりも断定的なものもあったようです。そのことは、「ものみの塔」誌の1980年6月15日号（17ページ）で認められました。しかし、それに加えてエホバの証人は、おもにエホバのご意志を行なうことに専念するように、また早い救いに関する日付や期待に過度の関心を寄せないように、という注意を与えられました*。

一九七五年に千年期を開始するならばこれが「適切」で「神にとっても全くふさわしいこと」だと言い切っている。全能ではない人間が全能の神のすることについて「適切なこと」と言うためにはかなりの確信が必要で、単に「見解を表明する」のとは違うと考えるのが道理であろう。慎重さを重んずるなら、そう考える必要がある——というよりそう思わなければならないだろう。ところがこれに続く部分はさらにはつきりしており、『安息日の主』イエス・キリストの支配が人間生存の第七の千年期と時を同じくしていることは、単なる偶然ではなく、エホバ神の愛の目的によるのです」と書かれている。この第七の千年期というのは、その前のところでは一九七五年に始まると書かれている。

さて、ここでも、協会一九九三年発行の『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』は、その序文が約束する、客観的で「ありのままの歴史」を提示できたはずである。ところが、一九六六年の大会（この際にフレッド・フランズが

一九七五年のことが載った本を発表した。での出来事を紹介するだけの、極めて手短な文章があるだけである（104頁）。

よくある通りだが、ここで引用されているのは、当時唯一の注意を呼びかける言葉である。「この点に関してはほかにも幾つかの陳述が公表され、中には、適切であるというよりも断定的なものもあったようです」と認めてはいらぬ。^{※1}しかしエホバの証人のうち約五分の三程度は『神の自由の子となつてうける永遠の生命』が出た一九六六年以降に組織に加わっているもので、その当時何があったのか、一九七五年という年代にどれほどの重要性が与えられ、それがどれほど強調されたかを直接知っているわけではない。ところが統治体のメンバーなら知っている。少なくとも執筆委員会の何人かは、『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』の先ほど引用した部分を読んだ上、承認を与えたのである。したがってこの人たちは、これがいかに偏った、現実とはほど遠い書き方であるか、知らなかったはずがない。それでは現実はどうだったのか。

同じ年、『ものみの塔』の姉妹誌である『目ざめよ！』1966年10月8日号では、「あとどれぐらいか」と題された記事を載せ、「六千年が一九七五年に終わる」という見出しの部分では、やはり千年期は神の七千年にわたる安息日の最後の千年間であるとしている。そして以下のように続く（19、20頁より）。

……したがって、我々が人類存在のはじめの六千年の終わりに近づいているという事実は、とても意義深いものです。

※1

この引用箇所のある頁の脚注には、他にも注意を呼びかける言葉を引用しているが、六〇年代のものは一つだけで『ものみの塔』1966年5月1日号（1966年8月15日号）、あと二つは（それまでの預言についての注意を呼びかける言葉と同様）一九七五年が近づいてから、あるいは一九七五年になってしまつてからのものである『ものみの塔』1974年6月15日号（1974年9月15日号）、並びに1975年5月1日号（1975年8月1日号）。『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益です』からの引用もあるが、これは一九七五年について述べた『神の自由の子となつてうける永遠の生命』が出る前、一九六三年発行の本である。その引用は、「時の流れの中でなお将来の事柄に属する種々の年代について推測するのに聖書の年代記述を用いるのは無駄なことです。——マタイ24・36——」というものである。ところが、この後に書かれた『神の自由の子となつてうける永遠の生命』の著者がなぜこの原則に従わなかったのかという説明は見られないのである。

神の休息の日は、創造以来人間が地上にいる時と平行関係にあるでしょうか。どうやらあるようです。世俗の歴史の年代との一致を多く見せている、聖書の年代計算に関する最も信頼できる調査によれば、アダムは紀元前四〇二六年に創造されたということがわかります。同じ年にイブも創造されたであろうことは十分考えられます。この直後に神の休息の日が始まりました。すると、人間の存在のはじめの六千年が終わり、すなわち神の休息の日のはじめの六千年が終わるのは、何年になりますか。一九七五年です。特に「終わりの日」が一九一四年に始まり、預言の成就を示す目に見える事実がこれを邪悪な世の最後の世代であると示していることから考えると、このことは注意する値打ちがあります。したがって我々は、差し迫った将来において、神と神の約束に信仰を持つ人たちにとって大きな出来事がやってくるだろうと期待することができます。つまり、何年かのうちに我々は「終わりの時」に関する残された預言の成就を目にするであろうということです。

『エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々』は、注意を呼びかける言葉として『ものみの塔』1968年5月1日号(272頁)へ1968年8月15日号502頁を引用している。ところが実のところ、この記事は期待感を高める内容なのである。

目前の将来が刮目すべき出来事に満ちていることは確かです。この古い制度は完全な終わりに近づいているからです。「終りの時」に関する聖書預言の最後の部分は、ここ何年かの間に成就を見、生き残った人類はキリストの栄光ある千年統治の下で解放されるでしょう。前途には困難な、しかし同時にすばらしい時があります。

これは一九七五年にハルマゲドンの戦いがあるという意味ですか。どの年ということとを断言できる人はひとりもいません。「その日、その時は、だれも知らない」とイエスは言われました。(マルコ、一三ノ三二) 神のしもべにとっては、サタンの支配下にあるこの制度に残された時が急速に短くなりつつあることを知るだけでじゅうぶんです。残された時の短いこと、起ころうとしている、地球をゆるがす出来事そして自分の救いをはかる必要に目ざめない、あるいは気づかないとすれば、それは全く愚かなことです。

またこの部分には、紀元前四〇二六年「アダムの創造(初秋において)」から始まる年代の表も載っている。その終わりの部分は次の通りである。

一九七五年 六〇〇〇 人類生存の第六の千年の日の終わり(初秋において)

二九七五年 七〇〇〇 人類生存の第七の千年の日の終わり（初秋において）

このような「目前の将来」「ここ何年かの間に」という終わりの日に関する預言の話が、どれほど「注意を呼びかける」ことになるだろうか。普通に物事を考えられる人がこれを見れば、一九七五年に関する期待や望みを高めようとしている内容だとは思えないだろう。

さらに、『目ざめよ！』¹⁹⁶⁸年10月8日号の「一九七〇年代は何をもたらすか」という記事では、残された時間が短いことを強調し、その冒頭では次のように言う（13頁）。

「終わりの日」と呼ばれる期間のうち五十四年間が過ぎ去ったという事実は、極めて意義深いものです。これは、あと何年もしないうちに地上を支配する墮落した体制が神によって破壊されるということを意味します。どうして私たちはこれほど確信が持てますか。

この記事の後の方では、一九七五年が人類の歴史六千年の終わりであることに触れて次のように言う（14頁）。

六千年が終わりに近づいている

我々がこの「終わりの時」の最後の数年間にいるという事実を確認する助けになるやり方がもう一つあります。（ダニエル一二ノ九）聖書は、我々が人間の歴史の六千年の終わりに近づいていることを示しているのです。

ものみの塔出版物は、分野を問わず有名人や「専門家」が少しでも一九七五年について言ったことを何度も引用した。例えば、ディーン・アチソン元国務長官が一九六〇年に言った次の言葉である。

「今の情勢を見ていてわかることは、今から十五年のうちに「つまり一九七五年までに」この世界は危なくて住めなくなるだろうという事です」

食糧関係の専門家二人が書いた『飢饉——一九七五年』という本は何度も引用された。特に以下のような部分であ

る。

「一九七五年までにはかつてなかったような災害が世界を襲うだろう。史上最大の飢饉が途上国を襲うだろう」

「この今までにない危機状況が非常な深刻さをもってやってくる時期として、一九七五年というはつきりした時期を予告するものである」

「一九七五年までには、民衆の反乱、動乱、軍事独裁、止めどないインフレ、交通機関の混乱、先の見えない不安感などが飢餓状態にある多くの国々での風潮となるだろう」

『神の自由の子となつてうける永遠の生命』で一九七五年にスポットがあてられてから三年後、やはり同じ著者フレッド・フランズによる『近づく一千年の平和』が出された。^{※2} ここでの書きぶりは、それまで出されていたものにも増して断定的であるとしか言いようがない。これが出たのは一九六九年で、その25、26頁には次のような部分がある。

さらに近年になって、熱心な聖書の研究者たちはその年代計算を再検討しました。彼らの計算によると、地における六千年の人間存在は七〇年代の中頃に終わるだろうということです。したがってエホバ神による人間の創造からの第七千年期はあと十年以内に始まることになりました。

主イエス・キリストが「安息日の主である」ためには、キリストの千年統治が第七番目の千年期に来るのではありません。（マタイ二二・八、欽定訳）したがってこれは安息日の統治なのです。

ここでの話の流れは極めてはつきりしている。安息日は六日間の労働に続く七日目であるのだから、キリストの千年統治も六千年の労働と苦難の後に続く七千年目の期間であろうと言うのである。まったく不明瞭なところも曖昧な

※2 同じ内容が『ものみの塔』1969年10月15日号へ1970年1月1日号にも載った。ところがものみの塔出版物（一九三〇—一九八五年）の索引

（一九九〇年版）で「一九七五年」を見て、これほど一九七五年に関連の深い記事が挙がっておらず、無視されている。

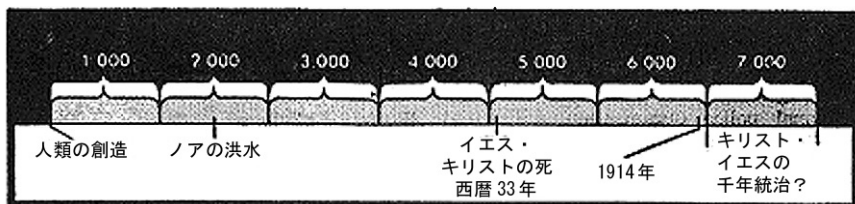
ところもない。

神にとって何が「適切」であり「ふさわしい」かを決めたのと同様に、ここではイエス・キリストが何をしなければならぬかについても決めたわけである。キリスト自らが言っていた「安息日の主」について、その統治は連続する千年期の七番目のところで「なければなりません」——つまり人の考えた理屈が神の子に対して要求を出しているのである。六千年の期間は一九七五年に終わる、キリストの統治はそれに続く千年期で「なければなりません」——ここで「忠実で思慮深い奴隷」は主人に向かって、おっしゃった通りに行動するのならこれを守ってくださいよ、という予定を組んでしまったのである。

ここでの書き方は比較的洗練されているし表現も上品ではあるものの、基本的にはラザフォードの『現存する万民は決して死することなし』（これはラザフォード自ら「ばかなこと」と言ったもの）と非常によく似ている。言われている年代が違うというだけで、あとは一九二五年以前に逆戻りである。同じ内容が今度は一九七五年についての話になったというだけの違いなのである。^{※3}

一九七〇年代に入り、期待感の盛り上がりは続いた。『目ざめよ!』1971年10月8日号は、労働と苦難の期間が六つ続いた後に七つ目の（安息日）休息期間があるという話をさらにもう一度繰り返し、下のような表を掲げている。

※3 確かに「七〇年代の中頃」というやや曖昧な言葉が使われているが（25頁、一九七五年が聖書的に示された年代であるということはそれ以前から確立しており、これが世界中にいるエホバの証人の頭にはしっかりと焼き付いていた。



1970年代半ば、人類の歴史6000年の終わりに近づきつつある私たちには
壮大な解放のすばらしい希望があります。

（上は『目ざめよ!』1971年10月8日号（英語版）の図から訳者が作成した。）

すべてが期待感をあおり立てるためのものだったことは明白である。高揚した気持ちを和らげ、落ち着かせようというのではない。確かに、条件付きの言葉が使われていることが多いのは事実である——「断言するわけではない」、「はっきりした時を指し示している」わけではない、「その日と時刻については知らない」——が、協会はこの手の事柄について素人ではないことも考えに入れなければならない。そもその始まり以来、その歴史を通じ、まったく同じパターンで歩んできている。年代について人々の期待感をあおってはそれが裏切られる。そして後に、落胆の責任は書いた側にはなく、すべてそれを受け取って期待しすぎた側にあるのだとする——これがお決まりのパターンである。したがって、協会の責任ある立場にある人なら、同じ失敗があり得ること、また人はいとも簡単に大きな期待感を持つてしまうことなどに気がついていてしかるべきだったのである。

ところが、千年期が始まるであろうという特定の年代をはっきり予言することは注意深く避けつつも、「何年かのうちに」「差し迫った将来」「ここ何年かの間に」「あと何年もしないうちに」「最後の数年間」などという言葉は使っても良いとしたわけである（これらの言葉は、すべて、一九七五年のからむ文脈で、『ものみの塔』および『目ざめよ！』において使われたものである）。何か意味があつてのことだろうか、それともちよつとした不注意だろうか。そんな風に人々の期待感や生活計画や感情をもてあそんで良いものだろうか。しかし、『ものみの塔』¹⁹⁶⁸年8月15日号へ¹⁹⁶⁸年11月15日号はイエス・キリスト自身の警告の言葉をあまり重視しすぎないよう注意すべきだという意味のことを書くにさえずる。

絶対に確実なことが一つあります。それは、聖書預言の成就によってさらに強力な裏付けを得た、聖書の年代表によれば、人類生存の六千年間がまもなく、そうです、この世代のうちに終わるということです！（マタイ、二四ノ三四）ゆえに今は、無関心でいたり、満足感にひたつたりすべき時ではありません。「その日その時を知る者なし、天の使たちも知らず、ただ父のみ知り給ふ」と言われたイエスの言葉をもてあそぶ時でもありません。（マタイ、二四ノ三六）それどころか、今は、現在の事物の制度の悲惨な終わりが足ばやに迫っている事実¹に十分目ざめるべき時です。まちがわなideくください。天の御父ご自身は「その日その時」のいづれを

も知っておられますが、それで十分なのです！〈692、693頁〉

どうすれば「忠実で思慮深い奴隷」にこんなことが言えるというのだろうか。「確かに、私の主人はこれこれのことを言っていたけれども、でもそう深刻に受けとめることはない。むしろ私が今あなたに言うことこそがあなたの導きの導きなのだ」という話なのである。

この点、最もはつきりしていたのは世界本部の奉仕部門であった。ここでは毎月、『わたしたちの王国奉仕』へ後に「わたしたちの王国宣教」と改称という、エホバの証人だけを対象とし、一般人には渡らない刊行物を出している。この1968年3月号は全時間宣教活動（「開拓奉仕」）に入るようにと強く呼びかけ、次のように言う。

残された時間は短いのですから、状況の許す限りこれを行ないたいと思います。兄弟たち、考えてみてください、地上における人類の存在六千年が完結するまでにあと九十ヵ月ほどしかないのです。

同様に、『王国奉仕』1974年5月号へ1974年6月号では、「残された短い時間」について述べたあとで次のように言う。

家や資産を売って、開拓奉仕をしてこの古い体制における自分たちの残りの日々を過ごすという兄弟たちのことをよく耳にします。が、確かにそれは、邪悪な世が終わる前に残された短い時間を過ごす優れた方法です。――ヨハネ第一2・17

多くのエホバの証人がまさにこれを実行した。ある人は店を売り、またある人は仕事を辞め、また家や農場を売り、家族を連れて「より必要が大きいところで奉仕する」ために別の場所に移り、一九七五年まで何とかかなるだけの貯金を頼りとした。

また、年配者の中には保険・証券類を換金した人もいた。千年期が来ればその必要もなくなると考えて手術を受けないことにした人もいた。

そして一九七五年が過ぎると、貯金が底をつき、あるいは病状が悪化する——厳しい現実に取り組んで何とか立ち直らねばならなくなった。

さて、統治体の方では何を考えていたのか。

統治体の年輩のメンバーには、一九一四年や一九二五年の失敗、一九四〇年代始めのことなどを実際に経験した人もいたが、私の見たところでは大多数が「様子を見よう」という態度をとっていた。いい加減にやめておこう、とは言いにくかった。実は組織規模が大変な勢いで拡大していたのである。左上に掲げるのは一九六〇年から一九七五年までにバプテスマを受けた人数の記録である。

ご覧の通り一九六〇年から一九六六年にかけて、増加率はほとんど頭打ち状態である。ところが一九七五年がスポーツを浴びた一九六六年以降、劇的な増加を見せている。

一九七一年から一九七四年にかけ（この頃には私も統治体にいた、エホバの証人の間に期待の気持ちが高まっていた）について統治体のメンバーから懸念の声が聞かれることはなかった。これは正直に言わねばならないが、私自

年	バプテスマを受けた人数
1960	69,027
1961	63,070
1962	69,649
1963	62,798
1964	68,236
1965	64,393
1966	58,904
1967	74,981
1968	82,842
1969	120,805
1970	164,193
1971	149,808
1972	163,123
1973	193,990
1974	297,872
1975	295,073

身も一九六六年に『神の自由の子となつてうける永遠の生命』を読み、ヨベルの千年期の近いことを高らかに謳っているのを初めて目にした時はいささかの驚きと興奮を覚えたし、その後、一九七五年を中心にして回った宣伝活動にまったく関わらなかつたわけでもない。しかし一九六六年から一年また一年と経つにつれ、この一九七五年のことが段々非現実的なものに思われてきた。聖書を読めば読むほどす

べてが的外れであるような気がした。イエス・キリスト自身の言葉と合わないのである。

「その日と時刻についてはだれも知りません。天のみ使いたちも知らず、ただ父だけが知っておられます」

「それゆえ、ずっと見張っていないさい。あなた方は、自分たちの主がどの日に来るかを知らないからです」

「このゆえに、あなた方も用意のできていることを示しなさい。あなた方の思わぬ時刻に人の子は来るからです」

「ずっと見ていて、目を覚ましていなさい。あなた方は、定められた時がいつかを知らないからです」

「父がご自分の権限内に置いておられる時または時期について知ることとは、あなた方のあずかるところではありません」※4

しかし、素晴らしい成長ぶりで喜びに沸いている本部組織にいたのでは、大したことができないわけでもない。せいぜい一九七五年についての記事で私が編集することになったものがあれば表現を和らげようとしたりした位のものである。あるいはまた周りの人との会話や講演などの機会があると右に挙げたような聖句に注意を引こうとしてみた。

一九七四年、ある日曜の夕方、私が妻と一緒に国内の講演旅行から戻ってくると、当時副会長だったおじが部屋にやってきた（眼がひどく悪かったので、毎週我々が『ものみの塔』の研究記事を朗読して聞かせていたのである）。妻はおじに向かって、その週末に私が行なった講演では一九七五年についてあまり興奮しないよう呼びかけたのだと言った。おじはすぐさま、「どうして興奮しなきゃいけないんだい。興奮すべきことじゃあないか」と返した。

統治体のメンバーの中でも、この副会長こそが自分の書いたことについて、そしてそれに基づいて書かれたその他の記事について、一番心から納得しているように思った。一九七五年夏のある夕方、ピーターソン（もともとはパパギロポウロスという名前だったが）という年輩のギリシャ人の兄弟が、いつもの通り我々の朗読に加わっていた。朗読が終わるとおじはピーターソンに言った。「一九一四年の時もちょうどこんな感じだった。夏に入っても何にも起こ

※4 マタイ24・36、42、44、マルコ13・33、使徒1・7より。

らない。で、いきなりバタバタと来て、戦争が始まった。」

それより前、一九七五年に入ろうとする頃、ノア会長がフランス副会長を連れて世界中をまわったことがあった。副会長の講演はどこに行っても一九七五年の話ばかりであった。他の統治体のメンバーは、副会長の講演が絶大な効果を示したことをあちこちの国から聞かされていたので、二人が帰ってくるとすぐ、オーストラリアで録音されたというその講演のテープを聴かせてほしいと頼んだ。^{※5}

その講演で副会長は一九七五年が「大いなる可能性、大変な蓋然性の年」であると言う。ヘブライのカレンダーによるとすでに「太陰暦で一九七五年の五月」に入っており、もう太陰暦でいう七カ月も残されていないと言う。また、このヘブライの年が終わるのはユダヤ暦の新年であるロシュ・ハシヤナ、すなわち一九七五年九月五日であることを繰り返し強調する。

さらに副会長は、それまでにすべてが起こるとすれば非常に多くのことが短期間に起こることになるが、アダムが創造された時とイブが創造された時の時間差を考えると一年程度の誤差が出る可能性もある、と続ける。一九一四年と一九二五年の失敗についても述べ、ラザフォードの「全くばかなことをしてしまった」という言葉も紹介する。であるから協会では「大胆で無茶な予言」はしないようになったとも言う。ところが終わり近くなると、来るべき終結が「何年も先のこと」だろうなどという間違った見方をしないようにと聴衆に向かって呼びかけ、他のこと、例えば結婚であるとか子供を育てるとか、事業を始めるとか大学で何年も工学を勉強することなどに注意を振り向けたりしないようにと言う。

このテープを聴き終わった統治体のメンバーの中には、不安の声もあがった。「大胆で無茶な予言」をしていないにしても結局はやはり予言のようなことを言ってしまったのではないのか。事実、聴衆の興奮にそれが感じられる。

※5 これは一九七五年二月一九日の会議のことである。

統治体の会議で不安の声が聞かれたのはこの時が初めてだった。しかし何もなされず、何の方針も決められなかった。

副会長は一九七五年三月二日のグレアド聖書学校卒業式講演でも同じような内容の話をした。※6

一九七五年は過ぎ去った。一八八一年、一九一四年、一九一八年、一九二〇年、一九二五年、それに一九四〇年代の時と同じだった。協会の一九七五年にまつわる予測がはずれたことで、外部ではずいぶん騒がれた。エホバの証人の間でも何やかやと騒がれた。しかし私としては、いろいろ言われていたことのほとんどが本質をついていないように感じた。

誰かの言ったことが当たったとかはずれたとか、ある団体が当てになるとかならないとか、そのメンバーに良識があるとか騙されやすいとか、そういう問題ではないと思ったのである。本当に重要なのは、そういう予言が究極的に神とその言葉に基づいているかどうかである。人間が予言をし、これは聖書に基づいているのだと言って聖書による理屈付けをし、その上で自分たちは神の伝達「経路」なのだと言断言する。これでその予言がはずれるかどうか。響があるだろうか。神を讃え、神と聖書の信頼性への信仰を深めることになるだろうか。むしろその反対ではないか。聖書にあることを軽視しても良いと考える人を増やそうとしているようなものではないか。人生設計を大幅に変更してしまったエホバの証人も、期待が裏切られたのにも負けず、そのほとんどが何とか立ち直っていった。しかし中には立ち直れなかった人もいる。何にせよ、いろいろな形でかなりの損害があつたのは事実なのである。

一九七六年、つまり広く宣伝されていた問題の年の翌年、統治体のメンバーの中にも協会の間違いを認め、誤った期待感をかき立ててしまったと認めるべきではないかという声が出てきた。しかしまた、いやそれはすべきでない、

※6 『ものの塔』 1975年5月1日号へ1975年8月1日号477頁 参照

そんなことをしても「敵に攻撃材料を与えるだけ」だという声もあった。ミルトン・ヘンシエルは、これについては何も触れずにおくのが良かるう、そのうち兄弟たちも口にしなくなるだろうから、という意見だった。いずれにせよ、間違いを認めようという意見が支持されていないことは明らかであった。この年の『ものみの塔』7月15日号へ1976年10月15日号624-630頁には確かに予想がはずれたことについて触れる記事が出たが、統治体の意見がこうなので、協会側の責任をはっきり認めるようなことを書くのは不可能だった。

一九七七年、間違いを認めるか否かという問題がまたもや会議で取り上げられた。同じような反対意見も出たが、ロイド・バリーが行なうことになっていった大会講演に一言入れることにしようという意見が通った。ところがその後で、統治体のメンバーのテッド・ジャラズとミルトン・ヘンシエルが話をしに行ったらしい。結局、ロイド・バリーが実際に講演原稿を用意した際には一九七五年の話は入っていないかった。私が尋ねてみると、全体の話に合わせられなかったからという答が返ってきた。さらに二年近くが経った一九七九年、統治体でこのことがまたもや取り上げられた頃までには、一九七五年がかなりの「不信感」を生んだということが明らかにになっていた。

本部スタッフの多くが懸念を表明していた。我々にとって一九七五年は頭痛の種だという声もあった。統治体秘書のロバート・ウォーレンは次のように書いた。

「私は三十九年以上にわたって献身したエホバの証人であり、エホバの助けによりこれからも忠実な僕であり続けることでしょう。しかしがっかりしなかったと言えば嘘になります。私は出版物をいろいろと読んで一九七五年についての希望を抱くようになったのですが、それを自分が勝手に誤った結論を得たのだと言われているのです。これは公平だとも誠実だとも思いません。我々は絶対に間違いを犯さないわけではないのですから、不完全ではあっても神を恐れる気持ちのある人間が誤りを犯してしまったら、それがわかった時点で訂正が行なわれるべきであるというのは実に当然のことだと思えます。」

執筆部門のレイモンド・リチャードソンは次のように言った。

「人は謙虚さに引かれ、率直さにこそ信頼を置こうとするのではないだろうか。聖書そのものが率直さの最高の例です。これこそ我々が聖書を信頼する一つの大きな理由です。」

同じく執筆部門のフレッド・ラスクはこう書いている。

「一九七五年にハルマゲドンが来ると断言はしないようにと警告するような条件付きの説明はあつたかも知れませんが、しかし事実、出版物に出た多くの記事は、一九七〇年代半ばに古い体制がエホバの新体制にとって代わられるだろうと十分感じさせるものだったのです。」

奉仕部門のマートン・キャンベルは、こう書いている。

「先日マサチューセッツの姉妹から電話がありました。仕事申中だということでした。その姉妹も旦那さんも病気のためにかかったお金を返済するために働いているのだそうです。一九七五年には終わりが来るだろうという確信があつたために、今となつてはこの体制の中で苦勞に直面するのが大変だと言っておられました。これは我々がお会いする兄弟たちにも多く見られる典型例です。」

同じく奉仕部門のハロルド・ジャクソンはこう言っている。

「今必要なのは、一九七五年は間違ひでしたという文章ではありません。なぜこのことがこれほどまで長く放っておかれたのかについて説明です。非常に多くの人に影響を与えたのですから。今我々には不信感というものに直面しています。これはひどいことにながりがねません。何か言おうというのであれば、はっきりとものを言い、兄弟たちに対して率直で誠実な態度をとるべきです。」

同じく奉仕部門のハワード・ゼンクはこう書く。

「兄弟たちが我々の言い分を聞いて、まるでウォーターゲート事件の隠蔽工作のようだという印象を受けるようなことは避けたい。」

年	活動を報告 している総数	前年度比の 増加率(%)
1970	1,384,782	10.2
1971	1,510,245	9.1
1972	1,596,442	5.7
1973	1,656,673	3.8
1974	1,880,713	13.5
1975	2,062,449	9.7
1976	2,138,537	3.7
1977	2,117,194	-1.0
1978	2,086,698	-1.4

他にも同じような意見を述べた人が何人かいた。皮肉なことに、最も強い批判の意見を言っていた人の中には、かつて一九七五年について熱心で、事態が非常に「差し迫っている」と論じ、先に引用したような記事を自ら書いたり、一九七五年が近づいた時に家や資産を売った人を賞賛する「王国宣教」の記事にOKを出したりした人もいた。一九七五年について最も断定的なことを書いていたのは、奉仕部門の直接の指揮下にある旅行する代表者（巡回監督と地域監督）に多かった。

一九七九年三月六日の統治体会議では、やはり何も言うべきではないという意見が出されていた。そんなことをすれば協会の反対者からさらに攻撃を受けるであろうし、今さら謝る必要もなく、謝ったところでどうなるものでもないというのだった。しかしそう言っている人もそれまでのように強硬ではなかった。これには大きな理由があった。二年間にわたってエホバの証人数に深刻な落ち込みがあったのである。奉仕活動に携わっている人数の年次報告を見るとこれが明らかになる。（表参照）

他の何よりも、この数の落ち込みが統治体のメンバーにとって重要だったらしい。十五対三の多数決で、一九七五年の誤りについての責任が協会にもあることを少なくとも幾分かは認める文章を載せることになった。これは『ものみの塔』1980年3月15日号へ1980年6月15日号16-18頁に載せられた。

間違っていました、まるまる十年にわたって誤った希望を持たせましたと協会側が正式に認めるまでに四年近くかかったのである。しかも本当のことを伝えるそれほど率直な文章が書かれたわけではない。何であれ書かれたものが出されるには統治体全体の承認が必要だったからである。このことが私には良くわかつている。何しろこの私にその記事を書く役目が割り当てられたのである。いつもと同様、その内容は私が書きたいのではなく、それど

ころか兄弟たちにとって知る必要があると思つたことでもない。ただ、統治体に提出した時に三分の二の承認が得られるような内容なのである。

今日では、一九七五年について十年にもわたる宣伝活動があつたことは別に大して重要なことではないとされていゝる。一九一六年にラッセルが書いた「これは何千もの人々にとって励ましとなり、また心清められるものでもあつたので、この人たちは皆、その誤りのためにさえ主を讃えることができる」というあの言葉が、また繰り返し言われているようなものである。

第10章 一九一四年と「この世代」

「寝いすはその上に身を伸べるには短すぎたし、織った敷布も身を包むには狭すぎるからである」 イザヤ28・20

来たるべき一九一四年は終着点である——これが三十年以上にわたるものみの塔協会の年代預言だった。ところが、同じ一九一四年が開始点だったというのが、この八十年來の教義であり、エホバの証人の活動にとって時が「差し迫っている」という励ましの拠り所ともなっている。

現代における宗教組織で、一つの年代にこれほどまでの重要性を持たせ、また依存しているものも他にないだろう。自分たちは神及びキリストの地上における唯一の経路であるというものみの塔組織の主張も、この一九一四年からは切り離せない。なぜなら、その主張によれば、一九一四年にキリストは王国の権を執って「目に見えない臨在」を開始し、その後地上にある多くの宗教団を調査した上、人類の前に自分を代表する組織として、ものみの塔協会に関わる一団を選んだとされているからである。そしてキリストは、この一団を、地上の持ち物を管理する「忠実にして智き僕」級として是認したとされている。ここにエホバの証人の統治体の持つ権威の基礎があり、これにより統治体は「忠実にして智き僕」級の管理機構だとされているのである。一九一四年にからむ教義を取り去ると、統治体の権威の基礎はほとんどなくなってしまう。

これが統治体にとって頭痛の種であることは明らかにわかる。この成就のために残された時間は非常に短くなってきており、したがって短期間にずいぶんたくさんのが起こることになってしまいつつある。年が過ぎるごとにこ



『ものみの塔』1984年5月15日号 [英語版] <「1914年 決して過ぎ去ることのない世代」とある>

の頭痛は重くなる一方である。

一九四〇年代以来、ものみの塔出版物では、「あなた方に真実に言いますが、これらのすべての事が起こるまで、この世代は決して過ぎ去りません」というイエス・キリストの言葉が一九一四年から現実のものとなり始めたとしている。「一九一四年の世代」という言葉が使われ、「終わりの日の預言」が成就し、新秩序が始まる時を指すのに使われた。

一九四〇年代当時、「世代」というのは三十年か四十年程度の期間を指すものとされていた。したがって残された時間がいかに少ないかが主張された。この傍証としての聖書引用も可能であった(例

えば民数記32・13)。

ところが一九五〇年代になると、この期間が過ぎ去ってしまった。そこでこれを引き延ばそうと、『ものみの塔』1952年9月1日号542―543頁では世代期間の定義が変わり、この時初めて「世代」の示す期間は人の一生であるという定義になった。したがって三十年や四十年ではなく、七十年、八十年、あるいはそれ以上の期間となったのである。

これで、出版物に公表した予言が成就するための時間がかかり稼げたように見えた。ところがさらに年月が経つにつれ、「一九二四年の世代」の定義をさらに変更する必要があるが生じてきた。以下の引用は、『目ざめよ!』1968年10月8日号(13、14頁)である。傍線部分を特にご覧頂きたい。

イエスは明らかに、「終わりの日」が始まった時に起こったことを理解するのに十分な年齢の人たちについて言っていたのです。イエスは、「終わりの日のしるし」が現れた時に生きていた人たちの何人かは、神がこの事物の体制を終わらせる時にも生きていたろうといったのです。

一九一四年に起こったことの重大さがわかる年齢を仮に十五歳だとしても、「この世代」で一番若いその十五歳は現在七十歳になっています。ですからイエスが言っていた世代の人たちの大多数はもう死亡してしまっているのです。残された者たちも老齢に近づいています。そして忘れないでください、イエスは、この邪悪な世の終わりが来るのはその世代が死亡していなくなってしまう前だと言っているのです。これにより、預言された終結までに残された年はそれほど多いはずがないということがわかります。

これが公にされたのは三十年以上も前のことである。ここで強調されていたのは一九一四年の世代がもうすぐ終わりつつあること、したがってほとんど時間が残されていないことであつた。一九六八年当時にエホバの証人の誰かが、あと三十年は持つでしょうなどと言おうものなら、「態度が悪い」「信仰が弱い」とされていたことであろう。

一九七五年が過ぎ去ると、強調点が変わった。今度は一九一四年の世代というのが普通考えるほど短くもなく、むしろかなり長いものであり得ることになったのである。

かくして『ものみの塔』1978年10月1日号へ1979年1月1日号32頁では一九一四年の時点で「起こったことを理解して目にした者たちではなく、この年に起こったことを「観察できた」者たちの話になっている。単に観察するのと理解するのとはずいぶん違う。したがって「この世代」にいる人の最低年齢を引き下げることができるわけである。それから二年後の『ものみの塔』1980年10月15日号へ1981年1月15日号31頁でもこの流れを引き継ぎ、出来事が「人の記憶に永続的な印象」を生み出し始めるのは十歳だろうという『USニューズ・アンド・ワールドレポート』誌の記事を引用している。この記事では、もしこれが本当なら「今日、『第一次世界大戦に関する思い出』を持っている米国人は千三百万人を超すことになります」としている。

「思い出」の対象になる年齢なら、「理解」できる年齢より引き下げることができる。「理解」できる年齢は、先に引用した一九六八年の『目ざめよ!』によると十五歳ということになっていた（さらによく考えてみれば、一九一八年

まで続いた第一次世界大戦にアメリカが参加し始めたのは一九一七年である。すると先ほどのニュース誌にあった十歳というのも、必ずしも一九一四年に当てはめることはないのである。

こういう具合に一年か二年の違いを少しずつ出そうとしたわけだが、実際のところ死亡率が常に最も高いのは高齢者であるから「一九一四年の世代」はどんどん少なくなっていた。このことは統治体でもよくわかっていて、何度も会議の議題に上ったのである。

まず一九七八年六月七日の統治体会議で取り上げられた時の経緯はこうである。統治体のメンバーのアルバート・シュローダーが、アメリカの人口統計報告をあらかじめメンバーに配っていた。それによると、一九一四年に十代を越えていた人のうち一九七八年現在で存命中なのはその一%にも満たないとのことだった。しかし、より注意を引いたのは、シュローダーがヨーロッパの国々を訪れていた時口にしていたことである。

すなわちブルックリン本部に伝えられてきたところでは、シュローダーが他の人にこんな説を語っていたというのである。マタイ第24章34節に出てくる「この世代」というイエスの言葉は「油そそがれた者たち」について言われたものであって、このうちの誰かが生きている限りはその「世代」は過ぎ去らない。――これはもちろん協会の教えに合わないし、統治体の承認も受けていない内容である。

そこでシュローダーが帰国してくると、早速会議で取り上げられたわけである。結局シュローダーの言っていたことは却下され、次の『ものの塔』の「読者からの質問」欄でこれまで通りの「この世代」についての教義を再確認しておこうと決まった。^{※1} 面白いことに、ヨーロッパにいた時に協会の教義に合わない意見を表明していた統治体のメンバー、すなわちシュローダー本人に対しては何の非難も叱責もなかった。

※1 『ものの塔』 1978年10月1日号へ1979年1月1日号 参照

「この世代」のことは一九七九年三月六日と十一月一日の会議でも取り上げられた。一九一四年のことが話題になっているのだからと思い、私はスウェーデンの長老、ジョンソンから送られてきた報告のうち最初の二十ページをコピーしておいた。これは第7章でも紹介したが、年代計算の歴史を詳細にたどり、二千五百二十年という計算と一九一四年という年代がどこから来たのかを明らかにした調査報告である。コピーは統治体のメンバーに一部ずつ配った。しかしちょっとした感想を述べた人があった位で、皆これについて話し合おうとはしなかった。

ライマン・スウィングルは、執筆部門のリーダーとして、すでにこの調査報告のことをよく知っていた。スウィングルは一九二二年の『ものみの塔』に断定的で執拗な書き方があったことに皆の注意を引き、また実際にその頃の記事の一部を読んで聞かせた。自分は一九一四年には幼かった(当時四歳ぐらい)のでその頃の記憶はほとんどない。^{※2} しかし一九二五年のことについては家で話し合ったことを覚えている。一九七五年については身をもってよく知っている。また別の年代で振り回されるのは自分としてはもう「免だ」というのがスウィングルの言い分だった。

私は、協会の紀元前六〇七年という開始年代にまったく歴史的な根拠がないことを指摘した。また、一九一四年について、及びその当時生きていた世代についてはこういう疑問を呈した。仮に協会の言ってきたことが正しいとすると、イエスの次のような言葉が一九一四年に生きていた人たちについて当てはまると言えるのか。「これらのすべてのことを見たなら、彼が近づいて戸口にいることを知りなさい」「これらの事が起こり始めたら、あなた方は身をまっすぐに起こし、頭を上げなさい。あなた方の救出が近づいているからです」。協会の出版物ではこれが一九一四年当時存命していたクリスチャンに対して当てはまり始めて今日に至るとしている。しかし一体その存命していた人のう

※2 当時統治体のメンバーで一九一四年に十代を過ぎていたのはフレッド・フランス(故人)だけで、二十一歳だった。現行のメンバーではカール・クラインとケアリー・バーバーが共に九歳、ライマン・スウィングルが四歳、アルバート・シュローダーが三歳、ジャック・バーが一歳だったし、ロイド・バーリ、ダン・シドリックス、ミルトン・ヘンシエル、テッド・ジャラズ、ゲリト・レッシュが生まれたのは一九一四年より後のことである。

ちの誰に当てはまるのか。当時五十歳の人であれば、今（つまりこの会議が行なわれていた一九七九年の時点で）生きていても百十五歳である。四十歳だった人でも百五歳になっている。三十歳でも九十五歳であり、二十歳になったばかりだったとしても一九七九年現在では八十五歳になっている（今日生きておれば百歳をゆうに越えている）。

「頭を上げなさい、あなた方の救出が近づいているからです、戸口にいることを知りなさい」という切迫した言葉が一九一四年当時の人々に本当に当てはまり、この人たちが終結を目にすることができるのであれば、これはなかなか刺激的な話ではあるが、しかし条件が付かないといけなことになる。「そう、まさにあなたが目にする事ができるでしょう——今あなたがかなり若く、しかもずいぶんと長生きすればの話ですが」。私は自分の父を実例として挙げた。一八九一年生まれで一九一四年には二十三歳の若者だった父は、人生七十年ないし八十年と聖書にあるのも越え、八十六歳まで長生きをした。もう死んで二年になるが、もちろんそれまでに予言されていた事柄を目にするとはなかった。

ここで私は仲間のメンバーにこう尋ねてみた。マタイ24章33、34節にあるイエスの言葉が向けられているのは結局一九一四年の段階で十代かそれ以下だった子供たちしかないことになるが、これにどれほどの意味があるのだろうか。しかしはっきりした返答はなかった。

ところがそれでも、協会の「この世代」の教義も一九一四年もそのままにしておくべきだというメンバーは多かった。ロイド・バリーの意見は次の通りだった。この一九一四年について統治体内で疑問がわくというのは驚きだ。ライマン・スウィングルの持ち出してきた一九二二年の『ものみの塔』の内容については、別に気にかけることはまったくなく、あれが当時の兄弟たちにとっての「現在の真理」だったのである。^{※3} 一九一四年の世代が高齢になって

※3 「現在の真理 (present truth)」という表現はラッセル・ラザフォード時代によく使われたものだが、これはペテロ第二・12の翻訳ミスによるものである。『新世界訳』ではより正確に「あなた方のうちにある真理」と訳されている。

しまうことについては、ソ連などでは百三十歳まで生きる人がいる地方もあるのだから問題ない。とにかく一致した見解を兄弟たちに示してあげるべきである、そうすれば差し迫っているという気持ちを持続できる。このロイド・バリーの意見に他のメンバーも賛意を表明した。

少し後で司会者に発言権をもらった私はこう言った。今日「現在の真理」である教義がそのうち「過去の真理」になるのであれば、その「過去の真理」の代わりに出てくる「現在の真理」もそのうち「未来の真理」が出てくればなくなってしまう得ることになるのではないか。――私としては、こんな風に「真理」という言葉が使われるのでは真理の意味がなくなってしまうという気持ちだったのである。

するとメンバーの中にこんなことを言う人が二、三現れた。もし現行の教義が正しいものでなければ、例のイエスの言葉はどう説明すればよいのか。どうやらこの質問は私に向けられていたようだったので、私はこう答えた。聖書にも合うし、現状にも合うような説明はあるだろう。しかし何であれこういうことはその場の思いつきのものではない。聖書ではならず、きちんと調べて検討したものでないといけない。これのできる兄弟たちもいると思う。しかしこれにかかるためには統治体の承認が必要かと思う。統治体としてはやってみても良いと思われるだろうか。こう尋ねたのだから返答はなく、したがって質問も取り下げとなった。

会議の終わりでは、二、三の例外を除いては全員が一九一四年と「この世代」についての教義は存続するべきだという意見を示した。執筆部門調整者のライマン・スウィングルはこう言った。「わかりました、皆さんそうなさりたいのならそれでよろしいでしょう。でも少なくとも皆さん、一九一四年に関しては、再臨派から全部もらっているというのはご存知ですよね。」

私にとって最も不快だったのは、兄弟たちに向かって一九一四年に基づく予言を絶対信頼しろと言う一方、協会責任者の方では自信がないと明言していることだったのかもしれない。

注目すべき例を挙げよう。一九七五年二月一九日の会議において統治体でフレッド・フランズの一九七五年に関する講演テープを聴いた際、年代預言は確実ではないという話になった。その時、当時会長だったノアはこう発言したのである。

「私の知っていることもある。エホバが神であること、キリスト・イエスが神の子であること、イエスは我々のためにその命を贖いとしてくれたこと、復活があること。しかしまた、あまりよくわからないこともある。一九一四年、これはよくわからない。我々も一九一四年の話はずっとしてきている。正しいかもしれないし、そうであってほしいとも思う。」※4

その会議の問題になっていたのは一九七五年であつたので、それよりはるかに重要な一九一四年についてこんな意見が出るというのは驚きだった。しかも前述の通り、ノア会長はこれを誰かに個人的に話したというのではなく、統治体を前にした会議の席で発言したのである。

一九一四年についての本格的な話し合い（これは一九七九年一月一日に統治体全員が出席して行なわれた会議である）に先立ち、統治体の執筆委員会では一九一四年を打ち出し続けて良いものかという話し合いをしていた。※5 この時、少なくともこの年代を「強く出す」必要はないのではないかという意見が出た。この時、確かカール・クラインがこんなことを言った。——時々使うこんな手がある。ある教義についてしばらくの間黙っておいて、それから変更を加えるとあまり目立たない。

※4 これはノア会長がその場で思いついて言ったことではないようである。ノアの側近の一人、ジョージ・カウチも同じことを、言葉までそっくりに言っていたからである。この二人を知っているので言えるのであるが、この場合はカウチがノアの意見をそのままらっていたのだと思う。

※5 当時の執筆委員会のメンバーは、ロイド・バリー、フレッド・フランズ、レイモンド・フランズ、カール・クライン、ライマン・スウィングルの五人だった。

執筆委員会では、まさにこの意見が全員一致で選ばれた。ところがこの方針はすぐに消えてしまった。一九七九年一月一四日の統治体会議では、一九一四年をこれまで通り押し続けることに多数決で決まったからである。

一方、一九一四年についての疑問はブルックリン本部だけのことではないこともはっきりした。私が一九七九年の秋に西アフリカを回っていた時のことである。ナイジェリアの支部委員会のメンバー二人、それに長年そこで奉仕活動をしている人の三人に案内してもらい、支部の中心となる新しい建物の敷地として協会が購入した土地を見学に行った。その帰り道、新しい場所に移るのはいつ頃になりそうですかと尋ねた。すると、まず土地を整備して建築計画を承認してもらい、それから許可が下りて、しかる後に建て始めるのだから、一九八三年になってやっというところでしょう、という答だった。

そこで私は聞いてみた。「この兄弟たちから、一九一四年以来の年月の長さについて何か聞かれることはありますか。」一瞬の沈黙があった後、支部の調整者が言った。「いや、ナイジェリアの兄弟たちはまずそんなことを聞いてりしません。聞くのは我々です。」間髪を入れず長年奉仕活動をしている人が言った。「フランス兄弟。イエスが『この世代』と言っていたのはあの当時エルサレムの崩壊を目にした人たちのことだった、なんてことはあるんでしょうか。そうだとすれば、すべてがきっちりおさまるように思うんです。」

つまり、現行の教義ではすべてがきっちりおさまらないと言うのである。その時私は、確かにそういう可能性もあるだろうけれども、それ以上のことは言えないだろう、とだけ答えておいた。この会話は帰国してから統治体に報告した。かなりの権限を与えられ、尊敬を受ける位置にいる人たちが疑問を持っていることの証拠にもなるだろうと思われたからである。ナイジェリアであの二人が言ったこと、そしてその言い方からも、私が行く前から自分たちで話し合っていたのは明らかだった。

さて、私がアフリカから帰国してまもなく、一九八〇年二月一七日の統治体会議でのことである。ロイド・バリーは、一九一四年と「この世代」についての教義はやはり重要だろうと述べた。ライマン・スウィングルは、一九七八

年に「読者からの質問」に出した記事へ日本語版では1979年1月1日号^{※6}では兄弟たちに納得が得られなかったようだと
言った。アルバート・シュローダーは、ギレアデ学校や支部委員会のセミナーで兄弟たちが言ったところによると、
一九八四年が新しい年ではないかとささやかれているようだ^{※7}と報告した。一九八四年は一九一四年から七十年後だとい
うのである（七十という数字がどうやら何か特別のものとされていたものらしい）。このことについては次の会議で検
討すると決まった。^{※6}

話し合いがここまで進んだところで、統治体全員に文書のコピーが配られた。これはアルバート・シュローダー（司
会者、カール・クライン、グラント・スーターの三人からなる司会者の委員会が書いた、極めて不可思議な文書で
ある。結論から言うと、この三人は「この世代」が当てはまるのは一九一四年からではなく、驚くべし、その四十三年
後の一九五七年からだと言うのである。

次ページにその時配られた文書をそっくりそのまま紹介する。

一九五七年は旧ソ連のスプートニク号が初めて宇宙に打ち上げられた年である。司会者の委員会はこれを次のイエ
スの言葉が成就する始まりとして解釈できると思ったわけである。

「……太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう」^{※7}

この解釈に従って、結論はこうなる。

「この世代」は一九五七年以降の、知識を持って生存する現代の人間を指すことになる。

※6 信じない人もいるようだが、統治体で一九八四年という年代をまじめに取り上げたことはない。唯一話に出たのがここで紹介した会議の
時で、しかもこれは噂話の報告の域を出なかったたのである。

※7 マタイ24・29

To Members of the Governing Body -- On Agenda for Wednesday Mar.5 '80

Question: What is "this generation (genea)?" (Mt. 24:34; Mr. 13:30; Luke 21:32)

TDNT (many Commentaries) say: genea "mostly denotes the sense of contemporaries." Vol. 1, p. 665

Most all say genea differs from genos, genos means offspring, people, race. See TDNT Vol. 1 p. 685 (genos at 1 Pet. 2:9)

Answer may be tied to question on Mt. 24:33. What is meant by: "When you see all these things"?

Lange's Commentary (Vol. 8) suggests that "these things" do not refer to C.E. 70, nor the parousia 1914 but to vss. 29,30 the celestial phenomina that we now see began with the space age 1957 onward. In that case it would then be the contemporary generation of mankind living since 1957.

Three Sections

Lange's Commentary divides Matthew 24th chapter into "three cycles."

His 1st cycle-- Matt. 24:1-14

2nd cycle-- Matt. 24:15-28

3rd cycle-- Matt. 24:29-44 (synteleia or conclusion)

(See Vol. 8 pp 421, 424 and 427)

Based on Matt. 24:3 question in three parts.

The Watchtower and God's Kingdom of a Thousand Years (ka)

Have now also divided Matthew 24 into three parts so to speak

(1) Matt. 24:3-22 Has parallel fulfillments in 1st century and today since 1914. (See w 75 p. 273, ka p. 205)

(2) Matt. 24:23-28 Period into Christ's parousia of 1914. (See w 75 p. 275)

(3) Matt. 24:29-44 "Celestial Phenomina" have literal application since the space age began in 1957 and onward to include Christ's erkhomenon (coming as the executioner at the beginning of the "great tribulation.") (See w 75 p 276 par. 18; ka pp 323 to 328)

"All these things" would have to throw back in the context to the nearest items listed in the composite sign, namely, the celestial phenomina of verses 29 and 30.*

If this is true: to
Then "this generation" would refer/contemporary mankind living as knowledgeable ones from 1957 onward.

*Confirmed in thought by C.T.Russell in Berean Commentary, p. 217: "Genea, people living contemporaneously which witness the signs just mentioned." Vol. 4 p. 604.

Chairman's Committee, 3/3/80

統治体のメンバー各位 1980年3月5日議題について

「この世代（ゲネア）」とは？（マタイ24:34；マルコ13:30；ルカ21:32）

TDNT（その他註解書の多く）によると：ゲネアは「同時代者の意であることが多い」
第1巻 p.663

ゲネアはゲノスとは違うとするものがほとんど。ゲノスは子孫、人々、人種の意。
TDNT第1巻p.685参照。（ペテロ第一2:9のゲノス）

この答はマタイ24:33に関連か。「これらのすべてのことを見たなら」とは？

ランゲ註解（第8巻）によると、「これらのこと」が指しているのは西暦70年でもなく、1914年のパルーシアでもなく、29節、30節の天体現象であり、これは1957年の宇宙時代の幕開け以来目にしている。すると問題の世代は1957年以来生存している現代の人類ということになる。

三区分

ランゲの註解ではマタイ24章を「三つの周期」にわけ

第1周期：マタイ24:1-14

第2周期：マタイ24:15-28

第3周期：マタイ24:29-44（シンテレイア、すなわち終結）

（第8巻pp.421, 424, 427参照）

マタイ24:3にある質問に基づいて三つに分けられている

『ものみの塔』と『神の千年王国』でもマタイ24章をいわば三つに分けている

- （1）マタイ24:3-22 1世紀の成就と1914年以来の今日の成就が対応している（も75 p.273, 千年 p.205）
- （2）マタイ24:23-28 1914年のキリストのパルーシアに至る期間（も75 p.275 参照）
- （3）マタイ24:29-44 「天体現象」が文字通りの成就、1957年以来宇宙時代が始まっており、キリストのエルコーメノン（「大患難」の始めに執行人としてやってくる）（も75 p.276 18節、千年 pp.323から328参照）

「これらのすべてのこと」はこの三つのうち文脈上一番近いものだろうから、29、30節の天体現象になる。＊

もしこれが正しければ「この世代」は1957年以降の、知識を持って生存する現代の人間を指すことになる。

＊『ピリアン註解』p.217のラッセルの考えで確認：
「ゲネア、同時代にあって、すぐ前に示したるしを目撃する人々」第4巻p.604

司会者の委員会 1980年3月3日

この三人は一九一四年をやめようと言っていたのではない。こちらはこちらで「異邦人の時の終わり」として残るのである。ただ「この世代」が当てはまるのは一九五七年からだといふのである。

一九一四年の世代がその数を急速に減らしていることを考えれば、この新しい解釈は、ソ連のどこかに百三十歳まで生きている人がいるとか言うよりは助けになるかもしれない。何しろ一九一四年から数え始めるのに比べて、「この世代」の指す期間を四十三年分ずらせるのである。

統治体では、いかなる委員会であれ何かを提案するに際しては委員全員の一致が必要とされている（一致が得られない場合はそのまま統治体に提出し、その決定に委ねる）。したがって、この一九五七年についての新しい提案というのは司会者の委員会の三人全員が納得したものなのである。

今、これについて尋ねたとしても、「まあ、あれは単なる提案さ」という答えが返ってくる程度だと思う。それはそうかもしれないが、それでも会議における真面目な提案だったのである。アルバート・シュローダー、カール・クライン、グラント・スーターの三人がこういう提案を統治体につけてきたからには、この提案を受け入れてほしい、変更を加えてほしいと思っていたはずである。協会で長年教義となっている「この世代」のこと（一九一四年から開始というものを本当に心から堅く信じているのであれば、あんな新解釈を持ち出したりはできなかっただろう）。

統治体で三人の新提案が承認されることはなかった。奇抜だという意見が多かった。それでもシュローダー、クライン、スーターという統治体のメンバーがこれを真面目な提案として提出したのは事実である。つまり明らかにこの三人は現行の教義に納得していなかったのである。

一九一四年、及び「一九一四年の世代」についてこれほどはっきり意見が分かれていたにも関わらず、大胆で断定的な内容はあいかわらず出版され続けた。これは聖書的に打ち立てられていると「預言者」組織が言うのである。エホバの証人はすべてこれを信じ、また世界中で人々に宣教して回らねばならない。一九一四年の世代がいなくなっていくという懸念を押さえようとして「この世代」の人々の年齢を十歳まで引き下げようとする記事については先ほど

も紹介した。この同じ『ものみの塔』1980年10月15日号の31頁へ1981年1月15日号31頁にはこんなことも書いてある。

世界のすう勢や聖書預言の成就から見て、この世界の邪悪な体制が世紀の変わり目まで続く可能性は非常に少ないように思われますが、たとえそれまで続いたとしても、第一次世界大戦の世代は依然として残っていることでしょう。しかし、その数が減少していることは、「事物の体制の終結」が急速にその終わりに向かっていることを示すもう一つの徴候です。

これが書かれたのは一九八〇年である。それから二十年後の「世紀の変わり目」の時点では、一九一四年に十歳だった子供も九十六歳である。それでも生きているものはいらう、だからイエスの言葉が成就するのにはこれで十分というのである。そしてもちろんこれは、イエスの言葉が十歳の子供に当てはまるとしてのことである。これは、これほど無理をしても「一九一四年の世代」を捨てたくないという協会の態度を示している。

さらに何年かが経過すると、十歳の子供の話は一切出てこなくなり、その代わり「一九一四年に生きていた人」というような表現になった。こうすれば無論赤ん坊でも含まれる。しかし一九九〇年代に入り、さらに二〇〇〇年に近づこうというのだから、この「理解の調整」も長く続くはずがなかった。一九一四年に生まれた人も二〇〇〇年になれば九十歳に近づくのである。

ここで私にはつきり言えるのは、統治体内部で行なわれているこういう理屈付けはとにかく無茶だと感じられたということがある。悲劇的でもある。年代預言が世界中に広められ、これは確実だとされる。みんな自信を持ってそれを当てにして良いし、人生設計もそれに合わせることができ、いや合わせるべきだ、と言われる。ところがこれと言っている統治体の方は、メンバー全員が心から本当にそう思っているわけではないとわかっている。もつとも協会が今まで何十年にもわたって行なってきた年代設定とその変更の歴史を振り返ってみれば、この態度もそれほど不思議ではないのかもしれない。

さらに途方もないと思ったことがある。司会者の委員会のメンバー、つまりアルバート・シュローダー、カール・クライン、グラント・スーターが、「この世代」に関する新提案を出してから二カ月と経たないうちにやったことである。この三人は、キリストの臨在が一九一四年に始まったという教義を重要教義リストに載せたのだが、この重要教義リストというのは、「背教」の罪があるかどうか（したがって排斥に値するかどうか）を一人一人（本部スタッフのメンバーも含めて）テストするためのものだったのである。その少し前までは当の本人たちが「この世代」について、すなわち一九一四年の教義について、疑問を呈していた。これが自分たちでもわかっていてこういうことをしたわけであるが、これについては次の章で述べることになる。

ものみの塔協会が「一九一四年の世代」を押し進めた半世紀を通じて、この一九一四年の世代期間は、ゆったり休むには短すぎる寝台のようであった。またこの「寝台」という教義を包むための理屈付けは狭すぎる夜具のようであった——冷たい現実から身を守ることはできないのである。

統治体では数多くの調整を行なったため、それ以上の調整の余地がなくなってきた。「この世代」が一九五七年に始まるとするシュローダー、クライン、スーターの提案が採用される見込みは薄かった。また、「この世代」は「油そそがれた者」級に適用されることにする、というシュローダーの案もあった（この案は組織内部で長年何となく話題になっていた）。この利点は、自分は「油そそがれた者」だと決める人（中にはかなり若い人もいる）が毎年のように出るため、「この世代」の期間がいくらでも延長できるところにある。

他にもまだ手はあった。エルサレム陥落が協会の言う紀元前六〇七年よりも二十年後であるという歴史的な証拠があるのだから、これを認めればよい。すると異邦人の時は（協会の二千五百二十年という解釈を使えば）一九三四年頃に終わってくれる。しかし一九一四年という年代そのものがあまりにも重要になってしまっており、またすでに見た通り教義全体に一九一四年と連動している部分がかなり大きいので、これが採用される見込みも薄かった。

そんな中、『ものみの塔』1944年2月15日号へ1944年2月15日号で、さらなる「理解の調整」が始まった。まず「太陽と月と星にしるしがあり、……諸国民の苦悶がある」というイエスの言葉が適用される時期は、一九一四年だったのが「大患難」が始まってからの時点に移された。同様に、「四方の風から選ばれた者たちを集める」のは、一九一九年以降のこととされていたのが未来の話になり、これも「大患難」が始まってからの時点に移された。変更を受けた点は、いずれも五十年ほどの間ずっと教義として説かれていたものである（例証は数限りなくあるが、例えば『ものみの塔』1946年7月15日号参照）。

これらの変更は「新しい光」として打ち出されているものの、教義としては、ものみの塔組織が「キリスト教世界の学者たち」として軽蔑している外部の学者がずっと昔から言っている内容に近づいた形になっている。

本書の一九九四年九月版（第八刷）では、この『ものみの塔』1944年2月15日号へ1944年2月15日号の記事を取り上げ、マタイ24章の内容が未来に移され、来るべき「大患難」開始の後になったことを紹介し、次のようにも書いた。

ここで最も注目すべきは、『ものみの塔』が常に繰り返すマタイ24章34節とルカ21章32節の「この世代」という言葉がこの二つの記事においてはまったく出てこないことである。あれほどあつたものがないので非常に目立つ。協会がマタイ24章29-31節をこれから来るべき「大患難」の開始後のことだとしながら、一方でその三節後に出てくる「この世代」についてのイエスの言葉を一九一四年以降のことだと言いつづけられるかどうか、これは難しいところである。しかしすでに見た通り、統治体の方では「この世代」という言葉（そして「この世代」は「これらのすべての事が起こるまで決して過ぎ去りません」という言葉）が一九一四年から年月が経つにつれて段々と重荷になってきているのだから、ここから逃れたいと思っているのであろうことは十分考えられる。

ここで見た協会側の新しい解釈が何らかの準備であつて、これから「この世代」という言葉について決定的な変更につながっていくのかどうか、これは様子を見なければ何とも言えない。しかし間違ひなく言えることは、一九一四年が「終わりの日の始まり」だということをそのままにしておいて、「この世代」の方をうまく一九一四年から引き離すのが一番の逃げ道だということである。すでに述べた通り、協会側としては「一九一四年」という年代を完全に放棄してしまうと、これにつながっている教義もすべて土台を失ってしまうことになる。しかし「この世代」さえ何とか一九一四年から引き離し、いつだかわからない未来のことにしてしまえば、

二〇〇〇年が来ようが二〇一四年が来ようが何とか理屈は付けられる。特にエホバの証人は「思慮深く忠実な奴隷級」並びに統治体
が言うことは何でも受け入れるようにという訓練を受けているのだからなおのことである。

すでに述べた通り、これを本書一九九四年九月版に載せた。ところがその十三ヵ月後、『ものみの塔』1995年11月1
日号へ1995年11月1日号にはまさにその通りの記事が出た。統治体にとって一番の「逃げ道」として挙げていた通り、
「この世代」（マタイ24・34）を一九一四年から切り離し、しかしその一方で一九一四年は聖書的に重要な年だとして
いるのである。

「世代」という言葉に新しい定義を与えるというのがその方法である。七十年ほど前に『黄金時代』が1926年10月20
日号で「この世代」についてのイエスの言葉を一九一四年に結びつけた（これはそれ以降の『ものみの塔』でも同様で
ある。それから二十五年ほど後の『ものみの塔』1951年6月1日号（335頁）には、一九一四年に関連して「したがって
我々の世代というのは、ハルマゲドンも含めてこれらすべてのことが始まり、また終わるのを目にするであろう世代
なのです」とある。1951年7月1日号（404頁）でも、「この世代」が一九一四年に関連づけられていて、マタイ24章34
節については次のように言っている。

これらの言葉の持つ実際の意味は、まったく疑問の余地なく、マルコ8・12や使徒13・36にあるような「世代」の普通の意味であっ
て、つまりある時に存命している人たちのことです。

またこれに続けてこうも言う。

したがってこの意味するところは、ある世代が一九一四年からすべてが成就されるまでは決して過ぎ去ることはない、それも苦しみ
の大いなる時のただ中において、ということなのです。

この時以降四十年以上ずっと、ものみの塔出版物はマタイ24章34節の「世代」が時間の意味であると言い続けたの

である。一九一四年の世代の人たちが高齢を迎えていくことが何度も取り上げられ、残された時間が短いことの明らかな証拠だとされた。

ところが今や定義が変わり、「世代」には、限定された期間だとか特定の開始時点を持つというような時間的な意味がなくなった。代わりに今度は、例えばイエスの時代の「邪悪な姦淫の世代」に見られるような、性質に基づいた質的な意味を表すことになったのである。そこで「この世代」は「キリストの臨在のしるしを見ながらも自分たちの道を改めない、地のもろもろの民のこと」であり、したがってハルマゲドンで滅ぼされるに値する者たちであることになった。

それでも一九一四年がなくなったわけではない。これがなくては協会の教義体系が揺らぎ、いわば看板が失われてしまう。一九一四年は今まで通り、キリストが天で王座についた年、すなわち目に見えない再臨の始まりの年であり、また「終わりの日」ないし「終わりの時」の始まりであるともされている。また、「この世代」の新定義においても、いささか間接的にはあるが、一九一四年が出てくる。つまり、「キリストの臨在のしるし」（滅びる民はこれを目にしても拒んだり無視したりするというのだが）が一九一四年以降世界中で目に見えるようになったことになっているのである。

要するに大きな違いは何かというと、「この世代」の一員である人間が一九一四年の時点で生まれている必要はなくなったのである。いつでも、誰でも、キリスト臨在のしるしとやらを見ることができる。一九九〇年代に初めて見たというでも「この世代」の一員になれるし、それどころか第三千年期に見るのでも構わない。こうすれば「この世代」はいつからでも始まることになり、一九一四年からかなりの年月が経ってしまったとか、その当時生きていた人がどんどん少なくなっているとかいう、困ったことを説明する必要がほぼなくなる。

一九八二年から一九九五年一〇月二二日まで、『目ざめよ!』誌の発行人欄には「本誌は、一九一四年の出来事を

目ざめよ！

「目ざめよ！」誌が発行されている理由 「目ざめよ！」誌は家族全体を啓発するための雑誌です。本誌は今日の諸問題に対処する方法を示します。またニュースを伝え、様々な国の人々について述べ、宗教や科学について考察します。しかし、それだけではありません。物事の真相を探り、現代の出来事の背後にある真意を指摘します。それでも政治的には常に中立を保ち、ある人種をほかの人種より高めることはしません。またきわめて重要な点として、本誌は、1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらすという、創造者の約束に対する確信を強めます。

もっと多くの情報を得たいと思いませんか。5ページにある住所からご都合のよいものを選び、ものみの塔あて、手紙でお知らせください。「目ざめよ！」誌の発行は、自発的な寄付によって支えられている世界的な聖書教育活動の一環を成すものです。

本誌では、特に注記のない場合、「新世界訳聖書—参照資料付き」が用いられています。

Awake! semimonthly, October 22, 1995, Vol. 76, No.20 1995年10月22日発行、通巻76巻（復刊40巻）、第20号 Printed in Japan JAPANESE EDITION

目ざめよ！ 1995年10月22日

目ざめよ！

「目ざめよ！」誌が発行されている理由 「目ざめよ！」誌は家族全体を啓発するための雑誌です。本誌は今日の諸問題に対処する方法を示します。またニュースを伝え、様々な国の人々について述べ、宗教や科学について考察します。しかし、それだけではありません。物事の真相を探り、現代の出来事の背後にある真意を指摘します。それでも政治的には常に中立を保ち、ある人種をほかの人種より高めることはしません。またきわめて重要な点として、本誌は、現在の邪悪で不法な事物の体制に取って代わろうとしている、平和で安全な新しい世についての創造者の約束に対する確信を強めます。

もっと多くの情報を得たいと思いませんか。5ページにある住所からご都合のよいものを選び、ものみの塔あて、手紙でお知らせください。「目ざめよ！」誌の発行は、自発的な寄付によって支えられている世界的な聖書教育活動の一環を成すものです。

本誌では、特に注記のない場合、「新世界訳聖書—参照資料付き」が用いられています。

Awake! semimonthly, November 8, 1995, Vol. 76, No.21 1995年11月8日発行、通巻76巻（復刊40巻）、第21号 Printed in Japan JAPANESE EDITION

目ざめよ！ 1995年11月8日

見た世代が過ぎ去る前に平和で新しい世をもたらすという、創造者の約束に対する確信を強めます」と書かれていた。ところが1995年11月8日号へ1995年11月8日号をもって一九一四年に関することはすべて消えてしまった。これは教義の変更を最も明確に示すものである。「創造者」が一九一四年に関する「約束」を破ったという形なのである。

この変更がエホバの証人にどのような影響をもたらすかはまだわからない。恐らく長年のエホバの証人ほどこれを深刻に受けとめると思う。何しろ神の約束が完全に果たされるという希望が実現するまでは死なないだろうと思っているのである。箴言13章12節にもこうある。「望みを得ることが長びくとき」「延期される期待」（新世界訳）は、心を悩ませます。願いがかなうときは、命の木を得たようだ（ヘ口語訳）。現在こういう人たちが心を悩ませているとすれば、それは創造者の責任ではなく、年代について誤った希望を植え付けた人間たちの責任である。

若い人、あるいは最近加わったばかりの人であれば、この変更についてそれほど深刻なことは感じないかも

しない。結局協会側の誤りを認めるような言葉は見あたらないし、変更も「漸進的な理解」とか「増し加わる光」という言葉でごまかされてしまう。何十年もの間ずっと「一九一四年の世代」が執拗に説かれていたことにも気づかないだろうし、これこそ「終わりが近い」ことを示すものだと言われていたことにも気づかないかもしれない。これは人間によるものではなく神によるものとか、人間の約束するものではなく「神の約束」だと断言していたことなど、わからないかもしれない。神を、そして神の言葉を、四十年にわたって自分勝手な考えに結びつけておき、この考えが結局駄目だとなる――これでは責任の重大性が増すばかりである。エレミヤ23・21にはこんなエホバの言葉がある。

わたしは預言者たちを遣わさなかった。だが、彼らは走った。わたしは彼らに語らなかった。だが、彼らは預言した。

もちろんこの変更は統治体の決定以外の何物でもあり得ない。すでに見た通り、このことについてはもう一九七〇年代の頃から会議に取り上げられていた。現行の統治体のメンバーが何を考えているのか、どういう責任感を感じているのか、不思議に思わずにはいられない。統治体のメンバーは全員、協会が年代を設定して予言を繰り返してはとうなつたかを、昔も今もよく知っているのである。出版物ではこれが「自分たちの時代に神の約束が果たされるのを目にしたいという熱烈な思い」のためだとして許されている。神のために予定表を勝手に組んだりはしないで、おこう、予言をしてそれを勝手に神のもの、神の言葉によるものだとは言わないで、おこうという熱烈な思いは持てないらしいのである。また、統治体のメンバーには、これまで協会の指導者側が誤りを繰り返ししているにもかかわらず、常に新しい予言を作り出してきたこともよくわかっている。そして指導者側がそのような誤りに対してきちんと責任をとったこともなく、自分たちの間違いをきちんと認めたことがないこともよくわかっている。誤りの数々はエホバの証人全体のものということにする。自分たちのイメージや権威の方は守ろうとするのである。『目ざめよ!』1995年6月22

日号へ1995年6月22日号9頁では、「偽りの予言と真の預言」について次のように書いている。

一九三一年以来エホバの証人として知られている聖書研究者たちはまた、一九二五年にすばらしい聖書預言の成就がある、と期待していました。その時になれば地的な復活が始まって、アブラハムやダビデやダニエルなど、昔の忠実な人々がよみがえってくる、と思っていたのです。比較的最近でも、多くの証人たちは、キリストの千年統治の始まりに関連する出来事が一九七五年に起こり始めるかもしれないと思いました。彼らの期待は、人類史の七千年期がその時に始まるという理解に基づいていました。〔傍線は筆者〕

「この世代」についての新しい教義を載せている『ものみの塔』誌1995年11月1日号17頁へ1995年11月1日号17頁も同じような言い方をしている。

これまでにエホバの民は、このよこしまな体制の終わりを見たいと切に願うあまり、「大患難」の始まる時を推測することがあり、一九一四年以降の一世代の長さを算定しようとしたこともあります。しかし、わたしたちは、一世代が何年あるいは何日に及ぶかを推測することによってではなく、喜びにあふれてエホバを賛美する点でどのように「自分の日を数える」かについて考えることにより、『知恵の心をもたらし』ます。(詩編90・12) イエスの用いた「世代」という表現は、時を計るための定規というよりはむしろ、歴史上のある時期に住み、他と異なる一定の特徴を備えた同時代の人々をおもに指しています。

こうして指導者側は本来自分たちのものである責任をあっさり振り捨て、エホバの証人全体に向かって、あなたたちの見方が間違っていたから問題が起きたのですよと教え諭す役に回っている。諭されている方はまったく何をしたわけでもなく、ただ協会の指導者側がいろいろな年代について期待を持たせるために書いたものを読ませたからそれを信じたのであるが、それは認めようとしなない。年代について、「思いました」とか「推測することがあり」とか「算定しようとした」とかいうことも、すべて普通のエホバの証人のしたことではなく指導者側のしたことなのだが、これを認めようとしなない。これは言ってみればこんな状況に似ている。子供が消化不良を起こして苦しんでいるのを見た母親が、「食べるものに気を付けないからよ」と言うが、子供の方は母親に与えられたものを食べたに過ぎない。

しかも、与えられるばかりか、これはすぐれたもので他では手に入らない素晴らしい食べ物だと思わないといけないと執拗に言い聞かされる。少しでも不満を漏らせば罰が待っている。

一九一四年についての教義の変更以前には、これに疑問を呈したり納得しなかったりすれば排斥の対象になったし、また実際排斥があったことが統治体にいる人たちにはよくわかつていて、『ものみの塔』が現在押し進めている「知恵の心」は年代に関する推測を慎もう、ただ毎日を神の手に委ねて生きていこうというものであるが、これこそまさにかつてブルックリン本部スタッフの何名かが言おうとしていた「知恵の心」であり、まさにこのことでその人たちは「背教者」とされたことも、統治体のメンバーにはよくわかつていて、しかしこの人たちが実際のところどう感じているのか、これが私にはわからない。もし私自身がこの教義変更に関わっていて、誠実なクリスチャンを誤った方向に導いたり、その人たちについて誤った判断を下したりした責任を堂々と認めようとしらない人たちの一員であったなら、とにかく心にやましさを感じずにはいられないだろう——今の私に言えることはこれだけである。

以上に見たもののみの塔のやり方と、やはり同じような予言失敗の歴史を持つワールドワイド・チャーチ・オブ・ゴッド教団の態度とを比べてみると、驚かざるを得ない。この教団で長年指導者だったアームストロングが一九八〇年代の終わりに死去した後、機関誌の『明らかな真理』3・4月号に「わたしたちの負い目を許したまえ」という記事が載った。『明らかな真理』誌を発行するワールドワイド・チャーチ・オブ・ゴッドは、近年、多くの長年の教義や方針を変更してきました」と書き出し、以下のような内容が続く。

また同時に、我々は過去を重く受けとめています。

誤った教義理解のため、イエス・キリストの単純明快な良い知らせに目を向けず、誤った結論や聖書的ではない方針の数々に至りました。大いに悔やみ、謝罪すべき点があります。

我々は独りよがりでした。他のクリスチャンを「いわゆるクリスチャン」と呼び、「だまされている」「サタンの手先」とも言いました。

信者たちに対しては、仕事中心的なクリスチャン生活を強制しました。旧約聖書にあるような規則に従うことを要求したのです。また、極めて律法主義的な教会管理を行ないました。

この旧約的なやり方によって生まれたのは排他的な優越感であり、新約的な兄弟愛や団結ではありませんでした。

預言に類する事柄を強調するあまり、イエス・キリストを通じての真の救いに目を向けませんでした。

こういった過去の教義や方針は、大いに悔やまれるところです。ここから生まれた数々の苦しみがあったことを痛感しています。

我々は誤っていたのです。誰かを誤った方向に導こうという意図はありませんでした。神のためと信じて行なっていたことに氣を取られ、心の面がおろそかになったのです。そのような意図があったにせよなかったにせよ、聖書から離れてしまったのです。

過去を振り返ると、どうすればあれほど誤ったことができたのかと思うほどです。我々の教義によって誤った聖書理解に至った人たちに對する気持ちでいっばいです。我々の誤りがもたらしたことをごまかそうとは思いません。理解と許しを心からお願ひするばかりです。

我々は過去における教義上の誤りを隠そうとは思いません。ごまかせば済むとは思っていないのです。我々は歴史を直視し、誤りや罪を直視しています。これは我々の歴史の中に消えることなく残り、律法的なやり方がいかに危険かということをいつまでも教えなくてはなりません。

私は統治体の人たちを知っているし、自分たちが神に奉仕しているのだという誠実な信念を持っている人が多いことについては納得している。ところが残念ながら、自分たちが率いている協会は神の伝達経路であり、地上にある他のいかなる宗教組織よりも優れているという信念も同時について回っている。この信念は、協会のたどってきた誤りの多い歴史の実態を直視しようとしないうちに心理の現れであるとも言える。世界の終わりについての予言がはずれたら落胆の気分が生じ、結果として聖書に對する信頼を弱めてしまい得る。神に奉仕しようという気持ちがいかに誠実であったところで、残念ながらこのことについては驚くほど鈍感なままだったようなのである。

第11章 決心

「かつて私の利益となっていたことを今や損失と思っています。ひとえにキリストのためです。そればかりが、私の主キリスト・イエスを知るといふこの上なく大きなことに比べれば、すべてが損失であると思っています。キリストのために私はすべてを失いました」 フィリピ（ピリピ） 3・7、8 《新国際訳》

一九七九年の終わり頃には決断を下すべき岐路に立っていた。四十年近くを全時間の代表者として過ごし、組織のあらゆるレベルでの活動を経験していた。最後の十五年間は世界本部で、そのまた最後の九年間はエホバの証人の統治体のメンバーとして活動した。

この最後の九年間が私にとって決定的となった。ここで夢が現実と出会ったわけである。少し前に読んだ、今は故人となったある政治家の言葉がよくわかる。こんな言葉である。

「真理の最も大きな敵は、嘘・偽りではないことが多い。嘘・偽りは、不誠実で、意図的で、手が込んでいる。真理の本当の敵は思い込みである。思い込みというものは、なかなか振り払うことができず、変に説得力があり、非現実的である。」

私の物心ついてからの生活は、ほとんどがまさにこの思い込みに基づいていたのではなかったかと気づき始めたのである。まさに「なかなか振り払うことができず、変に説得力があり、非現実的な」思い込みである。聖書に対する見方が変わったわけではない。ただ、いろいろあったことで、その素晴らしさがより一層感じられるようになった。自分で目にし耳にした言動、肌で感じた緊張感などのすべてに意味を与えてくれたのは聖書だけだった。変わったとすれば、自分の聖書の見方があまりにも偏っていたことに気づいたことだろう——偏った見方に陥る落とし穴からは

守られているはずだったのだが。聖書というのは、自分たちのことを「経路」と呼ぶ、誤りを犯し得る人間の機関を通じて解釈するのではなく、ただそれ自体に語らせると、一層意味深いものだと思えた。正直なところ、それまでなんと多くを読み落としていたことかと驚いてしまった。

問題は、それではどうすれば良かった。統治体で過ごした年月、会議の内外で聞いたこと、すべてに感じられる基本的な姿勢などによって確実にわかってきたことがある。組織について言えば、「皮袋が古くなった」というか、かつては持っていたかもしれない柔軟性を失い、教義上のことであれ指示を求める一般のエホバの証人の扱いであれ、聖書に基づいた修正にますます頑固な抵抗を持つようになっていた。^{※1} その当時感じていたし、今でも感じることだが、統治体にはたくさん良い人がいる。ある元エホバの証人と長距離電話で話していた時、その人が言ったのが「私たちは追隨者の追隨者だったのですね」という言葉だった。別の人はまた、「私たちは犠牲者の犠牲者だったのです」と言っていた。どちらも当たっている。チャールズ・テイズ・ラッセルは、ある人々の言うことに従った結果、「明らかにされた真理」という概念の犠牲となった。以来、歴代のリーダーたちも同じ道をたどり、時としてもとからあった思い込みにさらなる思い込みを付け加えていった。私にはこれについて許せないような気持ちはなく、ただ自分の知っている人たちに対して気の毒だと思えばかりである。私もそういう「犠牲者の犠牲者」であり、「追隨者の追隨者」だったのである。

特に一九七六年以降、統治体で過ごす一年一年は段々につらく、またストレスのたまるものになっていったが、それでもきつと良くなるだろうという望みにすがっていた。しかし、やがてこの望みにはまったく根拠がないことを認めざるを得なくなった。

私は権威に反対していたわけではない。それが極端な方向へ走ってしまうのに反対していたのである。ただの人間

※1 ルカ5・37-39のイエスの言葉参照

がクリスチャン会衆の仲間に対して絶対的な権威を振るう——こんなことを神が意図していたとはどうしても信じられなかった。私の理解では、キリストがその会衆に権威を与えているのは奉仕をさせるためであって、決して支配させるためではないはずだった。^{※2}

同様に、きちんとした仕組みという意味での「組織」に反対していたわけでもない。クリスチャン会衆そのものがそういう仕組みを持つと思っていたからである。^{※3} しかしまた、それがどんな仕組みであろうと、その目的と機能は、というよりそれが存在すること自体、兄弟たちを助けるためだと思っていた。兄弟たちのために仕組みがあるわけで、その逆ではないのである。それがどんな仕組みであろうと、みんなを成長させ、他の人間や組織体制に頼るような霊的に幼い人間ではなく、成長したクリスチャンとして行動できるようにするためのものである。すなわち、組織体制の規則に従うだけの人間を作ることではなく、「自分の知覚力を訓練し、正しいことも悪いことも見分けられるようになった」人間を育てるものである。^{※4} どんな仕組みであれ、心から意見を出し合い、お互いに信頼し合う、本当の兄弟愛の助けになるものでなくてはならない。一握りの人間が支配し、残りの多数が支配されるような協会ではないのである。どんな仕組みであれ、「指導する」やり方は模範を示すことによってであり、神の言葉に忠実に、主の指示を主自身が与えたようなやり方で説き伝えるはずである。人間の作った組織に都合の良いようにその指示を「合わせ」たり、世の中の権力者がするように「自分の権力を感じさせる」のではない。^{※5} 最終的にはキリスト・イエスを頂点に置くはずのものであり、決して地上の権威構造を、そしてその幹部役員を頂点に置くものであってはならないのである。ところが現状を見ると、権威主義的で、自分たちがいかに良いか、優れているか、ということ

※2 マタイ20・25-28、同23・8-12、コリント第二4・5、ペテロ第一5・3。

※3 コリント第一12・4-11、25、14・40。

※4 ヘブライ5・14、コリント第一8・9、16・13、14。

※5 マタイ20・25。

繰り返し唱える組織があるばかりであって、それによってキリスト・イエスの頭としての役割の影が薄くなり、ほとんどわからなくなっていると感じられた。

また、教えの価値も必要性も否定しなかった。しかし、ころころ変わる理屈付けに基づいた組織の解釈が、変わらぬ神の言葉と同じほどの権威を持つのは受け入れられなかった。既存の見方をやたらに尊重し、これに合うように神の言葉の方をゆがめること、そしてあちこちでつじつまの合わないことをした結果、二重の基準が生まれたりすること、これらのことが私にとって深刻な動揺のもととなった。教えるという行為ではなく、教条主義が受け入れられないと感じた。

統治体にいる間、他の人にも何とかしてこういうことを考えてもらおうとした。ところがはじめから困難と敵意に迎えられ、最後には拒絶と排斥に終わったのである。

一九七九年の秋、西アフリカの支部への「地帯訪問」を任命された。訪問先の中には政府がエホバの証人の活動を禁じているところもある。拘留・投獄も容易に起こり得るとわかっていたので、この際自分の思っていることを妻に相談するべきだろうと考えた（妻はそれまで健康状態があまり良くなく、一九六九年には血液の具合で命が危ういこともあったので、この時は私だけで行くべきだろうと考えていたのである）。妻は私が精神的に参っていることに気がついていて、それが実際どういふことなのか話し合ったことはなかった。話すわけにはいかないような気がしていたのである。しかしこの時は、私の考えを、特に聖書に基づいて話し合うのが良いだろうし、そうすべきだという気持ちがあった。神の言葉に見た真実を自分の妻と話し合うのである。これを止めることは誰にもできない。

その時には、とにかく世界本部での仕事を辞めるのが良からうという結論に達した。精神的にも、また肉体的にも、それが必要だと思った。また、我々にはまだ子供を持つことができるかもしれないという淡い期待があり、それまでに医師二人に相談していた。そのうち一人は本部スタッフのカールトン先生で、内密にということでお願ひしてい

た。^{※6} 当時の私は五十七歳で、この年では普通の仕事を探すのも難しいだろうとわかつてはいた。しかし何とかするだろうという気がしていた。

決心は簡単には固まらなかった。気持ち揺れ動いていた。一方では、統治体に残れば他の人のため、聖書の真理のため、極端に走らない見方を提供するため、少なくとも意見を述べるぐらいはできるだろうと感じていた。たとえその意見が早く迎えられなかったり無視されたりしてもである。しかし、これができる時間はどんどん短くなっていると思ったし、統治体会議で何を言おうとも沈黙させられてしまうのも感じていた。とにかくこのおかしい疑心暗鬼の雰囲気から自由になりたい、聖書的な根拠もなく、道徳的にもおかしいと思われる決定を下すような権威機構に関わってたくないという気持ちも強かった。

もし快適で安定した生活が目的なら、間違いなく統治体にとどまっていただろう。本部スタッフとして、物質面ではすべてが与えられただろう。長年積み重ねた「年の功」がある。部屋にしても、協会所有の数あるビルには定期的な空きが出るが、その中から上等の部屋を選べただろう。^{※7} 休暇も年に六週間程度取れるようになっただろう。さらに統治体のメンバーということで、この休暇をアメリカ及びカナダ全土どこにでも行ける出張講演、さらには世界中の国々へ行くこともできる地帯訪問と重ねて取るという贅沢も可能だった（統治体のメンバーは普通の人であれば夢物語のような場所で休暇を取ることができるのである）。一九七八年の一年間だけで、私は妻と共に五十回以上飛行機で移動したし、長年にわたって中央アメリカ、南アメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、中東の各地域を旅した。もし地位や名誉が目的なら、これ以上は望むべくもなかった。この当時すでに、月に一つ出張講演を引き受ける間に三つか四つ断っているという状態だった。パリ、アテネ、マドリッド、リスボン、メキシコ・シティー、サンパウ

^{※6} 私の妻は十三歳年下である。二人の医師は危険があり得ると言ってくれたが、我々はそれでも構わないと思った。

^{※7} 協会はこの少し前に十五階建てのタワーズ・ホテルを購入していた。他にもブルックリン・ハイツ周辺には十階建て住居ビルを所有していた。その後協会は、ブルックリンにスタンディッシュ・アームズ・ホテルとボサート・ホテルを（業者を通じて）購入した。

口、その他大きな都市に行く場合、支部に一声かけさえすれば何千人というエホバの証人が集まる集会が開かれる。五千人から三万人ほどの聴衆を前にするのはほとんど当たり前だった。統治体のメンバーはどこに行っても、仲間のエホバの証人にほとんど主賓扱いされる。^{※8}

統治体の仲間のメンバーから信望を受けようと思えば、ただ組織を全面的に支持すると常に表明し、話し合いで皆がどんな意見に傾いているかをつかんで、よほどのことがない限りそれに賛成しておけば良い。別に皮肉を言っているのではない。それまでの立場や方針、教義などに良心的に納得できないとして発言したことのある統治体のメンバーは他にも何人かいるが、この人たちなら、口に出しては言わないまでも、これが事実だとわかっている。

私は執筆委員会と奉仕委員会という、統治体の委員会の中でもいわば主要部分のメンバーとして任命されていた。特に執筆委員会では、多くの言語に翻訳されて何百万部という数で出る出版物の監修を（私が実際に書くのではない）せよ 私に任せていた。^{※9}

組織で地位を保つための、いわば「公式」は簡単にわかるものだったが、良心的に受け入れられるものではないと思った。

聖書の原則にはつきり表れていると思うことに基づいて私が意見を述べると、統治体のメンバーの多くはあまり愉快そうに見えない。さすがの私もこれには気がついた。反感を買うぐらいならいっそ黙ってしようと心に決めて統治体会議に出ることもあった。しかし人に大きな影響を与え得ることが議題に上ると、どうしても一言述べずにはおれ

※8 これを考えるたびにマタイ23章6節のイエスの言葉を思い出したものである。

※9 これらの出版物には次のようなものがあった。『今ある命がすべてですか』（実際に書いたのはラインハート・レンタット、『人生には確かに目的がある』（エド・ダンラップ、『あなたの家族生活を幸福なものにする』（主としてコリン・クワッケンブッシュが執筆、『最善の生き方を選ぶ』（ラインハート・レンタット、『ヤコブの手紙の注解』（エド・ダンラップ。辞めた時の仕事は、エド・ダンラップが書くことになっていたイエス・キリストの生涯についての本を監修することだった。

なかった。何も言わなければきつと気がとがめただろう。私の言うことに特に影響力があったなどとは思わない。それどころか、自分の立場がさらに難しく危険なものになるだろうとそれまでの経験からわかっていた。しかし何らかの立場を貫かなければ――キリスト教にとって決定的に重要だと思う原則を貫かなければ――何のために会議に出ているのかわからないし、さらに言うなら、何のために生きているのかわからないと思った。

すでに述べた通り、一九七八年頃から統治体の空気が変わり始めていた。抜本的な構造改革を行なった直後の高揚感は消えていた。一時は一緒にがんばろうという同胞意識のようなものが感じられ、穏健なやり方、柔軟な見方を取ろうという動きもあったが、これも影を潜めてしまった。メンバーは皆それぞれの委員会それぞれの役職に落ち着き、そのうち自分の地位を誇示する人も出てきた。メンバーの間にはかなりはっきりした位置関係・力関係があつて、何かを多数決で決めようという時でもその結果はすでに見えていることが多かった。

具体的に言うと、例えばミルトン・ヘンシェル、フレッド・フランズ、テッド・ジャラズ、ロイド・バリーの四人の手が上がれば、ケアリー・バーバー、マーティン・ポエツィンガー、ウィリアム・ジャクソン、ジョージ・ギャンガス、グラント・スター、ジャック・バーもそれに続くことが、大体はわかる。最初の四人の手が上がらなければ、大概はあとの六人の手も上がらない。残りのメンバーは、大体これに従うがそうでない時もあるという程度である。少数の例外を除いては、これがお決まりのパターンだった。

このパターンが最も見事に表れるのは、既存の方針をどうすべきか話し合っている時である。誰が方針の変更に反対し、今まで通りの方針を支持しようとするのか、はじめからわかっている。第6章で紹介した「代替公務」の場合でも、変更を望むメンバーが過半数いたのにもかかわらず、この現状維持派のために、三分の二多数には至らず、結局変更は実現しなかったという経緯があった。

また、意見が分かれそうな事柄については、どうやら特定のメンバー間で「根回し」が行なわれていたらしい。私

の感覚からすれば、実際の会議以外で何か伝えたいことがあるなら、書いてコピーを全員に配れば少なくとも皆に同じことが伝わるし、お互い考えていることがわかって良いと思うのだが、そんなことはほとんどなく、仮にあってその内容が話し合いの対象になることはまずなかった。

一九七九年一月一四日の統治体会議は、翌一九八〇年春に本部で起こった一連の衝撃的な出来事の前触れだったと思う。その春には多くのスタッフが「背教」のかどで排斥となり、私自身も統治体を、そして本部を、辞任したのである。

その日の会議では、さしたることもない案件を四つ話し合い、いずれも全員一致で片付いた。皆の気持ち調和しているという雰囲気があったかもしれない。しかしこれはすぐに乱されることになる。グラント・スーターが「かなりの噂になっている」事柄について話し合いと言いつつ出したのである。統治体と執筆部門のメンバーの中に協会の教義に合わないことを講演で言った人がいて、これが混乱を呼んでいるらしい、と言うのである。また本部スタッフの中にも「サウル王が死ねば物事も変わる」などと言う者がいるらしい。※¹⁰

本部スタッフがそんなことを言っているのはまったく聞いたことがなかった。しかしグラント・スーターはどこでそんなことを聞いたのか、その「噂」というのを誰に聞いたのか、明らかにしようとしないう。話しながら次第に激しきてきて、言葉も表情も感情的になってくる。ついに「背教」という言葉が初めて統治体会議で口にされるに至った。

討論がかなり続いた。そんなことは初めて聞いたというメンバーがほとんどだった。私も発言した。講演なら自分もアメリカ中で、そして世界各地でしたことがあるが、協会の出版物の教義に合わないことは一度として言ったこと

※10 これはどうやら協会会長のこころしかった。会長には（一九七六年までは存在していたような）権力がまだあるのだと勘違いしている人がいたらしい。

がない。統治体のメンバーの講演は通常録音されるから、何かまずいことを言った人があればその証拠が残るはずである。それならば、統治体としては何も噂に頼る必要はない。誰かがきちんと質問状を送ってくるはずである。ひよつとすると統治体と執筆部門のメンバーの中で、おっしゃるようなことに当てはまる人を個人的にご存知なのか。——こうグラント・スーターに尋ねてみても、ただ「そんな話が出ていた」、本部のセミナーに出席していた支部委員会のメンバーの中に、セミナー担当者から矛盾することを聞いたので「よくわからなくなった」という人がいた、と言うだけであった。

結局、それではセミナーの管理側である教育委員会が調査に当たるべきだという結論になった。その後の会議で教育委員会は次のように報告した。問題となっていたようなことが言われた様子はまったくない。支部の人たちが「わからなくなった」というのは統治体のメンバーのケアリー・バーバー担当のクラスのことである。このクラスでバーバーは、キリストの王国が始まったのは西暦三三年に天に上げられた時だったという話をしたのだが、聞いていた方には、これが一九一四年の教義と合わないのではないかと考えた人もあったというのに過ぎない。^{※11} この解決策として、統治体のメンバーは奉仕の一環として話をする時には気をつけようと決まった。同時に、メンバーが例えば友人同士として、個人的に話をするのを取り締まろうとするものではないという点もはっきりと確認された。ちなみにこれは後に守られないことになる。

実に意味深長な会議だと思った。統治体のメンバーが奉仕の一環として話をしている際、協会の出版物の教えに合わないことを口にした具体例について、グラント・スーター自身は知らないと言った。しかし、例を挙げようと思えば挙げられたのである。アルバート・シュローダーがヨーロッパの支部を回った時、「この世代」について出版物と

※11 協会の教義では、キリストは天に上げられると同時にまず自らの会衆の王としてのみ君臨し、一九一四年になってから地上すべてを統治する権力を持ったということになっている。

は違う見解を語っていたことなどは、あちこちから話が入っていて、すでに統治体で話し合いの対象になっていた。また他に、会長のフレッド・フランスが「王国の鍵」（これはマタイ16章19節で言われているもの）について新しい考えを示したことも良く知られていた。フレッド・フランスはギレアデ学校で教えている時にその考えをいくつかのクラスで示したのだが、その内容は協会の出版物に公にされた教義に反するものだった。事前に統治体との話し合いもなかった。しかもこのような見方もあるという言い方ではなく、これこそが正しい見解であるという示し方だったのである。^{※12} ギレアデ学校の当該クラスの卒業生はこの新見解を学んで卒業し、それぞれの割り当て地に赴いたのであるが、他の人たちはその内容を聞いたこともないという具合だった。

このようなことが統治体会議で取り上げられることは一切なかったし、私にしても取り上げるつもりなどまったくなかった。^{※13} しかし、何かが起こっているらしいこと、そしてそれが遅かれ早かれ表面化するであろうことは確実に感じられた。そうなればその矛先が向けられるのは上に挙げたような人たちではなく、他ならぬ私自身であり、また統治体外部ではエドワード・ダンラップであろうことは疑いなかった。

周囲のメンバーからそんなことを感じ取れたこともあったので、自分としては奉仕委員会を辞めて執筆委員会だけに専念した方が良くかもしれないと考え始めていた。ある日のこと、奉仕委員会の秘書を務めていたロバート・ウォーレン（この人は統治体のメンバーではなかった）と話していた時、実は奉仕委員会を辞めようかと考えていると言った。

※12 これについてはついに統治体の話し合うところとなり、長々と討論した結果、その新しい見解は承認され（しかし全員一致ではなかった、

『ものみの塔』1979年10月1日号16-29頁へ1980年1月1日号16-29頁に発表された。

※13 エホバの証人の弁護士や医者を変えた会議があった時（確かこの会議はシカゴで開かれた、統治体のメンバーのグラント・スーターが「叙任された奉仕者（ordained minister）」という用語についての協会の見解をどう思うか、と出席者に尋ねたこともあった。スーターはその席ではっきりと否定的な意見を述べたわけではなかったが、統治体会議ではっきり反対意見を表明していたし、これを聞いた側もこれは協会の見解に対して批判的な意見を述べても良いらしいと感じたことはその反応からも明らかだった。

ところ、「それは困る。つり合いというものが必要なんだから。」という返事が返ってきた。^{※14} そしてどうしても考え直せというのだった。

先ほど触れた一九七九年一月一四日の会議であらわになった反感は、また別の会議でも現れた。そして、思った通り、今度は私が名指しで攻撃を受けることになった。『ものみの塔』の編集と出版の責任者であったロイド・バリーが強い懸念を表明したのだが、それは執筆委員会で回覧されている『ものみの塔』記事原稿に私が承認の署名をしていないものがかなり多い（ロイド・バリーはきちんとその数を挙げた）というのだった（出版されることになった記事はまず五人の委員が目を通し、承認の印として署名をすることになっていたのである）。どうしてそんなことをわざわざ正式の会議で持ち出してくるのか、どうしてまず直接言ってくれるなり執筆委員会の会議で言うなりしないのか、そこがわからなかったが、とにかく私はロイド・バリーの言ったことを事実として認めた（署名をしなかった記事の数など数えていなかったのも、その正確な数を聞かされて驚いた。ロイド・バリーは数えていたわけである）。

そして署名しなかったのは単に心からそうできなかったからだと説明した。しかしまた、そういう記事（その中にはフレッド・フランズ会長の書いたエレミヤの預言に関するものもあり、これは協会の「預言者としての役割」や一九一四年、一九一九年といった年代を打ち出したものだった）が公になるのを止めようなどとは決してしなかったし、またそれを問題として取り上げようとも思わなかった。署名をしないのは棄権であって、反対ではない。さらに私は統治体のメンバーを前にこう述べた。もしこれが問題なのであれば、つまり良心的な理由によって署名できない人がいるというのが好ましくないのであれば、これは簡単に解決できる。記事の承認に当たってそんな抵抗を感じない人を執筆部門に連れてくれば良い。また、私としては奉仕委員会を辞めて執筆部門のための時間を増やそうかと思っ

※14 当時の奉仕委員会のメンバーには、私の他にテッド・ジャラス（調整者）、ミルトン・ヘンシエル、アルバート・シュローダー、ウィリアム・ジャクソン、マーティン・ポエツィンガーがいた。

た。結局、この問題については皆さんにお任せする、私は皆さんの結論が何であれそれを承諾すると言ったわけである。

この会議のあと、当時執筆委員会及び執筆部門の調整者だったライマン・スウィングルが自分の部屋に私を呼びつけて言った。「あんなことを言ってもらつては困る。みんなで執筆部門から君を外そうと決めるのなら構わないが、自分から辞めるなんて言うのは困る。」ずいぶん強い口調であった。私は、それについては統治体に任せただけであり、ただ自分としてはごたごたがもううんざりで、少しでもこの重圧が減るなら何でも良いのだ、と言った。ライマン・スウィングルは、とにかく自分から辞めるのは困るぞ、と繰り返した。

結局統治体は私をそのままにした。

それでも何かが着々と進行していることははっきりと感じられた。しかし、それから六ヵ月のうちに狂信的とも言える騒ぎのただ中におかれるだろうとは思ひもよらなかった。統治体は、組織の中心部を脅かす大規模な「陰謀」があるものと見なし、これに対して実に厳しい処置に出たのである。以下、この「危険な陰謀」が実際にはどんなものだったのか、どれほど「大規模」なものだったのか、関係者の「罪」がいかなるものだったのか、今日に至るまで組織内部に続く「強迫観念」の状態がどういふものなのか、一九八〇年春の「粛清」に至るまでの出来事の数々がどんなものだったのか――これを吟味して頂きたい。

私が西アフリカ出張のためにまずパリに向けて出発するその前日（一九七九年一月一六日、フレッド・フランズ会長が朝の聖書討議で司会をしていた（その週は会長が当番だったのである）。その際会長は、最近号の『ものみの塔』に出た協会の見方に疑問を持つものがあると言いだした。その見方というのは、イエス・キリストが仲介者であるのは「油そそがれた」者たちのためだけであって、その他何百万人というエホバの証人のためではないというものである。

る。※15 会長はこう言った。

「この油そそがれた者たちが皆をひとまとめにし、イエス・キリストに、その他大勢の仲介者となってもらおうでしょう。」

私としては、その場に居合わせた本部ベテル家族メンバーの「その他大勢」の人たちについて考え、この人たちはこれを聞いてどんな気持ちだろうと思わないではいられなかった。事実この内容についてはベテル家族メンバーの間で大いに話題になっており、これを快く思わない意見もあったのである。

会長はさらに話を続け、協会の教義が正しいのだと断言した。引き合いに出された唯一の聖句はヘブライ人への手紙12章、次の箇所である。

あなた方が忍耐しているのは鍛錬のためです。神は子に対するようにしてあなた方を扱っておられるのです。父親が懲らしめを与えない「子」はいつたいどんな子でしょうか。すべての者があずかる懲らしめを受けていないとすれば、あなた方は実際には私生児であって、子ではないのです。

続いて馬が例に出される。馬の持ち主はぐるりと円を描いて歩かせるための鍛錬を行なう。「時には鞭でひっぱたかないといけないこともあるでしょう」と言うのだった。そして協会の教義に疑念を持つ者はがんばってこの鍛錬を受け、「この教えにしがみつくんだという気合いを見せてほしい！」と言うのだった。※16

私はそのままバリへと旅立ったが、何日かの間気分がすぐれなかった。会長の言葉のためばかりではなく、何年かの間目にしてきた物事のあり方、やり方、すべてのためだった。聖書を見れば、明らかにイエス・キリストはすべて

※15 『ものみの塔』1979年4月1日号31頁へ1979年7月1日号30頁、1979年11月15日号21―27頁へ1980年2月15日号21―27頁 参照

※16 後でこれについてエド・ダンラップは「忍耐させてくれるのは信仰というもので、『気合い』ではないと思っていただきなあ」と言っていた。

の「その他大勢」のため仲介者となって神との間を取り持つてくれるとされている。キリストがすべての人のために自らの命を捧げたこと、受け入れる人には誰にでもその贖いの利益を与えること、これはあの本部での話とはまったく反対のことだった。ベテルで耳にしたのは「異なった福音」であって、一世紀の靈感を受けた著者たちが書き記した福音ではないようだった。

アフリカで最後から二番目に訪れた国はマリだった。ここでは宣教師のほとんどがフランス人だった。訪れた国のそれぞれで宣教師たちに話していた内容を何とかフランス語で伝えた後、質問はないかと尋ねたところ、二番目の質問がこれだった。『ものみの塔』にはイエスが油そそがれた者たちの仲介者であって我々他の者たちの仲介者ではないとあります。これをちょっと説明してもらえませんか。祈りにおいてすらもイエスは我々の仲介者ではないのですか。」

私が組織に対する疑念の種をまきたいと思っていたならば、これはまことに好都合な場面であっただろう。しかし私は皆を落ち着かせるため、こんな風に言った。ヨハネの第一の手紙2章1節、2節には、イエスが「助け手」となるのは「罪のためのなだめの犠牲」となる人たち、さらに「全世界」の人たちのためだという箇所がある。仮にイエスが皆さんの仲介者でなくても、助け手であることは間違いない。とにかく、イエスが皆さんのことを地上にいる他の誰とも同じように気遣っているのは確実である。

これで何とか問題が大きくはならないようにできたという手応えがあった。『ものみの塔』の内容に疑問を挟むようなことは一言も言わなかった。

数日後、セネガルに向けて出発するため空港に向かう途中、この宣教師たちが見送りに来てくれた。そのうち一人の女性が私にこう尋ねた。「それでもやはり、祈りにおいてさえもイエスは私たちの仲介者ではないのでしょうか。」私は先だっでの集まりで言ったことを繰り返す他はなかった。

それから三週間ばかり後、私はブルックリンに戻った。アフリカで何かあったと言えば、オートボルタ共和国のワガドゥーグーからコートジボワール共和国のアビジャンまで夜行列車で二十時間の移動をしていた最中に脱線事故があったぐらいのものである。

帰国した翌朝、朝食の席で、本部を訪れていたある支部メンバー夫婦と同席になった。食事が始まるとすぐにその奥さんというのが一つお尋ねしたいことがあるのですがと言うので、私は「どうぞお聞きください。お答えできるかどうかはわかりませんが。」と言った。この二人は、その前の晩に『ものみの塔』記事研究に出席したのだが、その記事というのが仲介者としてのキリストについてだったのである。この奥さんの質問というのはマリの宣教師が尋ねたのとほぼ同じだった。私も同じ答をした。

その週末、私は講演のためにニュージャージーに行った。講演が終わると聴衆から一人の女性がやってきて（この人はエホバの証人だった、少し質問があると言った。質問は三つで、二つ目の質問が仲介者としてのキリストについてのものだった。やはり私は同じ回答をした。

こういう出来事をいちいち記しているのは、組織の教義について質問があった時私が普通どう対応していたかを示すためである。協会の教義の聖書的な根拠について私自身に疑問がある時に話をするのは付き合いの長い人たちだけであり、この人たちは（男性の場合）すべて長老だった。一九八〇年になるまで、私が考えていたことを本当に知っていたのは、妻を除けばこの地上に四人か五人ほどしかいなかったし、ましてやなぜ私がそんなことを思うようになったかは誰も知らなかった。知ってもらおうと思えば本一冊、例えばこの本のようなものが必要だっただろう。

しかし、他の多くの、本当に数多くのエホバの証人が同じようなことを考えていたことは疑い得なかった。^{※17} 何年もいた統治体では、そういうことを率直に取り上げ、丁寧に聖書を調べて考えることはないし、それまでの慣習でなく聖書上の根拠があるかどうかに基づいて結論を下すこともない。

むしろ、そんなことを率直に話し合うものなら組織に対する脅威と見なされ、忠節心がないとされる。全体のとまり（というより実際には画一性）が真理よりも重要であるらしい。組織の教義に関する疑問は統治体内部で話し合われることはあっても外部では許されない。その内部での話し合いがどれほど一致を見ないものであれ、外部に対しては全員一致で決まっていますという顔をして見せなければならない。そのような「顔」がかなり深刻な意見の対立を隠している場合もある。

聖書にこのような態度を認める箇所はない。むしろ、聖書が真理なのは使徒や長老も含めた初期クリスチャンたちの見解の相違を率直に包み隠さず認めるところであるとされていた。さらに重要なことに、聖書のどこを見ても、内々に集まった人間だけに話し合いが許され、その三分の二の賛成によって決定されたことが「明らかにされた真理」としてすべてのクリスチャンによって受け入れられるべしとは書かれていなかった。真理であれば率直な話し合いを恐れるなどとは思えなかったし、注意深く調べて困る理由があるとも思えなかった。それを避けないといけないような教義なら支持するに足らないのではないか。

私は『聖書理解の助け』という辞典を書いた頃からエドワード・ダンラップと親しくなっていた。初めて会ったの

※17

ある日など、奉仕部門に長年いるメンバーがやってきて、会長の書いた記事についての質問をしてきた。私としてはその記事については責任を負いかねるので、きちんと質問状にしてみてもいいと言った。すると「いや、それは前にやったことがあって、えらい目にあつたんです。」という返事だった。それでも書かなければ誰もわかってくれないよ、と言った。こういう返事が返ってきた。「こういう記事をみんながどう思っているのか知りたければ、巡回監督や地域監督に感想を書いてもらえばいいですよ。ただ無記名でやってもらわないと、こう書いてほしいんだろなということしか書かないでしょうけど。」ペテルの長老についても同じことだろうと言っていた。

は一九六四年、ギレアデ学校で十カ月のコースに出た時である。当時エドワードはこの聖書学校の教務主事で、四人いた教訓者の一人でもあった。我々のクラス（三九期生）には百人ぐらいおり、そのほとんどがあちこちの支部の人だった。公平に見て、聖書についての理解を得るという点ではエドワードのクラスがずば抜けてすぐれていたと生徒の大部分が思っていただろう。^{※18} エドワードはオクラホマ出身の、やや荒削りな印象も与える人物である。教育程度は並であったが、モーセの律法であろうと遺伝子科学であろうと、とにかく複雑で込み入った問題を取り上げてこれをわかりやすく説明するという才能があった。しかし私にとってより重要だったのは、ごまかしや見せかけのない態度だった。やたらに派手なネクタイをしたがるという点を除けば、風貌も物腰も話し方も控え目で、目立たない人物だった。どんな仕事の割り当てになってもその人となりが変わることはなかった。

その人格がよく表れていたのは、期末試験の時である。クラスではパウロ書簡を学んでおり、毎週のように要点を確認する小テストがあった。普通その要点にはそれぞれの書簡が書かれた推定時と場所も含まれる。一つ一つ覚えるのは簡単なのだが、期末試験が近づくと、十三あるパウロ書簡すべてについてこれをやらないといけない。数ある時と場所の推定を全部覚えるのは大変だと思った。聖書の正典ではこれがまったく年代順になっていないのである。私かなりの時間を費やして、何とかこれをすべて暗記する方法を編み出した。

さて試験となり、これは制限時間二時間であった。早めに終わり、教室を出るところでエドワードに出くわした。「どうだった？」と聞かれたので、「まあまあでした。けど、絶対許せませんね。」と答えた。それはどういうことだい、と聞かれて私は言った。「こっちはもう大変な苦勞をしてそれぞれの書簡が書かれた時と場所を覚える工夫をしたのに、そんな問題は一つもお出しにならないんですから。」エドワードはこれを持ったより真面目に受け取り、こ

※18

ロイド・バリーもこのクラスに参加しており、統治体のメンバーになってからもエドワードのクラスは良かったと何度となく口にしていた。他の生徒にしても、エドワードの聖書に対する深い愛情と知識を疑う人はいなかったと思う。

う言った。「期末試験であれを出さないのにはわけがある。こつちだつてあんなものいちいち覚えていられないからだよ。」ギレアデ学校にはユリシーズ・グラス、ビル・ウィルキンソン、フレッド・ラスク、エドワード・ダンラップという四人の教訓者がいたが、こんな返事ができるのはエドワードだけだっただろう。気取らないところが良く出ている。

エドワードは組織にすべてを捧げており、全時間奉仕記録の長さは私の記録に匹敵する。それがわかる話がある。一九六〇年代の終わり頃、エドワードは体を悪くした。これは一般に有痛性チック (tic douloureux) というフランス語名が使われるが、これは文字通りには「痛い痙攣」である。と呼ばれるもので、医学的には三叉神経痛と呼ばれる。顔面にある三つ又に分かれた大きな神経が炎症を起こすというもので、極めて大きな苦痛を伴う病気である。突き刺すような痛みは目もくらむほどであり、風が吹く、少し触るといった本当にちよつとしたことで神経が刺激され、この痛みが引き起こされる。ひどくなると、髪をとく、歯を磨く、食事をするなど日常当たり前のこともままならなくなる。何が痛みの発作の引き金になるかわからない。患者の中にはあまりの苦痛に自殺を図る人もいる。

エドワードは、少し良くなったりまた悪くなったりを繰り返しながらこれに七年間苦しめられていた。その時、会長だったネイサン・ノアは（多分他の人の言うのを聞いて、これは純粹に体の病気であるというよりは、何か心理的な要因があるのではないかという意見を持った。そこである日会長はエドワードに会い、結婚生活その他のことについて尋ね、この病気に関係あるのではないかと言った。エドワードは、自信を持ってまったくそれは関係ありませんと答え、休暇もまったく楽しく過ごせます、ただいつ痛みがやってくるかわからないのです、と言った。ところが会長はこれに耳を貸さず、とにかく君にはしばらくの間工場で働いてもらうことにしよう、運動になるだろうから、と言った。そこでエドワードは製本部門で働くことになったのである。

当時エドワードは六十代、しかも痛みの発作を押さえるためにかなりの薬をスタッフの医師に処方されている最中である。時として数日から一週間ほど寝たきりになっていた。それなのに製本所に行つて製本機械相手に働けという

のである。エドワードは黙ってこれを何ヵ月も行ない、「神権的」な仕事を精一杯こなそうとした。しかし私に打ち明けてくれたところでは、この時初めて組織が自分の生活に対して絶対的な力を持っていることを実感したとのことだった。自分の言うことは無視され、この手の病氣を持っているものにとって一番良くないところに回されてしまうという、まったく道理に合わないことになったのである。

それから何年か経って、もう絶望の極みにあった時、ピッツバーグの神経外科医がどうやらこの病氣の原因を突き止め、顕微鏡手術で治療する方法を編み出したらしいという話を聞いた。そこでエドワードはその手術を受けた（これは頭蓋骨の一部をとり、脳に血液を送る動脈に手を加えるというものである。この動脈が炎症を起こしている神経と平行して走っている）。そしてついに治療に成功した。エドワードは、自分の苦しみを理解せず、誤った処置をとった組織から謝罪があるとはまったく思わなかった。事実、謝罪などはなかった。

『聖書理解の助け』以来エドワードと私の仕事場はずっと近くにあったので、我々はよく話をし、調べていることで面白いことがあった時には必ず知らせ合っていた。統治体の執筆委員会は『ヤコブの手紙の注解』をはじめとする様々な仕事に我々二人を任命した。いつもすべての点で意見が合ったわけではないが、お互いの友情と尊敬は変わらなかった。

こんなことを書き連ねるのは他でもない、エドワードは私が組織で、特に統治体で、目にしたことについての思いがどれほど深いかを知ってくれていた数少ない人間の一人だからである。また、エドワード自身そうした思いを持っていた。やはり私同様、目にするもの耳にするものが聖書に合っているとは思えなかったのである。

エドワードは一九三〇年代の始め頃から組織に加わっていたが、長い間自分が「油そそがれた者」だと思っていなかった。一九七〇年代終わり頃のある日、これについて二人で話したことがある。エドワードの言うには、自分もその塔に入った頃には天の王国に入る人たちに二つの級があるという教義になっていた。「選ばれた者たち」（これ

は十四万四千人からなる」と「大いなる群衆」（あるいは「大群衆」とも呼ばれるが、これは啓示（黙示録）第7章に出てくる）の二つである。「大いなる群衆」というのは、選ばれた者ほどの信仰を持たない者だとされていた。したがって「選ばれた者たち」同様に天の王国に入るものの、キリストと共に王として、また祭司として、統治する者ではないことになっていた。この二つの級の間には明らかな優劣の差があるので、エドワードは例によってきつと自分は悪い方、つまり「大いなる群衆」の方だろうと考えたのである。

さて、一九三五年にラザフォードがワシントンの大会にやってきて「明らかにされた真理」を宣言した。聖書によると「大いなる群衆」は天の王国ではなく、地上で生きることになっているというのである。エドワードは常に天の王国での生命を望みにしていたし、神の前で神の子と共に奉仕することほど素晴らしいことはないと思っていた。しかし組織の見方が変わったためにこの望みをあきらめ、「大いなる群衆」の一員としての望みに甘んじることになった。

しかし一九七九年になって、とうとうエドワードは人間の組織が聖書の招きを変えることはできないという確信を持った。「その他大勢」であろうと誰であろうと、聖書は受け入れるすべての人に望みを与えているのであって、そこへ年代を設定したりして変えるわけにはいかない。そこで、一九三五年から実に四十四年の後、初めてエドワードは「主の晩さん」の表象物、つまりパンとワインにあずかった。エホバの証人の間でこれを行なうのは「油そそがれた者」だけなのである。

エホバの証人であれ誰であれ、「自分が天の王国に行ける『油そそがれた者』かどうか、どうしてわかるのか」という疑問を持つ人もいる。その場合、パウロがローマ人への手紙8章16節と17節で次のように言うところを示すのが普通である。

霊そのものが、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子供であることを証しています。さて、子供であるならば、相続人でも

あります。実に、神の相続人であり、キリストと共同の相続人なのです。ただし、共に栄光を受けるため、共に苦しむならばです。

協会公認の教義としては、十四万四千人の「油をそがれた者」だけがここで言う「霊の証し」を許される。この霊がこの人たちに向かつてあなたは天の王国で生命を受ける十四万四千人の一人ですと伝えることになっているのである。他の人たちは神の子供の「予備軍」であって地上の生命の望みしかない。

エドワードはこの部分を8章の始めからの文脈で読んでみて、確かにパウロは二つの級についての話をしていると考えた。しかし、それは決して将来天の王国の生命を得る人と地上の生命を受ける人の区別ではない。

ここではつきり区別されているのは、神の霊に従う人たち、そして罪深い肉に従う人たち、この二つである。

したがって、パウロがここで言うのは「天の王国での生命の希望」と「地上での生命の希望」ではなく、まさに生か死かなのである。つまり神と友好関係にあるか敵対関係にあるかである。6節から9節には次のようにある。

肉の思うことは死を意味するのに対し、霊の思うことは命と平和を意味するのです。肉の思うことは神との敵対を意味するからです。それは神の律法に服従しておらず、また、現に服従しえないのです。それで、肉と和している者は神を喜ばせることができます。ん。

しかし、神の霊があなたの方のうちに真に宿っているなら、あなた方は、肉ではなく、霊と和しているのです。けれども、キリストの霊を持たない人がいれば、その人は彼に属する者ではありません。

このパウロの言葉に天の生命とか地上の生命とかいう話はまったくない。単に神の霊に従って生きるか、それとも罪ある肉に従って生きるかというだけの話である。この二つに一つであるとパウロは明言している。神の霊を持ち、その実をもたらずか、あるいは神と敵対し、キリストに属さないかである。この霊がないことには「命と平和」もあり得ず、ただ死だけがある。神の霊があれば、その人は神の子である。パウロは言う（14節）。

神の靈に導かれる者はみな神の子であるからです。※19

エドワードも言う通り、パウロは「神の靈に導かれる者はみな」神の子供であると書いている。そのうち何人かだけだとは言っていない。靈に導かれる者は確かに導かれているという靈の「証し」を得るのであり、その人の生活における実りなどにその証拠が見られることになる。これはアベルやエノクやノアなどが神に喜ばれているという「証し」をしたと聖書にあるのを思わせる。※20

以上の点は後にもまた出てくるが、ここではともかく、エドワード・ダンラップも私も基本的には同じことを感じていたこと、特に組織には独断的で権威主義的などころが明らかだという点で意見を同じくしていたこと、この二点を明らかにしておけば十分であろう。エドワードは、私と同様、人間の権威が適正な範囲を超えてしまうと、会衆の頭としてのイエス・キリストの役割をおとしめてしまうと考えた。

アフリカから戻ってまもなく、長年の友人が本部を訪ねてきた。ルネ・バスケスという人で、もう三十年以上の付き合いだった。初めて会ったのはプエルトリコのマヤグエスという町で、ルネはそこに父親と住んでいた（この父親は再婚していた。当時ルネは十代の高校生で、父親もその妻もルネがエホバの証人と関わるのに強く反対していた。それが激しくなり、ある晩エホバの証人宣教師の家に行った後、これ以上は耐えられないと思って帰宅せずに街角のベンチでその夜を明かした。朝になり、叔父夫婦の家に行って居候させてほしいと頼むと、まあ良からうということ

※19 パウロがやはり同じように肉と神の靈を対比しながら「靈に導かれる」という言い方をしている箇所がガラテヤ人への手紙5・18にもあるので参照されたい。そこでは、「靈に導かれている」者は「律法のものにはいない」とある。これがすべてのクリスチャンに当てはまるのではなく、一部の選ばれた者だけに当てはまるとすれば、他の選ばれなかった者は律法とその有罪宣告のものにいたることになる。

※20 ヘブライ11・1-17。

になった。叔父夫婦はエホバの証人を快く思っていないかったが、我慢はできたのである。高校卒業と同時にルネは全時間の「開拓奉仕」に携わることになった。

一九五三年にニューヨークの大会に出たのを機にこのままアメリカにしようと決め、ミシガンで出会った女性と結婚して二人で「開拓」を続けた。アメリカ西部にあるスペイン語会衆を回り、ギレアデ学校を出るとスペインに行った。その後まもなく地域監督になった。スペインではエホバの証人の活動が違法だったため、妻のエルシーと二人で国中を回りながらも常に警察の目を警戒していた。見つければ逮捕か国外追放である。集会はすべて極秘で行なわれた。何年もそんな「地下」活動を続けるうち、ルネは神経がすっかり参ってしまい、ノイローゼ一歩手前にまでなった。スペイン生活は七年を数えていた。自分の健康に加えて妻側の家族の都合もあり、旅費をやりくりしながら何とかアメリカに帰り着いた時にはほとんど一文無しの状態であった。

当初、すぐにありつけそうな仕事は唯一、製鋼所での重労働だけだった。小柄で華奢な体つきのルネは二日目にダウンし、入院という羽目になった。それでも後にまた別の仕事を得て生活の見通しが立つとすぐに夫婦で「開拓奉仕」に舞い戻り、巡回奉仕、地域奉仕を経て、最後にはブルックリン本部に招かれた。アメリカにあるすべてのスペイン語会衆（これは約三万人のエホバの証人を擁する）を統轄する奉仕デスクの監督という仕事である。ルネはここで一九六九年まで奉仕を続けたが、エルシーが妊娠したために「ベテル奉仕」は辞めざるを得なかった。

ルネはできればニューヨークにとどまりたいと私に言っていた。別に気に入った場所だからではなく、状況が許せば本部組織の役に立つことができるかもしれないと考えたのである。結局まさにその通りになり、何年も経たないうちにルネは週二日手伝いにやってきて、スペイン語の翻訳、大会用スペイン語劇の録画監督などをこなしつつ、ニューヨークに数多くあるスペイン語会衆の巡回・地域監督としてパートタイム奉仕をしていた。ポルトガルにいたこともあり、ポルトガル語会衆ができた時には習い覚えたポルトガル語に磨きをかけてその奉仕に努めた。

ルネが組織のために行なった三十年余りの奉仕活動について文句を付けられる人間は、プエトリコにもスペイン

にもアメリカにもいないと思う。ルネは極めて穏和な性格だが、筋を通すという性格でもあった。しかしまた、筋は通すけれども決して角は立てないというやり方も身につけていた。ルネの現在の状況については後に説明するが、とにかく一緒に仕事をしたことのある人なら、ここに紹介したルネの人物を否定できる者は今でもないだろう。もしルネに欠点があるとすれば、本人も認める通り、他の人、特に組織に頼まれたことを断れなくなるところであろう。これで家族には要らぬ迷惑をかけたとのことである。

例えば、こんなことがあった。ルネ夫婦は何年もまともな休暇を取ったことがなかったのでスペイン旅行を計画した。ところがそのすぐ前になって、当時奉仕部門の責任者だったハーリー・ミラーが連絡してきて、ちょうどその旅行期間に重なるような巡回奉仕の仕事を頼んだ。やはり引き受けるべきだろうとルネは考えた。「主の組織」からの仕事を断ったことなどなかったのである。結局ルネの妻は母親とスペイン旅行に出かけた。

こういうこともあった。ルネはラガーディア空港の近くに住んでおり、奉仕部門のメンバー（これにはハーリー・ミラーもいる）が飛行機で週末の出張講演に出かけることがあると、いつもルネにホテル本部までの送迎を頼んでいた。飛行機によっては真夜中近くに着くものもあったし、さらに遅くなるものもあった。ルネはどうしても送ると言ったら、長い付き合いだからと思って私もお願いしていた。しかし、まもなく他の人たちがそんなルネをいかに利用しているかを知ってやめることにした。ルネの性格の良さに付け込んでいるような気がしたのである。その後、よほど例外的な場合を除いては、他の交通手段を捜すことにした。

統治体では「組織に対する陰謀」を企てた人間一掃のため非常手段にまで訴えたのだが、その人物リストがあるとすれば、エドワード、ルネ、私の三人の名が挙がっているだろう。しかしこの三人が一緒に顔を合わせたことなど一度もなかった。問題の時期にルネととともに話をしたのは二度だけである。エドワードとルネの間についても同様である。それでは我々の良からぬ行動というのは何であったのか。長年の友人同士として聖書の話をした。それだけで

ある。

ルネは、長老を対象にした協会主催のセミナーに出席していたある晩私のところにやってきた。セミナーはおおむね良いというのがルネの感想だった。しかしこういうことも言った。「まるで我々は数字を崇拜しているようにも思えますね。できればいつそ報告書なんかなくしてしまえば良いなと思うこともあります」。報告書というのはエホバの証人一人一人に毎月提出させる報告書のことである。どんな「証言活動」へ伝道活動をしたのか、何時間したのか、何を配布したのか、などが書かれている。^{※21}

私はその少し前に行なわれた地域大会での「信仰と業」の話にあつた要点をいくつか思い出し、その話をした。さらにこれに関連してパウロがローマ人への手紙で言っている内容についても話合った。私の見るところ、パウロは何よりもまず人々の信仰を築くことを求めている。これができれば業は後からついてくる。真の信仰は真の愛と同様、生産的にして前向きなものだからである。誰かに一定の仕事をさせようとしてじつと監視していれば、それはその圧力でやるかもしれない。しかしこれで信仰と愛による仕事と言えるだろうか。神に喜ばれる仕事だとは言えないのではないか。

要するに信仰による行為というのは自然に出てくるもので、きちんと体系化させたり、無理に何かの型にはめるものではないと思った。ちょうどそれは愛による行為が自然に出てくるもので、誰か他の人によって決められたスケジュールに従って行なうものではないのと同じである。物事をきちんと取り決めるのは良いことだが、それはその方が便利だからである。それをさりげなく強制の手段にしてしまい、その「型に従わない」人に罪悪感を起こさせるの

※21 これら報告書は重要なのである。エホバの証人は所属会衆に報告し、会衆はその国の支部に報告し、支部は毎月世界本部に詳細な報告書を送る。本部ではそれら報告書をとりまとめ、平均値を算出し、増加率を記録する。ちょうど大きな会社が売上・業績などを熱心に調べると同じようなものである。奉仕時間や出版物の配布数などに変動や減少が見られると問題ありとされる。したがって支部代表は、自分たちの国の報告書が活動の増加を示していなかったり、あるいは減少を示していたりすると頭を抱える。

はおかしい。仲間のクリスチャンの生き方、活動などを監視・監督してやろうとすればするほど、実際には信仰と愛による自発的行為が出てくる機会を奪ってしまうものである。確かに、人々の信仰を築き、聖書を味わってもらおうというのは難しい。がんばってくれたまえという「励ましの話」をしたり、がんばってないから自分はダメだと思わせたりする方がよほど簡単である。だが、このパウロの言っているところから見ても、この難しいと思われる方をやるのが聖書に合った賢いやり方であるように思う。

以上のようなことをルネと話したのである。報告書の話に端を発してはいたのだが、もう報告書そのものの話は出なかった。それから少し経って、あるビルのロビーで会った時には、あのパウロがローマ人への手紙で言っていることを胸におくと巡回・地域監督の仕事も楽しくなったし、長老との話し合いなどもより意義のあるものになったと言ってくれた。

それからまた何週間か経って、私と妻はルネの家へ食事と呼ばれた。我々が初めてニューヨークに来た頃の何年かはクイーンズのスペイン語会衆で一緒だったものの、それ以来四人で集まるのは滅多にないことだった。この時は食事の前から食後の時間まで、ルネはずっとローマ人への手紙のことを話していた。私は、妻と話す時ほどではないにせよ、話をそらさずに質問に答えるべきだと感じた。もう三十年の付き合いだったし、真剣に聖書のことを勉強しているのはよくわかっていた。そこで私も組織幹部の一員としてではなく、友人として話をした。また聖書という神の言葉について語るのだから、自分の責任は、人や組織に対してではなく、神に対して持つべきだと思った。ルネのような人物を前にして、聖書に明記してあると思うことを話すのを避けたりしては、パウロがエフェソスの長老に向かって言った言葉にもとることになる。これは使徒20章26節と27節にある言葉である。

ですから、今日この日に、わたしがすべての人の血について潔白であることに關して、あなた方に証人となってもらいます。わたしは何一つ差し控えることなく、神のみ旨をことごとくあなた方に伝えたからです。

これが原因でエフェソスの会衆で悪し様に言われたことがパウロにはよくわかっていたのである。^{※22} 私、これと同じような結果になるかもしれないとわかっていた。

聖書の話をする中で、ローマ人への手紙8章のはじめの部分についても話し合った（これはこの章で先ほど取り上げた）。14節、神の子について書かれている部分を全体の話の流れから見ても考えるか尋ねてみた。ルネはそんなことを考えたことがなかった（他のエホバの証人もまず考えたことがないだろう）。ルネは素直に驚いていた。他の人には当たり前のことでも、エホバの証人にとっては天啓かとも思われるほどのショックを与えることがある。ルネはこう言った。「もう何年もずっと、聖書を読みながら聖霊を拒否しているような気がしていました。ずっと読んでいつて自分にそれを当てはめていくうち、急に止まってしまふ。あ、これは自分には当てはまらないんだ、油そそがれた者たちだけに当てはまるんだと思うわけです。」

私はまったくルネを説き伏せようなどとはしなかった。それはルネにもわかっていし、神もご存知のことである。聖書にあるパウロの言葉がルネを納得させただけなのである。後にちよつと顔を合わせた時、あれ以来聖書全体が生き生きとしたものになり、それまでよりずっと大きな意味を持つようになったと言ってくれた。

奇妙なことだと思われるかもしれないが、（八千七百人余りいる「油そそがれた者」以外の）エホバの証人がマタイから啓示（黙示録）に至る聖書の内容がまさに自分に向けられたものであり、拡大した「解釈」など不要で、本当に直接自分に当てはまるのだと納得すると、突然数多くの疑問が出てくる。答を求めているながらも敢えて尋ねようとはしなかった疑問の数々である。

今、協会が自分たちの解釈を守るために事実や聖書を歪曲するのを目につけ、この組織のためだからといって口を閉ざさず、少なくとも何人かの人たちには今紹介したようなことを伝えることができたのは有り難いと思うば

かりである。

一九八〇年三月四日、私は統治体の人事委員会に届けを提出し、三月二四日から七月二四日までの休暇を願い出た。私も妻も健康のためにはどうしても長期休暇が必要だと考えたのである。また、その間に仕事と住む場所を捜して、本部での奉仕をやめる場合に備えようとも思っていた。預金は六百ドルほどで、他に資産といえは七年間乗り古した車が一台あるばかりだった。

まずはきちんとした健康診断を受けることにした。私は心臓がかなり危ないということだった。

アラバマの地域大会に出た時、ピーター・グレガソンというエホバの証人と知り合いになっていた。その後もピーターは、地元の会衆で話をしてくれと言って、何回かアラバマのガズデンに招待してくれた。ピーターはアラバマからジョージアにまたがる地域で小さなスーパーをいくつか経営していた。一九七八年に私と妻が「地帯旅行」でイスラエルへ行った時にはピーター夫婦と現地で落ち合い、二週間の間一緒に聖書ゆかりの地を巡った。

その時のことであるが、ピーターは一九七五年の予言（あるいは「思わせぶりな予言らしきもの」）がもたらした影響が気になると言った。協会が一九一四年を喧伝するのは重大な誤りだろう。もしこの一九一四年をあきらめざるを得ないことにでもなれば、一九七五年の預言が幻滅に終わったことなど比べものにならないほどの衝撃になる。私はまったくその通りだと言ったが、それ以上はその話をしなかった。

さて、我々が休暇を申請したと聞いたピーターは、是非うちに来てくれと言って、息子さんの一人が持っていた移動式家屋を提供してくれた。さらに、自分のところで庭仕事をやってくれれば給料という形でお金も出せるし、医者への勤める運動にもなるでしょうと言ってくれた。

ピーターは、幼い頃父親がエホバの証人になったので、四つの頃から集会その他に連れて行かれるようになった。後には全時間の「開拓者」となり、結婚して一児をもうけながらも何とか全時間の活動が続け、清掃員の仕事などを

しながら収入を得た。^{※23} 協会がピーターをイリノイとアイオワの「問題のある」地区に送り、ごたごたの解決と会衆の立て直しを図らせることもあった。一九七六年には、統治体と話し合いを持つ長老代表グループの一員として選ばれ、ブルックリン本部に招聘された。後にはアラバマ地区の長老対象セミナーの司会者に任命された。

しかしこのセミナーから一年ほど経つと、ピーターは会衆の長老をやめようと決心する。ちょうど自分の店を兄弟の一人に譲り、できた時間に聖書の研究をしていたところだった。協会の教義に今一つ飲み込めないところがあったので、自分が長年信じてきたことに自信を取り戻したいと思ったのである（この時ピーターは五十代前半であった）。

すると結果はその正反対になった。聖書を調べれば調べるほど、協会の教義には重大な誤りがあることがはっきりしたのである。これが長老をやめる契機になった。この話をしてくれた時の本人の言葉は、「大勢の人を前にして、自分で聖書の根拠がないとわかっている研究の司会なんてできません。偽善者みたいな気分になるだろうし。良心というものがあれば、できないですよ。」というものだった。やめると聞いた時は私も考え直すように言ったが、ピーターの疑問が正当なものであることは争えなかったし、その良心的な態度、嘘を嫌う気持ちは尊重するしかなかった。ピーターは私より早く、決断を下すべき岐路に立っていたのである。

このピーターを、後に組織では「邪悪な男」であるとし、一緒に食事をすることも許されない人物であると言った。私は一九八一年にピーターと食事をしたかで審理にかけられ、組織から追放された。

さて一九八〇年四月、ガズデンで休暇を取っている最中、ブルックリン本部の方では奇妙なことが起こっているらしいことを耳にした。思った通り、攻撃の嵐は我々の方に向けられ始めていたのである。

※23 ピーター夫婦には現在子供七人に加え、十七人ばかりの孫がいる。

審理

「イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、何か言葉じりをとらえようとねらっていた」 ルカ11・53、54（新共同訳）

宗教用語としての「審理」とは、その人の信念・信仰について調べることである。

歴史的に見て、審理の目的は、その人を正しい方に導いたり、言い分を聞こうとしたりすることではなく、異端者を告発することにある。

取り調べの端緒になるのは、平和や調和を乱すといった実害でもなく、また信ずるところを叫んでいることでもない場合が多い。ただ疑問視されるだけで異端審理となる。容疑者には何の権利も与えられず、親しい友人と交わした言葉ですら審理の対象となる。

審理というとスペインの異端審問における残酷な処罰が知られているが、実はそれだけで悪名が高いわけではない。宗教裁判所の権威主義や、一方的な尋問で異端者を告発することもその悪名に一役買っている。今日、拷問や残酷な刑罰の方は違法となっているが、権威主義的な、一方的な尋問はまだ看過されるものらしい。

ここで思い出すのは『目ざめよ!』1981年1月22日号（1981年4月22日号）に載った「法の起源を探る」と題された記事である。モーセの律法による見事な判例を挙げながら話を進める中、次のように言う。

イスラエルの地方裁判所は町の門の所にあつたので、裁判が公開で行なわれるかどうかの問題はありませんでした。（申命16・18）
20）公開裁判の形だったので裁判官は注意深く公平な裁きを行なわざるを得ませんでした。そうした特質は、内密裏に行なわれる専断的で不公正な裁判所の審理では時として失われてしまっています。（17頁）

この通り「公開裁判」「公平な裁き」が賞賛されていた。ところが実際にやることはまったく反対だった。イエス

が「彼らは言うだけで、実行しない」と言っていた通りである。^{※24} 実際に起こったことを見ると、「内密裏に行なわれる審議」ばかりだったことが明らかである。真理の持つ力を恐れているのでなければ、そんなことは行なわれない。結局こういうやり方は、公正さや憐れみとは無縁であり、とにかく告発してやろうというやり方に他ならない。

休暇に入って四週間の後、アラバマにいた時、エドワード・ダンラップから電話があった。何でもないことを少し話した後、エドワードは、実は統治体のメンバー二人、ロイド・バリーとジャック・バーが自分のオフィスに来て、三時間ほど尋問していったのだと切り出した。途中で「この『詰問』は一体何のためです」と聞いたところ、いやこれは「詰問」ではなく、ただちょっと意見を聞きたかっただけなんだという返事だったという。

どういうわけでそのような尋問に至ったかの説明はなかった。話を聞きたかっただけとは言っていたが、組織の異端審問と処罰の幕開けという印象を受けたという。聞かれた内容は、組織についてどう思っているか、一九一四年の教義をどう思うか、クリスチャンに二つの級があることや天に行ける望みについての教義をどう思うかなどだった。

まず組織について、エドワードはこう答えた。何よりも心配なのは統治体のメンバーが聖書を研究しないことだ。日常のごたごたにまぎれて聖書をおろそかにしたりせず、何よりも聖書の調査・研究を第一とするのが兄弟たちに対する義務だろう。また一九一四年の教義については、正直なところ、何も断定的なことを言うべき事柄ではない。統治体自身、これを本当に確実で間違いないものだと思っておられるのかどうか聞いてみたい。これに対するロイド・バリーとジャック・バーの答は、「疑う者も一人二人いるが、統治体全体としてはこの年代を支持している」というものだった。そこでエドワードは、執筆部門の他のメンバーにも意見を聞けば、みんな何らかの点で考えが違っているのがわかるだろうと言った。

また別の日、アルバート・シュローダーとジャック・バーが執筆部門のメンバー一人一人に対して尋問を始めた。教義について疑問を持っていますとは誰も言わなかった。しかし、仲間内で話している時にはメンバーのほぼ全員が何らかの意見の違いを口にしていたのである。

ここで皮肉なことは、統治体内部でも意見の食い違いがあったことである。しかし尋問している方がこれを進んで認めることはなかった。

この時、統治体執筆委員会の調整者であり、執筆部門の調整者でもあるライマン・スウィングルは地帯旅行のため不在だった。そんな時に執筆部門メンバーの尋問が始まるというのはどう考えても不思議だった。尋問している統治体のメンバーの方にも、何か特別な事態が発生したために大がかりな尋問を行なっているという様子はまったくなかった。この組織がこんな風に説明なしに物事を行なう時には、誠実なことを堂々とやっているのではなく、後で非常に傷つく人が出ることをやっている――私はそれまでの経験からこう思った。そこで一九八〇年四月二日月曜日、アラバマからブルックリン本部に電話をし、統治体のメンバーのダン・シドリックを出してくれるよう協会の電話受付係に頼んだ。今おりませんという返事だった。そこで今度は、統治体のメンバーのアルバート・シュローダーを出してくれるように頼んだ（シュローダーはその年の統治体司会者を務めていた。しかしこちらもやはりいない。そこで受付係に伝言を頼み、二人のうちどちらから電話を頂ければ有り難いのだと言に残した。

翌日シュローダーから電話が来た。

こういう話が交わされたか、シュローダーが統治体司会者としてどういう具合に私の質問に答えたか、これを紹介する前にまず、後からわかったことを先に記しておきたい。その電話の段階でどんなことが起こっていたのかである。

四月一四日（シュローダーが電話をしてきた八日前）、ニューヨーク在住のエホバの証人でジョー・グールドという人物がブルックリン本部の奉仕部門に電話をして、奉仕部門委員会（五人の委員からなる）のメンバー、ハーリー・

ミラーに次のような話をした。^{※25} ウンベルト・ゴディネスというキューバ人の同僚（やはりエホバの証人）がいるの

だが、その同僚によると、知り合いのベテル家族メンバーが家に来て、協会の教義に反することをいろいろ言ったらしい。そこでミラーは、そのゴディネスという人から問題のベテル家族メンバーが誰なのか聞いてみてはどうかと言った。その結果、問題のメンバーはクリス・サンチェスという名前だということになった。また、ゴディネスは、私の名前やエドワード・ダンラップ、ルネ・バスケスの名前も話に出たと言った。

ここでミラーはグールドとゴディネスに向かって、問題の人たちとよく話し合ってみてはどうか、とは言わなかった。また、自分の知り合いであり、すぐ近くのオフィス（道の向かい側）にいるエドワード・ダンラップに話をしようとしなかった。長年の付き合いがあり、しかもいつも車で送迎してもらっているルネ・バスケスに電話をしようとしなかった。協会内の工場で働いていて、電話をすればすぐにつかまるクリス・サンチェスに連絡をしようとしなかった。

ではミラーは何をしたのか。まず奉仕部門委員会のメンバーのところに行って、この手のことを聞いていないかと尋ねたのである。次に統治体司会者であるアルバート・シュローダーに話をした。

その結果、ゴディネスとその妻を本部に呼んでミラーと面談させようと決まった。クリス・サンチェスにも、エドワード・ダンラップにも、ルネ・バスケスにも、まったく何の連絡もない。私にも何の連絡もない。統治体の司会者の委員会では、問題を大きくしないよう友愛をもって対処するのは望ましくないと判断したとは思えない。

さて、そのゴディネス夫妻との面談で、ミラーはゴディネスに向かって、一度ルネに電話して本人はどう思っているのか「うまいこと」聞いてみてはどうかと言った。自分でその電話をかけるとか、あるいは自分でエドワード・ダンラップに電話するなり、通り向かいまで行って話をするなりしようとは思わなかったわけである。ゴディネスはル

※25 この委員会は奉仕部門を管轄するもので、当時約四十人のスタッフがいた。

ネに電話し、告発に値するであろう返事を得た。ねらい通りの結果である。そこで再びゴディネス夫妻は呼ばれ、今度は統治体のメンバーのシュローダー、スター、クラインも同席した面談となった。これは四月一五日火曜日のことである。この段階でもまだ、ルネにもエドワードにもクリスにも私にも連絡はない。この面談は二時間に及び、その内容は録音された。ゴディネスが自宅での食事の後、同じキューバ人であり長年の友人でもあるクリス・サンチェスとしやべったことについて、ゴディネス一人の記憶と印象だけを頼りに話を聞いたわけである。問題となる点がいくつも出た。録音を聞くと、ゴディネスの話にはルネ、エドワード、そして私の名前が何度となく出てくる。終わりの部分には、統治体のメンバー、シュローダーとスターとクラインの三人がそれぞれゴディネス夫妻に声をかけ、その忠節心を誉めた上、話に出てきた連中はけしからんと言っているのが収録されている。

ミラー同様、統治体の司会者の委員会もクリス・サンチェスに直接話を聞こうとはしなかった。証拠は、第三者から聞いた話だけである。ルネ・バスケスにも、エドワード・ダンラップにも、私にも、話をしようとしな。この三人についての証拠はさらに間接的で、単に話に出たというだけである。それでも翌日の一九八〇年四月一六日水曜日になると、統治体会議において司会者の委員会は二時間にわたるこの面談テープを出席メンバーに聞かせた（その会議では、ミルトン・ヘンシェル、ライマン・スウィングル、そして私が欠席していた）。

さて、概略以上のようなことが、シュローダーが私に電話をくれる一週間前に起こっていた。その電話にしても私が頼んでやっとかけてくれたのである。

この会議で統治体のメンバーがテープを聞いてからやつとエドワード・ダンラップが尋問を受け、ついで執筆担当メンバーが質問を受けた。つまりテープあつての尋問だったわけである。尋問する側だったバリーもバーもシュローダーもそれはよくわかっていた。ところがこの三人は一言もそんなことを口にはしない。エドワードがバリーとバリーに尋問の理由を尋ねても言わない。これは一体どういうわけだろうか。

続く一連の動きは素早く、大がかりに、手際良く行なわれた。クリス・サンチェスとその妻が呼ばれ、さらにネス

ター・クイラン夫妻が呼ばれ、尋問を受けた。ネスターはクリスと一緒にスペイン語翻訳部門で働いていた。その部門はすなわちルネが週に二日手伝いに来ていたところだったのである。

この段階でミラーはルネに電話をし、オフィスに来てくれないうちと言った。「ちょっと知恵を拝借したいことがあるだけ」というのが理由である。

司会者の委員会ではすでに調査委員会なるものを結成しており、問題の人物一人一人を尋問する手はずをしていた。調査委員会のメンバーは、ダン・シドリックを除くと全員統治体のメンバー以外のスタッフである。統治体は司会者の委員会を通してすべてを統轄していたが、ここから先は表に出なくなる。尋問する委員に件の面談テープの一部を聞かせ、委員会としてどういう動きに出るかの参考にさせた。このテープがあったからこそ、クリスやネスターやルネが尋問を受けた時には私の名前やエドワードの名前が何度も話に出た。ところが我々に対してはそんなテープの存在すら口にしない。これは一体どういうわけだろうか。

調査委員会の目的は、その質問のやり方から明らかだった。例えばネスター・クイランを尋問した時には、エドワードと私との会話の内容を供述するように言った。ネスターは、そういう個人的な会話は他の人が調べる権利のないものだと思うと答えた。間違ったこと、「罪深い」ことが少しでもあると思えば言うけれども、この場合まったくそうは思わないとも明言した。すると尋問者側は「協力してもらわないとあなたも排斥になるかもしれない」と言う。ネスターが「排斥だって？ 一体どうして？」と聞くと、「背教を隠しているから」という答である。そこで「背教？ どこに背教が？ 誰が背教者なんです？」と聞くと、それはまだはっきりしていないが、とにかく背教者がいることは確かなのだという答だった。

これは言ってみればこんな状況である。ある人物について情報を提供しろ、でなければ監獄に入れるぞと脅される。どういうわけで監獄に入らないといけないのかと聞くと、銀行強盗の共犯のかどだと言われる。「どの銀行がやられ

「たんだ、誰がやったんだ？」と聞くと、「いや、どの銀行なのか、誰がやったのかはまだわからないんだが、とにかく銀行強盗がどこかであったのは確かなんだ。質問に答えて協力しなければ、お前も共犯で監獄に入ってもらうぞ」とくる。

ネスターは、エドワードは自分がギレアデ学校に行った時の教訓者だったのでそれ以来の知り合いであると言い、私については私がプエルトリコの支部の監督だった頃からの知り合いであると言った。確かにこの二人と話したことはあるが、その会話の内容に罪深いことは一切なかったし、こういう会話は個人的な事柄だとも言った。

以上に見た通り、アルバート・シュローダーが私に電話をかけてきた四月二二日の段階では、組織の審理機関がすっかりできあがって行動を開始していた。シュローダーは統治体の司会者として他の誰よりもこのような事情に通じていた。何しろ調査委員会にはこの司会者の委員会が指示を与えていたのである。

シュローダーには、この電話の一週間前に、先ほど紹介した二時間にわたる面談の録音テープを、自ら指揮する委員会が統治体に聞かせていたことがわかっていて、

また、調査委員たちが全員まずそのテープの一部を聞かされるという「打ち合わせ」が行なわれていたことも知っていた。私に電話をくれた時には、委員たちが尋問に当たって私の名前とエドワードの名前を出していたこともわかっていて。

さらに、尋問では「背教」の罪という極めて深刻なことが言われていることもシュローダーにはわかっていて。何十年來の知り合いであり、「兄弟」と呼んでいた私とエドワードの二人に及ぼす影響もわかっていたはずである。

さて、そのシュローダーが電話で私にどんなことを言ったかという話である。こんな具合であった。

はじめの簡単な挨拶のやりとりがすむと、私はこう尋ねた。「ところで、一体執筆部門はどんな様子なんだい。」シュローダーの返事は、

「ああ、統治体で、執筆部門を調べて、連絡・協力体制を強化して効率を上げるにはどうしたら良いか考えようということになったんだ。あと、兄弟たちの中にちょっと納得のいかないことがある人がいるかなと思って」

この最後の部分、納得のいかないことがある人についてのところは、別に大したことがないことをつけ加えたという言い方だった。実際のところ何が起きているのかはつきり言えるはずのところだが、言わない方を選んだわけである。

次に私は、一体どういうわけでそんな大がかりな調査をしているのかと聞いた。これまたシュローダーにとって正直に言おうと思えば言える質問である。返事は、

「まあ、執筆部門の仕事ぶりが良くないんだ。この夏の大会で出す本なんだけど、工場に回るのが遅れそうだね」

今度もまた、質問にはつきり答えず、はずれた返事をしたわけである。この返事に対して、私はこう言った。別にそれは珍しい話ではない。しかしその前の年には、『ヤコブの手紙の注解』（エドワード・ダンラップの書いたもの）も『最善の生き方を選ぶ』（ラインハート・レントタットの書いたもの）も一月はじめには余裕をもって工場に回せた（私がこの事情に詳しくかったのは、実はこの二冊を間に合わせるというのが自分の仕事だったからである。この一九八〇年の本『幸福——それを見いだす方法』は本の執筆経験がないジーン・スモーリーが書いており、その監督役は私の担当ではなかった。いづれにせよ、そんな調査が必要だとは思えないのだが。するとシュローダーはさらにこう言った。

「それから兄弟たちの中には自分たちの書いた記事が書き直されるのが気に入らないと言うのがいるんだ。レイ・リチャードソンなんか、「ここでその記事のテーマを言え」についての記事を書いたところが書き直されてずいぶん気分を害したって言うんだ」

そこで私はこう答えた。「まあ、ものを書くのがどんなことかご存知なら、誰も書いたものをバツサリやられたくないっていうのはわかるだろう。でもこれも珍しいことじゃあない。執筆部門ができて以来ずっとそうなんだから。ライマン「これは執筆部門調整者のライマン・スウィングルのこと」はどう言ってる？」

「いや、ライマンは今いない。」とシュローダーは言う。

「それはわかっている。地帯旅行に出てるんだから。連絡の手紙は書いたのかい。」

「いや、書いていない。」

そこで私は言った。「それはすごく変だと思うんだ。例えば、ミルトン・ヘンシエル「これは工場の機能すべてを管理する出版委員会の調整者である」がいらないとする。それから出版委員会のメンバーがもう一人、例えばグラント・スーターもいらないとする。そこで統治体の方に、どうも工場の働きが良くないという連絡があったとしよう。この二人がいらない間に統治体が大がかりな工場の調査を始めると思ukai?」（そんなことは考えられもしないことはわかっていた。

シュローダーは少し躊躇し、それから言った。「まあ、統治体がそうしろと言うから、こっちとしては報告書を作ってるだけなんだ。報告は明日だ。」

私は答えた。「じゃあその報告書に僕の考えも入れてくれると嬉しいんだけど。ライマン・スウィングルに相談もなし、連絡もなしでいろいろやり始めるのは、すごく失礼だと思う。長年奉仕していることや、地位も考えらる。」シュローダーは、そう伝えると言った。私はさらに、もし本当に重要なことがあつて話し合いが必要なら、いつでもそっちに行けるからと言った。シュローダーが「本当に?」と言うので私は「もちろん。飛行機に乗ってそっちに行けばすむことなんだから。」と言った。するとシュローダーは次の水曜日に来てくれるかと言う。私が「でもライマン・スウィングルがいなければ意味がないだろう?」と言うと、その時の会話はそれきり終わりとなった。

シュローダー——エホバの証人の統治体司会者である——には、私の質問に率直に答える余地がいくらでもあった。こんな風にも言えたのである。「レイモンド、非常に重大な事態が発生していて、背教の告発まで出ている。君の名前も出ている。とにかくまずは君に話をするのがクリスチャンらしいやり方だと思ったんだが。」

ところが、こんな言葉はまったくなかった。もちろん、この後半のところなどは言えようはずもなかっただろう。何しろこの当人も含めた司会者の委員会のメンバーが大きく行動に出て、面談のテープ録音や調査委員会による尋問などを行っていたのである。結局、統治体を代表するシュローダーという人物が私に話したことは、言ってしまう作り話であり、嘘であった。しかしそれがどの程度の作り話なのか、その時の私にわかるうはずもなかった。後に少しずつわかってくるのだが、それは主に統治体外からの情報でやっとわかったのである。

さて、統治体とその司会者の委員会のやったことが理解に苦しむものであるとすれば、さらに理解できないこと、むしろ弁解の余地のなさそうなことがある。それは、本部（つまりその場）にいたエドワード・ダンラップに率直な話があったことである。特に、尋問するロイド・バリーとジャック・バーの二人に向かって何のためにこんな尋問をするのかとエドワードが聞いた時など、公明正大な態度をとろうと思えばとれただろうし、なぜ統治体が尋問させているのか、どういう告発がなされているのか、などを明らかにしてしかるべきだった。イエス・キリストの言う、自分が人からしてほしい通りに人に対して行なえという言葉をはじめとする聖書の原則に基づけば、誰かがエドワードに、君の陰で「背教」のかどによる告発がなされているぞと率直に言う以外のやり方はなかったはずである。ところが、事情をすべて知っていながらも、言おうとしない。そしてその後一か月近く、何も言わなかったのである。しかるにエドワードの名前は、私の名前と共に調査委員会メンバーの間を回り、審理委員会に伝えられ、少なくとも合計十数人の人たちに回されていたのである。その間、統治体の誰一人として、告発されていることや名前も出ていることについてエドワードに言おうとはしなかった。毎日のように顔を合わせていながらである。

こういうやり方がクリスチャンの名にふさわしいとは到底考えられない。

さて、四月二五日金曜日、シュローダーから電話があった三日後、統治体の司会者の委員会が管轄する審理委員会はクリス・サンチェスとその妻、及びネスター・クイランを排斥処分にした。ルネとエルシーもまた別の委員会によって排斥となった。ルネが奉仕していた会衆の隣にあった会衆の長老も排斥となった。この長老を除き、排斥になった者の名前が全本部スタッフの前で読み上げられ、以上の者が排斥になりましたという連絡がなされた。つまり千五百名を超える人々が統治体から知らされたのである。が、私には何も知らされなかった。最終的にはもちろん耳に入ったが、これは排斥にされた人たちから電話があつたからわかつたのであつて、仲間の統治体のメンバーからの連絡ではなかった。

本部スタッフのメンバーとして十年間奉仕し、クリス・サンチェス夫妻ともネスター・クイラン夫妻とも知り合ひだつたダイアン・ビーズという人がいる。この四月二日から二六日までの一週間に起こつた出来事について次のように語っている。

「あの一週間で一番心に残つたのは、仲間たちが受けたむごい仕打ちです。みんないつ委員会に呼び出されるのかわからない状態でした。突然電話が鳴ってクリスが呼ばれる、戻ってくるとまた電話が鳴って今度はネスターが出ていく——これが続くんです。その一週間は、ずっと落ち着きませんでした。ある時ノーマと話をしていたら、実は委員会からクリスのいない席で話を聞かせてほしいと言われていて、どうして良いかわからないと言うんです。わたしは、そういう話をする時はクリス本人がいないと駄目と言つたんです。そうでないと、どんなことを聞かれてどう答えたのか、ちゃんと見ている人がいないことになる。後になって何とでも言われるだろうし、それは違ふと言つても証明できないことになる。これは結局、ノーマとクリスを喧嘩させるのが目的らしかったです。」

「とうとう金曜日〔四月二五日〕の午後四時四十五分、わたしたちが仕事をしている八階まで委員会のメンバーがやってきて、わたしの席のすぐ後ろにある会議室に入ってきました。みんな仕事を終えて帰り始めましたが、わたしはどうなるかと思つて様子を見

ることにしました。クリスとノーマとネスターとトーニが呼ばれていきました。一人一人出てくるとわたしはどんな「判決」を受けたのか聞きに行きました。ネスターのところに行つて、ネスターとトーニに話をしようとしたら、一緒にいるところを見られて厄介なことにならないように早く帰つた方が良いと言ふんです。わたしは一人で歩いて帰りましたが、その間泣き出しそうになるのをずっとこらえていました。もうどうしようもない気持ちでした。あんなことが起こっているなんて、信じられない気持ちでした。あの気持ちには忘れられません。何年間もずっとわが家みたいな場所だったのに、ずっと楽しく過ごしていたのに、突然知らない場所になったみたいでした。クリストが人はその実でわかつたことを考えました。あの一週間に見たり聞いたりしたことは、クリスチャーンであることとはほど遠いことだとは思えませんでした。余りにもひどい、優しさのかけらもないやり方でした。何年も何年も協会に奉仕していて、評判も良かったしみんなに好かれていた人たちだったのに、何の同情もしてもらえなかつたんです。どういうわけかまったくわかりませんでした。」

「その夜も集会がありました。行く気持ちになれませんでした。レズリー「これはダイアンのルームメイトである」が集会から帰つてきて、二人で話していたらノックの音がしました。夜の十一時ぐらいです。トーニでした。家に入らないうちからも泣き出して、ただもう泣いていました。ネスターの前では自分が動揺しているのを見せたくなかつたんでしょう。わたしたちはそこに座つて一緒に泣いてそれから話しました。トーニもネスターも今まで通り仲間だよつて言つて、とにかくできるだけ慰めてあげました。その夜は良く眠れなくて、朝の二時か三時に起きてしまいました。それからバスルームに座りこんでずっと考えていたんです。本当に悪夢のようで、現実のこととは思えない感じでした。」

「土曜日の朝、ネスターとトーニ、クリスとノーマに会いに出かけました。ネスターとトーニの部屋に行くと、ちょうどジョン・ブー「統治体のメンバーの一人」が出ていったところでした。上訴は統治体が却下したと伝えに来ていたのです。委員会では金曜の晩に、上訴なら翌朝八時までに出すようにと言つていたのです。それだけでもひどい話でしたが、それでも八時までに上訴を提出してました。ブーはわざわざ駄目だと言いに来たんです。ネスターがブーにそのわけを尋ねると、自分はただ『お使い』に来ただけだからと言って、いかにももう話はしたくないという様子だったそうです。」

こうして、四月二一日から四月二六日（月曜日から土曜日）の六日間に、何十年もの間組織にいて、神への奉仕と信じたことに心も時間も捧げた人たちが排斥になった。その間、尋問に際して聖書が引き合いに出されることがあつ

たとすれば、それは非難攻撃の道具としてであった。使徒パウロがテモテへの第二の手紙2章24、25節で説くやり方ではなかったのである。

「主の僕たる者は争わず、すべての人に柔和に接し、教えることができ、よく忍び、反抗する者を優しく教え導かねばなりません。神は彼らを悔い改めさせ、真理を認識させて下さるかもしれないのです。」〈新共同訳〉

どんな宗教団体でも、教義の聖書の根拠について疑問を持つ信者がいれば、聖書に基づく話し合いをする時間をとるべきであろう。何時間とか何日間ではなく、何週間、何ヵ月という時間である。それをしたがらないというのはその団体の質の悪さを示すものだと思う。ところが本部で尋問されている人たちが聖書に基づいた点を出した時の返事は簡単だった。「我々はあなた方から聖書について質問を聞くためにわざわざここにいるのではない」である。ミラーがルネに言った言葉はこうである。「私は聖書学者じゃない。協会の出すものに追いつこうとするだけで精一杯だ。」尋問している側にとつての関心事は、神、そして神の言葉に忠実であることではなく、組織、そして組織の教義に忠実であることなのである。これが数多くの協会の出版物に書かれていることはすでに見た通りである。

この排斥になった人たちのうち誰一人としてエホバの証人から離れたいと思った人はいないし、また他の人を離れさせようと思った人もいない。この人たちの気持ちは、以下に掲げるルネの手紙に痛切に表れている。これはルネが自分とその妻に対する排斥処分に上訴するものである。

一九八〇年五月四日

親愛なる兄弟たちへ

この手紙によって、今一度皆さんの賢明で公平な判断をお願いする必要があるかと思っています。私たち二人は、言われている罪状について無実であることを確認したいのです。第一、告発しているのが誰なのかさえわかりません。

審理の時に何度も何度も心から申し上げましたが、エホバの神の前に正直に申し上げて、分派を作ろうとしているとか背教者であ

とかいいうのは、私たちとしてはまったく考えられないことです。私が過去三十年間をエホバへの奉仕に捧げてきたことや、自分の家族や外部での仕事のためには最低限のことしかしなかったことが、何よりもそれを示していないでしょうか。私が最近仲間の兄弟たちと聖書について個人的に話したことが、急に組織への攻撃だとか背教だとか言われるのはどうしたわけでしょうか。どうしても排斥という極端な措置が必要なのでしょうか。親身になってきちんと考え、真のクリスチャンの愛と情をもってすれば、協会の出版物に合わないようなことを軽率に言うことから生まれる誤解や心痛をいやすこともできましょう。排除すべき邪悪な人間、エホバを憎む者、反抗者、悪行を重ねて悔い改めようとしないような者——これがどこにいますのうでしょうか。冷たく同情のかけらもないやり方で背教だと機械的に決めつけて、ただ心から奉仕し、兄弟たちのために長い間心をつくしてきた人を糾弾する必要がどこにあるのでしょうか。

エホバの名を汚し、組織の名を汚しているというのは誰なのでしょうか。今現在とらわれている措置、愛情のかけらも見られないやり方、中傷的なデマ、思いやり・クリスチャン的な愛の欠如、人を疑う気持ち、尋問の恐怖——これらのことすべてが、何か不適切なことを繰り返した口にしたことになっている人たちに対する誤解や思わぬ仕打ちを何倍にもしているのではないのでしょうか。

兄弟たち、私たちの胸には兄弟たち全体への愛情があるのみです。私も妻も、兄弟たちの信仰に混乱をもたらそうと思ったことは一度もありません。イエス・キリストであればこういう状況にどう対処するのでしょうか。

審理委員会の目的は、背教の存在を立証することによって有罪を立証することにあつたようです。心から何度も、背教なんてとんでもない、考えたこともないと言っても、背教に対する告発が無理に続けられたのです。委員会では、私たちが仲間の兄弟と個人的に話した内容が、背教によって分派を作ろうとする邪悪な計画の一部であるとして、私たちを背教者にしようとしている様子でした。ハロルド・ジャクソン兄弟は少女のたとえ話を二回繰り返していました。ある少女が淫行の罪を犯していたが、自分ではそう思わず、罪など犯していないと信じ込むが、結局妊娠していることが判明するという話です。つまり、私たちがどれほど背教なんてとんでもないと思っても、またどれほどそんなこと考えられもしないと心から、良心にかけて思っても、やはり背教者だということです。

しかし、兄弟たち。私たちだって右手と左手の区別ぐらいはつきます。物事もわからず経験もない少女とは違うのです。けれども話の都合上仮にそうだとしても、つまり私たちに愛や知力や良心が欠けているために自分がわかっていないとしても、イエス・キリストならばどう対処するのでしょうか。例えばこの少女には愛情と憐れみをかけ、罪の支配がないように計らうのではないのでしょうか。

イエスが死んだのは憐れみが示されるためなのですから。

また、この少女の例を判断の原則として使い、淫行の覚えが本当でないにお腹が大きくなった別の少女がいても、同じ判断を下すのが神の知恵と言えるでしょうか。こちらの方はちゃんと検査をしてみたら子宮に嚢胞があることが判明するかも知れません。するとこの子は実際本当のことを言っていたわけです。それなのに尋問と心痛によって苦しめられ、しかもあの子は妊娠しているとか、ふたごが生まれそうだとか、三つ子が生まれたとかいう中傷的な噂が広がったかどうか。大変に不当なことではないでしょうか。本当に害を及ぼしているのは誰でしょうか。キリストの愛と憐れみがあればこんな不当なことは避けられるのではないのでしょうか。

であればこそ、安息日に癒しの業を行なったといつて非難する者にイエス・キリストはこう言ったのです。「うわべを見て裁くのをやめ、義になかった裁きで裁きなさい。」——ヨハネ7・24

審理委員の一人、エビスコボ兄弟は、誘導するような質問をしながら、背教者は自分の教えを心から信じているかもしれないが、それでも背教者には変わりないと言いました。つまり、そんな背教行為など自分たちには考えられないし、組織に対する邪悪な計画も、分派を作ろうなどというたくらみも、まったく身に覚えがないと言い続けても、やはり私たちは背教者だというわけでしょう。個人として仲間と話したことのために。

ところが、そのような背教の定義を使うのであれば、エホバの証人組織の歴史は背教行為の連続になってしまいます。イエスの目に見えない臨在が一八七四年に始まったと言っていた頃は、心からそう思っていたのです。しかしエホバはそれが聖書の真理には合わないことを知っておられたのです。すると、エビスコボ兄弟の定義に従えば、我々エホバの証人も背教者になってしまいます。組織では、神に捧げる心からの気持ちに基づいた教義が結局神の言葉に合わないものだったことが何度も何度もありました。組織の言っていた通りにならなかったことで信仰が揺らぐ人も多かったのです。しかし、このことでこの組織を背教者だと決めることが、憐れみと愛のあることだと言えるでしょうか。この組織を、復活はすでに起きたのだと言って他の人の信仰を覆したヒメナオとフィレト同様に扱うのは、理屈にかなったことでしょうか。

私たちが排斥となった理由とは、二、三の仲間と聖書について少し個人的な意見を交わしたというものです。我々一人一人が個人として持つ特権の一つは、友人あるいは信頼する人と内密に話ができることです。もしこの特権が奪われ、内密の話の内容を言わされて裁かれたり、あるいは信頼した友人が自分たちの身に起こることを恐れ、話をしたからといって私たちを責めるとすれば、組織

としていかなる服従を要求していることになるでしょうか。完全服従、あるいは絶対服従ではないでしょうか。そうするとキリストが会衆の頭であることを否定することにならないでしょうか。

個人的な会話で組織の教義に合わないことを言うだけなら、これまでいろんな人がしていましたし、私たちの委員会内でもありました。私だけでもかなり知っているのですから、他にどれほど多くの人がいることでしょうか。そしてこの多くの人たちからさらに話を聞いた人はどれほどの数になるでしょうか。これからも尋問を続けてそういう話をした人をすべて背教者だとすべきでしょうか。私がそういう話をしていた人の名前を出したりしなかったのは、それが不当なことだとわかっているからに他なりません。誰か他の人を指さしてあの人が悪いと言うことはしたくなかったのです。兄弟たちは、家で聖書を読んだというだけで怪しい、背教の疑いがある、あるいは「異端」になるのだろうかという、恐怖に駆られた気持ちでいなければならないのでしょうか。

審理の時、私はこう申しました。多くの兄弟にいくつかの点について極めて軽率なことを繰り返したとかで、混乱の原因が何か我々の方にあるとのこと、誠に残念で申し訳ない次第である。今後そのようなことを他の人に向かって言うことは一切ないであろうし、それどころか誰かそんなことを言う者があればやめるように言うであろう。するとハロルド・ジャクソン兄弟はずいぶん強い調子で、それならそれを保証してもらわないといけないと言いい、さらに、私たちは組織にとって危険だとも言いました。何かをこまかそうとしているようだ、言うことが信用できないという意味のことも言いました。聖書にはこういう時どうするべきだと書いてあるでしょうか。どうすれば「保証」することができるのでしょうか。誰かが分派を作ろうとしたかどで糾弾されるべきまっとうな理由がある場合でさえも、テトス3・10にはこうあります。「分派を助長する者については、一度、またもう一度訓戒した後、これを退けなさい。」二度目の訓戒がなされるのは、その人がさらに続けて新たな悪行を行ない、どうしても分派を作ろうとしていることが明らかな場合でしょう。仮に私たちが、一度目のまことに不幸な誤解によって、そういう者だとされたとしても、今はそれ以上の誤解を避けるため、不自然なほど口を閉ざしていることになります。単に保証しますと言うだけでは足りないという意味のことをパウロも言っていますが、二度目の訓戒を必要とせず、悪行も続いているのですから、十分保証になっておりましよう。ところがその保証をさせてもらう余地すら私たちには与えられないのです。

ジャクソン兄弟は、我々の言ったことが組織の核心を攻撃するものだとして繰り返し言っていました。しかしそんな攻撃などそもそも存在しませんし、攻撃してやろうという人も私は知りません。ひょっとしたら事情のよくわかっていない人が早まった思いこみをして苦情を言っており、その人の言ったことが鵜呑みにされたのではないのでしょうか。単に誰かの言ったことだとか早まった思いこみ

などを突然絶対の真理として受け止め、それでみんなを裁いていくというのはいかなるものだろうか。兄弟たち、目下とられている極端にして奇妙な措置は、まことに不愉快にして不可解なものです。

私たちは身に覚えのないことで裁かれましたので、義と憐れみを求めてここに上訴します。

本件が明確にされ、エホバの名が祝福されその民の霊的健康が保たれるようエホバに祈ります。

皆さんの兄弟

ルネ・バスケス

エルシー・バスケス

この手紙から約三十年前、ルネは自分の父親の家があまりにも不寛容で心が狭いと感じてそこを出た。エホバの証人としての活動を行なう自由を求めたのである。以来、その活動に身も心も捧げてきた。ところがわずか二週間で、その三十年間の奉仕は無意味だったとされ、厳しい尋問を受け、誠実な気持ちはないとしてはねかえされ、神とキリストに対する反逆者とされた。この手紙には、宗教上の不寛容さや心の狭さからは逃げたはずだったのに結局まさにその真っ直中にいることになったという深い苦悩が見える。

ルネは上訴が認められ、再び委員会と話することになった（これは五人の長老からなる委員会である）。その時には和解を求め、特定の教義についてどうこう言うつもりはないこと、何にせよ何らかの教義にすがりつくつもりはないことをはっきりさせたが、これはすべて言い逃れであり、罪のある証拠だと突っぱねられた。

質問に次ぐ質問に答えて何時間かが過ぎた時、上訴委員の一人であるサム・フレンドがルネの言葉を遮って言った。「全部痴れ言だ。とにかく今から質問のリストを読むから、イエスカノーかで答えればいいんだ。ルネはスペイン語が母語なので、「痴れ言 (Gogwash)」という英語がよくわからなかった。後になってそういう言葉があるとわかりはしたが、言われた時にはとにかく嫌な感じがして自分の中で何かが「切れた」ように思い、「いや、もう質問には答えたくない。あんたたちは僕を尋問にかけてめっちゃめちゃにしようとしている。もうこれ以上我慢できない。」と答

えた。話し合いは休止になった。ルネは席を立ち、通りに出るとたまらなくなって泣き出した。

委員会は、それまで通りの排斥処分を支持した。

ブルックリン本部の奉仕部門でルネと一緒に働いていた人たちは、その親切心を長年利用していた人たちも含めて、誰も何も言おうとはしなかった。ルネにも親切を返そうと言いつ出人もなかった。^{※26} 組織側の公正さの基準によれば、ルネがいかに誠実であろうと、非の打ち所のない過去三十年間の記録があらうと、組織に完全に同意して疑問も決して口にしないという態度をとらなければまったく意味がないのである。ここには使徒ヤコブの言葉が当てはまるところがあるかもしれない。

「自由をもたらず律法によっていずれは裁かれる者として、語り、またふるまいなさい。人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。」^{※27}

一九八〇年五月八日になって、やっと統治体は私の名前も挙がっていることを正式に知らせてきた。司会者のシュローダーから電話があり、統治体としてはブルックリン本部に来てもらって話を聞きたいと言うのである。私が何らかの対象になっていることを直接知らされたのはこの時が初めてである。

シュローダーが私の質問を二度までもかわして実際に何が起っているのか言おうとしなかった日から十五日が経っていた。あの二時間にわたる面談を記録したテープの存在も知らなかったし、それを統治体の会議で皆が聞いたことも知らなかった。そこから数えれば二十三日が経過していた。

その二十三日の間に、テープを統治体の会議で聞いたばかりか、テープで私やエドワード・ダンラップの名前が挙

※26 会合が「秘密の審議」的に行なわれていたのは確かであるが、奉仕部門には、直接話を聞いて、あるいは部門内のいわゆる「ゴシップ」によって、事情を知っていた人が数多くいた。

※27 ヤコブの手紙2・12、13（新共同訳）。

がつている部分を統治体外部の人間少なくとも十七人（調査委員や審理委員たちである）に聞かせ、本部スタッフ三名及び本部外の人三名を排斥にし（うち一人は私の三十年来の友人である）、ボネツリという人との面談をこれまたテープに録音している（これについては後で述べる）。さらにまた告発の対象になりそうな証拠をベテル家族メンバーなどから得ようとしており、情報を引き出すためには排斥をちらつかせて脅迫さえしている。

こういうことを全部行なうてから、統治体では私が関わっていることを知らせることにしたのである。これは一体どういうわけだろうか。

以上のようなことがいくらかでもわかったのは、よそから話を聞いたからである。私が九年間そのメンバーを務めていた統治体からは何の知らせもなかった。厳しい尋問を受け、審理にかけられたベテル本部のメンバーが電話をしてきて、これはあまりに無慈悲でひどいやり方ではないでしょうかと言うからわかったのである。この騒ぎ全体には最終目標があり、それはエドワード・ダンラップと私だろうという話だった。つまり、まずはそれほど知られていない目立つこともない「小物」に手を付けてその「罪状」を固め、これは一大事だという印象を与えておいて、しかる後により目立つ連中に手を出し始めるという手順ではないかというのである。これが正しいかどうかは別にして、とにかく電話をしてきた人たちはこう感じたのである。司会者の委員会のメンバーから直接話が聞ければ面白いだろう。何しろ報告はすべてそこに行っており、また調査委員会や審理委員会の質問に答え、かつ指示を出していたのもそこである。どういうわけであんなやり方をしたのか聞いてみたい。

その長であるシュローダーが五月八日に電話をしてきた時、私はこう言った。九年の間（中には十五年の人もいる）ずっと一緒に働いてきた統治体のメンバーの誰一人として、何が起っているのか私に伝えようという兄弟らしい思いやりを見せてくれなかったのは理解に苦しむ（統治体のメンバー全体に対して公正を期するために言えば、司会者の委員会がどのように物事を行なっているのか、細かいところは他のメンバーにもわからなかったのかもしれない。シュローダー

が四月二三日の電話で私とどんな話をしたのか、私の質問に対してどんなおかしな返事をしたのか、知らなかったのかかもしれない。しかし後の話を見てもえればわかる通り、この時の電話でのやりとりは録音されていた節がある——というより、きくと録音されていたのだろう。いずれにせよ、統治体のメンバーたちは、司会者の委員会ならきちんとクリスチャンらしく、自分にしてほしいように相手にもするやり方でやっていると思っていたのかもしれない。

さらに私はシュローダーにこう聞いてみた。あなたがヨーロッパにいた時、あの重要な「この世代」について変わったことを言っていたことがあった。もしあの時ブルックリン本部でこれを聞きつけて「背教の疑いあり」となつて、その証拠固めとして他にどこかで誰かに何か言っていないか調べ始めていたとしたら、しかも本人であるあなたには何をしているのか伝えようとしなかったら、一体どんな気持ちになるだろうか？

返事はなかった。私は、言われた通りブルックリンに行くと伝え、それでその時の会話は終わった。

五月一九日にブルックリンに到着したが、さすがにすっかり神経はすり減っていてほとんど虚脱状態であった。起こっていることすべてに常軌を逸したところが感じられた。「悪夢」と言った人もあった。それでは足らない、「被害妄想」だろうという人もあった。何も知らないクリスチャンたちがまるで危険な敵であるかのような仕打ちを受けていたのである。

何年か前に読んで切り抜いておいた『ニューヨーク・タイムズ』の記事があったのを、ふと見つけたことがあった。「ニクソンの側近に見られる不信任」という記事で、こんな一節がある。

一九七一年から一九七三年までホワイトハウスでスタッフの精神科医を勤めた医師によると、リチャード・ニクソンの側近は他の人間をまったく信用しなかったらしい。他の人がどう思うかなどを気にかけるのはすなわち性格上の欠陥であるから見なし、また下からの進言も反対意見も歓迎しなかった。

ジェローム・ヤッフェ医師は次のように語る。「違つた意見を持つことと忠実さを欠くことは、この人たちにとっては同じだった

わけです。悲劇的です。意見の相違はすなわち不忠節である——これが何度も何度も繰り返されるパターンでした。」

「行政管理側で歓迎するのは感情を交えずに冷たく人事決定ができる人物です。周りの人の感情に歩み寄ったり、犠牲者が多いようならやる値打ちがないという判断をしたりするのは歓迎されません。そういう心配するのは決定的な欠陥だと見られます。」

「他の人たちの考えはまるで信用しません。自分勝手に利己的な考えを離れた見方を持つ人がいることなど、はじめから理解できないのです。」※28

これは一九八〇年の春にブルックリン本部で見られた態度に恐ろしいほど似ている。まさに「意見の相違はすなわち不忠節である——これが何度も何度も繰り返されるパターンでした」である。イエス・キリストの親切さはまるで見られなかった。暖かい友情や、その基礎となる心からの理解もなく、ただ冷たい組織のやり方があるだけに見えた。常に最悪の解釈をし、疑わしきはすべて罰し、忍耐や寛容は弱みであり組織の一致と組織への服従を達成する邪魔になるとするやり方である。それはまるで巨大な裁きの機械がスイッチを入れられて動き出し、まったく感情も容赦もなく、ただ最終目標に向かって唸りをあげながら回転を続けているようでもあった。これが現実だとは信じ難いほどだった。

本部に着くと、私の机の上のいろいろとにおいてある中、一枚の書類を見つけた。司会者の委員会が一九八〇年四月二八日に作成していたものである(次ページ)。そこには私にとって驚くべき点も書いてあった。考えたこともない、まして誰かと話したこともない点だったからである。いずれの点にしても、強引な言葉遣いが不快だった。どうやら一番下のところにある「注」というのが肝心な所らしいと思った。そこには言葉を変えながら同じようなことが繰り返し強調されている。すなわち、「協会の基本的な聖書理解の『骨組』」であり、「長年にわたってエホバの民に聖書

※28 『ニューヨーク・タイムズ』 1976年1月12日付12頁。

(To Governing Body) RECENT EVIDENCES OF WRONG TEACHINGS BEING SPREAD ABOUT

Following are some of the wrong teachings being spread as emanating from Bethel. These have been brought to the attention of the Governing Body from the field from April 14 onward.

1. That Jehovah does not have an organization on earth today and its Governing Body is not being directed by Jehovah.
2. Everyone baptized from Christ's time (C.E. 33) forward to the end should have the heavenly hope. All these should be partaking of the emblems at Memorial time and not just those who claim to be of the anointed remnant.
3. There is no proper arrangement as a "faithful and discreet slave" class made up of the anointed ones and their Governing Body to direct affairs of Jehovah's people. At Matt. 24:45 Jesus used this expression only as an illustration of faithfulness of individuals. Rules are not needed only follow the Bible.
4. There are not two classes today, the heavenly class and those of the earthly class also called "other sheep" at John 10:16.
5. That the number 144,000 mentioned at Rev. 7:4 and 14:1 is symbolic and not to be taken as literal. Those of the "great crowd" mentioned at Rev. 7:9 also serve in heaven as indicated in vs. 15 where it is claimed that such crowd serves "day and night in his temple (naos)" or K. Int says: "in the divine habitation of him."
6. That we are not now living in a special period of "last days" but that the "last days" started 1900 years ago C.E. 33 as indicated by Peter at Acts 2:17 when he quoted from the Prophet Joel.
7. That 1914 is not an established date. Christ Jesus was not enthroned then but has been ruling in his kingdom since C.E. 33. That Christ's presence (parousia) is not yet but when the "sign of the Son of man will appear in heaven" (Matt. 24:30) in the future.
8. That Abraham, David and other faithful men of old will also have heavenly life basing such view on Heb. 11:16.

Notes: The above Biblical viewpoints have become accepted by some and now being passed on to others as "new understandings." Such views are contrary to the basic Biblical "framework" of the Society's Christian beliefs. (Rom. 2:20; 3:2) They also are contrary to the "pattern of healthful words" that have come to be Biblically accepted by Jehovah's people over the years. (2 Tim. 1:13) Such "changes" are condemned at Prov. 24:21,22. Hence the above are 'deviations from the truth that are subverting the faith of some.' (2 Tim. 2:18) All considered is this not APOSTASY and actionable for congregational discipline. See ks 77 page 58.

Chairman's Committee 4/28/80

(統治体各位) 誤った教えが広められている最近の証拠

以下はベテルから広がっているという誤った教えの例である。統治体には野外から4月14日以降知らされている。

- 1 エホバは今日地上に組織を持っておらず、統治体もエホバによって導かれていない。
- 2 キリストの時代(西暦33年)から終わりの時までにはバプテスマを受けた者は誰にでも天の望みがある。したがって油そそがれた残りの者たちだけでなく、誰もが記念式で表象物にあずかってしかるべきである。
- 3 油そそがれた者からなる「忠実で思慮深い奴隷」級にしても、エホバの民を導く統治体にしても、きちんと定められてはいない。マタイ24:45でイエスがこの表現を使ったのは単に一人一人の忠実さを示すために過ぎない。規則は必要なく、ただ聖書に従えば良い。
- 4 天の級、そして地上の級(あるいはヨハネ10:16の「ほかの羊」という二つの級は今日存在しない。
- 5 啓示(黙示録)7:4及び14:1にある十四万四千という数字は象徴的なものであって字義通りのものではない。啓示(黙示録)7:9の「大群衆」は天で奉仕するものであり、これは15節で群衆が「その神殿(ナオス)で昼も夜も」奉仕するとある通り。行間逐語訳では「その神の住むところで」となっている。
- 6 我々は「終わりの日」という特別な時代にいるわけではなく、「終わりの日」は1900年前、西暦33年に始まった。これは使徒2:17でペテロが預言者ヨエルを引用して示している通り。
- 7 一九一四年は確立した年代ではない。イエスは一九一四年に王座についたのではなく西暦33年以來ずっと王国を支配している。キリストの臨在(パルチア)はまだ始まっておらず、将来「人の子のしるしが天に現れる」(マタイ24:30)時に始まる。
- 8 アブラハム、ダビデその他の忠実な者たちも天の命を得る。これはヘブライ11:16などによる。

注：以上のような聖書の見方が一部で受け入れられるに至っており、また「新しい理解」としてまた他の者に広められつつある。このような見方は協会の基本的な聖書理解の「骨組」に反するものである。(ローマ 2:20; 3:2) また、長年にわたってエホバの民に聖書の真理として受け入れられてきた「健全な言葉の型」にも反するものである。(テモテ第二 1:13) こういう「変化」は箴言 24:21, 22 でも糾弾されており、「真理からそれ、……ある人たちの信仰を覆している」というべきものである。(テモテ第二 2:18) 要するにこれは背教であり会衆のためにも告発すべきものではあるまいか。k s 77、58ページ参照。

司会者の委員会 1980年4月28日

の真理として受け入れられてきた『健全な言葉の型』である。

これはもうお馴染みだった。統治体の会議ではよく使われた理屈である。要するに、協会の長年の教義は守らねばならないのである。まるで、長いこと信じられていたこと自体、そのまま正しさの証明であるかのようなのである。とにかく長いこと教義になっていること、これが問題の核心であって、神の言葉そのものが問題ではないのである。

五月二〇日、私は司会者の委員会と顔を合わせた。委員会から統治体への報告のテープを聞いた。これは執筆スタッフとの面談について、そしてその後司会者の委員会で行なった調査・審理についての報告である。さらに、後で聞くようにとテープを二巻渡された。一つはキューバ夫婦（ゴディネス夫妻である）との二時間にわたる面談のテープ、もう一つはボネッリという名前のエホバの証人とのもう少し短い面談のテープである。この時初めて二時間の面談テープについて知ったし、しかもそれを統治体ではその一ヵ月も前に聞いていたことを知った。統治体がそのテープを聞いた後、すでにいろいろな人たちにひどい混乱が及ぼされていたのである。しかる後に、私に対する審問が統治体会議において行われる前日になってから、やっとそのテープを私に聞かせようというのであるから、これは非常識ともいえると思う。

私はその二巻のテープを自分の部屋に持っていった。気分が悪くなった。すべてを思う方向へ引っ張ってこういう意図が感じられる。ゴディネス夫妻が単に自分たちの聞いたことをそのまま繰り返し返そうとしていたことは疑い得ない。誠実な人たちであることは私もよく知っている。しかしミラーがこの二人から話を引き出していくのを聞いていると、「本当にこの二人はこれほど極端なことを耳にしたのだろうか」と首をかしげ続けた。しかしこれを確認することはできない。司会者の委員会はずでに審理委員会を作っており、その審理委員会ではすでに関係者を排斥処分していたからである。

テープの終わりのところでは、司会者の委員会の三人が、これで事態が明らかになったとでも言いたげにそれぞれ満足げな意見を述べ、ゴディネス夫妻の忠節心を誉めた上、話に出てきた連中はけしからんと言う。ここで気分はま

すまず悪くなった。クリス・サンチェスには話も聞いていないのになぜそんなことが言えるのか。なぜこの面談にクリスがいらないのか。どうしてミラーの提案（これはこのテープにしっかり収録されている）で、ゴディネスがルネに電話しておかしなことを言うかどうか「うまいこと」話を聞いてみるなどという、言ってみればルネを罠にかけるようなことを決めたのか。一体何がやりたかったのか、何が目的だったのか。人を助けるため、理解を示して平和的解決を求め、沈着さや冷静さが欠けておればこれを忘れないようにと励まし、親身な話し合いを通じて事態を明らかにしたかったのか。あるいは単に事件を仕立て上げて人を陥れたかったのか。テープ全体には、この二つ目の目的しか感じられなかった。

このテープの内容もひどかったが、もう一方のテープはもっとひどかった。ゴディネス夫婦の面談の方は、自分の家で他の人と話したこと、その内容に驚いたことなどについて覚えていることを言っているものであり、先にも書いた通り、誠実に言っていたと思う。ところがこの二つ目のテープは、ほとんどが根拠のない話なのである。さらにがっかりするのは本部側の面談者の言葉である。

ボネツリは、ルネの会衆の隣にあるスペイン語会衆のメンバーだった。テープはアルバート・シュローダーがボネツリを紹介するところから始まる。ボネツリはかつていた二つの会衆で「奉仕の僕」だったが、現在はそうではない。それは、本人によると、現在いる会衆の長老の一人、アングロという人に好かれていないからである。

次にボネツリが話す。まずこのアングロという長老に対して不利な証言をし、自分が奉仕の僕に選ばれなかったのはこのためだと言う（アングロは排斥処分になった一人である）。また、三月二二日の（主の晩餐）記念式の後、ルネ・

バスケスの家に行くところルネの妻と母親がパンとワインの表象物を取っているのを見たという話もする。※29 ポネッリは自分もその表象物にあずかったと言う。

この最後の言葉を聞いてアルバート・シュローダー、そして奉仕部門のデイブ・オルソンとハロルド・ジャクソンから驚きの声があがった。ポネッリがこれについて言った言葉をテープに録音されているままここに紹介する。「私は悪賢いんですよ。」自分がルネの家に行ったのはこの一家について調べるためだったと言う。※30

さらにポネッリは、別のエホバの証人から聞いた話では、アングロという名前の長老がルネと集会を開くための建物を確保しており、自分たちの新しい宗派ですでに何人もバプテスマを行なっているらしいと言う。

実際には、この話に真実のかけらもないのである。話を聞いている方はその問題の集会が行なわれている建物があるのか、バプテスマを受けたというのは誰なのか、聞くとうとしない。聞いてもわからなかったはずである。何しろ存在しないのだから。

さらにテープが進むうち、ポネッリが英語で説明し続けることができず、つまってしまう場面になる。そこでポネッリにはスペイン語で言わせておいて、スペイン語のできるハロルド・ジャクソンがそれを英語に直すことになる。この時ポネッリはくすくす笑ってこう言う。「私の英語は良くないけど、言っていることは良いわけですね。」すると間髪を入れずデイブ・オルソンの声で「その通り、まさにこつちが言っただけのことを言ってくれてるよ。さあ続けて。」

※29

私が休暇に出る前、ルネは次のようなことを言っていた。自分も妻も母親も表象物にあずかるべきだと思っている。三人そろって王国会館でこれをやると騒ぎになるに違いない（スペイン語会衆に「油そそがれた舌 があるのは珍しいことだったのである。一番問題が少ないのは、妻と母親が会衆の集会が終わるのを待っておき、それから家で表象物にあずかるやり方だろうと思った。ポネッリは自分の会衆でもないし、家まで来いとも言わなかったが、自分で来ると言っただけだ。（ルネの母親はポネッリと聖書研究をしたことがあり、よく知っていた。）

※30

これが本当の理由だったのかどうかは疑わしいと思う。

という返事が入る。

これを聞いた時には心臓に重いものが降ってきたような感じだった。この面談を通じて、このボネッリは、聖書について誤った理解をしている人に対して僅かでも助けになるような、役に立ちそうなことなど一言も口にしていない。事件を仕立て上げ、糾弾の証拠を手に入れようとしているからこそ「言ってほしいことを言ってくれている」が成り立つ。ところがその証拠とやらも半分は作り話であり、根拠のないまったくの嘘である。あと半分が意味を持つとすれば、次の場合に限られる。すなわち、宗教組織には、教義に完全に一致する内容でなければ友人間で聖書について話すことを禁ずる権利があるし、たとえ自分の家でそつと行なうことであっても、個人が良心的に行なうことを裁く権利があるという見方をする場合である。

ボネッリの証言が終わりに近くなると、デイブ・オルソンは他の「兄弟たち」で同じような情報を提供してくれそうな人はいないかと尋ねる。ボネッリが「背教」について話を聞いた人は多いと言ったからである。これに答えてボネッリはニュージャーシーにいる「兄弟」が何か言ってくれるかもしれないと言う。オルソンはその名前を尋ねる。ボネッリは、覚えていないけれども調べればわかるかもしれないと答える。「他にもたくさんいるはずだろう」とオルソンが聞くと、ボネッリは、そんな「姉妹」を知っていると言う。名前とは聞くと、やはり調べないとわからないと言う。ここでアルバート・シュローダーがボネッリに対して協力の礼を述べ、「きちんと集会に出て霊的な強さを保つように」と言い、また他に何か聞いたら知らせてくれるようにと言う。

一連の調査・尋問・糾弾における方向性というものがこのテープほどはっきりと現れているものはない。全エホバの証人にとってこれほど役に立つものもない。事件全体について、その時の「空気」について、本部で神の「経路」とつながっている人たちがどんなことをしたかについて、一面的でなくバランスの取れた見方をするためには、このテープを聞いた上、組織に聞かされていること、あるいはゴシップを通じて聞いていることと比べてみれば良いのである。その際には、次のことを問う権利もなければならぬ。このボネッリという人の証言の裏付けを取るためにい

かなる努力がなされたのか。事実と嘘とをきちんと分けるために何がなされたのか。なぜこのような証言が本部の人間にとって「まさに言ってほしいこと」としての値打ちを持つのか。

組織がこのテープを（どこも削除せずに）公開し、質問を受け付けるという可能性はないに等しい。そうするぐらいならテープは処分してしまうと思う。これを私に聞かせて司会者の委員会は恥ずかしくなかったのだろうか。いまだに理解できない。

このテープと同じような噂話が、本部スタッフメンバーが排斥になって何日かの間にベテル家族の間にささやかれ始めていたことは、統治体にもよくわかっていた。「背教者」たちが自分たちの団体を作っていて、独自の集会、独自のバプテスマを行っており、その名を「自由の子供」というらしい——こういう類の話がよく聞かれた。まったくの嘘である。朝の聖書討議で司会を務める統治体のメンバーも、「背教者」についていろいろ言っていた割にはこういう噂話が嘘であることをはっきりさせなかった。

そこでこの種の噂話は広がるままとなり、とうとう世界中に広まった。これを広げたエホバの証人は、そのつもりはなかったとしても、隣人に対して偽りの証言をしたわけである。噂話が嘘であることを明らかにし、偽りの証言をやめさせる立場にいたのは統治体のメンバーである。なぜそうしなかったのかは、本人たちにしかわからない。統治体にも、聞いた話が本当だと正直に信じた人がいたかもしれない。しかし少なくともその立場からして、そしてその責任の重さからして、よく調べた上で、これは事実ではなく作り話であり、そればかりか人を傷つける悪質な話だと他の人に伝える義務はあったと思う。

判断の誤りが一方の側にばかりあったと言うつもりはない。我々「裁きにかけられた」側にも分別を欠いた言動が見られた場合もあったものと思う。例えば、最もひどい証言をしたと言っても差し支えない人がいるが、この人などはちょっと話を聞かれるとすぐに自分から進んで「その訴えの証人」になりましようと言い、仲間の長老に不利な証言をしたという。この人を私は知らず、会ったこともないし、その仲間の長老というのもしらない。二人ともまった

く知らない人である。※31

本部が、入手した情報に鑑み、何らかの調査を行なうことが間違っているとも思わない。むしろまったく当たり前のことであろう。自分たちの説いているのが神からの真理であると信じているのであれば、そうしない方が間違っている。

ただ、私にどうしてもわからず、聖書に合うとも思えないのは、そのやり方である。その大急ぎの手順である。それによって人生が変わる、名声に関わる、という関係者から情報を隠匿する。攻撃材料となる情報を何とか手に入れようと、「協力」を求めるに当たっては排斥の脅しも辞さない。そして何よりも全体に見られる、横暴に、感情抜きに、ただ規則を押しつけていく無慈悲なやり方。仮に「裁きにかけられた」側に無分別な言動があったとしても、このやり方には比べるべくもない。

中世の宗教裁判と同じく、権利はすべて尋問者側にあり、被告にはない。尋問者側はいかなる質問をしても構わないが、質問を受けることは拒否できる。審理は秘密にしておくべきで他の誰にも見せるべきでないけれども、尋問されている人たちの個人的な話や行動は詮索する権利がある。審理を秘密にしておくのは適切なことで、「機密を守る」ためであり、また自分たちが質問をはぐらかすのは単に「実際」見地からだが、一方被告の方が個人的な会話のプライバシーを守ろうとするのは何かをごまかそうとしているからであり、陰謀の証拠となる。

自分たちのすることは神のため、「明かされた真理」のためだが、被告のしたことすべては最悪のものとして疑い、心から神を最優先させているはずはないと決めつける。現行の教義に矛盾してもなお真理を求めようという心からの気持ちなどまったく認めない。

ルネが尋問を受けた時もそうだった。落ち着いて、独断的にならないように自分の考えを述べ、教義上の細かいこ

※31 この長老二人はルネのいた会衆の隣の会衆にいた。

とで騒ぐつもりはまったくないこと、また自分の考えを他の人に強要するつもりはないことをはっきりさせようとしても、審理委員会の面々には何の説得力も持たなかった。委員たちはルネが心の底で感じていることを言わせようとして追求した。本人によると、ある質問がうまくいかないと今度は方向を変えた別の質問がやってきて、とにかく何か一定の型にはまった答を言わせようとする。ルネが一回目の審理を受けている時、ベンジャミン・アングロという別の長老も「審理中」であつた。アングロは言うことがはっきりしていて、自説を譲らないところもあつた。それに対してルネはおとなしい言い方をしていたので、委員の一人ハロルド・ジャクソンは「君は背教者としてもあてにならない」と言った。ルネは自分の信条をしっかりと守ろうとしないと言うのである。さらに続けて次のように言った。

「アングロを見てごらん、しっかりと言うよ。君はこういう話をアングロにしていたわけだろう。アングロが言う時はしっかりとだよ。あれは排斥になるかもしれないが、同じ話をしていたはずの君の方はちっともはっきり言おうとしない。」

ルネが二回目の審理で上訴委員会と話した時、落着いて話そうとしても「痴れ言」と言われたことはすでに述べた。温和で、譲歩できる点については譲歩する態度は、反抗的な「背教者」だから排斥に値するという証拠にならない。まさにこの態度はルネ・バスキスの人柄の一部なのである。これはルネを知っている人ならよくわかつていることである。

ルネが排斥されてから二年後、私はその顛末について話を聞く機会があつた。その時、聖書を読んでわかったことを他の人に話したことについてどう思っているか尋ねてみた。質問はこうである。会社組織の場合のように、その組織の一部である限りは方針をすべて受け入れるべきだし、もしそうできなければ何も言わず辞めるべきだという意見に対してはどう思うか。これに対するルネの返答は次の通りである。

「でもそれは会社の話でしょう。私はそういう考え方をしませんでした。もっと大事なことで、神との関係を考えました。その時の気

持ちというか、本当に思っていたことがあって、これは誰にも変えられない。組織というような枠にいない。審理の時には排斥にならないようにと祈りました。他の人も同じです。でも結局そうなったんです。」

「まわりの人を改宗させるために組織に残りたいと思っていたとしたら、それは闘士ですよ。でも私がいた『分派』なんてなかったし、第一あっても私がそこにいた証拠がない。今でも、誰かが話をしたいと言ってくる時には、自分からは動かず、相手に電話でもしてもらおう位です。」

「またあの同じ状況におかれたら、やはり同じジレンマに悩むでしょう。聖書から学んだことはそれほどに素晴らしいんです。いろいろなことがはつきりして、神に少しでも近づいたと感じるのは嬉しいことです。」

「何かの『計画』とやらがあったとしたら、やり方をきちんと取り決めることもできたでしょうけれども、私はただ人間として、人間がすることをやっただけです。この人間として、というのが組織を恐れる気持ちに勝ったんです。エホバの証人をやめようなんていう気持ちはまったくありませんでした。聖書に書いてあることが喜びであった、それだけです。ただ自分で聖書を読んで自分の結論に至っただけで、何かの教義にすぎりつこうなんて思いませんでした。」

「エホバの証人を三十年やって同情の気持ちもある上で私が聞きたいのは、どうしてこの気持ちがあの人たちにはなかったのか、どうして仕組んだような質問ばかりしてきたのか、ということなんです。審理は罪状を決めつけるために行なわれていたようなもので『誤った』兄弟を助けるというものではありませんでした。」

かなり広く、国を越えて広がった噂話もあった。それは、スペイン語翻訳部門にいたルネ・バスケス、クリス・サンチェス、ネスター・クイランの三人が翻訳の際に文書に改竄を加えていた、そして私がそれを知りながらも黙認していたというものである（フランス語圏では同じ噂話がフランス語の翻訳部門の話として出回っていた。ルネはこれについてこう言う。

「ばかばかしい。そんなことでやしないんです。改竄なんてなかったし考えもしなかった。やっただろうというので私たちを責めた人もいなかった。翻訳したものは全部、五人ぐらいの人にチェックに回されるんです。最終チェックはフアビオ・シルバでした。

噂話の中でも多分一番ひどいのは、アメリカのあちこちで長老その他が「実話」として伝えたものであり、これは「背教者」の間で同性愛行為が行なわれているというものだった。どこからそんな突拍子もない嘘が出てきたのかは想像もつかない。唯一考えられるのは、尋問が始まる一年ほど前、組織でかなりの責任ある地位にある人が同性愛的傾向ありとして告発されたことぐらいである。この時は統治体が穏便に計らおうとした。それでもちょっと話は出回ったらしい。今回の噂話ではこれが「背教者」に転嫁されたわけである。何しろ噂を流す方は事実関係などどうでも良いわけだから、こうすること自体は簡単だったであろう。私に考えられるのはこれ位で、他には思いつかない。

どうしてクリスチャンとして高い理念を誇る人たちが、何の根拠もないこんなひどい噂を流すのか。私の考えでは、起こってしまったことを自分の心の中で何とか正当化しようとした人が多かったからではないかと思う。本当の理由の他に、何か理屈付けが必要だったのである。つまり、まったく潔白な記録を持つ人たち、周りの人もおとなしい良い人だという人たちに対して残酷な処分があったことに対する理屈付けである。こういう人たちに突然「背教者」というひどいレッテルが貼られるのを納得するのには事実関係以上の何かが必要だった。

そうでないと、この組織は神の唯一の伝達経路であり、地に導きを与える経路だと思っていたのだが、ひょっとするとそうではないのかもしれない——本人を直接知っていた人たちが、話を聞いたことのある人たちはこう思わざるを得なかったに違いない。しかし多くの人にとって、これは考えてはいけないうことである。自分たちは守られているという感覚が崩れてしまうのである。この感覚は、人間の組織に対する盲目的な信頼によって大きく（本人たちが認

※32

ブルックリン本部で何人もの人たちがチェックするだけでなく、スペイン語圏各国支部のスタッフは多くが英語もわかり、出版物はスペイン語と英語両方で読む。したがってもし改竄が事実であったとすれば、すぐに報告があったはずである。こんなこともわからないのは、この噂を流し、広めていた人たちがよほどこの辺りの事情を知らなかったか、あるいは事情などどうでも良いと思っていたかである。

める以上に大きく支えられている。

サンヘドリン体験

「管理者に要求されているのは忠実であることです。わたしにとつては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。自分には何のやましいところもないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。」コリント第一4・2-4（新共同訳）

以上見た通り、ブルックリンに着いた途端にそれまで知らされていなかったことを一気に知らされた。そしてその翌朝には統治体会議に出ることになっていた。

後になると、ようやく事件を振り返り、どういうやり方で物事が運んだか考えることができるようになったが、その時にはただショックの感覚しかなかった。私に知らされていることが正確なのかどうかを関係者に確認することもできない。みんな排斥になっており、その証言は統治体の受け入れるところではなくなっていたからである。

生まれて以来関わっている宗教団体の内部の人たちにこんなことができる、この目の前で現実に起こっているようなことができるという事実が、私にはまだ信じ難かった。ブルックリン本部に向かった時の気持ちは、独裁者トルヒーヨ政権下のドミニカ共和国に行っていた時の気持ちと奇妙に似ていた。出発地プエルトリコではすべてが自由で、歩いている人も乗り物に乗っている人もまったくおおらかにしゃべっている。ところが当時のシウダー・トルヒーヨ（現在のサント・ドミンゴ）の飛行場に着陸すると本当に様子が変わる。人々は言葉に気をつけ、乗り物に乗っていても最低限の話しかない。当時はスパイ網が張り巡らされており、ちょっとした言葉が独裁者の不興を買うとされたので、報告でもされてはと不安だったのである。プエルトリコではまったく当たり前の会話とか意見の交換が、ドミニカ共和国では危険であり、常に政府の敵というレッテルを貼られる恐れがあった。プエルトリコでは、多数派意

見と異なることを口にし、後でそれを通報されても心配はまったく要らない。ところがドミニカ共和国では、現行の理念に合わないことを口にするとなちまち反省を強要され、何か悪いこと、罪深いことをしたような気持ちにさせられる。そもそも自分の言ったことが通報されるのではないかと思うだけで不安な気分になる。この場合、本当のことを言ったかどうかは関係ない。心からの言葉であるかどうか、道徳的に問題ないかどうかも関係ない。問題は、権力を持つ人たちにどう受け取られるかである。

こういう不安な感じは、それ以前の本部にもあったかもしれないが、それは一過性のものに過ぎなかった。ところが今やその不安な威圧感に押し潰されんばかりだった。支配権力を行使している人たちの考え方は、司会者の委員会が私と行なった「打ち合わせ」でも明らかだったし、またテープに録音されていた司会者委員、及び奉仕部門の人たちの言葉からも明らかだった。非常に感情的な、人を疑うような空気があった。あの残酷無比なやり方で私の言ったことも他の人が言ったことも解釈されるのだろうと思った。組織の見方からすれば異端であるとして糾弾されるかもしれないことが、神の言葉に照らせば正しく適正である――このことを受け止めるのは難しかった。この組織に人生を捧げてきているのだからなおさらである。自分から進んで誰かに言うことはなかった。ただ向こうから聞かれた時に、その答を神の言葉に求める義務を感じただけである。たとえその答が権力を持つ人たちの見方と異なる場合があっても、そうするしかなかった。

統治体の圧倒的多数が組織第一の考え方をするであろうことははっきりしていた。もしそうでなければ、すべて穏便に片が付くように、暖かい対話を通じて、節度のないことを言う人があれば節度を求める、あるいは厳しすぎるころがあればこれを改めるように求めることもできていただろう。攻撃的な態度を避け、規則を振り回すような横暴なやり方に頼らなければ、ちよっとした個人的な会話や一部の人のしたことが皆の注目の的となる大問題となったり、いわんや多くの人の生活を揺るがし世界中にゴシップが広がる大騒ぎにまで発展したりせずにはすんだであろう。

統治体のメンバーと顔を合わせるに当たり、燃え盛っている火に油を注ぐつもりはまったくなかった。すでに親し

い友人が何人かその火に吞み込まれてしまっていた。私は、極端で勝手な意見は自分としても好ましくないし、そんな意見を言う人も関係者の中にはいたかもしれない、という程度なら認めても良いと思っていた。しかしこれほどの程度本当なのか見当もつかないのである。何しろ問題の関係者の中には、一緒に聖書の話をしたことのある人などほとんどおらず、それどころか会ったこともない人までいたからである。

五月二一日水曜日、統治体会議がアルバート・シュローダーを司会者にして開かれた。まずはシュローダーの報告が始まる。司会者の委員会が私にこの統治体での話し合いを録音しても良いかどうか尋ねたところ、後に録音テープのコピーを渡すという条件で合意が得られた、という内容である。

統治体の会議室には大きな楕円形のテーブルが一つあり、まわりに二十人位が座れるようになっていた。この日はメンバー十七名全員が出席していた。私の左隣に座ったライマン・スウィングルを除いては、誰一人として私と言葉を交わさなかった。その前日も、誰一人として（私と血縁関係にあるメンバーすら）私の仕事場にも部屋にも来なかった。この統治体会議室には、人間の温かみとか兄弟に対する思いやりなどが感じられなかった。あるのは、裁判のため法廷に出頭した時のあの感じ（これは何度か経験したことがある）だけであつた。違う点は、法廷ではもつと発言しやすかつたこと、また証人になってくれる人がまわりにいたことである。ところがこの会議の方は秘密の会合である。ルネ・バスケスが、自分の時はこんな感じだったと言っていた通りの雰囲気だと思つた。

シュローダーが発言し、統治体では、司会者の委員会が作成した背教の証拠についての書類（四月二八日のもの）にある八つの点についてどう思っているか言つて頂きたいと思つている、と述べた。そこで私は一つ一つの点について意見を述べた。いずれの場合もできるだけ独断を避け、中庸をとり、また誠実さを欠いたり偽善的になつたりして良心に逆らわないようにしつつ、妥協点を見出すようにした。例の書類は、八つの点について組織の見方を完全に受け入れるか、でなければ独断と見るかという書き方だったが、私には当てはまらなかった。いずれも本当の問題点だ

とは思えなかったのである。神が「組織」を地上に持つていかどうかが問題なのではなく、どんな組織を持つてい
るかが問題なのである。中央集権的で、階層関係ががちり固まった権威主義的な組織なのか、それとも単に兄弟た
ちの集まる会衆であり、権威は共に助け、奉仕し合うためであって決して支配するための権威ではない、そんな組織
なのか。そこで私の答は、神は地上に兄弟愛で結ばれたクリスチャン会衆を持つという意味において組織を持つてい
ると信じるというものだった。

また、神が統治体のメンバーを導いてきたか（あるいはこれから導いてくれるか）どうか問題なのではなく、ど
の程度導いてくれるのか、あるいはどんな時に導いてくれるのか、これが問題なのである。心から求めれば神は導い
てくれるであろうことを疑いはしない（事実、統治体で決定したこと、特に初期の頃の決定事項には、心のこもった良い
ものがあつたと思う）が、自動的に導いてくれるものでもない。常に条件というものがある。そこで私の答は、神の
導きは、神の言葉にどれほど忠実かにかかっており、それに応じて神は導きの手をさしのべ、あるいは引つ込めると
思うというものだった（これはどんな人にも、あるいは人の集まりにも、当てはまることだと思ふ）。

八つの点についての私の答はすべてこういう具合だった。もし告発を受けた人たちの中に、この司会者の委員会の
書類にあるような独断的な言い方をしていた人が一人でもあつたならば、私としてはできるだけのことをして理性的
で中庸を得た判断を取り戻し、角を立てるよりは丸く納めるようにしたかつたし、自分でもできる限り譲歩した。

これが済むと他にあまり質問はなかつた。ライマン・スウィングルが聖書の注釈書についてどう思うかと尋ねた。
どうやらこれが統治体で話題になっていたらしい。私はこう答えた。自分としては前よりもよく使うようになったが、
これは『聖書理解の助け』を書いていた時 おじに勧められてのことである。もし使つてはいけないうのならば、
テルの図書室の一角は全部片付けないといけない。あそこには注釈書のセットが何十と並んでいる。

次に、マーティン・ポエツィンガー（この人はナチの強制収容所で何年か過ごしたこともある）が、あの八つの点につ
いての私の答が不満だと言つた。他の人たちがもっと過激なことを言つてゐるのに、私だけがあんな風に言うのはど

ういうわけか（マーティン・ポエツィンガーも、他のメンバー同様、その他の人たちというのに直接話を聞いていたわけではない）。※33 私はこう答えた。他の人が言ったことまでは責任を持ってない。ローマ3章8節、それからペテロ第二3章15節と16節を見てもえれば、使徒パウロの言ったことでさえ誤解されることがあったことがわかる。——こう言いながら、この状況はまるであのルカ11章53節のようだと思っていた。まわりを囲む人たちが「様々なことについて私から何か言わせて、何か口を滑らせたらずにその言葉じりをとらえてやろうと待ちかまえている」という状況である。※34 この会議までに統治体が行なったことを考えてみると、そうとしか思えなかった。

ポエツィンガーはさらに、いささか感情的になりながら、排斥になった「背教者」たちについて、「あの連中は出ていく前にものみの塔発行の出版物をごみ箱に捨てていった」と言った（これはベテル家族の間に最もよく流れていた噂話の一つである。何しろ統治体のメンバーの一人がある朝全ベテル家族を前に報告したのである。私はマーティン・ポエツィンガーにこう言った。まず関係者に話を聞いて事実関係を確かめないことには、どんな結論を出すこともしたくない。また、本部には十五年間いるけれども、ごみ箱のある部屋に協会の古い雑誌や書籍の類をベテル家族のメンバーがどつさり捨てるのは当たり前に行なわれていることである。聞くところではベテルのスタッフで排斥になった人にはプエルトリコに飛行機で行く人もあったそうだが、荷物の中で一番重くて、しかも後でまた手に入れられるのは、そういう書籍類であろう。いずれにせよ、直接話も聞かずに判断するのが正しいとは思えないし、特に審判する立場にある人ならなおさらだと思う。——私がこう言うと、ポエツィンガーは私の顔をじっと見たが、それ以上何も言わなかった。

次の質問は、その一月ほど前（四月）にフロリダのホームステッドで私が行なった（主の晩餐の）記念式について

※33 ロイド・バリーも似たような不満を述べた。司会者の委員会が作った「背教」の証明書類にある八つの点すべてについて私が「言葉を濁してしまった」というのである。

※34 『フィリップス現代英語訳』より。

だった。^{※35} その時の話で私が「ほかの羊」（つまり地上の望みを持つ人たち）について触れなかったというのは本当かというのである。私は本当だと答え、ドミニカ共和国からブルックリンに來た年に経験したことを話した。この時私と妻はある会衆で行なわれた記念式に出たが、これがずいぶん早く終わった。そこでホテル本部に戻ると、当時副会長だったおじの講演を全部聞くことができた。講演の後、私たちはおじと一緒にマルコム・アレンというスタッフの部屋に招かれた。妻はおじに「講演では『ほかの羊』の話を全然なさいませんでしたね。どうしてだったんですか?」と聞いた。するとおじは、あれは「油そそがれた者」のための夕べだから、「その人たちのための話をしたんだ」と答えた。その講演の時のノートもまだ持っているし、自分が記念式をする時はこれを何度也使った。お望みとあれば見せて差し上げることもできる（もちろんフレッド・フランズもその場にいたので、問題の講演の内容について確認しなければいくらでもできた。——これでこの話は終わりとなった。^{※36}

かなり過激なことを言った人がいるのが本当だとすれば、これら一連の騒ぎについて私は心から残念だと思っている。そこで私はこう発言した。もし知らせてくれていたら、及ぶ限りのことをしてやめさせようとしていたであろう。分別のない言動があったらしいことを否定するつもりもないし、私はそんなことをしませんが、私もうつもりもないが、それを悪意があったと決めつけるのは間違っていると思う。そんな風に決めつけられた人で、私も個人的によく知っている人がいるが、そのクリスチャンとしての人格には間違いがなく、私は尊敬の念を持っている。ルネ・バスケスの三十年間にわたる奉仕、プエルトリコでもスペインでもアメリカでも示した献身、その見事な記録を考えてほしい。

※35 エホバの証人はこれを年に一回だけ、過ぎ越しの頃に行なう。

※36 流れていた噂話の中でも典型的なのは（ちなみにこれについてはあちこちから質問の手紙が寄せられた。ニュージーランドからもあった。）私が皆に表象物を取るように言って、会衆の全員が従ったというものである。（これはエホバの証人にとっては実に見ものである。）しかし実際のところ、この一九八〇年四月にフロリダで行なった記念式で表象物にあずかったのは二人で、一人は私、もう一人はエホバの証人ではなく、近所の教会から來た女性であった。

ところですが、つかりするのは、長年一緒に暮らし、また働いてきた統治体の仲間が誰一人として私に連絡し、何が起こっているのか率直に知らせてくれなかったことである。――

これに答えたのは司会者のシュローダーで、すぐに「でもそっちだって全部率直に言ってくれてなかったでしょう。『電話の時』執筆部門で調査があったことをどこから聞いたのか言わなかったし。」と言った。私が「そんなこと、聞いてくれましたか?」と聞くと、「いや、聞かなかったけど。」という答だった。そこで私は、「聞いてくれていたら、すぐにでも答えましたよ。エドワード・ダンラップから電話があった時そんな話が出たんです。」と言った。まもなく、司会者委員のカール・クラインが微笑を浮かべながら「我々も確かに正直じゃなかったな。」と言い、「ルネ・パスケスもこんな具合に質問に答えてくれていれば排斥にはならなかったのに。」とつけ加えた。カール・クラインにせよ統治体の他のメンバーにせよ、直接ルネと話をしていない。最初の「調査」の面談にも、一回目の審理にも、次の上訴の時にも、関わっていない。ただ報告を見て、ルネがどんな返事をしたのか判断するだけなのである。そういう又聞きの情報に基づいて判断しても構わないという感覚がよくわからない。カール・クラインも含めて司会者委員たちは、告発者に会って話を聞き、例えばゴディネス夫婦やボネツリの証言を集めるようなことは進んで行なっていたが、告発を受けている人たちには誰にも会おうとしなかった。これが兄弟愛とか仲間に対する思いやりの気持ちを示す見本であろうとは到底思えない。

この間、統治体のメンバーのほとんどはただ黙って聞いているだけで、質問もしなければ意見も言わなかった。二時間か三時間ほど経って（私は感情が高ぶっていて時間がはつきりわからなかった、もう会議室を出てよろしい、後でまた連絡するからと言われた。私は自分の仕事場に行って待った。お昼になり、窓から見ると統治体のメンバーたちが庭を通って食堂に行くのが目に入った。私は食欲をまったく感じなかったのですそのまま待ち続けた。三時になるとさすがに疲れてきたので自分の部屋に戻った。それまでの何週間かの出来事、シュローダーが電話で話したこと、それがどれほど嘘の多い話だったかわかった時のショック、厳しい尋問を受けている人たちから次々にかかってくる電

話、容赦なく続く排斥処分の数々、そして何よりもその間まったく連絡をしてくれない統治体の態度——これらすべてが朝の会議のこと、自分に示された冷たい態度のこと、何時間も待ちぼうけをくっていることなどと重なり合った。夕方には本当に体調が悪くなっていた。

さてその夕方、シュローダーから電話が入って、さらに統治体会議の夕方の部で話を聞きたいから来てくれと言ってきた。妻が電話に出たので、こう伝えてもらった。とにかく体調が悪くて行けないし、言いたいことは言った。あとはそちらで結論を出してもらえば良い。

その晩、同じ建物の二階上に住んでいるライマン・スウィングルが様子を見にやってきた。私は有り難く思い、それまでの何週間かがどれほど大変だったかを話した。また、一番気にかかるのは統治体が私をどうするかではなく、聖書にある美しい真理が醜く歪められていることであるとも言った。真剣にそう思っていたし、今でもそう思っている。一連の騒ぎで一番深刻だったのは、協会の教義をずらりと並べて、これを聖書にある単純明快な言葉を判断する基準にするやり方である。そしてこういう単純明快な言葉が（協会の解釈の「型」に合わないというので）誤った教えであり、「背教」の証拠だとされたことである。

単純明快でありながら美しい聖書の言葉と言いながら胸にあつたのは、例えば次のようなものである。

「あなた方の教師はただ一人であり、あなた方はみな兄弟だからです」

「あなた方は、律法のもとではなく過分のご親切のもとにある」

「神の霊に導かれる者はみな神の子であるからです」

「体は一つ、霊は一つです。それは、あなた方が自分たちの召されたその一つの希望のうちに召されたのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべての者の神また父は一つであり、すべての上に、すべてを通して、すべての中におられるのです」

「このパンを食べ、この杯を飲むたびに、あなた方は主の死を触れ告げてゆくのであり、それは彼が到来する時にまで及ぶのです」

「神はただひとりであり、また神と人間との間の仲介者もただひとり、人間キリスト・イエスで「ある」
「父がご自分の権限内においておられる時また時期について知ることは、あなたの方のあずかるところではありません」※37

これと対照的なのが、司会者の委員会が一種の「信仰告白」の基準として使い、人を裁いたあの八つの点である。明快な聖書の裏付けを持っている点は一つとしてない。統治体のメンバーであれ誰であれ、「ほら、聖書にこの通りはつきり書いてある」と言える明瞭な聖句があるのだろうか。

一、神は地上にこういう「組織」を持っており、それを導くのに統治体を使っている。――聖書のどこにそんなことが書いてあるのか。

二、天的な希望は信じる者なら誰にでもあるわけではなく、（一九三五年以来）地的な希望ということになった。キリストが表象物のパンとワインについて言った「私の記念としてこれを行ない続けなさい」という言葉は、キリストが贖いの犠牲になったという信仰を持つ者すべてに当てはまるわけではない。――これが聖書のどの部分に書いてあるのか。

三、「忠実で思慮深い奴隷」というのは一部のクリスチャンだけからなる「級（クラス）」であり、これは個人に直接当てはまるのではなく、統治体を通じて成り立つものだ。――聖書のどこに書いてあるのか。

四、クリスチャンは地上か天上かで二つの級に分けられ、神とキリストとの関係が違ったものになる。――どこにそんなことが書いてあるのか。

五、啓示（黙示録）の十四万四千人というのは絶対に文字通りの数であるはずで、「大群衆」が天上の神の神殿で奉仕する人たちのことであるはずがない。――聖書のどこにそんなことが書いてあるのか。

※37 マタイ23・8、ローマ6・14、8・14、エフェソス（エペソ）4・4-6、コリント第一11・26、テモテ第一2・5、使徒1・7。

六、「終わりの日」は一九一四年に始まっている。使徒ペテロが（使徒2・17で）「終わりの日」がペンテコステに始まると言っている、これはパウロの言う「終わりの日」（テモテ第23・1）ではない。——どこにそんなことが書いてあるのか。

七、西暦一九一四年にキリストが全地の王として玉座につき、その時から「臨在」が始まった。——どこにそんなことが書いてあるのか。

八、ヘブライ11・16にアブラハム、イサク、ヤコブなどの人々が「さらに勝った」「場所」、すなわち天に属する「場所」をとらえようとしている」とあるが、これは天上の命を得るという意味であるはずがない。——どこにそんなことが書いてあるのか。

これらの教義に、聖書に明快に書かれていることに基づいているものは一つもない。いずれもややこしい説明をしたり、あちこちから言葉を引っ張ってきて並べたり、時にはほとんど頭の体操かお遊びのようなことまでしなければ言えないことばかりである。ところが、それがキリスト教信仰を判断する基準として、人生を神に捧げた人たちが背教者かどうかを決める基準として、使われたのである。

その会議のあった翌朝、シュローダーがテープレコーダーを持って私の部屋にやってきた。ファビオ・シルバという本部スタッフの証言に対する私の返答を録音するという。このファビオ・シルバは、ある日空港からルネに送ってもらった時に聞いたことを報告したという。私は、そういう又聞きの話について言うことは何もないと言った。

時間が経っていく。私はこの気が滅入るような場所からさっさと出たいと感じ始めた。昼食時間が終わった頃を見計らい、部屋を出て階段を上がっていくと、ちょうどライマン・スウィングルがエレベーターを出て自分の部屋に行こうとしているところだったので、声をかけた。あとどれぐらいかかるのかと聞いてみた。結論はもう出たから、午

後には知らせがいくだろうという返事だった。その言い方から、排斥処分を強く主張したメンバーが何人かいたらしいなと思った。ライマン・スウィングルは、そうやって私に話している最中、急に力が抜けたような表情になり、「本当に何を考えているのかわからない人もいるもんだ。がんばった、ずいぶんがんばったんだが」と言ったかと思うと口を堅く閉じ、肩をふるわせてすすり泣き始めた。気がつくとは私はライマン・スウィングルを何とかなだめようとしており、別にどんな決定が下されようと自分にとって大したことではない、とにかくさっさと終わってほしかっただけなんだ、と言っていた。スウィングルの涙は止まらなかったたので、自分の部屋に入らせてあげようと思い、私はその場を離れた。

統治体のメンバーでライマン・スウィングルほどエホバの証人組織にすべてを捧げている人もいない。その率直さと勇氣には感心していた。今日私のことをどう思ってくれているか、これはまったくわからない。ひよっとすると、あの時とは正反対になっているかもしれない。ただ、あの時見せてくれた心からの気持ちがあるだけでも、私はライマン・スウィングルに親愛の念を持ち続けると思う。あの悲しみ方に私は力を得た。^{※38}

その午後、シュローダーが統治体の決定を伝えに来了。排斥処分を主張していた人たちも三分の二の多数は得られなかったらしい。ただ統治体のメンバー及び本部スタッフを辞めてほしいということだった。統治体の申し出は、私（及び妻）を「内部特別開拓者」にするというものだった（これは巡回監督や地域監督が高齢や健康上の理由で奉仕旅行ができなくなった時よく使う地位である）。協会に毎月報告し、月々の手当も出るが、特に定まった奉仕のノルマはない。^{※39} 私は、自分も妻も、どんな形であれ何らかの義務があるような取り決めには従いたくないと言っていた。シュローダーは、『聖書理解の助け』が「何と素晴らしいものだったか」という意味のことを言っていて出ている。

※38 それから何カ月か経つと、ライマン・スウィングルは、統治体のメンバーであることに変わりはないものの、執筆委員会及び執筆部門の調整者としての役を外された。代わりにロイド・バリーがその役についた。

※39 当時の手当は確か一人当たり月一七五ドルぐらいだったと思う。

May 22, 1980

Governing Body

Dear Brothers:

By means of this letter I submit
my resignation as a member of the
Governing Body.

I will also be terminating my Bethel
service.

My prayers will continue to be offered
on your behalf as well as for Jehovah's
other servants worldwide.

Your brother,
R. Franz

1980年5月22日

統治体 御中

親愛なる兄弟たちへ

この手紙をもって、統治体のメンバーとしての辞
表と致します。

また、ベテルでの奉仕活動も停止いたします。

これからも皆さん及び世界中にいるエホバの僕
のために祈りを捧げます。

皆さんの兄弟
レイモンド・フランズ

私は上の通りの辞表を書いた。
そこに書いたことは、今日に至る
まで実行してきている。

私は妻と二、三日の間外出して
感情を落ち着かせ、それから持ち
出すべき荷物を取りに戻った。か
なりの量のファイルをそのまま置
くことにしたが、自分が個人的に
関わった事柄のファイルだけは
持っていった。あとで自分の意見
や立場が歪めて伝えられる場合に
備えたのである。事実そういうこ
とは何回もあった。

本部に戻った時、エドワード・ダンラップがビルの前に立っていた。その日審理委員会との面談があったのである。エドワードはその時六十九歳である。その前年、一九七九年には本気で本部を辞めるといふ話をしていて、統治体内部でも外部でも非難の的になっていることがよくわかっていて、ある時など自分から執筆委員会に申し入れ、嫌がらせをやめさせてくれと頼んだこともある。この時執筆委員会ではライマン・スウィングル、ロイド・バリー、エワート・チティの三人を統治体のメンバーのカール・クラインのところに談判に行かせた（当時カール・クラインは執筆委員会のメンバーではなかった。チティが辞任した後メンバーとなったのである）。三人はカール・クラインに、とにかく

くエドワードの仕事場に行つて非難がましいことを言うのはやめてほしい、また他の人に向かつてエドワードのことを悪く言うのもやめてほしいと頼んだ。これはしばらくの間効果があつたが、それも統治体の外での話で、統治体内部、あるいは会議においては相変わらずであつた。

一九七九年の暮れ、私が辞めようと思つていふという話をする、エドワードは自分もそれは考えたが、どうも無理だといふ結論になつたと言つていた。高齢でもあるし、経済事情を考えると自分と妻を支えて生活していく見通しがないといふのである。辞めなければ、少なくとも住むところ、食べるものには困らないし、必要があれば医療も受けられる。だから結局とどまることにした。そう言つたあとエドワードは、「執筆部門にいてあんまりうるさいようなら工作所かどこかに移してもらふようお願いするさ。」ともつけ加えた。

それから一年も経たぬうちに審理となつたのである。その日私の顔を見るとエドワードは、「もう何もかも率直に言おうと思つてゐるんだ。うまく言い逃れするとかいふのは性に合わない。」と言つた。委員会がどうするつもりか大体わかつてゐるとも言つた。

五月も終わりに近づく頃だつた。司会者の委員会がゴディネス夫婦面談のテープを統治体会議で聞かせてから六週間ほど経つてゐる。あのテープにはエドワードの名前が何回も出てくる。「ちよつと情報を集めてゐるだけ」と言いながらロイド・バリーとジャック・バーがエドワードに話をした時からやはり六週間ほどである。その間ずっとエドワードは本部にいて、イエス・キリストの一生についての本を書くといふ、統治体からの割り当てである仕事を行つてゐたが、司会者の委員会の誰一人としてどういふ大變な告発が行なわれているか話をしようとした者はなかつた。すべてを指示する立場にあり、しかも長年の知り合いである人たちが、最後まで本人に一言も言わなかつたのであ

ロイド・バリーとジャック・バーがエドワードに話をしてから六週間近くの間、統治体の誰一人として、本人を交えて神の言葉に基づいた話し合いをしようとしていない。半世紀近く組織と関わりを持ち、約四十年を全時間奉仕に捧げ、天の命の望みを持ち、もう七十歳になろうかというエドワードである。これが事実であることは統治体の面々が一番よく知っている。統治体にしてみればエドワードは道を誤っていたはずだが、それにしては九十九匹の羊を放っておいて一匹の「迷える」羊を捜して助けようとするあの羊飼いは大変な違いである。

繰り返すが、排斥になった人たちにも、それなりのことを口にしていた人はいるかもしれない。しかし、そういう人がどんなことを言ったにせよ、権力を行使する側にある人たちが実際にとった行動とは比べものにならない。 ※41
本部のスタッフ五人からなる委員会がエドワード・ダンラップを裁く役目に当たった。統治体は表だったことをしなかった。この五人はいずれもエドワードより若く、「油をそがれた者」でもなかった。結論は一日のうちに出生してしまった。

この時の様子をよく表しているのは、例えば次のようなやりとりである。

クリスチャンに二つの階級があるという組織の教義について聞かれると、エドワードはローマ8章14節を引いた。

「神の霊に導かれる者はみな神の子である」とある部分である。「他に読みようがないだろうか？」とエドワードは聞いた。すると、ギレアデ学校でエドワードが教務主事をしていた時に何年か教訓者をしたこともあるフレッド・ラスク

※40

アルバート・シュローダーはギレアデ学校で長年エドワードと共に教訓者を務めていた。カール・クラインは執筆部門で一緒に働いており、しかもオフィスはエドワードの隣だった。グラント・スターはこの一年ほど前に自分の割り当て仕事（ある支部セミナーの概要をまとめる仕事だった）をエドワードに持ち込み、代わりにやってくれと頼んでいた。自分は忙しいし、きっとエドワードの方が「どっちみち上手だろうから」という理由だった。

※41

ヨハネ第一 3・14-16、18

が、「でも、それは自分流の解釈でしょう」と言った。そこでエドワードは、「だったら他にどんな説明があるんだい？」と聞いた。フレッド・ラスクは、「エドワード、審理を受けているのはそっちの方ですよ」と答えた。

組織の規則について聞かれたエドワードは、とにかくクリスチャンは律法のもとにあるのではなく、「過分のご親切」（あるいは「恵み」）のもとにあると言った。義に向かう力としては信仰と愛の方が規則などよりも強い。するとロバート・ウォーレンが「でも僕は誰かにあれこれ言ってほしいけど」と言った。ヘブライ5章13節と14節には、クリスチャンたる者赤ん坊のようであってはならず、分別ある大人として実際の経験を通じて「自分の知覚力を訓練し、正しいことも悪いことも見分けられるように」あるべしとある。これが頭にあったので、エドワードは「じゃあもっと聖書を読まないといけないね」と答えた。するとロバート・ウォーレンは笑って「僕だけじゃない、他に二百万人いる」と言った。エドワードは「他の人が読まないからって君が読まなくて良いことにはならん」と言い、大きな問題はこれ、つまりみんなが聖書を読もうとしないことであって、協会の出版物にばかり頼っているものだから良心が本当に聖書による訓練を受けていないのだと続けた。

さて、この審理での主な問題は、エドワードが、すでに排斥になった人たちの何人かと聖書の話をしたことが二度ほどあったことだった。審理委員の方ではこの証拠をまったく持ち合わせていなかったが、エドワードの方が自分から言い出した。何しろはじめからなんでも率直に全部ぶちまけて話すと言っていたのである。この何人かというのは、エドワードのところにやってきて一緒に食事をし、そのあとでローマ人への手紙の話をしたことが二回あった。^{※42}

審理委員たちは、他の人たちにもそういう話をしたのかと聞いた。エドワードは、別に兄弟たちの間を説教して回るつもりは全然なかったと答えた。しかしまた、個人的に教えてほしいと言ってくる人があって、それなら聖書のこ

※42 エドワードは、支部委員会のメンバーを対象とするセミナーでローマ人への手紙についてのクラスを持つように統治体の教育委員会から指示されていた。

を見てご覧と言ふことができる時には当然そうするだろうし、その義務を感じるとも言った。どうもこれが決定的だったようである。そもそもそうやって個人で自由に聖書の話をする事が認められない。したがってこれはすなわち異端であり、危険であるとされる。

極めて不思議な発言もあった。エドワードが、自分は排斥になりたいなんてまったく思っていないし、仲間付き合いが楽しく、この仲間たちと別れるなんて嫌だと言った時である。委員たちは「組織でしばらく待てばいい」と言うのである。「どうなるかわからないですからね。ひょっとすると五年もすればおっしゃるようなことが出版されて教義になるかもしれない。」という理屈であった。

結局、協会の教義がころころ変わることがわかっているからこそ、こういうことが言えるわけである。しかし、協会の教義が本当に正しいのか、聖書的な根拠があるのかについてはどう思っているのだろうか。協会の教義が堅固なものでないことをこれほどあっさり認めるのであれば、どうしてそんな教義に基づいてエドワードが神の忠実な僕か、それとも背教者かを決めることができるのか。

もし問題となっている教義（司会者の委員会がやたらにこだわっているもの）がまた変わるかもしれないから五年待つてみれば良いというのであれば、どうしてエドワードを審理にかけること自体待ってみないのか。エドワードは、五年はおろか半世紀を組織への奉仕に捧げている。

こういう無茶な理屈が成り立つのは、個人の成し遂げたこと、例えば名声や評判や奉仕に捧げた年月などは、組織の目的の前には無意味なことだという前提があつてこそである。

神に対して、キリストに対して、そして聖書に対してエドワードが深い愛情を持っていることは、審理委員も間違はなく全員が認めていたと思う。それでもエドワードに対して何らかの措置を取るべきだと決まった。これはどういうことであろうか。委員たちは統治体の空気を司会者の委員会の話から察していたのである。組織への忠節という点

から見ても、エドワードは処分しなくてはならなかった。組織の見解や解釈をすべて受け入れなかった、あるいは受け入れることができなかったからである。

そこでエドワードは排斥になり、それまで住んでいたベテル本部の家から出されることになった。エドワードは故郷のオクラホマ・シティに戻った。七十二歳である。壁紙をはって妻と二人の暮らしを立てた。これはその四十年前、ものの塔聖書冊子協会に全時間奉仕を捧げる以前に従事していた職業である。

以上すべてについて実質上の責任を持つ人たちが、夜の祈りで神に向かって「私たちの負い目を許してください、私たちも自分に負い目のある人を許しましたように」などとどうすれば言えるのか、私には理解しにくい。

第12章 最終攻撃

「わたしが去った後に、圧政的なおおかみがあなた方の中に入って群れを優しく扱わないことを、わたしは知っています」
使徒 20・29

「柔らかい手袋の下に鋼鉄の手」という古い言い回しがある。

一九八〇年の春に起こった一連の出来事の際に権威構造の鋼鉄の手ができたとは思わない。歴史的に見てもわかる通り、鋼鉄の手はすでに存在していた。一九八〇年の春には、ただ柔らかい手袋が取られてその下にある情け容赦ない手が見えただけである。その後起こったことからそれはわかる。

ベテルの兄弟五人からなる審理委員会は、どう考えても本来統治体がやるべきだったことをした。すなわちエドワード・ダンラップに排斥処分決定を伝えたのである。その時エドワードはこう言った。

「わかったよ、それが決定とあらば。でも「背教」のかどだとは言わせないよ。知っての通り、背教っていうのは神とキリスト・イエスに背くことだ。でも、この場合それが当てはまらないのはおわかりだろう。」

全会衆に送られる『わたしたちの王国奉仕』という月刊誌の1980年8月号へ1980年9月号では、ベテル家族のメンバーで排斥になった者が何人もいると報じ、続いて「組織に対する背教」という言葉が見える。これも誤りなのだが（組織に対する反抗すらなかったのである）、それでも他で言われていたことよりは真実に近かったと言える。

一九八〇年五月二八日、私の辞表がベテル家族の前に読まれた。翌五月二九日には全ベテル長老の集会が開かれた。

参加者にはジョン・ミツチェルもいた。この人は奉仕部門と統治体両方の秘書で、私と何らかの接触があったのは唯一、アフリカに行く時のビザを手配してくれたことがあるだけだった。排斥処分になった人たちとは話したこともない。だがオフィスを通じてやりとりされる審理委員会の手紙の一部を目にしたり、部門内で「異端」審理についてのゴシップを耳にしていた。長老集会での印象と、その時のアルバート・シュローダー及びロイド・バリーの話についてこんなことを言っている。

シュローダーの方はもっぱら組織についての話でした。我々の「よく調整された組織」と言い、組織の規則についていけない者たちは「出ていってしかるべきであり、もうここでの業に関わるべきではない」とも言いました。（ここでいかに組織が「よく調整されている」かを示すために『支部組織』という書籍が持ち出されました。支部及びブルックリン本部での業務について、一千を越える規則が書かれているそうです。）また、「魔女狩り」ではなく、ただ「雑草刈り」が行なわれているとも言いました。

出ていった人たちについては、「別に聖書を信じていないわけではないのです。それでは無神論者になってしまう。聖書の理解の仕方が違うのです」と言っていました。

話の終わりにベテル長老からの質問を受け付けました。ハロルド・ジャクソンが手を挙げ、みんなで問題となっている点についての話し合いをしようとして提案しました。シュローダーは、そういうことをする予定はないと答えました。質問があれば手紙に書けば良いと言うのです。また別の長老ウォーレン・ペーユが、兄弟たちに「忠節の誓い」をさせることは考えたかと聞きました。シュローダーは、今のところそれは考えていないと答えました。

ロイド・バリーの話の方は、どうやら背教者とされた人たちが言っていたことに論駁しようとするものらしく、また組織への忠節を呼びかけるものでした。箴言24・21、22を読み上げ、「変化を求める者たち」に気をつけなくてはならないと言いました。自分たちで集まって聖書を研究する人がいるらしいのは困ったものである、中には月曜夕方の方の『ものみの塔』研究に行かずにやっている者もいる、とも言いました。

また、キリスト教世界の注釈書を使いたがる人がいるのにも困ると言いました。（バーンズの『新約聖書註解』は奉仕部門に堂々と並べられていましたが、この話のあと引き出しに移されました。）エホバの証人としての「豊かな伝統」があるのにこれを十分尊重せず、組織の成長と発展のためにならない考え方をしているのはけしからんという話でした。

ジョン・ミツチエルは、攻撃対象となっている人たちと聖書について、あるいは問題となっている点について話したことなど一度もなかったのだが、それでもこんな風に言う。

排斥処分騒ぎやフランス兄弟の辞任のことを聞いて驚いた時から何か嫌な気分がしていたのですが、この長老集会とそれに続く来事でそれがますます強くなりました。

『ものみの塔』1980年8月1日号へ1980年11月1日号には様々な「背教のしるし」なるものが並べられた記事が載りました。しかし、そのしるしとやらが実際にはどんなものか、もうはつきりしていたのです。そういうしるしを組織が包み隠さず言うようになっていくのが私にはたまらないことでした。例えば次のようなものです。

一、聖書を自由に読ませようとしないこと。聖書を焼いてしまえとまではなるまいと思いましたが、聖書を自由に読み、また聖書の話をするのが御法度になっているのは明らかでした。なぜ統治体は、提案通り、一連の問題について話し合いを持とうとしないのでしょうか。関わっていた人たちは組織への貢献も大きく、また聖書に関する知識も大いに認められていた人たちだったのですからなおさらです。何を隠そうとしているのでしょうか。「真理」がそういう話し合いに耐えないというのでしょうか。

二、重点が聖書から組織の「豊かな伝統」に移ったこと。まさにこれが多くの宗教セクトの欠陥部分だったことが私にはよくわかっていました。パリサイ派もその一つです。マタイ15章、マルコ7章には、神の言葉よりも伝統やしきたりを重視すると言ってイエスがパリサイ派の人たちをなじるところがあります。「忠節の誓い」で組織への忠節を確認しようなどという提案などあまりにも無茶だと思いました。が、言っている人は大真面目だったのです。

三、尋問のやり方。統治体が存在するのは兄弟たちに奉仕するためかと思っていれば、非常に強い権力をふるってあつという間に片付けてしまいました。いろいろなことを慎重に考えて動き、注意深くじつくりと決定に至るやり方の方がより賢明で分別ある行動だったのではないのでしょうか。

長老集会で私は「ちょっと待て！ 落ち着け！ 自分たちが何をやっているかわからんのか？」と一人で思っていました。こう思ったのは組織に忠実でなかったからではなく、この組織が好きで、だからこそ真理という基盤をしっかりと持っていてほしかったからです。

このジョン・ミッチェル同様、私もはじめのうちは希望を持っていた。この悪夢が過ぎ去ればもう少し落ち着いた考え方が出てくるだろう。感情的でヒステリックとも言える被害妄想的「強迫観念」があつて、そのため良心的な人たちが何人かいただけで世界規模の組織に対する脅威だと感じられていた節もある。しかし、これもそのうち消えてもう少し穏やかで分別ある動きになるだろう——こう思っていた。ところがまったくの正反對だった。

恐らく次に掲げる手紙ほど組織への絶対服従を求める空気を表しているものもないだろう。これは一九八〇年九月一日付で本部の奉仕部門から旅行する代表者及び巡回・地域監督全員に送られたものである。そのはじめの二ページを紹介するが、特に「群れを守る」という部分が注目される（重要などころには傍線を施してある）。

巡回・地域監督へ 一九八〇年九月一日 SCG::SSF

親愛なる兄弟たち

皆さんにおかれては「神の愛」地域大会が大いに有益なものとなりました。大会では、なぜ愛が我々の持てる資質の中でも一番有益なのかを確認できました。（コリント第一13・13）愛があれば、至らぬところがあつても我々は一つでいられます。——

コロサイ3・12-14

きっとあなたの愛を示す模範によって、あなたの奉仕する兄弟たちも信仰において高められ、強められることでしょう。我々の方では、あなたの方兄弟姉妹たちが示した愛について伝えてくれる手紙を数多く受け取っています。ある長老団は担当の巡回監督についてもこんな風に書いています。「本当にエホバのご意志を行なうために献身している人で……皆の霊的助けとなり……どんなことでも話し合えます。よく話を聞いてくれて、兄弟たちの気持ちをよくわかってくれます。こういう兄弟こそ、将来問題が起こつた時頼りにすることができます。」

あなたが「彼らのことを真に氣遣う」（フィリピ2・19-23、29）時、兄弟たちはあなたの友情や親交や愛をかけがえのないものと思うことでしょう。ですから、兄弟たちを愛情をもって扱うように努力し続けてください。圧力をかけたり叱ったりしてはいけません。導き、共に働き、また必要に応じて戒めてください。進歩が遅いように見えても忍耐してください。そういう愛のある、忍耐強いやり方は、兄弟たちをさわやかにするでしょう。——マタイ11・28-30

群れを守る

「神の群れを引き受けて牧す」際の監督の主要な責務は、群れを危険から守ることです。（使徒20・28）使徒20・29、30にはそういう危険の一つとして背教を広める人々があることを示しています。これについては『ものみの塔』1980年8月1日号へ1980年11月1日号に良い研究があります。この研究記事の内容は徹底的に学んでおきたいところです。長老や奉仕の僕たちにも特にこれを励ますようにしてください。「学んだ事柄に引き続きとどまりなさい」の要点も入れてください。

真に問題のある背教者と、単に信仰が弱まり疑いの気持ちを持っているだけのクリスチャン、この二者を見分けられるよう、長老たちの手助けをしてあげてください。（ペテロ第二、ユダ22、23）背教者の方は、立ち直らせるための努力を時間をかけて行なった後、断固とした扱いをしなくてはなりません。（ヨハネ第二7-10）信仰が弱まった者については、信仰を固めるための正確な知識を持たせるため、忍耐強く愛情を持って手助けをするべきです。

排斥に値するのは、背教的な見方を広める背教者ばかりではないことをよく知っておいてください。『ものみの塔』1980年8月1日号17頁第2節へ1980年11月1日号17頁第2節にある通り、『背教』という語はギリシャ語に由来しており、そのギリシャ語には「あるものから離れている」「離れ去る、変節」「反抗、放棄」などの意味があります。従って、もしバプテスマを受けたクリスチャンが、忠実で思慮深い奴隷が示す通りのエホバの教えを放棄し、聖書の戒めにもかかわらず他の教義を信じることに固執するのであれば、これは背教です。考えを正すための思いやりのある努力が時間をかけてなされるべきです。しかし、考えを正すための思いやりのある努力が時間をかけてなされたにもかかわらず、やはり背教的な考えを信じ続け、「奴隷級」を通じて与えられたものを拒否するようであれば、適正な審理が行なわれるべきです。

だからといってあなた方や長老たちが、兄弟たち個人個人の信じる場所を尋ね回るといような、いわば「魔女狩り」を行なうべきだということではありません。ただ、こういうことがかなり長老の耳に入るようであれば、群れを守るために思いやりのある慎重な調査するのが適切でしょう。そのような状況を扱う際には慎重で思いやりのあるやり方をするのが必要です。——ヤコブ1・19、20

長老団の間の協力

大都市などでは、悪行が明るみに出てみるといくつかの会衆が関わっていたという場合があります。こういう会衆の長老団の間では完全な協力が必要です。長老は、自分たちの会衆内の伝道者について調査が必要になるかもしれない情報をすべて他の会衆の長老団に早急に知らせる必要があることを知っておくべきです。軽率にも悪行に関わるようになった者には、すべて即座に救いの手が差し伸べられねばなりません。罪の中にかくまうようになってしまった者は厳しく叱責し、それに耳を傾けないような会衆から排除しなくてはなりません。一九七九年秋のセミナー要項「三番「会衆間の問題について長老たちはまだ助けが必要です」の内容を自分の巡回区下の長老団に伝えて注意してもらうのは良いことです。必要な情報が手に入ったらすぐに該当会衆の長老に伝わるようにする必要があります。

会衆に悪行が入り込んで広がることを防ぐ義務が神の面前にあることを長老たちにしつかり感じてもらうようにしましょう。(コリント第一5・6・8) 審理委員会は、会衆の名前を汚した人を許す前に、本当に悔い改めているのかどうかを大いに努力を払って確認すべきです。普通、本当に悔い改めた人は「悔い改めにふさわしい実」を示すことができます。(マタイ3・8) 助言や訓戒がいかに良いものであっても、その人の心がわかってくれなければ、同じ状況の下でまた同じ罪を繰り返すこともわかっておきたいものです。そういう場合、群れを守るため長老は断固とした処置に出る用意がなければなりません。

この手紙は正式な方針を示すものである。その方針が、組織の教義と違ったことを誰かが信じていれば――広めていなくても、単に信じていれば――これを「背教者」として審理にかけることができる」と明言している。

この手紙には、「違ったことを信じる」ことについて、神の言葉の基本的教えに逆らうことを信じることだという説明はない。例えば神の子が人として来ることや、贖いのことや、キリストの血こそ救いの基盤だという信仰や、あるいは復活など、基本的な聖書の教義のことだとは書かれていないのである。それどころか、背教者は神の言葉である聖書に従わないとも言わない。ただ、「忠実で思慮深い奴隷が示す通りのエホバの教え」に反対するということなのである。これは言ってみればこういうことである。王様の指示書を受け入れ、これに従っても忠実であることにならない。王様はこういうおつもりだったのですよと使いの奴隷が言うことを受け入れ、これに従わないといけない。

この一九八〇年九月一日付の手紙であるが、SCGという記号から、書いたのはリオン・ウィーバーであることがわかる。しかしこの「思想統制」の方針が誰か一人の発案によるものだと考えるべきではあるまい。誰かがはずみで極端なことを言ってしまった、後になってあれはクリスチャン的ではないひどいことを軽率に言ってしまったと悔やむ類のものでもない。このリオン・ウィーバーは奉仕部門委員会のメンバーだが、この委員会には他にハーリー・ミラー、デビッド・オルソン、ジョエル・アダムズ、チャールズ・ウッディなどがある。いずれも何十年という経験を持つ組織の代表者ばかりである。全エホバの証人のうち四分の一近くをかかえるアメリカで、統治体の代行者として、一万ほどある会衆、全長老、巡回・地域監督の活動を監督するのを任務としている。統治体の奉仕委員会とは常に連絡を取っており、統治体の方針に精通しているばかりか、その考え方、方向性なども心得ていると言われる。

これを考えに入れると、先ほどの手紙の恐ろしいところがますます恐ろしくなる。私も長年奉仕委員会にいたのでわかるが、これほど重要な手紙になると必ず統治体の奉仕委員会に提出して承認を仰がなければ発送できない。^{※1} 奉仕委員会のうち一人でも反対する者があれば、その手紙は統治体全員の話し合うところとなる。

どういう経緯をたどったにせよ、この手紙の方針（この方針は宗教裁判における宗教権力を思わせる）は統治体のメンバーも含めた多数の本部代表者の承認を受けたはずである。人の友人関係、家族関係、個人の名誉その他がかかっていることであるから、これら代表者たちはこの一九八〇年九月一日付の手紙の内容について時間をかけて慎重に考えたはずである。何しろイエス・キリストの「忠実で思慮深い奴隷」からの正式な文書である。後になって「いや、別にあの書いてあるままのつもりじゃあなかったんだけど」と言って済ませられる内容でもない。事実、まさにこの手紙で伝えられた思想統制の方針だけのために実際に排斥になった人が数多くいたし、現在でもいる。協会の解釈す

※1 当時のメンバーはテッド・ジャラス（調整者、ミルトン・ヘンシェル、アルバート・シュローダー、ウィリアム・ジャクソン、マーティン・ポエツィンガーであった。

べてを心から受け入れることができないというだけで「背教者」という不名誉なレッテルを貼られるのである。

ひよっとするとこの方針の原因は、同じ一九八〇年に起こったあるニューヨークの会衆での出来事かもしれない。先ほども紹介したジョン・ミッチェルは奉仕部門でパートタイムの秘書だったが、その時のことを次のように言う。

「その頃「一九八〇年初夏のこと」フレッド・フランスからのメモが回ってきました。ハロルド・ジャクソン「奉仕部門スタッフの一人」からの質問に対する回答のようでした。」

「どうやらこういうことだったようです。スペイン語会衆で開拓者（全時間伝道）だった姉妹がいて、啓示（黙示録）7章と14章の十四万四千という数字が文字通りの数だと良心的に教えられないと思った。別にそのことを人にも押しつけようとか反対意見を言って回ろうというのではなく、ただ一緒に聖書研究をしている人に対して十四万四千というのが文字通りの数字だとは教えられない」と言う。

「ジャクソン兄弟の質問は、こういう人が『背教者』になるかどうかというものであったようです。回答は、確かにこういう人は背教者と言えるし、もし協会が教えるように言っていることを教えようとしないのであれば排斥処分を受けるべきだというものでした。後で奉仕部門の誰かがこのことの顛末について話していて、結局あの女は『前言撤回』したよと言っていました。恥ずかしげもなくそういう言葉が使われるのが驚きでした。」

先ほど紹介した一九八〇年九月一日付の手紙のように極端な内容が旅行する代表者によって全長老に伝えられれば、非難の嵐とまではいかないまでも、少なくとも驚きと落胆の声が長老その他から聞かれるのではないかと思われるかもしれない。しかし、関係者には訓練が行き届いているのでそういうことは起こらない。ごく少数の人たちが意見を出したのも確かだが、これもこわごわという感じだった。「背教者」と言われてはかなわないのである。したがって、反対の声がなかったのは、パウロが呼びかける通り「神の善にして受け入れられる完全な意志を自らわきまえる」からではない。^{※2} この手紙の、「排斥に値するのは、背教的な見方を広める背教者ばかりではない」云々と

※2 ローマ12・2。

いう部分をもう一度見てみると、この思想統制の方針に聖書の根拠があることを示す聖句が一つも引かれていないのがわかる。クリスチャンの考えは「キリストに従順に」あるべきであって、人や組織に従順にあるべきなのではない。^{※3} ではどういうわけで自分の良心をこんな思想統制に任せてしまうのだろうか。

「組織」という概念が原因である。組織が言うことは何でも神が言うのと実質上同じだという思い込みが形成されるのである。この手紙もそうだが、協会組織の見解が作り出す効果をよく反映していた出来事に、アラバマの一区域の巡回大会における長老の集まりでの一件がある。地域監督のバート・トンプソンが緑色の表紙をした協会発行の書籍を掲げ、長老たちを前にこう言ったのである。「協会に、この本は緑色ではなくて黒だと言われたら、私はこう言います、『誓って緑色だとは思っけれども、協会が黒だと言っただから、この本は黒い！』」似たようなたとえを使っただけで他にない。

もちろん、ここまで露骨な盲従になると嫌悪の念を抱くという心有るエホバの証人も多い。しかし大多数は進んで同調する上、協会の解釈に疑いをはさむ者を「審理にかける」ことも辞さない。これはどういうわけだろうか。

統治体のメンバーも含め、この大多数の人たちの気持ちを理解すべく、私は自分の心に問いかけてみる。私自身の経験に照らしての感じを一言でまとめると、「概念の虜になっている」と言えると思う。「組織」について持っている概念・イメージが一人歩きする。そしてその概念に支配され、動かされ、また縛られ、考えも行動も判断も型にはめられてしまう結果になる。もし、神のこと、キリストのこと、聖書のこと、そして（組織の、ではなく）クリスチャンとしての兄弟たち、仲間の人間のことだけを思っていれば、ああいうことはしない人が大部分だと思う。ところがこの「組織」という概念が入ってくると考え方や立場が変わり、ついに「組織」の概念が支配的な力となってしまう。同様に、統治体の面々が「組織」と言う時には、現実の組織ではなく概念としての組織が頭にあるのだと思う。「組

「組織」というのが何か自分たちよりもはるかに大きな、規模雄大なものだと感じる。成員数や支配の及んでいる国々を思い浮かべ、世界的規模を持つものだと感じる。それは組織そのものではなく、単に組織の及ぶ領域なのだが、それをはっきりと意識することはいらない。ところが一方、「組織への忠節」を呼びかける時は、領域の話、つまり何千という会衆やその成員の話ではないのがわかつている。わかっていないとおかしい。すなわちこの場合は指示の場所、教義の総本山、権威の中心のことを言っているのである。統治体のメンバーが認めるかどうか、あるいは考えたがるかどうかは別だが、実際問題として、この決定的な意味においては、統治体のメンバーが（そしてメンバーだけが「組織」なのである。例えば支部委員会、巡回・地域監督、会衆の長老団など他の権威が他にあっても、これはすべて統治体に依存しているのであって、その改編も地位の剥奪も統治体の決定次第である。すべて一方的に行なわれ、疑義をささむ余地もない。ローマ13章でパウロは、地上の政府は「神によってその相対的な地位に据えられている」と言う。これにならって言えば、組織内の権威はすべて「統治体によってその相対的な地位に据えられて」おり、その支配のもとにあることになる。

先にも述べた通り、統治体のメンバーがこういう実態について考えているだろうとは思えない。したがって「組織」は何かはっきりと定義づけられない抽象的なものであり続け、はっきりした現実にならない。このような「組織」の幻想があるからこそ、実質上無制限の権力を持った統治体の一員となりながらも、その統治体が行なうこと、それによって人が傷つくこと、おかしな情報を流して結果として道を誤らせることなどについて個人的な責任を感じないで済むのである。つまり「組織のやったことで、我々がやったことではない」のである。さらにこの「組織」が神の選んだ機関だと信じているのだから、責任は神の方へまわされる。たとえ後になって間違った決定や教義を変えることになっても、これはやはり神の意志なのである。間違った決定で排斥になった人もいるかもしれない、傷ついた人もいるかもしれない。しかし統治体のメンバーは個人として自分に責任があるとは思えない。何かまずいことがあっても「組織」のために神が後始末をしてくれるというわけである。

以上は、統治体の率いる組織を非難するためではなく、説明するために書いた。基本的には親切で正直だと思われる人たちが、本来ならできそうにないことができる理由を理解しようとしてみたのである。このような「組織」の概念は誤っているし、有害だし、悲劇的だとも思う。「背教」に対して下された処分は、そのほとんどが不当であるばかりか嫌悪感を起こさせるものである。クリスチャンのみならず、いかなる人間の集まりにもふさわしくない。しかし、こうして理解しようとしてみると、関係者一人一人に対しても組織全体に対しても恨みの気持ちを胸に持とうという気になれない。恨みの気持ちというのは、結局自分も周りも駄目にしてしまう。仮に私の家に訪ねて来たとしても、歓迎したくないような人は関係者の中に一人もいない。特に何を言おうとも思わないし、謝罪とか何とかいう話もないだろう。この人たちと（あるいは他の誰かと）考え方に違いがあるからもう縁を切ろうと思ったことはない。縁を切るという考え方や行動は、我々にとってそれこそ縁遠いものである。

統治体会議で話し合った模様は録音されており、私はテープのコピーをもらえることになっていた。これがどうなたかを見てもらえれば、私の言うことがよくわかって頂けると思う。

アラバマに戻って三週間ほど経った頃、統治体に手紙を書く用事があったので、ついでにテープはどうなったのかと書き添えた。すると一九八〇年六月二六日付で返事が来た。

一九八〇年六月二六日

親愛なるフランズ兄弟へ

六月一四日のお手紙受け取りました。

発送担当に確認したところ、あなたの家具類は梱包され、六月二四日火曜日にブルックリンから発送したとのことでした。まもなくそちらに着くはずですよ。

お書き頂いていたテープの件については、現在手配中で、コピーができて発送準備ができ次第お送りします。

お送り頂けるという本を楽しみにお待ちしております。返すと言っておられた大会講演の資料はお手紙と共に受け取りました。

エホバの祝福がありますように。クリスチャンとしての愛を送ります。

あなたの兄弟たちより

ものみの塔聖書冊子協会

司会者の委員会 代理

それから二週間経つと、次の手紙が来た。

一九八〇年七月一〇日

親愛なるフランズ兄弟へ

こちらからの六月二六日付の手紙に追加して記します。

『支部組織』と『統治体運営手順』の本をお返し頂き、ありがとうございます。二冊とも先日受け取りました。また、発送担当によるとあなたの家具類は送られ、すでにそちらに届いているということでした。

司会者の委員会は五月二〇日のテープ（おっしゃっておられるのは五月二二日の統治体会議のテープかと思いますが）について「手配中」としていましたが、統治体では、どちらの日付のものであれ、テープのコピーを作って出すことは避けた方が良いでしょうと考えています。また、四月に統治体のメンバーに送られてきた機密事項が後に排斥になったベテル家族メンバーの手に渡り、さらに他の人たちの間を回されたことにも鑑みて、統治体では会議の記録を（テープであろうと議事録であろうと）協会敷地外の人に公開しないと決定しました。さらに、あなた自身の地位が変わったこともあります。もしテープをお聞きになりたいのであれば、ベテルで聞いてもらうことに反対するものではありません。

テープのコピーをお渡しするという風に口頭で申し上げ、また手紙にも書きましたが、現在、状況がかなり変化しているのです。きつとご理解頂ける通り、これが最も慎重なやり方だろうと統治体では思っています。これが妥当な計らいであると思って頂けるものと思います。

ご健勝をお祈りし、クリスチャンとしての愛を送ります。

あなたの兄弟たちより

ものみの塔聖書冊子協会

司会者の委員会 代理

この手紙で、そもそものはじめからのやり方を否応なく思い出した。司会者の委員会が裁きの機械にスイッチを入れ、次々に排斥を生み出していったやり方である。あれはもう終わったと思っていた。「四月に統治体のメンバーに送られてきた機密事項」とは何のことなのかさっぱりわからない。ブルックリンにいた時にも、アラバマに戻ってくるまでの間にも、排斥になった人とは会わなかった。そこで私は次のような返事を出した。

一九八〇年七月一九日

ものみの塔協会 司会者の委員会あて

親愛なる兄弟たちへ

七月一〇日の手紙、受け取りました。確かに家具類は良好な状態で受け取りました。発送担当の兄弟たちにお世話になり有り難く思っています。

五月二一日のテープ（五月二〇日としていたのは私の間違いです）を送って頂けないという決定についてですが、これを渡して頂けるとするのは約束で、会議の前に司会者が明言した通りでもあることはそちらでもおわかりのはずです。私の地位がどうか、ベテルの中にいるか外にいるかというような条件は一切ありませんでした。これは会議が録音されることに同意する際に私が要求した唯一の条件で、そちらもそれを受け入れ、同意して頂いたのです。このことをそちらも手紙でお認めになっているのですから、約束は守って頂くのが筋ではないかと思います。他の人が何をしたにせよ、私との約束を破って頂く理由にはなり得ません。もし約束を守らねないのであれば、当該テープ及びそのコピーや写し原稿など一切を破棄して頂くのが唯一公平なやり方でありましょう。私にテープのコピーが頂けない以上、そちらも持っているべきではないのですから。そもそも私はテープのコピーを頂けるという条件で録音しても構わないと申し上げたのです。

書類にはまだ全部目を通していませんが、まだお返しするべきものが残っているかと思いますが、できるだけ早くお送りしたいと思います。

テープの件については早いうちに返事が頂ければと思います。テープか、そうでなければテープ及びそのコピーや写し原稿など一

切は破棄したというお知らせか、いずれかをお待ちします。

以上よろしくお願い致します。神の言葉と王国についてのよい知らせの崇高な基準を忠実に守ることに神の助けがありますように。

R・V・フランス

統治体が三週間後に送ってきた返事は次の通りである。

一九八〇年八月八日

親愛なるフランス兄弟へ

司会者の委員会からの七月一〇日付の手紙についての七月一九日付のお手紙、受け取りました。

七月一〇日付の手紙で申し上げました通り、統治体では今のところ五月二日の会議のテープは送らないことに決定しました。手紙で申し上げた通り、テープを聞きたい場合はベテルで聞くことができます。

以上よろしく。

ものみの塔聖書冊子協会

司会者の委員会 代理

私の言っていたことには一つも答えていない。以前経験したあの非現実的な感じが戻ってきた。責任ある立場にある人たちにこれほど無責任なことができるとは信じ難かった。この手紙の文面から読みとれるのは、権利はすべてあちら（組織）にあり、組織にとつて望ましく益になるようであれば、個人の権利などは特に重要でないので無視し、捨て去って構わないという態度である。私は次のような手紙を書いた。

一九八〇年八月二八日

司会者の委員会あて

親愛なる兄弟たちへ

送って頂ける約束だったテープについての七月一七日付のこちらからの手紙に対する八月八日付のお手紙、受け取りました。

お手紙は、返事ではありましたが答になっておりません。七月一日付のお手紙の内容を要約して繰り返したもので、こちらの七月一日付の手紙の質問にまったく答えて頂いておりません。

そこらは五月二二日の会議の録音テープを持っておられますが、これは約束を果たしておられないからです。約束を取り交わしておいて、あとからまた別の条件を勝手に、また一方的に出すのはどう考えても公平ではありません。六月二六日のお手紙では、この会議の録音テープを私に渡す約束があったこと、そしてそれを送る意志があること、この二点を明記しておられます。その時点で私の地位はすでに変わっていたのに、あとになってこのことが約束を守らない理由に使われています。約束を守らない理由として七月一日付のお手紙に書かれておられることは、契約不履行を正当化する理由たり得ません。

このようなことをするとどうなるのか、レビ記19・15、ローマ1・31にある基準を胸において考えて頂けますでしょうか。テープを外に出すことに抵抗があるということでしたから、私は唯一のまっとうな代案として、テープ、そのコピーないし写し原稿一切の破棄という提案を致しました。テープを持っておかれたのであれば、それを手に入れた際の約束を守って頂くのが筋です。もし我々の立場が逆であったならば、つまり私の手元にテープがあり、そちらが約束のテープのコピーを求めているという状況ならば、きつとそちらも今の私と同じ立場をとることでしょう。――マタイ7・12

以上、皆さんご自身のため、さらには兄弟たち全体のためとしてお受け取りください。私の地位は高くなく、低い身分だと思われるかも知れませんが、この手紙並びに七月一日付の手紙で申し上げたことを考えて頂き、実行して頂ければ有り難く思います。

R・V・フランズ

ほとんど一カ月が過ぎた頃、次の手紙が来た。

一九八〇年九月二四日

親愛なるフランズ兄弟へ

一九八〇年八月二八日付の手紙、受け取った上、考慮しました。

おっしゃっておられた五月二二日の会議のテープは破棄処分しました。統治体のメンバーの三人が破棄処分の際の立会人です。録音された内容を書き取った原稿などはなく、テープのコピーもありません。当該テープはすべて完全に破棄処分しました。

以上、お手紙で望みになっていた通りです。

以上紹介した手紙から明らかな通り、私の「お望み」というのは、単に約束通りテープを送ってもらうことであった。あちらがどうしても手放したくないようなので（何か「ウォーターゲート事件」を思わせる）、代案を申し出たわけであり、あちらはやつとこのことでこれを実行してくれた。しかしいづれにせよ何とか片が付いたので嬉しく思った。これで統治体とのごたごたも終わりだと思った。ところが、そうはいかなかった。

アラバマに戻って何週間か経った頃、「南部に腰を落ち着ける一助として」ということで協会から一万ドルを送られた。お金を要求した覚えはなかったのですが、これは望外の有り難さであった。さらに五千ドルを借りて、移動式家屋を手に入れた。ピーター・グレガソンはそれを自分の敷地内に置いて良いと言ってくれた。ピーターの庭仕事という肉体労働ができる（また経済状況からせざるを得ない）のは助かった。芝生を刈り、雑草を取り、生け垣を揃えて毎日が暮れた。ハチやスズメバチに刺され、ハリアリにも数え切れないほど刺された。戸外の気温が三十八度を越える日が三十日間続いた時も汗を流して働き続けた。これほど何ヵ月も肉体的な苦痛が続くというのは初めてだったが、精神的な苦痛を埋め合わせてくれた。

しかし私にとっても妻にとっても一番大きな助けになったのは毎日聖書を読むことだった。毎朝二人で詩編を順番に四つずつ読んでいき、これを終わるまで続けた。何度も読んでいるはずなのに、新鮮に感じられた。それまで以上に実感を持つことができた。神とその僕との間にあり得る——そしてあるべき——個人的な関係をはつきりと示しているところが聖書に一つあるとすれば、それは詩編と言えらるだろうし、その点では際だっている。詩編の作者たちはよく苦しみや悲しみ、無力感や絶望の気持ちなどを訴える。しかし最後には、すべての望みがあるのは人ではなく、

神であることが示される。岩であり、高みにある保護の場所である神エホバにこそすべての望みがあること、あらねばならぬこと――これは私たち二人の心に触れるものだった。

本部を離れる時、問題は起こすまいと決めていた。ごたごたはもうまっぴらだった。しかしごたごたの方がこちらを追いかけてきた。

何ヵ月もの間、私たちはエホバの証人東ガスデン会衆の人たちと楽しく付き合い、集会や「野外奉仕」を行なった。そこに行つて二、三ヵ月の頃、長老団がブルックリン本部に手紙を書き、私をその会衆の長老にと推薦してくれた。協会からの返事は手短で、私を長老（あるいは奉仕の僕）として推薦するのは望ましくないと伝えてきた。私の辞表提出（これは本部スタッフの排斥について報じた『わたしたちの王国奉仕』に発表された）からまだ時間が経っていないというのがその唯一の理由だった。会衆の主宰監督はその手紙の文面に気を悪くしたようだったが、私は気にしない方が良いと言った。

長老たちは例の一九八〇年九月一日付の手紙（協会の現行教義に合わないことを信じているだけで排斥の理由になるとしたもの）に基づいた話を聞かされていたわけだが、そこへこの一件があったのである。周囲の空気が次第に変わりはじめた。『ものみの塔』には、「背教」の発生を大に取り上げた記事が出始めた。平和な解決を求める記事ではない。以来、今日に至るまで、口伝えの言葉と出版物の両方が声を合わせて宣伝活動を行ない、本部スタッフをひどいやり方で処分したことを正当化しようとしている。断定的なところは変わらない。組織は神の権威だ、したがってとにかく忠節を保つべきだという主張はますます執拗になる。『ものみの塔』は毎号のように疑問があがった点を取り上げ、自分たちの正しさを主張し、見解を和らげるどころかますます独断的になる。同時に、反対意見を攻撃するために根も葉もないことを言う度合いがさらにひどくなる。

疑いと恐れが広がった。温厚な性格の長老たちも、慎重さを呼びかけることに抵抗を覚えるようになった。忠節を欠く証拠と見られては困るからである。強硬派にとっては自分たちの路線を打ち出せる良い機会であった。ア

メリカのマッカーシー時代のようなだった。人民の権利と自由に基づいて発言したり、少数派の理念を抹殺する非道なやり方に反対したりする者はすべて「共産主義シンパ」であり過激派の「同調者」であるとされた、あの時代である。こういう状況だったので、集会に出るのが段々つらくなってきた。神の言葉が乱用され、曲解される一方で、組織が自らの権威を謳い上げ、褒め上げるのを耳にし続けることになるからである。せめて一世紀当時のシナゴグにあったような表現の自由があつてほしいと思う状況だった。一世紀のシナゴグでは、使徒などが真理のために話をすることが許されていたのである（もっとも、後になると態度が硬化し、ついにシナゴグの扉は閉ざされてしまうのであるが）。しかし（ピーター・グレガソンにも言ったが）、私は自分では王国会館への訪問客だと思っていた。会館も、集会も、プログラムも、すべてあちらのものであつて、やつておられることに水を差すことは一切しなくなかった。したがって私が発言する際にも、関連する聖句を挙げてこれとこれが当てはまりますと言う程度にとどめた。それが終わると大抵誰か（年長の人の場合が多かった）が出てきて今のは良いお話でしたというようなことを言ってくれた。しかし、辺りに広がる宗教闘争のムードから、さらに何らかの措置が私に対して取られるのは時間の問題ではないかと感じられた。そしてまさにその通りになった。

罪と評決

『パリサイ人も書士たちもしきりに不平をならし、『この人は罪人たちを歓迎して一緒に食事をする』と言った』

ルカ15・2

たった一度の食事、これが証拠のすべてだった。その顛末は次の通りである。

アラバマ北部に戻って六カ月ほど経つと、協会から新しい巡回監督が派遣されてきた。その前の監督は落ち着いた人で、問題があつても騒ぎ立てずに収めてしまう方だったが、この新しい監督はもっと押しが強いことで知られてい

た。これは協会から地域・巡回監督にあてて例の手紙（協会の教義とは違うことを信じるだけで「背教」になるとしたものが送られた頃である。

この新しい巡回監督、ウェズリー・ベナーは、二度目に東ガズデン会衆を訪れた際（一九八一年三月だったジム・ピッチフォードという長老と帰宅途上のピーター・グレガソンに会って話をする手はずをした。町や巡回区でピーターのことが「いろいろ」と言われているから、と言うのである。それを聞いたピーターは残念だと言い、一体その「いろいろ」というのは誰が言っていたのかと尋ねた。ベナーは言葉を濁したが、ピーターは状況を何とかするためには知る必要があるからと言って食い下がった。ベナーは、ピーターの義理の親戚だと言った。

自分としては言動に十分注意しているつもりだし、この辺りで聖書の話をするとなれば直接の親戚以外にはいない、とピーターは明言した。そして、それ以外の人が（ベナー巡回監督が言うように「いろいろ」と言っているならば非常に懸念すべきことであるが、「一体どういことなんでしょう」と尋ねた。ベナーは何の説明もしなかった。

それでは一体どんなことが言われているのか、とピーターは聞いた。するとベナーは『ものみの塔』の記事に出てくる点の一つ取り上げ、これにピーターが反対意見を持ったという話なのだと言った。それはどう考えても聖書の「主要な教義」と言えるものではなく、むしろ専門的と言っても良い事柄だった。^{※4} ただピーターが組織に賛成しなかつたので重要な事柄になったのである。時間をかけて話し合った結果、とうとうベナーもこれは確かに協会の間違いかもしれないと認めざるを得なくなった（ものみの塔協会はこの点について質問を受け、その回答としての一九八一年五月

※4 これは『ものみの塔』1980年4月15日号へ1980年11月15日号14-20頁に載った記事の話である。この記事は啓示（黙示録）7章15節で「大群衆に關連して使われているギリシア語のナオス（神殿、あるいは聖所）という言葉が神殿の中庭の部分を指すこともできることを示そうとするものである。そこでは、イエスが両替人たちをナオスから追い出したと書いている（15頁へ15頁）下の囲み記事参照。が、聖書そのものがヨハネ2章14-16節ではっきりと別の言葉（ヒエロ）を使っている、これは完全な誤りである。ある長老の言葉を借りると、「不誠実さ、あるいは無知のいずれかを示すもの」ということである。

一日付の手紙でこの誤りを認めた。この手紙には「15頁の下のまじめにある三つ目の点は、各国語翻訳版『ものみの塔』から削除されました」とあるが、これは事実ではない。^{※5}

ピーターはこの時のことを「とにかく『対決』状況を作り出すまいと決めて、できるだけ穏やかで理屈の通った話し合いにしようと努力した」と言っている。ベナー巡回監督と長老が去ると、ピーターはこれで平和に解決したなど思い、嬉しく思っていた。実はそうではなかった。

その翌週ベナー巡回監督は、もう一度例の件について話し合いたいと言ってきた。

ピーターはこの時、来るべき時が来たと感じたそうである。統治体のやり方、奉仕部門からの一九八〇年九月一日付の手紙、さらに『ものみの塔』記事の数々によって、すでに「魔女狩り」の空気があった。ピーターにしてみれば、自分を排斥にしようとする動きに気がつかない方がおかしいと感じていたのである。私との付き合いも要因になっていると考えた。ピーターの考えでは、選択肢は二つあった。自分から会衆を離れる（断絶する）か、排斥されるに任せるかである。どちらも好ましくなかったが、まだ自分から離れる方がましだろうと考えた。

そこまですべき状況だろうか、と私は尋ねた。ピーターは、このことについてはよく考えたり、祈りもしたが、これが賢い選択だと思ふと答えた。一番心配なのは家族だとも言った。七人いる子供のうち三人が結婚していて、孫もいるし、その上兄弟姉妹が五人いて近所に住んでおり、たくさんのお甥や姪がいる。これが全員エホバの証人である。^{※6}

もし自分が組織の代表者によって排斥された形になったら、これら家族親戚一同にとっても難しい状況になってしまう。つまり、父として、祖父として、兄弟として、あるいは叔父としてのピーターと付き合いが、はたまた組織に忠実に従って付き合いを避けるかという深刻な板挟みになってしまう。さらに、自分の経営する店には三十五人

※5 この件に関する詳しい資料については ジョン・ミッチェル『神に仕える「大群衆」はどのようにあるのか?』(Jon Mitchell, Where Is the

"Great Crowd" Serving God?, Commentary Press, 1998) の付録を参照。

※6 ピーターの妻方の家族にもエホバの証人が多かった。

ほどのエホバの証人が働いている。自分から会衆を離れるのは、単に会衆のメンバーではなくするという過ぎないと理解している。この方がましである。排斥の場合であれば、組織の方針により、人間関係の切断を要求されるが、断絶の場合には当てはまらない。※7

ピーターは会衆を離れるという通知を一九八一年三月一八日に提出した。これは会衆で発表され、型通りの言葉が続いたが、雰囲気は和やかなものだった。ピーターは子供の時からエホバの証人だったし、地元の会衆の活動では長年にわたって指導的な役割を果たしていた。また、通知は穏やかな調子で辞意を伝え、敵意のまったく感じられないものだった。ごく少数の例外を除けば、ガズデンのエホバの証人はピーターに会えば親しみのある態度で接していた。この人たちが自分の判断に従っていれば、これがそのまま続いていただろう。危機的状況は避けられたかに見えた。ところがそれから六ヵ月と経たないうちに出た『ものみの塔』記事によって、状況はがらりと変わってしまった。「これは名前を出してないだけで、あなたとピーター・グレガソンのことですよ」と言った人もあった。この記事の背景にあるのはガズデンの状況に他ならないとまでは思わないが、確かにある程度関係していたと思う。さて、それは一体どんな記事だったのか。

一九七四年、統治体は、排斥になった人の扱いについて記事を書く仕事を私に割り当てた（統治体で決定した内容※7 私も直接知っていたが、当時までの統治体の方針では、断絶と排斥が同様に扱われるのは政治に関わったり軍隊に加わったりする人についてであり、単に会衆から離れる人には当てはまらなかった。この類の方針がすべて書かれた『支部事務所の手紙に回答するための助け』というマニュアルがあるが、その改訂の仕事を担当したのは私なのである。また、断絶者を排斥者と同様に扱ったケースを耳にしたこともなかった。このように両者の扱いは異なっており、唯一の同じ点は会衆に復帰するのに嘆願書を出す必要があることだけだった。奉仕部門が両者を同等と見なすとした手紙を出したと聞いたとき、私は奉仕部門委員会のメンバーと話をし、これは統治体で扱ったことのない事柄であり、奉仕部門が勝手にやっていることかと思えないと言った（これは奉仕部門が時々無断でやる「方針決定」の一つである。そのメンバーは、確かにこれは統治体から来たものではないと言った）。

を伝えるためである)。※8 この記事は統治体の承認を受け、それまで一般的だった態度を大きく変えた。排斥になった人と付き合うに当たってはもつと思いやりの気持ちを示すようにと呼びかけ、排斥になった家族の扱いについての方針も緩やかにする内容だったのである。

ところが『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号はこれをまた元通りにしたばかりか、一九七四年以前よりもさらに厳しくなった（これは「タツキング（方向転換）」して元に戻る一例であるが、この場合出発点よりもさらに後ろに戻ってしまっている）。※9

大きな変更点は、（その数ヵ月前にピーター・グレガソンがしたように）自分から断絶した人の扱いについてだった。この時初めて、自分から断絶した人は会衆から排斥された人と同様に扱われるべしという方針が公にされたのである。※10

この記事を読み、また自分が統治体で経験したこと（特に司会者の委員会とのこと）を考え合わせると、これからどうなるのかは明らかであった。まもなくすべてが始まった。

※8 統治体には、排斥になったけれども集会には出たい、しかし助けが必要であるという人についての問題が二件来ていた。一人はニユーイングランドの地方に住む若い女性、もう一人は中西部の麻薬療養所にいる女性だった。いずれも、交通手段の助けがないと集会に行けないというのだった。統治体では、こういう場合には交通手段の手助けをしても構わないと決定した。

※9 『ものみの塔』1981年12月1日号へ1982年3月1日号は、協会が教義上の様々な点において立場がころころと変わることを正当化しようとする記事を載せている。その記事では風に逆らってタツキングしながら進むボートのたとえが使われている。変更によってほとんどすべてが元通りになってしまうことが多いのが問題である。

※10 この方針は自分から辞める人に向けられたものである。政治に関わったり軍隊に入ったりする人も「断絶」になるが、これは自分から進んで選ぶのではなく、協会の方針に従い、長老たちによって自動的に「断絶」扱いされるという性質のものである。したがって、この新しい方針は自分から進んで辞めていく人たちについてのものなのである。

ここで詳しい話をするのは、別に私の経験したことが特に入り組んでいるからでもないし、特殊だからでもない。他の人も経験したことや、この種のケースで常にエホバの証人の長老たちが行なうことに通じる、実に典型的なものだからである。中央権威から教え込まれた人たちの考え方・やり方をよく示すものだとも言える。

さて、問題の『ものみの塔』誌は九月一五日発行になっていたが、実際にはそれより二週間以上前に着いた。それから何日も経たないうちに、エホバの証人東ガスデン会衆の長老、ダン・グレガソンの訪問を受けた。これはピーターの一番下の弟である。ダンは、自分と他の長老二、三名とで私に話したいことがあると言った。私は、それは構わなければ、一体何の話かと尋ねた。ダンは少しためらったが、私が組織の悪口を言ったことについて話したいのだと言う。誰がそんなことを言っていたのかと聞くと、その人は匿名を望んでいるという返事である（この「誰だかわからない人からの攻撃」は非常に多い。責められている方はこれが正しく、当たり前のこととして受けとめることになる）。

私は、イエスがマタイ18章15節から17節で言っていることがここで当てはまるとは思わないかと尋ねた（これは、兄弟について不平を持つ人はまず自分でその人のところに行って問題点を話し合うべきだという内容である）。ダンは、確かに当てはまると言うと言った。私は、それなら長老としてはイエスの言葉に従うべく、その問題の人に会い、私のところに来て直接話をするように伝えるべきではないかと言った。すると、その人は自分にその「能力」がないと思っ
ているという答だった。私は、そんなことはまったく無関係だし、また自分としては誰とも議論をしようとは思っていないと言った。た
だもし誰かの気分を害したのであればその人から直接言っ
てほしいのだ、そうすれば謝ることもできるし、ごたごたをはっきりさせることもできる（結局これが誰だったのか、今日までわからないままである）。これに対してダンは、長老には「群れを守り、羊たちのために注意をしておく」責任があることもわかってほしいと言った。私は、まったくその通りだと答えた。だからこそ長老たちは、神の言葉に忠実であり、実生活においてもそれを生かすよう群れにいる人たちに勧めるべきである。今の場合、長老としてはその人がイエスの勧めを実行すること、

つまり私と直接話をつけることができるように計らってはどうか。私も何がその人の気にさわったのかわかれば、それなりに謝ることもできる。

するとダンは今この件はいいですと言って次の話題に移った。今度は私の「交友関係」について話したいというのである。私は、それは一向に構わないと答え、結局その二日後にダンがもう一人別の長老と一緒に来ることになった。

さて、ダンとシオテイス・フレンチという長老がやってきた。はじめにダンがコリント第二の13章7節から9節を読み、『ものみの塔』1981年9月15日号（1981年11月15日号）の記事に鑑みて、特に自分の兄であるピーター・グレガソンとの付き合いについて考えを「修正」してもらいたいと言った。ダンは八月のある日、ピーター夫婦と我々夫婦が食事をしているカフェに居合わせたというのである。

私は二人にこう尋ねた。我々は目下、ピーターの所有地にいる。つまりピーターは私の大家になるわけであり、さらに私はピーターに雇われている。おわかりであろうか。——二人ともそれはわかってくれた。

そこで私はこう言った。他の事柄と同様、人付き合いにおいても私は良心によっている。パウロもローマ14章で良心の重要性について語っている。聖書の言うところであれば私は喜んで従いたい、断絶した人についての今回の見解にはそれを支持する証拠がないように思う。どんな聖書の根拠があるのだろうか。——

そこからの話は予想通りのコースをたどった。ダンはコリント第一の5章を示してくる。そこで私はこう言う。そこで言われているのは、兄弟と呼ばれていても淫行の者、偶像を礼拝する者、罵る者、大酒飲み、ゆすり取る者などとは付き合うなどということであるが、私の仲間にそういう人はいないし、自分の家に入れたくもない。まさかピーター・グレガソンがそういう人間だと思ふのかと尋ねるが、返事はない。

次にダンはヨハネ第一の2章19節を引く。「彼らはわたしたちから出て行きましたが、彼らはわたしたちの仲間ではありませんでした。わたしたちの仲間であつたなら、わたしたちのもとにとどまっていたはずです」という部分で

ある。文脈から見ても、ここでヨハネはどんな人のことを言っているかと思いかと聞いてみると、「反キリスト」のことだと認めてくれる。そこで私は、そういう者とは付き合うなど言っているヨハネ第二の7節から11節でも同様であると指摘する。私は神とキリストに反抗する反キリスト者とは決して付き合わないから安心してほしいし、また私の知り合いにもいないとも言える。まさかピーター・グレガソンが反キリスト者だとは思わないでしょう、とまた聞いてみるが、やはり返事はない。※11

実際のところ、以上がこの「群れを牧する人たち」二人が私に施した聖書上の「修正」である。これ以降二人が出てくるのは『ものみの塔』ばかりである。これこれについて『ものみの塔』が言っていることを受け入れるか、組織の指示に従うか、などである。私は、問題は神の言葉がどう言っているかであり、教義の中には神の言葉に揺るがぬ基礎を持つものもあれば、将来変更になるかもしれないものもあると言った。

その説明のため、私はダンにこう尋ねてみた。組織が将来、マタイ24章にある「この世代」というイエスの言葉についての見方を変えることがあり得るだろうか（統治体のメンバーのシュローダー、クライン、スーターの三人が問題の「世代」の始まる年代を一九一四年から一九五七年に動かそうとした話はしなかった。ダンは、「もし将来組織が変えようと判断するのであれば、私としては受け入れるでしょう」と答えた。はつきりした答ではないにしても、変更があり得ることを認めた言葉である。そこで今度は、イエス・キリストが自分の命を人類のために与えたという教義を組織が変えることはあるだろうか、と聞いてみた。ダンは何も言わずただ私の顔を見つめた。もちろんそんなことがあり得ると思わないでしょう、これは聖書にはつきりとした根拠のあることなのだから、と私は言った。先ほどの年代の方は変更もあり得る「目下の理解」であり、贖いの犠牲の教義とはレベルが違う。『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号の記事に、断絶した人とは付き合うなどあるのも、変更があり得る事柄である。

※11 ダンは兄のピーターと見解の相違があることはよくわかっていたのに、話し合ったことがないと言っていた。

これを聞くとダン神の指示を受け入れる上で「謙遜である必要がある」と言い出した。私はこう言った。それには心から同意する。そして、この謙遜さを勧める方の人たちがまずその模範を示すべきであることも同意してくれると思う。

ここで説明のためにこんなたとえを出した。部屋に何人か人がいて話をしていると。一人が自分の意見を大いに述べる。それが終わると別の人が立ち上がり、今の人の意見には心から同意する、しかし二、三の点について少しだけ見解が違うと言ってその理由を述べる。これを聞いて先ほどの人は激昂し、そこにいる人たちに向かってこいつは仲間として不適だ、追い出してしまえと呼びかける。自分の言うことすべてに同意してもらえなかったからである。さて、この場合謙虚さが必要なのは誰か。——こう聞いてみたのだが、やはり返事はなかった。それからまもなく話は終わり、二人は帰っていった。

その晩ピーターが様子を聞きにやってきた。私の立場を気の毒がってくれ、これからどうなっていくかもわかると言った。もし自分と付き合うのが賢くないと判断するならそれは構わないとも言ってくれた。

私はその一年半前のある晩、一九八〇年五月に私が統治体と最後の話し合いをするためにブルックリンに向かうとしていた時の話を出した。その時ピーターと私は車の中で話をしていた。私はこう言った。妻のシンシアと話し合った結果、ブルックリンに行った後はアラバマに戻らずにシンシアの家族のところへ行く方が良いだろうという結論になった。統治体と話し合った後どうなるかわからない。「最悪」の事態も考えられる。その場合ピーターにもその家族にも迷惑はかけたくない。^{※12}シンシアの家族の方なら行ってもまだ問題が少くないような気がする。——するとピーターは、いやアラバマに戻ってきてほしい、待っていますよと言ってくれた。それでも私は続けた。それは本当に大変有り難い、しかしそちらのご家族は多い。奥さんも子供さんもご兄弟もお孫さんも親戚も、全員エホバの証人だ。

※12 ピーターはその時まだ断絶してはいなかった。断絶はそれから一年近く後の話である。

排斥になった私がアラバマに戻って来たらずいぶん厄介なことになるだろう。――

その時ピーターはこう返事をした。「それはわかっています。こっちだっていろいろ考えなかったわけじゃない。でもうちの方でも話し合って、その点は良いということになったんです。だから、何がなんでも戻って来て頂きたいと」。

あの状況下で、この言葉がどれほどの重みを持ったか、言葉にはつくしがたい。今度は立場が逆転したのだから、ここで釣り合いのとれないことをするわけにはいかない、と私は言った。真理のため、そして他の人のために良心に従って行動した人を邪悪だと決めつけるような意見に同調するわけにはいかない。

東ガズデン会衆の長老二人が「修正」の話をしているところから何週間かは何事もなく過ぎた。ところがそこへウェズリー・ベナー巡回監督がやってきて、私のところでダン・グレガソンも交えて話をするようになった。もう一人、やはりピーターの弟でグレガソン家の二番目の息子であるトム・グレガソンも出たいと言って話し合いの場に加わるようになった。

その時の話し合いも同じような予想通りのコースをたどったが、予想外だったのは、巡回監督のベナーが私の言葉を遮りがちだったことである。とうとう私が、お客として来られているのだから、まず主人である私が話し終わるまでは少なくとも割り込まずお待ち願いたいと頼まなくてはならないほどだった。相変わらず考えの「修正」は聖書ではなく『ものみの塔』に基づいていた。ピーター・グレガソンがコリント第一の5章にあるような「邪悪な」人間かと尋ねても、やはり返事はなかった。

私はローマ14章を引いた。良心に従う必要性を説き、「信仰から出ていないことはみな罪」なのだから、何かをしながらかれが神に認められるかどうか疑いを持っている者は罪を犯すのだという箇所である。「邪悪な者を義にかなっていると宣告し、義なる者を邪悪であると宣告する者――その両者ともエホバにとって忌むべきものである」と聖書

にあるのだから、この原則を破るわけにはいかない。※13
 えないのであるから、邪悪な者だと思ったり取り扱ったりはできない。

これに対するベナーの返答はこうであった。そちらが良心に従うというのであれば、長老の方も良心に従わねばならない。もしあくまでもそうおっしゃるのであれば長老としても「それなりの対応を迫られることになる」（どうやら長老の良心というのは、他の人の良心を尊重する忍耐を示したりしないらしい。「それなりの対応」がいかなる類のものなのか、これはベナー自身が明らかにしてくれた。自分はただ組織に聞かされたことを伝えているだけだと言うのである。本人の言葉を借りると、「統治体の言うことをそのまま受け売りしている」とのことだったが、どういうわけかこれをずいぶん誇らしげに言っていた――誰かの受け売りをするのがそれほど大したことだとも思えないが。それからまもなく話は終わり、二人は帰っていった。残されたトム・グレガソンは信じられないといった風に首を振り、何かが良くわかったようでもあるし、がっかりした気持ちでもあると言った。あんなことが口にできるものだと信じられないとも言った。

一月に入る頃には、かつてブルックリンで動いていたあの裁きの機械がガズデンでも動き始めた。長老たちからあれこれ尋ねる電話がかかってくる挙句、審理委員会と話し合っただけということになったのである。

私は、それ以前から統治体に手紙を書くつもりでいた。協会法人の会員権を放棄するためである（私は何年かの間、協会のペンシルバニア法人とニューヨーク法人の両方で表決権を持つ会員だった。※14）その旨を一月五日付で書き送る際、次のようにも書き添えた。

※13 箴言17・15。

※14 この会員権は私が本部を出てからも有効だった。一九八〇年と一九八一年にはいつも通り年次総会議のための「委任状」が来ていた。一九八〇年にはこれを提出したが、一九八一年には、特に協会発行の雑誌記事の内容を考えると、提出する気にはなれなかった。

当地では一部の長老が、『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号の内容に基づいて、私が自分の大家であり雇い主であるピーター・グレガソンと付き合うのをやめるべきだとしています。ピーターは断絶したのだから、一緒に食事をすべきではない人間——邪悪な反キリスト——の一員だと思ってしかるべきであり、これに従わなければ排斥だとのことです。私も六十歳になろうとしており、経済的基盤もなく、引越したり仕事を変えたりできる状況ではありません。『ものみの塔』掲載の当該記事が確かにこれら長老が理解する通りの意味内容、つまり私が自分の大家であり雇用者である人からの食事への招待に応じることが排斥の理由になるという内容なのかどうか、お知らせ願えれば幸いに存じます。もしそうではなく、この理解が記事の意図する意味内容を越えている場合、態度を和らげるようにとお伝え願えれば、私もこの過酷とも言いつける状況から解放されるであります。直接、あるいは何かの部門を通じてでも、ご説明を頂ければ幸いに思います。

この同じ日、長老からの電話があつた。それまでも電話はひっきりなしで、しかも態度がひどかったので、私も妻も電話が鳴るたびに嫌な気持ちができるようになっていた。長老から電話があつて私が留守の時には、用件はすべて手紙にして書き送るようにと妻に頼んでもらっていたので、この日も妻はそう伝えた。その翌日付で審理委員会は手紙をよこし、これは一九八一年一月一〇日に届いた。

エホバの証人の中には、私がピーター・グレガソンという一人の人間と食事をしたという理由で排斥になったのが信じ難いという人も多い。そんなはずはないという人もいる。しかしこの手紙ではつきりすると思う。一九八一年一月六日付、審理委員会からのはじめの手紙である。

一九八一年一月六日

親愛なるフランズ兄弟へ

一月五日にフランズ姉妹から伺った指示通り、この書面をもって一月一四日土曜日午後二時、東ガズデン王国会館において審理委員とお会い頂くよう要請いたします。当会衆から断絶した人物とあなたが付き合いを続けていることについて話し合うのが目的です。

この日時で都合の悪い場合は変更しますので、我々三人のうちいずれかに御連絡ください。

あなたの兄弟たちより
シオティス・フレンチ
エドガー・ブライアント
ダン・グレガソン

この通り、ただ一つの罪状により「審理」を行なうことになったこと、その唯一の罪状というのは「断絶した人物と付き合いを続けていること」であることが明記されている。

私は返事を書き、この長老たちにこう伝えた。『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号の記事についてはその説明を統治体に求めている最中である。これをまったく考慮に入れておられず、回答を私が受け取るまで待とうとしないのはどういうわけなのかよくわからない。また、ダン・グレガソンが審理委員に加わっているのはあまりにもおかしい。この人はすでに私の告発者であることがわかっている。審理委員を増やして、このたびの新しい方針を適用するに当たってより公平な話し合いができるようにして頂くことを望むものである。※15

この返事を送って一週間後の十一月二〇日金曜日、仕事から帰ってくるとシオティス・フレンチ長老から電話があったと妻が言った。何とその翌日、土曜の午後に審理委員会が集まる、そう伝える手紙も出しているというのである。

その日の午後の郵便物を見ると、配達証明便があるという通知があった。急いで郵便局に駆けつけ、何とか受付時間が終わるまでにその手紙を受け取った。一九八一年一月一九日付の手紙だった。

※15 この手紙の全文は付録に収録してある。

一九八一年十一月一九日

親愛なるフランス兄弟へ

お手紙を拝見し、長老団としてここに返事をさせていただきます。第一に、長老団の方ではあなたがもののみの塔協会に手紙を出したことは承知しており、それでも審理の継続を決定したことをお伝えいたします。第二に、長老団ではダン・グレガソンが告発した側であつたことを考慮し、代わりにラリー・ジョンソンを審理委員にすることに決定しました。

第三に、ダンの他にも問題となっている件について証言できる人たちがいるのですが、あなたが会衆から断絶した人たちと付き合っていることを自分で認めておられることを考えると、その名前を出す必要はないと思います。

第四に、長老団では長老三名を審理委員とすることにしました。選ばれている三人はあなたについての判断を決めてかかったりせず、審理には客観的に取り組むでしょう。

最後に、我々委員は、あなたの審理を一月二一日土曜日午後四時王国会館において行ないたいと思います。もし出られないようであれば我々のうち誰かに連絡し、都合の良い日時を決めるようにしてください。

あなたの兄弟たちより

ラリー・ジョンソン

エドガー・ブライアント

シオテイス・フレンチ

この手紙は形式張っているだけではない。どこかの民事裁判所から来た書面のようでもある。「あなたの兄弟より」とは書いてあるが、クリスチャン仲間に対する暖かみがまったく感じられない。しかし、私に対する判断を決めてかかったりしていないのならば（この手紙ではそう言うのである）何らかの仲間に対する気持ち、手紙を書いている相手に対する思いやりの気持ちというものがあつてしかるべきところである。エホバの証人としての奉仕に暮れた生涯、統治体でも奉仕したこと、年齢、目下の状況——いろいろあるが、すべてひとまず置いたとしても、もう少し何らかの情というものが示されてもよかつたのではあるまいか。たとえば私がキリストの「兄弟のうち最も小さなものの一人」

だと見られたとしても（マタイ25章40節参照）。この冷たい態度は、この長老たち自身から出たのではないだろう。これは別のところから来ている。この手紙にはそれがよく表れている。

フレンチ長老から電話を受けた妻は、土曜日には遠来の客があつて今さら予定変更の連絡の取りようがないことを伝えていた。

週明けの月曜日すなわち一月二三日、私は今一度手紙を書き、審理委員会の性急で浅はかなやり方は残念である旨をしたためた。

その午後、フレンチ長老から電話があり、その二日後の水曜日（一月二五日）の晩に審理委員が話し合いをすること、そして私が行こうと行くまいと決定を下すであろうこと、この二点を伝えてきた。私はその朝書いた手紙を出す意味はないと判断した。審理委員たちは何か非常に慌てているようで、ひたすら裁き急いでいた。どうもこれは自発的に動いているのではなかった様子である。後に委員会の司会者も認めたのだが、委員たちは協会の代表者であるウエズリー・ベナー巡回監督と連絡を取り合っていた。委員たちの言動は、ベナーが私の家で見せた態度と見事に一致していた。ベナーはまず間違ひなくブルックリン本部の奉仕部門と連絡していただろうし、奉仕部門は統治体とながっている。これは珍しいことではなく、ごく普通のやり方である。したがってやり方自体は驚くに当たらなかったが、ただとにかく見ていて嫌な気分だった。

水曜日（一月二五日）になった。当事者不在で裁かれるよりも、フレンチ長老が「水曜日の晩」と言っていた話し合いとやらに出かけていこうと決めた。そこで午後になってから、正確な時間を確かめるために委員の一人に電話を試してみた。すると奥さんが出て、もう王国会館に行っていますと言う。そこでそちらに電話を入れてみると、もう午後には始めようとしていたところだと言う。どうやらこの人たちにとっての「晩」というのは、午後三時以降ならいつでも良いものらしい。私は、そこまではちょっとわからなかったし、正確な時刻も知らされていなかったのだ、

できれば六時まで待つてもらえないかと言った。これは了解とのことだった。

トム・グレガソンがついて行きたいと言っていたので、電話をした。王国会館に着くとすぐ会議室に行った。審理委員のフレンチ（司会者、ブライアント、ジョンソンの三人の長老がいた。トムは、証言をするためでなければ出席できないと言われた。自分が役員をしている会社（ウェアハウス食料品店）の従業員三十五名ほどがエホバの証人であり、今回のことについてどのような見解が取られているのかを知っておきたいだけなのだ、と言って食い下がったが、やはり返事はノーだった。

トムが出て行くと審理が始まり、証人が呼ばれた。ダン・グレガソンとロバート・デイリー夫人の二人だった。

まずダンが証言を行なった。「ウェスタン・ステーク・ハウス」で私がピーター・グレガソンと（それぞれの妻を同伴してだが）一緒にいるのを見たと言った。証言の要点はこれだけである。私はダンが話し終わったところで、それはいつのことだったのかと尋ねた。すると夏のことであつて、『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号より前のことだったと認めた。つまり、自分から断絶した人も排斥になった人と同様に扱うべしという新しい方針が出る前だったのである。そこで私は委員たちに、いわゆる事後法を認めるのでない限りダンの証言は無効であると言った。

次にもう一人の証人が証言するようにと言われた。証言の内容はダンのものとほとんど同じだったが、ただ今度は『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号が出た後のことだと言うのである。

私はすぐ、確かにその時にピーターと一緒に食事をしたと認めた。そして、あなたもご主人（東ガズデン会衆の長老の一人）と一緒にピーターと食事をしたではありませんでしたか、と尋ねた（ピーターがある日カフェ「モリソン」で客の列につくと、ちょうどすぐ前にデイリー夫妻がいた。デイリーは、かつてピーターの父親の死後、ピーターの母親と結婚していたことがある――すなわちピーターの義理の父だったことがあるわけである。そこでピーターが後ろからつついて挨拶すると、デイリーは振り返り、ピーターと話を始め、一緒に座るように言つて結局三人は食事の間もずっと話し続けたので

ある。これも『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号が出た後のことである。

証人であるデイリー夫人はこれを聞いて非常に感情を刺激された様子で、それは確かにその通りだが、やはり間違っていたことだとわかっていたし、後で仲間の「姉妹たち」にもう二度としないと誓ったのだ、と答えた（後に審理が終わってからこの話をする）、ピーターはこう言った。「でもあの人たちは二回食事をするよ！ あれとはまた別の日に『モリソン』に行ったらあの二人がもう席に着いていて、わたしに気がつくと一緒に座するようにと手招きして呼んでくれたことがあったんだ。」デイリー夫人はこの二度目の食事について何も言わなかったし、私もその時は知らなかった。

以上が私に対して不利な「証拠」の要点すべてだった。証人二人は出ていった。

次に審理委員は私が『ものみの塔』1981年9月15日号へ1981年11月15日号についてどう思っているか尋ね始めた。そこで、私が一月五日に書いた質問の手紙に対する返事が統治体から来るまでなぜ待とうとしてくれないのか、と聞いた。司会者のシオティス・フレンチは、ページを開いて目の前においてある『ものみの塔』9月15日号に手をおいて、「権威としてはこれさえあれば十分です」と言った。

私は、統治体から見解を確認する連絡があればもっと確実なものではないかと尋ねた。フレンチは「出版されたものに従わないといけない」のだと繰り返し、またどっちみち「これについては本部に電話して聞いてある」と言った。そんな連絡がついていたというのはその時に初めて聞いた。どうやらこれが理由で、その二日前に司会者のフレンチ長老が、長老団としては私の手紙に対する統治体の返事待つ「必要はないと考えた」と電話で言っていたものらしい。前に司会者の委員会が見せたあの秘密主義のやり方を踏襲し、ブルックリン本部と連絡をしたことは私に知らせる必要がないと思ったらしいのである。

そこで私は、統治体の誰かと話をしたのかどうか聞いた。していない、けれども奉仕部門のメンバーの一人と話したという答だった。どういうことを言われたのかと聞いてみると、「何も変更はないから、そのままやって構わない」と言われたとフレンチは答えた。

さらにフレンチはこう言った。自分としては「協会は以前の見解「一九七四年の『ものみの塔』の見解」を見直して、今はその前の立場に戻った」と思っている（これはベナー巡回監督が私の家に来て言っていたことと基本的には同じ内容である）。こういうことについて「どこで一線を引くべきかについて『ものみの塔』は教えてくれる」のである。——ここでエドガー・ブライアント長老が言葉を継ぎ、「わたしたちは『ものみの塔』が定めるところにきちんと従おうとしているのです」と言った。

この時までこの三人はまったく聖書を引き合いに出していなかった。私は、聖書こそが自分を導くものだと言って、どういう聖書の根拠に基づいてピーター・グレガソンと一緒に食事をすべきではない人間だと判断すればいいのか、と尋ねてみた。

するとジョンソン長老がコリント第一の5章のところを少し読み始めたが、すぐに止まってしまい、結局これを当てはめることなく終わった。そこで私は委員の一人一人に向かって、ピーター・グレガソンが聖書のこういうところ、あるいはヨハネが「反キリスト」について言っているようなところにあるような人物であると本当に心から思いますか、と聞いてみた。フレンチはこれに対していささかむきになり、自分は「ピーターについて判断する立場にはない」のだし、「ピーターのことを全部知っているわけでもないのだからそんな判断はできない」と言った。私は、「ご自身にはそれができないとおっしゃるのに、どうして私にはそういう判断をして、しかもその判断に縛られるべきだとおっしゃれるのか、と聞いた。

フレンチの返答は、「フランズ兄弟、こっちはあなたに教えてもらおうと思ってわざわざやって来たんじゃないんですよ」というものだった。私は、もちろん自分にも「教える」などというつもりはない、ただ目下自分のクリスチャンとしての生き方全体が問題とされており、自分の意見を言う権利もあると思うのだ、と言った。エドガー・ブライアントもラリー・ジョンソンも、ピーター・グレガソンのことをどう思うかについてはっきりしたことは一言も言おうとしない。一緒に食事をすることが「犯罪」になる人物なのにもかかわらずである。

司会者のフレンチは、これ以上の話し合いには意味がないと言った。何か証言がないかということで、外で待っていたトム・グレガソンが呼ばれた。トムは、この『ものみの塔』の見解でいくと自分の会社の従業員でエホバの証人の人たちはどうなるのかと聞いた。^{※16} 断絶した人と一緒に旅行したり食事したりが常にあるのである。

ラリー・ジョンソンは、それには答えられないからまた別の時に聞くようにと言った。トムは、もうずっとこのことを聞いていて巡回監督にも聞いたけれどもまだ返事がもらえないのだと言った。これに対する返事はなく、話し合いは終わり、私たちはそこを出た。審理委員たちは「証拠」を吟味するために残った。

一週間ほど経つと、ラリー・ジョンソンから電話があり、委員会では排斥という決定だと伝えてきた。この電話の日から七日の間ならこの決定に対して上訴することができた。

私は長い手紙を書いた。「上訴」の手紙である。何でも言いたいことは書くべきだと思ったのである。口で言ったことは簡単に変わるし、曲解されたり、あるいはあつさり忘れられたりする。しかし書いたものなら残るし、おいそれと無視するわけにもいかない。それまでの審理の経験から、全体の空気は非常に不健全であり、上訴審理においても穏やかで筋道立った聖書に基づく話し合いがなされるだろうとは思えなかった。

この手紙では、まず協会の出版物に明らかにされている審理委員の長老心得に注意を呼びかけた。すなわち、審理委員は「物事を注意深く検討し」、「規則にばかり頼る」ことなく「原理・原則に従って考え」るべきであり、「助言は、神の言葉にしっかりと根拠を持つものであるよう」にし、「十分時間をとり、その人の心に達するように努力」し、「適用する聖句について説明し、その人「告発されている人」がきちんと理解できるように」すべきだという心得である。言われてはいるが、実際に行なわれてはいなかった（ちなみに、実際に何が行なわれていたかはこの心得を出版している側にもわかっていて、私の立場は大体以下の部分に表れていると思う）。

※16 この時トム・グレガソンは「ウェアハウス食料品店」の社長だった。

ピーター・グレガソンと食事をしたことについて悔い改めが見られないと言われるかも知れません。しかし悔い改めるためには、これが神の前における罪であると納得する必要があります。こういう納得は神の言葉によるものでしかあり得ません。神の言葉こそが靈感を受けたものであり、常に信頼できるものです。(テモテ第二3・16、17) 聖書から私が理解するところは、神そして神の言葉への忠節は最も重要であり、他のいかなる忠節にも勝るということです。(使徒4・19、20、5・29) また、私にせよ、他の人間にせよ、あるいは人間の集まりにせよ、神の言葉に何を付け加えるというわけにもいきません。「うそをつく者とされる」苦しみにあつても、また神の罰を受けてさえもです。(箴言30・5、6、啓示(黙示録)22・18、19) こういう聖書の警告を軽視するわけにはいきません。人を裁くことに対して聖書が与えている注意をすべて考えてみれば、私自身(あるいは人間ないし人間の集まり)が法律を定めるのは恐ろしいことだとごく自然に感じますし、それは神の言葉だけがすることだという気持ちがあります。これに従うため、私はこういう確信を持つ必要があります。自分は、単に人間が造り上げた基準、つまり本当は靈感を受けておらず、神の言葉の裏付けもないのに神の基準だといわれている基準に従っているわけではない、という確信です。神がその言葉で述べているのとは異なる判断を誰かに対して行なうという思い上がった罪を犯したくはないのです。——ローマ14・4、10-12、ヤコブ4・11、12、『ヤコブの手紙の注解』161頁から168頁も参照。)

ピーター・グレガソンと食事をするのが罪であると聖書に基づいて納得させて頂ければ、神の前におけるそのような罪について必ず悔い改めをする所存です。これまで私と話し合いをした方々はこれをせず、前記の雑誌を自分たちの「権威」(これは審理委員会の司会者が使っておられた言葉です)として引くばかりでした。私の理解するところでは、クリスチャン会衆内部での権威はすべて神の言葉によるものであり、またそこに根拠を持つものでなければなりません。箴言17・15には「邪悪な者を義になつて」と宣告し、義なる者を邪悪であると宣告する者——その両者ともエホバにとって忌むべきものである」とあります。私はエホバにとって忌むべきものにはなりたくありませんし、だからこそこの件について非常に懸念しています。

手紙の最後には、私が十一月五日付で統治体に出した手紙の返事を待つてくれるよう今一度お願いすると記した。
※17

しかし、もう統治体は返事をするつもりがないのだろうかとうわかつていた。もう一カ月が経過していた。私の状況も、また統治体からの一言がいかに待ち望まれているかも、わかつていたはずである。統治体に何年もいたのでわかるが、目立つ場所には出て来たがらないものの、私の状況がどうなっているのかについて常に連絡を受けていたことは間違いない。奉仕部門が情報をすべて伝えているだろうし、奉仕部門は巡回監督から話を聞いている。地元の長老が言うこともすることも、すべて権威中枢から巡回監督を通じて調整を受けている。その権威中枢たる統治体は、私を裁こうとする人たちと巡回監督を通じて連絡を取りながら、私の手紙には返事をしながらない。受け取ったという連絡すらない。

はじめに手紙を書いてから七週間経った二月一日、私は統治体に再び手紙を書いた。「上訴」の手紙のコピーも同封して、一月五日付の手紙はどうなったのかと問い合わせたのである。^{※18}

さて、上訴の手紙を提出してきつかり七日後、フレンチ長老が電話をかけてきて上訴委員会ができたと言え、その委員の名前を挙げた。それから三日後、また電話があり、次の日曜日に上訴委員会が私と話をすると言ってきた。私は、委員の名前を教えてくれるように手紙でお願いしたし（フレンチは委員二人ほどの名字を言っただけである）、委員の人選を見直してほしいとも思っているのだが、と言った。なぜこの人たちが選ばれたのかと聞くと、これは協会代表者のウェズリー・ベナーが決めたという答だった。

ベナーが選んだという上訴委員はウィリー・アンダーソン、アール・パーネル、ロブ・ディブルの三人である。私の告発内容が主としてピーター・グレガソンとの付き合いであることを考えると、この人選は非常識だった。

ピーターについて客観的な判断ができそうにない人ばかりなのである。

そこでガズデンの長老たちにあてて手紙を書いた（といってもあちらにはすでにわかっていた内容である）。ウィリー・

アンダーソンはある委員会の長だったことがあり、この委員会がガズデンでかなりの物議をかもしたことがあった。地元の会衆いくつかにあって、若い人たちに関する問題の取り扱い方で一悶着があったのである。ピーター・グレガソンは調査委員を送ってくれるようにと本部に訴え、調査の結果ウィリー・アンダーソンの率いる委員会には行き過ぎの部分が多くあったことがわかった。この一件の後、アンダーソン長老とピーターとの間には目に見えるひびが入った。

ベナー巡回監督がアール・パーネルを選んだというのはさらに理解に苦しむところである。ピーター・グレガソンの娘の一人はこのパーネル長老の息子と結婚していたが、最近離婚した。この離婚した二人の間の緊張した人間関係は当然その両親同士の関係にも影響してくる。ベナー巡回監督はこの離婚のことを知っていたし、当然ピーター・グレガソンが中心となっている件に関してパーネル長老を委員に指名するのがいかに不適切な人選かはわかっていてしるべきところである。

ロブ・ディブルについても同様で、こちらはパーネル長老の義理の息子に当たる。その妻の弟が、すなわちピーター・グレガソンの娘と離婚した、前述のパーネルの息子である。

私はガズデンの長老たちに手紙を書きつつ、偏らない客観的な審理をするために三人の委員を選ぶに当たって、これほど見事に不適切な人選もなかうと思った（この人選に理由がつけられるとすれば、私に対して不利な決定を下そうという意図があったとしか考えられない）。手紙には、まったく別の上訴委員を選んでほしいと書いた。※19

この手紙を書いたその同じ日（二月二〇日）に、フレンチ長老からまた電話があった。上訴委員はその翌日の月曜日に集まり、私が「出て来ようと来るまいと審理を行なう」とのことであった。私はフレンチ長老に、上訴委員を選びなおしてほしいという請願書を書いたこと、ブルックリン本部にも手紙を送ったこと、この二点を話した。これ

らの手紙のコピーは翌日の月曜日に直接フレンチの自宅に届けた。

それから二日後の二月二三日水曜日、配達証明便で届いたのがこれである。

レイ・フランスへ、

二月二四日木曜日午後七時に東ガズデン会衆で予定されていた集まりは、一九八一年二月二八日午後七時東ガズデン会衆に変更になった。ぜひ来て頂きたい。

シオテイス・フレンチ

この二月二四日木曜日の集まりというのは誰にも話を聞いていない。それでもこれが二月二八日月曜日に来るようになるという正式な通知なのである。

一方、フレンチ長老の自宅に手紙のコピーを届けてから二日のうちに、このフレンチがまったく新しい別の罪状を見つけようとしていることがわかった。

ピーターの兄、マーク・グレガソンがピーターに知らせてきたところでは、フレンチがフロリダの自宅まで長距離電話をかけてきたという。電話に出たマークの妻にフレンチは、私（フランス）が何か組織に反対するようなことを言っていないかといったか聞いた。マークの妻は、組織に対してであれ誰に対してであれ反対するようなことは聞いたことがないと答えた。なぜそんなことをお尋ねになるんですか、と聞くと、「ただ情報を集めているだけ」という返事だった。マークと話そうとはしなかった。

このこともあの一年半前の悪夢のような記憶を呼び起こした。統治体の司会者の委員会のやり方である。

さて、私が統治体にはじめの手紙を書いてからおよそ七週間が経過した。『ものみの塔』1981年9月15日号（1981年11月15日号）の記事について尋ね、なぜそれが私にとっては重要なのかも説明したあの手紙である。それ以来、何らかの見解を示してくれといってさらに二回手紙を書いている。ところが統治体は返事どころか、手紙は受け取りました

とさえ言わない。

何百万人ものメンバーを擁する世界規模の組織、クリスチャンの原則に従う模範であると自ら称する組織の指導者層にこんなことができるのは驚きと言うべきだろうか。実は、この指導者層の実態を知っておればまるで驚くに当たらない。私自身も目の当たりにしたことだが、統治体では、返事をしても益がなさそうな手紙は無視するのである。私の手紙もそう判断されたのは明らかである。

そもそのはじめから、私にはすべてが究極的には何を目標にして動いているのかはつきりとわかっていた。心が狭いといしか言い様のないやり方、私に不利な決定を下すためならどんな細かなつまらないことでも何とか探し出して使おうという態度、すべてがやりきれないものだった。そこで私は最後の手紙を一九八一年二月三日付で統治体と東ガズデン会衆の長老団にあてて書いた。

一九八一年二月三日

親愛なる兄弟たち

この手紙により、私の排斥決定に対する上訴を撤回いたします。理由は以下の通りです。

『ものみの塔』1981年9月15日号が出てからピーター・グレガソンと食事をしたことが一回あったという証言に基づいて、はじめの審理委員会では私を排斥にする決定を下しました。これほどつまらないことのために四十年間の全時間奉仕が無に帰するというのは、私の誠実な考え（これは一九八一年二月八日付の手紙に詳しくお書きしました）を本当に考慮して頂けないことだと思えます。また、私に過ちのあるところを聖書に基づいて示して頂くこともありません。

さらに、巡回監督による上訴委員の選出を見ますと、公正な判断を期待できるにはほど遠いようです。一九八一年二月二〇日付の手紙にお書きしました通り、選ばれた三人の委員は、この件を客観的に、個人的な感情を離れて扱えそうにないことが明らかなたちばかりです。この選出が正当なものとはまったく思えません。正当な審理のあり方を愚弄するものだと思います。

さらに、統治体の方では私のために何をするつもりもないようです。私の書いた一九八一年一月五日付の手紙から七週間ほどが経ちますが、まったく返答がないからです。はじめの審理委員会の司会者は何回か奉仕部門に電話をしたそうですが、その時の話か

らもこれがわかります。その司会者によると、奉仕部門では「何も変更はないからそのままやって構わない」と言っていたことです。

最後に、私を有罪とすべく何か不利なことを見つけようとして、長距離電話を含め、電話による情報収集が行なわれていることも知りました。これはここ二、三日ばかり、私が一九八一年二月二〇日付の手紙を出して上訴委員の再選出をお願いしてからのことです。これで連絡を受けた人は、私について何ら不満の意を表明しなかったのにもかかわらず、さらに重ねて私が何か過去に不適切なことを口にしていた覚えはないかと聞かれています。もし私が本当に道にはずれた、邪悪な悪影響を会衆にもたらしているのであれば、このような手にまで出て裏付けを取る必要があるはずもないでしょう。

このようなやり方が続くようであれば、私の名声や人格までがさらに疑われます。これは不信心や陰口を公に奨励しているやり方です。

私の思いはパウロがガラテア6・17で言うことに重なります。「これから、だれもわたしを煩わせてはなりません。わたしは、イエスの奴隷としての焼き印を自分の体に負っているのです。」過去八週間、私も妻も精神的苦痛にさらされています。これは何度も人に来られることや、やたらに電話がかかってくること（電話の鳴る音が不愉快に感じられるまでになりました）だけではなく、主としてその態度によるのです。これに加えて今は私にとって不利になる情報集めがこそと行なわれていることがわかっています。去年もニューヨークで同じようなことを経験しました。やはりこんなことが一カ月続けられ、その間私の行ないが非難されているぞという言葉はありませんでした。情報集めをしている人たちにはつきりと言ってもらえるように、私の方から近づいたにもかかわらずです。今回もまた同じ扱いを受けようとは思いません。ことに、不当な汚名を濯ぐために真偽をはつきりさせてもらえそうにはないのですから、なおさらです。これは神の手に委ねる他ないでしょう。——マタイ10・26

上訴を撤回するからといって、罪を認めた、あるいは排斥の決定がいかなる意味においても適正で聖書的であると認めたと受け取って頂くべきではありません。やはりパウロの言葉に重ねてこう申しあげます。「さて、わたしにとつて、あなた方に、あるいは人間の審判の場で調べられることは、ごくささいな事柄です。わたしでさえ自分を調べることはしません。わたし自身、責められるようなことは何も意識しないからです。しかしそれによつて、わたしは義になつていてと証明されているわけではありません。わたしを調べる方はエホバなのです。」（コリント第一4・3、4）私は神の公正な裁きに対する絶対の自信を持っており、神の言葉の正しき義なることは自分の経験したことによつて強められるばかりです。生ある限り、私は神の言葉の真理を他の人に伝え、その人たち

の祝福と神の讃美のために努力を致します。

エホバの証人の兄弟たちについては、私の心からの気持ちと神への祈願を捧げると申し上げます。一九三八年以来エホバの証人のために誠実に尽力してきました。さらに裁きを受けることが兄弟たちのためになるという望みが少しでもあれば、喜んでそれに耐えるであろうことをここに約束します。——ローマ9・1-3参照

敬具

R・フランズ

どうやら首謀者の面々が、私を排斥するに当たっての「証拠」——つまり、ピーター・グレガソンと一回食事をしたこと——がいささか弱いと思い始めたことは間違いなかった。神の言葉に証拠を求める（つまり私のしたことが本当に罪深いと示す）ようにと私は手紙で要求していたのであるが、それはせずに、また別の不利な証言を集めて「容疑」を固めようとしたのである。もうこれ以上相手をして仕方がないだろうと思った。

それから八日後、ラリー・ジョンソンから電話があった。手紙は確かに受け取った、上訴を撤回しているのだから最初の排斥決定が有効となる、という連絡だった。

この連絡があった日が、何かふさわしい日付であるとも言えた。私がバプテスマを受けたのは一九三九年一月一日のことだった。それからかつきり四十三年後の一九八一年二月三十一日に破門となったわけである。その唯一の罪状は断絶した人物と食事をしたことだった。

これが本当の理由かという点、そうではあるまいと思う。これは目標に到達するための理屈付けに過ぎなかったのだろう。目的が手段を正当化したわけである。ある組織がこれほど些細なことについて理屈をこじつけるというのは、やることの水準が大変低いことを示すものであるし、また非常な自信のなさを示すものでもあると思う。

エホバの証人の統治体での経験、その司会者の委員会が一九八〇年春に行なったこと、それ以来現在に至るまでの

出版物に見られる内容などを合わせて考えると、私を排斥にして「脅威」（と当事者たちが思っていたもの）を消し去った方が得だと判断したのだらうと思う。もしこの通りであるとすれば、これまた非常な自信のなさを示すものである。神の選んだ機関を自称し、全宇宙を支配する力を後ろ盾にして王の指名により地上の事柄一切を監督する役割を持つ世界規模の組織なのだから、なおさらそうだと言える。自分たちの教えることに何の不安もなく、それが神の言葉に基づいた真理だという静かな自信を持っている組織であれば、そんなことは決してしないだらう。また、その成員を本心に信頼し、かつ自分たちの指導・鍛錬によって立派なクリスチャンを育てたという自信のある組織であれば、そんなことは決してしないだらう。そのようなクリスチャンであれば、何を読み、話し、考えるべきかを何らかの「教導権」によって親の言いつけよろしく決められる必要はなく、自分たちが神の言葉について知っていることによって真理と誤りを見分けることができるからである。

しかし、一世紀にまでさかのぼる過去における多くの宗教組織でも、こういうやり方がよく見られた。自分たちが他の人たちに対して持つ権威を脅かす者はすべて消し去るという組織は昔から数多く存在したのである。

ポール・ジョンソンはその著書『キリスト教の歴史』において、スペインの異端審問を生み出した宗教弾圧の暗黒時代に使われたやり方を次のように書いている。

思想犯を立証するのは難しかったので、異端審問では他の裁判で禁止されている方法を探り、結果として憲章、成文法、慣習法、その他確立された法律上の取り決めにほとんど破った。^{※20}

エホバの証人の長老からなる審理委員会で行われた方法は、いかなる文明国の司法体制にも値しないと思われるであらう。ジョンソンはスペインの異端審問で使われていた手口について歴史家の立場から書いている。例えば不利な

※20 ポール・ジョンソン『キリスト教の歴史』253頁

証言をする証人の名前といった重要な情報を伏せておく、あるいは匿名の情報提供者を使うなどである。こういう手口はものみの塔協会という「経路」あるいは「組織」あるいは「完全な服従をしない者に対して取られることが非常に多い。このようにスペインの異端審問当時のことは、今でも数多くの場合に通じる。ジョンソンの言葉では、次の通りである。

その目的は、とにかく何がなんでも有罪にするということに尽きる。こうすることによってのみ、異端が駆逐できると考えられたのである。※21

最後に今一度繰り返しておきたい。この冷たさも、堅さも、そして冷淡で優越的で自惚れとさえ言える態度も、その関係者が人間として持つ日頃の性格を反映しているわけではなからうと思う。むしろ決定的なのは誤った考え方である。組織には（厚かましくも根拠のない）絶対の権限と優越があるという考え方である。この考え方は、疑問視されるにとどまらず、実に有害で神を汚す教義であることが明らかにされねばならない。

第13章 展 望

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は目に新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」 コリント第二・4・16-18（口語訳）

以上が、私の経験したことである。私に良心の危機をもたらした重要な問題の数々である。私がどう感じたか、どう反応したか、どんな結論に達したかを書いた。これをどう評価して頂いても構わない。ただ、あなた自身、あなたの良心ならどうなっていたらうか？—これが私の方から聞いてみたいことである。

現在地上にいる六十億近い人々、そして過去に存在した多くの人々、それから見れば一つの人生など全体の中のちっぽけな一部に過ぎない。我々は皆、大河に流れる小さな一滴の水のようなものである。しかしキリスト教ではこう教える。我々は小さくつまらない存在であるが、それにしては不釣り合いなほどの貢献をお互いにもたらすことができる。※¹ これは信仰によって可能になる。パウロの言葉によれば、「キリストの愛がわたしたちに強く迫っている」のである。※²

これを実行するのに、巨大な組織による後ろ盾は必要ない。まして組織権力の支配をうけ、せっつかれたり無理強いされたりする必要もない。神の「過分のご親切」あるいは恵みによって命を与えられており、その命は、何かをす

※¹ コリント第一・3・6、7。コリント第二・4・7、15、6・10。

※² コリント第二・5・14（口語訳）。

ることではなく、ただ信仰によるということを心から嬉しく思うだけで十分すぎるほどである。自分の持つクリスチャンとしての自由を尊重するのであれば、他の力に屈することはないであろう。また、次の言葉にある軛（くびき）以外に屈することもないであろう。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」※3

ここで私にはつきりと感じられるのは、終わりに近づきつつある人生を省みて本当に何らかの満足をもたらしてくれるのはただ一つ、その人生が他の人たちのためになった度合いだということである――まずは心の最も深い部分において、それから精神的、物質的な面において。

思い込みや幻想の中に「知らぬが仏」式に生きることが勧めるのが親切だとは思わない。遅かれ早かれ、幻想は現実には直面する他ない。これに長くかかればかかるほど、幻滅のショックは大きくなり得る。私自身の場合、あれ以上長くかからなかったことを有り難く思うばかりである。

そんなわけで本書を書いた。全体を通じて正確さを期した。すでに起こっていること、また出版物の形あるいは噂話の形で出回っている内容に鑑みると、ここに書いたことを何とかおとしめようという動きが出ることは疑い得ない。日付が一日違うとか、数字が一つ違うとか、引用文の読点が違うとか、とにかく「間違い」と言えそうなものが一つでもあれば「この本は間違いだらけだ」と言う人がきつと思う。何を言われようと、私は自分の書いたことについては進んで責任を持つ、としか言えない。間違いがある場合、指摘してもらえれば嬉しく思うし、できるだけ訂

正させて頂くつもりである。

これからエホバの証人の組織、そしてその中枢の統治体はどうなっていくのか——これをよく聞かれるのであるが、私にはわからない。時が経たねばわからないことである。

ある程度確信を持てることもあるが、これもごく少数の事柄についてである。例えば、組織から集団離脱する動きは出ないと思う。組織では現在多くの国で成員を増やしていると報告している。エホバの証人の大多数は権威構造の実態を知らない。長い間組織内部にいて、あちこちの国にも行ったのでわかるのだが、多くのエホバの証人にとって、「組織」はある種の漠然とした大きなイメージであって、何かその周囲に光でも放っているような感じである。したがって不完全な人間が言うことであっても、普通なら考えられないほどの決定的な重要性を感じ、教義には深遠な感じを持つ。ここで「深遠な」というのは、「閉鎖的で他をよせつけない特別な人のための」「その人たちにしかわからない」という意味である。統治体の会議はレベルの高いもので、並外れた聖書知識と霊的な知恵の表れたものだとか大抵は思われている。それどころか、エホバの証人はこんな風に聞かされている。

今の霊的強さと成熟にまで育ててもらっていたのに、突然これまで育ててくれた人より頭が良くなり、育てる母である組織の導きを捨てるなどということがあるでしょうか？※4

謙遜であるようにと常に言われるが、これはすなわち、組織の言うことは何であれ自分よりすぐれた英知の源から来るものとして受け入れるようにということである。普通のエホバの証人なら、指導者層がどのように結論を出すのかについてよく知らないで、深遠な知恵の漠然としたイメージがさらに大きくなる。何しろこの組織は『神の奥

※4 『ものみの塔』1952年2月1日号80頁。

深い事がら』を理解している地上の唯一の組織』と言われているのである。※5

エホバの証人で、本書で扱っているような問題や良心上の課題に取り組んだ人は少ない。そんなことには直面したくない人が多い——ひよっとすると直面したくない人がほとんどかもしれない。組織内での人間関係が楽しいのだから、これにヒビを入れたくないと私に言ってきた人もある。私も人間関係が楽しかったし、これにヒビなど入れたくなかった。何しろ自分の人生のほとんどを共に過ごした人たちなのだから、愛情を感じていたし、今でも感じている。しかし、心の真実、本当の公正さ、本当に慈しみある愛情に関する事柄があり、これは人間関係の楽しさよりも重要だとも思った。

だからといって、必要もない困難や衝突をわざわざ求めたり、あるいは他の人に押し付けたりすべきではない。エホバの証人の家庭については心から同情できる。自分の子供であろうと、兄弟であろうと、親であろうと、神に拒否されて霊的に汚れた「背教者」として扱いなさいということになれば家族関係がどうなるか、当事者であればよく御存じだと思う。そんな状況を招くことを勧めたことは一度もないし、私自身もそんな状況を招くのは避けようとした。しかし組織の現状を見ると、これが段々難しくなっている。ともすれば良心を曲げて、いわばエホバの証人の役を演じないといけないのである。信じていないことを信じているように見せかける——そればかりか、実は神の言葉を歪め、非クリスチャン的な、人を傷つけるような結果を生むと思われることさえも信じているように見せかけることになる。

静かに身を引こうとした人を私は数多く知っている。いわば「隠遁」している人もいる。遠くまで引っ越し、居所が（組織には）わからないようにして、嫌がらせを避けるのである。どんなに衝突を避けようとしても長老たちが何とかその人をつかまえて考えを言わせようとした例ならいくつも挙げることができる。しかも、神やキリストや聖書

についてではなく、「組織」についてどう思うかを言わせるのである。この「忠節度テスト」は最後通牒であり、これに不合格とされるとまず排斥となり、組織内の友人からも家族からも引き離される。

典型的なのは、ある若い女性が経験したケースである。これは南ミシガンに住む、結婚して子供もいる人だが、疑問を持った教義があったため長老に尋問を受け、これが精神的にあまりにも苦痛だったので集会に出なくなった。何ヵ月か経つと、長老たちから電話があり、もう一度話を聞きたいと言われた。もうあんな経験はご免だと答えた。それでも長老たちの方は、疑問をお持ちのことについて手助けがしたいのだ、これが最後だから、と言って食い下がった。エホバの証人ではない夫の方も、行って「済ましてしまう」のが良いだろうと言った。そこで出かけていった。

本人によると、「十分もしないうちに、どうするつもりなのかわかりました」とのことだった。尋問開始から三十分で排斥が決まった。これほどの短時間で決められたというだけでもショックだったという。「あんなことするなんて信じられませんでした。わたしはずっと座って泣いてただけで、三十分のうちに『王国からはじき出された』のです。そんなことにならないよう、床にひざまずいて目に涙でもためて何時間も説得してくれたっておかしいのに」と言っていた。そこに五人いた長老の一人は、尋問の途中で居眠りをしたという人物であるが、尋問の後この女性に聞こえるところでこう言った。「これが神の組織かどうかわかりませんが、あの女の図太さときたら。」

しかし衝突を避けようという試みが失敗に終わっても、慰めはあると思う。家族関係の亀裂や胸の痛みの原因は一方にしかない。つまり、すべては組織の方針の産物なのである。この方針に従わない者、つまり断絶したり排斥になった人物をそれなりに扱わない者は、どんなに誠実で献身的だとわかっていても、神に拒絶されているかのごとく排除するぞ、という脅迫ですべてが成り立っている。したがって、家族も愛情も破壊してしまうこの力は双方向に働いているのではない。イエスの時代と同様、この力は一方通行である。その力の源は良心的な意見の食い違いを背信行為

とみなす。^{※6} 究極的には、その源にこそ精神的苦痛や苦悩の責任がある。

エホバの証人であれば、たとえ組織内で目にすることに不安を感じても、何らかの強力な組織とのつながりなしに神に奉仕することは考えにくいと思う人が多い。組織の大きさや、数の上での強さを実感したいわけである。確かに、他に数多くある組織に比べればエホバの証人など小さなものであるが、その広がりはかなり大きい。目に見える建物で言えば、（バチカンなど大きな宗教にはかなわないが）世界本部は拡大し続けていて、ブルックリンの地所のかなりを占めている。支部施設（大規模な印刷工場が付属している場合もある）の多くは何百万ドルという資金を投入して建設または購入されたもので、そこには何百人ものスタッフ（ブルックリン本部の場合は約五千人）がいる。さらに大きな大会ホールがあり、王国会館が何千とあり、この中には建設に二、三十万ドルかかっているものも少なくない。普通の人の人を感じさせるには十分である。こういう物質的な資産が増えるたびに、これは神の祝福のしるしであり、組織の繁栄と成功の証拠だとされる。何よりも、地上で神に関係しているのは自分たちだけとされており、統治体から受け取る指示はすなわち神の「経路」からの指示なので、自分たちは特別だという団結意識が生まれる。他の人は「世の人」だと思うことで、この団結意識はますます高まる。

だから、普通のエホバの証人にとっては、何も物を持たず、ただ神に奉仕することを考えるのは難しいと思うのである。ちょうど一世紀のユダヤ教徒が、自分たちの慣れ親しんだ宗教儀礼を離れては神への奉仕が考えにくかったのと同様だろう。エルサレムの神殿の建物や中庭の偉容の中、何百人、何千人という人たち、そしてレビ人や祭司たちによって神への奉仕が行なわれる。自分たちだけが神に選ばれた民であり、他の人たちはすべて汚れた者であると考ええる。一方当時のクリスチャンたちは大きな建物もなく司祭階級もなく、ただ質素な家に集まり、謙虚に「どの国民

※6 マタイ10・17、21、マルコ13・9・12、ルカ21・16。

でも、神を恐れ、義を行なう人は神に受け入れられる」と認めていた。※7

エホバの証人、特に長老の中には、教義でも組織の方針でも何らかの「改革」を行なって誤りを正していけるのではないかという希望を述べる人がかなり多い。指導者層が変われば何とかなると言う人もいる。一九八〇年初頭、私が本部からの休暇を願ひ出る前のこと、ある主要国の支部委員は当時の私の苦悩を感じとり、「あきらめちゃいけないよ。みんなお年寄りで、いつまでも生きるわけではないんだから」と言った。これは決して冷たい皮肉の言葉ではない。これを言った人はそれとは正反対の性格で、本当に親切で暖かい人なのである。つまり、こういう言葉が出る背景には、何らかの変革がなくてはならないという考え、つまり段々と厳しく独断的になっていく動きに対してもっとクリスチャン的な、謙虚なやり方が出てこなくてはいけないという考えがある。

私としては、権力層の人間が死んだからといって根本的な変革があるだろうとは思わない。根本的な、とわざわざ付け加えるのは、例えばラッセルやラザフォードの死によって、大小さまざまな変化なら過去にもあったからである。しかしどういいう変化があったにせよ、根本のところは変わらなかった。一九七五年から七六年にかけての権威構造改革が組織の歴史を通じて一番目立った動きだったぐらいである。この時に権力が何人かの人たちに振り分けられた形になり、また何人も新しい人間が加わったのではあるが、それまでの教義や方針はそのまま有効だった。仮説の域を出ないような解釈や、教条主義や、律法主義的な規則優先の態度や、少数者による支配や弾圧——これらに変更を加えようという努力は抑えられてしまう。同じことは、精神においても行動においても本質的なところで一致した素朴な兄弟愛を求め、本質的でないところでは寛容であろうとする努力についても言える。

さて、次の部分は本書がはじめに書かれた時（一九八三年発行）のまま示してある。読者にはここに書かれている

ことと、その後実際に起こったこと（これには当時のもののみの塔協会会長の死去に続く出来事も含まれる）とを比較検討して頂ける。

過去における協会会長と同様、現在の会長フレッド・フランズもずっと指導的な立場にあった人である。一九七五年から七六年の権力分散の改革によって会長職そのものの権力はほとんどなくなったものの、フレッド・フランズ自身の影響力は変わらず大きい。そのフランズも九十代であり、亡くなれば状況が変わるだろうことは確実である。統治体にはフランズのような（あるいはラッセルやラザフォードやノアのような）カリスマ的性格を持った人が他にない。ラザフォード判事が一九四二年に死去して以来の教義構造は、結局のところフレッド・フランズの書いたものによっているし、「排斥」に関わる問題についての基本的な方針もフランズによる部分が多いのだから、この人がいなくなると教義上の変更、あるいは「調整」が行なわれる可能性は明らかに高くなる。

しかし私としては、変更があっても大したことではなく、組織の基本的な教義や姿勢が大きく変わることはないと思う。残される統治体のメンバーには、フレッド・フランズのように込み入った話を通じて新しい解釈を堂々たる言葉で書きつづることができる人がいない。ほとんどのメンバーはあまりものを書かず、中にはまったく書かない人もいる。ロイド・バリーだけは本を書いたことがあるが、これもすでにある見方をもう一度述べなおしたもので、何も新しい内容はなかった。^{※8} 組織にいる他の主要な書き手は統治体のメンバーではなく、「油そそがれた者」でもない。

組織構造という点では、中央集権的な編成に戻ろうという動きが見られる（これまた「タッキング」である）。一九八三年の春、新しい組織マニュアルができて、長老団の長として事実上常任主宰監督の地位が復活したのをはじめ、他にも組織の監督を縦割りで行なうための工夫が見られる。統治体でも常任の司会者あるいは統轄調整者をおくなどして中央集権復活につながっていくかどうか、これは様子を見ないとわからない。現在の会長がそのような地位に就くだろうとは考えにくい。特にそういう仕事に向いているわけではないからである。その次として妥当なのはミルトン・ヘンシェルである。統治体のこの新しい地位にミルトン・ヘンシェルを置いて再編成をやるという方ははるかに可能性が高い。

※8 ロイド・バリーによる本には、『あなたを幸福にする良いたより』（一九七六年発行）、『あなたの王国が来ますように』（一九八一年発行）などがある。

さて、右を一九八三年に書いたのであるが、これをその後実際に起こったことと比べてみると興味深い。

一九九二年一月二日にフレッド・フランズが九十九歳で死去したことは、ある意味で一つの時代の終わりだった。エホバの証人の教義にとって中心的である年、一九一四年の段階でバプテスマを受けていた唯一のメンバーだった。組織の創始者であるチャールズ・テイズ・ラッセルに会ったことがある唯一のメンバーでもあったと思う。ラザフォード以降の教義構造はほとんどこの人の作り上げたものだし、排斥に関する方針も多くはこの人による。ラザフォードからの「マント（職服）の受け渡し」が行なわれたことになっていたが（本書114―116頁参照、この神聖なるマントもこれで消えてしまったことになる）。

統治体を辞した後、何度か手紙を書いたことがある。返事がもらえるだろうとは思っていなかったし（実際返事はこなかった、また組織で権威のある人物だから連絡したわけでもない。ただ、私のおじという、一人の人間に対する気遣いから書いたのである。手紙では体具合を尋ね、そしてそんな気遣いも人間組織の方針によるものではないとも伝えた。できれば本人と膝を交えてゆっくり話がしてみたかった。組織の教義に聖書の根拠のないものが多いことには、フレッド・フランズ自身も明らかに気がついていいると思ったからである。頭の良い勉強家で、きちんと聖書の解説を書くことのできる人ではあった。しかし人間の作った組織に対する思い入れが強かったためであろうか、教義に疑問が出たり、協会の利害に関わることが問題になると、たとえそれが組織にとって都合の良い結論に聖書の言葉を「合わせる」結果になろうとも、とにかく組織擁護の論陣を張る。そんな時には、せっかくの頭の良さも、とにかく都合の良い結論の方へ読み手を引っ張っていくために言葉を飾りたてた、中身のない作り話を生む力に変わってしまうのだった。

これは非常に悲しいことだと思う。それは確かに、何千人もいなかったグループが何百万人の大組織になったのを目の当たりにもしただろう。いくつかの建物が集まっている程度だった本部が、町の一区画を占める高層ビル群に成長していく様子も見ただろう。はじめは小規模だった印刷工場が国際規模の一大出版組織になっていく現場にも居合

わせただろう。しかしこれを墓場まで持つていけるわけではないのである。第一、人数が増えたり資産が増えたりというようなことは、神が認めているか認めていないかとはまったく無関係なのである。フレッド・フランズの書いた本は本人が死去する何年も前からすべて絶版になり、ラザフォードやラッセルの書き物と同様、記念物扱いになっていた。聖書の預言に関する極めて想像力あふれる解釈（例えばダニエルの解釈に見られるような）は、その多くが変更されざるを得なくなるだろう（例えば、ソビエト連邦の崩壊に伴い、ダニエル11・29-45の「北の王」「南の王」に関する解釈は変更を余儀なくされている）。

一九八八年に、健康を害して心臓にペースメーカーをつけたと聞いて書いた手紙の内容は次のようなものである。まずフレッド・フランズ自身の著書や講演の中でも非常に優れていると思われるものをいくつか挙げた。そこで明らかにされている立場を本当に貫けば、組織の方針や立場には考え直さないといけないものが多いのである。そして私は次のように書いた。

我々はお互い人生の終わりに近づいています。私は、「わたしたちはみな、神の裁きの座の前に立つことになる」「わたしたちは各々、神に対して自分の言い開きをすることになる」という使徒パウロの言葉をかみしめています。その時神の子は審判者として「闇の隠れた事柄を明るみに出し、また心の計り事を明らかにされます。その時人は各自神からの称賛を受けるのです。」（ローマ14・10-12、コリント第一4・5）あなたの聖書に関する知識については疑いのないところですから、このような一人一人に対する審判において、組織との関係や組織への忠節が決定的になるとか、それどころか何らかの関係があるとさえ考えておられるだろうとは思えません。私は、年齢を重ね、自分の人生の終わりがますます近づいてくるにつれ、後に残していけるもののうちで最も値打ちのあるものは、ただ正しく生き抜いたという事実ではないかと感じています。それは損得勘定に左右されない、我々が生きる上での原則によって決まるものだと思います。そのような原則は何よりも神への完全で純粋な気持ち、神の子を唯一の頭として従う気持ち、真理に対する嘘のない気持ち、他の人たち（何らかのシステムの一部としてではなく、一人一人の人間として）に対する思いやり、などであると思います。

こうして正しく生き抜くこと、これが私の気持ちの底にあります。これほど重要だと思うことは他にありません。フィリップス記

のローマ14・7にある通り、「実際のところ、我々はバラバラの個体として生きることも死ぬこともない。生きている限りあらゆる場面で我々は主とつながっており、死を迎える時我々は主と向かい合うのだ。」他のことについては意見の違う点もあるかもしれないが、少なくともこの点については、私もあなたも考えを同じくするのではないだろうか。

他の手紙同様、この手紙にも返事はなかった。しかし書いて良かったとは思っている。とうとう何の返事もなかったことについて残念だとは思っていない。ただ、ひよっとしたらわかってくれていたのかもしれないと思うと、それが悲しい。

フレッド・フランズが死去したことによって新しい協会会長が選ばれることになり、本書初版（一九八三年）で予想していた通り、ミルトン・ヘンシェルが後任となった。確かにフランズの死去によって変更も多くなる。しかしこれは、新会長の力によるものではない（そうであるかのように見える人もあるだろうが）。もはや会長という地位にそのような力はないからである。フレッド・フランズの発言は力を持っていたが、それは会長であったからではなく、組織の聖書学者として特に認められていたからである。後任のミルトン・ヘンシェルはこういう特別扱いを受けていない。第10章で見た、「一九一四年の世代」という表現の解釈の変更が、フレッド・フランズの死後における唯一の大きな教義変更であろうが、これも一九一四年に関する教義を根本から変えるものではない。

一九七五年から七六年の再編成が、結局のところは同じ家の中で仕切りを動かしたようなものだったとするならば、これからどんな人事の異動があったとしても、それは家具を動かしたり買い足したりするようなもので、いづれにしても家自体は変わらない。現行の統治体のメンバーのうちで最も発言力の強いのはミルトン・ヘンシェル、テッド・

ジャラズ、ロイド・バリーの三人グループである。^{※9} この三人が一緒になって何かを支持すれば、ケアリー・バーとジャック・バーもまず間違いなくそれに続くだろう。アルバート・シュローダーとカール・クラインはもう少し自分の意見があるが、やはり大抵は従う。これだけの人数が集まれば、まず決定的である。

過去の例に従うと、これら主要メンバーは保守路線を守り、現行の教義・方針などを変えようとする提案にはすべて反対するだろう。ここ数年の出版物や動きを見ると、「改革」（これがどうしても必要だと思う人もいるのだが）などまったく期待できない。

メンバーの何人かが死去したため、多い時で十八人だった統治体も十人にまで縮小した。一番新しいメンバーは一九九四年六月に選ばれたゲリト・レッシュである。オーストリアで一九四一年（したがって一九一四年から二十七年後）に生まれており、一九五九年（したがって、天の級から地の級へと呼びかけが変わったことになっている一九三五年からおよそ二十四年後）にバプテスマを受けている。この現在五十八歳のゲリト・レッシュを除けば、他のメンバーはいずれも高齢である。一九九九年現在、テッド・ジャラズは七十四歳、ミルトン・ヘンシェルは七十九歳、ダン・シドリックは八十歳、ジャック・バーは八十六歳、アルバート・シュローダーは八十八歳、ライマン・スウィングルは八十九歳、ケアリー・バーバーとカール・クラインは九十四歳である。これからも、さらに死去するメンバーが出るであろう。新しく後任が任命される時には残りのメンバー、とりわけ発言力の大きいメンバーの承認が必要になる。「油そがれた者」の数が少なくなってきた今、統治体のメンバーに適した候補を見つけるのが次第に難しくなっているのは間違いない。統治体のメンバーは油そがれた者でなくてはならないという根本原則をあきらめざるを得なくなることも考えられる。しかし、こうすると「忠実で思慮深い奴隷級」の持つ特別な位置づけを揺るがすことになる

※9

私が統治体にいた九年の間、ライマン・スウィングルの意見は常に拝聴され、かなりの影響力を持っていた。しかしそれでもこの三人と見方や意見が合わない時には押されてしまうことがよくあった。ダン・シドリックも時として慣例通りではない見方を支持することがあったが、やはり影響力の点でこの三人、あるいはライマン・スウィングルには及ばなかった。

ので、これは時間の許す限り避けられるだろう。一方、比較的若い人の中に、自分は「油そそがれた者」になったと決める人も時々出ている（例えばゲリト・レッシュもその一人だった）。こういう人たちなら統治体のメンバー候補者になれるので、これで少しは助かることになるかもしれない。

責任者が状況を管轄しているという前提に基づいて、人事面の変化から改革を期待することには大きな誤りがあると思う。実際のところ、人間は関係ない。何よりも概念というものが支配している。つまりすべての基礎となっている考え方が問題なのである。

エホバの証人の信仰の特殊なところは、永遠の責め苦を信じないことでもなく、魂の不滅を信じないことでもなく、三位一体を信じないことでもない。エホバという名前を使うことでもなければ地上の楽園を信じていることでもない。以上のことならすべて他の宗教団体にもある。^{※10}

エホバの証人の教えが特に他と違うのは、一九一四年という年代を中心とする教義である。この年にキリストが支配を始め、審判を開始したのであり、何よりももののみの塔協会を正式の経路として選び、地の統率を「忠実で思慮深い奴隷級」に任せた。そして事実上の絶対権限をその幹部グループに任せた。――この根本教義を手放すようなことがあれば、教義構造すべてが揺らぐことになる。したがって一九一四年がなくなることとはまずあり得ないし、あるとすればその説明は非常に困難になろう。事実、ここ何年かの動きはまったく反対方向で、『もののみの塔』その他の出版物ではこの一九一四年に関わる様々な解釈を繰り返すのに熱心である。現行の信仰をさらに強化させようとしているのである。中でも重要なのは組織の権威に関する主張であって、この権威構造を支持し、これに忠節であるように

※10

ここで挙げたようなことについては、いろいろな「聖書研究者」の団体（いくつかは国際レベルで活動している）のみならず、チャーチ・オブ・ゴッド教団もそのいくつかの宗派がほとんど同じような教義を持っている。SDA（セフンステアドベンチスト）なども魂の眠りを信じ、永遠の責め苦は信じない。そしてキリストの王国の支配する地上の楽園を信じる。

という宣伝が目下強力に行なわれている。

確かに、年が経つに連れて一九一四年の教義とそれにまつわる主張の居心地は悪くなってくる。一九九九年現在、一九一四年から八十五年が経過している。すでに見た通り、一九一四年に生きていた「世代」についての教義はもはや続けることができなくなり、「修正」が行なわれた。それでも二十一世紀に入り、さらに二〇一四年を迎えれば、一九一四年はずいぶん古めかしい年代に見えることだろう。したがって、「一九一四年の世代」に関する教義を変更したところで、たゆまず進む時の流れの前には、どうしても一時しのぎにしかならないのである。

こういう変更点が出てくるにせよ、神の導きによるものとして登場することに間違いはあるまい。捨て去られてしまふ教義や規則については、「その当時の神のご意志」はたまた天に支配するキリスト・イエスの「作戦」の一つであつたとされ、目標のための手段だつたとされるだろう。この組織が過去百年間ずっとそうであつた通り、変更を加えた場合でもそのことをはつきり認めはしないだろう。通常このような変更が必要になるのは、まずそもそも聖書にしっかりと従っていない証拠であるが、大概はある方針についてその正当性が擁護できなくなり、そのまま置いておくとなぜいことになるという見込みの下に変更を余儀なくされる場合である。こういう変更の仕方は、聖書をしっかりと調べた人たちが誤りを正すのとは違う。つまり聖書を見た上で、なるほど自分たちは間違っていた、だからこの誤りを正したいという姿勢とは程遠いのである。

結局、いかなる変更があろうと、その考え、その出版物、その行ないすべてを支配する基本的な前提はかたくなに守られる。すなわち、神は何らかの組織を通じて人間に接しているに違いない、そのはずだ、そして王たるイエス・キリストはその組織としてもみの塔協会を選んだ、という大前提である。これがあるため、もののわかった人でも多くが問題の本質をつかめずにいる。「木を見て森を見ず」ということわざの通りである。おかしい点や、不公正なことや、教義上の疑問点などには気がつく。おかしい理屈や、どうもクリスチャン的とは言えない考え方にも気がつく。ところが、これらすべてが一体何を意味するのか、結局のところどういうことなのか、となると見えなくなる。

部分は見えても全体が見えないのである。こういう人がかなり責任のある地位にいたりする。そして物事はきつと良くなるだろうという希望にしがみつく——かくいう私もその一人であった。これは、組織の大前提によって考えを縛られていることによる。最終的にはこの大前提が正しいことが明らかになるはずだ、神は物事を解決してくれるに違いない、そのはずだ。すなわち神がこの大前提の正しさを示し、証明してくれる日が来るに違いない、そのはずだ——と考えてしまう。ところがまさにその大前提こそ、日々心を痛めている様々な問題の核心なのである。この大前提は神のものではない。したがって神がこの前提の正しさを示すことはまったく考えられない。

ここで私はある友人の教えてくれた言葉を思い出す。こんな言葉である。

「無駄な望みをきっぱりと捨てた者には、その代償として穏やかさが与えられる。その穏やかさは常に豊かさを増す。」

この言葉は私にぴたりと当てはまった。また、他の多くの人たちについても同様だったことを私はよく知っている。はじめに味わう苦しみ——人間の尊厳を奪い、自分たちの権威を見せつけ、人の持つ神との関係を厳しく裁こうとする男たちによって尋問されるという屈辱的な経験が付け加わることもあるが——それがどんな苦しみであつても、またどれほど心が引き裂かれる気持ちであつても、その後で本当によつとした、何か平穏な気持ちが出てくる。やつとひどい人たちから解放されたという気持ちだけではない。組織の権力と圧力から自由だという気持ちだけでもない。真理が、そしてこの真理について自分は妥協しなかったということが、もっと別な面から本当に解き放たれた気持ちをもたらししてくれる。この解放感を責任感と共にしつかりと受けとめれば受けとめるほど、結果は良いものになる。最高の解放感は、神、そして神の子、さらにすべての人に奉仕するに当たって、不完全な人間に制限を受けないことである。自分自身の良心に従って奉仕ができる。重荷がなくなったという感覚、重圧が取り払われたという感覚がこの解放感と共にやってくる。これを心から味わえば、この解放感をもたらししてくれる神、そして神の子に奉仕した

い気持ちさがさらに増し、減ることはない。※11

はじめの苦しみは大きいかもしれないが、この苦しみが神と神の子との本当に個人的な関係をもたらしてくれる。ものみの塔協会は常に前面に姿を出し、この組織がいかに重要であるかを強調しつつ精神生活に大きく入り込んでくる。その結果、多くの人が本来自分のものであるはずの神との親密な関係を奪われてしまう。組織の占める位置はあまりに大きく、神の子の偉大さを覆い隠し、神の子と暖かい関係を結ぶようにという呼びかけを覆い隠し、その同情心の大きさも感じられなくする。※12 したがってこの組織から排斥された後、一人になってしまった、どうして良いかわからない、という気持ちになる人が多いとしても不思議ではない。もはや目に見える権威構造に縛られておらず、細かく決められた奉仕活動のプログラムにあわせる必要もなく、方針や規則などの圧力を感じる必要もなくなるからである。

ある意味では、こういう苦しみを味わってこそ神と神の子に完全に身を任せるのが一体どういうことなのか理解できる場合も多いだろう。そんな状況の中で、もつと神に近づこう、神の言葉をもつと真剣に読もう、周りの人たちの精神的な励ましになろうとする人もある。そういう人であればその苦しい状況を見事くぐり抜け、ただ一つの確実なこと、すなわち我々のためにその子を遣わした神に対する信仰がそれまで以上に強められる。※13 つまり、主は自分たちを弟子として、また本当の友人として親密に扱ってくれることをそれまで以上に実感する。人間が羊たちを巨大な囲いに閉じこめるような関係ではなく、それぞれの羊にそれぞれの心遣いをしてくれる関係だとわかる。その人が何歳だろうと、このことに気がつくまでにどれほどの時間がかかったのだろうと、この気持ちには「今日という日は残された人生の最初の日」という言葉がそのまま当てはまる。こういう人たちは見るからに楽しそうであり、また前

※11 ガラテア5・1、13、14。コリント第一9・1、19。コロサイ3・17、23-25。

※12 マタイ11・28-30。マルコ9・36、37。10・13-16。ルカ15・1-7。ヨハネ15・11-15。

※13 詩編31・11-16、55・2-6。12-14、22。同60・11、12。94・17-22。ローマ5・1-11、8・31-39。

向きである。その気持ちの支えは人間ではなく、神だからである。

このように考えるからといって、神の群れ、あるいはキリストの率いる会衆を認めないことにはならない。神の子は、本当の意味で自分に従う者があるだろうと言う。しかも一世紀当時だけでもなければこの二十世紀だけでもなく、その間を通じてずっとである。何しろ「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と言うのである。^{※14} どうしても現れてくる「雑草」に混ざってはいても、誰が本当の弟子なのかキリストにはわかるだろう。

それはその人が組織の一員だからではなく、ただその人がどういう人かによる。どこにしよう、また人間の目から見てどこが違うのかわからなくとも、キリストは何世紀もの間こういう人たちの頭として、あるいは主として、導いてきた。パウロも、次のように言う。「しかし、神が据えられた堅固な基礎は揺るぎません。そこには、『主は御自分の者たちを知っておられる』と……刻まれています。」^{※15} 現在もこの通りであることをどうして疑う必要があるだろうか。聖書に従えば、人を選び分けておいて、これできちんと「麦」が分けられましたなどと言うことは人間のことではないし、そもそも人間にできることではない。それは神の子による審判の際に明らかになると聖書に明記してある。^{※16}

今、様々な人に自由に会いながら、いちいちその人をはじめから判断する必要があるのは楽しいことである。エホバの証人かそうでなければ「世の人」か、「真理にある」のか「悪魔の組織にある」のか、という具合に自動的に分類する必要がない。エホバの証人だというだけでその人が「兄弟」あるいは「姉妹」になり、そうでなければ「宣教

※14 マタイ28・20へ口語訳。

※15 テモテ第二2・19へ新共同訳。

※16 マタイ13・37-43、ローマ2・5-10、同14・10-12、コリント第一4・3-5、コリント第二5・10、10・12、18、テモテ第二4・1。

奉仕」の対象になるだけで友人として付き合う値打ちがないという判断を下す必要もない。あるのは、その人を、ただその人として、偏見を交えずに見ることによって、公平にして公正なことを行なうことができるという、健全な感覚である。これについて安心できるのは、「わたしは、神が不公平な方ではなく、どの国民でも、神を恐れ、義を行なう人は神に受け入れられるのだということがはつきり分かります」※17とわかっているからである。

良心に忠実であろうとする人たちの多くが直面する苦しみのうち最大のものは、長年の人間関係があつという間に終わってしまい得ること、目に見える愛情関係が突然冷たい不信任に変わり得ることである。一例を挙げよう。ある南部の州に住むエホバの証人で、会衆ではかなり活動している人が、この組織は聖書からずいぶん離れているのではないかと気づき始めた。この人はある知り合いに向かって、それでも組織を離れようとはまったく思わないと言った。本人の言葉によれば、「聖書研究と一緒にやって組織に導き入れた人たちが会衆にはたくさんいます。そういう人たちも、また他の人たちも、みんなとても大事な人なんです。そんな大事な人たちを捨てて出ていくなんてできません」とのことだった。それからまもなく、どうやら教義に疑問を持っているらしいと気づいた長老たちがこの人の「忠節」を確かめ始めた。その結果、あつと言う間に周囲の態度が変わり、この人は会衆内で悪い噂の的になった。本人いわく、「結局私の気持ちは一方通行だったんです。あんなに大事に思っていた人たちが、私に直接話を聞こうとせず、突然冷たくなってしまいました」。

神を信頼していることや、心から奉仕していることが疑われるのは最大の名誉毀損である。その上友人だと信じていた人から「何が起こったのか知らないし、知りたくもないね」と言われるのは、何か背筋が冷たくなるような経験である。また、「事実関係は知らないけれども、組織のやることなら何かちゃんとした理由があるんでしょ」という言葉を聞く場合も同様である。

「靈的パラダイス」の愛とやらもずいぶん表面的であることがあまりにも多い。近くの州に住むあるエホバの証人と電話で話していた時のことである。この人はまだエホバの証人として活動しており、そのご主人は町では有名な長老であったが、このご主人が地元の長老にかなりの圧力をかけられているのだという。「少しでも何かあれば血祭りに上げられかねないんですの。」とこの人が言うのを聞き、何だか「これが味方なら、敵などいらぬ」という言葉を思い出しますと私は言った。すると「その言葉、私たちはもう数え切れないほど言い合っているんです」という答だった。

私の気持ちは、冷たい拒絶の経験を経て次のような手紙を書いてくれた人の気持ちに近い。

「長年の友人だった人たちがこういう作り話を進んで信じ、私に直接会って真実を確かめようとしてもしないでひどく苦しい思いをしました。この苦しみでさえ私の得た喜びに比べれば何でもありません。それに、あの人たちは恐れの手からあんなことをしたというのともわかるのです。あの人たちがどう感じていたか、本当に良くわかるので、心から許してあげられます。私は（組織を離れたので）エホバの神を捨てたと思われているか、あるいはサタンによって騙されて道を誤ったと思われているか、いずれにしても近寄ってはいけない存在なのでしょう。周りの人たち、あるいは組織の人たちの気持ちを害したことを本当に申し訳なく思います。みんな私にとって本当に大切な人たちですし、できる限りのことをして本当のことを伝えたいと思うのです。」

私も同じような気持ちである。自分の愛情をまるで電気のスイッチをひねるかのようには消してしまおうのも、結局は組織の教え込んだことで、普通の人間の自然な感情の産物ではないと思うからである。

いずれにせよ、自分の良心に従うエホバの証人は事実上すべての人間関係が終わることになり得る。こうなった場合、詩編にある次のような言葉を受けとめる必要があろう。

「わたしの父とわたしの母がわたしを捨て去ったとしても、エホバご自身がわたしを取り上げて下さることでしょう。」※18

神、そして神の子と結ぶことのできる友情関係についての認識が高まることによってのみ、他の友情関係がいかなる価値を持つかについて理解でき、また失われた人間関係を埋め合わせてもくれる。時間にかかるかもしれないが、必要な努力さえすれば新しい人間関係は生まれるものである。むしろその新しい人間関係の方がしつかりしたものとなるであろう。組織のメンバーであるというだけの仲間意識によるのではなく、その人が人間としてどういう人なのか、どういうクリスチャン的な資質を見せているのかという、その人の持つありのままの心に基づいた人間関係だからである。

私の場合、友人をすべて失いはしなかったし、また失った分だけ新しい友人ができた。見方や意見が違ってても友情には変わりがないと明言してくれる人ばかりである。聖書の教える通りである。

「できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛を持って互に忍びあい、平和の絆で結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい」※19

とにかく人数を重視し、数が増えることが神の導きと恵みの証拠であるという考えに長い間慣れてきた人にとって、このように謙虚で控え目な見方をとることは難しいかもしれない。生まれて初めて「二人か三人がわたしの名において共に集まっているところには、わたしもその中にいる」というイエスの言葉を嬉しく味わうことになるかもしれない。私自身の経験から言えば、本当に一人か二人の仲間と聖書を読み、また語ることは十分満足を与えてくれるし、得るところも大きい。確かに、こういう時人数が多いと、面白く幅広い意見が出るのは事実である。しかし、神の言

※18 詩編27・10、また、同31・11、38・11、50・20、69・8、9、20、73・25、28も参照
※19 エフェソス（エペソ）4・2、3（口語訳）。

葉が持つ基本的な力強さと豊かさは、文字通り二人か三人でいる時にもまったく変わらない。これは正直に言えるが、こういう小さな話し合いの場で得たものの方が、かつて何度も経験した組織の大会などで、何百、何千、何万という数の人たちを前にして得たものよりも大きいと感じる。

とはいえ、本当にこの通りになるだろうと信じるには強い確信が必要になる。しかしまた、これは神の真理を貫くことによってもたらされる自由に関わることもある。つまり、人間の作った権力体制によって管理されつくしたものの代わりに、神の言葉そのものを、ありのままに再発見する自由である。聖書を読むとき、ただ文脈に沿って聖書そのものに語らせるのは驚くほどすがすがしいことである。しきたりに縛られた人間の教義を上から重ねて読むことはない。南部の州に住むある人などは、エホバの証人としての毎月の活動報告を四十七年間にわたって一度も欠かしたことがなく、集会にも必ず出たという人であるが、聖書を読むのがこれほど素晴らしいことだと初めて知ったと言っている。『ものみの塔』を夜の二時まで読もうなんて思ったことはなかったですけど、聖書を読んでいると自然にそうなります」と言う。

聖書についてのややこしい解釈、込み入った理屈、特殊な適用などに慣らされた人にとっては、本当に聖書が伝えようとしていることが極めて単純明快であることを納得し、受け入れることが難しいかもしれない。例えばイエスが「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりによせよ」と言い、さらに続けて「これが律法であり預言者である」※20と言うのを見ても、イエスはまさにこの言葉通りのことを言っているとは理解しにくいかもしれない。これは、当時の聖書が、要するに、人々に「愛せ」と教えていたことを示しているのである。このことは、神を愛し、隣人を愛せという二つの戒めに「律法全体と預言者とが、かかっている」※21というイエスの言葉にもきちん

※20 マタイ7・12（口語訳）。

※21 マタイ22・40（口語訳）。

と対応している。ここで律法だけでなく「預言者」ともあることに注意したい。

つまり、預言の目的にしても、現在の年代や出来事を取り上げ、そこに根拠の薄い解釈や想像の産物を当てはめていくためでもなければ（しかも時が経つにつれて具合が悪くなってくるとどんどん変えられていく）、ある組織が自分たちの持つ神との関係は優れているのだと見せびらかすためでもない。すべて我々を「神の子の愛」に導くためにある。我々がキリストを通じて愛を学び、キリストが生きた通り愛の中に生きることが学ぶためである。だからこそ、「イエスについて証しすることが預言に靈感を与えるものなのです」とある。※22

これ以外のやり方で聖書が使われる場合、また独断的な教義や特定宗派のために聖書の明快な意図が不明確にされ、わかりにくくされる場合、聖書の大事なところをまったく理解していないことになる。

私が右に書いた「根拠の薄い解釈」、これこそが「神の奥深い事柄」なのだという意見もあるかもしれない。が、これは聖書で「神の奥深い事柄」という言葉がどのように使われているかの理解が足りない。使徒パウロは（コリント人への第一の手紙で）この言葉を使う少し前で次のように言う。

「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。わたしがあなたがたの所に行った時には、弱くかつ恐れ、ひどく不安であった。そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力の証明によったのである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった。」※23

ここでパウロの言っていることは、手元出版物がないと説明できないほど込み入った預言の解釈を作り出し、そ

※22 啓示（黙示録） 19・10。

※23 コリント第一 2・1―5、10（口語訳）

ここに頼らねば自分は駄目だと人々に感じさせる、そんな人間の組織が生む教義とは正反対である。

聖書の本場に「奥深い事柄」が、特にキリストを通じての憐れみに表れる「神の富と知恵と知識のなんと深いことか」を知ることにあること——これに気づくことができるのも恵みである。また、「御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住ませ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。また、あなたがたが……キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに越えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」とも言われている。^{※24}まさにここにこそ、つまりキリストとその贖いを通じての神の憐れみを示すというところにこそ、「良いたより（福音）」の核心がある。このことは聖書の索引を使ってこの「良いたより（福音）」という言葉のある箇所をいちいち確認する手間さえかければ誰にでもわかる。聖書にはこの言葉が百回以上出てくるが、「王国（御国）」の良いたよりというのは八回しか出てこないのに対して、「キリストについて」の良いたよりとなると何十もある。これは、神の王国（御国）という神の支配がすべてキリストによって行なわれているからであり、また神がキリストを通じて行なったこと、そしてこれから行なうことによって行なっているからである。注意が向けられるべきはキリストであって、何らかの人間の組織ではない。「彼のうちには、知恵と知識とのすべての宝が注意深く秘められている」のである。^{※25} 神の憐れみや愛の深さをさらに理解しようとして研究し、瞑想し、祈ることに比べれば、預言の解説と称する書き物は、いかに神秘的で興味を引くものではあっても、結局はひどく浅はかなものである。

したがって、神の言葉を読みながら、そのあらゆる部分について絶対的に正確な意味を決めねばならないとか、預

※24 ローマ11・33 エフェソス（エペソ）3・16―19へ新共同訳。
 ※25 コロサイ2・3。

言的な部分についてはすべて重々しい解説をしなければならぬなどと思わずにすむのは心楽しいことである。使徒パウロが次のように書いたことは今でも当てはまる。

「我々の知識も預言も部分的なものであり、部分的なものとは完全なものがやってくる時に消え去るからである。……我々に見えるのは鏡に映ったぼやけた像に過ぎないが、しかしその時が来れば面と向かって相對することになる。目下の私の知識は部分的なものだが、その時には完全になる。ちょうど神が私を完全に知っているように。結局のところ、いつまでも続くものは三つ、信仰と希望と愛である。この中で最も大きいのは愛である。」※26

神に対する、神の子に対する、そして仲間の人間たちに対する我々の愛が聖書を読むことによって深まり、堅固になるのであれば、聖書を読むことの大きな目的は達成されたことになる。聖書には、唯一可能な正しい読み方を決定できない箇所が多い。二つの読み方があって、どちらも聖書の他の箇所を照らして妥当であり、しかも信仰と希望と愛を深めるに役立つ時、どちらか一つだけに固執する狭い考えにとらわれる必要がどこにあるのか。

これについてわが意を得たりと思ったのは、太平洋西部の島に住むある人が次のように手紙に書いてきてくれた時である。

「間違っていると思われる教義を信じたり擁護したりしようとは思いませんし、自分の正しいと信じることを守るつもりでもありませんが、ただ、神を愛する他の人がいる場合、自分の知識の方が多いからといってその人より自分の方が上だと決めつけたりできなくなりました。神は我々一人一人をそれぞれに扱っているのですから。我々は皆どこかで間違っているものであり、それを決めつけたり比べたり競争したりして神を愛するもの同士がバラバラになっていく、これは神のやり方ではないでしょう。神のやり方は愛であり、これは人を結びつけ、癒し、多くの罪や誤りを包み込んでくれるものです。やがて我々は真理の全貌を知ることになるのです。うけれども、今のところ我々は手にしているものを分かち合い、助け合い勇気づけ合うべきなのであって、論争の種を増やしてばか

※26 コリント第一13・9、10、12、13（『新英語訳聖書』）。

りてはいけないと思います。」

聖書にはつきりとしたことが書かれていないことの多い教義上のことについて討論や論争に火花を散らせた結果、一体本当にどんな良いことがあるのか。結局、我々は人間としてどうなのかという問題が残るのである。神とキリストの徳性をどれほど身につけているのか。我々自身の生き方が、他の人との付き合い方が、神の教えをどれほど反映しているのか。組織のものであれ個人のものであれ、どんな教義でも、その人が他の人に対する同情と思いやりを持つことに役立たないならば、それが神のものであるはずがない。「神を愛するものは自分の兄弟をも愛しているべきであるという、このおきてをわたしたちは彼から受けている」からである。^{※27}

では一体どこに行けば良いのでしょうか、私は何になれば良いのでしょうか——こんな質問が出る。

私の場合、どこに行く必要も感じない。「永遠の命のことば」を持つ存在を知っているからである。^{※28} 直接の、あるいは手紙を通じての知人たちとの交流を嬉しく思っているし、教義や言葉の上だけではない、生き方としての真理を追い求める知り合いがこれからもさらに増えることを望んでいる。^{※29}

つまり私は、単にキリストの弟子、クリスチャンであろうとしているに過ぎない。それ以外の何かでありたいと思う人がいるのだろうか。それ以上の何かであろうと思う人がいるのだろうか。いるとすれば、その理由がわからない。過去のことは、もう過去のことである。有り難く思うことは多く、それに比べると後悔することは少ない。だからといって犯した過ちが大きくないわけではない。人生も残り少なくなってくると、若い頃に大きな決定を下した時の

※27 ヨハネ第一4・21

※28 ヨハネ6・68

※29 ヨハネ第一3・18

誤りがずいぶん重みをもって実感されてくるものである。私の場合、過去に経験した様々な苦難についてはまったく後悔していない。むしろ大事な勉強になったと思っている。しかし、人間の組織を心から信頼したことについては、これが間違いだったとわかった。今までの人生の大部分を通して人々を神と神の子へ導こうと骨折ってきたが、その結果ものみの塔協会という組織はそういう人々がまるで自分たちの管轄する自分たちの群れであり、したがって自分たちの思い通りになる人々だと見ていることに気がついた。それでも私は、神の言葉という唯一の基盤の上に信仰を打ち立てるよう人々に働きかけたことについては満足しているし、無駄な努力ではなかったと信じている。

普通の人であれば退職を考える年齢にあつて、私はこれからの自分と妻の生活を支えていこうとした。それでも、聖書にある通り、「主はわたしの助け主である。わたしには恐れはない。人は、わたしに何ができようか」とはばからずに言うことができた。^{※30} 良心に従ったことについては何の後悔もない。その結果良かったことの方が不快な経験をしのではないでほかに大きい。

かつて神の意志と称する誤りに基づいて決定した事柄の中には、取り返しのつかない結果を生んだものもあった。心の慰めになり、また残された年月の少ない私より経済的な助けになってくれる子供もないままの妻に先立つようなことがあればと考えると、私の心に何か空しい気持ちが起こる。しかしこういう目先の将来を越えた、さらに大きな未来があり、そこに希望と神の約束があると思えば心は安らぐ。

協会組織の人たちがやったことには理解できないこともあるが、そういう人たちに対して良い悪いの判断を下すような権利はないし、そうしようとも思わない。あちらにも私について判断する権利がないのと同様である。この組織について私が心から願うこと、それは将来物事が改善されることである。もつと視野を広げ、より豊かに、より意義ある行ないをする余地があまりにも大きいと思う。

私としては、過去の過ちから多くを学んだと思いたい。これから間違いはするだろうけれども、少なくともより良い方に進むだろうと信じている。自分自身のためにも、周りの人のためにも。これまでに何らかの迷惑をかけてしまった人たち一人一人に謝罪ができないのは本当に残念だが、私にできるのは、その人たちの苦しみが続かないようにと祈ること、そして私にどうしてもできないことについては神が助けてくれると信じることである。私に残された年月が私自身にとっても妻にとっても平和なものであり、日々神に奉仕する我々の努力に恵みのあらんことを望むばかりである。

世界本部から追放されたエドワード・ダンラップがアラバマを通った時に寄ってくれた。六十九という年齢で人生をやり直すためにオクラホマ・シティに行く途中だったのである。話している時にこんなことを言っていた。「結局、やれることというと、クリスチャンとして生きていくこと、普通にできる範囲で他の人を助けてあげること、これ位じゃないかと思う。それ以上は全部、神の手にあることだ。」

人々に知る権利があると思うことをここに紹介できたことを有り難く思う。もっと言えることもあるし、良くわかってもらうためにはむしろ言うべきこともあるかもしれない。残された時間や状況がそれを許してくれるかどうかはわからない。今はここに書き記したことを神の手に委ねるだけで満足である。

右を書いたのは一九八三年だった。その後エドワード・ダンラップは高齢のため壁紙張りの仕事を辞めざるを得なくなったが、それでも八十歳を越えるまで自分と妻の生活費を稼ぎ続けた。しかし健康上の理由でこれも続けられな

くなった（六十代後半の妻、ベティが生活費を稼ぐことになった。現在八十八歳であるが、自宅で仲間と聖書について討論したり、国内外からの手紙に答えたりという活動を続けている。後悔はなく、信仰は強められている。

現在これを書いている私は七十六歳である。エドワードと同じく、クリスチャンの自由のもたらす幸福と、その自由によって、神と子に対してさらに親密な関係を保つ幸福を享受している。これにもっと早く気づいておれば、例えばもう十年早く気づいておれば、生活をやり直すのにこれほど苦労しなかったかもしれないと思ったこともある。しかし、仮にそうなっておれば、統治体のメンバーとして何年も過ごすという経験もできなかっただろうし、だからこそ得られたこともなかっただろう。この経験をしたことのない人に伝えることで、何かの役に立つかもしれない。

一人一人の経験がどんなものであるにせよ、次のパウロの言葉に確信を置くことができる。「神は、すべてを彼らの益にすることによって、自分を愛するすべての者と協力することを、我々は知っている」（ローマ8・28 『エルサレム聖書』）良心を捨てず、我々の頭である神の子に忠実であれば、苦しみは続かず、大きな価値あるものを手に入れることができる。これに確信を持てば、次のように言った時のパウロが感じていたことが感じられるだろう。

わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。……なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を
目指してひたすら走ることです。（フィリピ〔ピリピ〕 3・7、13、14（新共同訳））

付 録

チャールズ・ティズ・ラツセルの遺言状

これまで何度かに分け、私の所有資産はすべてもののみの塔聖書冊子協会に贈与した。唯一残るはピッツバーグのエクステンシ・ナショナル銀行の預金約二百ドルがあるばかりであるが、これは、私が先に死去した場合、私の妻のものとなるべきものである。あと私に残すことのできるものは、クリスチャンとしての愛のみである。「パイブル・ハウス家族」メンバー並びに収穫の業に携わってきたすべての仲間たち、救い主としての主イエス・キリストの名を唱えるすべての人たちに心からの気持ちを送る。

しかしながら、私が『シオンのものみの塔』、『古神学季刊』、及び『千年期黎明』双書、並びにその他の冊子や賛美歌集の版權をものみの塔聖書冊子協会に贈与するに当たっては、それら出版物の利益については私の存命中は私がすべてこれを管轄し、私の死後は私の希望通りに取り計らわれるというはつきりした理解があった。これに鑑みて、以下にその希望を遺言として記す。

五人の委員による編集委員会

『シオンのものみの塔』の編集責任はすべて、五人の兄弟か

らなる委員会にあるものとする。この五人には細心の注意と真理への忠実さが大いに望まれる。『シオンのものみの塔』に載せられる記事はすべて、この五人のうち少なくとも三人による無条件の同意が必要であるものとする。仮に三人が承認する事柄であつても残りの一人あるいは二人の委員がこれに同意しないことが明らかである、あるいはその様に考えられる場合には、当該の記事についての判断をひとまず留保し、熟慮と討議と折りのために三ヶ月の期間を置いて後に掲載することが望まれる。『シオンのものみの塔』編集においては信仰における一致と親和ができる限り保たれるべきである。

編集委員の氏名は（時には変更もあるかもしれないのであるから）『シオンのものみの塔』各号にすべて明記されるものとする。しかし掲載される記事が誰によって書かれたものかについてはいかなる形においても示されないものとする。記事は編集委員会の多数決によって承認されていることのみで十分である。

協会側が他のいかなる定期刊行物をも出版しないことをすでに私に対して約言していることに鑑み、編集委員は他の刊行物に対していかなる形であれ寄稿したり、あるいは関係を持ったりしてはならないものとする。これは、委員会並びに『シオンのものみの塔』誌を野心や慢心あるいは独裁から守るためであ

り、真理がそれ自身の価値によって認められるためであり、かつまた主こそが教会の長、並びに真理の源として認められるためである。

数年にわたって日刊紙に発表された私の日曜説教は残されているので、委員会の裁量により、『ものみの塔』の編集に当たって使って頂いても構わない。ただし、その際には、著者である私の名前、あるいはそれが分かるような記述も使われるべきではない。

以下に編集委員として名前を挙げる人たち（その責を引き受けてくれるかどうかは別問題である）は、いずれも聖書の教義を忠実に守ろうとする人物だと思う。特に贖いの犠牲贖罪についての教義、つまりキリストに対する信仰、並びにその言葉と精神に従うことなしには神に受け入れられ、永遠の命による救いを得ることはないという教義である。もし、委員として指名された者たちに、この点について調和を見ないものがあれば、それは良心に反しているわけであり、もしそれにもかかわらず編集委員としてあり続けるならば――すなわち自分がこの取り決めの精神と目的に反することをしていると思われるのであれば――それは罪を犯すことになると言えよう。

編集委員のうちの誰かが死去あるいは辞任するような場合、残された委員がその後任を選び、『シオンのものみの塔』は常に五人からなる編集委員によって運営されるものとする。この意味で編集委員会は永続的である。指名された委員各位には、委員の選出を大いに慎重に行なって頂きたい。実生活において

も清廉であり、真理をはっきりと理解し、神に対する熱意を持ち、兄弟たちに対する愛を持ち、救い主に忠実であるという特質を持った者が選出されるべきである。委員として指名した者の他に、さらに五人を指名している。これは、編集委員に空席ができた場合、まず選出を考慮することが望ましいと思われる五名である。ただし、本遺言状作成の時点から私が死去するまでの間に、この五人があまり望ましくない、あるいは他により望ましい人物がいることが判明すればこの限りではない。編集委員の氏名は以下の通りである。

ウィリアム・E・ペイジ

ウィリアム・E・ヴァン・アンバーク

ヘンリー・クラット・ロックウェル

E・W・ブレニソン

F・H・ロビンソン

また、編集委員に空席ができた場合に選出されるのものにもっとも適切だと思われる五名の氏名は以下の通りである。A・E・ベージェース、ロバート・ハーシユ、アイザック・ホスキンス、（スクラントンの）ジョージ・H・フィッツシャー、J・F・ラザフォード、ジョン・エドガー博士。

『ものみの塔』各号には編集委員の名前と共に次が掲載されるものとする。

シオンのものみの塔編集委員会

本誌は、編集委員会の監督のもとに刊行されています。掲載され

ている記事はすべて、少なくとも三人の編集委員が検討の上、真理であると認めたものです。現行の委員の氏名は以下の通りです。(ここに氏名を記載する)

報酬については、協会のこれまでの方針に従うのが賢明であると考え。すなわち、給与に当たるものは一切認めず、いかなる形であれ協会に奉仕する人に対して相応の経費を支払うのみとする。また協会の方針に従い、編集委員、あるいは中心メンバー三名についても、食費、住居費並びに月十ドルの手当のみとする。妻、子あるいはその他の扶養家族がある場合、協会の理事会が相応かつ適切と認めた適当な額を支払っても良いが、金銭の蓄えにつながるような報酬は一切認められない。

『古神学季刊』は、配布の見込みがあり、違法とならない限り、現行通り発行されるのが望ましい。この内容は過去における『ものみの塔』記事の再録か、わたくしの手になる説教からの抜粋であるものとするが、やはりいかなる個人名も、法律上必要のない限り、出されるべきではない。

また、ドイツ語、フランス語、イタリア語、デンマーク語、スウェーデン語、あるいはその他の外国語における刊行物で、ものみの塔聖書冊子協会によって統括ないし援助を受けているものについても、同様の原則が適用されるよう望むものである。先に挙げた編集委員会のメンバー、またその空席ができた際のための予備メンバー、並びにものみの塔聖書冊子協会の理事メンバーには、本遺言状の写しがそれぞれ一部ずつ送付される

ように計らってもらいたい。これは私の死が伝えられた時点ですぐに行なわれるべきである。そうすれば、一週間のうちに、編集委員として名前の挙がっている人たちは、ものみの塔聖書冊子協会の副会長（その時点でその役目に当たっているのが誰であれ）に自らの意思を伝えることができる。指名を受けた人たちの答は、その役を引き受けるかどうかをはっきりと述べたものであるべきである。海外などに出かけている場合があれば、それなりの時間の余裕が与えられるべきである。その間、他の編集委員少なくとも三名が編集者としての任に当たる。協会役員は、これら編集委員たちがその責を果たせるよう、私と約束を取り交わしていた通り、あらゆる面で必要に応じて取り計らうべきである。

私の持つ表決権はすべてものみの塔聖書冊子協会に譲渡した。受託者は以下の姉妹である。E・ルイズ・ハミルトン、アルミータ・M・ネイション・ロビンソン、J・G・ヘアー、C・トムリンズ、アリス・G・ジェームズ。

これは終身の受託者である。死去あるいは辞任があれば、後任はものみの塔協会理事、編集委員会、並びに残りの受託者が、神の導きを求める祈りをもった上で選ぶものとする。

さて、ここで編集委員が教義上ないし道徳上の義務不履行によってその任に値しないと判断された場合の弾効・罷免に関することを記す。

弾効は、理事のうち少なくとも三人によってなされねばならない。これを扱う審議会は、ものみの塔聖書冊子協会の受託者

私の表決権を管理する五人の受託者、並びに弾効を受けている該当メンバーを除く編集委員会のメンバー全員である。これら十六人のうち少なくとも十三人が賛成してはじめて弾効・罷免は有効となる。

埋葬について

埋葬は、ローズモント墓地にある協会所有の地所をお願いしたい。私の葬儀に関する細かな取り決めについてはすべて妹のM・M・ランド、並びにその娘であるアリスとメイ、あるいはこの三人のうち私の死後も存命している者に、一任するものである。要請に応じて兄弟たちの助言や協力も得られるであろう。月並みな弔辞はやめ、代わりに人前で話すのに慣れた兄弟たちを何人も呼んでそれぞれに簡単な言葉を述べてもらい、極めて簡素でお金のかからない式を「バイブル・ハウス・チャペル」か、あるいは同様に適切である（あるいはそれ以上である）と思われる場所で行なってもらえればと思う。

愛の遺産

親愛なる「ベテル」の家族諸君に、そして一人一人に、私の心からの気持ちを残したいと思う。人を富ませ、何の悲しみをも加えない、主の祝福のあらん事を望むものである。更にこの気持ちにはより多くの皆さん、あらゆる場所にいる主の家族のすべてにも、ことに収穫の真理にあつて喜びにある人たちにも送りたい。神の恵みにおいて、知識において、また何よりも愛において、霊の大きな実を様々な形で育て続け、発展し続けて

いかれることを切に望むものである。また、柔和さを世界に対してのみならずお互いに対して持つてほしい。お互いに対する、そしてすべての人に対する忍耐を、すべての人に対する優しさを、兄弟愛を、神を敬う純粋さを、持つてほしい。これらすべてが我々にとって必要なのである。約束された王国に至るためである。こうすれば決してあやまちに陥ることはない、と使徒パウロは確言している。それどころか、「こうして、わたしたちの主また救い主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなた方に豊かに与えられる」のである。

この最終遺言状が私の死後『ものみの塔』誌に掲載されることを望む。

私自身のためにも親愛なる神の民のためにも望むことは、我々がまもなく最初の復活の際に主の御許において出会ひ、もはや離れることはなく、永遠の喜びに満たされることである。主の似姿において目覚める時、我々は欠けるところがない――

「恵みから恵みへと変えられる」

（署名） チャールズ・ティズ・ラッセル

以下の証人の立ち会ひのもと記す。

メイ・F・ランド

M・アルミータ・ネイション

ローラ・M・ホワイトハウス

ペンシルバニア、アルゲーニーにて一九〇七年六月二九日作成

以上は、『ものみの塔』1916年12月1日号に掲載された、ものみの塔協会並びに『ものみの塔』の創始者であるチャールズ・テイズ・ラッセルの遺言状である。

第4章

本文中で紹介した『ヤコブの手紙の注解』で書き直された部分を次頁以下に示す。

第5章

本文140―142頁で血友病患者に対する方針の変更について述べた。エドワード・ダンラップは一九六六年から一九八〇年まで執筆部門にいたばかりでなく、「野外から」の質問に答える手伝いをよく頼まれていたこともあり、この変更がその後どのように扱われたかを目の当たりにした。私の記憶では、この変更は――つまり凝固因子の含まれる血液成分を使うのは一回までであり、それ以上は血液を「常食としている」ことになるので神の法を破る罪になるという方針の変更である――一九七一年に私が統治体に任命される前のことだと思っていたので、当初はそうのように書いていた。ところが第二版を出すに当たっての改訂作業の最中、エワート・チティーが書いた一九七五年六月一日の統治体会議でこの方針について話し合われたと書かれている。したがって、とりあえずこの書類に明記されている一九七五年というのに沿って書いて良いだろう。

ちなみに、この一九七五年の段階では、統治体の執筆委員会は存在していなかった。統治体会議で特に誰かが特定の記事を書くべきだと決まらない限り（こういうことはあまりなかった）、何が載るかに関してはすべて会長のノアが決定権を持っていたし、実際問題としては、会長の任命によって執筆部門を監督していたカール・アダムズが決定していた。確かに執筆部門には統治体のメンバーがいた（ライマン・スウィングル、カール・クライン、エワート・チティー、私の四人）が、それは単に書き手としてであり、仕事は常にカール・アダムズに与えられた。どんな記事が載せられるべきか、あるいは載せられるべ

ヤコブ 3:1 101
ちたことは、ローマ 2章17-21節、テモテ第一 6章2-4節などの
聖句を見ればわかります。

「各地に散っている十二部族」つまりヤコブが手紙を書き
送った地的イサヤエルの中に、教師としての影響力と名声を得
ることに権力を感じていた人たちがいたことは疑いありません。
(ヤコブ 1:1) 政治支配者が権力を振るうのと同じく、ユダヤ人
の間で教師として重んじられていた人は非常な影響力を有して
いました。「ラビ」という称号はそういう人々に与えられたもの
でした。ヨハネの説明によると、これは「師」* という意味で
す。(ヨハネ 1:38。ヨハネ 3:2と比較) ないていのエザヤ教の
ラビは、有名になること、称賛されること、好意を示されるこ
とを求め、ラビの立場を通してそれらを得たことを聖書は示し
ています。(マタイ 23:6, 7) それでイエスは、世の支配者た
ちが抱くような、顕^{glory}を求むという野心的な欲望を持っ
てはならないことについて弟子たちに助言されたように、「しか
しあなたがたは、ラビと呼ばれてはなりません。あなたがたの
教師はただひとりであり、あなたがたはみな兄弟だからです」
という警告も、お与えになったのです。(マタイ 23:8-12。ル
カ 22:25, 26と比較)

ヤコブがこの助言を与える必要のあったことは、テモテ第一
1章3-7節の、テモテに対するパウロの言葉が証明しています。
「異なった教理を教えたり、作り話や系図に気を奪われたりし
ないようにと、ある人びとに命じる」ことを、パウロはテモテ
に指示しています。「そうしたことは結局のところ何にもなら
ず、調べるための問題を出すだけ」です。したがってパウロは
さらにこう言います。「実際のところ、この指示が目ざしてい
るものは、清い心と正しい良心と偽善のない信仰とから出る愛
です。こうしたものからそれることによって、ある人びとはむ
だ話に耽じ、律法の教師でありたいと願^{wish}いながら、自分の言っ
ていることも、自分が強く言い張^{insist}っていることについて、そ
*「ラビ」の字義は「わがだいなる者」；わが優れる者」。

102 ヤコブ 3:1
の意味を悟らない者となっています。そのような「律法の教
師」たちは非常に独断的でした。彼らはしばしばその自信と押
しの強さで人々の注意を引きつけたに違いありません。しか
し、使徒 17章1節にしたがい、神の言葉全体に照らして調べ
みるなら、彼らが偽教師であることはわかりました。(使徒 15:
1; コリント第二 11:5, 12, 13; テモテ第二 4:1-4と比較)

ですから、会衆を救える者として奉仕することを望んでいる
人はみな、その責任の重さを考えて自分の動機をよく調べ、謙
遜な態度で、自分にその資格があるかどうかを判断すべきで
す。(ローマ 12:3, 16) そして、知識や能力だけでなく、真の
霊性、および神と神のみ言葉への愛、また兄弟たちへの愛も、
重要な必要条件であることに気づくべきです。(コリント第一
13:1, 2, 4; 14:6, 26) 何事においても自分で自分を推薦するの
ではなく、人から推薦されるようでなければなりません。(コリ
ント第二 10:12, 18。箴 25:27; 27:2と比較)

わたしたちがより重い救きを受けることをあなたがたは知って
いるからです

教える者は指示したり、指導したりするときに人々の前に立
つので、他の人々よりも多くのことが要求されます。その生活
は模範的でなければなりません。(ローマ 2:21-24と比較) 教
える者は会衆の他の成員たちよりも細かに観察されます。この
ことは、「だれでも多く与えられた者その者には多くのことが
要求されます。そして、人びとが多くを託した者、その者から
人びとは普通以上を要求する」という聖書的原理と一致します。
(ルカ 12:48) 会衆の成員は、当然のことながら、他の成員に
期待するよりも多くのことを、教える責任を負っているため
に、申し聞きをする責任も他の人より重いわけです。教える者
は、良きにつけ、悪きにつけ、他の人よりも大きな影響力を

2 わたしたちはみな何處もつまずくのです。ことばの点でつまずかない人がいれば、それは完全な人であり、全身を顧みることができません。

持っています。神は教える者に自分の裁きを下されます。「わたしたちは」と言うことによってヤコブは、自分も不公平のない裁き主に對し、同じ責任を持つ者の一人であることを示しています。

もし間違ったことを教え、そのために会衆の成員が問題を抱え込むことにでもなれば、その人は主イエス・キリストを通してエホバ神の裁きを受けます。「あなたがたに言いますが、人が語るすべての無益なことは、それについて人は裁きの日に言い聞きすることになります」と、イエスは言われました。(マタイ 12:36, 37) 人が教えることは、その人が受ける報いと大いに関係があります。(マタイ 16:27。コリント第二 5:10) ですから注意、研究、謙遜さ、慎み深さ、そして 그리스チャーンの教え手にふさわしい、神の言葉に忠実に従おうとする強い責任感が必要です。

2 わたしたちはみな何處もつまずくのです

謙虚なヤコブは、自分も、 그리스チャーンとしての人生を歩んでいながらつまずきやすい信仰の仲間の一員であることを示しています。教える者をも含めてすべての人は、罪を犯しやすい傾向と不完全さゆえに弱点を持っています。(ローマ 7:19-23。ヨハネ第一 1:8) これは考えさせられる事実です。一番よくある、そして時には害も非常に大きいもの一つは、言葉の上での過ちです。この危険があるので、自分の教えることには非常に注意深くなければなりません。聖書注解者の J・H・ローズは、「教えることを職業として生活することほど難しいことはない」* と述べています。

模範的な教え手ですさえもつまずきやすいですから、資格のない人の場合その危険はどれほど大きいかわかりません。言葉

* 「国際聖書注解」、225 頁（ヤコブの手紙）

きではないかを定める権限はまったくなかった。

さて、問題の方針変更が決定されたのが一九七五年六月一日であるとしても、それから三年の月日を経て後、やっと『ものみの塔』1978年6月15日号30、31頁へ1978年9月15日号31頁に記事が載り、血友病患者が出血を止めるのに血液成分を使うのは一回までという規則はもうありませんということになった。この三年間に、危険な状態に瀕しながらもかつての方針しか知らされていなかった血友病患者がどれほどいたのか、知る由もない。

「代替公務」 についての方針変更を伝える『ものみの塔』1996年5月1日号へ1996年5月1日号に載った記事の一部を以下に示す。

一般市民的奉仕

¹⁶ しかし、国家が宗教上の奉仕者のための免除は与えないものの、兵役を忌避する人もいることを認めている場合もあります。それらの国の中には、良心にそって行動するそのような人たちに兵役を強いないための規定を設けている国も少なくありません。ある土地では、地域社会に有益な仕事など一般市民的奉仕が課せられ、それが非軍事の国家奉仕とみなされています。献身したクリスチャンはそのような奉仕を引き受けることができるでしょうか。この場合にも、献身してバプテスマを受けたクリスチャンは、聖書によって訓練された良心に基づいて自分で決定しなければならぬでしょう。

¹⁷ 聖書時代には強制的奉仕が実施されていたようです。ある歴史書はこう述べています。「ユダヤの住民に課せられたものには、税金や賦課金のほかに賦役[当局が課す無報酬の労役]もあった。これは東方における古代からの制度で、ギリシャおよびローマ当局はこれを存続させた。……新約聖書もユダヤにおける賦役の例に触れており、それが広く行なわれていたことを示している。この慣習にしたがって、兵士たちはキレネのシモンに強いてイエスの十字架[苦しみの杭]を運ばせた (マタイ 5: 41; 27:32。マルコ 15:21。ルカ 23:26)」。

¹⁸ 同様に今日でも、ある国々の市民は国家あるいは地方当局から様々な形の社会奉仕に加わるよう要求されます。これは、井戸掘りや道路建設といった特定の仕事のこともあり、また道路、学校、病院などの清掃に毎週参加するといった定期的な奉仕のこともあります。そのような一般市民的奉

仕が地域社会の益のためであって、偽りの宗教に関連したものではなく、また他の何らかの点でエホバの証人の良心に反するものでなければ、多くの場合、証人たちはそれに応じてきました。(ペテロ第一 2:13-15) それはたいいてい立派な証言となり、またエホバの証人は反政府的であると偽りの非難をする人たちを沈黙させたこともあります。—マタイ 10:18と比較してください。

19 そうであれば、文官の管理下での国家奉仕の一環として一定期間の市民的奉仕を行なうよう国家がクリスチャンに求める場合はどうでしょうか。この場合もやはり、クリスチャンは教化された良心に基づいて自分で決定しなければなりません。「わたしたちはみな、神の裁きの座の前に立つことにな(り)ます」。(ローマ 14:10) カエサルからの要求に面したクリスチャンは、祈りをこめてその問題を検討し、それについて熟考すべきです。* その問題について会衆内の円熟したクリスチャンたちと話し合うのも賢明なことでしょう。こうして後に個人的に決定しなければなりません。一箴言 2:1-5。フィリピ 4:5。

20 クリスチャンはそうにしてよく吟味する際、聖書の幾つかの原則を考慮することでしょう。パウロの述べるのとおり、わたしたちは『自分の支配者として政府や権威者たちに従順で、あらゆる良い業に備えをし、道理をわきまえ、すべての人に対して温和を尽くさなければ』なりません。(テトス 3:1, 2) 同時にクリスチャンは、差し伸べられたその一般市民としての仕事について調べてみるのが良いでしょう。それを受け入れても、クリスチャンとしての中立を保てるでしょうか。(ミカ 4:3, 5。ヨハネ 17:16) 何らかの偽りの宗教にかかわることになるでしょうか。(啓示 18:4,

* 「ものみの塔」誌、1964年8月15日号、500ページ、21節をご覧ください。

19. クリスチャンはカエサルから非軍事的な国家奉仕を一定期間行なうよう求められた場合、その問題にどのように取り組むべきですか。

20. クリスチャンが国家に対する非軍事的・一般市民的奉仕の問題を考える際、どんな質問や聖書原則が役立ちますか。

20, 21) それを行なえば、クリスチャンとしての種々の責任が果たせなくなる、もしくは果たせる分が余りにも限られてしまうでしょうか。(マタイ 24:14。ヘブライ 10:24, 25) それとも、霊的な進歩を続けることができ、要求されたその奉仕を行ないながらも全時間宣教に携わることさえできるでしょうか。—ヘブライ 6:11, 12。

21 クリスチャンがそのような問いに正直に答えて、国家に対するその一般市民的奉仕は權威に従順を示して行なうことのできる「良い業」であると結論するならどうでしょうか。それはその人のエホバのみ前での決定です。任命された長老も他の人たちも、その兄弟の良心を十分に尊重し、その人を引き続き良い立場にあるクリスチャンとみなすべきです。しかし、もしあるクリスチャンがその一般市民的奉仕を行なうことはできないと考えるのであれば、その人の立場もやはり尊重されるべきです。その人も良い立場にとどまり、愛ある支えを受けるべきです。—コリント第一 10:29。コリント第二 1:24。ペテロ第一 3:16。

22 わたしたちはクリスチャンとして、これから「誉れを要求する者にはしかるべき誉れを」ささげてゆきます。(ローマ 13:7) 秩序を重んじ、平和的で法律を守る市民であることに努めます。(詩編 34:14) わたしたちクリスチャンの生活や業に影響する決定が下されようとしている場合には、それにかかわる「王たちや高い地位にあるすべての人々について」祈ることさえあるでしょう。カエサルのものをカエサルに返す結果、わたしたちは「⁹⁴敬虔な専心を全うし、まじめさを保ちつつ、平穩で静かな生活をしてゆく」ことができるでしょう。(テモテ第一 2:1, 2) そして何よりも、人類の唯一の希望として引き続き王国の良いたよりを宣べ伝え、良心に従って神のものを神に返してゆくこととなります。

21. 国家に対する非軍事的・一般市民的奉仕に関し、個々の兄弟が自分のためにどのような決定をしようと、会衆はその兄弟をどうみなすべきですか。

22. どんな状況に直面しようとも、わたしたちは何を行ない続けられますか。

これと比較して頂くべく、一九七八年の段階で統治体に提出した十四頁の資料の一部を以下に紹介する（もちろんこれは当時明らかになっていたことの一部でしかない）。統治体が代替公務は良心の問題であると認める十八年ほど前のことである。

現行の方針では、軍当局、あるいは徴兵委員会など軍関係の目的に関連する当局の課する代替公務は拒否することになっている。これに聖書の根拠があるのか。

マタイ5・41は「また、だれか権威のもとにある者があなたを一マイルの奉仕に徴用するならば、その者と一緒に二マイル行きなさい。」

他の翻訳では

「もし権威にある人があなたに一マイル行かせるならば、その人と共に二マイル行きなさい」（新英語訳）

「誰でも、あなたに一マイル行けと命令する者があれば…」

（エルサレム聖書）

「そして、誰でもあなたと一緒に行くことを強要する者があれば…」（新アメリカ標準訳。グッドスピードやバークレイ訳も同様）

「奉仕に徴用する」という表現は、ギリシャ語アンガレウオの訳である。辞書によると、次のような定義になっている。

「旅に出ること、荷物を運ぶこと、その他の奉仕を強いてや

らせることを指す」（テイヤーズ）

「[名詞] 公務のため徴用すること：徴用労働者」（リデル・スコット）

「強制労働を課す」（ムールトン・ミリガン）

「[名詞] 強制奉仕：[動詞] 奉仕を強要する、奉仕させる」（教父ギリシャ語辞典）

聖書注釈書には以下のようにある。

「ギリシャ語原文でのこの言葉は、法律による徴用を意味する。ペルシャで王室関係の荷物などを運ぶべく強制奉仕が徴用されたことから来ている。しかしまた、強制された奉仕一般に使われることもある。例えば主の十字架を強制的に運ばされたキレネのシモンの場合である。……外国政府に対する強制奉仕はユダヤ人にとって特に耐え難いものであった」（クック『聖書注解』）

『国際詳説注解』は、この言葉が「軍用貨物の強制的移動」の意味で使われているとしてヨセフスの『ユダヤ古史』8の52（版によっては2、3）を引用している。

ディーン・アルフォードの注解書『ギリシャ語聖書』には、「ユダヤ人たちは特にローマ政府のための仕事に就く義務に反対した。ユダヤ人に対し、ローマ兵士に宿泊場所を提供させるのはエピスタスミアだが、これはアンガレイア的一种だった」とある。

マクリントクとストロングの『百科』にはキレネのシモンについて「……シモンは十字架を運ぶ奉仕を強要された（軍用語でアンガレイサン）」とある。

マタイは、イエスの言葉（5・41）の記録においてもキレネのシモン（27・32）の記録においても同じ言葉を使っている。シモンのことについては「彼らはこの男を奉仕に徴用してイエスの苦しみの杭を持たせた」とある。ここでの「彼ら」が刑を執行した軍関係の人間であるのは明らかである。

したがって、イエスの言葉にある「奉仕に徴用する」というのは軍当局のことであり得るし、またこの聖書中唯一はつきりと言及されている箇所においては、まさに軍当局のことだった。ギリシャ語辞典の定義からも明らかな通り、この表現の意味は荷物を運ぶことに限定されない。いかなる強制奉仕あるいは労働についても使われる。

「上位の権威はその権威下にあるものに対して奉仕あるいは労働を課する権利があるのか。これについて聖書が示すところは何か。

イスラエルで王が求められた時、預言者サムエルは次のよう

に言う。「これがあなた方を治める王の当然受けるべきものとなります。すなわち、あなた方の息子を王は取り、これを我がものとしてその兵車に乗せ、その騎手の間に置くでしょう。ある者はその兵車の前を走らなければならないでしょう。そして、自分のために千人の長や五十人の長を立て、ある者にはその耕作をさせ、その刈り入れをさせ、その戦いの道具や兵車の道具を作らせます。また、あなた方の娘を取り、塗り油を調合する者や料理人やパン焼き人とするでしょう。……また、あなた方の下男やはしためや、あなた方の最も良い牛やろばを取り、それを自分の仕事のために必ず使うでしょう。」（サムエル第一8・10-16）歴史を通じ、同様の奉仕・労働強制が多くの国々でなされている。現代も同様である。

これは税の一形式と見ることができるのか。税は金銭の支払いにのみ限られるのか。

金銭の支払いが最も普通の納税の形式である、あるいはあったことに疑いはない。普通の人々が「税」と聞けばまず金銭の支払いを思い浮かべる。金銭には、支払いが簡便で、かつ様々な用途があるという利点があり、政府機関もこれを望むのが一般的である。しかし、基本的には「支払うべきもの」とされているもの、すなわち奉仕義務の遂行が求められている。この義務の遂行が金銭以外の方法でなされ得ることは、聖書にもその他の歴史記録にも見られる。

ゆえに、『世界百科事典』の「税」の項目では以下の定義だ

けでなく――

「政府あるいは公共事業などのため、支配者によって人民から取られる金銭。政府を支援するために人民が払う金銭 税金。」

次の定義も含まれている。

「政府が人民に課する労働ないし物品。」

金銭は労働によって得られるため、労働を表わすものともなる。だからこそ、税として支払った金額をもとにして、労働時間の三十%（これ以上のことも多い）を「政府のために仕事をした」という言い方ができる。英語の tax（税）という言葉は、ラテン語のタクサーレから来ており、中英語では taxen であった。task（仕事・課題）という言葉も同語源である。この task（仕事・課題）について、ウェブスターのニューワールド辞典では次のようにある。「一、もと、税金。二、人に課せられる労働。」つまり、この task という語において労働と税金は関連を持っており、いずれもこの同じ語によって表わされるのである。共通の基本的意味は、「課せられた要求を満たすこと、義務を果たすこと」である。

「税」と訳されている、パウロの使ったギリシャ語は何を意味するのか。金銭に限られる意味なのか。

「税 (tax)」(新世界訳) にあたる、パウロの使った原語はフォロスである。これは「運ぶ」を意味する動詞のフェロから来ている。このフェロはルカ23・26でシモンがイエスの杭を「運ぶ」のを強要されるところで使われている(『王国行間逐語訳』参照)。この語には、リデルとスコットのギリシャ語辞典も示す通り、「支払うべきもの、負っているものを支払う」という意味もある。ここで「支払う」のは、金銭に限らなかった。したがって、フォロスが「税金」を表わす一般的な語になったことは確かだが、そもその言葉の意味自体に金銭の意味はなかった。だからこそ、『王国行間逐語訳』ではフォロスの文字通りの意味として「持つて来られたもの」(ローマ13・7)を示している。この「持つて来られたもの」は、金銭である場合も多かったが、義務に対する支払いとしての物品や奉仕でもあり得た。

聖書の中では、サムエル第一8・10―16で「王の当然受けるべきもの」について記されているほか、支配者が人民に強要する労働について語られている箇所も多い。イスラエル人がカナンを征服した時、降伏した町の人々は「強制労働」をして仕える。(申命20・11、裁き人(士師記 1・28、30、33、35)イスラエルに王国が立てられた時、王たちは外国人ばかりではなくイスラエル人の一部にも強制労働を課した――これはサムエルも預言した通りである。ダビデ王とソロモン王の統治の間、様々な政府機関ができた。書記、軍、財務、そして強制労働の徴用機関も含まれる。アドニラム(アドラム・ハドラムと呼ば

れる)はレハベアムの時代まで強制労働の徴用をつかさどっていた(サムエル第二20・24、列王第一4・6、12・18、歴代第二10・18)。ソロモンは、神殿や自分の家を建てるなどの強制労働のため人々を徴用した(列王第一9・15)。

この実際については、列王第一5・13-18が次のように書いている。「そして、ソロモン王は強制労働に徴用された者たちをイスラエルの全土から上らせ続けた。強制労働に徴用された者たちは三万人となった。そして、彼はそれらの者を一か月に一人ずつ交代でレバノンに送るのであった。すなわち、一か月はレバノンに、二か月は家にいた。アドニラムは強制労働に徴用された者たちをつかさどる者であった。また、ソロモンには荷物運搬人が七万人、山で石を切る者が八万人、そのほか、工事をつかさどった、ソロモンの君たちの代官、すなわち工事に従事する民の現場監督が三千三百人いた。それゆえ王は、切られた石で家の土台を据えるため、大きな石、高価な石を切り出すように命じた。こうしてソロモンの建築者と、ヒラムの建

築者と、ゲバル人たちは石切りを行ない、家を建てるために材木と石とを準備した。」

以上見たいずれの場合においても、ヘブライ語で強制労働を表わす言葉、マスが使われている。この言葉自体に奴隷、隷属の意味はない。これによって列王第一9・15-23では強制労働をしているイスラエル人とカナン人とを区別している。「奴隷」を意味する際には、ヘブライ語のエベド(奴隸)が添えられる。(創世記49・15でも、やはりマスは単独で使われず、エベドが添えられている。)

実際にこのような強制労働がローマ支配のもとに存在したのか。

やはり、歴史を調べればこれが存在したということが明らかに。これは『ブリタニカ百科事典』にも見られる。(原著

398頁の『ブリタニカ百科事典』のコピー引用は省略)

すでに記した通り、ここに引用したのは、十四頁の報告書のごく一部分である。この報告書は、一九七八年の段階で統治体のメンバー全員に配布されていた。また、これほど詳細ではないにしても、いくつかの支部事務所から同じような内容の報告を受けていた。それでも統治体は十八年間方針を変えず、何千もの若いエホバの証人が何年も獄中生活を送る結果になった。

第12章

以下は、エホバの証人東ガズデン会衆における審理への出頭命令状に対する私の返事の手紙である。

一九八一年一月一二日

エホバの証人東ガズデン会衆長老団

親愛なる兄弟たち

一月六日付のお手紙は一月一〇日火曜日の午後に取り受けました。この手紙が土曜日までに着くかどうかわかりませんが、シオティスに電話をするにも致します。そうすればみなさんが土曜日になって会館まで無駄足を運ぶこともないでしょう。

統治体に問い合わせの手紙を出しているのです、その返事が来るまで審理手続きを待つてほしいと伝えて頂くようダンに頼んでいましたが、そちらからの手紙はそのことにまったく触れていません。これについて考えて頂いているなら、お手紙でお知らせ頂ければと思います。たぶんご存じとは思いますが、私は開拓者、特別開拓者、巡回監督、地区監督、宣教師、支部の監督、ペテル家族、統治体のメンバーという役割を通じて、四十年間を全時間奉仕に捧げてきました。この四十年間に鑑みて少しのご辛抱を願えるかどうか、つまりブルックリン本部から返事が来るまで待つて頂けるかどうか、これはわかりません。けれども、そうあってほしいと思います。みなさんもまた私と同様

に統治体からの返事を聞いてみたいと思われることを望みます。——ヤコブ2・12、13。

さて、お手紙の最後のところにある三人の方々の署名は審理委員のメンバーなのでしょう。そうであれば、長老団のみならずこの人選を見直して頂けるようにお願いできるでしょうか。ウェズリー・ベナーとダン・グレガソンとの話し合いでは、ダンは本件の告発者とのことであり、私が「ピーター・グレガソンと食事をしているのを見た」とはじめに自ら言っておられました（この食事の一件はもう何ヵ月前で、『ものみの塔』1981年9月15日号が出る前のことです）。他に告発に値するとされている行為はないと思います。あるのでしょうか。（もしあれば、告発者が誰なのかも含め、私も知っておく必要があります。私の側の証人を立てることができるならですが）いづれにしても、告発者が審理する一員になっているのは、どう考えても適切であるとは思えません。他にもダンが審理委員であるべきではないと思われる理由はいくつかありますが、とりあえずは以上の理由で十分だと思います。

さて以上の点をお考え頂く際、同時に審理委員の数を増やすことも検討して頂ければ大変嬉しく思います。目下の告発は統

治体の新しい方針によるものです（これまで出版物に明らかにされていた方針では、断絶した人を排斥になった人と同等に扱うのは、兵役、あるいは政治活動に参加する人に限られていました）。さらにまた、委員の中には私を非難することを言う長老もいると聞いております。これら委員の皆さんと直接話をしたことがありますので、これがどれほど真実に近いのかはわかりません。しかし、こういう話があるからには、偏った審理が行なわれる可能性も十分に考えられます。そこで、会衆にいる他の長老も参加するようにして頂ければ親切というものであ

り、公平にして公正な話し合いにつながると考えます。いささか長くなってしまうましたが、神、神の子、神の言葉に対する私の献身が疑問視されている状況ゆえであるというところでお許し頂けるものと思います。以上の点についてご検討頂けることに感謝いたします。神エホバ、主イエス・キリストが皆さんの霊と共にありますよう。――テモテ第二4・22、フィレモン（ピレモン） 25。

あなたの兄弟
R・フランズ

次に掲げるのは、審理委員会が私の排斥を決定したことを受けての上訴の手紙である。

一九八一年二月八日
東ガズデン会衆長老団

親愛なる兄弟たち

この手紙により、皆さんが指名した審理委員が下した私の排斥決定に対して上訴致します。

審理に関しては、協会の出版物に次のように記されています。「審理委員の任に当たっている長老は物事を注意深く検討し、いろいろな要因を考慮した上で状況判断をするべきです。規則にばかり頼るのでなく、原理・原則に従って考え、それぞれのケースについて判断を下す必要があります。」また、助言を与

えることについては次のように書かれています。「助言は、神の言葉にしっかりと根拠を持つものであるようにしてください。十分時間をとり、その人の心に達するように努力してください。その人の言うことを聞く時間をとるようにしてください。また、事実関係をすべてはっきりさせるように。適用する聖句について説明し、その人がきちんと理解できるようにしてください。助言を与えたり、その人の質問に答えるに当たって、もし必要なら、調べる時間をとるようにしてください。必要な時間をとることができない場合、その件については別の長老にまかせた方が良くありません」（コピー同封） 以上のような

ことが私の審理で行なわれてきたとは思えません。異常なまでにさっさと物事を片付けようとする態度や、「きちんとした理解のために聖句の適用について説明」したがない、あるいはできない様子が見られるのは悲しいことだと思います。さっさと片付けるのではなく忍耐強く接し、規則を押しつけようとするのではなく理解と同情を持って接するのが、兄弟に対するやり方ではないかと思います。

私の状況はおわかりになっているはずだと思います。私は四十年間を全時間奉仕に費やしました。窮乏生活に耐え、また飢えに、渇きに、寒さに、暑さに、熱病に、赤痢に、投獄に、暴力による迫害に、戦火に、専制国家にあつては生命と自由を奪われる危険に、さらにその他終わることのない苦難に耐えてきました。そして五十八歳の今になって、自分と妻のために家と仕事を見つけないといけないかもしれないのです。一九四〇年に高校を卒業するとすぐに開拓奉仕を始めましたので、世俗の仕事の経験はなく、また生きていくための貯金などもありません。協会からお金を頂きました（どうやらこれは私の四十年間にわたる奉仕に対する代償と考えられているようなのですが）が、これは普通の人が世俗の仕事で得る一年分の額にも足らないもので、我々が最初に必要だったお金の一部にしかありませんでした。

ピーター・グレガソンには、仕事ならびに移動式家屋（これはまだ支払いが終わっていません）を置く場所を提供してもら

いました。したがって私にとって大家であり、雇用主でもあります。この人は六カ月ほど前、周りからの圧力を受けて地元の会衆から退きました。ご存じの通り、私の審理においては、このピーター・グレガソンと地元の食堂で食事を共にしたことがあるというのが唯一の罪状です。

地元の長老の中には、自分たちは「ウエアハウス食料品店」で雇われているので、その社長であるピーター・グレガソンと食事をしても非難されなくて済むと考えている人もあります。ところが私の場合、そういう人たちの場合よりさらに関わりが深いのです。「ウエアハウス食料品店」のみならずグレガソン個人の所有地や自宅でも仕事をしているため、常に話をする必要がありますし、それが家の中だったり食事時だったりもします。兄弟に対する態度であれば、理解と同情をもってこの事情を考慮し、「いろいろな要因を考慮した上での状況判断」を認めるはずですし、そうしないのは理解できないことです。

審理で、『ものみの塔』1981年9月15日号（断絶した人を排斥された人と同じであるとみなすと書いたもの）が出た後における出来事について少しでも関係のある証言をしたのは、二人の証人のうち一人だけでした。一人は、ピーター・グレガソン、ジャネット・グレガソン、そして私の三人を食堂で見たと証言しましたが、これは夏のことであり、したがってこの『ものみの塔』が出る前のことだったことを認めました。事後法が適切だと言えない限り、この証言が有効であるとは言えないでしょう。

う。

残るもう一人は、もっと最近の出来事について証言をしました。これは、私が妻とジャネット・グレガソン（この人は断絶していません）との三人で食堂に入り、その後ピーター・グレガソンが入ってくるのを見たということです。この証人は、東ガズデン会衆のある長老と共に、ピーター・グレガソンと二度食堂で食事を共にしており、これはいづれも『ものみの塔』1981年9月15日号が出た後のことです。いづれの場合においても、ピーター・グレガソンは同席を求めたのではなく、同席を求められて雑談を交わしたのです。このことは審理の対象にならないとされているようですが、同じことでも私の場合には審理の対象にされているのです。こう書きますのは、そちらからの一月一九日付の手紙によると、長老の皆さんは偏見なく客観的に私の審理に当たっているとのことだったからであり、他意はありません。現状を見る限り、本当に偏見なく客観的なやり方であるとは思えません。審理そのものの、ならびにその結論のそもその動機について、深刻な疑問を感じさせると言えます。

また、ガズデン地区の現状に鑑みると、私に対する告発は理解に苦しむものです。長老、あるいは他の人たちが断絶あるいは排斥になった人たちと一緒に食事をしたり話をしたりしたケースはあまりにも多いので、それをすべて挙げるというのは無理な話だからです。ところがどういうわけか、私の場合だけ

が告発の対象となっています。何事にもはじめがあると考えるにせよ、そのはじめとして、『ものみの塔』1981年9月15日号が出て以来たった一度の出来事について、たった一人の証人がいるだけの私のケースが取り上げられるのはどういうわけでしょうか。このこともまた、客観性と公正さについて深刻な疑問を感じさせます。

ピーター・グレガソンと食事をしたことについて悔い改めが見られないと言われるかも知れません。しかし悔い改めるためには、これが神の前における罪であると納得する必要があります。こういう納得は神の言葉によるものでしかあり得ません。神の言葉こそが靈感を受けたものであり、常に信頼できるものです。（テモテ第二3・16、17）聖書から私が理解するところは、神そして神の言葉への忠節は最も重要であり、他のいかなる忠節にも勝るといふことです。（使徒4・19、20、5・29）また、私にせよ、他の人間にせよ、あるいは人間の集まりにせよ、神の言葉に何を付け加えるというわけにもいきません。「うそをつく者とされる」苦しみにあっても、また神の罰を受けてさえもです。（箴言30・5、6、啓示（黙示録）22・18、19）こういう聖書の警告を軽視するわけにはいきません。人を裁くことに対して聖書が与えている注意をすべて考えてみれば、私自身（あるいは人間ないし人間の集まり）が法律を定めるのは恐ろしいことだとごく自然に感じますし、それは神の言葉だけがすることだという気持ちがします。これに従うため、私はこ

という確信を持つ必要があります。自分は、単に人間が造り上げた基準、つまり本当は靈感を受けておらず、神の言葉の裏付けもないのに神の基準だといわれている基準に従っているわけではない、という確信です。神がその言葉で述べているのとは異なる判断を誰かに対して行なうという思い上がった罪を犯したくはないのです。――ローマ14・4、10―12、ヤコブ4・11、12、『ヤコブの手紙の注解』161頁から168頁も参照)

ピーター・グレガソンと食事をするのが罪であると聖書に基づいて納得させて頂ければ、神の前におけるそのような罪について必ず悔い改めをする所存です。これまで私と話し合いをした方々はこれをせず、前記の雑誌を自分たちの「権威」(これは審理委員会の司会者が使っておられた言葉です)として引くばかりでした。私の理解するところでは、クリスチャン会衆内部での権威はすべて神の言葉によるものであり、またそこに根拠を持つものでなければなりません。箴言17・15には「邪悪な者を義になつて」と宣告し、義なる者を邪悪であると宣告する者――その両者ともエホバにとって忌むべきものである」とあります。私はエホバにとって忌むべきものにはなりたくありませんし、だからこそこの件について非常に懸念しています。

私はコリント第一5・11―13ならびにヨハネ第二7―11にある教えを完全に受け入れるものであり、そこに書かれているような人たち、すなわち邪悪な反キリスト者たちを家に迎え入れたり、食事を共にしたりするつもりはありません。このことは

私と話をした人たちにも明言した通りです。ただ、私が責めを受けているケースにおける中心人物、ピーター・グレガソンとこの聖句がどのようにつながるかが理解できないのです。この人は、周囲の圧力を受けてエホバの証人の会衆を離れています。が、ご存じの通り、手紙で以下のように言っています。

昨日 私ガズデンならびに巡回区の兄弟たちの秩序を乱していると聞かされました。私はそのようなことが起こらないようにと、大いに努力していたのです。

ものみの塔協会の教義のいくつかについて深い疑問を持っているのは事実です。しかし、重要なことを一点だけ述べたいと思います。第一に、私はそのことについて会衆内で自分から話をするということとはしていません。長老団とさえも話をしていません。何かの拍子で会衆内に話が出してしまうかもしれないと思ったからです。きわめて限られた人たちと「ここの話」として話したことはあります。これはほとんどすべて家庭内での話です。

第二に、エホバ、イエス・キリスト、復活をはじめとする聖書のはつきりした教えについて、私の見方は変わっておりません。

エホバもご存じの通り、私はクリスチャンにふさわしくない行動は身に覚えがありません。父につれられて集会に行き始めた一九三一年から一九三二年にかけての冬以来、五十年近くにわたり、熱心なエホバの証人であり続けました。みなさんの間における、そしてこの地域全体における、この名声は私にとっても大切なものであります。

この「名声」が傷つけられることなく、またみなさんの間でさら

なる混乱が生じたりしないよう、ここに組織との関係を絶つことを表明するものです。

もみの塔協会が行なってきた良いことに對する尊敬の念が変わるものではありません。みなさんに対する友情と愛が変わるものでもありません。もちろん、みなさんが私に對していかなる態度を取ろうと、それは受け入れるつもりです。

敬具

ピーター・グレガソン

ここでピーター・グレガソンは「クリスチャンにふさわしくない行動は身に覚えがありません」と書いています。すなわちコリント第一5・11-13にあるような人間ではないということですが。またエホバ神、その子、そして聖書のはっきりした教えへの信仰についても述べています。すなわちヨハネ第二7-11にあるような人間ではないことになります。私の知る限り、これに反論し、また反証した人はいません。したがって、私が聖書的な根拠なしにピーター・グレガソンを邪悪だとか反キリスト者だとみなせば、その私自身が神の是認するところではなくなると思うのです。

審理委員の三人も含め、私と話をした長老一人一人に、ピーター・グレガソンがコリント第一5・11-13やヨハネ第二7-11にあるような邪悪な者、あるいは反キリスト者であると思うか、と聞いてみました。すると彼ら自身、ピーター・グレガソンがこの聖句の当てはまる人物だとは言えない様子なのは明らか

かでした。ところが、クリスチャンが食事を共にするべきではないとされている人物が規定されているのは、この聖句を聞いて他にはないのです。私に對しては、この聖句を適用してピーター・グレガソンが食事を共にすべきでない人物であると判断しなさいと言ひ、一方私を裁く側にある人たちはそうしたがらない、あるいはできない――これは公平なことでしょうか。私は目下のところ、問題の聖句がピーター・グレガソンに当てはまるとは思わずにいます。当てはまると思えるようになるためには、長老団の皆さんの助けが必要かと思ひます。

審理に当たった長老の皆さん自身がピーター・グレガソンを見て、靈感を受けた使徒がコリント第一5・11-13で書いているような人物、すなわち淫行の者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、ののしる者、大酒飲み、ゆすり取る者、といった連中の仲間だと言ひたがらない理由はわかります。長老団の皆さんにせよ、そんなことはまったくあり得ないと思われることでしよう。この点でもし私が間違つていれば教えてください。

残るはヨハネ第二7-11の反キリスト者です。この聖句を誰に對して適用するにしても本当に心からの納得が必要であると感じていますが、これはご理解頂けるでしょうか。この言葉を使うのは使徒ヨハネだけですが、このヨハネは問題の反キリスト者について次のように書いています。「イエスがキリストであることを否定する者でなければ、いったいだれが偽り者でしょうか。父とその子を否む者、それが反キリストです。」(ヨハネ第一2・22)「イエスについて告白しない靈感の表現はど

れも神から出たものではありません。しかもこれは、……反キリストの「靈感の表現」であり」（ヨハネ第一4・3）「というのは、欺く者が多く世に出たからです。すなわち、イエス・キリストが肉体で来られたことを告白しない者たちです。それは欺く者、反キリストです。」（ヨハネ第二7）これに基づき、次のような見解を述べる注釈書があります（これらは協会の出版物でもたびたび使われている注釈書です）。

『バーンズ新約聖書註解』によると、「ここから明らかなことは、ヨハネは、イエスが救世主であること、あるいは救世主が肉の体を持つて来たことを否定するすべての者について、反キリストという言葉を使っていることである。……これらの者は結束してキリストに反抗したのであり、神の子に真っ向から背く教義を掲げたのである。」

『ランゲ注解』によると、「οὐκ (ouk) は敵意、代用二つの意味を表し得る。敵意の意味であればキリストに敵意を持つ者、キリスト反对者を意味し、代用の意味であればキリストを装う者、偽キリストとなる。……反キリスト者はイエスがキリストであることを否定する。すなわち、イエスが肉の体で来なかった、イエスは神の子ではない、イエスは神のものではないと言う。この教義は真理の否定であり、偽りであり、反キリスト者たちは偽りを言う者であり、ヨハネ8・44によれば偽りの父である悪魔から出てきた者となる（ヨハネ第一3・3-10）……

反キリスト者たちは「明らかにサタンに關係する者」とされており、これは偽キリストという代用の意味ではなく、キリスト反对者という敵意の意味である。……反キリスト者は何よりもまずサタンの道具なのである。」

長老団の皆さんの中に、ピーター・グレガソンがこのような反キリスト者であると本当に信じておられる方がおられるのでしょうか。

イエス・キリストは「だれでも言うまじき侮べつの言葉で自分の兄弟に呼びかける者は最高法廷で言い開きをするようになります。また、だれでも『卑しむべき愚か者よ！』と言う者は、火の燃えるゲヘナに処せられることになるでしょう。」（マタイ5・22）と言いました。私としては、「反キリスト者」とされるよりは「卑しむべき愚か者」と呼ばれる方がよほどましだと思います。聖書にこれほどひどい言葉も他にありません。「卑しむべき愚か者」という言葉を不当に使ってさえもゲヘナに処せられるのであれば、「反キリスト者」という言葉を不当に使えばどれほどのことになるでしょうか。私としてはそのような危険を冒したくないと思いますし、皆さん一人一人もその危険についてはおわかり頂けるものと思います。マタイ12・36でイエスはこう言います。「あなた方に言いますが、人が語るすべての無益な（『改訂標準訳』では「軽率な」『エルサレム聖書』では「根拠のない」）ことば、それについて人は裁きの日に言

い開きをすることになります。」このような警告を真剣に受けとめないわけにはいかないでしょう。もし間違つて、きちんとした根拠もなしに、誰かのことを「キリストに敵対する者」であつて食事を共にすることもまかりならないと宣言してしまつたら、その責任を他の人に転嫁することなどできるでしょうか。イエス・キリストは、我々がキリストに対し、その父に対して持つ関係と責任を強調し、次のように言います。「わたしが賢と心を探る者であることを知るであらう。そしてわたしは、あなた方一人一人にその行ないにしたがつて与えよう。」(啓示(黙示録) 2・23)

神に忠実であらうとするならば、右に見たような聖句によって形作られた私の良心に従うしかありません。そのような良心的行動によつて私は有罪とされるのでしょうか。それは確かに巡回監督は私の自宅で「統治体は我々の良心を却下することができます」と言っていました。この巡回監督は、本人の言葉を借りれば、「統治体の言うことをオウム返しに繰り返している」と言つてはいましたが、ここでは自分の意見を言っているものと思われまゝ。このようなことを書いてある協会の出版物は、私の知る限り存在しないからです。さらに重要なことは、そのような意見の裏付けになる聖句がないことです。靈感を受けた使徒パウロは、何らかの行ないについて、仮にその行ない自体が正しいものであつたとしても、それを行なう人が疑念を抱いているのであれば「その人はすでに罪に定められています」と言います。「信仰から出ていないことはみな罪」だからです。

(ローマ14・23) もし私の良心が変わるものとすれば、それは神の言葉の力によるものである他はなく、人間の理屈付けにはよらないのです。「すべての人が偽り者であつたとしても、神は真実であることが知られるように」することを心に決めているからであり、したがつて「神の言葉を不純にする」者たちには加わらず、「かえつて、真理を明らかにすることにより、神のみ前で自分をすべての人間の良心に推薦する」ようであらうと思うからです。(ローマ3・4、コリント第二4・2)

以上、いささか長くなりましたが、これは皆さんに私の直面している問題をご理解頂きたかつたからです。私には、目下受け入れるようにと言われている見解を疑問の余地なく、また良心の呵責もなく、受け入れることができないのです。それは、ピーター・グレガソンの手紙(ここにコピーした通りのもの)を見た上で(そして他に何の根拠もなく、この人が邪悪な人物であつて、クリスチャンとしては食事を共にすることも避けるべきだという結論になるという見解です。この結論を受け入れられずにいる私は、聖句に何かを読み落としているのでしょうか。聖書は、私が理解しているのとは違うことを言っているのでしょうか。神の言葉に忠実であらうとする良心に基づく思いのため、今度はこの私が邪悪な、食事を共にするべきではない人物ということになるのでしょうか。長老団の皆さんのうち三人の人たちが下した判断によると、そうなります。私がこのように書いていますのは、この三人の人たち、また他の人たちのためを思つてのことです。もし私が間違つており、聖書には

私が思っているのとは違うことが書いてあるのだとすれば、その根拠を示してもらえれば喜んで従いたいと思います。

私の排斥処分を決めた審理委員の人たちは長老団の皆さんが任命したという背景を考えて、この手紙のコピーを長老団の皆さん一人一人にお送りいたします。また、皆さんを長老に任命した統治体、ならびに奉仕部門にもコピーを送ります。すでにご存じの通り、私は統治体に対して一九八一年一月五日に次のような問い合わせをしています。

当地では一部の長老が、『ものみの塔』1981年9月15日号の内容に基づいて、私が自分の大家であり雇い主であるピーター・グレガソンと付き合うのをやめるべきだとしています。ピーターは断絶したのだから、一緒に食事をすべきではない人間——邪悪な反キリスト——の一員だと思ってしまうべきであり、これに従わなければ排斥だということです。私も六十歳になろうとしており、経済的基盤もなく、引越したり仕事を変えたりできる状況ではありません。『も

のみの塔』掲載の当該記事が確かにこれら長老が理解する通りの意味内容、つまり私が自分の大家であり雇用者である人からの食事への招待に応じることが排斥の理由になるという内容なのかどうか、お知らせ願えれば幸いに存じます。もしそうではなく、この理解が記事の意図する意味内容を越えている場合、態度を和らげるようにということをお伝え願えれば、私もこの過酷とも言える状況から解放されるであります。直接、あるいは何らかの部門を通じてでも、ご説明を頂ければ幸いに思います。

統治体がこの問い合わせに対する返事をくれるまで待つて欲しいと何度もお願いしてきましたが、これまでのところ認めて頂けませんでした。今回こそ、これを認めて頂ければ幸いです。

敬具

R・フランズ

右の手紙のコピーを統治体に送った際には、次の手紙も添えた。

一九八一年二月一日

エホバの証人の統治体

親愛なる兄弟たち

一九八一年一月五日にお手紙を差し上げ、『ものみの塔』

9月15日号に書かれた内容についての問い合わせを致しました。断絶した人が排斥になった人と同じ扱いになることを定め、エホバの証人としてはそのような人とどう接するべきかを細かく規定した記事についてです。その時の手紙では、この記事によって困ったことが起こり得ると申しました。

あれ以来、地元会衆の長老たちは、その記事が私を排斥処分にするための根拠であり、「権威」であるとしています。断絶した人物と食堂で一緒に食事をしたというのがその理由ですが、その人物というのは私にとって家主であり、雇用主なのです。

地元の長老団あてに書いた上訴の手紙のコピーを同封いたします。審理委員会の決定が統治体の皆さんの納得できるものであり、また先の記事の意図するところに一致しているものであれば、この上訴の手紙は皆さんにとってまったく無関係でありましょう。しかし、もしそうではなく、この決定に問題があると感じられるのであれば（これは私だけのことでなく、一般にこの記事によって引き起こされるであろう反応を物語っていると思われる）、この記事内容を修正しようと思われるので

はないでしょうか。私が働いている「ウエアハウス食料品店」には事務所や十の支店があり、三十五人から四十人ほどのエホバの証人が仕事をしています。その社長、ならびに非食料品部門の部長が断絶しています。他に排斥された人もいますが、この中には大きな店の店長を任されている人もいます。ですから、私の問い合わせに答えて頂くことで助かる人が何人もいます。

当該記事で影響を受ける人たちがこれからどんどん増えるのは確実だと思われます。今回の方針適用はどういうわけか特に私だけに向けられているわけですが、これをきちんと適用していくと、この地域だけでも私の身の回りにいる何十人という人が排斥になりかねません。そんなことが本当に聖書的な根拠を持つ、正しいことだと思っておられるのでしょうか。

当該記事のもたらす帰結の責任が究極的には統治体の皆さんにあることに鑑み、このことを皆さんならびに奉仕部門の兄弟たちにお伝えするのが良かろうと思った次第です。

敬具

R・フランズ

次に示すのは、ウェズリー・ベナー巡回監督の選んだ上訴委員の変更を願い出る手紙（二月二〇日付）である。

一九八一年二月二〇日

東ガズデン会衆長老団

親愛なる兄弟たち

この手紙によって、上訴委員会の人選を改めて頂くようお願いするものです。この地域外、この巡回区外の兄弟に委員をお願いしたいと思っていますので、この手紙のコピーをものみの塔協会統治体奉仕部門にも送ります。理由は次の通りです。

二月一五日に、シオテイス・フレンチから電話を頂き、上訴委員はウィリー・アンダーソン、アール・パーネルかフェリクス・パーネルのどちらか（この点についてはフレンチもはっきり憶えていませんでした、そしてディブル兄弟（これは父の方か息子の方かはっきりしません）の三人になったということを知られました。その時に私は、この人選については手紙で意見を言うから、と伝えました。また、なぜ東ガズデン会衆の長老が選ばれなかったのかと聞くと、もうそんなやり方はしない、この人選は巡回監督に頼んだのだ、という答えでした。

二月一八日金曜日、最終的に上訴委員に選ばれた人たちの名前を文書で伝えてくれるようにと頼む手紙をフレンチに書き、その朝のうちに投函しました。その日の夕方、フレンチは電話で、上訴委員は日曜日に話し合いを行なうと伝えてきました。私は、もう一日か二日のうちに手紙が届くはずだと伝えま

した。フレンチは土曜日にまた電話をかけてきて、確かに手紙は受け取った、上訴委員は月曜日（つまり二月二日だと思われま）に私を交えて話し合いを行ないたい、と言いました。この時も、またその前に日曜日の話し合いのことを伝えてきた時も、その話し合いが行なわれる場所や時間については何も言ってくれませんでした。その時伝えられた上訴委員の名前は、ウィリー・アンダーソン、アール・パーネル、ロブ・ディブルの三人です。とにかくそのことを文書で伝えてくれるように重ねて頼みました。

今朝方フレンチはまた電話で、上訴委員は月曜日に話し合いをすると伝えてきました（やはり、何時にどこで行なわれるのか言ってくれませんが）。私は、上訴委員は私の方に直接手紙で連絡をつけるべきであり、上訴委員の人選には問題があるので別の委員の人選を要求する手紙を書くつもりであることを伝えました。すると、とにかくいづれにせよ上訴委員は月曜日に話し合いをすると言います。自分の過去四十年の経験においてそんな無茶は聞いたことがないと言くと、協会の最近の変更なのだという返事でした（どういう変更なのかは言ってくれませんでした）。それにしてもそれほど急がなくても良いのではないかと言うと、とにかく上訴委員は話し合いをするし、言いたいことがあればその話し合いの場で言うべきだという返事でし

た。そこで私は上訴委員の人事を改めるように願ひ出るつもりだと繰り返しておきました。

人事を改めて頂きたい理由ははっきりしています。皆さんのためにも、奉仕部門のためにも、また記録として残すためにも、その理由を次に記します。

多くの家庭と若い人たちを巻き込んだ問題がガスデン地区に発生していた頃、私は統治体の奉仕部門にいました。奉仕部門を通じ、地元の委員会がかなりの問題を引き起こしていることがわかったので、この解決のため、特別に委員会を送り込まねばならなかったほどです。この一件がまだ記憶に新しいので、この時に大きな問題を引き起こしていた委員会の中心人物の一人であるアンダーソン兄弟の名前が私の上訴委員に挙がっているのを見た時、まともな審議はおほつかないと思われました。また、その時に奉仕部門で調べたことや、あとで私が耳にしたことなどから、問題を起こしていた委員会の見直しを求め、協会指名による外部からの委員派遣につながる活動をしていたのはピーター・グレガソンだったこともわかっています。つまり、ピーター・グレガソンと私との関係が問題の中心となっている審理にアンダーソンを当たらせるとするのは、公平かつ客観的な判断が期待できる人選ではないのです。もちろんアンダーソン兄弟があの一件のあと立ち直ったという希望が持てないとは言えないものの、目下の上訴委員のやり方にはとにかく結論に飛びつこうとする様子、首尾一貫しないやり方などが目立ち、過去の誤りの繰り返しではないかと思えない面がありま

す。この人選について私が問題を感じ、どうしても受け入れられないと結論する理由はおわかり頂けると思っています。

二人目のアール・パーネルについて言えば、この人選は理解に苦しむとしか言いようがありません。今一度申しますが、私とピーター・グレガソンとの人間関係がこの審理の中心となっているのです。証人の証言もすべてこれに関することであり、私を排斥処分にすべきだという決定もこれが理由になっているのです。その上訴を吟味する委員にアール・パーネルを選ぶには、どういう理由があるのでしょうか。皆さんも巡回監督もよくご存じの通り、アール・パーネルはダナ・パーネルの父親であり、ダナ・パーネルはピーター・グレガソンの娘、ヴィッキー・グレガソンと最近離婚しています。細かい話は省略するにしても、パーネル一家とグレガソン一家との間、特に父親同士であるアール・パーネルとピーター・グレガソンとの間にはかなりの緊張関係があります。巡回監督が以前ガスデンにやってきてピーター・グレガソンと話していた時ダナ・パーネルの名前も出ていましたから、両家の間の緊張関係については巡回監督もわかっていたはずですから、わざわざそのダナ・パーネルの父親を選んでピーター・グレガソンの関わっている件の審議に当たさせたのでは、公正な判断はまったく期待できないであろうことは、常識的に考えるだけで明らかです。一体どんな理由があつてこういう人選ができるのでしょうか。

このアール・パーネルに関する一件は、三人目の委員であるロブ・ディブルにも関わってきます。この人は、ダナ・パーネ

ルの妹、ドーンの夫であり、したがってアール・バーネルの義理の息子に当たります。必要とあれば証言も得られると思いますが、ドーンは自分の兄がピーター・グレガソンの娘に離婚されたことについてかなり強い感情を持っており、かなりの不満を口にしています。当然その夫であるロブ・ディブルにもその感情は伝わっているでしょう。そのロブ・ディブルを委員に選び、ピーター・グレガソンとの人間関係が問題となっている一件の審理に当たらせようというのは、個人的な感情をはさまない客観的な判断を期待できるものではないと考えます。

以上に鑑みた上で、委員人選の見直しをはかり、この地域外巡回区外の兄弟たちを委員に選んで頂けるようにお願いしているのです。私の上訴の審理に当たたる委員会として、目下の委員構成ほど客観的で偏りのない審理が期待できない人選は（おそらく一つの例外を除いては）思いつくこともできないと思います。これは巡回監督による人選でしたが、おそらくここに述べたような状況を考慮せずにあわてて決めてしまったのでしょうか。私がここに述べていることに對していちいち反対意見を述べることも不可能ではないかもしれませんが、本当に公正な審議を求めるのであればそのようなことはできないでしょう。むしろ、わざわざそんな反対意見を言わなくても済むような、深刻な疑問を投げかけられないでもきちんと成り立つような人選

を行なうべきであることは、おわかり頂けることと思います。——テモテ第一5・21、22。

このことについて、皆さんの方で協会に手紙で問い合わせると思うかもしれませんが、そうしてもらえれば私も嬉しく思います。

なお、参考までに私の方の事情を書き添えます。本日はわざわざ遠くからやってこられるお客があります。お泊まりになるのはわずか二、三日だけです。月曜日の午後はバーミングハムに用事があり（これは何日か前からの約束なのです）、帰りは夜遅くなと思います。週の後半には州外へ旅行に出かけます（これは以前からの予定でした）。泊めてくれる人たちとの約束もあります。元日前後には、州外から飛行機で友人の家族がやってきます。しかし一月六日以降であれば新規に選ばれた委員の間があれば協会側でも委員を選ぶ時間がとれることでしよう。

そちらからのご連絡は文書でお願いします。これまでに何度もあった連絡もれなどが防げるかと思えます。どうかよろしく願います。

敬具

R・フランズ

右の手紙のコピーは統治体ならびに奉仕部門に送られたが、その際には次の手紙も添えられた。

一九八一年二月二〇日

ものみの塔聖書冊子協会

奉仕部門

親愛なる兄弟たち

この手紙をもって、私の上訴を審議して頂くための上訴委員会を組織して頂くようお願いするものです。委員はガズデン地区、ならびにその巡回区外から選ばれるものとしてください。

このようにお願いする理由は、東ガズデン会衆長老団に宛てた同封の手紙（本日付）に記してある通りです。

最初の審理委員会の司会者によると、そちらとも話をつけているとのことでしたので、この件についてはご存じのことと思います。

私がお願いしているのは、当該巡回区外から上訴委員を選んで頂きたいということです。当地にはひどい噂話などが飛び交っており、それが私の耳にもかなり入ってきていることも理由ですが、また別の理由があります。そちらで任命された代表者である巡回監督による人選を見れば、同封の手紙を見て頂ければおわかりの通り、この巡回監督の判断は、率直に言って、極めて思慮に欠けるという理由です。

以前お送りした一九八一年二月八日付の上訴の手紙にも書

いておりました通り、ベナー兄弟が私の家にやってきた際に示した頑なな態度から見ますと、こういう審議での判断について信頼が置ける人物だとは思えません。本人いわく、人の良心は「統治体が却下することができる」ということでしたし（そのようなことができるのは聖書の他にないはずですが、自分のことを統治体の言うことなら何でも「オウム返しに繰り返している」人間であるということを経々と言っていました。これは憂慮すべきことで、ドイツにおいてあればどの不正を生み出した心理にもつながる態度であると言えます。あるいは多くの教会関係者が、自分たちが「母なる」教会と呼ぶ教会の指示することをすべて鵜呑みにして受け入れていた過去何世紀もの歴史を思わせます。そしてこの上訴委員の選び方を見ると、そのような憂慮が解消されるところが増すばかりです。これは同封の手紙によって明らかだと思います。

このように、本件については明らかにやり方を誤ったところがありますので、これを是正して頂きますよう強くお願いする次第です。

敬具

R・フランス

第13章

ここまでで私は統治体に三回手紙を書いて（二月五日、二月二一日、二月二〇日）、何らかの返事を求めたことになる。最初の手紙を書いてから最終的に排斥処分になるまでの八週間、まったく何の返事もなかった。

一九九四年に任命された五十八歳のゲリト・レッシュを除けば、統治体のメンバーはいずれも高齢である。その中の少なくとも何人かは、特に能力や資格があつて任命されたのではなく、ただ本部で長年奉仕していて、あるいは長年全時間奉仕を続けていて、いわば「合いそうだ」（少なくとも問題を起さないだろう）と判断されたから加わつたのである。任命に先立ち、大きな責任を伴う仕事は任せられないと判断されていたメンバーもいる。こう書いている私に軽蔑の気持ちなどはない。これまでに新人を迎えてきた統治体のメンバーなら、誰でも周知の事実であるに過ぎない。ゲリト・レッシュが任命されるまで、統治体のメンバーたちは死亡したメンバーの後任を選ぶのに気が進まなかつたように見受けられる。それまでのメンバーの顔ぶれに慣れていることや、（高齢者にありがちなことであるが）変化を望まなかつたことが理由だろう。また、メンバー一人一人を直接知っているのでわかるのだが、自分たち少数グループの持つ特権を人に渡したくないと思っているメンバーも少なくとも何人かはいる。かつてのラザフォードやノアが自分の権力を人に渡そうとしなかつたのと同様である。

ここで注意すべきだと思われるのは、『ものみの塔』1992年4月15日号31頁へ1992年4月15日号31頁に発表された変更点である。そこでは統治体のメンバー以外の人が各委員会の会議に参加しても良くなつたとしている（ただし、統治体会議には参加できない）。この同じ『ものみの塔』に載つた記事二つが、この発表の土台となつている。ここでは、今日のクリスチャンが「市民」と「異国の者」（あるいは「霊的ユダヤ人」と「霊的異邦人」とも言える）の二つに分けられるとする教義を展開している。これは、このような階級区分とは無縁で、神の前におけるクリスチャンの平等を強調するパウロ書簡の内容とあまりにも異なつた内容である。パウロ自身は、クリストにおいては「ユダヤ人とギリシヤ人との間に差別はない」「奴隷も自由人もなく」と言う（ローマ10・12、ガラテア3・28、コロサイ3・11）。ものみの塔の教義においては、この民族上・経済上の区別が霊的民族と霊的服従にすり替えられる。クリスチャン的な考え方を旧約的な考え方にすり替えるという、ある意味ではク

リスチャン以前の時代に逆行し、キリストによってもたらされた革新的な変化を無効にするやり方である。約八千八百人の「油そそがれた者」は「市民」であり、「靈的イスラエル人」であり、ペテロ第一2・9の「選ばれた種族」「王なる祭司」である。一方、何百万人かの「ほかの羊」は「異国の者たち」であり、「靈的異邦人」であり、靈的「外人居留者」である。これら「異国の者たち」は「城壁を築く」のであり、またイスラエルのための「農夫」や「ぶどう栽培者」でもあるが、聖書ではこのような奉仕は服従・隷属の証拠であるとされている。

この『ものの塔』記事では、さらに靈的「ネティニム」と「ソロモンの僕たちの子ら」と呼ばれる第三の階級（あるいは準階級）を登場させる形になっている。このグループは奴隷の身分からより高い身分へ高められたという点が強調される。その社会的な地位が向上したことに触れている辞典類を引用し、「神聖な職務を行なう階級として完全に確立され、そのためにくつかの特権を与えられ」るようになったと書く。そして聖書的な根拠もまったくないままに、この旧約聖書に記された事柄は現代にも当てはまるはずだと断言する。（この記事のはじめの方では、レビ人でない「男の歌うたいと女の歌うたい」とネティニムが関連づけられているが、後の方ではこの話が消えてしまう。女性を含んでしまうのが問題だからであるのは間違いない。この記事を書いた人は、現代に当てはまる「類似した人々」がどの程度まで類似しているのかを勝手に決めているわけである。これはご都合主義としか言いようがない。）さらにこれらの記事では「行政上の責任」を含む特権を持った男子たちからなる階級が重要だという話になり、古代の「ネティニム」と「ソロモンの僕たちの子ら」は、今日のエホバの証人の中では巡回・地域監督、支部委員、世界本部で出版物を作っている人たち、協会の工場などを監督し、様々な国での建設計画を監督する人たちだ、とする。つまり、明らかにこれ以外は「異国の者」になるわけである。他に何百万人という「靈的異邦人」あるいは「ほかの羊」はこれらの記事で新たに登場した「ネティニム」と「ソロモンの僕たちの子ら」階級に比べると特権もなく、地位も低いのである。ここに見られるのは、特権と地位を好む精神であり、すなわち最高の特権と地位を持っている統治体のメンバーの精神である。

これらの記事が書かれるそもその動機は、統治体の委員会の会議に他の人を参加させるようになったことだが、実の所、そういう人の数が増えたということ以外、新しい点はない。統治体の委員会ができた一九七六年の昔から、本部スタッフを五つの委員会（人事、出版、奉仕、教育、執筆）の秘書に任命しており、五人（デビッド・マーカント、ドン・アダムズ、ロバー

ト・ウォレン、デビッド・シンクレア、カール・アダムズ はいずれも「油そそがれた者」ではなかった。この五人の秘書は、それぞれ委員会に出席するばかりか話し合いに参加することもできた。ただ議決権がなかったのである。この『ものみの塔』1992年4月15日号へ**1992年4月15日号**の発表には議決権について何も書かれていないので、これは委員会の会議における統治体のメンバーの特権のままであろうと推察できる。また、統治体会議に参加できるのもやはり統治体のメンバーだけであらう（先ほど紹介した秘書たちも出席できなかった）。

したがって、この変更とは、それまで統治体のメンバー以外の委員会出席者は一人だったのが二人か三人になったというだけなのである。特権や地位が重要視される組織であればこそ、これほど単純な変更を知らせるために世界規模での発表となるわけである。あるいはむしろ、統治体のメンバー自身、高齢や病気のためにできる仕事も少なくなっており、またさらに数も減るであろうと感じているところに、この発表の本当の意義があるのかもしれない。

組織としては、統治体に「油そそがれた者」以外を許せば、「油そそがれた者」だけからなる「忠実で思慮深い奴隷級」という教義が崩れてしまう。（この点、一九一四年の教義も同様である。）統治体の外部では、長老や巡回監督、支部委員をはじめとする地位に就くのに「油そそがれた者」であるかどうかはまったく問題ではない。私自身の直接経験したことから言うのだが、世界中にいる「油そそがれた者」でない人の中には、現在の統治体のメンバーの多くよりもはるかに能力があり、聖書の知識もあり、その知識を伝えるのもうまく、洞察も深く、霊的にも高いものを持っている人が本当にたくさんいる。しかしこういう人を統治体に迎えると、霊的「異国の者たち」を霊的「市民」の地位に、すなわちレビ人ではない神殿の助け手を「王なる祭司」の地位に引き上げることになる。すると、過去半世紀にわたったもののみの塔の教義が必要としてきた区別が事実上なくなってしまうのである。統治体としては、これができる限り避けるだろうと思う。一九一四年の教義と同様、あまりにも強く説き続けたのがあたとなり、常識的に考えてなされるべきことができなくなる結果を生むわけである。

訳者による付記

本文中、太字体でへに記した部分はすべて訳注です。そのほとんどが日本語の文献の出典を示すものです。

この本には、ものみの塔協会発行の文献が数多く引用されています。その文献名・参照ページなどは、すべてそのまま訳しましたので、本文中に現われる参照ページ数はすべて原典（英語）版のものです。ものみの塔協会が発行している日本語版が存在する場合には、確認できた限りへ内にその出典を示し、またその訳文を使用しました。

なお、日本語版が存在しても、あまりに古い文献であるため、直接引用しても現代日本の読者には読みづらいだろうと判断された場合もあります。この場合、その訳文は採用せず、出典のみを記しました。具体的には、二二二ページの『光』と二三三～二三五ページの『神の立琴』の二つです。

ものみの塔協会特有の用語については、原則として、その日本語版刊行物で使われているものを採用しました。「過分のご親切」「旅行する監督」「表決権」など、普通の日本語としてはいささか不自然な表現が散見されるのは、（必ずしも私の日本語能力の欠如ではなく！）そのためです。ただし、あまりにも不自然な日本語になってしまうという場合には、「業（わざ）」を「仕事」とする、「成員」を「メンバー」とする、などの手を打ちました。

聖書からの引用については、原著に従い、特に断りのない限り、ものみの塔協会の「新世界訳」（一九八五年発行）を使用しました。また、原著では他にもいろいろな英語訳を使っています。この場合には、できるだけ日本聖書協会による「口語訳」または「新共同訳」を使い、その出典を訳注として示しました。これが使えない場合には、引用されている英語訳をそのまま訳し、その出典を明記しました。なお、口語訳と新共同訳を選んだのは、単にこれらが最も普通の訳だ、というだけの理由です。

聖書の各文書名については、右の原則に従い、「新世界訳」を優先しましたが、これになじみのない読者もたくさんおられるでしょうから、口語訳や新共同訳の文書名を併記したものもあります。具体的には、「エフェソス（エペソ）」（新共同訳では「エフェソ」）ですが、まあ充分了解可能でしょう。「フィリピ（ピリピ）」「フィレモン（ピレモン）」「啓示（黙示録）」の四つです。

——以上のような長たらしい注釈が必要になるのですから、考えてみれば手間のかかる本を訳してしまいました。最善を尽くしたつもりですが、お気づきの点などがあれば、せせらぎ出版を通じてお知らせ下さい。

この翻訳にあたっては、いろいろな方にお世話になりました。まず、原著者のレイモンド・フランズさんは、不明な点についてお尋ねするとすぐに明快な回答を頂き、また私の長文の手紙に対しては丁寧な返事を頂きといった具合で、原著者と翻訳者というのを越えたお世話になり続けています。この文章を読んで苦笑してもらうことはなからうとは思いつつも、ここに御礼を記します。

また、お手持ちの文献資料を快く見せていただいた岩村義雄さん、草刈定雄さん、本当に助かりました。この翻訳作業においては、「対応する日本語版文献探し」がかなり重要な仕事だったのです。厚く御礼申し上げる次第です。

さらに、私の翻訳原稿を主として（もと）エホバの証人の立場から検分・校正していただき、また資料面でもご協力いただいた「エホバの証人に疲れた人メーリングリスト（<http://www.stopover.org>）」有志の方々、また用語などについて驚くほど綿密な校正をしていたいただいたYさん、本当にありがとうございました。

また、一般読者として翻訳原稿の日本語を校正していただき、出版に当たっては大きな協力をしていただいた伴光昇さん、ありがとうございました。また大阪にいらっしやったらビール飲みましょう。

インターネットでいち早く「エホバの証人情報センター（<http://www.jwlc.com>）」を立ちあげた村本 治さんには、そこで本書の第10章を一足先に公開させて頂いたり、出版の相談に乗って頂いたりとお世話になっています。

英語そのものについてのしつこい質問に応じてくれたジョン・ソブコさん、ビル・ケネディさん、サイモン・ハウエルさん、ロバート・レニーさんーいつもの通り一緒にビールを飲んでしゃべってただけだと思っているでしょうけれど、実はすごく助かりました。

せせらぎ出版の山崎さんには、出版面でお世話になるばかりか、DTPについてもいろいろ教えていただいたりして、ありがたく思っています。

そして、「名前は出して欲しくない」とおっしゃる（もと）エホバの証人の方々をはじめ、直接・間接にお手伝いいただいた方々皆さんに心から御礼を申し上げます。本当に、ありがとうございました。

もちろん、言うまでもなく、皆さんに頂いた意見などについて考え、判断したのは私ですので、この翻訳書の至らぬところはひとえに私の至らぬところです。

さて、この翻訳は原著第三版（一九九九年四月発行）を底本にしていますが、その後、この版の第二刷が二〇〇〇年六月に出版しました。全体に加筆・修正がなされ、近年のものみの塔文献からの引用が増えています。また、ロイド・バリーが一九九九年に死去したこと、エドワード・ダンラップが一九九九年九月に死去したこと、サミュエル・ハイド、ステイブ・レット、ガイ・ピアース、デービッド・スプレイン、の四人（平均年齢五七歳）が一九九九年に新しく統治体に加わったことなども紹介されています。

樋口 久

『飢饉—1975年』 …262,263
『キリスト教の歴史』 …419,420
『クリスチャンの自由を求めて』 …81,146,152,179
『新ウェブスター辞典デラックス百科事典版』 …160
『聖書研究』 …199
『ダイアグロット訳』 …199
『タイム』 1977年7月11日号…126
『タイム』 1982年2月22日号…40
『ニューヨーク・タイムズ』 1976年1月12日付…346,347

『黄金時代』 1926年10月20日号…291
『神の自由の子となつてうける永遠の生命』 …86, 257, 258, 260, 263, 267
『神の立琴』 …235-237
『神の目的とエホバの証人』 …74, 79, 188, 191, 209, 210
『現存する万民は決して死することなし』 …232-234, 250, 264
『幸福—それを見いだす方法』 …334
『子供たち』 …19, 20, 21, 255
『最善の生き方を選ぶ』 …303, 334
『索引1930-1985』 …263
『事実を見よ』 …14, 15, 16,
『支部事務所の運営手順』 …127
『支部事務所の手紙に回答するための助け』 …133, 396
『終了した秘義』 …74, 75, 76, 225-232,
『神権政治』 …17
『信仰の行進』 …75, 78, 188
『人生には確かに目的がある』 …303
『新世界訳』 …34, 68, 88, 256
『救い』 …22
『聖書研究者月報』 …220
『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益です』 …51, 260
『聖書理解の助け』 …8, 29, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 94, 119, 190, 313, 316, 362, 369
『聖書に対する洞察』 …8, 29, 37, 221
『近づく一千年の平和』 …263
『時は近づけり』 …204, 205, 206-208, 210-212, 214, 224, 249, 250
『奉仕者になる資格』 …87
『真夜中の呼び声』 …195
『御国の来たらんことを』 …212
『三つの世界』 …192, 194
『光 第一巻』 …223
『み名が神聖なものとされますように』 …114, 115
『メッセンジャー』 1931年7月25日号…82-84
『ヤコブの手紙の注解』 …8, 116, 118, 303, 316, 334, 412, 454-457, 468
『良いたよりを擁護して法的に確立する』 …143, 144
『預言』 …200
『世の苦難からの人間の救いは近い！』 …91
『楽園への道』 250-252

その他の文献

『明らかな真理』 3・4月号…296, 297
『異邦人の時を再検討する』 …192, 194, 217, 218
『エル・ヘラルド』 1978年5月6日付…165
『神に仕える「大群衆」はどこにいるのか？』 …395

1994年4月1日号〈1994年4月1日号〉…60
1995年11月1日号〈1995年11月1日号〉…291, 295
1996年5月1日号〈1996年5月1日号〉…145, 147, 148, 149, 150, 458, 459
1998年8月15日号〈1998年8月15日号〉…150-152, 154
1999年1月1日号〈1999年1月1日号〉…54

『目ざめよ!』

1966年10月8日号…260, 261, 262, 276, 277
1968年2月8日号…158, 176, 277
1969年12月8日号…139, 140
1971年10月8日号…264
1972年12月8日号〈1973年2月22日号〉…158, 159
1975年12月8日号…158, 159
1981年1月22日号〈1981年4月22日号〉…327
1993年3月22日号〈1993年3月22日号〉…218, 219, 221, 234
1994年7月22日号〈1994年7月22日号〉…185
1995年6月22日号〈1995年6月22日号〉…294, 295
1995年10月22日号〈1995年10月22日号〉…293
1995年11月8日号〈1995年11月8日号〉…293

『エホバの証人の年鑑』

(全体に言及)…40
1965年…158
1975年〈1976年〉…17, 253
1980年〈1981年〉…253, 254

『わたしたちの』王国宣教(『王国奉仕』)

1968年3月号…266
1974年5月号〈1974年6月号〉…266, 273
1980年8月号〈1980年9月号〉…376

ものみの塔の書籍など

『朝の先触れ』…195, 196, 198, 217
『新しい世界』…254, 255
『あなたの王国が来ますように』…428
『あなたの家族生活を幸福なものにする』…303
『あなたを幸福にする良いたより』…428
『今ある命がすべてですか』…303
『エホバの証人一神の王国をふれ告げる人々』…31, 32, 35, 36, 79, 80, 81, 82, 96, 97, 102, 123, 124, 194, 217, 218, 222, 234, 235, 259-261,
『エホバの証人一新世社会』…88
『王国を宣べ伝え、弟子を作るための組織』…94

1968年8月15日号〈1968年11月15日号〉…265,266
 1969年10月15日号〈1970年1月1日号〉…263
 1969年12月15日号〈1970年3月15日号〉…58
 1971年12月1日号〈1972年3月1日号〉…119
 1971年12月15日号〈1972年3月15日号〉…69,71,75,92,95,99
 1972年1月1日号〈1972年4月15日号〉…67
 1972年4月1日号〈1972年7月1日号〉…187
 1972年11月15日号…58
 1972年12月1日号〈1973年6月15日号〉…58
 1972年12月15日号〈1973年3月1日号〉…68
 1973年7月1日号〈1973年10月1日号〉…424
 1974年1月15日号〈1974年4月15日号〉…i,157
 1974年6月15日号〈1974年9月15日号〉…260
 1974年8月15日号〈1974年11月15日号〉…200
 1975年5月1日号〈1975年8月1日号〉…260,270
 1975年10月1日号〈1976年1月15日号〉…91
 1976年7月15日号〈1976年10月15日号〉…271
 1978年2月15日号〈1978年6月1日号〉…65
 1978年6月15日号〈1978年9月15日号〉…142,458
 1978年10月1日号〈1979年1月1日号〉…277,278,284
 1979年4月1日号〈1979年7月1日号〉…310
 1979年10月1日号〈1980年1月1日号〉…307
 1979年11月15日号〈1980年2月15日号〉…310
 1980年2月15日号〈1980年5月15日号〉…132
 1980年3月15日号〈1980年6月15日号〉…273
 1980年4月15日号〈1980年11月15日号〉…394
 1980年8月1日号〈1980年11月1日号〉…378,380
 1980年10月15日号〈1981年1月15日号〉…277,288
 1981年8月15日号〈1981年12月15日号〉…43
 1981年9月15日号〈1981年11月15日号〉…47,397,398,399,400,404,405,408,409,415,
 416,464,466,467,472
 1981年12月1日号〈1982年3月1日号〉…397
 1982年8月15日号〈1982年11月15日号〉…51
 1983年3月15日号〈1983年6月15日号〉…66
 1984年5月15日号…276
 1984年10月1日号〈1984年10月15日号〉…187
 1990年1月1日号〈1990年1月1日号〉…184,185
 1990年3月15日号〈1990年3月15日号〉…123
 1990年11月1日号〈1990年11月1日号〉…145
 1992年4月15日号〈1992年4月15日号〉…478-480
 1993年11月1日号〈1993年11月1日号〉…218
 1994年2月15日号〈1994年2月15日号〉…290

文献索引

ものの塔定期刊行物

『シオンのものの塔とキリスト臨在の先触れ』 …199

『ものの塔』

- 1881年1月号…202
- 1892年1月15日号…212, 213
- 1893年…209
- 1894年4月25日特別号…72
- 1894年7月15日号…213
- 1904年7月1日号…215
- 1906年7月15日号…72, 73, 195-198, 200
- 1907年10月1日号…215-217
- 1909年10月1日号…80
- 1911年6月15日号…205, 206
- 1912年…210
- 1916年10月16日特別号…80
- 1916年12月1日号…73, 454
- 1922年3月1日号…76, 239, 240
- 1922年5月1日号…76, 240-242
- 1922年5月15日号…242-244
- 1922年6月15日号…244-246
- 1922年7月15日号…246, 247
- 1922年11月1日号…248, 249
- 1923年3月1日号…72, 76, 77,
- 1931年12月15日号…77
- 1938年6月1日号…87
- 1938年6月15日号…75
- 1941年9月15日号…20
- 1944年10月15日号…87, 119
- 1944年11月1日号…87
- 1946年7月15日号…290
- 1950年9月15日号…88
- 1951年6月1日号…291
- 1951年7月1日号…291, 292
- 1952年2月1日号…60, 423
- 1952年9月1日号…276
- 1957年5月1日号…60
- 1968年2月1日号…158
- 1968年5月1日号〈1968年8月15日号〉…260, 261

フィリピ（ピリピ）

3:7,8…298
3:7,13,14…448

コロサイ

2:3…443
3:11…478
3:17,23-25…436

テサロニケ第一

2:13…64

テモテ第一

2:5…367
5:21,22…476

テモテ第二

2:19…437
2:24,25…339
3:1…368
3:16,17…412,467
4:1…437
4:22…465

テトス

3:1,2…149
3:10…342

フィレモン（ピレモン）

25…465

ヘブライ

5:13,14…373
5:14…300
11:1-7…319
11:16…368
12:7,8…310
13:6…446
13:17…144

ヤコブ

2:12,13…344,464
3:1…116
3:17,18…120
4:11,12…412,468
5:10,11…52

ペテロ第一

2:9…479
2:13…149
2:21…52
2:21-23…43,50
5:3…300

ペテロ第二

1:12…280
3:15,16…363

ヨハネ第一

1:5…150
2:1,2…311
2:19…399
2:22…469
3:14-16,18…372
3:18…445
4:3…470
4:21…445

ヨハネ第二

7…470
7-11…400,468,469

ユダ

7…67

啓示（黙示録） 367

2:23…471
7…317
7:4…54
7:15…394
11:3…192
12:6…192
14:3…54
19:10…442
22:18,19…412,467

マルコ

9:36,37…436
9:50…120
10:13-16…436
13:9-12…426
13:33…268

ルカ

5:37-39…299
11:53…363
11:53,54…327
15:1-7…436
15:2…393
21:16…426
21:24…37,190,194,217
21:32…290

ヨハネ

2:14-16…394
6:68…445
7:24…341
15:11-15…436
15:19…134

使徒

1:7…256,268,367
1:14…118
2:17…368
4:5-23…51
4:19,20…4,412,467
4:20…27
5:17-40…51
5:29…412,467
6…107
8:5-13…107
10:34,35…438
10:35…427
14:23…34
15…111
15:28,29…141
19:8,9…324
20:26,27…323

20:29…376

21:8…107

ローマ

(全体) …322,323,373
1:14…41
1:24-27…59
1:31…390
2:5-10,16…437
3:4…471
3:8…363
5:1-11…436
6:14…367
8:6-9,14,16,17…317,318
8:14…324,367,372
8:28…448
8:31-39…436
9:1,3…12,418
10:12…478
11:33…443
12:2…383
12:17-21…50
13…149,161
13:1…79
13:7…162
14…399,402
14:1-3,23…162,163
14:4,10-12…412,468
14:7…431
14:10-12…430,437
14:23…471

コリント第一

2:1-5,10…442
3:6,7…421
3:21…94
4:2-4…359
4:3,4…417
4:3-5…437
4:5…430
5…399,402,410
5:11-13…468,469

8:9…300

9:1,19…436
11:1…52
11:3…5
11:26…367
12:4-11,25…300
13:9,10,12,13…444
14:40…300
15:7…118
16:13,14…300

コリント第二

1:24…54
3:1,2…13
4:2…471
4:5…300
4:7,15…421
4:16-18…421
5:10…437
5:11,12…48
5:12,13…13
5:14…421
6:4-10…13,27
6:10…421
7:2,3…48
10:5…384
10:12,18…437
11:21-29…13
12:11…13
13:7-9…399

ガラテア

3:28…478
5:1,13,14…436
5:18…319
6:17…417

エフェソス (エペソ)

3:16-19…443
4:2,3…440
4:4-6…367
5:1…52

聖書引用索引

表記例 「1:2-5…123」は「1章2～5節…123ページ」の略

創世記

7:6-11…87

9:3,4…141

出エジプト記

20:16…43

レビ記

18…62

17:10-12…141

19:15…390

19:16…43

民数記

14:34…191

32:13…276

申命記

18:22…186

列王第二

2:8,11-14…114

詩編

15:3…43

27:10…440

31:11…440

31:11-16…436

37:5-9,32,33…50

38:11…440

43:3…150

50:20…440

55:2-6,12-14,22…436

60:11,12…436

69:8,9,20…440

73:25,28…440

86:11…150

94:17-22…436

133:1…120

箴言

10:19…223

13:12…293,294

17:15…402,403,412,468

17:17…47

18:13…28

20:23…179

24:21,22…377

30:5,6…412,467

イザヤ

5:20…224

28:20…275

60:17…123

エレミヤ

23:21…232,294

エゼキエル

4:6…191

ダニエル

4…37,190,193,195

4:17,23-33…191

6:1-11…181

8:14…120,192

11:29-45…430

12:11,12…192

マタイ

5:11,12…52

5:22…470

5:41…149,162

7:1-5…176

7:12…41,390,441

10:17,21…426

10:26…417

11:28-30…422,436

12:34,37…82

12:36…470

12:36,37…50

13…91

13:37-43…437

15:6-9…130,154

16:19…307

17:24-27…162

18:15-17…398

19:9…67

20:25…300

20:25,26…71,95

20:25-28…300

22:40…441

23:2,3…156

23:3…328

23:4…137

23:6…303

23:8…118,367

23:8,10…95

23:8-12…300

23:10…82

24…400

24:29…284

24:29-31…290

24:34…278,290,291

24:33,34…280

24:36…261

24:36,42,44…268

24:45-47…54,80

24:47…91

25:40…407

27:32…149

28:20…437

良心の危機 -「エホバの証人」組織中枢での葛藤-

2001年1月12日 第1刷発行

2010年12月10日 第2刷発行

著 者 レイモンド・フランズ

訳 者 樋口 久

発行者 山崎亮一

発行所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪市北区天満 2-1-19 高島ビル 2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 株式会社遊文舎

©2001 ISBN978-4-88416-102-6

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は出版社へご連絡ください。そのために出版社からテキストデータ提供協力もできます。



9784884161026



1920014038006

定価（本体3800円＋税）

ISBN978-4-88416-102-6 C0014 ¥3800E

- 第1章 良心の代償
- 第2章 私が本書を書く理由
- 第3章 統治体
- 第4章 内部動乱、そして改革
- 第5章 しきたりと律法主義
- 第6章 二重基準と御都合主義
- 第7章 予言と独断
- 第8章 正当化と脅迫
- 第9章 1975年、「神が行動されるのに適切な時」
- 第10章 1914年と「この世代」
- 第11章 決心
- 第12章 最終攻撃
- 第13章 展望